

平成26年度

第62回

全国私学教育研究集会 東京大会 研究集録



21世紀の教育を考える

～グローバル教育を目指して～



目 次

C O N T E N T S

発刊のことば	1
実施概要	2
大会役員等一覧	3
全体集会	4
開会式	5
報告	9
記念講演	1 5
部 会	2 8
私学経営部会	2 8
教育課程部会	7 0
法人管理事務運営部会	1 0 0
I C T活用部会	1 2 8
グローバル教育部会	1 5 1
環境教育部会	1 6 9
生徒支援教育部会	1 9 7
参加者アンケートまとめ	2 5 0
参加者数	2 5 9
開催地・研究目標一覧	2 6 0
編集後記	2 6 2

発刊のことば

一般財団法人日本私学教育研究所所長 中 川 武 夫

第62回全国私学教育研究集会東京大会は、平成26年10月16日・17日の2日間、東京都港区のグランドプリンスホテル新高輪国際館パミールを主会場として開催され、全国から1,000名を超える教職員の皆様にご参加いただきました。

本大会は、一般財団法人私学研修福祉会の主催、東京都、公益財団法人東京都私学財団ならびに日本私立中学高等学校連合会の後援により、一般財団法人東京私立中学高等学校協会ならびに一般財団法人日本私学教育研究所が実施いたしました。

今回の大会の研究目標は、「21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～」といたしました。近年の急速なグローバル化は教育にも大きな影響を与えております。戦後、日本の受動的な暗記中心型教育、いわゆる20世紀型教育は、これまでは高度経済成長に大きな役割を果たし、日本の社会を支えてまいりました。しかし、21世紀となり、ICTが高度な進歩を遂げ、世界はボーダレスとなり、さまざまな国の人々や文化を理解し、その人々と協力あるいは競争すべき社会へと変貌してきました。これからは、能動的な参加型、探求型授業による協働的な教育、即ち21世紀型教育がより重視されることになると考えられます。21世紀型教育は、世界が求めるグローバル人材を育てていくためには不可欠なものであります。本大会は、グローバル人材育成のための21世紀型教育に関して、多くのヒントを提供することができたと確信しております。

初日の開会式は、清水哲雄運営総括委員長の開会のことばに始まり、一般財団法人私学研修福祉会・高田貢理事長並びに当研究所・吉田晋理事長からのご挨拶、近藤彰郎実行委員長によるご挨拶、さらに、公務ご多忙中にもかかわらず、東京都知事の舩添要一様、文部科学事務次官の山中伸一様にもご臨席の上、ご祝辞を賜りました。

開会式後の全体会では、はじめに、日本私立中学高等学校連合会および日本私学教育研究所から「教育政策と私学情勢について」をテーマとして中央情勢の報告を行いました。続いて、記念講演として、東京大学・大学総合教育研究センター教授、大学発教育支援コンソーシアム推進機構副機構長の三宅なほみ様より、「新しい学び～21世紀型スキルを一人ひとりに～」と題して、ご講演をいただきました。

2日目からは、私学経営部会、教育課程部会、法人管理事務運営部会、ICT活用部会、グローバル教育部会、環境教育部会、生徒支援教育部会の7つの部会に分かれ、それぞれのテーマの下、講演、報告、研究発表、パネル・ディスカッション等を中心に活発な情報交換が行われ、多大な成果を収めることができました。

この度、上記の研究成果等を集録にまとめました。各学校の今後の教育活動にお役立ていただければ幸いに存じます。

最後に、本大会開催にご尽力いただきました講師・研究発表者の方々、また本大会開催の2年前より企画を進めていただき、大会当日は司会・記録並びに運営に携わっていただいた運営委員の先生方に、心より御礼申し上げます。

なお、次年度の第63回全国私学教育研究集会は、平成27年10月29日・30日の2日間、長野県長野市・ホテル国際21にて、「新しい時代を担う魅力ある私学教育～安心と信頼に裏打ちされた私学教育の充実を目指して～」を研究目標に、6部会の開催が予定されております。長野大会開催に向けて多大なご尽力をいただいております中部地区・長野県私立学校の皆様に御礼申し上げるとともに、全国から多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

実施概要

研究目標

21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～

会 期

平成26年10月16日（木）・17日（金）の2日間

会 場

初 日・全体集会 グランドプリンスホテル新高輪 国際館パミール

2日目・部 会 グランドプリンスホテル新高輪 国際館パミール

広尾学園中学高等学校（ICT活用部会）

参加人員

1,023名

基本日程

時間 月日	9 30 10 11 30 12 30 13 30 14 15 20 16 17 40 18															
第 1 日 10月16日 (木)						受 付	開 会 式	全 体 会						教 育 懇談会		
					報 告			記念講演								
第 2 日 10月17日 (金)	受 付	開 会 式	部 会			昼 食		部 会				閉 会 式				

※第2日の部会日程につきましては、部会によっては、若干異なります。詳細は各部会実施概要参照。

研修内容

1. 報 告 「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋
一般財団法人日本私学教育研究所 所 長 中 川 武 夫

2. 記念講演 「新しい学び～21世紀型スキルを一人ひとりに～」

東京大学 大学総合教育研究センター 教 授
大学発教育支援コンソーシアム推進機構 副機構長 三 宅 なほみ

3. 部 会

- ① 私学経営部会：変革を迫られているグローバル化時代における私学経営の展望
- ② 教育課程部会：21世紀における新たな教育の構築
- ③ 法人管理事務運営部会：新たな時代を見据えた法人管理事務組織の活性化
- ④ ICT活用部会：ICT活用の最新事例に接し、課題と可能性を探る
- ⑤ グローバル教育部会：グローバル化に対応する私学の教育
- ⑥ 環境教育部会：「水」生きものの源
- ⑦ 生徒支援教育部会：他者を理解し自己理解を図り、共に成長する学習環境の創造

大会役員等一覧

1. 大会役員（順不同）

高田貢	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長
吉田晋	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長
近藤彰郎	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長
實吉幹夫	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長
山中幸平	一般財団法人私立中学高等学校協会	副理事長・全国集会総括責任者
中川武夫	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長
鈴木康之	一般財団法人私立中学高等学校協会	副理事長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	顧問
	一般財団法人私立中学高等学校協会	全国集会副総括責任者
	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長

2. 実行委員・指導員（順不同）

委員長 近藤彰郎	一般財団法人私立中学高等学校協会	会長
委員 實吉幹夫	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長
平方邦行	一般財団法人私立中学高等学校協会	副会長
木内秀樹	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長
吉田晋	一般財団法人私立中学高等学校協会	副会長
嘉悦克	一般財団法人私立中学高等学校協会	校長
清水哲雄	一般財団法人私立中学高等学校協会	副会長
長塚篤夫	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長
嵯峨実允	一般財団法人私立中学高等学校協会	常任理事
須藤勉	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長
伊藤淑子	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長
中川武夫	一般財団法人私立中学高等学校協会	常任理事・研究所長
鈴木康之	一般財団法人私立中学高等学校協会	常任理事
	一般財団法人私立中学高等学校協会	常務理事
	一般財団法人私立中学高等学校協会	総務部長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	校長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	広報部長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事
	一般財団法人私立中学高等学校協会	文化部長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	副校長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	庶務・会計部長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	校長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	所長
	一般財団法人私立中学高等学校協会	顧問
	一般財団法人私立中学高等学校協会	全国集会副総括責任者
	一般財団法人私立中学高等学校協会	理事長・校長

3. 運営総括委員・指導員（順不同）

委員長 清水哲雄	学校法人鷗友学園	常務理事
副委員長 實吉幹夫	学校法人鷗友学園	理事長・校長
委員 平方邦行	学校法人鷗友学園	校長
長塚篤夫	学校法人鷗友学園	校長
山本与志春	学校法人鷗友学園	常務理事
平木弘勉	学校法人鷗友学園	校長
鈴木利夫	学校法人鷗友学園	校長
須藤利淑	学校法人鷗友学園	副校長
伊藤淑子	学校法人鷗友学園	校長
	学校法人鷗友学園	校長

全 体 集 会

1 日 時 平成26年10月16日（木） 12時30分～17時00分

2 会 場 グランドプリンスホテル新高輪国際館パミール 3階 崑崙

3 開 会 式 12時30分～13時15分

司 会 木 佐 彩 子（フリーアナウンサー）

(1) 開会のことば

全国私学教育研究集会東京大会 運営総括委員長 清 水 哲 雄

(2) 大会役員挨拶

一般財団法人私学研修福祉会 理事長 高 田 貢
一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉 田 晋

(3) 実行委員長挨拶

一般財団法人東京私立中学高等学校協会 会 長 近 藤 彰 郎

(4) 来賓祝辞

東 京 都 知 事 舩 添 要 一 様
文部科学事務次官 山 中 伸 一 様

(5) 祝電紹介

(6) 登壇者紹介

(7) 次期開催地区代表挨拶

日本私立中学高等学校連合会中部支部 支部長 石 田 正 城

(8) 閉会のことば

全国私学教育研究集会東京大会 副運営総括委員長 實 吉 幹 夫

4 全 体 会 13時30分～17時00分

(1) 報 告

「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋
一般財団法人日本私学教育研究所 所 長 中 川 武 夫

(2) 記念講演

「新しい学び～21世紀型スキルを一人ひとりに～」

東京大学 大学総合教育研究センター 教 授
大学発教育支援コンソーシアム推進機構 副機構長 三 宅 なほみ

5 運営委員・指導員（順不同）

委 員 長 平 方 邦 行（工学院大学附属中学高等学校 校長）
副委員長 實 吉 幹 夫（東京女子学園中学高等学校 理事長・校長）
委 員 清 水 哲 雄（学校法人鷗友学園 常務理事）
長 塚 篤 夫（順天中学高等学校 校長）
木 内 秀 樹（東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長）
須 藤 勉（東京学園高等学校 副校長）
山 本 与志春（学校法人青山学院 常務理事）
嘉 悦 克（かえつ有明中学高等学校 理事長・校長）
嵯 峨 実 允（学校法人町田学園 理事）
高 橋 あゆち（学校法人井之頭学園 理事長）

全体集会

開 会 式

開会のことば

全国私学教育研究集会東京大会 運営総括委員長



清水 哲 雄

ようこそ東京大会にお越しく
さいました。

東京は伝統と進化が共存する都
市です。私立学校もまた、各学校
独自の伝統と、そして、先進性
を持って教育に取り組んでおり
ますが、近年の加速する教育界の
変化に対応するために、一層の研
鑽が望まれているところです。

この大会がご参加の諸先生方の有意義な研修会になることを祈念いたしまして、ただいまより、第62回「全国私学教育研究集会 東京大会全体会」を開会いたします。

大会役員挨拶

一般財団法人私学研修福祉会 理事長



高 田 貢

第62回全国私学教育研究集会東京大会の開催に当たり、東京都知事、舛添要一様、文部科学事務次官、山中伸一様のご臨席をいただき、また全国から私立中学校、高等学校の要となる関係者の皆様にご参集いただき、このように盛大な大会が開会できますことを、主催者を代表して、厚くお礼申しあげます。

本年度の大会の研究目標は「21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～」をテーマとしていただきました。

近年、高度情報化時代を迎え、グローバル化、ボーダレス化の進展により、我が国は大きな変化の時代を迎え、その対応は急務となっています。日本政府は、日本復興戦略の一環として、日本の若者を世界で活躍できる人材に育てるとの方針のもとに、文部科学省が中心となり、グローバル化に対応した英語教育改革実施計画を策定するなど、グローバル教育を中心とした教育改革が推進されています。

また、2020年にオリンピック・パラリンピックが東京で開催されます。本日、ご臨席いただいております舛添知事の陣頭指揮のもと、開催に向けて取り組まれていることは、皆様が周知の通りです。このオリンピック・パラリンピックに世界中から選手や観客が来日します。

その時、危惧されるのは、その人々をもてなすための日本人の英語力の不足、コミュニケーション力の不足の2つです。もちろんオリンピック・パラリンピック開会に向けてのみならず、グローバル人材の育成には、日本にとりまして喫緊の課題です。オリンピック・パラリンピックの開催決定は、グローバル化を進める我が国にとって大きな励みであり、転機です。同時に、教育現場に

掲げた大きな課題です。

このような環境下で全国私学教育研究集会東京大会が2日間にわたり開催されることは大変有意義です。本年度の記念講演は協調学習を提唱されている三宅なほみ先生を講師としてお招きし、世界を見据える多様な考え方を生かす学習のあり方などについて、貴重なお話を伺えることになっています。また、その他にも、各界でさまざまな立場でグローバル視野に立って仕事をされている講師の方々からのお話を伺えることは、これから、我が国の基軸となる人材の育成に携わる皆様には必ず糧となるものと確信しています。

今、私学を取り巻く教育環境の変化とともに、急激な少子化の波が押し寄せています。私学経営の厳しさが増えています。私学が21世紀の新時代を迎え、それぞれの学校の伝統と個性のもとに、時代や地域のニーズに柔軟に対応し、これからも次世代を担う優れた人材育成に取り組んでいただきますことを真に願っています。

さて、私ども一般財団法人私学研修福祉会は、幼稚園から大学までの私立学校教職員の資質向上と福利厚生を図ることを目的とした法人として、昭和31年に財団法人私学研修福祉会が設立され、私学教職員のための研修事業を実施するとともに、市ヶ谷において、私学会館の管理運営を行っています。また、平成24年度には一般財団法人への移行が認められ、本年で創立58周年を迎えます。これもひとえに皆様方のご支援、ご協力の賜であり、高い席からではございますが、厚くお礼申しあげます。

最後に、本大会の開催に当たり、昨年から長きにわたり企画、準備をしていただきました一般財団法人東京私立中学高等学校協会、一般財団法人日本私学教育研究所をはじめ、関係諸機関の皆様の多大なるご尽力に対し、心より感謝申しあげ、ご挨拶とさせていただきます。

大会役員挨拶

一般財団法人日本私学教育研究所 理事長



吉 田 晋

本日は1,000名を超える先生方に全国からお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

また、この開会に当たりまして、東京都知事、舛添要一様、そして、文部科学事務次官、山中伸一様にもご臨席いただきまして、心より御礼申しあげます。

私たち私立学校は、常に新たな教育、そして、それぞれの学校の建学の精神にのっとった教育を実践すべく日々研修しています。その集大成が年に一度のこの大会でございます。

今年も東京私立中学高等学校協会の近藤彰郎会長のリーダーシップのもと、この素晴らしい会場で、内容的にも素晴らしい大会が開催されるのではないかと思います。テーマも「21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～」ということで、まさに私立学校は今、こ

のグローバル教育、グローバル教育といわれてからやってきたことではなく、すでに多くの学校が実践してきています。その実践のもとに全国の先生方にその成功例をはじめ、またそれがただ単に普通の授業によるグローバル教育だけではない、いろいろな部分があります。そういう意味では、各部会の中で一つひとつの教育の実践が表現され、それによって私たちはさらに頑張っていくことができるのだと思います。

皆さんそれぞれが、この大会に出席してよかったと思っていただけるように準備を進めていただきました。

是非しっかりと研修していただき、これからも1校1校が手を携え、日本の教育を担っているのは私立である、新たな教育の基本も全て私立があるからこそ、私たちがこの国の教育を引っ張っていると自負しつつ、頑張てまいりますので、ご理解ご協力よろしくお願い申し上げます。

2日間が皆さんにとって有意義となりますことをお祈り申しあげて、ご挨拶と代えさせていただきます。

実行委員長挨拶



一般財団法人東京私立中学高等学校協会 会長

近 藤 彰 郎

本日は、たくさんの先生方にお集まりをいただき、また東京都知事、舛添要一様、そして、文科事務次官、山中伸一様にご臨席を仰いで、大会が開かれることを本当にうれしく思います。

私は私立学校というのは、やはり建学の精神があり、そして時代の要請を取り入れて変革してきていると考えています。私は、2年前にアメリカのサンタバーバラの中高一貫校に視察に行きました。その折に、1907年にイタリアの女性がつくったモンテッソーリ・スクールという学校を初めて訪ねました。世界中に4,000校くらい同じ考え方の学校があると聞きました。その学校では、幼稚園児も自分で集中して何かやっている時には一言も声を発しません。小学校4年生の授業を見せていただきましたが、先生が話していることをしっかり聞き、何か質問があれば、手を挙げる。これがアメリカだと思いました。

しかし、よくよく聞いたら、「何をいっているのですか。1907年に創立した時は、日本の茶道を取り入れ、静かにものを行う、そして使ったものはしっかりともとに戻すということでやっているのですよ」といわれました。目から鱗でした。

われわれ私立学校も長い伝統があります。戦争等があり、いろいろ揺れ動いた時期はありますが、原点は、時代の要請を取り入れていかなければいけないですが、もともと変わらない、継続していくものを受け継いでいると思っています。こういうものを守っていくためには、やはり自主性が大事です。自由度を増した私立学校というのも存続させていただかないと日本の教育への協力はなかなかできないのではないかと考えています。

その意味で、毎年行われている本大会、今年は7部会で行われます。それぞれの部会に、現況はどうなっているのか、これから先を見通して、是非良い討論を行っていただきたいと思います。

そして、東京には皆様のさまざまな要望にお応えでき

るものが何でも揃っています。我々は東京都から本当に多くの補助金をいただいていますので、先生方には一所懸命研修をした後は、ぜひ東京を満喫されて、われわれの補助金が減らないようにして頂ければと思います。

この2日間、成功裡に大会が行われるよう祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。



来賓祝辞

東京都知事 舛 添 要 一 様

近藤彰郎協会長をはじめ、さまざまなご陳情をいただきましたので、まずそれをしっかりと受けとめたいと思います。今日は本当に晴れた良い日です。昨日は雨でした。その前は、これまた台風というようなことがありました。伊豆大島での災害からちょうど1年がた

ちます。最近、異常気象ということで御嶽山の噴火があったり、いろいろな災害が起こってはいますが、そういう中で、今日は、皆さん方のためにこれだけ素晴らしい秋晴れの日になりました。こうして、第62回全国私学教育研究集会東京大会が開かれますことを心からお喜び申し上げます。

また、8年ぶりの東京大会と聞いておりますので、お越しいただきました皆様方、都民を代表いたしまして、心より歓迎いたしたいと思います。近藤協会長のご指示どおり、東京を楽しませてから、お帰りいただきたいと思っております。

私の子どもは私学にお世話になっていますが、それぞれの学校が、建学の精神と独自の教育理念に基いて自主性を発揮しながら、特色ある教育を展開しています。それを皆が高く評価しており、信頼と期待が私学に寄せられています。皆様方が日々大変なご努力をなさっていることに対して、深い敬意を表したいと思います。

先程近藤協会長からお話がありましたように、私立学校は、中高一貫型の教育力を生かして、個性ある教育を展開して、次の世代のニーズに応えられるような多彩な人材を育成してこられました。東京都といたしましては、こういう私立学校の振興は、私は私の都政の最重要課題の一つというように位置づけさせていただいています。私立学校が果たす重要な役割を踏まえ、学校経営の安定化や保護者負担の軽減など幅広い支援に努めてまいりましたが、東京の将来を見据え、吉田理事長のご期待に添えますように、財政的な面を含め、より一層のご支援をしていきたいと思っています。

先程来りましたように、今、2020年のオリンピック・パラリンピックに向かって準備をしていますけれども、何とか世界一の都市を東京が目指す。先般の都市ランキングで、これはずっと最近変わらないのですが、トップがロンドン、2位がニューヨーク、3位がパリ、4位が東京、そして5位にシンガポールが追いかけてきている。6位がソウル。ロンドンがトップに躍り出て、大体、世界一というと、ニューヨークと思うのですが、なぜロンドンになったのか。オリンピック・パラリンピックが成功したからなのです。そして、オリンピック・パラリンピックはスポーツだけではなくて、文化、教育など文化面でも大成功をした。都市のランキングで、経済は東京がトップなのですが、居住環境とか環境とかいろいろあります。そういう中で、普通、花の都パリが文化で世

界一だろと思うかもしれませんが、文化でもロンドンが世界一なのです。それはオリンピック・パラリンピックの時に、素晴らしい文化の祭典を行ったからです。

ですから、東京もただスポーツではなくて、文化を日本の自然とどのように伝えていくかということが非常に大きな課題であって、そして、東京がまず機関車として牽引役になって、このオリンピック・パラリンピックの活動をしていく。ぐっと前に走って行く。そして、日本全体で前に行く、こういうことでないといけないと思います。最近、ともすれば東京だけが一人勝ちで地方はだめなのだ、こういう意見が出すぎているような気がします。日本全国が元気になってもらわないとだめなのです。その意味でも、これは東京だけではなくてオールジャパンでやっていく、そして、東京が引っ張って行って日本が世界で冠たる地位を維持していくということが必要なのです。できれば、来年は3位に上がって、6年後のオリンピックが終わったら、ニューヨーク、ロンドンを抜いて1位に躍り上がりたい。東京が1位になるということで日本がものすごく元気になる。

ちょうど50年前、1964年に東京オリンピックがありました。若い先生方はお生まれになっていないかもしれませんが、私はちょうど高校生でした。あれで本当の戦後は終わったと感じた。新幹線が走る、青山通りができる。みんなあれで豊かになりました。最近、ビデオで流される50年前の映像を見ると本当に感激します。ですから、2020年、50年後の2070年、皆様方が今、一所懸命教育なさっている子どもたちが50年後になった時に「ああ、2020年のあのオリンピック・パラリンピックを東京でやってもらったために、これだけ自分たちの生活が豊かになった。こんなに楽しい日本になった。これだけスポーツができる、文化が栄える国になった」こういうことを皆さんとともにやっていきたいと思っています。

本大会のテーマは「21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～」であります。今、私はIOC国際オリンピック委員会の皆さんとしばしば議論をしながら、競技場の見直しをどうするかやっています。IOCのオリンピックの第一言語はフランス語です。第二言語は英語、そして、例えば東京で開催する時はそれに日本語が入るのです。若い時にヨーロッパに長くいたものですからフランス語と英語に不自由しないので、非常にIOCの人たちとのコミュニケーションがうまくいく。普通、招致する時に有明やその周辺でコンパクトに行うといっていて、それをひっくり返すとは何事かと文句をいつてくるでしょうが、きちんと議論して、都民の税金、国民の税金を無駄にするわけにはいきません。これは既存の施設があるのだから使いましょうということで、全体の組織委員会の会長をお務めの森喜朗元総理と協力しながら、IOCといろいろ折衝して、大体いい方向に向かっていると思います。

ところが、これだけの大国であり、スポーツ大国でもありながら、IOCから日本に出ている委員はたった1人です。私はスイスで2年間仕事をしていましたが、スイスなどはローザンヌに本部があって、あのように小さな国から委員が出ています。要は言葉なのです。ですから、皆さん方、学校へお帰りになって、今回の研修結果もありますが、自分の学校の子どもで、スポーツ、オリンピックに行くくらいのすごい選手がいたら、もちろんそれを伸ばしてあげるとともに、英語は徹底的にその子に教えてください。そうすれば、オリンピックでメダルを取

って、英語ができるということになれば、IOCの委員になることもできるのです。この国は10人くらいいてもいいはずなのに、委員はたった1人です。だから苦勞するのです。ところが、日本だとスポーツができれば他の勉強はいいではないか、というようになってしまっています。絶対に英語は今から必要になります。山中伸一文科科学事務次官ともお話ししましたが、東京を国際化するためにも、是非、グローバル教育を東京から目指していきたいと思います。これは私学がまず自由にできると思います。近藤協会長はじめ、皆様方、どうかよろしくお願い申しあげたいと思います。

オリンピックは国力を示す機会なのです。そして、世界中の人々をおもてなしするためにも、やはり若い人が、今、皆様方が教えられているお子さんたちが、6年後には青年、成人になっています。そしてボランティアとして通訳をやってもら。東京ではニーズがないです。富士山を見に行きたいという時に、東京は英語が通じるけれども、山梨、静岡に行ったら通じない。関西に行きたい、北海道を見たい、東北の被災地を見たい。しかし、その地に行った時に誰もボランティアの通訳がいらないのでは話になりません。是非、皆様方、英語あるいは他の言葉でもよいので取り組んでいただきたいと思います。

これらのことによって、日本の素晴らしさを世界に発信できると思っていますので、この大会で皆様方が2日間の研修の成果をあげられて、さらに私学教育が発展することを祈り申し上げております。

最後になりましたが、開催に当たり、ご尽力いただきました関係者の皆様に対しても、改めて感謝を申しあげたいと思います。そして、先ほど近藤協会長からもありましたように、IOCの皆さんを迎える時は、実は東京の食材だけでもてなしています。海がたくさんあります。伊豆大島をはじめ、魚がたくさんとれます。山があります。東京でも雪崩が起こるのです。野菜も肉もあります。何もかも揃っています。それで料理をしてもてなすことによって、大都会で山も海もあるというのは余りないことなのです。これも一つの東京の魅力でございます。私はIOCの皆さんをおもてなしたように、東京で素晴らしい食事をして帰って、そして、それが消費税となり、我が都の財政を潤わせて、これが私学の財源となるという、いい循環を生みたいと思っていますので、どうかよろしくお願いを申しあげまして、祝辞といたします。

本日は誠にありがとうございました。

来賓祝辞

文科科学事務次官 山中伸一様
第62回全国私学教育研究集会東京大会の開会に当たりまして、一言ご挨拶させていただきたいと思ひます。

今までのご挨拶の中にもありましたが、これから日本は大きく変わる、社会が変わるということに直面しています。一つは、今まで少子高齢化といわれていましたが、少子高齢化も進むのですが、それよりもっと根本的に大きな問題は、人口が減ることです。今の予測でいえば、2060年には9,000万人を切る。現在は1億3,000万人ですから、4,000万人くらい減ってしまうと予想されています。これを何とか1億人くらいにとどめたい



というのが安倍内閣の方針です。少子化に歯止めをかけたいということですがそれでも3,000万人減となります。

そうすると、東京都も同じですが、それぞれの地域で人口が減る中で、どうやって生き生きとした力を維持していくのか、地域をどうやって活性化していくのかということが、非常に大きな課題となっています。

そして、大きな課題の一つはグローバル化です。人口が減ると、結局モノをつくっても売るのは日本だけでは今の規模は維持できない。車やいろいろなものがどんどん外国で売られています。最近、NHKのテレビ番組を見たのですが、国内で売られているバイクは、もう9割は外国製で、日本製では数パーセントということです。こういった時代が他の産業にも及んでくるのです。

そこを支えていくのは何かといえば、それは人です。人材育成、人をどうやって少ない人口の中でつくっていくということが、非常に切実な問題です。教育の重要性、今までずっと、戦後、あるいは明治維新の前以降ずっと教育は大事だったといってきましたが、これほど切実に教育が大事なのだ、人を育てるのが重要なのだということがいわれた時代はないのではないかと思います。

先程も英語の教育の話、富士山の話もありました。富士山といえば山梨県ですが、私は本日午前、山梨の人口3万人の市の50人の子供がいる小学校の相談を受けていたのですが、その学校は1年生から英語をやりたい。子供がこれ以上減ると学校がなくなってしまうので何とかしたい、そういうことを田舎の小学校でも考えはじめたという時代になっています。

このような大きな変化の中で、その時代の変化、社会の変化、そういった要請に柔軟に最も早く応え、そして、ただ不安だけではなく、先ほど吉田理事長、近藤協会長からの話にもありましたが、建学の精神で筋を通して変わってきたのは何か。これは私立学校でございます。

本日から2日間、東京を会場にして「21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～」というテーマで研修が始まります。文部科学省でも、2020年のオリンピック・パラリンピック、ここを一つの目的、目標の年として、またその先の時代、これを見通して、教育改革に一所懸命取り組んでいきたいと思っています。

この大会が、21世紀に活躍して、日本の社会、世界に貢献できる、そういう子供たち、生徒を育てる大きな契機となることを心より祈念申し上げまして、今回のお祝いの言葉とさせていただきます。

おめでとうございます。

祝電紹介

本大会に届いておりますお祝いのメッセージをご披露させていただきます。

「第62回全国私学教育研究集会 東京大会のご盛会を心からお喜び申し上げます。関係者の皆様方の今日までのご苦勞に重ねて感謝を申し上げますとともに、引き続きご尽力賜りますようお願い申し上げます。今後ますますの発展、拡大を目指し、皆様とともに学び、歩んでまいりたいと思います。本大会のご開催に当たり、関係各位の並々ならぬご尽力に敬意を表しますとともに、ご参集の皆様方のご健勝とご多幸をお祈りいたします」。自由民主党副幹事長、衆議院議員、義家弘介様よりいただきました。

一部ご紹介させていただきました。

次期開催地区代表挨拶

日本私立中学高等学校連合会中部支部 支部長

石田 正 城

来年度の第63回全国私学教育研究集会長野大会を担当させていただきます中部9県代表の石田でございます。

今日の資料の中に、来年度のパフレットが入っていますので、ご覧いただくと一番よいのですが、今、いろ



いろ皆様方からお話がありましたように、激動、激流の中で、「新しい時代を担う魅力ある私学教育」と題しまして、来年度の大会を開催させていただきたいと思

います。わが地区は、地域的にも日本の真ん中にありまして、それこそ山海の珍味、そして風光明媚なところでございます。近々、金沢まで新幹線も開通する予定ですので、ちょうど大会が木曜日、金曜日で、土曜日、日曜日は一つごゆっくりとお過ごしをいただきたいと思います。昨年は大阪でした。今年は東京であります。来年度は空気の良い長野で、皆さんのお越しをお待ちをしております。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

閉会のことば

全国私学教育研究集会東京大会 副運営総括委員長

實吉 幹 夫

先生方、お付き合いいただきまして、ありがとうございました。私が常に申していることの一つに、私どもが



あずかっている生徒諸君は、これからの時代を生きるために、今の時代に留学に来ている未来からの留学生だということがございます。そういう意味では、21世紀を生きる子どもたちのために、私どもは過去の難民であってはいけ

ないだろう、このような思いで今回のテーマをつくらせていただきました。21世紀がどのような時代になるのか、混沌としている部分はありますが、子どもたちのために私どもが研鑽

をしておかなければいけないことが幾つかあるということで、7つの部会を用意いたしました。

先生方には、明日の各部会にご参加いただくことをお願いするとともに、今夕、教育懇談会がありますので、本日の疲れを癒やすということで、是非皆さんにご参加

いただきたいと思います。本日の会にここまで山中文部科学事務次官にはお付き合いいただきましたことを改めて御礼申し上げます。

それでは、第62回「全国私学教育研究集会 東京大会」開会式を終了させていただきます。

ご協力をいただき誠にありがとうございました。

報 告

「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会長
一般財団法人日本私学教育研究所 理事長

吉 田 晋
中 川 武 夫

一般財団法人日本私学教育研究所 所 長

日本私立中学高等学校連合会 会 長

吉 田 晋



学校教育というのは私立も公立もなく、健全な常識の下に行われるべきだと考えます。しかし現在の各都道府県における教育は、本来の公立学校と私立学校の設立そのものの原点を忘れて、公私を問わず、もっと悪い方をすれば、資金の出所にかかわらず、良さそうであれば何でも首長の思いのみで実行される状況に陥っている。ですから私たち私立中高にとっては、さまざまな場面で厳しさが増しています。予期しなかった理不尽なことも起こっていますが、私たちは一喜一憂することなく、私立中高の立場として、何よりも子どもたちにとっての良し悪しという観点から、物事を判断し、対応していきたいと考えています。

「公立学校と私立学校の役割について」ということで、あえて楠集中高校問題を例としています。鹿児島市から3時間くらい離れた過疎の町に、廃校となった県立高校があります。そこに県知事が強い思いで公立のラサールを作ると公言し、7億円もの公費をつぎ込み改築し、さらに48億円もの巨費を投じて寮を建設し、そして明年4月から全寮制の男子のみの中高一貫教育校を開校することになったのです。それも、本来の都道府県の公立学校の目的を大きく逸脱し、全国から優秀な生徒を募集するという、私たちには考えられない構想を打ち出しました。すでに全国22カ所で説明会を開催し、JAXA と協力して宇宙学を取り入れた教育を目玉に、校長が先頭に立って語り、全寮制の強みを発揮した学習など、正に至れり尽くせりの構想を述べています。さらには主要県で塾訪問

までしているそうです。

そういったなりふり構わぬ生徒募集に奔走しているわけですが、鹿児島県が県内でどのようなタイプの学校を作って、どのように生徒募集をするかは県の判断ですし、他から意見を申しあげる筋合いではないと思います。ただ今回問題となっているのは、この学校は同じ公立学校の中に特化した、私立学校でも実施できないような費用のかかる教育を、ほとんど無償で全国の人に提供するのです。1日3食で至れり尽くせりの寮生活が月5万円くらいだそうです。

確かに広く門戸を開放し、新しい教育をほとんど無償で提供するというプレゼンテーション自体は斬新でもっともらしく聞こえるかもしれませんが、考えてみると、この学校は県立の学校です。県立学校という行政機関のサービスは何よりもまず、納税者である県民に提供されるべきものです。それを蔑ろにして、全国からの受け入れ体制整備のために、50億円を超す県費を使い新たな学校を設立することが県立学校のあり方として健全なのでしょうか。県行政が主導する施策として正しいのかということが素朴な疑問です。それは今も解消されていません。同じ鹿児島県の公立学校の中で耐震工事も実施されていない中、この学校だけに巨額の費用をかけることが大きな不満として湧き上がっていると聞いています。

県立学校であるこの学校は、まずは鹿児島県の生徒募集活動しか権限が及ばないはずなのです。しかし、文部科学省に問い合わせたら何も悪いといわなかった。公立学校の目的からすれば、もともと県外で入試というのは想定外なわけで、そういう意味では法に触れていないのです。しかし、文部科学省もこれはおかしいと思っていることは事実です。

またこの学校は、東京、大阪、福岡で出張入試を実施します。ご承知のとおり各都道府県では、公私間での話し合いで公私の入学試験の日程が決定され、それに基づき、私学では県の入試日程を最優先して、県外入試等に自粛のお願いをしてきたところです。それにもかかわらず楠集中高校は、鹿児島県内の公私間の取決めだけに沿って何ら問題ないとして、他の都道府県の入試秩序を混乱させようとしています。教育を実践する学校が、自分さえよければいい、法律になれば何でもありといったことで真の教育ができるのか、私には理解できません。さらには21世紀の今、男女平等や男女共同参画が国の重

要施策となろうとしている中で、何ゆえ設置される県立学校が男子だけの募集なのかという疑問もあります。

これらの制度や仕組みを無視して他県で生徒募集活動を行えば、他県の行政権限に抵触しかねません。鹿児島県教育委員会当局の方々は、そういうことを承知の上で、この地方創生の時流に乗って正面突破を図ろうとしているのかもしれませんが、しかし、筋の通らない理屈は、どこまで行っても据わりの悪いものであることを知るべきです。地域振興という御旗をあげてみても、目的は手段を正当化しないということだけは申しあげておきたいと思っています。

この問題と似たようなことで、ここのところ浮かび上がっている問題が、今回の臨時国会に提出すべく準備を進めている公設民営学校制度です。これまで公設民営学校の設置は私立学校に限られており、地方公共団体が校地、校舎等を提供して、民間と連携・協力し、学校法人を設立して運営する方式でした。構造改革特区で高等学校及び幼稚園を対象に、公私協力学校を設置しようと特例を認める方式と、この特区の制度を利用しないという2通りがありました。特区で実施すると助成措置がない上に、費用の不足分等を地方公共団体が補助しなくてはならず、また私学助成の対象にもならないので設置例はありません。特区の特例を利用しない方式では、グローバル人材育成や不登校生徒への対応等を目的として何件か設立されていて、ぐんま国際アカデミーや、岡山の吉備高原学園高等学校などがその一例です。

今回の制度では、学校法人、準学校法人、一般社団法人、一般財団法人、特定非営利法人を指定する非営利法人として、どこかを指定します。そこから教育委員会が指定し、公設民営学校の管理を行わせることができるとされています。その対象は中高一貫の併設型中学校、高等学校、中等教育学校のうち、国際理解教育および外国語教育を重点的に行うものとし、その中には英語による国際バカロレア、理数・人文科学等を英語で教えるイメージ教育等を実施でき、教職員は非公務員で就学指定の対象外、つまり普通の義務教育の中学校ではないということです。まさに私立学校そのものを公費で運営して、授業料等は公立同様といった、その費用負担を顧みない理想の学校づくりを目指したものになっています。

大阪市の例は、政府の国家戦略特区で取り組むプロジェクトの具体的な案に、チャレンジ特区として起こした一つのメニューです。概要は、大阪市が国際的に活躍するグローバル人材を育成するために、外国人を含めた国際経験豊かな企業等の極めて高度な能力を有する、多様な人材を活用した英語による国際バカロレア、そして理数・人文科学を英語で教えるイメージ教育を実施する、通常の就学指定対象外の中高一貫校を設立するというもので、5年以内の開設を目指すとのこと。

現行の公立学校では、公務員制度上の給与体系、任用方法、人事管理が適用されるため、このような学校を作って優秀な人材を採用することは制度上不可能であり、外国人が運営に主体的に関わることが不可能であることから、公立学校、公務員に代わり民間人が管理運営するという仕組みを設けるべく、特例として公設民営型を制度化しようとするものです。つまり現行法ではできない

外国人に、何が何でも管理運営者として、校長として運営させるためには法律を変えるしかない。法律は安易に変えられないが、この制度を利用すれば簡単にできるということです。何ゆえ学校教育の一環として、税金で、他の公立学校と全く異なる特化した学校を作る必要があるのか、理解できないところです。

基本的には、われわれには止めることはできないと思います。一つだけ救いがあるのは、当初国がOKとなっても、今度は市に帰って、市で条例を作って、それからこの学校の運営ということになっているので、まだまだ壁はあると思っています。

聞くとところによると、一部の私学がこの大阪の公設民営の学校にも参入を目指しているという話もあります。われわれ私学は公教育の一翼を担い、創立者の思いのもと、公立学校にできない優れた教育を実践し、わが国の教育を支えてきたのではないのでしょうか。私立学校全体の繁栄こそが、教育立国日本を根底から支えてきたはずです。今こそ原点に立ち返り、この21世紀を担うグローバル化時代のわが国を担う人材作りに、プライドを持って進んでいかなければいけないと思います。そのためには全私立学校の振興に、皆さんで手を携えてご協力をいただきたいと思います。

さて次に、学校教育に対する公的支援のことを考えたいと思います。私学に対する補助の大半は経常費助成、俗にいう補助金です。本来2分の1補助が決議されているにもかかわらず、国や地方の財政状況によって逼迫して、実際には必要な経費の3分の1程度にすぎないのが現状です。教育分野の公的支援の拡充については、政治主導、社会的要請などを背景として、就学支援のような個人補助の拡充の動きが顕著となりつつあります。そのきっかけとなったのは高校無償化、高等学校等就学支援金制度の導入でした。確かに高等学校の入学状況を考えますと、ある程度効果があったように見られますが、今なお保護者の負担する教育費の公私間の格差は広がっている状況ではないのでしょうか。そして中学校に至っては、全国的に保護者の負担感が大きい上に、公立の小中一貫、中高一貫など、私学化の進行によってますます厳しい状況に至っています。

さらに私が理解しかねるのは、一条校でもない公共学校でない専修学校に対する公的支援が、文部科学省の次年度予算概算要求に5億円計上されていることです。その一方で私立中学校生徒の就学に対しては、何の公的支援も行われていない現状です。これからの私立中学校の存亡を考えると、今こそ大幅な保護者負担軽減策は必要だということを訴えていかなければならないと考えます。そこである程度の根拠をまとめてみました。

憲法第26条第2項では、保護者に対して子どもたちに教育を受けさせる義務を課し、併せてその義務の履行を容易にするために義務教育の無償を定めています。さらに教育基本法第5条第4項および学校教育法第6条では、国および地方公共団体が設置する義務教育小学校では授業料を徴収しないと定められています。

一方で、私立義務教育学校に学ぶ子どもたちの学費負担に関しては、自らの意思で私立義務教育を選択した者は、憲法上保障された無償の義務教育を放棄したもので

あって、改めて私立義務教育学校に学ぶに必要な費用を支援することはないという、権利放棄論といえる見解があります。ですから就学については、国の支援は何も行わないということです。しかし、国立義務教育学校および公立中高一貫教育校の授業料が無償とされているのは、この憲法第26条第2項を根拠とするものではなくて、政策的な判断に基づく法律措置であると解することができるのではないのでしょうか。

つまり私立学校をやめれば公立学校に籍があるわけですから、全く同じです。また先ほどの公設民営学校のように、最初から就学指定の対象ではないとはっきり謳っています。従って、この学校は国立と同じですので、私学同様の学校が無償で通学できるという不公平が生じてしまうのです。私はそこもわからないのです。

今回の専修学校の支援制度を政府が実現しようとするのであれば、その代わり、私立義務教育学校に通っている保護者を助けていただきたい。そのためには、その下地となる義務教育学校に対する支援策を、できれば平成28年度予算概算要求していかなければなりません。本当に私立中学校の入学人数は毎年減っています。同じ土俵に乗れば、私立中学校は絶対勝てます。それだけ良い教育を我々はやっていると思います。是非各県にも一緒に協力していただいて、来年度以降実施できるようにしたいと思っていますので、よろしくお願い申し上げます。

それから教育再生の問題についてです。私は、教育再生という言葉に釈然としないものを感じています。わが国の教育の現状は、確かにさまざまな面で問題を抱えています。それを再生しなければならないほど瀕死の状況だとは思いません。私たち私立中高校は、各学校がそれぞれの建学の精神に基づき、常に時代の変化に対応した、生徒の将来を見据えたきめ細かい教育を着実に実施しているはずで、また公立学校にしても、ひと昔前までの学級崩壊などというものは少なくなっていますし、逆に公立の役割を超えて、新しい教育を展開しようとする動きが進行していることも事実ではないですか。学校教育の主役は子どもたちであって、その改革が子どもたちの将来に直接影響することを考えれば、改革するにしても失敗は許されず、より慎重で、より多角的な検討が必要だと思っています。その意味でも、経済再生と教育再生を同じ次元で語るというのはふさわしくないのではないかと考えています。

今回の中教審高大接続特別部会の審議では、現状の高等学校の教育内容と大学の教育内容の改善を実施するために、その接点である大学入試制度を改革して、高大一体となってわが国の未来を見据えた、新しい時代にふさわしい高大接続のあり方を築こうということで、現在の知識偏重、暗記型の教育からグローバル化社会に対応した思考力や、問題解決能力を備えた主体的に学習に取り組む姿勢、それを涵養する確かな学力というものを身に付けさせることが目的だということになっています。

これについては、私は悪くないと思っています。ただこの論議が出てきたのも、大学サイドから、大学で受け入れた子どもたちのレベルが低いから、高校生に達成度テストを作って、判断して入れたいといってきたのです。しかし今、98%の子どもが高等学校に進学し、そして大

学には60%近くが進学する時代が来ています。それが20年、30年前の大学や高校と、子どもたちのレベルが一緒なのかということなのです。下のほうの層もすべて大学に行くようになってきたことで、必然的に学力レベルは下がってくるわけです。それを何とかしなければいけないという思いから、このテストが導入されようとしているのではないかと思います。

私も中教審委員として、この会議で検討している内容は、現実の教育内容との間にあまりにも大きな乖離があって、そしてそれをあまりにも早く改革しなければいけないという部分で不安があります。現時点では、最終結論がどのようにまとめられるか不透明な部分もありますが、じつは先週の金曜日に、急遽、この部会で今まで達成度テスト、基礎レベル、発展レベルといていたのが、突然名称が変わって出てきました。「学力評価のための新たなテスト（仮称）」として突然「高等学校基礎学力テスト（仮称）」、それから「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」というものになって出てきました。このことについて説明したいと思います。

現在進行している高大一体改革の方向性は、大学入試を海外の入試制度のように、まず共通のテストで一定の学力判定を行って、それ以後は小論文や面接、課外活動やボランティアなどを加味して、適性を判定するというかたちを模索しているのだと思います。これはまさに偏差値教育からの脱却です。しかし、各大学がこのテストを活用するかしないかについて、高大接続特別部会が毎週のように重ねて行われているのに、私立大学からは一切意見も何も出てこない。この試験を語るにあたって、大学と高校が一緒になって改革しようとしなければだめなのです。どうせやるなら全受験生対象の試験制度を作るなど、基礎学力テストであれば、外部模試を利用すればいいではないですか。外部模試の制度を変えて、内容を変えれば、年に何回も受けられます。大学入学希望者学力評価テストに関しては、各大学がそれを使うことにして、センターテストを変えて、より内容の違うものにすればいいのではないかという気がします。

新しい入学試験は2020年、2021年春入学生から漸次導入していくということです。この年代に当たるのは今の小学校6年生ですから、6年後にどんな試験内容に変わるのかによっては、もう学習指導要領も変わっていかないと無理ではないですか。ところが今の見解は、別に指導要領を変えなくても、今の指導要領の範囲でも十分にできるということです。このようなことでは、また未履修問題が起こるでしょう。なぜかといえば、まず基礎学力テストは、実施当初は国語、数学、外国語、地理、歴史、公民、理科の必修科目を想定します。そしてこの成績を段階的に表示する。知識・技能を活用する力を評価する問題を含めるけれども、とくに知識・議論の確実な習得を重視するというのです。どういう試験ができるのでしょうか。

この実施方法の中に CBT の導入と書いてあります。今の状態で CBT 方式の試験ができるだけの問題数やコンピュータを持っているのでしょうか。大学入学希望者学力テストも、知識・技能の活用力を中心に評価して、評価型に加えて合教科・科目型、総合型の問題を組み合

わせて出題する。将来は完全に合教科・科目型、総合型のみとして、教科、科目に必要な知識・技能やその活用力の総合的な評価を目指す。年に数回実施して、CBT方式での実施を前提に開発を行うとしています。特に英語は民間の資格・検定試験を活用し、つまり英語の試験は作らないということもいっています。CBTを使うとなれば、問題数だけでも大変な数を作らないといけない。これが2020年、2021年までに間に合うのでしょうか。

本当のことをいうと、大学がこういう入試に変えるといえ、高校以下は必然的に変わるのです。だから6年後に目指すというけれども、それならば、今度入って来る中学生から、授業内容から何から変える準備をしないかと、無理ではないかといいたいのです。

9月26日に英語教育の改善充実方策についての報告が出ました。改革1として、国が示す教育目標、内容の改善。ここでは高等学校段階の生徒の特性、進捗等に応じた英語力。例えば高等学校卒業段階で英検2級から準1級。TOEFL iBT60点前後以上を設定し、生徒の英語力の把握、分析、改善を行うことが必要となっています。英検2級から準1級と、TOEFL iBT60点は全く違うと思います。それから TOEFL iBT をやろうとしたら、今の日本の英語教育の枠の中では、語彙数も何とも足りません。

改革2として、学校における指導と評価の改善。各学校は、学習指導要領を踏まえながら、4技能を通じて、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から学習到達目標を設定し、指導・評価方法を改善。併せて主体的な学びにつながるコミュニケーションへの関心・意欲・態度を重視し、観点別学習状況の評価において、例えば『英語を用いて～ができる』という観点を、『英語を用いて～しようとしている』といった評価を行うことによって、生徒自らが主体的に学ぶ意欲や態度などを含めた多面的な評価方法等を検証する。

改革3として、高校・大学の英語力の評価及び入学者選抜においては4技能を活かして、大学のアドミッション・ポリシーとの整合性を図ることを前提に、入学者選抜に4技能を測定する資格・検定試験の更なる活用を促進する。これについては、教科書・教材の充実があり、ここでデジタル教科書など ICT が出てくるのです。

改革5として、学校における指導体制の充実で、2019年度までにすべての小学校で ALT を確保すると共に、生徒が会話、発表等で実際に英語を活用する観点から、中高校における ALT の活用を促進するとあります。ここで私が非常に疑問を持っているのが、ALT がこんなに多くいるかということです。優秀な外国人が日本に来てくれるのでしょうか。

ここでいわれてるのは、例えば今の小学1年生がこうなっていくということなのか、それとも今いる高校生、中学生、小学生がこうなるというのか。実際に彼らがいるのは、ここにいる小中高生が今こうなってほしいということだと思います。しかし、下で学んでいなければ、中学、高校ではそんなに簡単には変わらない。私はそういうことすべてに疑問を感じてしまうのです。

外部試験を用いるのだとすれば、学校の教育を変えなければいけません。今の英語の授業で TOEFL で好成绩を取るようなことはできないと思います。今までは文科

省も、この部分は初等中等教育局、この部分は高等教育局、この部分は生涯学習局といったり、同じ局の中でも課によって違うことをやっていたのですが、本当に改革するのなら、それを総合してみんなで協力する体制を作らないと意味がないと思います。

先般、子どもの発達や学習者の意欲、能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築、そしてこれからの学校教育を担う教職員やチームとしての支援のあり方について中教審に諮問されましたが、その教育制度改革の中で小中一貫教育校が出てきました。全国で1,130件、学校数では約3,400校がやっています。義務教育機関の小・中学校を一緒にやると良い評価ばかりがいわれますが、実際にはさんざん問題があったことをわれわれは知っています。悪い点もいってくださいといってもなかなか出て来ません。ある教育関係者が、「吉田先生もおっしゃっていたけど、実態としてもっとひどい例をたくさん知っていますよ。良い例ばかり出さないで、悪い例も出したほうがいいですよ」といっていました。

小中一貫教育についての実態調査で、小中一貫制度を作って国に何を期待しているのかといえば、92%が教職員の定数上の措置、72%が学校施設整備の財政措置です。要は教員定数を増やして財政措置を求めている、つまりお金をもらうために制度化しようとしているだけなのです。それが私は納得できません。中一ギャップの問題があるのだったら、中高一貫教育校はどうするのか。何か一つのことをやろうとすると、そちらだけに目が行くということは何とか変えてもらいたいと思います。

今、わが国も世界も大きく変わりつつあります。教育だけがそのままでいいはずはありません。何をどのように、いつまでに変えるのかというのが問題だと思うのです。教育改革を論ずるのは、いつの時代でも当事者ではなくて、我々のような大人世代です。つい教育改革などというと、大人世代にとっては思い入れが強くなって、少し違った方向に進んで行くケースもあります。でも、教育改革を論ずる時には、いつも次世代に代わってその役割を担っているという謙虚さが必要なのではないかと思うのです。

私立学校はそれぞれの先達の思いを引き継いで、一生懸命努力をしています。その努力している学校が報われないで、特定のところにだけお金をかけてやっていくという、上っ面だけの教育が本当に良いのでしょうか。それを世間にしっかりと訴えなければいけないと思います。子どもたちが将来の夢や希望を実現するために、自分で選んだ学校に誰でも入れる環境づくりをしていかないといけないと思って努力しています。皆さんのお力で、高等学校においても50%、中学校も30%ぐらいまで私立が子どもを収容することによって、よりよい教育ができ、日本がよくなるという思いでがんばっていきますので、よろしくお願い申し上げます。



先程、吉田中高連会長が、大変生々しい話を含めて縷々申しあげましたが、日本私学教育研究所はそれを受けてどうしていくべきなのかという考えについて報告したいと思います。

まず、教育界を取り巻く環境の問題です。経済界の負託に応えれば内閣支持率は上がり、選挙で勝てるといわれています。安倍内閣に対して財界から、「世界の枠組みがもう大きく変わっているのに、教育界は相変わらず旧態依然としたことをやっている。日本の教育を変えろ」という負託があったと思っています。それを受けて安倍内閣は教育再生を掲げて、いろいろな施策を行ってきました。中には良い政策もありますけれども、現場から見ると、おかしいのではないかというものも入ってくるわけです。折りに触れてそういうことについては意見を述べていきますけれども、このルートを逆にボールを投げ返していくのは至難の業です。そのため、日本私立中学高等学校連合会では、うまくボールを投げかえす方法を模索しながら活動が行われています。

ここでの問題は、教育を経済界の都合で変えていこうとする流れだと思います。教育というのは50年後、100年後の長いスパンで考えなければいけない部分がたくさんあるにもかかわらず、今起こっていることを右から左にただ流していることが、非常に大きな問題だと私は思っています。

その一つの表れが、公立学校の変貌の問題です。公立の小中一貫教育校の問題、鹿児島県立の楠串中高校の問題、公設民営化の問題等々、公立学校の従来の枠組みを変えてしまおうという一連の動きです。私たちが非常に大きく問題にしていることは、都市における小中一貫教育校の問題です。その設立の理由はさまざま挙げられますけれども、私から見れば、公立中高一貫校で大変人気が出る、倍率も高くなる、その二匹目のドジョウを狙っているとしか見えないのです。これは公立学校の問題ですが、その余波は大きなものがあると思っています。公立学校というのは税金でやっているわけですから、公平、平等を旨として運営をされるものです。それが一部の生徒たちのために、あるいは何か営利を目的とした組織や団体を利するようなかたちにならっていくことは、非常に大きな問題があると思っています。

安倍総理の9月29日の所信表明演説の中に、「公立学

校の運営を民間に開放し、グローバル人材の育成や個性に応じた教育など、多様な価値に対応した公教育を可能にして云々」とあります。この中の「民間」という部分に危険性を感じています。

小中一貫教育校も4・3・2制にする、あるいは5・4制にするなど、その選択を自治体に任せることになれば、子どもたちが転校した時にいろいろな問題が発生すると思います。これは、ある意味では囲い込みといった部分があるわけです。そして公立学校を有利に働かせるという部分が見え隠れしますので、その余波を私立学校が受けないような対策が必要になると思います。

次に英語教育の問題です。英語教育のあり方に関する有識者会議の結論として、アジアトップクラスの英語力を目指し、小学校3年生から英語を始め、5、6年は教科化していく。高校、大学の入学試験でも英語の4技能を取り入れるような努力が必要で、そのためには資格試験や検定試験等の活用を促進すべきだということです。例えば TOEFL があるのだから、そのスコアを使って大学入試に代えればいいのではないかということになります。日本の大学入試を目指す子どもたちの平均は英検に直せば準2級、GTEC では700から999だといいますが、このレベルは TOEFL には数値がないのです。これをそのまま使えませんから、大学入試を TOEFL でといっても簡単ではないでしょう。また TOEFL を1回受験するのに2万円ほどの受験料がかかります。そこで結局、今の文科省の検討では、GTEC を中心に考えている節があります。

小学校3年から英語が始まるということを受けて、英会話教室の幼児クラスの人気が急上昇しています。そして小学校5、6年生の英語を教科化するというを受け、私立中学入試に英語を課す学校が急増する見通しです。また公立小学校に ALT を配置するといわれていますが、それが行われるとすれば、私立学校としては、人件費の問題その他を考えると非常に厳しいです。そして何よりも英語の指導の仕方が変わらなければいけないということが突き付けられています。ただ英語を教えればいいのかではなくて、英語を使って何ができるかということで、昨年文部科学省から外国語教育における「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標が発表になりました。

文科省では外国語教育推進室等の予算を使って、全国の子供教育委員会やブリティッシュ・カウンシルと連携して、すでに公立学校の英語の教員研修が始まっています。国の予算を公立学校のためだけに使うのはおかしいと主張すると、「そういう研修会は私立の先生方も参加できます」というのですが、主催が教育委員会では私立学校に声がかかってくることはなく、仮に声がかかったとしても、それは公立学校用の研修であって、私立の学校には合わないという部分もあるわけです。

そこで緊急に12月1日に英語教育改革説明会を開くことにしました。文科省の立場でどういう英語教育をしようと考えているのかを、もう一度明確に説明してもらい、文部科学省の委託を受けて研修を担当しているブリティッシュ・カウンシルにも協力を依頼して、基本的な考え方を正していこうというものです。是非英語の先生方、関係当該の先生方のご参加をお願いしたいと思います。

次にグローバル教育の問題についてです。日本中どこへ行ってもグローバル教育という言葉が聞かれますが、ではグローバル人材とはいったい何なのだろうという議論がほとんどされていません。確かに多国籍化が進んで、どんどん国境がなくなってきました。そういう中で、何から手をつけていいかわからないので、とりあえず外国人講師を雇用したり、海外の学校との交流をしたりという学校も多いと思います。そういうことをやって、本校ではこんなにグローバル教育をやっていますという学校もあります。しかしその状況を見てみると、私は何かグローバル教育という名の金太郎飴ができてつあるような気がしています。

6月に開催した私学経営研修会のメインテーマが、このグローバル教育の問題でした。その中で、ある先生から、「要するにグローバル人材というのは、与えられた条件の中で、それを何とかする力を持った、そういう力を発揮できる人がグローバル人間なのではないか」という話がありました。私はまさに目から鱗が落ちたように感じました。子どもたちが出て行く社会は非常に複雑になっていきます。しかしどういう条件の中に暮らすにしても、そこで働いて、暮らしていける力を持った人こそが、本当のグローバル人材なのだと思います。

そう考えれば、自分の学校の生徒たちが将来どのような所に行っても、何とかしていける力をつけるために、私たちは何をしなければいけないかという視点で考えてみるのが一番いいのだと思います。何も欧米のスタンダードに合わせる事が能ではなく、自分の学校流のアプローチはたくさんあると思います。

その力をつけるためのツールとして、語学力、コミュニケーション能力、あるいは情報処理能力等さまざまなことを子どもたちに与えていくことが大事なのだと思います。金太郎飴のように形を整えればグローバル人間が育つわけではないのです。そして、例えば外務省のグローバル教育コンクール、農水省の教育ファーム、環境省の「エコが見える学校」、JICA のプログラム等外部と連携しながら、子どもたちの視野を広げることで、何とかする力をつける。そういうことこそがグローバル教育だと私は思っています。

次に高大接続新テストについてです。このテストで優秀な成績を残した生徒は、高校2年生で高校を卒業させ、大学への飛び入学を認めるといっています。それは受入れ側の大学にとっては都合がいいかもしれないが、送り出し側の高校としては容認できません。高校3年間でただ学力がつけばいいのではなく、部活やホームルーム活動や学校行事を通して人間関係を培い、3年間で人間として成長していくということを私たちはやっているのだから、それを無視するかのような考え方は非常におか

しいと、私は中教審の部会で反対しました。

また大学入学希望者学力評価テスト（仮称）ですが、合科型になるとどうなるのでしょうか。各高校の先生方は教科セクトの中で動いているので、英語と物理を一緒にした問題で指導をするのは非常に大きな問題なのです。そして平成32年度からこれを段階的に進めるということは、高校の進路指導に混乱をきたすことでしょう。

最後に道德教育の教科化の問題です。道德教育を特別の教科として学級担任がこれを本気になってやれば、はじめはなくなるのだといっていますが、そんなことでいじめがなくなるなら苦労しません。担任におしつけて本当にこれができるのか、担任が個人の価値観に従って本当に道德教育ができるのでしょうか。「その国の道德や文化を花だとすれば、その花の根っこは宗教だ」と哲学者の梅原猛さんはいっています。例えばイスラム教国の世界で道德的な人は、一日に何回もの礼拝を欠かさず、豚肉は食わず、アルコールは口にしないのが基本です。しかしキリスト教国に行けば、豚肉を食べても、アルコールを飲んでも悪くないというように変わってしまいます。ゆえに物事の善悪の基準は、多分に宗教による部分が大きいのだといっています。これを私立学校に置き換えて考えると、私学にとって大切な建学の精神をベースに、本校ではどう考えるかということが基準になってくると思います。そうであれば、ますます学級担任に任せっ放しでできるものではないと私は思っているのです。

そして、私立学校の建学の精神は、大事だから触ってはいけないと飾ってあるだけで、日常的教育活動は全く関係なく行われていることは往々にしてあります。私は建学の精神は普段使いするものだと思います。生徒指導にしても、教科指導にしても、部活動にしても、進路指導にしても、それがすべて散りばめられている世界でなければ、本当の私学とはいえないのではないのでしょうか。そのためには創立者の教えを平易な言葉で、生徒、教職員の誰もが日常語として使うことができるような創意工夫が必要なのではないのでしょうか。それが学校中にしっかり浸透していくことが、「私学には建学の精神があります」と胸を張っていえる原点になるのではないのでしょうか。

平成27年度の私学経営研修会山形大会は、是非ご注目いただきたいと思います。今から40年前に山形で行われた大会がきっかけになって、私立学校振興助成法が制定されましたが、奇しくもそれから40年目に、山形でこの研修会が行なわれます。激変する世の中の事情ですが、こういう時にこそ研修は大切で、私どもは少しでも全国の学校の先生方にお役に立つような研修会を実施してまいりたいと思っています。

全体会

記念講演

「新しい学び～21世紀型スキルを一人ひとりに～」

東京大学 大学総合教育研究センター 教授 三宅 なほみ
大学発教育支援コンソーシアム推進機構 副機構長



講師紹介（平方邦行 全体集会運営委員長）



今回の全国私学教育研究集会のテーマは「21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～」ということです。皆さんと一緒に21世紀の教育を考えてみたいと思います。

そこで、本日は、認知科学、認知心理学をベースに人の理解や学習支援をする方法や、環境づくりといった人の賢さに関わる研究の第一人者の一人でもあります三宅なほみ先生をお招きいたしました。

三宅なほみ先生は、東京大学大学総合教育研究センター教授並びに大学発教育支援コンソーシアム推進機構副機構長としてご活躍をされています。本日は「新しい学び～21世紀型スキルを一人ひとりに～」という演題でご講演をいただきます。

「新しい学び～21世紀型スキルを一人ひとりに～」というタイトルそのものは、実は本大会を運営されている先生方からいただきました。これから90分間お話を聞いていただくのには、相当固そうな話で心配なのですが、少し柔らかく「学び」とはどういうことなのかということを考えていきたいと思います。

私たちが、学校教育、社会に出ていく人、あるいは学校に行くまでの子どもたちをどうやって育てていくのかということを考える中で、今、世界中が、なぜ「学び」

が変わらなければいけないと思っているのかということから、「学び」を変えていくことは大変なことだけでも、学習指導要領の下で、今の教科書を使い、一所懸命教室で子どもたちの学ぶ力を引き出そうとしている先生方に少し考え方を变えていただくだけで、私たちが考えているような「学び」というのは引き出せるのではないかと考えています。

東京大学をベースにいろいろなところ、特に教育委員会を通して現場に入れていただくことが多いのですが、公立学校が多く、私学の先生方にお目にかかるのは初めてというような感じがしています。

今なぜ「学び」が変わらなくてはいけないといわれているのでしょうか。社会が求めている学びが変わってきたからだという捉え方がどの国にもあります。例えばこういう話をアメリカで一所懸命やる人たちは、19世紀の世界では徒弟制のような教え方が中心だから、親が「うちの子はどうする」といって一番ベストなところへ連れて行く。

その環境の中で、先生がたくさん、生徒は1人という今の学校とは違う環境の中で、少しずつ自分のスキルを現場で磨いていくという教育があった。ある意味、何の教育をどう受けるかということの決定権は親を通して本人にあった時代があったのですが、人口が増えて、産業革命だ、これからは富国強兵だ、儲かったほうが国はよいという話になってきた時に、親に任せていると、国が欲しい人が育たない。国が親にどのように子どもを決定するかという、その決定権のところを任せてください、その代わり全員に学びを保障しますという時代が来て、それが20世紀だったのです。

そこで、いろいろなところが切磋琢磨して、聞かれたことには答えがある。しかも答えがあるだけではなくて正解というものがある。それを学校というところで先生から教えてもらって、その正解ができるだけたくさん出てくるということが賢いということなのだ。企業もこの賢いといわれる人たちを雇って、頑張っていけば世の中が進んでいくのだと思っていた時代があったのです。

しかし、なぜ今、21世紀型スキルといういい方がされるか。国で全部同じようにやっていただいて大丈夫なのかという公教育に対するいろいろな見方といっているのかもしれませんが、違う見方が出てきていると思います。

今、社会は問題が起きると、その中でよりよい方向に変えていける人材というのを求めていると思います。求められているのは、「これの答えは何」というと、スマ

ホで答えが出てくる時代になりましたので、「答えは○ ○」と覚えている、知識がたくさんある、ファイリングキャビネットのような知識をたくさん持っているという人があまり目立たなくなってきた、それよりはみんながファイリングキャビネットを開けられるのは分かっているのだから、教えられたことを使って、こういう問題をどうするのか、問題の見方、このように見方を変えて、例えばこんなものは解の候補にならないかといえる人たちになってくる。そういう人を育てる教育が必要なのではないか。

ということで、東京大学の中に先ほどの紹介の中にあつた大学発教育支援コンソーシアム推進機構ですが、5年もやっていますのですからいえるようになりましたが、「Consortium for Renovating Education of the Future」、これを短くして、CoREF（コレフ）と呼んでおります。

21世紀をけん引する人材を育てるために、主には市・町・県の教育委員会、あるいは学校と連携をして、子どもたちが自分の頭で主体的に考えていく。先生が教えた答えではなくて、「先生、こういうのも答えになる」ということをやると、生徒の数だけ答えが出てくるのですが、こういうものを子どもたちが考えてみて「うん、もうちょっと考えてみないか、みんな」というような感じの授業をやることで、授業が始まれば、先生の頭よりも子どもたちの頭のほうが動くという、そういう授業をやるとういうようなことです。

最初に本格的に声をかけていただいたところは埼玉県教育委員会でした。教育委員会として、かなり大きな組織、学校の数が多いという意味において大きいということですが、教育委員会が抱えている問題としても、典型的な問題を持っておられると思います。

学校が基礎学力で輪切りになってしまっている。「うちの学校はね」といって、先生たちのやっていることも違っている。研修の中身も違う。

何が問題かということ、余りにも生徒が受け身になってしまって、先生が教えずぎてしまっているという感覚が教育委員会の中にあり、生徒がもっと主体的に参加する授業にしたい。それも、学校種別によらずに、どの学校でも授業をそういう方向に変えていって、全ての子どもたちが自分の頭で考えて、自分の頭で必要なことを理解して、自分の頭で問題を見つけて、高校を出たら、こういうところに就職しよう、こういう学校に行こうといえるような授業改善に取り組むべきで、そのために必要なのは、先生方のネットワークを教育委員会としてつくることだ。そのネットワークの中で、先生方がもっと生徒を主体的に動かすために、どのようなやり方があって、どうやっていけばいいのだろうかということを考えていく。学習指導要領の改訂や、初任者が急増していく。これまで頼りにしていた先生方が辞めていかれる。中間リーダーの方々には、授業はすごくうまいのですが、「管理職になるのは嫌ですよ、土日にも暇がないじゃないですか」とおっしゃるような、そういう体系の中で、みんなが助け合って授業をつくっていけるという組織にしたいということでした。

なぜ埼玉の高校の教室では生徒が受け身、先生が教え過ぎなのだろうか、こういう相談を受けると、研究商売

の人間は、ここから考えようという気になります。

そのように考えてみると、今の教え方の中に、何か少しギクシャクするところがある。今、これがよく分かるようになってきたのは、対比するものができてきたからです。学校教育に対して、今、何を対比することができるかということ、MOOC（Massive Open Online Course）です。オンラインで受けられるネットワーク上の授業です。その中で授業を登録すると、高校生でも、中学生でも、アメリカのMITの授業を登録して、一定の点数を通るとcertificateが出るものもあります。一応、その単位を取ったといえるのです。それで、日本で就職できないからアメリカへ行って就職するようなこともできる時代になってきました。これはかなり実行されていて、うまく単位を取ってもらい、評判になるとお客がもっと来る。ですから大学は一所懸命やっています。単なるサービスではなくて商売ですから。この数によって、今、大学は競うということもあり、本学も一所懸命やっています。

これは裏側で何を見ているかということ、どういった人が登録してくれるのか、どのぐらいの時間をかけて取っていくのか。最初に登録してくれた人が最後の試験を受けているか、いろいろ調べないと危ないです。記録を取りまします。

その結果、分かってきたのは、3万人受けたコースがあつたとします。始めて3、4週間くらいのところで、3万人を並べると、3万人の成績が1番の人から3万番目の人まで出て、それぞれ何番か分かります。だから、3週間目くらいのところで見ると、できる人、だめな人というのがはっきりしてくるというのが姿なのですが、実は最後に通った人というのは同じことができるようになった人たちですから、全員最後に通ったかどうかということで見ると、全員同じことができるようになっていくわけです。1番から3万番目の差はないのです。

何の差があるか。かけた時間です。ずっと通って出て行く人と、じわっと時間をかけて、途中でずっと停滞して最後に駆け込んだ人というようなことです。後者の方がもしかすると、普通の人の学ぶ姿なのかもしれません。自分のやりたいことに、自分の時間を、好きなだけ、好きな時にかけて、分かるところまでやる。特にこういう人は、真ん中で丘をつくり、よく調べてみると、一部ですが、オフラインで自分たちでまとまって何人かでグループをつくって、「この先生の授業、この辺でちょっと難しくなったね」というような話をしながらやっているということが分かってきました。

しかも、この先、もっとアドバンスト・コースを取りに行く人たちというのは、ずっと駆け抜けていった人たちより、真ん中で時間をかけ、じっくり理解をした人たちのほうが確率が高いということも分かってきました。

MOOCを使っている大学とかいうところは手を抜かないで、ちゃんと良い授業をつくりましようということになるわけですが、ひっくり返して学習を考えると、現状の授業では全員が同じ答えに同じ時間に到達することを求めている。人間というものはこれは得意ではないのです。だから、頑張ればこれでいろいろ差が出るし、誰かが1番、2番になったら、30人のクラスだったら3番以降から30番までの人たちは、自分たち、もうこれは1番、

2番の人に任せておけばいいと考えるようになるとやらない。そういう社会をつくっているのかもしれない。

現場はこういうことは苦手で、特別な訓練が必要ということになり、みんなで一所懸命やろうと先生が持ち上げていくことは必要ですが、これがうまい人が授業のできる教師だというのは誤解です。

こういう解はないのかと自分でいってくれる主体的な学習者、学校で点数80点取ったら終わり、何々大学に入ったから、もう勉強は終わりではなく、そこにきて、初めて次の問題がおもしろくなって勉強してくれる人をつくるためには、この形はよろしくないという話です。

これは埼玉県の高専学校だけなのかということで、いろいろなところで話をしているうちに仲間が増えてきました。

実は、「学び」とは何かについての考え方が、学者の怠慢が一番大きいと思いますが、少し間違っていたのかもしれない。例えば、知識というのは定着をしてから活用して、それから探求をするのですとか、それから、基礎的なことが分かっても、グラフの読み方とか、どのように手を挙げて話をするとか、みんなで譲り合うとか、そういうことが分かってからではないと、思考力とか表現力とか判断力というスキルは身につかないのではないのですかというような考え方がありますが、ここを見直すのが学習科学です。先ほど認知心理学、認知科学が専門と紹介していただきましたが、その中の一つに、人はいかに学ぶのか、今、人間というのは十分持っている資質からみて賢いのかを考えるという仕事があります。対話してほしい人が必ずしも対話のテーブルにちゃんとついて、うまく対話してくれるのではないというような現状を見るにつけ、人間はもう少し賢くなっていかないと、そのうち絶滅危惧種になるのではないかというような気がします。

そういう中で、では、人間は日常的に赤ん坊の時から、どうやって学んでいるのだろうか。考えてみると、赤ちゃんというのは、何か問題を見つけると、一所懸命探求してみて、あっちこっちやってみたり、このようにするとうまくいきそうだとするものが見つかってくると、それを何度も何度も活用して、やっているうちに、これでいいと定着させる。

人間は大体こういうものです。会社でやっていることも同じだと思います。もしかしたら、学校経営というのもこうかもしれないと思います。

子どもは小さい時から、自分のやりたいことがうまくできる方法を考えています。これは3歳から4歳くらい、もう少し5歳から6歳になってくると、他の人は何をやっているのだろうかということを聞いて、こういう経験をやっている人もいて、信頼できると思った大人とか先輩のいうことであれば信じる。試してみないで信じるという傾向が人間はすごく強いという話もあるのですが、そういうことをして、表現してみて、こうかなという、自分の信用している兄ちゃんから「いや、そうじゃなくて、こうだよ」といわれると、そちらを信じるということもしながら、結果を判断し、自分で賢くなっていきます。

いいかえれば、人は潜在的に学ぶ力を持っています。では、なぜ学校で主体的に学ばないといって心配しなく

てはならないのか。育て方、具体的な方策、この方法でやってみたらいけるはずということについての理解がなかなかでき上がってこない。その中の幾つかの方策というのはあるはずで、それをうまく授業に使うということをもみんなでやって確かめてみて、これは確かなようだというところまでいっていない。探求フェーズにまだ入っていないのかもしれないのです。

では、人間というのは今までどうやって青色のLEDをつくるというような話まで科学を進めていったのか、そこにあるベースは対話です。意見の合わない人同士の対話です。同じ問題を解きたい。けれども、少しずつ違う答えを持っているという人同士が、なぜあなたの考えは違うのかといて、対話を繰り返しているうちに2人が仲よくなって同じことを考えるようになって解が出る、ということはほとんどないのですが、2人が喧嘩したまま、お互いに、最初に対話を始めた時よりも、対話を何年もやっている時のほうが賢くなるのです。自分の考えていることを変えるだけではなくて、相手の考えていることも取り入れて考えるようになるので、最初はこのくらいの視野だったものがこれくらいに広がって、最初はこれだけの問題が解けていたものが、話し合っているうちに、このくらいの問題が解けるようになる。適応範囲の広い問題が解けるような知識を持っている人のほうを賢いということにしますと、対話というのは、違う答えを、共通の問いを、答えを出そうという状況に持っていく中で、みんなが話し合いながら、相手が納得しないので、自分の考えを少しずつ変えていく。相手の答えの分かったところ、よさそうなどころだけもらって、自分の考えを広げていく。これをやっていくだけで賢くなるはずだという話になります。

だから、条件がそろえば、当然、保育園でもこういうことは起きます。問いを共有している必要があるので、こういう場面がまずないとだめなのですが、子どもたちが6人ほど集まって、「氷が張っておもしろかったな」と。「氷ってどうやって張るのだろう」、「雨が降ったら張るのかな」と一人の子がいったのがきっかけで、「違うよ、もっといろいろなことがあるんだよ」というような話になって、「どうやったら氷が張るかな分かるかな」、この辺は保育園の園長先生の記録からなので、園側がどのように舞台設定をしたのかは必ずしも書いていないので、子どもたちが自主的にやったような話になってはいいます。試してみようというので、その辺にある容器に水を入れて帰りました。置いて帰ったら、ある朝、どの容器にも氷が張りました。「雨が降らなくても氷は張るんだ」。できないものもある。次の日はいろいろなものに入れて帰りました。

これはうまくできています。みんなが自分で取った容器で違うところに置いていく。同じ考えができない。「あ、しまった、あのおせんべいの缶取られた」と思っても、もう誰かが持っている。自分が他のものを取ってきて、あそこに置きたいところをどけてしまうわけにはいけないので、どこかに置かなければいけない。人数分の違う答えが、次の日の朝になると結果付きで見える、そういう状況になっていました。

次の日は凍ったもの、凍らないものもありました。「変

だね」。一緒のところに置いていて凍らなかったのです。子どもたちから、ああ、同じところに置くとだめなんだと。そういう結論も出ますが、もう1回やってみたら、「凍った、凍った」となったのですが、一つが凍らなかった。発泡スチロールの箱の中に大事に水を入れて、ふたをして置いておきましたら、ずっと凍らないのです。「部屋の中だから」、「ふたのせいかな」とみんなが心配をしてくれて、いろいろなところに置いてみようと、少しずつ系統的にやってみるようになって、10日ほど、この遊びを続けてくれた。

そうしましたら、これは年長さんですが、「氷ってできる日とできない日があるんだ」。「雨とは関係ない。むしろ寒い日に凍るらしい」。「部屋の中は凍らなくても、外に置いておくと凍ることもある」。「バケツも下のほうは凍らない。上は凍っているのに下は凍らない。下のほうは暖かいのかな」あるいは「厚い氷と薄い氷ができるのはなぜ」というような話になっていきます。

ここで起きたことをまとめてみますと、一人ひとり、全員が自分の経験から自分なりの理解ということをつくり上げる過程というものが見られます。自分の理解を言葉で表現して、「ふたがあると凍らないのかな」というようなことが、そんなに考えているかどうか分からないのですが、いえてしまうのです。「そうじゃないと思うよ」というような話をしながら、少しずつ一般化、抽象化して、適用範囲を広げて、解ける問題の範囲を広げていって、次の学び、知りたいことにつなげていきます。

実際、この子たちは、氷が簡単に、必ず手に入るようになったので、昼間に持ち出して、溶けるかなという遊びを始めたそうです。そうしましたら、一人の子が「おかしい。発泡スチロールの中に入れておいたのって、あんなに凍らなかったのに、今度は溶けない。発泡スチロールの箱って氷がきらいじゃないのかな」と、少し複雑なのですけれども、お分かりになりますでしょうか。水を入れておいて凍らないから、発泡スチロールの箱は氷は嫌いなのだろう、と思っていたら、今度、氷を入れておいたら、最初に溶かしてくれるだろうと思ったら、溶けないというのです。その子が何を考えていたのかということを見とる力というのが、園の中で、子どもたちを引っ張っていく先生のほうに必要ということは、小中高の先生でもおそらく同じです。

子どもたちは、分かってくると、次の学びに自分で進んでいきます。なぜうまくいったかということ、共通して答えを出したい問いがあって、各自が少しずつ違う問いへの答えが出しやすかったし、みんなの考えが違うことも見やすかった。違わなければならないような具合に、もう場ができ上がっていたので、みんな答えは同じですとあって、どこかの缶に水を入れて全員帰ってしまうとかではなかったのです。

その中で、一人ひとりのアイデアを交換し合い、多様なアイデアをまとめあげるということを子どもたちがせざるを得なかった。その中でできたのが、一人ひとり、自分にとって、最初考えていたことより確かなこと。「雨というより寒いらしいよ」、「部屋の中か、外か関係ないだろうと思っていたのが、どうも外らしいよ」、「でも、風強いとだめだよ」とか、みんなの答えを検討して

得られた、自分なりに納得できる、自分なりの表現というものを子どもたちがつかんでいって、納得した先に見える、もっと知りたいことが出てきます。

保育園でこれができるのだったら、学校の授業でこれをやりましょうというのが、今、連携先でやっている知識構成型ジグソー法、一応名前はつけていますが、これは型です。こういう型でやってみて、解きたい問いを違う考え方から考えてみて、違う考えの人たちが集まって答えをつくっていく。先程の保育園の氷づくりのような状況をつくっていく。今の教科書に載っているいろいろな部品を集めて、児童生徒が、今までは先生がまとめて説明していたことを、自分たちでまとめ方を工夫して、答えをつくって、こうだあだと、誰も答えが分かっていない状況で、これかもしれないと考えながら話すということを教室の中でやってみよう。

間違っても、「私は答え知っていますから、説明しますから、みんな静かに聞いてね」ではなくて、一人ひとりがみんな自分で考えをつくりながら、その考えを表現していく。当然、途中で、「何ていったらいいのか分からない」、「聞こえない」、「あれ違うよ」といわれます。それが個人の学びを助けます。なぜならば、「違うよ」といわれてしまったら、もう1回表現し直してみる、「もう一回いって」と。人間というのはもう一回いえないのです。巻き戻して、今の講演をもう1回そのままやり直してくださいといわれても無理です。人間というのは同じことをいえないので、「もう1回いって」といわれると違うことをいうのです。

しかし、その中で、本人の中では表現が変わっていきます。その表現が、本人の中で、ああじっくり来るなという表現になってきて、その習得したもので、理解、知識、アイデアを思いつき、納得したものを、自分のもの、これは自分が教室を離れても持っていけるし、テレビを見ていた時に、「あ、今日、教室でやっていたことができてきている」というような形で自分で育てていける話になるはずです。

ということで、少しだけ疑似体験をお願いしたいのですが、これは、実際に埼玉県の高校での地歴の授業で出てきた話題なのですが、高校1年生です。

「渋谷の NHK センター付近で豪雨に遭いました」。埼玉県の子どもたちです。「明治神宮方面と渋谷方面のどちらに逃げますか。なぜですか」という話なのですが、渋谷に逃げるという方はどのくらいいらっしゃいますか。これに手が挙がるとすると、きっと少し地方の方です。「いや、明治神宮のほうへ行く」という方はもっと近くに住んでいる方たちかもしれないです。

全国から集まっている先生たちは「何これ」ということになるかと思いますが、どのようなことが分かっていると、これに答えが出るのでしょうか。

みんなで考えて話し合ってみようというのがこの授業です。1分程、隣と話をしてみても、これはどちらだろうということ話をしてみてください。

少し答えというか何が問題なのだろうかというようなところが話し合われましたでしょうか。小人数だと、5分くらいで考えていただくのですが、案外、考えるための情報というのは、自分の知っていることを持ってきて

す。話し合っただけで答えを出そうとすると、本当にいろいろな答えが出ます。ここで少しだけ話し合っただけで、やはり渋谷だという方はどのくらいいいらしいですか。

少し減りましたか。

神宮というのも実はあるという方、かなりいらしたのですが、どうですか。

どちらのお答えも減りましたね。

高等学校では実はこのようにします。この問いをきっかけに、地歴で理解してほしいことを教科書の中から盛り込んでいき、教師がやってほしい話に持ち込むというところがミソといえバミソです。教科書を使って、そこから子どもたちの主体的な学びを引き出す一つの形です。

問題は渋谷の NHK 付近で豪雨に遭いました。明治神宮駅方面と、渋谷駅方面のどちらに逃げますか。それはなぜか。「これが渋谷区の地図だよ」といって地形図を見てもらうのがこの時期の目的ですから、地形図を配りますが、細かいのでよく分からない。明治神宮駅と渋谷駅を探すだけで5分かかるといようなものを渡されて、こんなの嫌だよとなるくらいの学校です。

というところで、今日は3つくらいの部品でこのことを考えていき、都市の水害とか都市の災害ということについて考えてほしいと教科書ではなっているから、それで今日はやろうという話で、教室の中で3つくらいのグループに機械的に分けます。どれが好きとかということはいわずに、もう勉強というのは一種の仕事ですから、降ってきたことはやらなければならない。ある1つのグループには、地形図を見ると、どこが高いのかを見ていく、結構目が疲れるのですが、やっていると、実は神宮駅のほうが渋谷より高い。

よく見ると、代々木公園が神宮駅の近くにあり、真ん中に池がありますが、高いです。等高線を拾ってみると高いということが分かる。

もう一つのグループは、「渋谷川を拾って」と。実はもう暗渠になっていますが、春の小川のような川をつくったところではないかと思いますが、それが暗渠になって、この川は一体どこにあるということを赤で拾ってきます。そうすると、渋谷駅の両側を挟むように渋谷川という川があり、暗渠で、拾っているうちに、「渋谷駅は案外危ないところにつくったのですね」といようなことを子どもたちはいいながらやっています。

どこへ逃げるかという話が課題であったことを覚えていてくれているといいのですが、一所懸命このようなことをやってくれます。

もう一つのグループは、地形図はあるのですが、渡されたのは表で、そこには、渋谷駅では、過去、渋谷駅を含む幾つかの地下の建造物で内水氾濫が起きています。水が入ってきてしまっただけで、地下に建造物をつくったからこそ起きる水害というのがあるのだというので、怪我人何人とか、電車が止まったというようなことを表から見ていきます。

内水氾濫、そのまま高校1年生が読めるとは限りません。「これ何だ」といっているうちに、誰かが「ないすいはんらん」とか、先生が「読めない。ないすいはんらんっていうんだよ」という。5秒後には、この子たちと

いうのは「ないすいはんらん」、私は10年前から読めていますという感じだ、これを読んで話をすることになっています。

そのようなサポートを先生がチラッチラッと見せながら、この3部品を組み合わせ、「どちらに逃げたらいいか」、「どういうルートを通ったらいいか」、「なぜか」ということを3人で考えてもらうのに、「①を担当した人たちから1人」、「②をやっていた人たちから1人」、「③をやっていた人たちから1人」、というように席替えをして、3人で新しいグループをつくってもらい、「ここの3人で話をしなさい」ということで、途中で席替えが入る。小学校でやっても、高校でやっても、途中で席替えが入る。最初のところを1時間でやって、休み時間に席替えをするという手もあります。いずれにせよ席替えは入るので、こういう授業をいろいろ、投げ込みで私たちが研修でやってお見せすると、教育長の中には「これいいね、三宅さん、途中で席替えなきゃいけないから、子どもが寝ないよ」といってくださいます。自分で話をしている、席替えもありますので寝ないのです。

やってほしいことは、分断して、少しずつ分かってきた答えを統合して答えを出してもらい。誰も答え知らないし、いろいろな答えがあり得る、いろいろな理由のつけ方がある。それを自分たちで考えて、自分で納得する答えをつくってくださいといひます。

図式的にいうと、この知識構成型ジグソー法というのは本当にカタログみたいな型です。このようにやってくださいというのが大体で、ご推奨する形は決まっています。ただ、型ですから、お好きに変えてくださいということも申しあげます。最初に、今日、解きたい問いというものをクラスでみんなに出して、渋谷で豪雨に遭ったら、どっちに逃げるかということについて、最初に、もう聞いて書いてもらいます。最初の答えを書いておいて、授業の最後でどうなるかを比べたいという教師の魂胆も見え見えですが、それを生徒が自分で見てほしいという、もう一つ段階の高い教師の魂胆もあります。本人に、「最初に書けること書いてね」ということで、「渋谷ね、地形図ね、水害ね」ということで、本人が知っている経験を引き起こしてもらって、今日の授業のために自分が知っていることを考えるベースにしてもらいということ、これだけで一気にやります。

教室を3つに、ピンクと黄色とグリーンの3色に分けます。ある部品、地形図から高低を読み取ることをやる人たち、違う部品、内水氾濫の記録を読む人たち、もう少しさらに違う部品、地形図の上で渋谷川をたどる人たち、と分けます。こういう作業時間は20分そこそこです。

やっているうちに、「渋谷って危ないのですね」とか、「こんなところで内水氾濫に遭いたくないですね」といような話をしている人たちに、「じゃあ、ジグソーいくよ」、ここまでを一応やることで、こんな答えができるかなということを考えてもらいます。「いうことない」という子がいても、それはそれで構わない。その資料を持って、話し合う時に何か自分の答えがあればいいのです。そういうことで、この段階では同じ資料を見て、「こうだね」という話をしているだけですから、そんなに活発な話し合いが起きるわけではありません。でも、何

か1人が違うところを引いていると、「違うんじゃないの」とチェックをしながら話が進んでいく。

これをエキスパート活動、即席エキスパートになってもらう活動と呼んでいて、これが済んだら、1人ずつ集まってもらい、3つの部品を統合的に活用して、「じゃあ、3つそろったから答え出してね」というのがジグソー活動です。

この中で、3人で話し合っているうちに、自分が最初に考えたよりも何だか答えがまともになったという気分になってくださいということです。これも15分か20分くらいです。

この中でいろいろ話し合ってもらい、「どっちに行くか大体決めた」ということで、「はい、決まりました」、ここまでがジグソー活動。真ん中に集まっているのがジグソー活動といっていますが、ジグソー活動を終えたグループがそれぞれ少しずつ考えていることは同じようなことです。使う用語も、渋谷川というのがあって、高低差があって、内水氾濫が嫌でと、みんな同じですが、それを使いながら違う表現をします。その表現をみんなで聞き合う。「あそこの表現うまいね」、「先生がこういうことをいいたいの」といった時に、それを「ああ、いい表現だな」とか聞きながら、みんなが聞き手と話し手と役割交代して、それぞれの理解を進化させて、私にはこういういい方が納得できるかな、こっちのいい方のほうがいいなということを考えてもらって、最後に、では、最初書いてもらった、先程の質問、「どっちに逃げるか」を理由つきでもう一回答えを書いてというところは個人に戻します。

途中でグループ活動は入りますが、このやり方で伸ばしたい、保障したいのは一人ひとりの学びです。グループで答えが出たら、「もういいや」ではないのです。というのは、私たちの社会が求めているのも、一人ひとりが賢くなっていくことにより、難しい問題に対して、よりよい解決法を考えていくためにみんなが同じにならないということがすごく大事なことで、多様性、発展性、持続性というような21世紀スキル、グローバルゼーションのような話を全部ひっくるめると、それぞれみんな自分の答えを持っていることが大事になる。ただ、その自分の答えを、15分、20分でわっとエキスパートになって、わっと統合して、最初の答えと違う答えを出せということですから、相当乱暴な話ですが、答えは変わってきます。

ちなみに、今、何うと渋谷駅に行くという方はどのくらいいいらしいでしょうか。

仕方ない、聞いたことのない駅だけど明治神宮駅に行くかという方はどのくらいいいらしいですか。

というような形で、ここで理由を書いていただくと、先程1分考えてくださいとお話した時とは違う考え方が先生方の中に出てきているかもしれません。

これが知識構成型ジグソー法で、「ふーん、社会だと、こんなふうに見えるの」と、「何となくたまにやると教室が元気になるかもね」というタイプの授業なのですが、つくっていただいている先生たちと、これをご支援している私たちは結構真面目です。このやり方でやったほうが、内水氾濫という言葉覚えていなければならないかどう

か分からないですが、6カ月後に、「渋谷のようなところの建物で、地下に大きな建物をつくって、あそこに水が入って、危ないって、あれ何ていった」ということを聞くと、内水氾濫。次の週には書けます。

「これ試験に出すよ」というと、おそらく、試験までは覚えていてくれます。6カ月後、1年後、社会人になった時にはそんな言葉あったかなと思います。

定着率はこのやり方のほうが上がります。理由は単純で、本人が自分で10回いっているからです。自分でやったほうが覚えるというだけの話なのですが、こちらのほうがそういう意味では穴埋め問題、選択問題には強くなります。

さらにおもしろいのは記述が好きになるのです。自分の答えというものを書くということです。しかも先生が自分がどういう文章で書くのかということを知りたがっていると一度思えば彼らは書くということが非常にあります。記述型の問題のほうが自分の考えが書けるので、こういう試験のほうが好きという生徒たちが学校のレベルに関わらず埼玉県では出てきています。

実際、授業の中では、こんなことが起きます。

これがジグソー活動になってくると、「答えはどっちに行くかというような話だね」、「川があって、こっちが低いって、ああ、このような意味だったの」とか、「結構、差があるのね。でも、何となく、渋谷区って全体に低いよね」というような話をしたり、「でも、ここに池があるから気になる」などということをいいながら、このあたりで、「答えってこういうようなことを先生は求めているんじゃないの」という会話も出てきます。自分たちはそれに対してどうするかという話をしながら、「こんなんじゃない、違うんじゃない、でも、分からない、だから、もう一回いって」というようなやりとりをしながら話をしていく。

このように言葉で自分たちで話をしていき、思いついていいなくなったらいって、途中でやめ、誰も続けてくれなければ自分で続ける。途中でやめたら誰か続けてくれて、ああ、うまくいったということで、それを今度自分のものにする。こういうことが大事なのです。

この授業の中で、グループ分けにどのような苦労があるか。リーダーを決め、みんなが話すようにするにはどうすればよいかという質問には、その必要はありません。

むしろ自分たちで話して、自分で自分の考えを話していったほうがいいので、話し合いというのは子どもたちは本気になればできるんだと思ってください。問いが通じていれば子どもたちは話します。簡単にいうと余計な手出しはしないでくださいということです。そういう形で、先生たちに、子どもたちを信じてくれというメッセージを渡していきます。

ただ、信じるためには問いが了解できないと、そもそも話し合いになりません。この3つを合わせたら答えが出るかなと、その学年に合わせて、課題によって、これ考えてみたことがないけど、合わせて、少し新しく考え直してみるかというレベルの難易度のものが出てこない話し合ってくれないというところはあります。

そう考えると、教科書に書いてあることは本当に大変雑多で、いろいろなことが書いてあります。このように

削ぎ落として、ここだけは押さえてほしいというポイントをつかませるのは先生方の教材づくりの力です。

だから、この教材をみんなでつくって公開授業をやろうということで、何人かの埼玉県の社会の先生たちがネット越しに相談を始めました。

教材づくりに時間がかかって大変ですという感想が必ず出てきます。大変でも、いつかは授業の時間がきますから、そこでデッドライン、ここで授業をやしましょうと。あとは生徒を信じて、そのうちにジグソーの中で、「先生の期待は神宮だろうけど、電車動くかもしれないから渋谷行きたいよね」というような話をしながら、子どもたちは最終的に話をしていきます。

この時は、12グループあり、先生が最後にクロストークということで「どこ行く?」「なぜ?」と聞いたら、「高いし、安全そうだから」というので明治神宮を選んでくれたグループが7グループ、「やっぱり渋谷にしておきます」というグループが5グループ出ました。

先生としては、そこで「いい話し合いを聞いたような気がするんだけど、少しな、今日は正解半分か」と。実はこの形で私たちは8割の正解を狙っています。

学校種に関わらず、教科によらず、かなり乱暴なことをいいますが、8割は正解が出るという問いと、ジグソーのエキスパート授業にしましょうということのでつくりますので、これは少し低いのです。次の授業は普通に講義型を行ったというようなことがありました。

ただ、こういうやり方を、繰り返しやっていきますと、この結果どうなったかは後でお話します。

何が起きるかといいますと、一番大きな変化は子どもたちが話すようになる。記録を取ってみますと、全員が必ずどこかで話をしているのが普通です。うちの生徒は3分の1は絶対にしゃべりませんという先生もいらっしゃるのですが、問いと資料がうまくできていれば、必ずどこかでしゃべります。教員経験十何年という先生に、この授業をやっていたら、全部の生徒がどのくらいしゃべっているかというデータをお見せするような機会があると、先生方が最初に見に行くのが、「〇〇君、どんな話をしているのかしら」なのです。「ねえねえ、何かしゃべってる」「こんなことをいっているよ」などと、記録の上でご覧になったりすることがありますので、これはベテラン度によらないのだと思います。

ただ、その先生の期待に応じて、全ての子どもたちがどこかでしゃべる。一言しかいわない子がいますが、その一言がそのグループの最後のクロストークの時の発表の運命を決めるというようなこともあります。

自分の言葉で、何が分かっていて、何が分かっていないかということを繰り返し表現していくことになるので、だんだん分かっていないことのほうが気になって、ここはどうなのだろうというような話をするようになってきます。

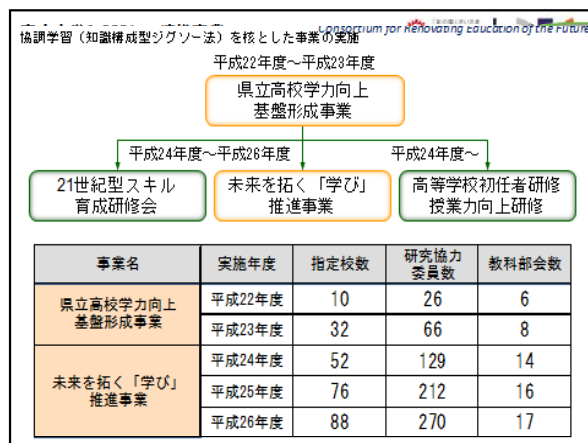
質問というのは分かってこないとできないのです。ノーベル賞を取って、講演会とか増えていいのですが、聞きに行こうかなと思って、2時間話を聞いても、そこで「ご質問ありますか」といわれて「はい」と手を挙げるのは大体プロです。分かっていないと、質問はできないので、そういう意味では、先生が何か教えて、「うん、

今日はみんなよく分かってくれてね、では、次に知りたいことは」というのは、もともと人間の本性から考えて無理です。それよりは彼らが何かいい加減だけれども、全員何となく分かっているという状態にしておいたほうが、子どもたちから次の問いというのは出てきます。

先生は、生徒が何が分かっていて、何が分かっていなくて、どうやって自分たちなりに分かっていくのかということ、簡単にいうと、ごく自然に話をしながら、「本当かよ」なんていいながら、答えを出していくという様子を目の当たりにしますと、このやり方で全員がある種の答えを見つけていくのだったら、こういうのもたまには悪くないかもしれないという「においをかいだら風邪ひきました」とおっしゃった先生がいますが、この形の授業を自分のレパートリーにしてくださる先生も少しずつですが、増えていきつつあります。

もう一つ大きいのは、学びは本当に多様です。みんなが同じように考えて、同じようにしゃべっているということは見たことがありません。クロストークをやっている、先程の話ですと、「渋谷ですけど」「明治神宮駅ですけれども」といっている人たちは、いうことは同じようなことだと思うらしくて「前のグループと同じですけど」といって発表を始めるのですが、ちゃんと聞いてみると違うことをいっているのです。同じようなことを理解しているつもりになっているけど、一人ひとり違う。一人ひとりの分かり方は多様。この多様さというのは先生方の予想を超えます。

この子がまさかこの問題にこのように答えとは思わなかったということが起きていきます。子どもの分かり方、本人自体も変わっていきますし、先生の教え方というのが変わっていきます。



これが先程の埼玉県が最初に主体的な学びを全校に入りたいということで行った時の5年目の報告で使ったスライドの一つです。知識構成型ジグソー法という共通の型が提供されたことで、先生たちがどうやって子どもたちから、自分の考えを引き出すかということについて話がしやすくなった。「この問い大丈夫かな、この資料、無理でしょう」というようなことを、理科の授業に対して体育の先生から「うちのあの子がこれ読めますか?」というようなことをいわれて、先生が資料を変えるとかいうようなことが起きるようになってくる。教員がより深く授業を考えるようになってきています。

教科の壁が低くなって、教科や年齢の壁を超えた授業

研究が始まって、学校の枠を超えた授業研究というものも始まるようになり、学校を超えて、「どこかの学校に集まろうよ」と、若い先生たちが教科部会を始められて、「これ、おもしろいです」といわれて、退官前のお年寄りの先生が歯ざしりなさったということがあります。「僕たちもやっていたのだけど、声をかけたのに誰も来なかった」というようなことが若い先生中心に起きたりして、閉じた授業から開かれた授業へ、学校が世界や外部機関とのつながりを求め始めている。特に専門教育で、工業などの授業を受けていた生徒たちが地元の企業の社長たちが来た時の話に対する食いつき方というのは、こういう導入があった場合と、そうでない場合と変わっていく。

あるいは、生徒たちが記述式の答えを、工業高校でも農業高校でもみんなが書いてくれる頻度が増してくる。就職指導の先生方が「前は当てずっぽうで、あの会社」というようなことをやっていたのが、「この問題にここまで書くのだったら、これを持って行って、あの会社の社長を少し説得してこよう」というようなことができるようになったという意味では、就職活動の指導もやりやすくなったというお言葉も聞かせていただきました。

数的に、実は、埼玉県は最初、特別研修授業として10校から始めさせていただきました。埼玉県には52校の公立の高等学校があります。実は3年前から初任研に入れていただき、年間25回の初任研のうちの7回半ほどで、この形の授業実践をつくっていただいています。そういう意味ではほとんどの学校で誰かがやっているという状態になりました。

これですと、先生ごとでは年1回ということも起きますが、いろいろな形で、いろいろな先生方がやっていると、生徒のほうから見てみると、何となく1ヶ月か2ヶ月に一度はいろいろな教科で、このような授業をやるという先生が増えてきてというような状態になりつつあります。

埼玉県としては、今、この形で、高等学校に入れてこられたものを義務教育のレベルに落とそうとしています。これと一緒に5年前から始めたのは、実は大変小さな市町で小学校4校、中学校2校。そのうちの小学校2校と中学校1校は耐震工事をすると文部科学省がいつてくるのですが、何年か先には、生徒がいなくなるということを経営者は分かっているの、それらを統合せざるを得ないというようなところ。ただ、そういうところにいらっしゃる非常に意識の高い、ビジョンある教育長の方たちがネットワークを持っておられたということがあり、そのネットワークの中に入れていただきました。そういうところから始めて、そういう4つの小学校と2つの中学校で、先生方も集まりやすいので、そこに行って研修をさせていただき、今では小学校から高等学校まで、ほぼ全ての教科でどこかでこの授業をやっている先生がいるというような形になってきました。

この先生方は、本当にまだメールのやりとりくらいのレベルで、大分県の理科の先生と広島県の山の中の学校の先生と、和歌山県の海辺のほうの学校の理科の先生とがネットワークの上で、「この分子の動きの話だけどさ」という、中学校についての教材づくりということを、「い

ろいろこのようなものをつくっているんだけど、どうだろう、これ本当に大丈夫ですか」というようなことをやっています。そこに私たちがコメントをさせていただいて授業づくりの支援をしているという形で、これは埼玉県で全部の高等学校にばっと広がったというほど組織的な動きではないのですが、じわじわと周りの市町でまず火がついて、県の教育委員会が動き出している。埼玉はやはり大きいので、差もついておりますが、小さいところになりますと、そんなに差がシビアではないところもあり、「隣の中学でやっているなら、うちでもやってよ」という感じで声をかけていただいて高等学校に入ることが増えてきています。

今は全国で、本当に小さな動き、こういうことをやりながら何ができるのかを確かめているというようなところではあります。

どんな授業ができるのかというのは、先程は地歴だったので、何でもできますというのも変なのですが、例えば国語ですと、「大造じいさんとガン」など、小学校5・6年生には本当に読み甲斐のあるようなものを、じっくりとという先生方もいらっしゃいます。これは、ある程度のレベルというか年季の入った先生でいらしたので、「先生、こういうのもできる」といってやって見せていただいたのが、宮沢賢治です。5年生くらいで出てくるのですが、小学校の先生の中で比較的好き嫌いははっきりしている教材で、それを、この先生のところが「なめとこ山の熊」だったと思います。それに「よだかの星」という作品と、国語の先生しか通じないかもしれませんが、もう一つ「虔十公園林」。「よだか」と「なめとこ」は聞いたことがあっても「虔十公園林」というものがあって、宮沢賢治の中では少しマイナーな作品です。少し知的にゆっくりな虔十という主人公がいて、木を植えるのが好きだったので、親に「苗を買ってきてくれ、植えるから」と頼んで、地道に植えているうちにトラブルを起こして、病気になって死んでしまうのです。死後、立派に林がなって、小さい時にそこで過ごしていた人が戻ってきて、ああ、こんな立派な林になったんだね、というような話です。

この3つを、先ほどのように黄色と緑と赤に分けて、先生が「読書会をやしましょう。これ読んで」といって、「この宮沢賢治を今日、みんな読んでもらうけど、すごく思い入れの強い人で、みんなに、読んだら、こうなんだなって分かってほしい、伝えたい思いというのがにじみ出るような人なんだよ。何を伝えたいのかというのを、まず1つの作品を読んで話してみて、ほかの作品も読んでどうなのかなというのを比べてみましょう。ついでにいっておくけど、この人、ちょっとものの書き方が変なの。何か今までの人と違うなと思うところがあったら、線でも引いて、こんなところこうだね、特徴があるねというのを見つけたら、それもみんなの後から話そうね」と。そして分けて、国語の先生で心配している先生がいらっしゃるかもしれません。かなり長さが違うので、どう振り分けるかというのは微妙なところはありますが、分けます。それを3つ集めると、集まってきて、「どんな話だった」、「変だった」。「変だよ、主人公途中で死んじゃう」。これ、いけないのですね、小学校5年生く

らいだと、死んだ後もまだ話が続くというのは余りないのかもしれない。

これでジグソーの最後には、「この人は、もしかしたら命がものすごく大事だったのかもしれない。生きている時の格好はみすばらしくても、一所懸命生きた人というのが後の世界に何か影響を及ぼす。そのくらい命は大事という話で、死ぬとか死なないだけではなくて、本当に命というのは大事だということをいいたかったんじゃないの」というようなことを軽く5年生がしゃべる。

色使いが強いとか、句点がどうのとかというようなことを子どもたちが話をしながら、こういう授業をやってもらって、本当にベテランの先生でしたが、1回これをやってみて、子どもたちが宮沢賢治の作品について話していることとしては、自分が10年やってきた中でおそらくこの授業が一番、子どもたちの読みが深かったと思うという感想を持ってくださり、周りの先生たちが「うん」という感じで、同じ学校の中で動いてくださったということもありました。

雲はどうしてできるのかということを断熱膨張、飽和水蒸気量、気圧の上昇、あるいは凝結核などという言葉を使って、ある学校の先生が授業で行うと、他の学校でも、本校は、ではこういう説明にしたいということで少しずつ変えて、次の学校で行い、また次の学校でも行うというようなことをやっているうちに、今これが私たちの中では比較的使いやすいので典型例になっているのですが、ペットボトルを濡らしておいて、線香の煙を入れて、フタを閉めて、ピストンの力で引いたり押したりする。引く時によく見ていると、この中が曇るのです。これをビデオに撮ったものを見せて、相手がもう現場の先生方であろうと、高校の先生方であろうと、教育長たちの集まりだろうと、管理職の集まりだろうと、時間をいただける時に、この例をよく使って、この3つの話を分担して、雲は科学的にいうとどういうものなのかというのを考えてみるという体験をしていただく。私の話を30分、1時間聞くよりは、これを1回やってみるほうがよく分かるといわれるので、今日のこの人数でそれをやろうかと思ったのですが、今日は講演という形にさせていただきました。

こういうことをやってみると本当におもしろいと思うのですが、特に管理職の先生方、指導主事の先生方で楽にやっていただいたところで、断熱膨張という言葉は久しぶりだなという方はどのぐらいいらっしゃいますかという、何となく手を挙げてくださる方がいて、そこで思い切って「断熱膨張というのは私の時代には習わなかった」という先生はどのぐらいいらっしゃいますかという、手を挙げてくださる先生が3分の1くらいいらっしゃるということがあるのです。おそらくこれは歴史的に、今の私の世代から今ここにいらっしゃる皆さんの世代よりずっと、断熱膨張は中学2年生の理科くらいのところでやっていると思いますが、そのくらい、教室の中でやってきたことというのは、忘れているのです。聞いて、その時には分かっていたかと思いますが。

気体が同じ体積のまま広がったら気温が下がるという話なので、誰だって「なぜ」と思いますし、そこで漢字が4文字だったら、覚えていられる時間というのは少な

いです。私たちは小中高で何を教えてきているのかという話しにつながると思います。

もっと問題なのは水蒸気の話で、今の理系の大学生に、「水蒸気って何ですか」、「水という物体が気体になっている状態」。「では、水から水蒸気になる、液体から気体になる、気化する時の温度ってどのぐらいですか」というと、「100度」という人は大変多いです。高校生か大学1年生だったら、ほとんどそういつてくれるのではないかと思います。小学生でもそういつてくれます。

それで、コップに水を入れてここに3日間置いておくとどうなるかという、水は減ります。減った水はどうなったのかと聞けば、水蒸気になって逃げていったと答えます。「100度はどうした?」と聞くと、「あれ?」と。そういう話になる教育を日本はしています。

何かものをいいたくて仕方がない理科の先生がいると思うのですが、「ああ、そうだよな」と思っている文系の先生というのも十分いる可能性があると思います。

液体が気体になって、液体である時の水を「水」という。気体になった時の水を「水蒸気」という。これは分子の動きによります。「氷をやってみよう」。カチ。「お水をやってみよう」、ふわんと。「では、みんな水蒸気をやってみよう」というと、わっと教室を飛び回る、そういう授業もありますが、でもその中で、わっとするのは100度なのです。実際は100度でなくても、気化していきます。このことが実は本当は分かっていると、雲の答えは出ないはずなのです。中学生がここでつくる答えは、ストーリーとしてはどこかが抜けたストーリーです。でも、それをこの時期には教えておきましょうというのが今の教科書のつくり方です。

気化の話をきちんとやるのは高等学校の理系進学コースの3年生です。ここまできけば冷媒だろうが何だろうが話が分かりますから、その先にいけばスターリングエンジンの話とか、ヒートポンプの話というのがあります。このヒートポンプというのは「まだ世界に知られていないけれども、大変省エネに役立つもので、これが世界を救うかもしれないエコ技術だよ」と、今、開発に関わった87歳の方が、自分が死ぬ前に何とか高校生に教えたいといっています。そういうところを理解していくには気化の理解はどうしても必要です。

しかし、それをいつ、どこでやるのかということは教科書の中に埋め込まれていて、下手をすると、先生方も子どもたちも親も気がつかないまま、「水は何度で蒸発しますか」、「100度です」という理解で進んでいっている。これをもし穴埋めで求めていたとしたら、それは日本の知識というのは学校を統一し、均一でコモディティ化すると経済学者にいわれても無理はないというような話になっていくかと思います。

研修をお引き受けする時、贅沢にできる時には年4回、全日に近い形で伺わせていただき、教育委員会とやらせていただいています。5月から6月に、今日のような話を手短かにして体験をしていただき、よくやっているのは、理系の先生には社会ネタ、社会系、文系の先生には先程の雲のような話で、両方やっておいて、「一体これは何でしょう、先生、授業で使えますか」という話を両者組み合わせてしていただく。そこもジグソーです。

「ちょっとこんなのできるかな」という話をし、持って帰っていただいて、「ちょっとやってみたらどうでした」という話を伺って、「これはどう評価したらいいですかね」と。お試し実践情報交換会ということをやっていて、「では、秋の初めぐらいに、実際に校内、公開でやってみてください」と。

本物でやりたい実践のための問いとエキスパート資料と時間配分をどのようにしていき、最終的にどうジグソーを組ませて、問いへの答えを最後に書いてもらい、次の問いをどう引き出すかという教材をつくっていただきます。

それをやるには、大体集まってつくっていただいたほうがよいので、8月くらいに、同じ効果、似た校種の先生方にやっていただいて、今、やったものを今度は違う教科、別の校種の先生方と検討し直していただくことをやります。ここで強調しているのは、「この刻みでできるというのは分かりました。それに子どもはどうついてくるでしょうね」ということをお互いに自分の学校の子どもの知らない人に想像してもらい、実際に教材を練っていきましょうというようなことをやっていただく。そのためには、教育委員会が研修として受講者を集めていただくことが大変大切になってくるのですが、そういう形で、学校の間での情報交換会ということをや、10月、11月あたりに公開授業を行い、うまくいけば、みんなで相互で見に行き、「どうなったか見ましょうね」「生徒さんたちがどうなったかということについての情報交換をやっていきましょうね」という形で進めていくということをやっています。

さて、こういう授業の成果はどうやって評価するかという話です。

本当に生きている授業をつくりたい、みんなが話ができる授業をつくりたい。コミュニケーション能力を育てるために、できるだけ話をする回数を増やしたいというだけでなく、学力をつけてほしい。しかも「断熱膨張」「内水氾濫」とは何かと聞くと、自分の言葉で説明、答えてくれることを求めていますので、そこを評価していきたいと思っています。

この成り立ちから考えると、この中で使っている対話の能力、協調問題解決能力、コミュニケーション能力、判断力、表現力というのは、その生徒が生まれた時から持っている力です。だから、こういう形の授業をやった時にできるわけです。自分の考えを話してといったら話せる。だから、初めて表現力という“爪”を、「あれ、持ってる」というような感じで見て、少し磨いてみたら結構いい“爪”、だから隠しておこうと思うかどうかというのは諺をどう解釈するかによるとは思いますが、そういうものは起きているけれども、それは自然に本人が持っている形で起きていて、それをよりよくしていけるかどうかは、授業次第です。例えば表現を変えていくというところがコミュニケーションなどでは大事です。自分がいいたいことがあるということはベースです。自分がいいたいことの表現を変えているかどうかということを見たいということになって、それを評価していきたいという話になるのですが、評価とは何でしょうか。

今、世界の中で、こういう協調型の学習、いろいろな

いい方を日本でもするのですが、私は協調学習といういい方をしています。世界の中で、こういうことをやろうという学会をつくった時の発起人の一人として、これをカテゴリーネームとしてコラボラティブ・ラーニングと呼ぶということに一応したので、これを協調学習と訳させていただきます。

日本の中で、アクティブ・ラーニングという名前のついた仮説実験授業とか、学びの共同体とか、いろいろなものがありますが、ほとんどが中で子どもたちが自分で考えを変えていって、理解を深めていきますから、そういう意味で協調学習と呼んでいいと思います。知識構成型ジグソー法というのは、それにとっかかるための1つの型のようなものです。

テストですが、最初と最後に何か書いてもらっています。特に最後に書いているものは正解かどうかというのは先生は気になります。最後に書いてもらっているというのがテストですとか、評価の方法です。それを私たちは観察窓と呼びます。今、私たちといっているのは学習科学会という世界で1,200人くらいの学会ですが、その了解事項です。

観察をする。何の観察をするのか。子どもが考えていること、頭の中で何を考えているのかということ。頭の中のファイリング・キャビネットに何が入っているかどうかということを知りたいのではなくて、授業中何を考えているかということを知りたいので、本当に知りたいのは認知過程です。普通の試験では、観察窓というのは窓一個なので、向こうの方が大きいので全体が見えるとは限らない。だから、窓から見えてきたもので、「あ、この人こういうことを考えている」と、点数を評価する。書いてくれたことを評価する。これは主観です。推測です。この推測をするのが評価をするということなのです。客観的なものさしの上に、順番をつけていくことではなくて、これは **criteria based** で人を選びたい時、評定をする時には必要になってきますが、本人が何をどう学んだのか、一人ひとりが最初に書けたことより後のほうが伸びたのか、本当に学んでくれているのか、ということの評価する時には、評定したいわけではないので、窓をうまく開けることが大事です。

私たちが知りたい生徒の頭の中で起こっている学習過程というものをできるだけ引き出して、自分たちの解釈を少しでもまともにしていきましょう。これが評価だと考えたいと思っています。

ですから、見えない認知過程を目を凝らして少しでもよく見えるようにするには、理由も聞いてみるとか、どうしてこれを答えと思うかを問うというだけではなくて、1回ではなくて2回聞いてみる。具体的には最初と最後に聞いてみるという形になります。

最近、多少、山っ気を出して、対話を全部集めて書き起こして見てみるということもやっていますが、これは相当労力がかかり、子どもが、フワフワといったら、それを IC レコーダーにとっておいて、どこかへクラウドで飛ばしたら、ICT が頑張って、全部2時間くらいのうちにテキスト化してくれるといいなと思っています。

ちょっとしたクイズです。先ほどのテストです。NHK 放送センター付近で集中豪雨、渋谷駅と明治神宮駅のど

ちらに逃げますか。生徒 A は明治神宮駅といました。正解です。生徒 B は何か明治神宮駅のほうが近いけど、やっぱり渋谷駅といました。10点配点です。問題ですが、先生方は何点をつけますか。これしかなければ、10点つけるより仕方がないだろうというのが今のテストです。

もう一つ聞いてみましょう。明治神宮駅ですといった生徒 A に「どうして」と聞くと、「昨日テレビで似たような話をしていた、アナウンサーがそうっていたから」。「あ、10点やってしまったな」と思う先生もいるかもしれません。でも、みんながこれならこれはこれで仕方がないのですが、B のほうを聞いてみると、やっぱり渋谷駅。「どうして」といったら、「高低差だけ考えたら神宮かもしれないし、渋谷駅付近って昔、渋谷川があって、今は暗渠になっている川があったし、内水氾濫とかはあの辺は多いし。渋谷区って全体に低いところでしょ。多少高低差はあっても、渋谷駅のほうが備蓄とかも多くて、それにもし電車が動き出したら家まで帰れるかもしれないでしょう」と立板に水でしゃべられたら、これは0点だったのが何点くらいになりますでしょうか。結構笑いごとではないことがあって、せめて大学で入試をやるのであれば、これをやれば、くらいの話ではあると私たちは思っています。

山中事務次官も同じことを考えておられまして、大学の入試を変えなさいと、お会いするとよくいわれます。

それで、私たちは、今、少なくとも先生方に、最初と最後に2回聞く、少し変ですが、最初に聞いてしまうということをやってください、最後にも聞いてくださいというやり方をして、子どもたちが書くものを全員について見てみて、一人ひとりを見てみて、少なくとも一人ひとりの学びが起きているかどうかを確認する。

最初から正解が出ていて、話し合ってくれていたけれども、何か今日盛り上がらないなと思ったら、全員最初からほとんど正解を書いている、最後の正解でしょうというだけだったという時は、1時間損しましたねという話になるので、そういう授業にしないようにしようという話です。

いろいろなことを書いてくれます。生徒 C は、渋谷駅のほうは低いと思うけれど、最初から、水の流れに逆らって歩くのはきついと書いているのです。これは確かにそうです。水が流れてくるのだったら高いところに行けばいいというのは、よく考えたほうがいい。ひざ下25cmまで水がきたら歩けません。それでひっくり返って、途中であと一駅というところくらいであれば、流れに沿って行って、何とかしたほうがいいかもしれないです。

こういうものをざっと全体を調べるために、先生方に、先生が期待する答えというのはどんな要素が入っているほしいですか、先生が考えられるベストアンサーを書いておいてくださいということをお願いしていますので、それと比較するということをしますと、先生の答えの中には、エキスパート A の中に入っていた土地の高低差、B に入っていた河川の存在、C に入っていた水害の発生件数などということを書いてほしいというようなことがあります。

では、どのくらいしゃべっているかということ抜き

出していくと、授業前には、高低差のことは半分以上の子はしゃべるのです。高いほうへ行ったほうがいいのかというようなことはみんな最初から書いている。だけど、C の内水氾濫の話であるとか、B の渋谷川の話というのは、事後に確実に伸びていくというようなことも分かります。

こういうことを組み合わせていくことによって、私たちは何ができるのか。一つ大きなことは、実はこのレベルにしても、高校生1人が、地形図を読んでいく中で、1時間の授業の中でどれだけ賢くなっていくのかということでは彼らの学びが進んでいく様子というのを見たことがないのです。私たちが知っているのは、どこかで定期試験をやっている時の点数だけなので、それから考えると、もう少しきめが細かい。

今、国際学習科学会というものができて、10年くらいですが、なぜ、私たちがこんなことを学会組織として、みんなで一所懸命やっているのか。そのコアの部分というか、私も大分ベテランのほうなので、そのベテラン・コアから見ると一番大事なところは実践学の部分で、このようにすると、子どもたちの学びはもっとよくなるのではないかと考えて、実際にアクション・リサーチをかけてみて、できるだけ詳しくこの変化を見て、「あ、この仕掛けがどうも効いたみたい」、「では、それをもうちょっと補強してみたら、次にもう少し質が上がるのだろうか」と繰り返す。ほとんど工学だと思います。

私が東京大学の大学院でお世話になった教育学者で、東洋（あずまひろし）先生がいっぱいいます。この東洋先生が教育工学会というものをつくられてまして、その時の教育工学会学会誌の巻頭言に、実践をしていくことで、自分たちの考えを確かめていくという意味で教育というのは工学なのだということを書かれて、最近それを発見して、ショックでもあったのですが、それを学んだはずの人間が60歳を越して、何となく自分がやっているのを見て、「あ、こういうことが大事なのだ。よく考えてみたら、大学院生の時に先生に教わったことだった」と思いました。ありそうな話ですが、やはりもう少し教育学というのは実践学であるべきだと思っています。

そうすると、やはり一番 **Practitioner** として一番強いのは実践の科学をつくっていくところにいらっしゃるの現場の先生方ではないかと私は思っています。

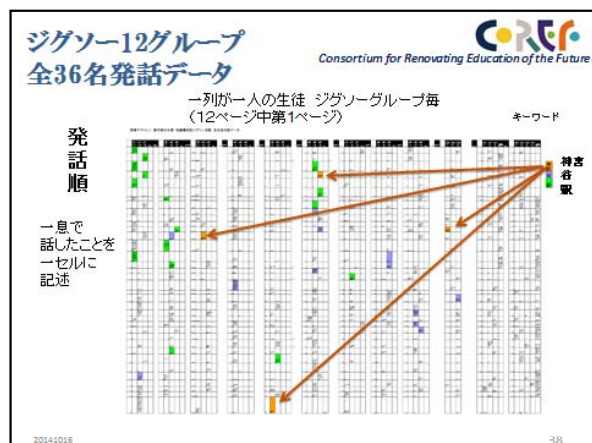
その方たちに、私たちができると協力をしていく中で、アクション・リサーチのアクションをどうかけたらいいかということの質を上げながら、本当に質が上がるかどうかということを調べていきたい。ここで止まっているわけにいかないものですから、全員の途中の発話が見られたら、観察窓がたくさんになって、一人ひとりの認知過程が推測しやすくなるのではないかと、こういうデータを分析できるようになって初めて、私たちは人はいかに学ぶのかということについて、もう少しまじな仮説が持てて、もう少しまじな授業がみんなで作っていきけるようになるのではないかと。

その時に、子どもたちというのは本当に、先生がそこまで頑張ってくれるのだから、自分たちも考えるよということになっていくものと思っています。

発話データを全員分記録をして、テキスト化するのに、

今は、人手をかけています。1教室内の全対話データというものを対象に分析する。この辺は自然言語処理的なことが非常に単純なことでできますので、それをいろいろ試してみるといったことを一部の先生方とやっています。

例えばキーワードの生起状況というものに色をつける、というような話です。こんなデータが出てきます。



これは先ほどの水害データの12チームが全部並んで、1枚に入れたかったので、ぎゅうぎゅうに詰めたら読めなくなりました。これでジグソー活動全グループの15分間分くらいの1分間分です。これを読めるようにするとポスターぐらいの大きさのものが15枚という分量になるのですが、先生方がどのくらいの速さでこれを読んでくださるか。15分のビデオを見直そうと思うと、それは15分見て、何が起きていたのかということをつかまなければいけないのですが、こちらのほうが良いという先生が多いのです。ばたばた行ったり来たりできる。あの子がここで何をしているとかといって、一緒にわっとやりながらできるということ、実は神宮ということをどこで話をしていたかというのは黄土色のところで話しています。こういうものを次々に、先生は言葉をどのくらいしゃべっているとか、今日は何という単語が一番人気だったか等というのは自然言語処理的に、最近のビッグデータの処理のようなものは速いですが、こういうものでやっていくことができます。

こうやってみると、いろいろなことが見えてきて、36名中12グループ全部やってみると、知識の定着度、事後の解答の中の32名で、少なくとも事後の解答のほうが質的に向上しているといえます。最終的に渋谷を選んでも、こういう理由で神宮かもしれないけれども渋谷だということ、渋谷である事由は、高低差をちゃんと考えに入れても、ということが書いてある時には、そういうことを考えているとして、質向上と見えています。解答の根拠にして、32名が教師の期待する解答に独自の判断を加えて解答をしています。

そして、異なる解答の比較検討というのが全グループで起きています。渋谷だったらこう、明治神宮だったらこう、「先生が期待する答えがこっちだからこうだね、はい、おしまい」というグループはなく、両方を検討するということが全グループで起きています。

全資料のキーワード、これは3分の1の資料しか自分では読まない、自分では説明しないというところを心配す

る先生があるのですが、組み合わせて答えを出すというところで話し合いますから、こういうことをやってみると、全資料のキーワードをめぐる意味の確認、再表現などということが全グループで生起するだけではなく、この例の時には、36人全てが3つのキーワードを必ず最低1回はしゃべっているというデータが出てきます。

追加情報を求める発話というのが、「でも内水氾濫って、渋谷駅で氾濫を起こしてから、その後どういう工事をしたのよ」というような話を出してきます。「そういう追加情報があれば答えも変わるのにねと、あとで調べるか」というようなものが9グループから出てくる。

これもおもしろいのですが、「自分も結構やるね」というタイプの発言が時々出てきます。

教員のほうに見られる成果としては、学習観や評価観というのがやはり変わっていきます。こっちで評価したい、ビデオより見やすい、ビデオとは見えるところが違うというのが大方の見方かとも思いますが、「理解のプロセスがどういうふうに授業の中で、この子たちが理解していたかというそのプロセスがはっきり見えてくるので、ここで評価してあげたい」というのが先ほどの水害をやった先生です。

「理解のプロセスが、どういうふうに授業の中でこの子たちが理解していったかというそのプロセスがはっきりと見えてくるので、ここで評価してあげた方が、この子たちにとっての一番正当な評価になるのじゃないのかな」

ここでとって指されたところは「先生が出させたい答えは神宮と分かっているのですけどね」といいながら、その後で、自分たちがごちゃごちゃいっていたところです。ここで評価をしてあげたい。この子たちにとって一番正当な評価になるのではないのかなという話が、初見の、このデータを見た時の、1回目の30分のインタビューの中で出てきています。

これは私たちにとっては大変勇気づけられるデータです。

実は調査票をいただいている方から、「このようなものは先生たちには見る時間ありません」という当然のご懸念はいただいていたのですが、15分、20分、これを見ることによって、先生方が次の授業を、「じゃあ、こうしよう」という、いわゆる「指導と評価」みたいな話です。評価をすることで次の授業をつくっていくという話に自然に入っていくという例も見えています。

「ぱっと見て、授業の振り返りにもなると思うのです。ここはもう少し補うほうがいいな」とか、「これそのものを生徒に返したい」とか、そういうような話も出てきています。

今年、去年、埼玉でやらせていただいて、学校と実践者の数を増やして、もっとたくさんのデータを取って、これをやっています。一種のお試し研究で、feasibility study なのですけれども、どこまでこういうことができるか。こういうデータを返した時に、どんな先生たちがどういうふうに使ってくださるか。それが実際、先生方の次の授業づくりにもつながるのかというようなことを考えながら、やらせていただいています。

私たちが待っているのは21世紀の多様なネットワーク

社会だと思います。一人ひとり自分の考えを大事にして、生徒も、先生も、私たちも、まだ誰も解けない問題に、いろいろな人のいろいろなアイデアや考え方を統合して自分なりに答えを出している。これが The answer であることはめったにないので、それが出てしまったら人生終わりになってしまう。むしろ、一人ひとりが、「でも、私はこう思うんだよ、あなたどう」「ちょっと聞いてよ」といった時に、お互いに聞き合える程度の信頼される知性を持った話し合える仲間になって、学び合って、よりよい社会を育てていきたいと思っています。

長い時間、本当にありがとうございました。

平方全体集会運営委員長

三宅先生、どうもありがとうございました。

21世紀型のスキルをどう身につけるかというお話、いかがでしたでしょうか。少なくとも、先生の冒頭のこのレジュメのパワーポイントの中に教室で間違っていることが行われているのではないかという強烈な話があったと思いますけれども、皆さんはどうでしょうか。要するにレクチャーでは知識、いろいろなことは身につかないということです。それから、ずっとお話の中でシェアの大切さ。自分の考え方、考えだけではどうしても行き詰まってしまうので、シェアをしなければいけない。協調型学習ということになるのだと思いますが、いかがでしたでしょうか。ほとんど時間がなくなってまいりましたが、どうしてもこれだけは聞いておきたいという方がいらっしゃいましたら、ご質問をお受けしたいと思います。

質問

大変、エキサイティングな講演だったと思うのですが、これは国際的にも広く行われている方法なのですか。それとも、まだ日本の中でだけの取り組みなのですか。

三宅先生

国際的に、この形のものをやっているところは、かなりあります。ただ、ここまで指導要領とテキストがきっちとあるというのは、中央集権型になっている組織というか、行政系があって初めて、広がっていくところがあるので、日本だけかもしれません。

ただ、カナダとかフィンランドとか香港にもありますが、このように最初から問いと資料を教科書頼りにしないで、大学研究所付属のチャータースクールで1学年20何人というようなところで、先生と子どもがじっくり話し合って、その先生が「そうか、みんな、じゃあ、水がどうやって蒸発するかということについて知りたいのか」といって、子どもたちが「え、自分たち、そんな話したかな」ということをやっているうちに、何となく乗せられて、こういう授業をやっているような、非常にうまくやっている学校というのがあって、そこは目を見張

るような成果をあげています。

平方全体集会運営委員長

世界の多くは単なる正解式ではないですね。先生がずっとおっしゃったような学び、あるいは探求のプロセスを大切にしていく。日本の大学入試改革も一定基準というのはやめるといっているわけです。1点刻みをやめるということは、先程、先生がいろいろな生徒の事例を出されましたが、あそこまで見て、それを評価することだと思いますが、大学はできますか。

三宅先生

全国にある大学の中で一番変わりにくいところに所属しているのではないかという自覚はございまして、大学ではなかなか変わらないかと思っています。

ただ、企業の方ですとか、産学の連携の中でこういうお話をしますと、例えばある学校が高校生についてこういう話し合いをしていますよという、先程の対話データのようなものを受験生が必要になったら特定できるというような形で、この生徒が欲しいのだけど、というようなところまでは行くかも知れません。そのようなデータで入試ができるのであれば、入試の形は変わるでしょう。あるいは企業の中での採用の仕方というのは変わるだろうといっているトップの方たちは結構います。

平方全体集会運営委員長

しかし、全く一つの形の入試というのは、なかなか難しいということですね。多様性がこれだけ進んでいるわけですから、大学入試も、一つの学校であっても、いろいろな入試の形態をとって、いろいろな学生を集めていくということが重要なのでしょうか。いろいろお話をしていると、時間がもうありませんで、話も尽きませんけれど、もう一度、三宅先生に拍手をお願いをしたいと思っています。

本当にありがとうございました。



私学経営部会

1 研究目標 変革を迫られているグローバル化時代における私学経営の展望

社会や実業界におけるグローバル化の加速度的な進展を受けて、今世紀に入ってからでは中教審答申等において「国際(international)化」に代わり、「グローバル(global)化」が用いられるようになった。そして今、文部科学省は「グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成」を図るため、大学教育や中等教育、さらには初等教育におけるグローバル化を急ピッチで推進しようとしている。

もとより私立学校は英語教育や国際理解、国際交流、海外留学などの分野で常に先進的に取り組み、一定の社会的評価を得ている。しかし、公立学校での同様の動きを、国を挙げて進めている現在、私立学校の経営にも従来の取組みや枠組みを超えた、グローバル化に対応する21世紀型教育への変革が求められてきているといえる。

そこで本部会では、まず講演を通じて、国の教育政策の動向や今日の私学経営についての課題を把握した上で、実業界やI B教育校の経営者を交えたパネル・ディスカッションによって、変革を迫られているグローバル化時代における私学経営について、その展望を探っていきたい。

2 会 場 グランドプリンスホテル新高輪国際館パミール 3階 白雲・慶雲

3 日 程

時間 月日	9	15	10	11	12	15	13	15	14	15	16	17
10月17日	受 付	開 会 式	講 演 I	講 演 II	講 演 III	昼 食	パネル・ ディスカッション				閉 会 式	

4 内 容

部会開会式 運営委員長挨拶 順天中学高等学校 校長 長 塚 篤 夫

講 演 I 演 題 「教育制度改革の動向とグローバル教育」
講 師 文 部 科 学 事 務 次 官 山 中 伸 一

講 演 II 演 題 「教育改革と私立学校」
講 師 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長 實 吉 幹 夫

講 演 III 演 題 「今日の私学経営における課題と展望」
講 師 八雲学園中学高等学校 理事長・校長 近 藤 彰 郎

パネル・ディスカッション

テーマ 「グローバル化時代に求められる人材育成と学校経営
～経営者の視点からグローバル社会と私学の未来を探る～」

パネリスト 日 本 G E 株 式 会 社 代表取締役 安 淵 聖 司
G E キ ャ ピ タ ル 社長兼CEO

パネリスト 東京インターナショナルスクール 代 表 坪谷ニューエル郁子
日 本 国 際 教 育 セ ン タ ー 代表取締役

パネリスト 麴町学園女子中学高等学校 理事長・校長 相 川 忠 洋

コーディネーター 聖パウロ学園高等学校 理事長・校長 高 橋 博

部会閉会式

運営委員長総括

順天中学高等学校 校長 長 塚 篤 夫

専門委員長挨拶

東京女子学園中学高等学校 理事長・校長 實 吉 幹 夫

5 運営委員・指導員（順不同）

委員長	長 塚 篤 夫	（順天中学高等学校 校長）
委員	高 橋 博	（聖パウロ学園高等学校 理事長・校長）
	渡 辺 眞 人	（共立女子中学高等学校 校長）
	増 田 幹 子	（学校法人駒場学園 副理事長）
	大 場 一 人	（立正大学附属立正中学高等学校 教頭）
	住 川 明 子	（跡見学園中学高等学校 副校長）
	武 井 秀 行	（かえつ有明中学高等学校 教諭）

6 専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

委員長	實 吉 幹 夫	（東京女子学園中学高等学校 理事長・校長）
副委員長	鈴 木 康 之	（水戸女子高等学校 理事長・校長）
委員	長 塚 篤 夫	（順天中学高等学校 校長）
	木 内 秀 樹	（東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長）
	梅 村 光 久	（学校法人梅村学園 松阪法人本部長）
	新 田 光之助	（筑陽学園中学高等学校 理事長・高校長）
客員研究員	野 原 明	（文化学園大学杉並中学高等学校 特別顧問・名誉校長）
	真 城 義 麿	（大谷中学高等学校 前校長）



講演 I

「教育制度改革の動向とグローバル教育」

文部科学事務次官 山中伸一

講師紹介（吉田 晋・一般財団法人日本私学教育研究所理事長）



山中伸一先生のご紹介をさせていただきますが、1954年に山梨県でお生まれになり、東京大学法学部卒業後、1977年に文部省に入省。そしてその後、我々には直接関わりますが、高等教育局私学部長を歴任なさいました。その後、内閣官房等に行かれて、官房長、初等中等教育局長、そして文部科学審議官を経まして、2013年の7月から現職に就かれています。

我々私学のことはよくご理解いただいている文部科学省のお役人の一人でございますので、今日も私学にとって有意義なお話をしていただけると期待しております。

昨日は開会式で祝辞を述べさせていただきました。

今日は私学経営部会ですが、まずグローバル化ということで、今回、主題にしていますので、このあたりの動き、今、日本の社会全体、その中で教育というものが抱えている問題といえますか、何にチャレンジしなければならないのかということをもっと話した上で、今、文部科学省がどういう方向で考えているのかということをお伝えしたいと思います。

そのために、1つ背景となるところについて触れて、その中で日本という国がどういう強みを今、持っているのかということ、今後どのような対応をしようとしているのかということについて触れていきたいと思っています。

まず一番大きいところですが、人口がやはりこれだけ大きく減っていくということが、日本の社会の大きい問題だと思います。少子高齢化という問題、これも大変大きいですが、それ以上に、やはり明治維新以降、ずっと近代化国家になって、戦争等もありましたが、基本的には人口が伸びている、そういう中でいろいろ不景気、好景気ありましたが、これがもう今、この頂点、13,000万人を過ぎて、もう一方的に減っていくということが予想されています。明治維新以降、大きい変革の時代を迎えている、そういう中で教育をどうするかということを考えなければなりません。



2060年で大体9,000万人を切るということですが、40年経てばもう2060年になってしまいますが、今の子どもたち、中学生、高校生がまず定年を迎えるところですから、働いている間はずっとこういう社会の中で生きなければならないということも、我々は考えて、では、そういう子供にどういう教育をしなければならないのかを考えなければならないと思います。

どのくらい人口が減るのだということですが、2040年までの都道府県別で見ますと、人口減少が小さいのは滋賀、鳥取、佐賀、福井です。ここは人口が減るのは少ない。しかし、私は山梨の出身ですが、今、人口80万人でこれが60万人に減るということで、20%減ります。全国、全体では14~15%ですが、ただ人口が少ないところは減るのは少ないのですが、影響は大きい。大阪とか、兵庫、埼玉、千葉、東京はもう120万~80万人くらいで、大きく減ります。

少子高齢化ですから、減るということは、結局、子供の数が減ることになっています。大都市でも、人口集中など、その辺もどうするのかというのが課題ですが、いずれにしても大都市もどんどん減っていく。しかも子供の数、若い人の数が減る。あと20年少しでこういう時代になってくる。全国でまんべんなく人口が減少するのだということです。

そういう中で、グローバル社会といわれながら、日本人は、もう皆さんご存知と思いますが、どんどん留学生が減っています。6年前に8万人くらいいたのが、今6万人を切るということで、大学生の留学生の数が減っている。特によくいわれるのがアメリカへの留学生で、これは内数ですが、その中でもアメリカは15年くらい前は、5万人弱いて、アメリカの中で日本人留学生はトップで

した。ところが今はもう2万人を切っています。1位は中国で23万人くらいいます。インドが10万人くらい、韓国は7万人の留学生がアメリカの大学で学んでいます。日本人は2万人を切っている、そういう状況になっております。人口が減るという中で、日本人は海外に余り留学していないという結果です。

それから、日本人は、どうも、これは高校生に限らないと思うのですが、自信がないということがあります。ある国際会議に行ったときにデンマークの人から、私が文部科学省だということで「ちょっとちょっと」と呼ばれて「山中さん、大変だ」と。「何が日本は問題か」というと、どうも若い人たちが自信を持っていない」と。その人は日本の大学で名誉博士号をもらって、その大学に行って話をしたりして、学生と話をし、そういう中で感じたようですけれども、どうも日本の学生は自信を持っていない。これは本当に非常に危機だと言っていました。彼は、エジプトで生まれて、高校を卒業してデンマークに移民をして、皿洗いから初めて、今ホテルチェーンを持って、世界で最も有名な皿洗いというように言われているようですが、ただ、そういう人たちから、日本は非常に素晴らしいと言われます。日本人の努力する姿は素晴らしい、そういう感覚は非常に持っているのですが、同じように、日本の若者に接して話したりしていると、自信がない、夢がない、希望がない、ここのところが一番、日本の社会にとって問題ではないかと言っておりました。

調査結果の中でも、自分が価値ある人間だ、とかいうことは低いですし、逆にだめな人間だ、というのは8割で、アメリカは5割、中国は4割、韓国は3割です。余り自信を持ちすぎるといえるのはよくないと思いますが、いずれにしても自信を持たない。

これは生徒だけではなく、教員についてのOECDの調査に初めて今年参加したのですが、その中で日本の学校の先生も余り自信がないという方が多く、社会全体が自信がないというところが、先生に、あるいはそれが子供に影響しているのかという気がいたします。

こういう中ではありますが、人口が日本社会は今後どんどん減っていきます。

トヨタ自動車の販売台数で見ますと、20年前は国内と国外の販売というのは半々くらいでした。車はトヨタだと日本でたくさん売れているという感じがしますが、それでも今は2割であって、海外で8割が売られているという状況です。これが単にトヨタ、製造業だけではなくて、恐らく農業あるいは漁業でもそうですし、食料品、いろいろなもの、あるいはサービス業でも日本国内は3割〜4割と人口が減ってきて、市場が小さくなりますので、どうしても今の経営規模なり、雇用者というのは確保しようということになると、外に出ていかないとなくなってしまう。潰れてしまうということになるので、どうしても外に出て行かざるを得ない。

もう一つは、そういう中で、20年前はヨーロッパとかアメリカ、この辺のところが輸出先の大所だったのですが、今や韓国、香港、中国といったあたり、加えてアセアンとかアフリカ、ここでもう逆転して、ヨーロッパや

アメリカが小さくなって、アジアあるいは新興国といわれているところへの輸出がどんどん増えているという状況になってきています。

今までヨーロッパやアメリカをモデルにしてきましたから、そういうところに行って、そこで売れているものとかそういうものを勉強して学んで、それをより改良しながらどんどんやってきたということですが、今後、こういう新興国ですので何に関心があるかということ、日本の技術を入れたい、入れてもらいたいとかいうこととともに、では、どうやってそういう人を育てたのだ、という日本の、あるいはどうやればそういう人を育てられるのか、という日本の教育モデルのようなものをぜひ学びたい、そういう意欲が非常に強く感じられます。

安倍総理、歴代総理の中で外国に行く回数、国数も多いということになっています。一つの特徴として、昔も今も経済ミッションという、いろいろ経済界の人が行くのですが、それにあわせて、大学の先生とか、人材養成、あるいは学校の先生方、日本の教育、それがどうすれば、今の日本の経済成長を支えたのか、そのことに対する関心が非常に高まっています。

ですから、総理の経済ミッションには必ず誰か、大学の先生などが同行します。モザンビークに行くというのであれば、では、秋田大学の先生が来て、鉱物のいろいろ、レアメタルがどうだこうだという話があるのですが、その人がついていくという時代になってきています。まさに、こういう新興国を相手にすると、日本を一つのモデルにして何かやりたい、もっと成長したいという国、こういう国と、今後、私たちはかなり付き合いが深くなっていくということで変わってきています。

では、そういう中で、人口が減る、内向きである、自信がないということですが、それだけだと元気がどうなるかということで、まずやはり日本の学校教育というものは、これはOECDの、皆さんよくご存じだと思いますが、中学校を終えた時点、15歳、高校1年のときに試験を受けて、知識を実際に社会でどうやって活用できるのかという力について行った試験です。OECD34カ国中の順位で、上に上海がいたりとか香港があったりとかというのは、60数カ国参加しているので、少し小さなところを除いて、OECDに参加している、いわゆる先進国といわれるところの中で、日本が一番最近の2012年の調査で、数学では2位ですが、読解力、あるいは科学的リテラシーでは1位ということになっております。

なお、フィンランドが非常に有名になりましたけれども、フィンランドよりも日本は得点が高いということで、そういう力を持っているというのが日本の子供であり、それがどうして育ったかというのは、やはり日本の先生方、学校の教育力というものがあったということがこの結果になっているということだと思います。

日本の先生も自信を持っていいということがいえるかと思えます。

また、生徒だけではなく、大人についても、OECDはPISA調査が非常に世界で注目されているということに気をよくして、では、15から65歳までの成人についての学力についても調査をやってみようということで、PIAACと呼ばれていますが、初めてやって、24カ国、

参加している国が少ないのですが、その中で日本は大人も読解力、数的能力、あるいはコンピュータ活用能力、受けた人の中では1位という結果です。大人もいろいろ日本は暗記力がいいけれども、やっているうちにすぐ忘れるとか言われていましたが、そうでもない。やはり日本は大人になっても、そういう学力というのは高い。

ただ学力の調査だけでなく、収入がどうなるのかとか、どういう職業に就いているのかとか相関を見て、学力が高いほど収入が上がる、そういう結果も出てきています。日本を今まで支えてきた大人の力というものもある。これから来る子供たちの学力というものも、世界の中ではトップである。こういう大人の力を使って子供の力をどうやって伸ばして、今度、社会につなげていくのかというのがやはり教育の一番大きな役割であると思います。

では、その子供たちの、中学生、高校生の力をどういう形で伸ばしていけばいいのか。一つモデルとして、OECD 東北スクールというものがあります。OECD の事務総長が、2011年、被災直後に被災地に行き、そこで日本の復興のために何か OECD としてやりたいということで、OECD が検討をしまして、何をやるかといったら、教育だということになりました。では、どういう教育で支援をするのかということで、東北の被災地の子供たちを集めて、何かそこで子供たちに学ぶ場、そういう機会を与えようというプロジェクトを立ち上げました。これは2年半前のことです。

2012年の3月に OECD 東北スクールを開きまして、東北、福島、宮城、岩手、3県から100人ぐらいの中高生が参加し、そこで彼らに、OECD の事務総長がミッション、これが君たちの使命だということでお題を与えました。それは2年後の今年2014年に OECD の本部のあるパリで、ぜひ君たちが自分たちで考えて、東北や日本の復興した姿、これを世界に OECD というチャンネルを使ってアピールしてくれというお題が与えられたのが、この東北スクールの始まりです。以来、春休みに第1回、今年の春休みに第5回をやって、実際にこのイベントを今年の8月30、31日の2日間やりました。

パリのシャン・ド・マルス公園を使って、イベントをやれということで、一体何をやるのかということを生徒100人ぐらいが東北各地から集まって検討しました。自分にとって、ここでイベントをやるという意味は何なのか、イベントで一体何を世界に伝えたいのか、あるいは日本人ではなく、世界の人ですから、どうやってそれを伝えるのか、まず言葉はフランス語がいいのか英語がいいのか、その辺から始まって、2年半議論して、このイベントを自分たちでやりました。

風船をあげました。一番高いところで26m。なぜこんなものを上げたかということ、どうやって震災、津波というものを世界の人に伝えるか。津波といってもパリの人には全く分からないので、この高さまで、26メートルまで波が来たというのを見れば分かる、それで風船をあげたのです。これも生徒たちが自分で考えてやったところなんです。

いろいろなブースがあり、何をやるのかということも自分たちで考えました。メインステージがあるのですが、そこで一体、どういうことをやって、東北の復興した姿

を伝えるのか、それも全部生徒が考えて、自分たちでやりました。大体、飛行機の運賃から何からで9,000万円くらいのお金がかかりました。そのうち、生徒が自分たちで7,000万円強のお金を寄付金で集めた。つまり OECD のお題はただ単にイベントをやれというだけではなくて、そこにかかる経費、これも自分たちで集めろということです。大体、こういうのは教育関係、学校などが、生徒のほうで打診したから必ず金集めするなんてよくないということになりがちではありますが、これは OECD のお題がそうであったし、文部科学省もこれを支援するというのでやっていましたから、反発はあったと思うのですが、反対はなくやりました。生徒はいろいろな企業に行き、関心を持ってくれる企業のところに行って、自分たちでプレゼンテーションをして、10分とか15分という時間を与えられて、そこで何をやるのかということと言う。これは簡単なのですが、ただそれだけではなくて、では100万円出してもらおうとか、200万出してもらおうという、その金を出してもらうために、では、どう言えば金を出してもらえるのかという、大人をどうやって巻き込むか、社会をどうやって巻き込むかというあたりが実践的な教育であったところなんです。

結果、2日間やりまして、15万人ぐらいの入場というイベントになりました。ここで、実は、「ビフォー・アフター」という家を改築するテレビ番組のように、参加する前と後で非常に生徒は大きく変わっています。無気力というところから、非常に行動的になる。やる前はどうしても被災地で自分たちは支援を受ける側、親を見ても、周りの大人を見ても、被災して、避難して、そこにいる。あるいは友だちはもう他の県に行って自分に残っている、そういう中で、どうしても取り残されたような、支援を受ける、そういう無気力感があったのですが、これに参加することによって、むしろ復興をどうやってアピールするのか、復興の担い手として、自分がその復興のために何ができるのか。復興の担い手としての責任感、社会で生きていくという、その被災地の中で生きていくという、そういう責任感、行動、そちらの方に心の在り方が、考え方が大きく転換したということがあったわけです。

それを、ごく普通の中学生、高校生が2年間このプログラムをやっている中で大きく変わったということを目の当たりにしたところなんです。

教育というのは、やり方によって非常に大きく、この時代の子供たちを変えられる、変わる可能性を与えられるのだということを実感した次第です。

昨日、三宅先生のお話があったのですが、三宅先生の創造的教育法というのは受け身の教育をどうやって生徒が主体的に自分で考えるようにするのかという教育法です。

たまたま先週、三宅先生のジグソー法の授業をやっている埼玉県のと所沢北高校を見に行きました。世界史の授業で、1907年ちょうど日露戦争が終わって第一次大戦になるその中間のところなんです。1907年に日本とロシアの協約ができた、その時代について、その前後を授業でやっていて、そこでジグソー法の授業を間に挟んでいました。絵が描いてあり、1つは東洋人の子供が地図の前に指し

て、こちらは西洋人の大人がその地図を指して何か言っているという風刺画があって、小さいのは、これは誰。大きい西洋人は誰だ。何をそこでしゃべっているのか、そういうことを生徒に議論させるという授業でした。何の地図を前にやっているかという、マンチュリアと書いてありました。満州です。中国の地図を前にしている。これはオーストリアの風刺画で、正解というのは、日本人と、それからアメリカ人で、満州について、日本がどんでんやろうとしていることに対して、大きいアメリカ人が、「おい、だめだ、だめだ」というふうに言っている、そういうことが正解なのですが、子供の答えは2つに分かれていて、1つはアメリカと日本というのと、もう一つは、子供の日本とロシアで、ロシアと日本が、日露戦争で日本は勝ったけれども、ロシアと日本で、「おまえちょっと2人で満州をうまく分けようぜ」と話しているんだ、そういう答え、この2つに分かれておりました。

子供が議論しているのを見ていると、少し正解を、ヒントを言いたくなるのですが、そこをぐっとこらえて、子供たちに議論させて、そういう答えを出していく。日本とアメリカでやっているというのが正解なのですが、日本とロシアとやったところで、これもある意味、そういう言葉が出てくれば正解みたいなものですから、非常に生徒たちに考えさせる。

あと、感心したのは、これをやるときに必ずグループに分かれていろいろ議論するものですから、生徒が寝ないのです。その高校は65分授業ですが、生徒は寝ている暇がない。何か話し合おうというときを動かしてグループにならなければならないし、終わったらまた動かす。65分の間中、寝ている生徒は一人もいないということです。

大体、私、子供の授業参観とか、いろいろな学校の視察とかに行くのですが、大体、高校になると、40人ぐらいの教室だと、必ず3人は寝ています。多いところは10人くらい寝ていたり、授業はほとんど聞いていないで、他のことをやったり、そういうことが高等学校になってくるとかなり多いのですが、この授業をやると、もう寝る暇はない。自分は何しろ授業に参加していくという形で、授業方法、これから子供たちに考えさせるというタイプの授業としてはいいと思いました。

ただ、その後で校長先生や他の先生と話しました。先生方からは、子供たちはやると記憶によく残るし、これは非常に良いのだけれども、その先生は1学期に去年は1回、そういうジグソー法の授業を入れていった。3学期ありますから1年に3回やったのですが、今年は1学期に2回ずつやっている。そうすると、そういう議論させたりする授業をやりますと、一般の授業が潰れます。どうやって全部やるかとか、知識を詰め込むというか記憶させるという授業はやはりどうしても減ってしまうのです。また、本当に受験のときに役立つのだろうか。こういう教育は本当に良いし、素晴らしいし、生徒にとっても先生にとっても良いと思うのだけれども、そういう授業と大学入試、中堅校だったので、やはりどうしても合格者を増やせといわれる。非常に良いのだけれども、入試との間でうまくいくのだろうか。こういう子供をもつ

と入試で合格させてくれる、そういう入試になってくれないと、良いのだけれどもやりにくいということが一つあります。そして、やはり先生に聞くと、普通の授業は1、2時間準備をすればできるけれども、この授業をやるには10時間準備したということで、その辺の先生の時間をどうやって確保するかというあたりが課題であろうなということを感じました。しかしどうやればそういう授業ができるようになるか、もっと展開できるようになるかということを文部科学省としても考えていかなければならないと思います。

あと、今後の世の中という意味では、ノーベル賞が先日発表され、物理学賞を赤崎先生など3名の日本人が受賞されました。これで、21世紀に入って、自然科学の分野で日本は、アメリカは突出して55個ありますけれども、11個ということで世界の2位になりました。南部先生と中村先生は米国籍なので、この中に入っていないのですが、日本関係では13個ということで、日本の自然科学、独創性、そういう意味では非常にすぐれている、そういうものを支えている教育、小中高の教育、そして、大学の教育、あるいは研究については、いろいろ批判はありますけれども、その成果はこれだけ上げているのだということについて、やはり自信を持っていいるのではないかと思います。

それから、昨年9月7日、IOC 総会で、ジャック・ロゲ会長が「TOKYO」といって決まりました。これで、「よし、やるぞ」と。文部科学省、政府全体も、では2020年にオリンピックがあるのだということで、世界中の人が日本に注目します。昨日、舩添知事も言っておられましたけれども、今、日本は、いろいろな調査で、魅力ある都市のうち4番目です。今、トップはロンドン、ニューヨーク、パリと来て東京と、こう来ているのですけれども、これはロンドンオリンピックの前はずっとニューヨークがトップだったのです。それがロンドンオリンピックでこうなり、できれば東京がトップになる。東京は世界で一番行きたいという、魅力があるという都市になる。では東京だけかということ、結局、それは総合力だと思っております。ただ単に東京だけではなくて、日本全体が世界の人にとって、日本に行ってみたいな、日本に行けば非常に楽しい、おもしろい、いい国だ、そういう国にしていくということです。2020年までの間にいろいろなことをしたい。科学技術もあります、スポーツもあります、文化もあります。やはりその基本になるのは教育だと思います。日本の教育というものがすばらしいといって、PISA でフィンランドがトップになったときに、フィンランドに世界中のいろいろな方が行ったのですけれども、そういう感じで、日本に世界中の教育者が日本の教育を知りたいといって来てもらいたいと思います。

恐らく問題になるのは、フィンランドであれば、北欧は割と英語ができるのです。スウェーデンに行っても、フィンランドに行っても、デンマークに行っても。ただ、日本に外国の人が来て、授業を見て、それは日本語でやっているのはいいのですけれども、日本の教育をぜひ見たいといって、来ている外国の人に説明するという力がまず先生にあるのだろうか。

できれば、やはり英語で説明できる。生徒も聞かれたら、大体もう共通語は英語になっていますので、英語でやれば、フランス人でもどこでも通じるので、生徒もそれに答えられる。こういう力をつけていくということが必要になってくるのではないかと。今後、新興国が伸びていく中で、やはり日本の教育に学びたい、そういう国、あるいは人も増えてまいりますので、そういう意味でも、2020年を目指して、日本の教育を世界に発信していく。特に新興国はこれが欲しいと言っています。あるいは先進国でも、やはり日本の教育というのは、特に PISA など上位にあるものですから、どうしてそうなっているのかということを知りたいという人たちも多くなっています。是非、そういう意味で、発信していけば、先生方の学校に多くの国からどんどん人が来るという、それで注目されるということも目的ではないかと思っております。

今後、グローバル化ということが大きな課題です。明治維新以降、今までの教育というのは西洋、あるいはアメリカ、そういう先進国の知識を一生懸命吸収する、それを自分のところでこなして、それでうまく何かつくっていくという、輸入して、加工して、輸出するということがありました。知識も同じことで、どうやって周りや、外国のすばらしい知識を吸収するのかという能力を一生懸命開発してきたというのが日本の教育で、これに成功してきたのだと思います。

ただ、これからの時代を考えると、それだけではやはり足りなくなってきた、開発途上国といわれている国がどんどんこれから伸びてきます。そういう国が求めているのは、ただ単に日本人にアメリカの学者がこう言っているとか、ヨーロッパではこういうことを言っているということを別に聞きに来ているわけではなくて、日本で何をやっているのかという、そこを聞きたい。あるいは日本の知恵、そういうものを知りたい。日本の伝統文化、日本の特質を日本人が理解をして、そういうものを発信できる、そういう力というのがこれからの日本人に求められている。

そういう力というのは急に、社会に出てからつくかといううまくつかないの、一番柔軟な中学生頃から、身体も大きくなって、考え方も非常に変わる、ここの一番重要なときに力をつける。先生方の学校に来る前と卒業するときで大きく生徒たちは変わっていく、その教育というものを大きく変えるということがこれからの日本の社会にとって非常に重要だと思います。

公立は、いずれにしても変わりにくい体質を持っています。時代の要請に応えながら、建学の精神、そういう芯はしっかりずっと持って、継続して、時代の変化に合わせて変わっていける、それはまさに私立学校の一番いいところであり、特質であると思います。私立学校の皆さん方に期待申し上げたいと思います。

そういう意味で、文部科学省としても、しっかり、まず自分を知ること、国語の力、考えを発信するといっても、日本語で考えられることが重要ですので、日本の伝統文化、歴史をしっかり知るのだという教育を充実したい。その上で、今、英語をやったり、あるいはスーパーグローバルハイスクールというもののやり出したりしてい

ます。そうは言っても、一生懸命、総合力と言って、やったところで、入試が変わってくれなければどうしようもないということで、今、中教審で入試も変えようと、大学に対して考えてくださいと、これを今年中には方向性をまとめたいと思っています。

あるいは国際バカロレアというものをやりたいと思います。そういう意味で変わるというのは、留学生です。留学に行く前と行った後の高校生は大きく変わる。いろいろな体験をさせて、日本を客観的に見るという機会を子供に、生徒に増やそうということで留学生を2020年までに倍増させようという取り組みをしております。

そのために文部科学省でも留学に行くことはかっこいいのだというキャンペーンをやったり、それから、これは企業の人に寄付してもらって、今年は大学生300人を送り込みましたけれども、来年は1,000人、その中には高校生も含めていきたいと思います。これは企業から寄付金をもらっています。第1回は日本を代表するような企業から寄付金をもらっています。

学生に聞くと、留学している間にいい就職をする機会が失われる、それが嫌だという理由もあるものですから、それからお金がない、その辺の2つを解決する。お金と、それから行けば就職に有利だと。なぜかといえば、こういう一流企業がお金を出してまで留学する機会を与えようとしているので、そういうことでしております。

このお金も今は90億円ですが、できれば200億円集めて1万人をこのお金で海外に留学させるということをやりたいと思います。

あとは、国もここは苦しくて、余り増えていなくて恐縮でございます。先ほどの企業も含めると増えており、それぞれ都道府県で高校生の留学を増やそうということも増えていると思います。あるいはスーパーグローバルハイスクール、これは今、50校指定しましたが、来年150校増やすことを目指してやっています。バカロレアの予算も経費について増やしているところでございます。

いずれにしても、これから、2020年にいろいろな若者が自分たちの可能性を伸ばせる、そういうチャンスを与える、そういう国にしていきたいと思っています。

2020年までに、幼児教育の部分の向上、それから一人ひとりの子供が伸ばせる、いろいろな大学入試の改革、ここが大きいポイントだと思います。教育方法、それから、高等学校について、特に私立の所得の低い子供さんに対する経済的援助、これを充実する、あるいは大学への無利子奨学金を増やす、あるいは給付制の奨学金を増やすといった対応、そしてグローバル人材。それで国際化に備えるとともに経済的負担を減らすことによって、労働力人口、やはり教育にお金がかかるということは子供を持ってない一番の理由ですから、教育費の負担を減らすということで、労働力人口にも歯止めがかかる、この辺でプラス4、5兆円の投資とすれば、2060年ぐらいには50～60兆円の GDP などが上がってくる。こういうふうには文部科学省は試算いたしまして、ぜひこれからまたそれぞれの議論がありますが、その先の議論として、教育の投資は本当に切実であり、それは効果を上げるのだということを生懸命、世の中にアピールしていきたいと

思っております。先生方のご支援、あるいはもっとこういうことをやってくれというあたり、強い声をお寄せいただくことを心から期待申し上げたいと思います。

こういう形で、文科省としては総合的に日本のこれからの成長のために、あるいは国際社会の中で貢献できるようにするために、教育、人材、これへの投資、そして、その内容の充実、両方を取り組んでいきたいと思っています。

私立学校の先生方のそれぞれの地域でのお取り組みを心から期待申し上げます。

今日はご清聴ありがとうございました。

質問

●参加者

SGH について伺いたいのですが、平成27年度は150校にするということですが、最終的にはどういうところを目指しているのか、何校まで増やすのか、どのように持っていくのかということをお聞きたいと思っています。

●山中文部科学事務次官

昨年、概算要求時は100校とあって、予算ではそれが50校になってしまいました。応募が250校くらいありました。これは英語ということもありますが、英語だけではなくて、それをどうやって使うのか。

海外、外国の組織というのはユネスコとかいろいろありますが、そういうものとの交流とか、あるいは外国の学校、生徒の交流とか、現実的な場面の中で、子供たちの国際的な社会の中で生きていくという自分の問題と世界の問題、これを学ぶ、そういう機会を与えたいということで、その中で英語の能力も実際に使える能力を伸ばしたいということであります。

この数をどうするのだということは2つ考えられます。50なら50でいいではないか。トップというか、モデルをつくれば、それがそのうちだんだん広がっていくという考えがあります。私は、一部の学校がやっている時代ではないと思います。昔、スーパーイングリッシュハイス

クールをやったのですが、これは国際科などがやったのですけれども、そうではなくて、普通科だろうが、工業科に行こうが、商業科に行こうが、もうツールとして英語がないと社会で生きていく上で難しくなってしまうということで、できるだけ、私は予算さえあれば多くの学校にやってもらいたいと思っています。ただ、今年150校を要求していますけれども、これでも「おまえ、いつまで増やすのだ」という声もいろいろ財政的なところありますので、ぜひ皆さんからも「これはぜひ使いたいからもっと増やしてほしい」と声を上げていただくとありがたいと思います。特に私学の皆さん方からそういう切実なご意見が寄せられるということは、非常に我々にとっても追い風になります。それでどのくらい増やせるかということがあります。できれば、50校だと、1県に1つですから、100校で2つ、150で3つ、こんなものですから、それよりももっと増やしたいというのが私の思いであり、全ての学校がそういう活動を一生懸命にやってもらうということができればいいというのが希望です。

謝辞

實吉幹夫・私学経営専門委員長

今日は、朝早い時間からお出ましをいただき、お話を聞かせていただき、ありがとうございました。

鉄の女といわれたサッチャー、それを受けたブレアはイギリスの教育を変えろということで日本をかなりモデルにしたと聞いています。そういう意味では、今日のお話を伺って、私どもは自信をもっと持つべきだと思います。ただ、どういう方向に行けばいいかということを考えていけばいいので、自信だけは持っていようよという励ましをいただいたと思っています。

これからも私学のためにいろいろなお知恵をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

今日はありがとうございました。



講演Ⅱ

「教育改革と私立学校」

東京女子学園中学高等学校 理事長・校長 實 吉 幹 夫



講師紹介（住川明子・跡見学園中学高等学校副校長）

實吉幹夫先生は学習院大学経済学部卒業後、長銀不動産株式会社に勤務され、1985年、東京女子高等学校（現東京女子学園中学高等学校）教諭として奉職されました。2000年に校長、2003年に理事長になられ、現在に至っています。現在、一般財団法人東京私立中学高等学校協会副会長、東京都私立学校審議会委員、公益財団法人東京都私学財団理事、一般財団法人日本私学教育研究所副理事長、日本私立中学高等学校連合会常任理事等の要職も務められ、2006年に東京都功労者表彰を受賞されています。

2009年4月から2010年3月まで、文部科学省学校の第三者評価のガイドラインの策定等に関する調査研究協力者会議委員、2013年8月から12月、同じじめ防止基本方針策定協議会協力者等の会議においても私立学校の立場でご発言いただいています。

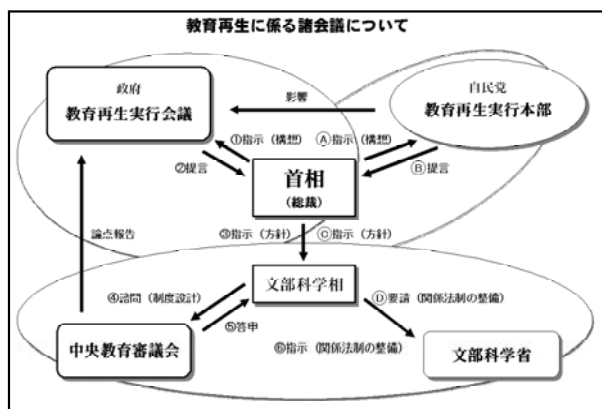
私は、中高連の教育制度改革への対応を検討する部署の責任者として、近年は全国私学教育研究集会では私学経営部会で、あるいは理事長、校長、副校長・教頭先生を対象に毎年6月に実施している私学経営研修会等で、国の改革の現状と私学の対応について報告させていただいております。今回もその責務を負ってここに立っていると理解していますが、昨日の吉田中高連会長、中川当研究所所長の報告内容と重複する部分が多々あるので、明年6月に山形県で実施される私学経営研修会につながる話を中心に進めたいと思います。即ち、私立学校振興助成法が成立して来年は丸40年となることから、その件についてお話ししたいと思いますが、まずは教育再生実行会議がとりまとめた制度改革に係る第5次提言についての話から始めたいと思います。

21世紀のわが国にふさわしい教育ということで、安倍内閣では「教育再生」と言われていますが、吉田中高連会長が指摘されたように、「何だ、教育は生き返らなければ

いけないと言うのか」と私は思うのです。私どもが実際に行ってきたことに対して振り返るのは大切なことですが、どのようにより良いものにしていくのかということが私どもの使命であります。したがって、再生という言葉には、本当は何か良いものがあって、今それが壊れているから本来の良い状態にするという意図があるのでしょうか。ルネサンスという言葉にも違和感はぬぐえません。国が出されるいろいろな提言の中には、教員の資質向上という言葉もありました。資質とは生まれ持っているものですから向上することがあるのでしょうか。質や能力は向上していくでしょうが、資質自体は何も変わるものではないでしょう。

制度改革の提言は、これまでも昭和46年の四六答申—これからの日本の教育のあり方についてしっかり審議がなされた結果、非常にすばらしい内容となった—を受けて、中曽根内閣では3年の時限立法の中で臨教審が開かれて答申を行いました。教育再生実行会議の提言では、今回で第5次と非常に速い速度でさまざまな問題が指摘されてきました。この背景には何かあるのではないかと。創生「日本」という組織があるのは皆さんご存じだと思います。元々は亡くなられた中川昭一先生がその会長を務められて、現在は安倍総理が会長に就いています。この創生「日本」の主張が、教育再生実行会議で吹き出したという感じが私には見て取れるのです。このように速く提言が重ねられていますが、教育においてはもっと慎重にもの考えることがあって然るべきではないでしょうか。政権を批判、否定するというのではなく、自分は、私どもはこう考えると素直にものを申し上げて、その中で互いに議論を深めていきたいと思っています。グローバルとは多様性であり、他を認めるということです。自分だけが正しいという物言いをしないことが、グローバルという言葉の中では大事ではないでしょうか。子どもたちを育てていく時に、むしろ私たち大人がどのような生き方をしているのかが子どもたちには重要でしょう。

第5次提言は「今後の学制等のあり方について」というタイトルで、小中一貫教育校（仮称）の制度化、学制改革を踏まえた教員免許状の見直し、高校早期卒業制度などが挙げられています。高校早期卒業に関しては、いわゆる飛び級を認めて千葉大学に入った子どもが、大学生生活が続かずに中途退学したところ、履歴書の学歴は中卒としか書けず、飛び級の子どものための高校卒業認定という問題が生じました。これも慎重に考える必要があるだろうと考えているところです。



「教育再生に係る諸会議について」の図をお示ししました。私立学校が不利な状況に追い込まれないことを目指して、また私立学校の教育の場から意見が反映されるよう、中央教育審議会、有識者会議等には私学団体の役員が委員として参画しております。これは吉田会長が常に言われる「もの言う私学」、「行動する私学」でありたいということのあらわれとしてご理解いただきたい。

中教審では、初等中等教育の振興に係る、あるいはその教育基準に関する重要事項については、初等中等教育分科会で、また、就学前教育から高等教育まで学校教育全体に係る重要事項については、特別部会を設置して、それぞれ審議が行われています。諸課題の具体的な検討状況並びに今後の予定等をまとめた一覧表は、後ほどお目通しをいただきたいと思います。

中央教育審議会等での初等中等教育関係主要課題の検討状況一覧			
検討部会等	検討事項	【検討状況】	【検討予定】
中央教育審議会	教育再生に関する事項	教育再生に関する事項	教育再生に関する事項
教育再生基本計画部会	教育再生基本計画の策定	教育再生基本計画の策定	教育再生基本計画の策定
高大接続特別部会	高等教育と初等中等教育の接続	高等教育と初等中等教育の接続	高等教育と初等中等教育の接続
初等中等教育分科会	初等中等教育の振興	初等中等教育の振興	初等中等教育の振興
教育課程部会	教育課程の改善	教育課程の改善	教育課程の改善
遠隔教育専門部会	遠隔教育の推進	遠隔教育の推進	遠隔教育の推進
教員養成部会	教員養成の改善	教員養成の改善	教員養成の改善
高等学校教育部会	高等学校教育の振興	高等学校教育の振興	高等学校教育の振興
小・中・一貫教育特別部会	小・中・一貫教育の推進	小・中・一貫教育の推進	小・中・一貫教育の推進
学校安全部会	学校安全の確保	学校安全の確保	学校安全の確保
いじめ防止対策推進部会	いじめ防止対策の推進	いじめ防止対策の推進	いじめ防止対策の推進
高等学校における国際教育の取組に関する検討部会	高等学校における国際教育の取組	高等学校における国際教育の取組	高等学校における国際教育の取組

本題に入りたいと思います。

私立学校振興助成法は、昭和47年の山形県米沢市で当研究所の主催で開かれた理事長・校長研修会で議論されたことが、同法成立のきっかけになっています。この研修会では、講師としてお招きした、当時自民党の文教部会長であった西岡武夫先生から高等学校以下の国庫補助制度創設のために法案の策定に向けて積極的な発言をしていただきました。これを受けて、法制定の機運が全国的に盛り上がったという歴史的経緯があります。今回は、来年度私学経営研修会での本格的な議論に向け、前段階として同法成立の経緯を振り返ってみたいと思います。

わが国の学校教育において私立学校が果たす役割は非常に重要であるというのが、私学人の気持ちであります。国及び地方公共団体が行っている私立学校に対する助成措置も今後はより明確に法に規定していきたい。そこで、私立学校振興助成法の第1条をご覧くださいと3つの目的

が書かれています。最近私学助成の話をする時にこの3つの目的を忘れて議論がなされているように私には思えてなりません。

私立学校振興助成法

(目的)

第1条 この法律は、学校教育における私立学校の果たす重要な役割にかんがみ、国及び地方公共団体が行う私立学校に対する助成の措置について規定することにより、私立学校の教育条件の維持及び向上並びに私立学校に在学する幼児、児童、生徒又は学生に係る修学上の経済的負担の軽減を図るとともに私立学校の経営の健全性を高め、もって私立学校の健全な発達に資することを目的とする。

ここで今一度確認をしておきたいのです。まず「私立学校の経営の健全性を高め」とあります。次に「私立学校の教育条件の維持及び向上」、最後に「修学上の経済的負担の軽減を図る」と書かれています。この三つが第1条に掲げた私立学校振興助成法の目的であります。私どもは三つの目的を意識しながらいろいろなことを考えていきたい。時として、憲法89条に絡めて、私学助成は憲法違反だといったやや乱暴な意見もありましたが、私立学校振興助成法があるがゆえに教育基本法も変わりました。改正教育基本法にはいささか疑問もありますが、私立学校は第8条として位置付けられ、私学振興についてしっかり書き込まれたので、よしとする部分も多々ある。教育基本法で私が気に入らないのは、教育行政に関する第16条「教育は、不当な支配に服することなく、この法律及び他の法律の定めるところにより行われるべきものであり」という部分で、要するに日本の教育は法律に則って行ふのだという書き方になってしまった。元々の教育基本法第10条に書かれていたのは、そういうことではなくて、「教育は、不当な支配に屈することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきものである。」とあるように、むしろ国民の付託を受けて教育を行うことが教育基本法の基本となっていたのです。同法及び他の法律の定めに従って教育を行うということに対し、いささか書き過ぎではないかと不安を覚えているところです。

教育再生実行会議第5次提言を読むと、有識者の方々はそれなりのお考えがあって提言されたのですが、これまでの審議で学校教育法をどのように変えようとしているのか見えてこないのです。学校教育法には小学校、中学校、中等教育学校、高等学校それぞれの目的が記載されていますが、それらをどう読み替えようとしているのか、はっきりと示していただきたいところです。

私立学校振興助成法は、昭和50年7月3日未明に可決成立したという経緯があり、昭和51年4月1日に施行されました。第75回通常国会の会期末、昭和50年6月25日に、当時の自民党文教部会長だった藤波孝生先生、現在厚労大臣を務める塩崎恭久先生のお父様である塩崎潤先生、河野洋平先生、三塚博先生、西岡武夫先生の5名による議員立法で、翌26日の衆議院文教委員会で数時間の審議によって衆議院を通過した。この時、自民党は賛成、野党4党は反対したと聞いています。参議院に送られ、参議院文教委員会においても、7月1日にたった1時間の審議を経

て、自民、民社両党の賛成、社会党の反対で可決されました。公明、共産両党は審議をボイコットしていたために欠席と記録されています。

この法案は、主要法案の審議の合間を縫ってのことでありましたから、法の内容、監督、規制等について多くの問題点を内包したまま成立したという経緯があります。その意味では、もう一度、この40年という節目に、私どもとしては私立学校振興助成法の中の高等学校以下の部分について、もう少し中身を詰めていただく作業が必要ではないか。そんな思いもあって明年6月、山形の私学経営研修会でこのことを取り上げたいと考えています。

ここで同法成立までの背景を見ていきたいと思います。

昭和30年代、いわゆる高度経済成長が始まり、国民の学校教育に対する需要は急速に拡大していきます。昭和49年には、大学は学生数の79%、幼稚園は幼児数の76%、高等学校でさえ生徒数の31%という高い数字を私立学校が担うことになりました。このような状況下で、昭和44年、自民党の文教制度調査会は、私学振興の眼目は教職員の数及び質の充実強化にあるとして、のちの私学助成の基本方針となる「八木試案」と言われる「私学振興に関する基本方針」を決定したのです。

この経緯の中で幾つか問題点として挙げられている内容を整理してみたいと思います。一つは、今日（その当時）における私立学校の実情を見ると、多くの場合は学生数等から、教職員、教育研究用施設設備、教育研究費等について十分でない状況が顕著になりつつありました。このような私立学校の教育研究条件の改善を図り、国立学校との格差を解消しなければ、わが国の教育全体の質的改善は望むことができない。今後の経済、社会の持続的発展も期待し得ないといっても過言ではない状況だったのではないのでしょうか。私立学校は従来、国の援助も求めず、建学の精神を堅持しつつ自らの力で経営を行うことを建前としてきましたが、科学技術の進展に伴って、教育研究の高度化、優秀な教職員の確保等に必要とされる経費がますます高くなり、私立学校の自力だけでは対処できない状況となった。日本私立学校振興・共済事業団が実施している全国の私立学校の財政状況の調査・分析を見ると、授業料、入学金等、生徒の保護者からいただく、いわゆる生徒等納付金に占める人件費の割合は、全国平均で120～130%程度でしょう。健全な財政を維持していくための大事な指標であるこの全国平均の人件費率は、補助金が入ることで初めて65～70%となるのです。もしもこの補助金がなければ、現在の私学経営は厳しくなり、大阪府のように授業料の上限が決められる状況がもしあったとすれば、問題はさらにいろいろなところに派生してくることになるでしょう。

私どもの目標は、国公立の格差解消にあるのですが、当面は国立学校との格差是正を目途にして、とりあえず実現可能な本案を作成した「八木試案」を受けて、昭和45年度の予算で、私立大学には5カ年計画の初年度分が計上されて実現されることになりました。この大学の補助金がついたことは、明治以来の官学偏重の文教政策にくさびを打ち込み、私学中心の文教政策への転換を意図した画期的なものと高く評価していいと理解しています。

そして、補助金の配分機関として、英国における大学

補助金委員会の性格を理想に掲げて、それまでの私立学校振興会を発展的に解消して日本私学振興財団（現在の日本私立学校振興・共済事業団）が設立されたのです。

この5カ年計画による私立大学経常費補助金は年々増加されてきたものの、実質を伴わない非常に少ない補助に終始したために年次計画通りには進捗せず、国立大学との格差是正の中心である私立大学教職員の数及び質の充実強化という前向きの姿勢を私立大学ではとることができなかったと聞いています。

このようなことが法成立までの一つの流れとしてあったとご理解ください。

実際、昭和50年度の私立大学経常費補助金は1,000億円で、私立大学の総経費が推計5,000億円とされたため、2分の1補助に届かず、補助率20%に止まっていました。

一方、大学と同様の状況下にあった高等学校以下の諸学校についても、大学に対する補助金にならい、補助金枠そのものは設定されましたが、地方公共団体の財政状況、あるいは私学への理解度等によって各都道府県の補助はまちまちでありました。これは今も変わりませんが、当時の中高連を含む高等学校以下の私学団体では地方交付税による措置以外に、国の直接補助を要求する声が高まっていったのです。

昭和45年度から開始された私立大学経常費補助金は、当時の文部、大蔵両省の無理解も手伝って、5カ年計画が終わっても目標未達のままでした。昭和48年度から私学に対する助成は国の当然の義務である、このことに法的根拠を与えなければ予算は増えないとの考えが持ち上がってきました。その頃から、塩崎先生、西岡先生らによる私学助成プロジェクトチームが自民党内に設けられ、「私立学校振興助成法」の構想が検討され始めたのです。

この構想自体は誠に理想的でしたが、国の財政支出を規定する法律の制定は極めて困難と予想され、私立大学経常費補助金が毎年度の予算措置において伸びてきているのだから、目標である2分の1補助が完全に実現した暁に法制度を考えるべきとの意見も強かったのです。

しかし高等学校以下にとっては、地方自治の体制の下、直接国からの補助を実現させるためには、どうしても法の制定が必要視されていました。基本的な国と地方自治体の関係、問題点を解決しないまま、その理論的裏付けを十分に構成しないまま私学振興ということで、大学と高等学校以下とを一緒に捉えた私立学校振興助成法の構想とならざるを得なかったというのが実情で、この時の大きな問題点が、現在も内在していると言えるでしょう。

このころ、山形の九里茂三先生、あるいは元会長の堀越克明先生、私どもの先達が非常に苦勞されて、中高連で考えていたこの法案は、本来、私立小・中・高等学校振興法として制定したいという思いがあったということです。（下記資料参照）

私立小・中・高等学校振興法(仮称)制定要綱(案)

昭和48年4月28日

日本私立中学高等学校連合会

真理を尊び、民族の教養を高め、誠実にして情熱に富む人格の育成を理想とする日本の私立学校は、幾多偉大な先駆者の精神を受け継いで、今も全国的に多彩な教育活動を展開

し、あるいは、学校教育の先駆者的役割を果たし、あるいは国の施策を補完して今日に至った。特に、戦後の教育爆発の中で、国民教育の普及と拡大に寄与した実績は既に衆目の認めるところである。

そもそも私立学校は、建学の精神に則って、自主独立の経営を行い、自由にして闊達な教育活動を実践し、もってその特性を発揮することが必要である。然るに、戦後30年に及び教育制度の推移と、特に最近における激しい国民経済の変動は、私立学校の経営を根底から揺さぶり、ここに私学の教育は甚だしい困難に直面するに至った。特に戦後の学制改革以来、公立学校における教育経費負担の構造が根底から変更されたにも拘わらず、私立小・中・高等学校は全くその埒外に置かれてきた。即ち、公立学校の授業料が、「地方自治体の営造物使用料の一種」として低額に据え置かれ、教職員給与費や教育運営の諸経費が、地方公共団体の総抱えとなったにも拘わらず、私立小・中・高等学校は、その全経費を授業料によって賄うほかになく、従って、父母の負担額において公私立間に異常な格差を生ずる結果となったのである。また、最近における諸物価の増大と人件費の高騰は、私学における優れた教員の確保や、教育環境の整備による教育水準の向上を著しく阻害し、尋常な手段をもっては到底その維持向上を図ることが不可能になった。

これは、2,000余校150万余に及ぶ全国の私立小・中・高等学校児童・生徒の父母や私学の教育担当者にとって重大な関心事であるばかりでなく、わが国の全ての初等中等教育にとっても由々しき重大事と言わなければならない。

ここにおいて、国は、私立学校の教育と経営の健全化を図るために、昭和45年以来、私立大学の経常費補助の方策に準じ、高等学校以下については、地方交付税による財源措置を施し、各都道府県からの助成策を講じてきた。しかし、各地方自治体の現状から必ずしも安定した助成方法とはなっていない。

ここにわが国の教育の基盤となる小・中・高等学校教育の公私立学校間の父母負担の均衡と、私立小・中・高等学校の振興を目的とした特別立法を行うことによって、私学の経営を抜本的に改善し、学校教育全体の向上を図ることが必要である。

これが本法制定の理由である。

1. 私立小・中・高等学校振興法(仮称)制定の目的

教育基本法第6条の精神に基づいて、学校教育における私立小・中・高等学校の使命と実態に鑑み、その健全な発展振興を行うことによって、小・中・高等学校における学校教育全体の改善充実を図ることを目的とする。

2. 対象となる私立学校

学校教育法第2条第2項及び私立学校法第3条に規定する学校法人が設置する学校のうち、小学校、中学校、高等学校及び盲学校、聾学校、養護学校の小学部、中学部、高等部とする。

3. 都道府県の補助

(1) 公立学校運営に必要とする標準教育費に相当する額の3分の2を下回らない額

(2) 私立学校教職員の研究、研修費並びに教育研究機関の必要とする経費の3分の2を下回らない額

(3) 私立学校の校地、校舎の拡充、老朽校舎の改築等に必要とする経費の3分の2を下回らない額

(4) 私立学校教職員退職金団体の所要財源掛金の2分の1を下

回らない額

(5) 父母の教育費負担の軽減、その他私立学校振興上必要とみられる事業に対し、助成貸付をすること

4. 都道府県に対する国の財源措置

前項の都道府県補助額の2分の1の額は国が負担する。

5. 私立学校の任務

私立学校は、この法律による補助金の使途を有効且つ適正にすることにより、学校経営の安定を期し教育水準の向上に努めなければならない。

6. この法律の運用

この法律の運用に当たり、国及び都道府県は私立学校の特殊性に鑑み、補助金の使途の監査に藉口して、その自主性を侵すことがあってはならない。

7. 私立学校審議会との関連

私立学校に対する補助の適正を図るため、都道府県知事は私立学校審議会の意見を聞かなければならない。

以上

このように公立学校の運営に必要とする標準教育費の3分の2までを補助するということを先達は主眼にしていた。教職員の研究・研修に要する経費、老朽校舎等の増改築に必要な経費、教職員退職金制度の確立、父母負担の軽減措置を目指し、それらに対する補助の規定を設けることがこの要項(案)に盛り込まれています。

同時に、私立学校自身も襟を正して、教育水準の向上を目指すことを肝に銘ずるという精神規定も入っています。また、所轄庁等における監督権の乱用も戒めており、私立学校の自主性を侵すことのないように、先達は規定を考えようとしてくださいました。

ここで重要なのは、私立の小・中・高等学校のみを対象にしていたことです。それには次のような理由がありました。私立の小・中・高等学校は、義務教育、または同年齢層の約90%の進学率を示す国民教育機関で、全国約2,000校、約150万人の児童、生徒が学んでいる。今日(その当時)、その助成策を日本私学振興財団のような一機関で取り扱うことは、従来行われてきた都道府県の助成との関連性を見ても不可能に近く、幼稚園の就園奨励費の助成とも根本的に相違がありました。

また、学校の規模、入学定員、一学級当たりの専任教員数、専任教員の担当時間数、教育課程等については、ほぼ公立学校と私立は均衡しており、それに加えて建学の精神、伝統ある校風等による特色ある教育を行い、わが国の学校教育の先駆者的役割を果たしてきたのは私立学校であると主張しています。

公立学校と比べて、私立学校がその教育に必要とする経費は均等であり、加えて公立学校には計上されていない学校法人の管理的経費、減価償却費、借入金の利子及び返済金等の費用を私どもは必要としています。その財源は授業料等の父母の負担と公費による助成の外はほとんど期待できない。入学定員を著しく増員することも、寄付金等も父母以外からは期待が薄く、収益事業についても大学や各種学校等のようにできないということです。今では法改正によって収益事業は可能となっていますが、かなりの制限はあると言えるでしょう。

そういう幾つかのことがあり、中高連としてはこれら

の決定事項に基づき、全国の一致した意見として方向付けをし、運動を展開してきたのが当時の状況でした。

最終的には、16,000人の方々が集結した昭和49年12月11日の日本武道館での法制定「総決起大会」でこの運動は集約されたということになります。

こうして歴史をたどってみると、現在、吉田会長、あるいは各都道府県協会長をはじめ協会の先生方が、各都道府県の私学主管部課等とさまざまな折衝を重ねることによって、あるいはそういった先達の意思や思いを受け継いで、私も今は今、私学助成、私学振興ということを考えていっていいのであろうと思います。ただ、黙っていればお金が降ってくるということはありません。そういう意味では、是非、吉田会長の働きを皆様方に認めていただきたい。吉田先生の活躍には本当に頭の下がる思いです。いずれは功労賞を出そうではありませんか。

なぜ私学側の意見が実現しなかったのかについては、山形で少し振り返りたいと思います。資料として私立学校振興助成法案要綱を記載しましたので、ご覧ください。

私立学校振興助成法案要綱

昭和50年4月17日

衆議院法制局

1. この法律は、国及び地方公共団体が行う私立学校の助成措置について定め、私学の教育条件の維持向上及び学生等の経済的負担の軽減を図り、経営の健全性を高め、もって私立学校の健全な発展に資することを目的とすること。
2. 学校法人は、自主的にその財政基盤を強化し、授業料、入学料等の適正化を図るとともに、教育水準の向上に努めなければならないこと。
3. 国は、私立の大学及び高等専門学校の教育研究に係る経常的経費並びに私立高等学校の広域通信制の課程の教育に係る経常的経費について、その2分の1を補助するものとする。
4. 都道府県は、私立の高等学校、中学校、小学校、盲学校、聾学校、養護学校及び幼稚園の教育に係る経常的経費について、その2分の1を補助するものとし、国は、都道府県に対し、その補助に要する経費の2分の1を補助するものとする。
5. 国または都道府県は、学校法人またはその設置する私立学校が次に該当するときは、その状況に応じ、経常的経費に係る補助金を減額して交付し、または交付しないことができる。
- (1) 法令の規定等に違反している場合
- (2) 収容定員を超える数の学生、生徒等を在学させている場合
- (3) その他財政状況、教育条件、管理運営が適正でない場合
6. 国は、私立の大学及び高等専門学校の教育研究設備に要する経費並びに私立高等学校の広域通信制の課程の教育設備に要する経費について、その2分の1を補助することができる。
7. 都道府県は、私立の高等学校等の教育設備に要する経費について、その2分の1を補助することができることとし、国は、都道府県に対し、その補助に要する経費の2分の1以内を補助するものとする。
8. 国及び都道府県は、以上の補助のほか、私立大学における

学術の振興または特定の分野、課程等に係る私立学校教育の振興のために必要があると認めるときは、特別の補助をすることができることとし、国は都道府県に対し、その補助に要する経費の2分の1以内を補助するものとする。

9. 国は、私立大学が人口過密地域から移転する場合、当該移転のための施設の建築費について、その一部を補助することができる。
10. 国は、私立大学がそれぞれ定めた基準により選考した優秀な学生について学生納付金を免除する場合、収容定員の10%（短期大学及び高等専門学校にあっては5%）に相当する学生に係る額を限度として、免除額に相当する額を補助するものとする。
11. 国又は地方公共団体は、学校法人が行う学資貸与事業について、必要な援助を行うことができる。
12. 国又は地方公共団体は、私立学校の教職員に対する退職手当支給事業に対して補助することができる。
13. 国は、地方公共団体に対し、幼稚園の就園奨励事業に要する経費を補助することができる。
14. 国は、この法律による補助金の支出又は貸付金の貸与を日本私学振興財団を通じて行うことができる。
15. 所轄庁は、助成を受ける学校法人に対し、その権限を有すること。この場合、(2)、(3)及び(4)の措置をしようとするときは、私立大学審議会等に対する諮問等の所定の手続を経なければならない。
- (1) 会計状況に関し、報告を徴し、又は帳簿書類等を検査すること。
- (2) 収容定員を著しく超えて入学させた場合に、その是正を命ずること。
- (3) 予算が不相当である場合に、その変更を勧告すること。
- (4) 役員が法令の規定等に違反した場合に、その解職を勧告すること。
16. 経常費補助を受ける学校法人は、所定の計算書類を作成し、所轄庁に届出なければならない。
17. 公立学校と私立学校の調整に関する事項を審議するため、都道府県公立学校調整協議会を置く。
18. この法律は、昭和51年4月1日から施行すること。
19. 経常費補助に係る補助の割合については、昭和56年3月31日までは、「2分の1」とあるのは「2分の1以内」と読み替えて適用すること。
20. 個人立幼稚園等に対する助成について所要の規定を整備するとともに、経常費補助を受ける設置者は5年以内に当該学校法人によって設置されるよう措置するものとする。
21. 私立学校の学生・生徒に対する日本育英会の学資貸与者の数及び貸与金の額については、私立学校の学生・生徒の数及び学生納付金の額を考慮して定めるものとする（日本育英会法の一部改正）。
22. 私立の高等学校の学科、大学の学部学科及び大学院の研究科の設置並びに収容定員の変更は、所轄庁の認可を受けなければならないものとする（私立学校法の一部改正）。
23. 文部大臣は、当分の間、私立大学、学部等の設置及び収容定員の増加を認可しないものとする。ただし、大学設置審議会及び私立大学審議会の意見を聴いて特に必要が

あると認める場合は、この限りでないこと(私立学校法の一部改正)。

24. その他、私立学校法第59条の監督規定の整備等、関係法律について所要の規定を整備すること。

大学の補助は、当初、経常的経費の「2分の1を補助するものとする」から、現在の法では「2分の1以内とする」に後退して、遂には、「義務規定」から「裁量権限」になって「2分の1以内を補助することができる」に、高等学校以下については、「政令の定めるところにより国は都道府県に対し、その一部を補助することができる」に後退し、更に、幼稚園の就園奨励費に対する補助、育英会奨学金の一部改正なども削除、税制上の優遇措置に至っては、「講ずるよう努力する」などと全く意味がないものに变身してしまったと言わざるを得ません。

その修正原案が第75回通常国会で議員立法として提出されて成立したということになります。

この中で、やはり私としてはこの私立学校振興助成法は大骨も小骨も抜かれてしまったのではないかと思います。この法律の内容については、「私立大学の補助金は経常費の2分の1以内とすることができる」となっていますが、その経常費の範囲及び積算の方法は政令に全て委ねられました。また、私立学校法第59条には、国又は地方公共団体の補助について既に規定しており、「この程度の内容なら既にあるのではないか」という議論も起きていました。ただ、高等学校以外については、「国が都道府県に対し、その一部を補助することができる」となり、法的に明確になった点は評価できると思います。しかし、その内容は大学と同様に政令により定められることになっています。

この法律が制定されたことによって、画期的な私学助成費の増額が実現し、目的とする保護者負担の軽減や私学経営の安定、振興が図られるかどうか、厳しい財政の硬直化においては「大骨小骨も抜かれて、丸裸になっても一歩前進」、「法的根拠に基づいて、今後は私学助成費は安定する」という提案者の説明を、果たしてそのまま受け取ってよいかどうか、疑問が残ったところです。

このようなこと、これから皆さんとともに考えていきたい、あるいは皆さんの意見を寄せていただきたいという思いがあるのです。

さらには、「教育内容への介入があるのではないか」ということがあります。税金が投入されているわけですから、厳しい監査が各都道府県でも行われていると思います。その際に教育内容にまで立ち入る危険性は排除すべきだというのが当時の思いとしてあったわけです。所轄庁の権限として第12条が設けられていますが、この条項のある項は不服申立てが禁止され、ある項は私立学校審議会等の意見を聞き、当事者は出席して弁明の機会を与えられています。これらの監督権限は、戦後の私学振興史上の問題点であったと理解しています。

私立学校に対する監督権の問題については、ご存じのように、私立学校法第5条では、私立学校が法令に違反したとき、所轄庁の命令に違反したときには、学校の閉鎖命令権のみが規定され、同条第2項において、学校教育法第14条は私立学校に適用しないことを規定しています。

以前の私立学校法では大学も学校教育法第14条の適用除外とされていましたが、不祥事を受けて大学には公権が入ることになりました。最近では群馬県の学校の問題を受けて私立学校法も改正されています。

この私立学校法改正に当たっては、東京私立中学高等学校協会の近藤彰郎会長が審議会のメンバーとして尽力され、一方的に行うのではなく私立学校審議会の意見を聴くことが私立学校法の中に盛り込まれています。

このように振り返ってみると、当時の永井道雄文部大臣には感謝しなければいけない面もありますし、その前の文部大臣の坂田道太先生、西岡先生、塩崎先生たちにご努力いただいたことを受けて、現在、議員になっている二世の先生方にもお父様方が私どもに寄せられ気持ちを十分にくみ取ってほしいとお願いしていったほしいと思っています。

最後に、今、私たちが直面している私立学校振興助成法の課題について整理してみたいと思います。

○大学については、国の補助率を「2分の1」と明示されなかったこと。「2分の1以内」という表現に止まっていたこと。そのことから、5カ年計画で2分の1補助を達成することが明記されなかったこと。

○経常的経費について、その内容を政令で定めることにしたことによって、財政当局の介入の余地を残したこと。

○国の教育計画に基づく私学の設備投資の一部を補助する制度が新設されなかったこと。

○高等学校以下について、国の負担割合が明示されていなかったこと。

都道府県には対する国からの地方交付税はいわゆる紐付き補助金にした方がいいという話が出た時、当時の民主党の原口総務大臣は、私たちの話を聞いてくれて、地方交付税が増えたという経緯もありました。東京都は大変恵まれているのですが、残念なことに、そのように国が財政措置をしてくれていても、県によっては他にその予算を回してしまって、助成額が財政措置額に達していない状況が見てとれます。このことも都道府県、各地方公共団体が私学に対して理解を示してほしいと思うのです。国がせっかく「これは私立学校の助成に使うべきだ」としてつけてくれたお金を、道路や箱物にしてみたりするというのはいかがなものか。日本は資源がない。だから人が資源だと言うのであれば、その人を育てる私たち教育機関に対して十分な理解を示す必要があります。現在、文部科学省は予算獲得に当たって、先進国に比べていかに国が教育費をかけていないかという資料をつくって予算折衝しているようですが、そのようなことも含めて考えると、我々の立場を理解していただける人を選んで、代表者にしていくこともこれからは大事なことだと思います。

来年6月の山形県での私学経営研修会にまた大勢お集まりいただき、一緒に議論できれば幸いです。法律が今あるからいいのではなく、私立学校振興助成法の内容をもう一度精査しながら、私どもが何をしていけば、私どもが未来を生きる子どもたちのために少しでも充実した教育環境を整えられるかということを考えていきたいと思っています。

講演Ⅲ

「今日の私学経営における課題と展望」

八雲学園中学高等学校 理事長・校長 近藤 彰 郎



講師紹介（増田幹子・学校法人駒場学園副理事長）

近藤彰郎先生は、慶応義塾大学法学部卒業後、日本アビオトロニクス株式会社に入社され、1978年、八雲学園高校教諭に奉職されました。その後、事務長、副校長を経て1995年、校長及び学校法人八雲学園理事長に就任され、現在に至っております。

また、一般財団法人東京私立中学高等学校協会会長を長らくお務めいただいているほか、東京都私立学校審議会会長、日本私立中学高等学校連合会副会長、全国私立学校審議会連合会会長、一般財団法人日本私学教育研究所理事、公益財団法人全国高等学校体育連盟空手道専門部部長、公益財団法人全日本空手道連盟常任理事など、私立学校振興のために数々の要職をお務めいただいています。その功績により、2005年、東京都功労者表彰教育功労、2008年に私立中学校高等学校教育振興功労者表彰、2010年に藍綬褒章を受賞されております。

私立学校振興助成法の件について、詳しく實吉先生がお話をされたので、重複する点もあるかもしれませんが、私が実際に吉田先生と補助金獲得に行ったり、私学のことを多くの方々に語っていく中で、いろいろな心配事がやはりあるのです。これを解決しないと、簡単に私立学校の自主性は守られないということを肌で感じていますので、その辺を中心に私はお話をさせていただきたいと思います。

資料に教育基本法から一部抜粋して載せました。私立学校について、教育基本法の中では、8条と16条が大きく関係をしていると思います。

1. 教育基本法

（私立学校）

第8条 私立学校の有する公の性質及び学校教育において果たす重要な役割にかんがみ、国及び地方公共団体は、その自主性を尊重しつつ、助成その他の適当な方法によって私立学校教育の振興に努めなければならない。

（教育行政）

第16条 教育は、不当な支配に服することなく、この法律及び他の法律の定めるところにより行われるべきものであり、教育行政は、国と地方公共団体との適切な役割分担及び相互の協力の下、公正かつ適正に行われなければならない。

4 国及び地方公共団体は教育が円滑かつ継続的に実施されるよう、必要な財政上の措置を講じなければならない。

◎補助金の支給が授業料の金額によって差別されることなどあってはならない。

8条をご覧くださいなのですが、「国及び地方公共団体はその自主性を尊重しつつ、助成その他の適当な方法によって私立学校教育の振興に努めなければならない」と謳っています。以前の教育基本法には、私立についてこんなことは書かれていませんでした。ここにはっきりと「その自主性を尊重しつつ」と1つ大事なことが入った上で、助成等によって私立学校を振興しなければいけない、これがこの法律の趣旨です。

ところが一方で、16条には、ここは大事なことが書いてあります。「教育は」、これは私学がどうだという法律ではないです。「不当な支配に服することなく、この法律及びその他の法律の定めるところにより行われるべきもので」と。それから、「国と地方公共団体」が「役割分担」とした上で「公正かつ適正に」と、こういう条件のもとで法律に従って教育をしなさいということを謳っているのです。

これを読むと、私はすごくいいなと思います。私学振興も考えてくれて、法律を守っていくというのは大事なことでけれども、それは私学の自主性を認め、教育というのは不当な支配をされないのだということをいっているのです。しかし、今、本当にそうになっていますか。

都道府県、いろいろな県があると思いますが、そこで本当にそうになっているのかどうかということです。例え

ば、大阪は本当にそうになっていますか。大阪府民の金を私学にあげるのだから、方針などそういうものには全部従えといっているのです。もう既にこの教育基本法に、私は違反していると考えています。

そうしたら対抗するしかないのです。ただ、いろいろな補助金をいただきながら文句をいうのはなかなかいいにくいというのは事実です。しかし、法律がそうなっているのです。「法に従って」と。われわれは法を犯しているわけではない。そこをしっかりと確認をしていただきたいと思います。

どの先生方も経営者も、ご自身の学校の中で、教育を完成させようとして一生懸命やられているのは事実です。しかし、そこでの教育がどういう形の方法によって成り立っているのかを設置者だけでなく一教員であっても知っておく必要があると思います。為政者というのは権力を持つわけですが、権力によって物事が良い方向に行くこともあるけれども、権力によって物事が停滞したり、逆に悪いほうに行くこともあるわけですから、その辺のことは一人ひとりの先生方も知っておく必要があるのではないかと思います。

例えば、所得が少ない人たちを救うために授業料減免制度があります。就学支援金もそのうちの1つです。それに加えて、いろいろな制度を各都道府県で持っています。これも大阪の事例をいいますが、大阪は、例えば、年収500万円以下の人たちをほとんど無償にしようとしてきました。支援金を含めてですが。基金を使ってやるのですからそれは良いことだとは思いますが。私学に通っている生徒でどの学校に通うかというのは、学校選択権があるわけですから、授業料は高いところか、安いところか、それだけで決めているわけではありません。教育内容で決めているわけです。大阪でそれを始めた時に私がおかしいと思ったことは、維持費も何も含めて、58万円以上の授業料の学校に、例えば500万円以下の人が入った時には大阪からは出しませんというのです。これは子どもに対する差別です。58万円以上取っているところは、学校で、例えばその授業料を補償しろと。上限を58万円と決めてしまったのです。なぜ58万円か、何の根拠もないのです。まるで分からない。

例えば東京でも、授業料が安い学校はあります。でも、その3倍くらい取っている学校もあります。これも私学の自由なのです。その代わり、うちの学校ではこういう教育をしています、こういう施設を持っていますということで、ある意味での差別化が図られているわけです。その中で、受験生はどこの学校を選ぶかという権利がなければいけない。その時に、授業料が高い学校に、自分は、自分のご両親の所得が少ないから行けないということがあってはいけないということで就学支援金、また東京都の場合には、授業料減免制度というものがあるわけです。

それを授業料を頭打ちで決めてしまうということは、私からいえば、これは間違いなく経営権の侵害です。そのような権利は知事といえども持っていない。学校の授業料というのは理事会で決めるのです。もちろんこの何十年間、私立学校振興助成法が昭和50年に成立して、それからだんだん補助金が増えてきました。東京もそうで

す。實吉先生がお話になりましたが、補助金が増えるのだから、この目的のひとつである父母負担軽減をできるだけ図るという趣旨を理解し、補助金が増えるのであれば、授業料値上げは抑えようという形でやってきたのは事実です。それを決めるのは理事会です。それをいきなり58万円以上のところには、そのシステムには入らせない。このような縛りをかけるということは、「私学の自主性を尊重しつつ」などということからかけ離れていると私は考えますが、皆さん、いかがでしょうか。そのようなことは許されてはいけないのです。これがまず教育基本法の趣旨です。それに書かれていることに従っていないということは問題だと思います。

1. 私立学校法 昭和24年12月15日

第1条 この法律は、私立学校特性にかんがみ、その自主性を重んじ、公共性を高めることによって、私立学校の健全な発達を図ることを目的とする。

(事例)

①宗教教育は認めない…明治

②校名変更要求(英和)・マリア像の替わりに日の丸

…戦時中

③私学は公立の補完校(秋田)発言…8年前官尊民卑なくす(現在)

④地教行法改正(平成19年)…教育委員会が私学を(指導・)助言・援助する。(現在)

未履修問題をきっかけとして出てきた問題

あらゆる手立てで「指導」を取り、助言・援助も国会議員の付帯条項をつけることにより形骸化させた。自民党文教関係はもとより、公明にも最後まで抵抗して頂いた。

◎私学は自由でなければならない。但し、無秩序はいけない。かえって社会の批判を浴びる。自由を守りながらも戦いなしでは難しい。先人の努力に敬意を払い、同様の努力を継続しなければ得ることが出来ないのが自由。

次に、私立学校法というものがあります。これは昭和24年12月15日にできたものですが、1条に、「この法律は、私立学校の特性にかんがみ、その自主性を重んじ」とあります。尊重する、重んじる、同じことです。これは第1条です。スタートでこの私立学校法が成立しているのです。私立学校の健全な発達を図ることを目的とする。公共性を高める。われわれは各都道府県で設置を認可され、公立学校とは異なるものの、いわゆる両翼の公共性を保ってきているはずですが。それに違反したら非常に厳しく糾弾されています。われわれ自身もそれを守るべきだということを信じて、建学の精神と照らして行っているはずですが。

歴史については實吉先生が詳しくお話になりましたが、それまでの歴史的な経験、反省から得た法律であることは間違いありません。私立学校がその自主性を重んじて、私立学校を発展させていかなければいけないということだと思います。

ところが、それ以前というのは皆さんご存じと思いますが、明治時代、宗教教育は認められていないのです。宗教を背景に建学の精神を立てて臨んでいる学校もあり

ます。無宗教の学校もあります。男女共学の学校もあるし、男子校、女子校の学校もある、男女別学の学校もある。いろいろな形態がそれぞれの学校の目的に照らしてあるわけです。

宗教教育は認めない。これも大きな問題で、おそらくその時に、私はいみじくもありませんでしたが、私立学校の関係者が集まって、一生懸命それを排除して、努力をした結果、今につながっているのだろーと思ひます。

もっとひどいのは校名変更要求です。太平洋戦争がありました。その時に、「英和」とかいう言葉が学校名に入っている学校は、鬼畜米英の「英」が入っているから変えるようにいわれました。

そして、憲兵が乗り込んできて、マリア像の代わりに日の丸を張らされたという経験もあるわけです。このようなでたらめをやっていたのも事実です。これは戦時中の話です。だから遠い話で、おそらく国民のほとんどは「私学って自由なのでしょう」と思っていると思うのですが、私も学校に入って、協会に入って運動するようになったのですが、驚きました。現代でも同じような発想をされているのです。

もう8年も10年も前の秋田県の話ですが、私の尊敬していた方で、もうお亡くなりになりましたけれども、私学審の会長をお務めでした。これから生徒が急減期になる。どうしていけばよいか。公私協も含めて対応していかなければいけないという中で、公私協や私学審のメンバーが何と云ったかというところ、「私立学校は公立の補完校だろー。だから私学をなくせばいいのだ」。このような官尊民卑の言葉をいまだに発している人たちがいるということです。恐ろしいことだと思ひます。

そして、未履修問題。平成18年のことだ。この時も私は驚きました。東京都の私学部長の部屋でテレビを見ていたら、国会で、一生懸命民主党を追求している。公立の話だ。いや大変ですね、われわれ私学とは関係ないと思ひていたら、国民新党の議員がなぜか私立学校はどうかと。すると、文科大臣が調べますと。何を云っているのだと思ひました。私立学校はある程度のカリキュラムについては自由にやっていたはずなのです。学習指導要領というのは大臣告示です、もともと確認されていた。それがいつしか法律だといひ始めて、守っていないのはけしからんというところで一緒にされたのです。

これには私も反論しました。あの当時は学習指導要領通りにやれと。学習指導要領をやるため、このアドバンスはなかったのです。高校1年では数Ⅰをやれと。けれども、数Ⅰができない、分数の計算ができない子たちを預かる学校もあるわけです。その人たちは、例えば小学校のドリルを渡して計算できるようにする、これに時間を使ってやっているわけです。これも違反です。大学受験に自分が受験する科目がないから、それを取り除いて別の勉強をする、これもいけなひ。そうではないのではないかと私たちは考へていたはずだ。

その生徒にあった形で授業を進めていく、決められているのは年間何時間となっていますけれども。石原慎太郎さんがおもしろいことをいひました。当時東京都知事だったのですが、「いや、2単位の世界史なんていうのは気の利いたやつだったら、本さえ渡しときゃ2〜3日で

覚えてくる。だから、それをその後は自分の必要なものに傾注していつて何が悪いのだ」といひました。

いづれにしても大転換の時でした。そして、いろいろ結果が出て、私立学校のほうが進学率が高いですから、大学院に行っている人は70%強くらいですか。けれども、全国平均で、公立まで入れると50%少しくらいだと思ひます。だから、当然、受験を目指している人が多いわけで、未履修の人間も多かったのです。

私どもは次年度予算が通った時に、文部科学大臣のところに参りました。表敬訪問といひて、全国の父母の会の会長と一緒に参って、予算を通していただいでありがとうございませとお礼に行つたのですけれども、一通りの挨拶をした途端、私のほうを見て「いや、私学は行儀が悪い」と云つたのです。「え、何のことかな。ちゃんとスカート丈も守つてやっているのは私学のほうが多いのに」と思つたのですけれども、それは未履修が私学に多いと意味でした。それで行儀悪いといひうのです。

それは違ひうのではないですかと、先ほどいひつたようなことを、生徒のために創意工夫をしてやっている部分もあるのですよと。学習指導要領は真ん中に置いているけれども、出っ張り、あるいは足りない点は自分たちで工夫しているのですといひたら、いや、私立か公立かなんて関係ない。文部科学省のいひ通りにしろといひわれました。それが1月21日。そういう状況の中で、2月16日には、中教審で、地教行法改正案といひうのを検討しろといひう指示が出しました。これは覚えていひる方もいひると思ひますが、とんでもない法律です。

今ある教育委員会の中に私学を入れて、指導、助言、援助を教育委員会がするといひう案です。もう驚きました。私立学校法はどこへいつてしまつていひるのだと。そのような中で、私たちははっきりいつて、自民党の文教部会、文教族、公明党の先生方、こいつう方たちにも本当にお世話になっています。しかし大臣が出した法律案ですから、それをやめるわけにいかない。こいつうぶつかり合ひの中で、実は「指導」といひうところを除いたのです。

東京都の比留間教育長、昨日もいらつしやつていひましたが、その当時は教育長ではなかつたのですが、「いや、東京都で私学を指導なんてすることはできません。私たちにはそんなノウハウはありません。」とはっきりいつていひるのです。でも通そうとしました。

本当にこいつういろいろな人の力を借りて、もう大激論でした。与党協議会といひうものがあります。座長は自民党の大島先生です。その方にもお願ひをして、それでやつと「指導」を除いたのです。

では、助言と援助はどうするの。これは国会の附帯決議として、衆参議員にお願ひをして、例えば助言、援助はこちからお願ひした時以外は勝手に助言も援助もするなといひうことを確認したのです。だから、今この法律があるのです。地教行法がこいつうして改正されているのです。全く意味のない法律を通した。でも、それで、今の私学があるといひうことはご確認いただきたい。その時も吉田先生はありとあらゆるところに参りに参りました。そして、われわれの考へに賛同してくれた先生たちもたくさんいて、それが今いつた結果になつたといひうことです。

ですから、今の時代でも私立学校の自主性、独自性を乗り越えようとする、そういう考え方を持つ人たちは大勢いるのだということを理解しておいていただきたいと思います。私学は自由でなければいけない。ただし、無秩序はいけません。かえって社会の批判を浴びるわけですから。それはわれわれの申し合わせ、自主性、常識など、そういうものの中で守っていくことだと思うのですが、自由を守るためには、闘いなしでは難しいということをおも肌で感じさせていただきました。

今まで私学振興のため、私立学校法や、この後に振興助成法を取りあげますが、こういう法律をつくりあげた先人たちの努力に敬意を払って、それをつくる時も常に私学の自主性、独自性を守りながらつくってきたわけですから、時の権力がいきなりそれを飛び越えるようなことはあってはいけませんので、そのための闘いはこれから必要なのではないかと考えております。

私立学校振興助成法。ここでの3つの目的は、先ほど實吉先生がお話になりました。もうこの法律がどこかへいってしまっているのです。私立学校法も私立学校振興助成法も何のための法律か、自主性がある私学を振興させるためにお金を出すのです。

そして、もっといえば、私もよくいうのですが、行政の方たちも「これは血税だ」といいます。「血税だからちゃんとやれ。1円でもきちっとしなければいけない」といういい方をする。これは誰のお金なのですか。われわれが汗水たらしたお金です。文部科学省の人にいったこともあります。昨日来ていただいた方たちは、そんな方たちではありませんが、本当に「税金、これは血税だ」というから「何をいつているのですか。あなたの給料はどこから出ていると思いつているのですか。私たちの汗水垂らしたお金です。」といったのです。私はそのようなことに対する反論は、余りうまくいえないタイプなのです。

法律通りにやれというのであれば、私学の自主性とか私学を発展させるためにお金が出ているのだ、こういう理解を、もう1回、全員でしてみてください。

例えば地方行政の中でも、何かいわれた時には、必ずそれを反論としていふべきですし、地方の人たちはみんな変わってしまいますから、常日ごろからそういう発想をして発言をしていくことは大事なことだろうと思います。

今、公設民営化をしようということですが、その公設民営というもののいろいろな形で検討しないとおかしいです。私立学校に関係のない人たちが非営利法人を立ちあげ、そこに施設などを与えて、そして民営、公立の代わりにそれをやるのです。それはやはりおかしいと思います。

私は私立学校振興助成法ができて間もなくの時に、早稲田中学高等学校や洗足学園の校長をお務めになった飯島先生が、東京私立中学高等学校協会の第七支部で、25校くらいあるのですが、「おい、近藤さん」と呼ばれて、「何ですか」というと、「いや、私立学校振興助成法でお金をもらうのはいいのだけれども、これだったら、どこかで私学人の魂を奪われることになるよ」といわれました。その時は何だか分からなかったです。でも、今ひ

しひしと感じています。われわれを理解してくれる方々とともに、日本の教育、私学教育も含めて、やはり頑張っていかなければいけないと思っています。

1. 私立学校法改正

- ・措置命令
- ・役員の解任勧告

(1) 学校法人が法令の規定に違反したとき等所轄庁が必要な措置をとるべきことを命ずることができる。

(2) 学校法人が措置命令に従わないときは、役員の解任を勧告することができる。

(3) 措置命令や役員の解任勧告を行うには、所轄庁はあらかじめ私立学校審議会等の意見を聴かなければならない（第60条関係）

学校法人に対し業務・財産の状況について報告を求め、又は学校法人の事務所等に立ち入り、検査することができる。（第63条関係）

…私学審の意見を聴くことは大きな意味→不要論に対抗
～田中大臣発言にも

私立学校法改正が、最近ありました。これは何かというと、ご存じのように、ある学校、これは群馬の学校で、大学まで持っている学校法人が経営を私物化して、いろいろな問題が起こしたということがあって、最終的には解散命令が下りました。ただ、そこに至るまで、非常に時間がかかったそうです。なぜかという、法が整備されていないからです。私学の自主性ということからいって、立ち入りができない。それから、私立学校振興助成法でお金をいただいているところは、財務諸表を出さない、こういう制度になっているのですが、その学校は6年ぐらい前から補助金をもらっていないのです。だから、財務諸表を出すようにいっても、出さない。できていない。それで大変時間がかかってしまったのです。その反省から、私もワーキンググループに入りましたけれども、それを手続き的にきちんと決めてできるようにしたいと。

もう一つは、田中真紀子文部科学大臣の時に発言がありました。2年がかりで設置を許可するかどうかということをお大学設置・学校法人審議会で決めて、決めたものを田中大臣が、そんなものは認めない。審議会に入っているのは大学関係者ばかりではないかとひっくり返しました。あの時に、われわれ中高でいうと私学審、あるいは大学設置審議会というものがどういう位置づけかというののははっきりしなかったのです。ひっくり返されては困るといっても、それができるような状態だったということもあって、それも含めて検討してくれということで、私は検討委員会に臨みました。

公認会計士、弁護士などが何人かいて、10人くらいでやったのですが、冒頭挨拶の時に、それぞれに挨拶をして、私は一番最後だったのですが、もうとんでもないです。ある公認会計士が、冒頭で何をいつたかという「私立学校はブラックボックスです」といった。「情報公開も何もしていません」といきなりいうのです。知らない人たちはそう思ってしまう。あとで情報公開に入りますが、われわれはそのルールに基いて、きちんと情報

公開をやっています。

私立学校が、例えば廃校になるとします。やめた時には、要するに理事長などが全部私腹を肥やして持っているというのと弁護士がいうのです。全く分かっていない。われわれは例えば学校がなくなりますと、合併すれば、それは合併した学校法人に財務財産が入るわけですが、ただ閉めるという状態になったら、財産は全部国に行くのです。第三者的な学校教育関係を指定していればそこに行くのですが、要するに私物化なんか絶対にできないわけです。それも分かっていない人たちが論議していました。

その中で論じられたのが措置命令を入れるということなのですが、措置命令はどのようなことかということ、学校法人、何か悪いことをしていると、何とかということで表面化してきた場合に、学校法人に対して業務、財産の状況について、まず報告を求める。それを出さなかったら事務所に立ち入れる立入権、これを第63条で設けたのです。

それから、役員の、当時は解任命令権をといったのですが、これは、他の公共団体と、公益法人などと比べ、どこも、それは理事会で決めていることですから、誰かが悪い、ということには介入できない。ただ、役員の解任勧告、ここまではできるようにするということで入ったのです。

その中に、業務、財産の状況について報告を求めるとありますが、その中に教育の質が入っていたのです。それについて私は執拗にこれはおかしいといいました。これは教育権に対する介入になるから、絶対に取ってくれといいました。当時は小松親次郎私学部長だったのですが、理解していただいて取っていただきました。私はワーキンググループに初めて入ったのですが、入ってよかったなと思いました。私がいなかったら、そういう細かいことまで分からないではないですか。そのまま質の保障というのも入っていたと思います。だから、やはり積極的に文科省のワーキンググループなどに入っていく必要があると思います。

そして、大事なことが(3)に書いてあります。措置命令や役員の解任勧告を行うには、所轄庁は、あらかじめ私立学校審議会等の意見を聴かなければならないと、60条に規定されたのです。これは大きな意味があることで、勝手に行政が入ってくるのではない。私学審に意見を求める。だから、それはおかしい、この時点で入るのはおかしいという意見も当然議論として求められるわけですから、大きな意味があるわけです。

それとともに、今まで私学審というと、規制改革とか構造改革の中で、私学審があるから新しい学校ができないのだ、という理由づけをして、勝手に新しい学校をつくる、自分の利益だけを考えている人たちがいました。東京の私学審であれば、新しいところができる、あるいは何かするという時は、必ず現調といって、現地調査に行きます。われわれが行って、こんなところに学校を建てていいのかどうか。例えばエレベーターの数、生徒の安全というのはどうなのかと。われわれはやはり私学審のメンバーとして、基準に合っていたとしても確認に行くのです。でも、それが規制緩和でいらないという。

これは大議論になったのです。

全審連富山大会の時に、前会長の酒井先生が、いわゆる富山宣言というものを出したのです。それはいわゆる私学審なんていないのだという人たちに対する対抗だったのです。それが法律で私立学校審議会の意見を聴くようにと入ったことは、もうその不要論に対して回答が出ているということだろう、これは意義があるところだと思います。

私立学校の自主的判断のところにずかずか入ってきてしまうのではないかと心配して質問をされてくる先生方もいらっしゃるのですけれども、それはありません。

では、どういった場合に立入検査するのかという要件については、いろいろな状態が想定できるので、これは決められないです。だから、逆にそれは、私学審とボールの投げ合いをしているうちに構築されてくるのではないかと思いますので、私学審の役割を大切にしていきたいと思います。

続いて、情報公開について。確認ですが、行政機関の保有する情報の公開に関する法律（情報公開法）が平成11年にできました。その時に、私立学校の財務状況とか、そういうものをどこまで出すかという議論があったのです。これは公認会計士協会等の方たちが作成した案によると、全部出せということでした。簡単にいうと、理事長の給与、先生方の給与から、小科目まで全部出せということです。なぜかということ、公金をもらっているからであるということです。

それで議論が進んでいる時に、私は東京私立中学高等学校協会の総務部長をやっていたのですが、それはおかしいということで、情報公開法というのは国の法律ですが、それでも、それ以前に、いわゆる開示請求という形で、地方ですが、山形県の金山町というところが、昭和57年に初めて条例をつくったのです。それを基準にしていこうということです。それから、いろいろな町等が追随し、最終的には47都道府県が全部条例をつくりました。それで、情報公開条例ということで、何か請求してくれば、ここまでは出す。出さない、非開示にする。それはなぜかということで不服申立てができ、審査会にかかるといった、この繰り返しをやってきて、十数年かかって私立学校の財務状況はどのようにしているということではできていきました。国の法律ができる前に10数年かけてできています。そのデータを47都道府県全部集めると、財務諸表については、ほとんどのところが大科目、諸表を見ると分かるのですが、大科目は出すというところに収斂していったのです。だから、そのデータを全部、文科省の当時、課長と詰めました。結局、「あ、こうなっているのですか」。「国のほうが後ですよ」と。だから、この基準でという形で、大科目と事業計画書を事務所に備えつけ、そして在学生と利害関係者に閲覧させる、それでよいと。インターネットに掲載する必要はない。関係ない人が見に来ても見せる必要はないということです。

そういうことで、今やっていますが、実は、各県でそれ以上に出してしまっているところもある。大阪などもそうだと思います。最近、東京都で、ある学校で、「財務諸表を出せ」と、これは新聞記者ですが、そういつてきて、「大科目だけ出すとはとんでもない。なぜ全部出

さないのだ」と。大阪の事例を持ってきて、ここは小科目まで出ているのではないかといわれたわけです。それで東京都のほうも困り、結局、開示しなかったら、不服申立てをされて、情報公開審査会にいった。審査会のメンバーも、そういう事例で出しているところがあるのだったら出せばよいのではないかという人もいた。「とんでもない」。われわれが本当に、私学の成り立ちから全部説明して、情報公開するといっているのに、そのようなことをやれといわれては困るといっています。

これは関係法令があります。平成17年4月1日施行の私立学校法の一部を改正する法律の第47条の第2項に、財務諸表、大科目のみ、事業計画書を事務所に備えつけ、閲覧できるのは在学者と利害関係のみ。この利害関係者というのは教員と、それから親と定義づけられています。

それから、もっと決定的なものは、実はこの時、私も記憶しているのですが、千葉県は資産の公開はしない。けれども、いわゆる小科目、給与等の小科目を出すという形でした。これは千葉県で理由があったのです。しかし、この法律ができた後に、ある学校がそれを求められて、情報公開審査会にかけて、開示してしまったのです。それに対して裁判を起しました。平成17年11月30日、結果的に、審査会が出したものを判決では出し過ぎだということでもとに戻され、審査会としても、この通知をつくり直したというものです。

従って、大科目までにしなさいと。中科目、小科目は学校の独自性、これも競争原理に反するからと、はっきり出ている。ことあるごとに「情報公開、情報公開」と行政の人はみんないいます。

もともと、ご存じだと思いますが、情報公開というのは、何のためにつくられたのか。これは国政、地方行政、行政が隠すから、それをさせということでできた法律です。アカウンタビリティというのですが、これは説明責任です。これを行政がやれということでできた法律なのです。これは本来、民に対するものではないのです。

ですから、私がそれを検討した時には、アメリカの状態も調べました。97%が、弁護士か犯罪者が要求しているのです。要するに、一般の方はほとんどいないのです。八雲学園も、実は今、76年目の学校ですけど、1回として、財務状況を教えてほしい。それで入学するか、しないか判断する、そんな人一人もいません。教育方針は聞かれます。私立学校というのは、財政状態がよくなければ、親や卒業生が大変だといって、協力して、寄付をしようと、それが私立学校の成り立ちではないですか。

最初から利益を求めて安定してやっているところなどどこにもないのです。在校生5人で始まった学校もあります。本校も27人から始まりました。お金をつぎ込むだけです。でも、そこで育った人たちが、いい教育をしてくれるということで寄付をしていただいて、そういう中で私立学校振興助成法によって公金が入るようになる。これも公私間格差の目玉です。公立は無償でやっているのですから。だから、その辺のことを理解した上で、もし地方行政の中で、「いや、出すべきだ」と論議があったら、しっかり書かれているこの判決文を見せてください。

誤解を生んでいることが1つだけあります。平成17年の「私立学校法の一部を改正する法律」と同時に、私学部長通知というものが出されている。その中に学校関係のフォーム、大科目があり、中科目があり、小科目、その表がなぜかついているのです。それを見ると、小科目まで出しているといっているように誤解を受けるのです。ですから、これは吉田会長とも話をしましたが、私学部長に相談して、余計なものはつけない。要するに大科目と事業計画書を備えつけていればいいということを文部科学省はいつているのだから、誤解を呼ぶようなことは外してくれということをお願いしようと思っています。

千葉県の普通校に対して、民衆指摘ということで新聞に掲載されたことはご存じかと思います。これはどのようなことかという、中学も高校もあるのですが、例えば音楽の時間を20時間やりなさいという時に、そのままカリキュラムで、毎週毎週、音楽に1時間とか2時間という形でやっていって、それで20時間を埋める。これは通常ですが、私立学校はいろいろなことをやっています。合唱コンクールとか、そういうものをやっています。本校もそうです。その時に練習したり、当日のコンクールなどを単位として充足するということをやっているのです。東京都もそれを認めています。ただ、例えば、他の科目でいうと、いろいろな科目がありますが、自分たちが例えば郊外活動でこのようにやったものを認めてくれという、きちんと説明して、注記を加えてカリキュラムを届け出ます。そこに書かれていればもう大丈夫ですから。これは千葉県の方にも東京都から確認してもらいました。

ではなぜ新聞沙汰になったかという、本来10単位と書かなければいけないところを8単位と書いて、2単位はそういう形で合唱コンクールなどで埋めています。口頭でやっていいよといわれてずっと継続していたのが、書かれてないものですから、そこをいわゆる情報公開条例で、新聞記者が全部出したのです。その情報公開をしたら、単位が足りないではないかということになって、それを指摘されたということです。理解としては、きちっと行政と対応して、それを認めてもらうようにして、備考で書けばよいと、東京都と千葉県では間違いなくなっていますので、もしそういうことがあれば、それも主張していただきたいと思っています。

次ですが、中高一貫教育校の確認についてということで、これもいろいろ長い時間がかかりましたが、今の現状そのままいうと、最初にスタートした時は連携型は同一法人は認めないといっていたのですが、これはもう既に認められています。ただ、その時の認め方は、文科省でつくった中高一貫教育校のQ&Aがあるのですが、そこに同一法人は認めないとなっていたものを、「なお、同一法人で認める場合もある」、と書き加えてしまったのです。役人らしいです、法律を変えないで、私たちに知らせなかったのです。私たちは、なぜ知らせないのだと怒りました。

その後、それではわれわれも連携型をやりたいということで、特に東京は一昨年までは178校中で、実質中高一貫をやっているのですけれども、届け出ていたのは4

校だけだったのです。なぜかという、はっきりした答えがもらえなかったからです。例えば内部生について、入学金とか維持費とかももらえるのか、あるいは外部生からのクラスが、外部生の人数が少なかったら、一応混合クラスもできるのか。それをはっきり答えてくれなかったのです。

しかし、文部科学省初等中等教育局に奔走していただいて、全部認めました。これも Q&A の中の質問事項で明確になりましたので、その中で判断をすればいい。あとは70単位です。いわゆる先取り。こういうものもできる。これはカリキュラムを変更して届け出なければいけないのですが、そういうことができるようになった。中高一貫教育をやっているところは届け出はしておいたほうがいいと思います。

ただ届け出て併設型で中高一貫をしますでよいのです。役人というのは変わっていきますので、届け出ていないから、中高一貫ではない、認めないということを出す可能性があるのです。だから、そこのところはきちっと握っておいていただければと思います。

それから、物事は一人の人の考え方で決定することが多いのです。ですから、地元の議員とか行政の方も含めて、常日頃から、いろいろな意味での人間関係を大切にしておいて、私学に対するよき理解者を確保していくことが大事だと思います。

事例でいいますと、耐震補助は改築も今、認められるようになり、文部科学省で予算をつけてくれるようになりました。そのきっかけというのは、本当にひょんな事なのです。遠藤利明さんという山形県選出の国会議員で、元文部科学副大臣です。吉田先生とずっとお付き合いがあるのですが、会食の場で「耐震で、東京都では改築を認めているのですが、国では認めてくれない」というと「今、公立となっているが、公立は27年度までに終わる。その後、私学もやればいい」といって、「学校施設耐震化等整備促進議員連盟」になったのです。会食をしなれば全く出なかった話かもしれません。

学校週5日制などについてもいろいろな闘いがありました。文部科学省が5日制を強要してきた時も、東京都の議員が「私学に対してはどうするのだ」と、本会議で質問したのです。すると石原都知事が、私たちはある意味で交流はあり、理解を求めていたのですが、「文部科学省のいうとおりにする経営者はいかがなものか。私は好きなようにやる」といったのです。すると、次の日に、朝刊に載って、そして、最終的に私学には強要しないということを文部科学事務次官が明言し、現在に至っているのです。

その当時、「5日制にしない私学の校長の見識を疑う」といった方がいるのです。私たちは見識を疑われたのです。しかし、その後文部科学事務次官の言葉で、われわれはやらなくてよくなった。その学校は1年間やった、しかし、次の年に6日制にした、おかしいです。そのようないい加減なことは私たちはやりません。そういうことで、いわゆる誰と接触しているかということも大事なので、個人レベルでもやはり接触して、私立学校に対しての理解を求めていくべきだと思います。

行政対応ですが、ひな形に従うだけで、行政のいうと

おりにやっているだけでは間違いだと思います。これは1つの例として考えていただきたい。絶対、守らなければいけない法律があります。でも、行政が判断した解釈の通りやればいいわけではない。あくまで、もとの法律があるのですから、それはしっかりと確認しておく必要があるのではないかと思います。

例えば、東京都で、寄附行為が平成18年全面改正されました。その時に、ひな形を東京都はつくってくれました。議事録は、いわゆる署名捺印と書いてあるのです。でも、日本の法律で署名捺印など必要ないのです。記名捺印でもいいのです。要するに印鑑がなければいけないということです。それでどこにそのような法律が書いてあるのだと議論となりました。書いてありません。結果的には、これを認めました。理事に全部署名をさせて、それで印鑑を押さなければいけない、そんなルールは決める必要はないのです。議事録をパソコンで打って、全部の人の名前を記載しておいてはんこを押せばいいということにしました。

そういうことも法律を読み込んでおいて、ぜひやっていただきたいと思います。

私は私立学校に来て感じたことですが、理事構成は最も重要だと思います。会社組織と違い、株式はありませんから、オーナーというのはいないです。お金も何もいらない、理事会で認められた人が理事になって、その中の互選で理事長になる。互選で、あなた降りろといわれたら降りなければいけない。任期が来たら、自分は退任しなければいけない。それほど理事構成というのは大事なものだと思います。それで、間違えて有名人を入れたり、有名人と違う人が結託して、自分が追い出されたり、あるいは内輪もめしたりということはあるのですが、お金が絡みませんので、誰でも入れるのです。この辺は注意したほうがいいと思います。私は実感しました。私も民間企業に勤めていたことがあるので、それからいうと、相当違う。誰でも入ってきて、学校を持っていかれてしまうのだなということは体験として、皆さんにお伝えしておいたほうがいいと思います。

最後になりますが、私は教育はエンドレス、限りのないものだと思います。教育は、最高のボランティアだと思います。生徒は学ぶ時代を選ばません。だからこそ生徒のためにわれわれ私学人は懸命に努力していくべきだと思います。私立学校が現場を大事にしつつ頑張っていくことが日本の教育を正しく発展させることになると思います。皆さんと一緒に頑張っていきましょう。

ありがとうございました。



パネル・ディスカッション

「グローバル化時代に求められる人材育成と学校経営～経営者の視点からグローバル社会と私学の未来を探る～」

パネリスト

日本GE株式会社 代表取締役／GEキャピタル 社長兼 CEO

東京インターナショナルスクール 代表／日本国際教育センター 代表取締役

麹町学園女子中学高等学校 理事長・校長

コーディネーター

聖パウロ学園高等学校 理事長・校長

安 渕 聖 司
坪谷ニューエル郁子
相 川 忠 洋
高 橋 博



司会（住川明子・跡見学園中学高等学校副校長）

私学経営部会運営委員会では、部会テーマを「グローバル化時代に求められる人材育成と学校経営」と定めました。そして、今回は、私立学校関係者だけではなく、実業界やほかの分野で世界的に活躍されている方から見たグローバルを学ぼうということで、長い時間をかけて、ふさわしい方をお探しいたしました。今日お越しの皆様が何か一つでも新しい発見をお持ち帰りいただければ幸いです。

● 高橋先生（以下、コーディネーター）

パネル・ディスカッションということで、3名の方々に来ていただいております。

まず GE キャピタル、GE というのは例のエジソンがつくった会社、ゼネラル・エレクトリックで、その金融部門 GE キャピタルの社長兼 CEO であります安渕聖司さんです。東京インターナショナルスクール代表で、国際教育及び国際バカロレアの専門でいらっしゃいます坪谷ニューエル郁子さんです。私たち私学の代表といたしまして麹町学園女子中学高等学校理事長・校長の相川忠

洋先生です。

この3名との話し合いによって、皆さんにどれだけグローバルに対しての知識や問題点を注意してもらえるかということで進めたいと思っております。

流れとしては、第1部は、自己紹介と、3名の考えられるグローバル性、あるいは今どういう立場で、どういうことをなさっているかなどを含めて、15分ずつぐらい、45分くらいはそういう時間を設けたいと思います。第2部は、約1時間、議論を進めていきたいと思います。第3部は先生方に会場でご記入いただいた質問用紙に基づく討議ということにしたいと思いますので、ご協力をお願いします。

それでは、まず、安渕さんから、パワーポイントを使っている自己紹介と、グローバル性に対してのご意見をお伺いしたいと思います。

● 安渕さん

私からは、企業の視点ということで、まずは、グローバル企業の GE がどのような会社であるのかということをお話いたします。それから、簡単な私の自己紹介、GE ではどのような人材が活躍しているのかということをお話したいと思います。

トマス・エジソンのいっていることは、世界が今、本当に必要としているものをつくるということです。エジソンは発明家として知られておりますが、今の言葉でいうと、イノベーションを起こしてきた人だ、イノベーターだとわれわれは思っています。したがって、世界は一体何を必要としているのか、無いものをつくらうというのがエジソンの発想です。われわれは GE のことを、この発想を受け継いできた企業と考えています。

何をする会社なのか。よくミッション・ステートメントということを申しあげます。われわれのミッション・ステートメントというものは、比較的最近つくりました。

GE 全体の CEO の Jeffrey R. Immelt という人間がいます。彼は2001年9月に、その前の Jack Welch とい

う有名な経営者を引き継いで、GE 全体の CEO になりました。その時の年齢が45歳です。それから13年たって、今58歳になっています。

われわれは、どんな会社かという時に、まずはイノベーションとテクノロジーがベースの会社であるということからスタートしています。

事業は何か。インフラストラクチャーと金融サービスということですが、この後、中身が出てきますが、製造業の部分と、私の所属している金融サービス、GE キャピタルの部分、この2つでできています。

何をやるかという、世界の困難な問題をお客様と社会のために解決して、同時に、株式会社でございまして、世界的にもすぐれた業績を残していく、これがわれわれのミッションです。



世界の困難な問題というのは何かというと、例えばエネルギー問題があります。今、われわれのビジネスの中で一番伸びてきている市場は、実はアフリカですが、アフリカで一番足りないもの、例えば電力です。電気がない。電気がないと病院もできないということです。そういったインフラ部分の問題。それから水です。それから医療。こういったものを提供していきたいということです。

それから、そういった全体を可能ならしめる金融です。では、どこからお金を持ってくるのだというようなことをやってきました。こういったミッション・ステートメントを持って、会社を運営しています。

企業の概要です。最初、エジソンは、1878年に、エジソン・エレクトリック・ライト・カンパニーという会社をつくりました。14年後に他社と合併して、現在のゼネラル・エレクトリック・カンパニー (GE) という会社になりました。本社はアメリカの北東部、コネチカット州に置いています。ニューヨークの JFK 空港から1時間半くらい北に上がったところ です。

現在、世界170カ国地域で事業を展開いたしています。従業員約30万人の企業です。先ほど申しあげた Jeffrey R. Immelt が2001年から会長兼 CEO をやっています。

市場のいろいろな評価をいただいています。GE になってから4年後に、Dow Jones という会社が、いわゆる株式指数というものを導入しました。日経平均というのが日本にありますが、これはダウ平均の考え方からできました。1896年に12銘柄でスタートした Dow Jones の平均株価指数に最初から入っていて、今日まで残って

いる会社は GE だけです。現在は30銘柄できています。

格付けは Standard & Poor's と Moody's ですが、それぞれ高い格付けをいただいております。

GE 全体を買収すると幾らかかるか。時価総額で、全株式を買いますと約28兆円、そういう金額です。

トヨタがおそらく20兆円を超えていると思いますので、そういった規模感ですが、アメリカで大体7位くらいの規模です。ちなみに一番大きい会社はアップルです。

事業部門の昨年の売上高ですが、全体は70%が製造業、30%が金融サービスという構成になっています。

それぞれの中で一番大きいのがいわゆるエネルギー関連ということになります。もともと電気、電球や発電機からスタートしている会社ですから、今でも、例えばガスタービンとか風力、原子力、そういったものをつくっております。それから、油田、ガス田等の掘削をする機械、現在、地上からだんだん深海に移っておりますが、そのような機械類、それに伴ういろいろな計測器、そういったものをやっています。

それから、中堅規模のビジネスが2つあり、一つはヘルスケアです。これは主として CT、MRI、超音波といったような機械をつくっています。

それから、アビエーションというビジネス。航空機エンジンです。日本の民間航空会社、例えば JAL や ANA などがありますが、その飛行機の実に80%に GE のエンジンを使っています。全世界的には50数%くらいのマーケットシェアを持っています。

機関車、日本では入っていませんが、アメリカとか、カナダとか、大陸に行くと、長い貨車をつないだ機関車が走っているのをご覧になったことがあるかもしれません。例えば穀物を運んだり、石炭、いろいろなものを運んでいます。その先頭部分の機関車をつくっています。機関車も実は今ハイブリッド化しており、大きな電池を積んだ機関車です。

それから、アプライアンスとライティング、照明部門と家電部門です。われわれはいろいろな形で事業の内容を組みかえてきていて、つい最近、アプライアンスというのは冷蔵庫とか洗濯機をつくっている部門ですが、スウェーデンのエレクトロラックスという会社に売却することが決まりました。そんな形で事業を入れかえながら進んでいます。

全体の売上は14兆円。連結上の利益で1.3兆円という規模の会社です。

日本における GE ですが、日本では、実はエジソンが発明した白熱灯フィラメントの話が有名だと思います。今では偉人伝などで、小学校に行くと偉人の伝記が置いてありますが、まずは第一巻エジソンの場合が多いです。京都の竹が白熱灯フィラメントに使われて、初めて白熱灯が1,000時間以上の長時間点灯することができて、実用化することができたという例があります。

皆さん、では、どうしてエジソンが竹を思いついたのか。これは扇子なのです。エジソンがある時、おみやげでもらった扇子を見る。扇子の骨の部分です。この竹を見て、これを使えないかということからスタートしたといわれています。6,000種類以上の材料を試して成功したという話です。

1903年に日本で販売事務所をつくって、110年くらい日本でビジネスをやっている、そのような会社です。

いまや5,000名弱の人数で、4,000億円ぐらいのビジネスを展開しています。

私のところは、GE キャピタルというところですよ。GE キャピタル、いわゆる設備・資産のリース業、それから車のリース及び車両管理業、小口のリース・クレジットといったような製造業から事務機までいろいろな形の金融事業をやっています。

私自身の略歴ですが、私は1979年に早稲田大学を卒業し、最初に三菱商事に入りました。そこで貿易金融など、いろいろな金融業をやってまいりました。20年くらい勤めたわけですが、その間に会社の留学システム、奨学金を得ることができ、88年から90年までハーバード大学のMBA コースに通うことができました。99年から、転職をして、リップルウッド・ジャパンという、日本にあった長期信用銀行が破綻した後、これを買収したファンドです。その後、新生銀行になっています。それがもともとのリップルウッドの仕事の一つです。

金融のキャリアをしっかりと追求していこうということで、2001年から UBS 証券に移り、ちょうど民営化ということが大きく出た頃で、JR の株式を売却するとか、それから J パワーという会社がありますが、ここを完全民営化する、そのようなプロジェクトを証券会社として担当しました。

2006年に GE から声がかかって、当時、コマーシャルファイナンスといいましたが、GE キャピタル、GE の金融事業に來ないかと誘いがあり、2006年、今から8年4カ月前に GE に入って、その後、2007年の秋から日本の代表としてずっとやっています。

ちょうどその後、まさにリーマン・ショックを乗り越えてといったような話で、そこはいろいろなことがあったわけですよ。

今、経済同友会の幹事を務めています。結構、教育関係ということで、NPO との絡みが多く、放課後 NPO アフタースクールのアドバイザリーボードのメンバーをやっています。これは学校が終わってから、アフタースクールということです。アメリカに結構アフタースクールはありますが、これを日本でも導入するといったようなことをやっている人たちのお手伝いをしたり、インターナショナル・オブ・アジア軽井沢という学校が今年の8月にオープンしましたが、そのファウンダーの一人として支援をしたりということです。教育といったようなところには時間も情熱も使っております。やはりわれわれは人材がとても大事なのです。より優秀な人材、より多様な人材、こういった人たちにきてほしいという気持ちがあります。

最後に、私たち GE で活躍している人材です。われわれは今、新卒を採用しています。それから中年でも入ってきてもらって、いろいろな人に活躍をしていただいているわけですが、日本人だけではなく。どのような人なのかということです。例えば新卒で入ってきて、とても活躍する人と、なかなか伸び悩む人がいます。活躍する人は、やはり変化を恐れず、変化に前向きです。

ビジネスをやっていると、いろいろ環境が変化します。

新しい競争相手が出てきた、新しい製品が出たり、お客様自体がいろいろ変化していく中で、やはり変化を恐れない、変化に対して前向きに取り組んでいくということです。そういったことを、むしろおもしろがってどんどん変化していく人材というのは非常に活躍しています。

それから、いろいろなことがあった時に、人ごとではなく、自分のこととして捉えられる、そういう特性です。例えば学校でもそうだと思いますが、学校で何か新しいことをやろうとした時に、別に応募したわけでもないのに、私はこういうことをやってみたいとか、私はこういうことを自分から手がけてみたいと取り組んで来ると、何か人ごととして引きずられていくタイプと両方いると思います。現在、活躍している人材は、やはり自分のこととして受けとめて、どんどん自分として取り組んでいくことができる人材です。

したがって、やはり知的好奇心が強い人、学び続けていくということです。今、知識の陳腐化も激しいので、どんどん新しいことを学んでいく。それから、学ぶことを一つの、自分の仕事の目的だけではなくて、やはり知的好奇心ですので、周りにどんどん広げていくということです。直接関係ないかもしれないことも、自分のある意味、知的好奇心のおもむくままに、いろいろなことに触れていける。それがどこかでうまく組み合わせたり、うまく機能して新しいことにつながっていく、そのようなことがあると思います。

それから、チームワークです。会社で仕事をしている理由というのは、一人ひとりでやるよりは会社という組織をつくったり、チームをつくったりしてやるから、一人ひとりよりも大きなことを達成できるから会社組織としてやっているわけです。したがって、そのチームで仕事ができること、チームのアウトプットをどうやって増やしていけるか、チームに貢献するなど、そういった自分なりの役割をチームの中で見つけていく、それは同じ役割でなくても構わないわけです。そういったことができるということです。

それから、自分の考えを持って積極的に発言する人ということです。やはりどうしても人と違うことを恐れるメンタリティというものがありますので、そこで手を挙げて自分の意見をいうとか、そういったことを最近、昨日も実は入社半年の新人と話をしてきたのですが、やはりしっかりと意見をいう人は前に出てきます。

それから、多様性です。とにかく多様性、男性、女性のみならず、年齢の違いも超えて、あるいは国籍の違いも超えて、そのような多様なチームをつくって、そこでいろいろな議論ができて、それを積極的に活用できる。違うことがある意味おもしろいと思って、違った意見を聞いて、やっていける人です。

そういう人はイマジネーションがすごく豊かで、新しいアイデアを実行する。実行するにはやはり勇気がいるのです。リスクもあります。人と違ったことをいうと、最初はばかにされたり否定されたりします。それにめげずにやっていく。

そのためには、リスクを取るということです。自分として、これは本当に良いと思ったら、みんなに反対されても、絶対やりたいのだと、これはやったほうが良いと

思いますといい続けていける、そういった芯の強さのようなものです。

マネジメントという意味では、会社で人を率いていくことの中で一番大事なことは自分に対する自覚なのです。自分が思っている自分と、人から見えている自分の違いです。自分の自覚というものは、自分はどこが弱い、どこが強い。弱い部分はどうやって補完すればいいのか。それが例えばチームであったり、他の人であったりするわけです。自分に対して常に自覚し、自分に対するフィードバックを恐れない、そういったことです。

ベースとなるのは、高い倫理観であって、われわれは英語で *integrity* という言葉を使っていますが、ただ単に、例えば法令を守るということではなく、これは例えば社会のためになるのか、お客様のためになるのか、会社のためになるのか、そういったことをしっかり問いかけていき、高い水準を守っていくということで、われわれはニューズペーパーテストといっているのですが、新聞に出た時に、これは本当に誇りを持っていえることなのかと、そのようなことをいっております。

このような人材が、GE ではとても活躍しております。そのようなことをまず最初に申しあげたいと思います。

● コーディネーター

坪谷さんからお願いしたいと思います。



● 坪谷さん

私は、今このホテル(グランドプリンスホテル新高輪)の近くの願海寺というお寺の境内の中にある小さな寺子屋に、実はこの寺子屋は、私が入らせていただく前は寺山修司さんが住んでいて、劇団の皆さんとさまざまな議論を交わしていたという場所ですが、1985年12月に引っ越しをして、自分でペンキ塗りをし、3,000枚コピーをつくり、私が教えたのはこんなことだ、そんなことを書いてご近所に配り、学校を始めました。

実はその前、1年半かけ、私がどうしても教えたいと思っていたのは、米国滞在中ではございましたが、*I am Special, You are Special* という概念です。つまり私が今ここに存在するのは奇跡である。それは全ての *You*、もちろん親から、そして友だちから、自分の地域の人から、宇宙から、水から、植物から全てのものによって支えられているのだ、これを何とかして教えたい。その気持ちで開いたのがこの学校です。

その後、5年間で都内に、小さい場所ですが、寺子屋を3軒つくり、合計の生徒が1,000名になりました。

今、この組織は、名前を日本国際教育センターと変え、外国人教員が120名在籍しています。そして、いろいろな教育機関にいき、生徒とどのくらい絶対数の時間を費やすことができるのかを調べ、これをもとに探究型のカリキュラムをつくり、いろいろなところで指導に当たっています。

次に手掛けしたのは、実は私は91年に縁があり、米国人の夫と結婚しました。そして、92年、93年と幸運にも二人の娘を授かりました。年子です。1歳1カ月、1日違いの娘です。その子どもたちが生まれた時、妊娠していた時には私もカリキュラムづくりにはまっておりましたので、子どものためにどんな教育をしていけば良いだろうというようなことを考えるようになりました。

そして、上の娘が3歳になった時に、チルドレン・ハンスという小さな幼稚園、といいましても生徒は5人でしたが、を開園しました。そして、娘が年少から年中、そして年長になった時に、東京インターナショナルと名称を変えて小学校を開くに至ったのです。そして、娘の成長とともに小学校をつくり、中学校をつくり、中学2年までの学年をつくってきました。この東京インターナショナルスクールは今年度で51カ国の生徒が通う360名の学校として成長しました。

生徒の95%は日本に3年から4年住む駐在員、うち3分の1は公務で日本に来ている大使館の職員の師弟です。この学校が、生徒たちが3年から4年後にはどこの国に行くのか分からない。したがって、どこの国に行っても教育を継続させられるプログラムの枠組みに入らなくてはいいけない。それで、いろいろと調査をした結果、選んだのが国際バカロレアというカリキュラムでした。ここで、私と国際バカロレアの出会いがあったわけです。

そして、この学校は、皆さん、学校に来られますと、さまざまな国の子どもが来ているので大変華やかには一見見えるのですが、この子たちというのは、3年から4年ごとに、どこの国に行くのか分からない、ある意味、根のない子どもといわれる問題を抱えている子どもたちです。この子たちのために、根をどこに置くのか、それが私たちにとって大変大きな問題です。

実は私はインターナショナルスクールの世界に入ってから、驚いたことがあります。と申しますのは、10年生、日本でいう高校1年生になると、いろいろな学校が「あなたはちょっとこの学校には合わないから、ほかの学校に転校してください」といわれる一定数の子どもがいることに気がついたのです。最初、私はなぜなのだろう。その理由が分からなかったのです。

確かに、見ますと、少し成績が余りよくない、友だちがなかなかできない、何らかの問題を起こしている、そんな子どもたちでした。なぜこの子たちは、そんな問題を起こしているのだろう。そのようなところを調べていて、行き当たったのは、発達障害という概念でした。アスペルガー、自閉症、学習障害など、さまざまな理由で「他の学校に行きなさい」といわれてしまう一定数の子どもたちです。私はこれはいけないと思いました。

そこで、NPO のインターナショナル・セカンダリースクールという学校をつくりました。この学校は小さな学校です。今年度も42人しか子どもはいません。しかし

国籍数は17カ国です。そのうちの3分の1は日本国籍の子どもです。

この子どもたちというのは、年長からインターナショナルスクールに通ってしまい、つまり日本の学校、日本語が余りおぼつかないという子どもたちです。

そして、一番新しい試みがグローバル人材研究所です。実をいいますと、私の娘は現在22歳ですが、彼女が9年前に泣きながら私にこういったのです。「ママ、私には親友がいない」。なぜかと思い、話を聞いていると、私のつくった学校は3年から4年ごとに子どもが変わりますので、彼女は小学校1年生の時の同級生はクラスには一人もいなかったのです。そして、彼女はいいました。「私は日本にいと外国人といわれる」。なぜかという、私の子どもはハーフです。「しかし、パパの国、アメリカにいと日本人といわれる。私は一体何人なんだろう」。私はそれを聞いた時に大変なショックを受けました。その時は「東京インターナショナルスクールは世界のモデル校だね」、そんなことをいわれて私は鼻高々でした。しかし、自分の子どもにそんな思いをさせてしまった。間違いをしてしまった。どうしたらいいのだろう。頭を抱えました。そして、出た結論は、初等教育は、日本の子どもは日本の学校に行くべきだ。それが私の出した答えでした。

しかし、私は自分が推進してきた教育を諦めることはできませんでした。それであれば、学校が終わった後に来る学校をつくれればいい。アフタースクールを重視させればいい、そんな気持ちでつくったカリキュラム、これを「坪谷さん、すばらしいことをやっているね。だったら日本中に広めようよ」といってくださったのは住友商事でした。そして、去年の2月に50%ずつ出資をしてつくったのがこのグローバル人材研究所です。

そして、国際バカロレア、実は本日、そのお顔を見てほっとしたのですが、漆 紫穂子先生と2008年から下村博文先生の個人的な勉強会に、1カ月に1回呼ばれるようになりました。それは、下村先生が文部科学大臣になった際にどんな政策をするのか、そして、その時、先生は本を書きたいという話でしたので、その本はどんなことを書いていくのか、それをゴールに集まる会でした。

その中で私にチャンスが回ってきて、私がプレゼンテーションをする機会になりました。その時2回に分けてプレゼンテーションをしたのが、国際バカロレアを日本の教育に入れることによって、それが起爆剤になって初等教育、中等教育に変革を起こせる。ついては、そこから輩出される人材が変革することによって高等教育も変わっていく。その結果、センター試験が廃止できる。こんなことを2カ月にわたり発表させていただきました。

まず、ここで国際バカロレアについて簡単に説明させていただきます。

国際バカロレアは、1968年、スイスのジュネーブにあるインターナショナルスクールから始まりました。その当時、スイスは大変国際的な組織が多く、そこの師弟たちが通う学校は、私がやっています学校のようにさまざまな国の子どもたちが通っていました。その子どもたちが高校を卒業し、大学に行く時には各国それぞれ違った大学の入学試験の案件がある。これはいささかよくない。

ということで世界共通の成績証明書、それをつくりたい、それがきっかけでした。

また、一方、その当時、ヨーロッパは第二次世界大戦の爪跡があり、2つの勢力に分かれて戦っていたので、この国際バカロレアというのは1国主義によらない世界の平和に寄与する人材、これを育成することを理念として設立されました。

そして、現在は147カ国、3,800の認定校があります。その中、私が昨今、大変感激いたしましたのは何と北イラク、イラクに認定校ができたことです。私は本当にびっくりしました。世界の大学の中でも、現在2,000以上の大学が国際バカロレアのスコアを大学入学審査に使用しています。ここ5年間での認定校数の伸びは目を見張るものがあります。

実は、バカロレアは世界を3つの地域に分けて、それぞれ委員会があります。1つはロシアも含むヨーロッパ、中東及びアフリカ、1つはアジア、太平洋、1つは米州、北米、南米なのですが、今とても熱いのは南米です。日本は、これから話をしますが、2018年までに200校といっていますが、南米ではエクアドルが4年間で500校の認定校をつくと2年半前にいいました。実はその声が出た時には委員のみんなは「そんなことできないよ」と高をくくっていましたが、2年たった時に既に250校が申請をしています。そのほか、メキシコ、ペルーなど、公立校での動きが熱いのが南米です。

ヨーロッパでは、期するところ、私も驚いたのは、モスクワ市で、市長が公立の学校で認定校を目指すところに財政の支援をするといいました。また、アジア太平洋地区で熱いのはインドです。去年の4月に認定校は100校を超えました。そして、年間30の勢いで認定校が増えていきます。またマレーシアが去年の5月に合意書を政府と国際バカロレアの間で組み、10週の間1つずつモデル校をつくり、中学からの国際バカロレア認定校を増やしていく、そのような動きが世界の動きです。

その中で、日本の動きですが、実は2012年春に、アジア太平洋地区の委員会の委員長より電話をいただきました。「日本の政府が日本の教育の中に国際バカロレアを入れようとしている。坪谷さんは国際バカロレアのこともよく知っているし、日本人だから委員に就任して、その間のいろいろな調整をしてくれないか」そのようなお願いでした。

私は、先ほどお話したように、願ってもないチャンスと思いましたのでそれを引き受けました。それから、昨年3月に合意書が、山中文部科学事務次官がハーグに行つて、調停書に合意をしたわけですが、山中事務次官が行かれるまでの間、さまざまな議論がありました。その中で特記すべきことは、国際バカロレアの大学入学準備コース、このほとんど全ての科目を日本語で受講できる。そして日本語で試験ができるといったところです。

国際バカロレアは6科目を、文系と理系両方とも受けなくてはなりません。そのうちの3分の2が日本語で受けられます。それ以外、卒業論文に当たる課題論文、哲学のような TOK、これは論文とプレゼンテーションが最終試験です。そして、創造性、スポーツ、奉仕活動、これら全てが日本語でできることになりました。その合意

書が3月に結ばれたわけです。その内容は、2018年までに国際バカロレアの認定校を200校に増やすといった約束です。

さて、私はその合意書が結ばれた後、これは困った。200校達成するには解決しなければいけない課題がある。1つが大学入学の門を開けるということです。2つ目は学習指導要領との融合、3つ目が外国人教員の免許問題、4つ目が教員の育成、この4つの課題を抱えていました。

どうしたものかと考えた結果、私は、前駐米大使の藤崎一郎先生に相談に行きました。この4つの課題を解決しなくてはならない。先生が委員長になって委員会を開いてください。これが国際バカロレア日本アドバイザリー委員会の設立です。先生の教えもあり、主要大学の学長及び副学長、そして経団連からの代表の皆様、そして教育委員会、そして校長先生及び教頭先生などの有識者の皆様、そういう方に集まっていただき、去年の7月よりさまざまな論議をしてきました。

その結果、去年の6月に安倍首相が、2018年までに IB 200校ということを閣議決定し、その後、10月の教育再生実行会議第4次提言において、大学入試において国際バカロレアのスコアを活用することを政府は支援すると明言いたしました。お陰様で、今年4月に文部科学大臣に委員会報告書を提出し、ここに参加いただいた東京大学、京都大学、筑波大学、大阪大学、慶応大学、早稲田大学、東京学芸大学、玉川大学、上智大学の大学の門が開くことになりました。大変ありがたいことと思っています。

この中で、ただ一つだけ、まだガイドラインが出ていないのが学習指導要領との融合です。しかし、この点も今年度中にガイドラインが出ることになっていますので、ややほっとしているところです。

さて、私が今、取り組んでいること、次に何をしようかということは、本日より先生方の学校が積極的に新しい世界標準の教育を取り入れたいと思った時に支援する財団です。これは財政的な支援、もしくは教諭のトレーニングの支援、このために民の力を入れていきたい、民のみんながそれを支えていきたい、そのような財団をつくろうと思っています。今月中に世界で生きる教育推進支援財団というものを設立する予定です。

こうして、私は、国際教育の片隅ではありますが、29年間、何とか頑張ってきました。また、これから先、皆様とともに歩んでいきたいと思っています。

● コーディネーター

最後に相川先生、よろしくお願いします。

● 相川先生

Good afternoon、Bonjour、シンチャオ、 ニイハオ、サラーム ハステナバシ。

今少し難しい言葉、聞きなれない言葉が1つあったと思います。ペルシャ語で、こんにちは、お疲れさまという表現の言葉なのです。サラマレコン、ハステナバシ、何千kmも離れたところで、イランの人たちが日本人と全く同じ挨拶をしている。こういう世の中です。

ただ、今日は私はそういう話をしに来たのではありません。グローバル人材教育、私学経営というテーマをいただきました。なぜこの3人の中に選ばれたのかという

ことを思いますに、理由が2つあると思います。

1つは長塚先生と高橋先生の策略、2つ目は、私の経歴からおそらく選ばれた、そんなことがあったのではないかと思います。



私は高校2年生の時にアメリカに1年間の留学をいたしました。アメリカンフィールドサービスという、高校留学では先端をいくプログラムのもとで、ミネソタ州のホワイトベアレイクという大変小さな町の公立学校にホームステイで行きました。英語の壁が私にとっては大変高いものがあって、学校が9月に始まって、12月のクリスマスくらいまでは、学校に行っても授業を聞いても全然聞き取れない、宿題も分からない、そのようなことだったのですが、とにかく口に出して試みよう、何とかしようという気持ちでやって、その結果、慣れるようになったのです。

その町は大変小さな町だったこともあって、日本人は私ともう一人は沖縄出身の奥様が一人だけで、日本人は大変珍しいということで、クリスマス頃になるとお座敷がかかってきて、日本についての認識がフジヤマと芸者というくらいしかない中でとにかく話をしてくれといわれました。

拙い英語だったと思うのですが、今にして思えばよくやったと思います。JTB が出していた「JAPAN」という、小さい本があり、それと、日本から取り寄せたスライドで、日本についての話を何回もすることになり、随分、自分なりに、改めて日本についての勉強をしました。17歳でした。その時のことを少し思い出します。

先日、ノーベル平和賞を受賞したマララさんのスピーチを聞いていたのですが、英語自体は話し言葉で、センテンスが、and から始まるのが、非常に多かったのですが、いっている内容で大変感じるところがありました。

その1つは、人は皆同じ。肌の色や話す言語あるいは国が違ってもみんな同じだと。そういうことを彼女はいました。それから、今日、私がここにいるのも、お父さん、お母さん、家族のみんなのおかげで感謝していますと、大変その言葉は私にとって感銘の深い、印象深い言葉でありました。

さて、その後、私は大学を出てから住友商事に入りました。先ほど坪谷さんが私の元の部下と現在一緒に仕事をしているという、またこれも大変な出会いといえますか、驚きで、うれしかったのです。ニューヨークに1970年から6年間駐在しました。73年には第一次オイルショ

ックがありました。普段のんびりしているアメリカ人は大量消費、大量生産に慣れている人たちですが、あれだけのオイルショック、物不足になった時にパニックになって右往左往する姿を目の当たりにしました。

さて、その後、日本に帰ってから次の任地がイランです。イラン住友商事の社長を3年間つとめました。当時はイラン・イラク戦争中です。ですから、毎日がいざという連続で、ミサイルの攻撃もありました。それから、イランというところはやはり外人が少ない、外人は来なくてもいい、当時、ホメイニの時代ですから。必ず外人は監視されている。スパイをやっているのではないかと目で見られていたのですから、何かあったら頼むねという人脈をつくるというのが社長として大変大事な仕事でした。

戦争が激しくなって、いざとなったら逃げ出さなければいけないということもあって、これは何とかペルシャ語をマスターしなければいけないということで覚えました。必要に駆られてということだったと思います。

その後、駐在地はベトナムのハノイとなり、3年間いました。当時の首相ポー・バン・キェットさんは、テニスが好きで、ちょっとしたご縁でキェット首相と毎週テニスをやるという経験もしました。コートサイトで、テニスが終わった後、みんなで生ビールを飲みながら、ベトナム語でおしゃべりをしている。その会話に何とか自分も入りたいという思いでベトナム語もレッスンを取って、日常会話程度はできるようになりました。

その後、ベトナムから帰って、その足で大阪のユニバーサル・スタジオ、テーマパークですが、そこに約9年いました。企画、建設、開業、そのような仕事をしたのですが、ユニバーサル・スタジオは大阪市の第三セクターで、外資であるユニバーサル、イギリスの会社、鉄鋼、造船メーカーなど、寄り合い所帯の最たるもので、そういう異文化の集団の中で一つの意見をまとめて物事を進める、こういう経験をしたのです。

特にライセンスを持つユニバーサルと、なかなか、テーマパークそのものを知らない、行ったこともないという人たちとの間の調整には大変手間取って、労力を費やしたこともあります。アメリカ人とも随分喧嘩ごしの議論をしました。

テーマパークは本当に楽しいというイメージをお持ちだと思いますが、われわれ経営する側にとって一番大事なことはゲストと従業員の安全安心ということです。

私は麴町学園に2005年に来て、2006年に理事長になったのですが、意外に学校とテーマパークというのは共通点が多いということです。夢と感動の世界、期待を上回る感動、思い出づくりであるとか、リピーター、それからルールを守ってみんなで楽しむといったところです。何よりも重なっているところは、先ほどいったゲストの安心安全、学校でも生徒の安心安全ということでありました。

私が経営者としてまず手掛けたことは、もしも大震災が東京に来た時の対応策です。2007年にはマニュアルをつくって、備蓄品を揃えました。そのマニュアルの基本というのは、もし大震災が来た時には生徒、教職員は学校で待機する。安全が確保されてから初めて帰宅しても

らう、そういう骨子でつくったのです。3月11日、東日本大震災の時には600人の生徒、教職員が学校にいましたが、一晩泊まって翌日無事に全員帰宅できた、こういう体験もできたのです。

次にグローバル化ということについて一言申しあげると、後ほど話が出ると思いますが、さまざまな定義があると思います。まず英語ができることといわれていますが、私はこれはコミュニケーションのツールの1つであると思います。ともかく自分が伝えたいという意志があればということではないかと思っています。

麴町学園では国際交流を進めているのですが、各学校がいろいろな取り組みをされている中で、本校は小さな学校ですから、身の丈に合った国際化、グローバル化の取り組みをするということで進めてまいりました。余り華々しいことはやってはいないのですが、留学生の派遣もしています。

それから、何よりも大事なことは日本の文化、伝統、歴史、それをきちんと身につけるということ、これこそ大事ではないかと思っています。リーダーシップであるとか、あるいは異文化の中での調整能力とか、いろいろなことがいわれていますが、本校では、まだまだ残念ながら、一挙にそこまで行くのはということでステップ・バイ・ステップ、段階的に進めようという思いで進めています。

したがって、グローバル化というのがふさわしい呼び方かどうかは別にして、他の呼び方でどういうことがあるかといった時に、2012年に2人担任制というものを導入いたしました。中学1年、2年、クラス担任2人、複眼で1人の生徒を見ようということです。中高一貫の6年の中で最初の2年間できちんと学習習慣、生活習慣を身につけてもらう。大変贅沢といわれるかもしれませんが。今、いろいろな家庭の教育ということを見る時に、これは1つの生きる力をつける上で取るべき道ではないかということで2年間やってみました。今のところ、大変良い結果が出ていると思います。

大したことはないのですが、「当たり前のことを当たり前前にできる、そういう人になろうね」、「忘れ物をしない」、あるいは「挨拶をきちんとしよう」、「年上の人と話す時にはきちんとした敬語を使って話ができる習慣を身につけよう」などというようなことを常に話をしています。

それで、国際化に話を戻しますが、留学制度、例えば修学旅行はシドニーに行くとか、ニュージーランド語学研修、それから、今年から東京都の補助金もいただいていることもあって、ニュージーランド3カ月の留学生派遣をしています。1年間、マレーシアとスイスにも行っている生徒もいます。

しかし、私は、出すばかりではなくて留学生の受け入れということも大変大事だと思います。本校には留学したくても行けない生徒もいます。あるいは行かない生徒もいる中で、学校で何かそういった国際交流の機会を提供してあげたいという思いで、受け入れにも力を入れてきました。一昨年はフランスの高校生、今年はカナダのケベックの生徒が来ています。ケベックの生徒はフランス語、英語、ポーランド語と3カ国しゃべるということを聞いて、生徒が大変びっくりしたという、そういう刺

激もあつたりします。

その生徒はまた、クラスを離れて、お茶とかお花のクラスに混じったり、あるいは軽音楽部と一緒にバンドでギターを弾いているといったようなこと、これは学校での小さな国際交流というべきものかもしれません。そのようなことに力を入れています。

グローバル人材という話の中で、私は、先ほどいったように、日本人としてきちんと日本のことについて話ができる人ということが大事なことでないかと思います。そういった意味で、本校は、華道、茶道は必修科目として取り入れています。本校の建学の精神は、聡明と端正、その端正の部分はやはり日本人としてのたしなみというか、そのようなことを身につけてもらおうということです。麹町学園は、そういったことで華々しいところはないかもしれませんが、一步一步、着実に国際化、グローバル化への対応をしている、そういう学校です。

● コーディネーター

3人の方に、それぞれの立場で経歴をお話いただきました。

この後、ディスカッションに移るのですが、私の学校は、聖パウロ学園という名前からお分りのように、キリスト教のカトリックの学校です。私たちの学校は全国に260校も小中高校があり、グローバル化に最も近いのではないかと、外国から来た学校ですからそう思われるでしょうが、意外とそうでもないのです。

相川先生に、最初にお話をした時に、私と長塚先生の策略で、なぜ相川先生に頼んだかということ、一番近いところに座っていたのです。パネリストの2人を探すのにすごく疲れ、3人目はその辺の人にしておこう、そういう意味ではないのですが、まだまだ、グローバル化といながらも、そうなるところに手を出していないといわれる学校、標準的な日本の学校というような意味で、ぜひご発言願いたいということです。

さて、安淵さんにお伺いするのですが、先ほどの話で、グローバル人材というのはどういうイメージですか。

● 安淵さん

グローバルという言葉はおそらく、かなり一人歩きしていると思います。例えばアメリカ人がいて、日本人がいて、中国人がいるとすると、グローバル人というのはないわけです。そもそもいろいろなローカル、それがつながり合っていくということから、グローバルという全体のコンセプトが生まれてきたと私は考えています。

したがって、それぞれのローカルとローカルがしっかりつながり合う。そこがお互いにプラスになるように理解し合い、協力し合うといったようなことがベースに当然あるべきなのです。だから、まずそのローカルを失って全員が同じになることでは全くないと思います。だから、日本人は日本人らしくあることがグローバル人であることの1つの前提条件に当然なってくるわけです。

そういった形で、では、何が必要かということ、やはり違ったものを受け入れる力です。違ったものを恐れない、違ったものを理解して、受け入れていく。それが自分と違うことがどういう意味なのかということを考えていく、それがグローバル化のまず第一歩だと思っています。

● コーディネーター

坪谷さんはずっと昔からやっておられるわけですが、最近、グローバル化、グローバル教育といわれていますが、そのように日本でいわれるのはなぜだと思いますか。

● 坪谷さん

1つは、これは ICT の大きな発展によるものではないかと思います。人も、お金も、情報も、瞬時のうちに世界を駆けめぐる時代になりました。なおかつ知識も ICT の発達により、いつでも瞬時に得ることができるようになった。したがって、今までの枠組みが全てグローバルで考えていかなければいけなくなったというのが1つのきっかけではないかと思います。

● コーディネーター

ICT、つまりインターネットを通して世界がつながっているということも含まれるのでしょけれども、安淵さん、そうすると、世界企業に勤める人たちだけがグローバル化の意識を持つという意味ではないのですね。

● 安淵さん

全く違うと思います。やはりグローバル化というのは、要するにそれぞれの、例えば日本が世界とつながらずに生きていけるかどうかという質問になるわけですが、当然つながっていますし、つながっていないでは生きていけないわけです。したがって、日本にいても当然グローバル化は足もとまでやってきています。別に海外に行くことがグローバル化でなければ、海外に行かなければそういう人材になれないということは全くない。

私は、よく申しあげているのですが、1つは、自分のアイデンティティです。自分は誰であるかということをしかり持っているということが大前提となるわけです。初めて会った人に、「あなた誰ですか、どんな人ですか」と聞かれた時に、どこから来て、どんな歴史があって、どんな人なのだというをしかり語れなくてはいけないということがまず大前提だと思います。

当然、どこかの、それぞれの国にいて構わないわけです。今の ICT の話ではないですが、例えばテレビ会議も進み、実際に物理的に動かなくても世界は完全につながっていますので、そういった意味ではどこにいても同じというのがグローバル社会ではないかと思います。

● コーディネーター

相川先生、地理的な問題ではないということ、先ほどのマララさん、17歳の少女が英語で立派な演説をするわけです。これは日本の高校生ができるかといわれると、少し言葉に詰まるのですが、いかがですか。

彼女が持っている感性というのは、グローバルなところから見ると、どのように思われますか。

● 相川先生

ですから、体験するということは大変大事ではないかと思います。

彼女は、もともと自分が医者になりたい、教育を受けたいという信念を持って、あのような事故が生まれたということだったのですが、その信念を貫き通したということと、周りの人が支えてやった。それを今度、子どもたち、他の人にも伝えたいというように、自分の信念をずっと持続けた。そのためには、拙い英語かもしれないが、とにかくコミュニケーションで、自分の言葉で伝えたいという意味を持って、あのスピーチをしたのだと

思います。

当然、その過程では、いろいろな国の人に出会ったと思います。同時に受賞したインドのカイラシュ・サティアーアーティさんもそうですし、それから、サポートしてくれる国も、いろいろな国の人が出て、それを通じて、自分で世界の人は皆同じということを肌で感じた、そういう人だと思いました。

● コーディネーター

坪谷さん、グローバルという感性は、大人になってからでもできると思いますか。

私たちは、子どもの時に、教育というものでベースをつくろうとしています、教育という意味では、必ずしもグローバル性は学校でやらなくても、それはそれなりに持てるものですか。

● 坪谷さん

大人になってからでももちろん可能だと思います。

私は、グローバルな人材というのは何かと考えた時に、私たちはさまざまな社会に属していて、例えば一番小さい社会では、家族という社会があります。そして、職場という社会があり、自分が住んでいる地域、日本、アジア太平洋、世界、宇宙という社会に属している。その自分が属している全ての社会に対して、自分がどのように貢献できるのか、どのように自分の持ち得る力を還元できるのか、これが考えられる人というのは、私はグローバル人材なのではないかと思うのです。

それには、私は、仮に自分の年齢が70歳になっても80歳になっても、そういう気持ちを持って生きていく気持ちがあればグローバル人材といえるのではないかと思います。

● コーディネーター

私どもは私学経営者の立場で、学校経営という意味から、このグローバルをどのように捉えるかという研究会などを行っているわけですが、安淵さんは、先ほどの多様性の人材の話の中で、多様性の尊重、及びその活用とおっしゃいましたが、この多様性という意味はどういう意味で捉えておられますか。

● 安淵さん

日本の場合、ダイバーシティといったように、まず男性、女性ということが一番いわれているのです。男性、女性にとらわれず、1つのチームを組むことを考えていただければいいのです。ではどういう人たちを入れていけば多様なのか。例えば男性、女性、全く年齢の違う人、経験の違う人、国の違う人、あるいはビジネスの商品開発のようなものを考えると、右利きの人と左利きの人と同じチームに入ってもらい。全然ものの見方が違います。そのようにいろいろな違ったものを持った人が、同じものを見て違った感覚を持つ。その多様性の裏返しは、それを受け入れる力なのです。英語で *inclusiveness* という言葉がありますが、それをどれくらい受け入れられるかです。多様なものを持っていながら、それを受け入れないのは全くもったいないので、受け入れる体制です。いろいろ違ったことをいう、1人が決めつけない、みんなの意見をしっかり聞く、そういった場をつくるということも含めて多様性というようにわれわれはやっています。

● コーディネーター

そうすると、その多様性というものは、グローバルといわれるところの中では大変重要な位置を占めますね。

● 安淵さん

非常に重要な概念だと思います。日本ではまだ十分にその多様性というものが受け入れられてもいませんし、尊重されてもないと思います。多様性ですと、同じものを見て全く違った感動が出てきますので、それによって新しいアイデア、今までなかった組み合わせ、それがやはりイノベーションというもので、イノベーションが起きていくということを、われわれはどうしても過小評価しがちなのです。だから、少し未来に対して暗くなると思います。今までの過去を振り返ると、イノベーションが世界を変えてきて、世界をよくしてきたので、やはりそれを信じて、それを実現しようということを思うと、多様性というのは大きなキーワードになると思います。

● コーディネーター

相川先生がユニバーサルスタジオを立ち上げる時に、市役所の職員もいれば、アメリカから来たバリバリのアミューズメントパークだけやっている人もいます。もう多様性もいいところですね。

そういうところにグローバル性というのが求められている。なかなか大変な世界ですね。

● 相川先生

日本人の仲間との、いろいろな仕事上の進め方と、アメリカ人に対する接し方というのは少し違うと思うのです。日本人は、割と丁寧に根回しをして、コンセンサスづくりをするのですが、アメリカ人は、もうコンセンサスなんて関係ないです。ユニバーサルは直営の子会社だというような感じで来ている。なおかつ第三セクターですから、大阪市がいます。これくらいのことをやっても、何とかしてくれるだろうという、コンプライアンスの問題です。われわれの議論というのは、第三セクターだからこそ、遵法精神でやらなければいけないということをいったり、向こうのライセンス案について会議などを進めようとしたこともありましたが、日本についての勉強不足で、会議は必要ないからやめにしようとなったこともあります。そういうことも必要だったと思います。例えばユニバーサルに入場すると、キャノピーという大きな屋根があるのですが、あれは設計上、最初はなかったのです。アメリカ人を説得するためには、データを示さなければいけないというので、東京ディズニーランドで、温度計を持って、温度をはかって、炎天下では何度、屋根の下だと何度だ、これで設計変更してくれと。相手を説得するためにはどうすればいいかということ工夫するという対応もありました。

● コーディネーター

それは今話したような多様性の尊重というところにつながっていくかと思うのです。つまり自分の価値観だけを押し付けたら話は進んでいけないということですね。

先ほどの安淵さんがおっしゃった中で、自分に対する自覚をしっかりと持つというポイントがあったのですが、それはどういう意味ですか。

● 安淵さん

これは、よく会社経営の中でいっていることです。前

CEO の Jack Welch は日本でもある程度有名だと思うのですが、彼が、20世紀最大の経営者といわれて、「何が一番大事ですか」といわれた時に英語で一言いったのは、「Self-awareness」という言葉です。自覚です。

したがって、やはり自分が理解している自分と人が理解している自分は違います。そこを理解することによって自分が何かをいった時の人の受けとめ方といったものがすぐ分かるようになってくるということで、日本企業でも結構イロハ的に教えています。例えば360度評価といったような人事評価も広がってきています。人事評価に使うか、フィードバックだけに使うか、2つのやり方があり、私たちはフィードバックだけに使っているのですが、それは自分と自分の周り、自分の部下、自分の上司、それから、自分の同僚、同じ会社の中で一緒に仕事をしたことのある人たちからそれぞれいろいろな評価をもらうわけです。それによって、自分はこういうところができていると思っていても、優れていると思っていたところが、他者から見ると、例えば今の話でいうと自分はすごく人の話を聞いていると思っていたら、実は、周りから見るとよく聞いていないと。独断専行型といわれて、自分の思っている自分と全然違う。やはり人と仕事をしていく上で、自分を分かっているということはすごく大事です。

チームとして成果を出すためには、それぞれが、自分が本当に何ができていて、何ができていないかを分かっているチームのほうがはるかに強いということは、特に会社経営などにおいては意識をしながらやっています。

● コーディネーター

そういう感覚というのは、やはりトレーニングとか自分の意識の持ち方次第でできていくものなのですか。

● 安瀬さん

やはり仕組みが必要だと思います。仕組みで、そういったフィードバックを、例えば誰でも面と向かって、「誰それさんが何とかがっているよ」ということは難しいです。

ですから、われわれはアメリカ企業ですが、匿名性をもってフィードバックをするというようなことをやっています。誰がいったか分からないのですが、それをきちんとフィードバックを受けて、自分のものとして受け入れていくというようなことをやっています。

● 相川先生

今のことと関連するのですが、私は学校へ来て開口一番、先生たちの前で「評価は他人ですよ」といいました。「評価は他人」、テーマパークなどはまさにそうです。「べき」だとか「はず」はない、ベースはどうしたら楽しんで貰えるか、満足感を持って貰うにはどうするのかということです。ですから、学校でもやはり生徒の目線、保護者の目線があるから、評価は他人ですよということをいいました。

評価という言葉には大変なアレルギーがあるようで、大反発を受けました。学校の先生というのは、皆さんの中には、大勢の先生方がおられますが、なかなか評価制度というものが導入しにくい環境だと第一印象として持ちました。これは感想です。

● 安瀬さん

一言付け加えますと、その評価というのは、決して誰かを貶めていることではなく、そこから自分がよくなっていくヒントとなるというような文化をつくっていかないと、なかなか受け入れにくいと思います。誰かを寄ってたかって、「だめだ、だめだ」というと、誰しも嫌になるわけです。そうではなく、「ここここは素晴らしい、でも、ここができるともっとあなたは素晴らしくなる」というのが評価のフィードバックではあるべきだと思います。

● コーディネーター

坪谷さん、そういうことは、世界各国のさまざまな子どもたちを預かっていると、ある程度、教育ではないかという気もするのですが、いかがですか。

● 坪谷さん

私は、他から評価をされるということは、重要性ももちろんありますが、それと同時に、教育の中で自分で自分をリフレクションしていく、内省していくという、この力を育てるということが大変重要だと思っています。私は、自分で自分のことを、では、私の考え方はどうだったのだろうか、私はきちんとコミュニケーションがとれていたのだろうか、その与えられたタスクに対してどこまでできたのだろうか、それを冷静にリフレクションしていく、この力を育てるというのは、やはり子どもの頃から積みあげていくことが重要なのではないかと思います。

● コーディネーター

そこは教育的には大変重要なポイントで、1つの答え、1つの道だけだというと、答えが違うということだけで人格が決まってしまうたり、あるいは特に、先ほどの自分に対しての自覚、これが意外とないのが教員です。自分は正しいのだという発想で生徒を指導するから、生徒も高校生くらいになると、ほとんど話を聞かない。聞いた振りをして右から左に流してしまう。つまりなかなか本音での教育が浸透しないということが、日本では見受けられると思います。

● 坪谷さん

教員自身も自分は今も成長し続けている人間であるという意識を持つことだと思うのです。先ほど、グローバル人材になるのに年齢の制限はあるかといった時、私は否といったのですが、私は、教員になって何十年も経歴があったとしても、死ぬまで人間というのは学び続けて成長し続けるものなのではないかと思うのです。ですから、死ぬまで内省は続いていくというのは私の考えですし、その基盤をつくっていくのが初等中等教育の場ではないかと思っています。

● コーディネーター

そうなってくると、今の現状の日本の初等中等教育の問題点を見なければいけないのですが、学習指導要領による教科書のある国というのは世界にそれほどないらしいですが、坪谷さんはどう思われますか。

● 坪谷さん

私は、2週間くらい前に、教科書をつくっている会社の方たちの前で話をする機会があったのですが、国際バカロレアのことも一緒に話してくださいといわれて、「教科書はないのです」ということをどのように伝えようか

と思い、非常に冷や汗をかいたのですが、私は基本的に教科書というものは、それがつくられた途端にその情報というものは古くなってしまふものだと思います。また教科書というのはいろいろなものがあるわけで、ビデオもある、新聞もある、雑誌もある、インターネットから得てくる情報もある。その情報が信頼に値するものか値しないものか、これを見極める目を育てることは大切ですが、教科書の何ページから何ページを暗記しなさいといったような教え方ではないというところが世界の中の標準であることを、余り知らない教科書会社の方々もいるということに、私自身が実は驚いた次第です。

● コーディネーター

なかなか私たち日本の教育者は、例えば歴史教科書一つを見ても、なぜこれが起こったかとか、それをどう判断するかということがほとんどなく、起こったことをずっと覚えていく。それをどこまで覚えたかという試験が出るわけですから、どうしてもそういう形になるのですが、あるインターナショナルスクールの歴史の授業で驚いたのが、「ヒットラーが起こした」、アメリカの学校なので、そういういい方をするのですが、「あの第二次世界大戦はとめられなかったか」、各自意見を述べなさい、ということをや組んで話す。先生はほとんど発言しない。そういう授業を行っている国と、日本の教科書中心主義、その辺はどう思われますか。

● 坪谷さん

それは、やはりセンター試験を変えない限り、日本の現在の教育のあり方を変えるというのは難しいと感じています。センター試験といいますか、センター試験のあり方といいますか、これ自体が変わらないと、最終的にはセンター試験で良い点を取らなくてはいけない。そうすると、では、教科書の何ページから何ページ、これを暗記していくことが一番いいのではないかというその議論に返ってしまうのではないかと思います。

● コーディネーター

そのような議論はいつもなされることなのですが、社会が必要とするのはどういう人材だと、安瀬さんは思われますか。

● 安瀬さん

明らかに、まず今の教科書の問題で申しあげると、会社に入っても仕事の教科書はないわけで、いろいろな形での研修、それはいわゆるオン・ザ・ジョブといわれるトレーニングの方が当然多いわけです。われわれは大体80%がオン・ザ・ジョブ、20%がトレーニングで教えていくという形です。それはなぜかという、固定した形で教えることが極めて難しいのです。個性もあります。

したがって、そういう意味では、会社にきて伸びる人はやはり学力がある人なのです。過去の知識にとらわれている人は、これは新入社員よりももう少し世代の高い人に多いわけです。過去の成功体験とか過去の自分の知識にとらわれてしまうと、なかなかうまくいかない。私が新入社員たちにいっているのは、「あなたたちは、一番恵まれている。なぜならば、今の世の中は、ものすごく変動が激しいので余り過去に学ぶ必要がない」と。したがって、自分たちで3年くらいやっていると、もうそれは新しいところにすぐに辿り着くのです。だから、10

年前、20年前どうだったということは、日本の歴史とかそういう話は別として、余り学ぶ必要がなくて新しいことを早く吸収する、これは今、非常に必要とされている能力です。

● コーディネーター

相川先生、アメリカはさておき、イランとかそのようなところに長くいて、やることとして何が重要ですか。やはり教科書で学ぶ知識ですか。

● 相川先生

もちろん学問ですから、知識というのは大事だと思いますが、よくグローバルという中で、今、どちらかというとコミュニケーションとか、プレゼンテーションとか、そちらが強調されているくらいがあります。私は、聞き上手といいますか、コミュニケーションだから、人の話をちゃんと聞いて理解する、そういう力をつけてもらうことも必要ではないかと思います。

● コーディネーター

そうすると、それはコミュニケーション力という言葉に集約されますね。お三方に、コミュニケーションということに対して一言述べていただきたいと思います。

● 坪谷さん

その前に一ついいたいのですが、1500年の最後の頃に、チェコスロバキアで生まれたコメニウス、教育学を専攻している皆さんの前でお話するのは恥ずかしい話ですが、その頃は、ヨーロッパはある一定の階級の師弟しか教育を受けられなかった。日本では藩校ができた時代です。その時も、やはり一定の階級の子どものしか教育を受けられなかった。その時は知識のある人が少なかったもので、最初に教育をする時には、一人の知識のある人がいかに100人に、200人に教育を与えられるか。そのためには同一年令、同時期入学をして同一に卒業していく、このシステムが一番ふさわしい。そういったのがコメニウスです。

それが学校教育の基礎です。すばらしい教育学者であるのですが、そのシステムがずっと延々と続いている。それが先ほど少し述べました ICT の発展により知識を持っている人のみが素晴らしいわけではなく、誰もが知識を得ることができるようになってしまった。これが今一つの学校教育に対して、今のままのスタイルでいいのか、知識を教えるだけでいいのかという疑問を呈しているきっかけになっているのではないかと私は思います。

また、コミュニケーションに関してですが、コミュニケーションするというのは、これはただ自分の考え方を伝達するというだけではないのです。いかに自分が発信したいことをどのように表現していくのかというのがコミュニケーションなわけです。ですから、それが例えば美術の作品でコミュニケーションする人もいでしょう、音楽の作品の人もいでしょう、演劇の人もいでしょう、何かのコマーシャルの人もいでしょう。しかし、それは自分がどのような答が出たのか、どのようなことを伝えたいのか、どのような形で互いに分かり合いたいのかということ表現する手段の1つであると私は思います。

● 相川先生

コミュニケーションは、先ほどいった、要するにこちらから伝えることと、それを聞くことがあります、ツ

ールとしては外国語というのは度胸が7割、ボキャブラリー3割、それが私の信条でずっとやってきました。度胸ということがいろいろなコミュニケーション上、かなり大事ではないかと思います。

● 安瀬さん

コミュニケーションについて、例えば私たちの仕事で申しあげると、伝えたとか、メールを送ったとか、掲示したとか、いろいろな手段をとるわけですが、コミュニケーションのポイントは基本的に伝わったかどうかなのです。相手に伝わって、しかもそれが何らかのアクションに結びついていくかというところがやはりコミュニケーションのポイントだと思っています。

したがって、ただ単に情報だけ流しても、何ら人々の行動が変わらないということであれば、それは伝わっていないわけであり、それがなぜ重要なのかというところも、しっかり伝えていくことによって、それを見た人、聞いた人が理解をして何か違った行動が生まれてくる。それがコミュニケーションということだと思います。

もちろん、聞くこともすごく大事です。実は伝える側の話だけ申しあげると、そのように考えてほしいと、よく申ししています。

● コーディネーター

少しポイントを変えて、このコミュニケーション、あるいはグローバルという言葉の裏には必ず英語能力ということが出てくるのですが、世界共通語として認知されている英語力は、これはもう誰が考えても必要という中で、日本の英語教育についてはいかがでしょうか。

● 安瀬さん

昨年から一昨年にかけて、実は経済同友会がもう取りあげていて、委員会、プロジェクトチームをつくって、いろいろな国の英語教育などを参考にしながら勉強させていただきました。それで、どこまでしっかりやるべきとか、いろいろな問題はあるのですが、どうも韓国とか中国に比べても、どんどん能力的には遅れてきているというのが数字的にも分かってきました。これは先ほどの話に戻ってしましますが、1つは大学入試の問題にあるというところに至ります。大学入試改革ということで、最終的な提言は、大学入試に外部テスト、これは TOEFL などは1つの事例ですが、そういった外部テストを入れて、大学入試の英語の能力そのものを測る。それがグローバルにも同じものさしである。こういったことが英語教育を前進させる大きな1つの仕掛けになるのではないかと提言したことがあります。

● 坪谷さん

語学の習得ですが、例えばイチロー選手が1週間に1回1時間バットを振っていたらイチローになれたのか。ゴルフのスコアを上げるのに1カ月に1回、ゴルフの練習場に行ったらスイングをしたら、ハンディキャップがよくなるのか、これと同じ議論なのです。

カナダにケベックという州があり、この州はフランス語を使う人々と英語を使う人たちが交じり合っている州ですが、ここではイマージョン教育を42年から43年間やっているのですが、この研究の結果で出たデータというのは、その言語で知的に刺激をされて、それがストレスに感じないレベルになるのに約2,000時間から2,500時

間かかるというデータが出ているのです。つまり、例えば日本人が、それは英語であるにしろ、中国語であるにしろ、ドイツ語であるにしろ、その言語に囲まれていて、「ああ、疲れちゃうな、何いつているのか分からない、焦っちゃうな」と、そのようにならないためには2,000時間から2,500時間、その言語に触れていなければいけない。逆にいえば2,000時間から2,500時間、その言葉に触れると、大体の人は、これは発達障害の方も含めてですが、ストレスを感じずにコミュニケーションがとれる。

その次の段階は5,000時間から6,500時間だということです。これは、大学院などに行き、その言語で全てのものを学習し、論文も書き、それでいてストレスを感じないレベルです。しかし6,500時間かけても、その言語の母国語の人と比べると、それでもやはり単語力なり、書く力なり、話す力は落ちるということです。これが言語の勉強なのです。ただし、誰でもそれだけの時間をかければいいのかということもあります。

なぜ日本人が英語を話せないのか。それは考えてみると単純なのです。中学と高校で何時間、英語を勉強していますか。大体700時間だと思います。すると、1,300時間から1,800時間足りない。これが一番の原因です。

● 相川先生

今、小学校で英語をとっていますが、中学に入ってくる生徒が英語に興味を持つということが非常に大事だと思うのです。そこから始まって、だんだん慣れてきてということなのですが、出だしのところで英語が嫌いとか苦手とかになってしまうということがあると思います。ですから、私は自分の中学1年生全員とグループに分けて校長室で弁当を食べました。その時に少し英語で話したり、英語を書いて、「これは何ていうの」とか、そういうところから、いろいろな意味で関心を持たせる。朝、玄関で英語で話しかける。嫌がる生徒をつかまえて、「Good morning」といっても、向こうも最初は嫌がっていますが、だんだん答えてくれる。とにかく、そういったことで、まず英語というのはおもしろい、それが大事だと思います。カラオケに行ったら英語の歌を覚えるとか、「この歌いいよ」なんて高校生に勧めたりして。やはり聞いていう、口にする、そういうことを続けながら、だんだん使っているうちにということがあります。

ただ、英語のボキャブラリーなどはまた別の問題だと思うのですが、興味があれば、だんだん吸収力も増してくるのではないかと思います。

本校の場合は、先生の問題もありますから時間がかかると思います。今は TOEIC をやる、やらないで激しい議論が行われています。

● 安瀬さん

一つ補足させていただくと、日本人の場合、へたな英語をどれだけ堂々としゃべるかというのが、これからの勝負になってくると思います。今、いろいろな統計がありますが、例えば世界で20億人くらいの人が英語をしゃべっている。そのうちのおそらく7割ぐらいは、もともと英語のネイティブではない人です。したがって、私のチームの会議では、ヨーロッパの人たちは、みんなすごく訛っているのです。フランス語訛で、フランス語だと思っていると、どうも単語は英語らしいのです。かろう

じて英語と分かったりとか、強烈なイタリア訛で、全部最後に母音がついているような英語です。しかし、それがお互いに通じ合うという世界なのです。だから、日本人は日本人の英語訛で構わないし、ブローケンで構わない。単語を並べて通じればいいというところまで開き直ればいいのに、そこがなかなか解決方法が見えないところなんです。それを学校で教えるのは難しいだろうなと思いつながりながらしゃべっているのですが、堂々と自分の意見をいっているのだから、例えば分からないほうがおかしいのではないかとといったようなところでどうやれば持っていけるのか。常にそのようなことを考えています。

● コーディネーター

英語習得は日本人の苦手なところですが、坪谷さんは英語をある種の勉強として学んでいったその過程で、グローバル性、そもそも言語が通じなくてコミュニケーションできるという意味で、この多様性の理解ということにはつながっていくのではないかなと思うのですが、いかがでしょうか。

● 坪谷さん

英語が話せる＝グローバル人材かということ、それは否です。もし英語を話せるのが全員グローバル人材であつたら、では、アメリカ人は全員グローバル人材か、イギリス人はみんなグローバル人材かということになりますので、私は、英語を話せる＝グローバル人材とは少しも思わないです。ただ、英語を話せると、より便利だということなんです。

ものすごく長い歴史の軸で見ますと、その時に強かった国、昔はラテン語でしたし、今は英語。この英語が強いというのはこの150年くらい続いているのでしょうか。その時に強かった国の言葉というのが国際語になり、そして、みんなが話すようになっていく。

しかし、私は割とつい最近に、社名を出していいのかなどうか分かりませんが、マイクロソフトにお伺いした時に大変驚いたことがあるのです。

マイクロソフト社は、私が今このように話しているとその画面の隣で17カ国語くらいの言葉を選べるのです。それを選ぶと、自分の耳にはその人の声で日本語で聞こえる、ウルドゥ語で聞こえる、技術はそこまで来たのだと驚きました。

もう一つ驚いたのが、鏡のようなものがあり、鏡の向こう側はポルトガル語で話している子どもたち、こちら側は英語で話している子どもたちなのです。お互い、鏡に向かって話していると、こちら側の英語の子どもたちには英語に聞こえる、向こう側にはポルトガル語に聞こえる。私は50年先には英会話学校はなくなるなと本当に思いました。したがって、言葉はあくまでツールです。

2つ目は、ある程度の絶対数をかければ、ほとんどの人は、その言葉を使って話ができるようになる。私の友人でも、60歳を過ぎて会社を退職してオーストラリアに移住したカップルがいます。5年後に会いましたら、2人とも何の問題もなく生活していました。やはり絶対数なのです。

ですから、教育の現場にいる私たちみんなが絶対数である。2,000時間から2,500時間を目指すのか、5,000時間から6,500時間を目指すのか、自分の中高で2,500時間

を目指すには大体1週間に何時間、英語で知的に刺激を与えるのか。この「知的な刺激」という点が大切なのです。つまり知的におもしろいと思うような授業をするのか。そうすれば答えは出てきます。

● コーディネーター

安淵さんは、仕事の面で、当然、英語というのは重要なポイントになってくるのでしょうかけれども、日本の大学を出た人たちというのはどうなのでしょう。

● 安淵さん

私のところでは、それぞれの国で会議をやる時に、原則的に日本人以外の人が入っている時には英語でやる場合が多いのですが、例えば一人のために全員が英語でしゃべって、すると会議に差があったりする時がありますので、そういう時には、その人に通訳をつけるとか、いろいろな形でやっています。おそらく、今話に出たように、翻訳ソフトというのがだんだん進んでくると思っていますので、50年ではなくて、私は20年くらいでかなりそういったものが十分出てくると思います。

● コーディネーター

そうすると、余り英語教育をしなくてもいいのでしょうか。20年待てば何とかなるのかなという気はします。そうすると、英語教育もさることながら、坪谷さん、インターナショナルバカロレア、少しその話をお伺いしたいのですが、インターナショナルバカロレアというのは英語でやる教育という感じに思っている人がすごく多く、日本では無理だ、教師がいないということがあるのですが、先ほども話された日本語でできるということを含めて説明をお願いします。

● 坪谷さん

大きく誤解されているのは、今まで、国際バカロレアの教授言語は英語とフランス語とスペイン語、これに限られていたのです。だから、現在ある27の認定校は、東京学芸大学附属国際中等教育学校を除いて、みんな英語を教授言語として教えていたのです。したがって、国際バカロレアというと「ああ、英語でやるプログラムね。外国人の先生が来て、何か英語で教えるやつね。英語がぺらぺらになるね」と思われていたのですが、これは大きな誤解で、国際バカロレアの教育というのは、先ほどいいましたように、世界をより平和にするということに軸足を置いていて、全人教育なのです。

全人教育で始めたのですが、この45年の間に輩出された卒業生が大学に行く。そうしたところ、大学に入ってから優等生を取る人数が多い。大学を6年以内に卒業する人数が多い。大学院に進学する人数が多いというデータが出て、いろいろな大学が、そうであれば、私たちの大学も国際バカロレアのスコアで良い点数を取っている生徒を入れたいという動きになり、現在まで発展してきたというのが歴史なのです。

したがって、日本語で教えられるようになった、日本語で受験することになった、受験できることになったというのは大きなメリットで、これを達成した後、委員会に行きましたら、中国の委員が、少し悔しそうに、私のところに近づいてきて「坪谷さん、やったね。中国では、物理とか科学とかは英語で受けなくてはいけないから無理だ。スコアが母国語で受けるよりも思ったより伸びな

い。日本はうらやましい」といわれたのです。

つまりスコアで40点はあくまで40点、35点はあくまで35点で、それは英語だろうが、スペイン語だろうが、フランス語だろうが、日本語だろうが、そのスコアに対してこの生徒はこれだけの学力があるという世界標準の成績証明書ということが国際バカロレアの最終的なスコアという位置づけなのです。ですから、決して英語を学ぶためのプログラムではないということです。特に南米で今広がっているのは全部スペイン語です。しかしスペイン語のスコアで、それぞれ英語圏の大学に入っている子どももいれば、ドイツ語圏の大学に入っている子どももいるということです。

● コーディネーター

バカロレアの話をもう一度お願いしたいのですが、国際バカロレアの教育課程と、今、日本がやっている教育課程の決定的な違いはどこですか。

● 坪谷さん

いろいろな違いはあるのですが、一つは教科書がないというところです。そして、最後の大学入学準備コースにおいて、日本の場合、理系、文系に分かれますが、国際バカロレアは理系も文系も両方とも学習しなくてはいけないということがあります。

そして、最終的なスコア、これが何と12日間にわたって試験が行われるということです。そして、この試験のスコアは外部評価員、いわゆる自分の学校の先生でない人が7割から8割スコアをつけていきます。そうしたことによって、非常に厳格な評価である。つまり、スペインの30のスコアの生徒も、イギリスの30のスコアの生徒も、シンガポールの30のスコアの生徒も同じ学力といわれるのは、その厳格な外部評価員による評価というところによるのではないかと思います。

● コーディネーター

日本の大学もそれを採用しようとしている流れがあるということですね。

● 坪谷さん

現在のところ、全学部でセンター試験を受けなくて国際バカロレアのスコアのみで入れるとっている大学は、筑波大学、大阪大学、上智大学、岡山大学などです。その後、平成28年から、センター試験を受けてもらうが、センター試験の成績は、他の生徒が10であったら、大体8割方で、国際バカロレアのスコアを鑑みるとっているのが東京大学及び京都大学です。また、私の手もとには続々といろいろな大学からのそのような情報が寄せられており、つい最近決まりましたスーパーグローバル大学。そこに关しましては全ての大学において、国際バカロレアのスコアを使います。

● コーディネーター

安渕さんは、国際バカロレアはご存じと思いますが、人材としてどうですか、国際バカロレアで学ぶステップというのは。

● 安渕さん

私はそれほど詳しくは知らないのですが、まずそういった違う道を通ってみようという気持ちだと思います。みんなと同じではないことをトライしてみよう、その精神ということだと思います。やはり独立して物事を考え

られる精神ということになってくると思いますので、そういった人が増えてくることによって、全く違う道を通ってきて、違うことを考えてきている人たちというのが社会に出てくるということだと思います。

だから、先ほどの英語の話に少しだけ戻らせていただきますと、英語がコミュニケーションツールとしては、いろいろなことで補完できるようになってくると思うのですが、もともとのロジック、考え方、文化としての英語というのはありますので、その部分はしっかり学んでおいてほしいです。なぜこういう論理構成になっているのかとか、そういったことも、なぜアメリカ人は、例えば自分の名前をいうのか。「私はジョン」なんていいます。日本人はとにかく「私、安渕といひます」。これはファミリーネームです。私の家族は全員、安渕です。この安渕の中の誰なのですかという質問をされるわけです。そこで名前をいう。やはり個人というものと、ファミリーというものの関係性のようなものが日本とアメリカは違うのだと思います。

それから、言葉の中に流れているキリスト教的精神とか、それから、西洋哲学のようなものは必ず言語の中にありますので、それをやはり日本語も英語もしっかり学んでおくことが、逆に相互の理解のためだと思います。

● コーディネーター

相川先生は勤めていた前の会社でいろいろな国に、もちろんアメリカも中東もですが、行かれた時に、共通言語として英語は必要なのですが、要するにものの考え方、日本人は一番最後に結論を持ててきますが、英語言語では初めから結論をいってしまうわけです。そういうことでの戸惑いとか、あるいは参考になるようなお話はありますか。

● 相川先生

私はどちらかというと、切った張ったのビジネスの世界でしたから、イランに行けば、ペルシャ商人、そういう面からの観察は結構しましたが、やはり文化はそれぞれ違います。例えばベトナムなどに行ったら、中国人と歴然と違うところは、何かものを買いに市場に行く。コップが1個50円。半値くらいから値切るわけですが、中国人が相手だったら、「30円にしてくれ、その代わり5つまとめて買う」といったら「じゃあ、いいですよ」とおそろくいうと思うのですが、ベトナム人は「私の今日の最低価格は40円」といったら、幾つ買っても安くならないところがあります。そういうしたたかさがある。国によって違うと思いますし、あとはイスラムという国は、今いろいろ脚光を浴びていますが、あの人たちのものさしというものがあります。

● コーディネーター

今日は、グローバルということが一つ主題になっていますが、坪谷さんがお書きになった、なかなかの分かりやすい本で、「世界に生きる力」という本がありますが、2018年に日本の教育が変わる。国際バカロレアが本格上陸、これはちょっと本屋さんが書いたかもしれませんが、どうですか、教育で変わりますか。

● 坪谷さん

確かではありませんが、今、一応、2020年にセンター試験、これを変えようという目安で動き始めているとい

うところはあります。2018年というのは、昨年6月に閣議決定した、「2018年までに国際バカロレアの認定校の申請している学校を含んで200校にする」ということからですが、全国の高校は5,000ある中のたかが200校、4%で、大した数ではないのです。しかし、それが起爆剤となって、日本中の学校が国際バカロレアの認定校になればいいとは私は少しも思っていないのです。国際バカロレアが万能だとは少しも思っていないです。

しかし、大きな点というのは、探究型の学習が、総合型の学習が、そして、世界標準の学習が、学習指導要領に沿わなくてもよい教育が日本の高校に入るといったことだと思うのです。そこが一つの起爆剤となって、今日お集まりの皆さん、私は一人ひとりの先生方が大変志が高く、新しい教育をそれぞれの現場に入れようと一生懸命努力なさっているのを知っています。

公教育はなかなかそうはいかない。なぜかという、公教育というのはみんな平等、みんな同じにやろうということがあるからです。そこに変革を起こせるのは私立です。私立の学校一つひとつが新しい教育を、今と違う教育を、コメニウスがいった教育ではない教育を、新しいものを入れていきたいと思っている、それにはいろいろな壁があるわけです。それを取り除いていく一つのきっかけがこの国際バカロレアの導入に過ぎないと、私はそのように感じています。したがって、2018年に日本の教育が変わる。変えるのは私ではない。先生方なのです。

● コーディネーター

安淵さんは、この GE 世界チームの仕事について、本を出版されており、これはもちろんビジネスの方向から書いていらっしゃると思いますが、私は読ませていただきましたが、「GE にいて全てに驚いた、GE との出会い」というものがあるのですが、これはどのように驚かれましたか。

● 安淵さん

やはり人を育てるということで、冒頭で、例えばグローバルイノベーションは何歳からという話もありました。そもそも年齢は余り関係ないのですが、全てのクラスの人を、とにかく育成しようという気持ちはものすごく強い会社で、私はちょうど8年ほどいますが、6回くらいいろいろなトレーニングと呼ばれて、アメリカや、いろいろなところに行ったりしながら、この8年間で、では自分がどれだけ成長できるかということを実感できるような仕組みと、それから、その都度、まさにいろいろなフィードバックを受けて何ができていないかということも分かりながら、常に改善の余地があって、先にもっとよくなる自分が描けるというのが GE のおもしろいところで、そういった教育機関で学び、オーガニゼーションとありますが、会社全体として学びながら進んでいくということです。日本企業というのは、例えば50歳を過ぎると余り研修など呼ばれないです。もう大体いいだろうという感じで、若手を育てようとかいう話になってしまいうわけです。そうではなく、例えば上が学んで伸びていかない組織は、全体が学んで伸びていく組織にはなかなかないといったような信念のもとに運営されています。それが一番驚きました。

● コーディネーター

著書の中で少し気になった言葉があるのですが、「仕事さえやっていたらいいわけではない」。これは日本でもいえるのかもしれないですが、ある意味では、仕事さえやっていたらいい、学校で習った勉強さえやっていたらいいのだという考えもないわけではないですが。

● 安淵さん

当然そういう考え方はあると思います。ただわれわれは人事評価をやる時に、要するに成績とそれを達成する時のやり方、growth value と呼んでいるのですが、その二軸で評価しているのです。だから、何をやったかということ、どのようにやったかということの両方を50・50で評価しようとする会社なのです。

だから、成績だけでいいということでは、全く会社の中では認められないのです。その中には例えば外の変化を感じてどれだけ動けたか、それから、その多様性のようなことをどれくらい受け入れて、チームとしてより幅広くやったか、自分と関係ない人たちをどれだけうまく巻き込んだか、そのような定性評価を入れています。そういった意味では仕事さえできていればいいということに関しては、もう明らかに会社としてはノーなのです。

● コーディネーター

人材も国籍も違う会社だと思いますが、そういうコミュニケーションの中でしゃべらない人は存在しないと認識される、いない人と一緒だということはなかなか日本人には難しいところだと思いますが。

● 安淵さん

例えば会議に出ていて、じっと黙っている人は分かっていないか、興味がないか、どちらかだと思われます。そういう人がどうして来ているのだろうとなるわけです。したがって、関係のある人だけに絞って、だんだん会議の出席人数が減っていくわけです。やはりいわないと分からないというのは当然のことです。じっと黙っていても分からないので、一人ずつの意見をみんなが聞いて、それが会社に対する貢献ということなのです。

みんなが同じ場所にいるわけではありませんで、たまには電話会議とかやりますが、電話会議は簡単で、黙っていると参加しているかどうか分からない。とにかく途中で何かしゃべっておかなくてははいけない。「いる」ということを知ってもらうためにしゃべっておかなくてははいけないということです。何かに貢献する、何か意見がある、賛成するなら賛成する、反対するなら反対するということです。会議の間にとにかく声を出してしゃべるということは、それぞれの、ある意味、責務だと思います。

● コーディネーター

この辺で前半を終わりたいと思いますが、今お話がありましたように、しゃべらない人は存在しない。この後、お分かりのようにペーパーを配ってあります。ペーパーに書かない人は存在しないのかなという認識を持って、是非何かご意見とかご質問がありましたら、書いていただければと思います。

質疑応答

● コーディネーター

ご指名させていただきたいところですが、かなりの質

問をいただきましたので、アトランダムになりますが、パネリストの方に質問という形で進めていきます。

初めに坪谷さんへの質問ですが、世界を平和にするために、社会をよりよくするためには、どのような学びが必要なのでしょうか、というダイレクトな質問です。

● 坪谷さん

国際バカロレアに関して、世界をより平和にする人材ということを私が申しあげたので、そういう質問があったのだと思いますが、国際バカロレアというのは3歳から19歳まで3つのプログラムが、今、実は4つ目の大学進学を望まない生徒のためのコースもできたのですが、一貫性のあるプログラムなので、その中で一つ共通しているのは、どういう人材になるために私たちは今、学習をしているのかということが明確なのです。例えば、それは探求をする人である、挑戦をする人である、思いやりを持つ人である、そういった10の、どういった人材像なのかということが決められているのです。それが今の質問にフィットするのではないかと思います。そういう人材になれば、自ずと世界の平和を望む人材になるというところにつながってくると思います。

● コーディネーター

それはある種の教育での目的性ということですね。

● 坪谷さん

そうです。もともとどのようなことでこの教育が始まったかという話をしましたが、スイスのジュネーブで何十カ国の子どもたちが肩を隣に寄せ合いながら学習をしていたのです。その中で、自分たちは敵国だと、そういう意識があればクラスが成り立たないわけです。私の学校も実はそうで、今年度は51カ国、去年は52カ国いたのですが、その中には、お互いに余り仲がよくない国同士の子どもたちもいるわけです。大人たちは気を使うのですが、子どもたちにとっては、何ていうことはない、ただのクラスメートなのです。

私はその中で、実は私は自分のことをかつては鼻高々で人道家だと思っていたことがあるのですが、そうでなかったということに気がついたことがあります。それはイスラム圏から来ている子どもがラマダンをする。8歳以上はラマダンをします。学校にいる間は一切、水も口にしないわけです。運動した後、水を口にしない。私は内心でかわいそうだなと思っていたのです。ところが、クラスメートたちは何も思わない。かわいそうだと思わないのです。私は一人の子に聞いたのです。「何でかわいそうだと思わないのか」。「だって、それは彼が自分で、それを信じて好きでやっているのでしょ。だから、そんなのなぜかわいそうだと思うの。それは自分が好きなんだから」といわれたのです。その時に、私は、そのようにいっている子どものことを、この子のほうが私よりも、もしかすると人道家という点では優れているのではないかと思ったのです。それが、先ほど話のあった多様性を認めるということにもつながっていくと思います。世界平和というのは、やはり互いの違いを乗り越えて、互いの違いを認め合って、一緒に共生していく社会の創造、これにあるのではないかと思います。そして、私たちの教育はそれを求めるべきではないかというのが意見です。

● コーディネーター

全員にお尋ねしたい質問です。グローバルについてどのように論議してどうするかを考えている国は世界には多いのですか。そして、日本は少し敏感すぎませんかということです、いかがでしょうか。

● 安淵さん

敏感すぎるかどうかはよく分かりませんが、例えばヨーロッパ等に行くと、国と国とが陸続きになっていて、ほとんど境目がないわけです。だからグローバルも何も、またいろいろな国、いろいろな民族が住んでいるという状態が普通なのです。文明の衝突で本にも出ていましたが、世界で唯一、いわゆる一つの文明、文化として、国民が一致しているのは日本だけなのです。だからそこはやはり他と違うのです。

われわれがこういうことを論じなければいけないというのは、ある意味、非常にユニークな存在であって、それは当然、誇るべき部分もある。しかしながら他とは違うのです。だから、グローバル化ということをわれわれはわれわれなりにしっかり考えていかななくてはならない、そういう存在だと思っています。

● 相川先生

確かに、マスコミ等で「グローバル、グローバル」、あるいは「国際的」とか叫ばれていますが、これだけ世の中がボーダーレスになってきたら、先ほども ICT の話がありましたが、表現は別にしても対応して取り組んでいかなければならない、そういう課題だと思います。

● 坪谷さん

私は、実際、少し敏感すぎるかと思っています。

日本人は十分、知的な能力、学力は高いと思っていますし、第一、日本で780円の買い物をした時や、タクシーに乗った時に、1,000円出して、おつりを間違える人に私は今まで会ったことがないのです。ところが、海外に行きますと、私が「ちょっとこれが何十セントでしょう、…」と数えてあげることがたまにある。新聞が読めない人というのも日本には余りいません。日本人は、ほとんどの人が、これは私の間違いかもしれません、パスポートを持っています。長くアメリカに住んでいたことがありますし、たくさんのいろいろな世界の友だちもいるのですが、ヨーロッパ人は別として、アメリカ人などはパスポートを持っていない人が多いのです。何が関心事かというと、自分の町と教会、そして、町が持っている野球チームだったり、高校のフットボールのチームだったりするのです。それというのはコミュニティです。それ以外、余り海外に旅行に行こうと考えている人もいないというほうが世界の中では割と普通なのです。

その中、日本人は非常に過敏に感じているし、若干、私自身は、ちょっと自虐的になり過ぎた傾向が今まであったと感じています。

日本人ほど利他的、人をまず考え、相手をまず考える、しかも知的レベルが高い民族というのは、世界には少ない。これは世界中の保護者と付き合っていますので、私自身がそのように感じているところです。

● コーディネーター

相川先生に質問します。グローバルだけの話ではないのですが、企業から学校現場に入られて一番大変だった

ことを教えてください。

● 相川先生

いろいろありますが、まず企業は基本的には部下を育てるという、そういう文化があります。学校の現場というのは、なかなか、22歳も50歳も先生となってしまうということもあります。もう一つ、人事の適材適所というのがあって、ここのポストではうまくいかないけれども、違うポストに行けばこの人はもっと生かされるのではないかという人事異動があります。学校の場合は穀物のサイロのように、トウモロコシは小麦のサイロと交わらないという、先生の世界はそういうことがあります。

それから、スピード感覚です。要は4月1日現在の生徒数で予算規模が決まり、それから、学校行事も毎年決まっている中で、途中で追加募集することもない。企業だといろいろなキャンペーンを行うとか、業績を見直してということが出来るのです。

いろいろありますが、評価制度、本校ではアドバランを上げてやりますとはいっていますが、なかなか先生の評価というのは難しい。違った意味で、生徒の授業評価などはもちろんやりますが、それによって給料や待遇がということではなくて、自己啓発のために実施しているのです。先ほどの安渕さんの話ではないけれども、企業はそれをもっと厳しく実施しているのです。

● コーディネーター

安渕さんに質問です。日本人を採用する場合の入社試験、採用条件の実態について教えてください。

もう一つは採用試験はどのように行われるのでしょうか。つまり、どういう形で、どういう人材を採用されるのでしょうか。

● 安渕さん

先ほど活躍している人材ということで申しあげましたが、一つはやはり柔軟性があるというように、いろいろな新しいものを受け入れていくタイプです。われわれの入社試験は面接が中心ですが、そういったことです。

それから、基本的にはエネルギーレベルの高い人、どんどん新しいことをやっていきたいという人です。

ただ、元気なだけというよりも、元気とかおとなしいとかいうタイプには余り惑わされないようにして、本来その人の持っているものをどうやって磨かせるかということで、複数の人間が面接をして評価をしています。

したがって、そういった意味では、非常に大事な新入社員ですので、われわれも多数の目で見ます。中途採用になってくると専門性とか経験などをどれだけきちんと説明できるかといったところになってきます。

毎年、新人を採っていますが、そういった意味では最近なかなか難しいです。やりたいことが何なのか分からない人が結構増えてきて、会社に入ってからまた考えるような人も出てきているので、3年以内に辞める人が、今どこの企業でも多いのです。だから、そういった人たちに、どれだけ明るい未来を見せていくのか、それから、自分たちが育っていける環境であるということを、逆にわれわれから売り込まなくてはいけないといった、双方向で採用というのはあります。

● コーディネーター

優秀な人材を、一生懸命説明して採ると日本人ではな

くなってしまうことが結構あるということです。

● 安渕さん

例えば日本語ができて、英語もある程度できて、優秀な人材ということで採ると、日本人ではない人も結構、応募してこられます。インドの方もいれば、中国、韓国の方もいます。日本語がとても堪能で、優秀で、やる気がある。別にわれわれは国籍は問いませんので、幾つかのそういった条件を提示すると、いろいろな国の方が来るようになって、驚くほど日本語が堪能な日本人ではない人は結構いるのです。それもある意味、日本の労働市場は変わってきたなと思います。

● コーディネーター

安渕さんに質問しますが、会社での仕事ぶりは大変すばらしいと思いました。このモチベーションを上げるための仕組みは何かあるのでしょうか。

● 安渕さん

モチベーションを上げるための仕組みというのは、もちろんいろいろあり、例えば簡単な例でいうと、小さなことも含めて必ずきちんとタイムリーに褒めるということをやっています。私のレベル、それから、本部長や部長などいろいろな人がいるわけですが、そういった人たち一人ひとりがここをうまくやったなと思うと、例えばちょっとした賞を出す。それから、もう少し大きいと、もう1個上のレベルの、award といっていますが、そういうものをどんどん出していった表彰するということをよくやっています。

だから、少し伸びたと思うと比較的パッと賞をもらったりします。私も驚いたことがあるのですが、そういったことを張りめぐらせていった、しかもなるべく日頃目立たないような人に対しても積極的にいろいろな賞を出していった、常にいろいろなところで表彰しています。

● コーディネーター

褒めるというのはやはり重要なファクターなのではないか。

● 安渕さん

そうです。褒めるというのは意外に難しいです。面と向かって人を褒めるのは、ただ褒めてもだめで、何がよかったかというところをしっかりと褒めなくてはいけない。それを褒めることは、みんなに共有して、簡単なお祝い事をするとか、「では、みんなで食事をしよう」ということで、なるべく良いことを共有するという文化をつくっていく。それは非常にみんなのプラスになる。モチベーションにつながっていくと思います。

● コーディネーター

坪谷さんはどうですか。いろいろな国の子どもを預かっていますが、日本の教育は叱ることが原点なのだというのはいい過ぎかもしれませんが、先生たちは叱るのが大好きなのです。

● 坪谷さん

叱るということも大変重要な教育の一つだと思います。やはりルール違反をしたり、悪いことをした時には叱る。そして、子どもにきちんとなぜ叱られたか説明をするというのは大切なことです。私たちの学校では1歳につき1分という時間がありまして、その間、椅子に座って、自分たちの仲間の中に入れないというルールがあ

るのです。ですから、6歳児の場合は6分になるのですが、自分が一番、それがあると心強いと思っているもの、それが本だったり、自分のバックだったりすると、それを持ちながら反省する時間を与えます。

そこで大切なのは、もう皆さんは分かっていると思いますが、怒るのではなく、叱るということです。それと、今、安瀬さんがおっしゃったように、褒める。褒めるというのは、本当にモチベーションを上げる力になっていくのです。そして、非常にポジティブに受けとめて褒めていく。これは日本の学校よりも非常に多いと思います。そして、子どもたちが作った作品、今やりかけているもの全てを展示して、いつも目に見える状態にしている。目に見え、耳で聞こえ、感じるができる状態にしておく。私はここまでできたよ、僕はここまで調べたよということが常に見える状態にしておくということも褒めると同時に大切なことだと思います。

● コーディネーター

全員の方にお伺いしたいのは、グローバル化時代の学校経営、これは大きなテーマですが、どうあるべきでしょうかということに対し、ご意見をお聞かせください。

● 相川先生

まず経営者の立場からいえば、限られた人的資源とか、財政的資源があるわけですから、広角レンズで資源を広く見るということが大事だと思います。それから、先生たちに、もう少し、先ほどいったサイロから抜けだしてやってもらうということです。それは先生の世界というのは、トップダウンはなかなか通じにくいので、一緒にやろうと、そういう姿勢で臨んでいくということで、先生たちがもう少し枠を出て、そのような態度、そういうことを身につければということだと思います。

例えば付加価値をもう少しつける。往々にして、先生というのは概して限られた教科、限られた生徒、教科書が相手なので、なかなか考え方に付加価値の概念や、創造力が適用しにくい世界ではないかと思うのです。だから、私がやってきたことは、先生たちと一緒に何かテーマについて取り組むことによって、こういう道もあるというようなことを体験してもらうことです。

具体的にいえば、例えば学校の前の道路に麹町学園通りという名前がついているのですが、それは千代田区がつけてくれました。そのもともとも発端は、地元の皆さんと、防災訓練を一緒にやりましょうというところから始まって、仲よくなったということで、推薦してくれた、それをずっと先生と一緒に進めながら、実例として結果につなげることができた。多少視野が広がる、そういうことが大事ではないかと思います。

● 坪谷さん

グローバル時代であるなしに関わらず、学校経営にとって一番大切なことは理念だと思います。いわゆるミッションです。ただし、そのミッションをいうだけではだめです。例えば明るい子、明るい子とは一体何でしょうか。いつているミッション自体を全ての活動、全てのプログラム、細部に至るまで、それを実現していかなければいけない。学校経営に限らず、企業経営でも何でも一番大切なのはミッション、理念だと思います。

● 安瀬さん

会社とは何であるか。会社の存在とは、例えば、社会に役に立つ製品やサービスを提供することにより、お客様がいらっしゃって、会社というのはできたということです。では、私学というのは何のためにあるのか、誰がつくったのかということに戻っていかざるを得ないと思います。

グローバル時代というのは、冒頭に申しあげたように、自分としてのアイデンティティが大事です。それは今の理念の話と一緒にですが、では、この学校は何をするためにできた学校なのか、何を伝えて、どういう人を育て、どのように社会に役立っていきたいのかということ、学校はある意味、個性化していき、それぞれ違ったことを目指して、他の学校と違う、この学校がやりたいことを、もっと明確に打ち出していくことだと思います。

それによって、われわれは、例えば企業から見ても、この学校の人たちは、こういう人たちののだということがより分かってくる。それによって、社会に対する役割、位置関係がもっとはっきりしてきて、それがグローバルにも十分通用するのと思います。

● コーディネーター

坪谷さんへの質問です。

国際バカロレアですが、学習指導要領との融合について、文部科学大臣にお願いされているとのことですが、どのようなことですか。

● 坪谷さん

文部科学大臣にお願いしているのではなく、学習指導要領担当の課に、昨春に、国際バカロレアのさまざまな科目の資料を渡し、学習指導要領のどこに読みかえをするのかという作業を進めていただくようお願いし、今も続行しています。今夏には、実はガイドラインができる予定だったのですが、道德の教科化と評価ということで、その課が忙しくなり、後回しにされています。何とか今年度中には、それが終わるというスケジュールとなっているのが現状です。

● コーディネーター

バカロレアに関する質問です。学習者の自分が所属している国や地域に関する学習、言語も文化もですが、それについてはどのように扱われているのでしょうか。

● 坪谷さん

もともとの発祥は、多国の子どもに関してですが、バカロレアは非常に大雑把で、フレームワークだけが決まっているのです。その中身は各学校によって何を教えるもよいということです。したがって、教科書があるわけではないし、例えば私の学校の中で、小学校3年生の科目の中では、中世の時代、ヨーロッパの騎士と日本の侍を比較をし、相違点を見た上で、なぜ地理的にこんなに離れているのに同時期に同じような現象が起きているのかについて考察するというものがあります。これは歴史といえど歴史です。しかし、それは日本の侍と比較する必要は全然ないわけです。学校としては、ホスト国である日本を選んでいる。そういったことです。

したがって、中身に何をを選ぶのかというのはフレームワークさえ守っていれば、非常に自由度の高い教育です。

● コーディネーター

そうすると、インターナショナルスクールとしては教

えているのは世界史ということになるのですか。

● 坪谷さん

しかし、日本語で日本史を教えるということが、今回もう決まっていますし、教授法に関してはどうやって事実を織り込んで継承していくかという方法や、どのように論理的に述べて自分たちの答えに到達するのか、それをどのように論文に仕上げ、どのようにプレゼンテーションしていくのかという手法は決まっていますが、中身は各学校、また各個人が選んでいいということで非常に自由度の高い学習方法です。したがって、教科書もないわけです。

● コーディネーター

IB 教育を実施する際、適切なクラス人数というのはあるのですか。

● 坪谷さん

これは私の学校は1クラス20人ですが、優秀な教師が教えた場合、1人の教師が微に入り細に入り、子どものいわゆる心理的な動きまで把握した上で授業をやっているためには、私が見る限り、大体25人くらいまでというのが実感です。もちろん非常に力のある教師がいて、1人で70人くらいを掌握している教師も、今まで一人だけ出会ったことがあります。これは希です。大体は25人止まりというのが私の実感です。別に人数に決まりはありません。ただ、実際に児童・生徒とのふれあいを見てみると、それぐらいの人数ではないかというのが実感です。

● コーディネーター

相川先生への質問です。

学校のうちなる国際化、すなわち先生の国際性、英語力向上について、どのようなことを考え、実施されていますか。

● 相川先生

例えばネイティブの授業と一緒に見に行く。今年4月から校長になったのですが、理事長というのは、なかなか子どもとの接点がないので、先ほどいったように、ちょっとしたことですが、何か折あるごとに英語で話しかけてみる。それから生徒が役員室に来て、漢字や英単語の書きっこをすとか、ゲーム的なことですが、そのようなことをやっています。私が五十数カ国行った時の経験や知識を話してあげる時に、学年によっては英語で話しをするということもいずれは考えたいと思っています。

● コーディネーター

これはグローバルと関係があるのかどうかよく分からないですが、2人担任制について教えていただきたいのですが。

● 相川先生

中学1年と2年、中学1年は、今、20人1クラスですが、男女、ベテランと若手と、できればそういう組み合わせなのですが、全く2人がイーブンの立場でクラスを見る、4つの目で一人の生徒を見る。生徒の信頼関係、それは監督するとかではなく、見守りながら、自立を助けてあげる、そういう目的でやっています。

ですから、生徒との信頼関係、保護者との信頼関係もいいし、大体、休む生徒がいなくなったという現象を見

ても、今のところはうまくいっていると思います。

● コーディネーター

全員にお尋ねしたい事項です。

先ほど、もう20年もすれば、あるいは10年という話もありましたが、翻訳機ができ、もうしゃべらなくて済むという時代が来るということでしたが、それはさておき、第二言語で世界的に最も使われている英語を、世界共通語として修得するのは必要だと思いますが、いかがでしょうかということ。修得することは必要ですかといわれたら「はい、そうですね」という答えしかないと思うのですが、そうだとすると、坪谷さん、英語の修得というのはどのようにすると効率的でしょうか。先ほど時間の問題をお話いただきましたが。

● 坪谷さん

やはり年齢に合わせて知的に刺激を与えるということです。例えば私が見に行ったある小学校の授業ですが、小学校5年生に対して「1little, 2little, 3little Indian」をやっているのです。「1人、2人、3人来ました」というものです。私はあの歌をいつ覚えたのかと考えたら、幼稚園で教わったのです。小学校5年生に、3歳か4歳の時に教えることを、それが英語だからということだけで教えても、知的に刺激がありますか、ないですね。では、5年生といたら、どのようなものに興味があるのでしょうか。もしかしたら、宇宙のことをもっと知りたいと思うのかもしれない、絶滅する動物が世界にあるのだということを知りたいのかもしれない。もっと子どもたちに、もっと知りたい、もっと学びたい、そう思わせる素材を教えていかなければいけない。それをツールとして英語で教える。これを私は20数年間ずっと継承しています。

最初に私がそういった時は、外国人でさえも「英語ができない子どもに対して、そんなのできるわけない」といわれたのです。だけど、英語ができないならできないなりに、おもしろいことであれば何とかして伝えようとする、何とかして分かろうとするのです。だけど、「1人、2人、3人」だと、あまり勉強せずに、時間が何となく終わってしまう。ディズニーランドに行って、「楽しかったな」という、その一時の楽しさはあるんですが、知的な楽しさはない。だから、私はやはり学習というのは、常に、私たち人間本来が持っている、もっと学びたい、もっと知りたい、これを刺激するような方法で、そういった題材を子どもたちに出していくことが、英語に関わらず必要なのではないかと思います。

● コーディネーター

安淵さんにお伺いします。

2、3カ月前に、NHK で日中韓の大学生が15人ずつ集まって、日中韓論争をやっていました。韓国の学生と中国の学生は全員英語です。日本の学生はできないのです。英語をしゃべれないのです。日本のトップクラスの大学です。英語では議論ができないのです。通訳をつけていました。こういう現状なのですが、やはり英語教育が使いものになっていないということではないですか。

● 安淵さん

韓国は明らかに1995年くらいに 国策を変えて、いわゆるグローバル言語としての英語をとということで、既に

小学1年生から英語を入れて、もう20年近くやっているわけです。その成果が既に出始めています。逆にいうと、そういったところには、基本的には英語を話す大学生しか出さないです。だから、日本もその辺を考えたほうがよくて、要するに英語ができる優秀な人材は当然いるわけですから、そういったところにあえて通訳をつけて出すということがどのように見えるかというところを含めて、そこはプレゼンテーションの問題で考えていったほうが良いと思います。

先ほどの話でいうと、大学生からでも、もちろん英語は学べるわけですが、やはり興味から入っていくしかないと思うのです。自分の学びたいことを英語で学ぶということは一番大事だと思います。英語を学ぶということが目的であるのではなくて。

例えば、翻訳されていないが、この本を読みたい。なぜならば、この著者が好きだからということで、いろいろな本を読むようになっていく。取り寄せて読む、洋書店に行ってみると読みたい本がずらっと並んでいる。1冊も翻訳されていない。それを読むということです。それは自分の知りたい分野です。だから、そういった知りたい、学びたいというものを英語を通してやっていく。というのは、英語のほうが情報量が多いからです。そういった動機づけをしていかないと、とにかく英語だけやりましょうといわれても、なかなか進まないと思います。

● コーディネーター

最後に一言ずつ、このグローバル化、あるいは今日のディスカッションのことで構いませんのでお願いしたいと思います。

● 相川先生

今、グローバル化、あるいは留学、外に出て行く、あるいはアメリカの大学に行くようにいわれていますが、例えばコロンビア大学を卒業して、資格を取った人が向こうで就職する、あるいは帰ってきて就職する。日本の大企業は、コロンビア大学卒業という資格を特別なポイントとして採用の時に考慮するかどうかという点があります。確かに入社したら、それはあるかもしれない。やはりせっかくなかかった投資に見合ったリターンがあるかどうかという点はありますし、もう一つは、企業が安渕さんのように、最近減っているとは聞いていますが、企業の費用で、自分のメニューで、例えばハーバードとかプリンストンとかのビジネススクールに派遣するというケースもあるようです。

ただ、そのリスクというのは、行って帰ってきたら転職してしまう。まさにこの例が安渕さんですが、それは安渕さんに、その会社が魅力的な職場を与えられなかったということかもしれないです。それよりは、先ほど、インドの話が出ましたが、日本をよく知り尽くした、そういう海外の人材を採用するという、いろいろなオプションがこれからどんどん出てくるのではないかと思います。

す。

● 坪谷さん

私学はそれぞれの学校が、それぞれの特色を出していくことができる、この学校は生徒をこういった人材に育てていくのだということができているのです。ですから、それぞれの学校、こういう人材がほしい時はこの学校の卒業生だ、そのようにいえるような学校をつくっていくのは皆さん一人ひとりのお力だと思っています。是非ともこれからの日本のためによりしく願います。

● コーディネーター

坪谷さん、先ほど公教育とおっしゃいましたが、公教育の意味は、公立の教育という意味ですか。

● 坪谷さん

いいえ。私の学校は、実は一条校と呼ばれないのです。私がいます公教育というのは一条校という意味で、私のところは学習指導要領に従った学習をしていないので一条校としての認可が受けられないという立場です。いつも一条校の皆さんをうらやましいと思いながら暮らしているわけですが、そういった意味で、少し私の言葉が足りなかったのだと思います。

● 安渕さん

本日、何度か多様性ということを申しあげました。したがって、例えばグローバル化とか英語教育とかいろいろなことも、これは決して単一化、画一化の方向には走ってほしくないのです。そうではない子どもも含めて受け入れていく多様性というものを大事にしてほしい。

それから、特に女子生徒を育てている方たちには、やはり女性にもっとキャリアを見せて、さらなる活躍拠点、社会の中での役割が今どんどん拡大しつつあるのだということを、中学生、高校生にも見せていただきたい。今、人口の半分以上がより輝くというムードになってきています。そこを教育の現場でも教えていっていただきたいと思います。

● コーディネーター

本日は、皆さん、どうもありがとうございました。



運営委員長総括

順天中学高等学校 校長 **長 塚 篤 夫**



私学経営部会は、まず、山中文部科学事務次官の講演からはじまりましたが、今、日本社会が人口減少社会となり、これから大変な時代になる。日本の社会の現状と未来をしっかりと客観的に把握するということから、教育の問題も考えなければいけないということでした。しかし世界人口はすでに70億人、まもなく100億人になろうとしている。その中でグローバルと考えた時に、日本だけではなくて世界を見据えた状況を把握しながら、考えなければいけないのではないという思いを持っております。

現在のグローバル社会という世界は、どこの国で学び、どこの国で働くかを、個人が選べる時代になっている。今のグローバル時代の大きな特色だと思います。世界の労働者人口の約1割、また、その傘下まで含めると約2割は多国籍企業に勤務しているという時代です。

そう考えると、だからこそ自分は何者なのか、自分のアイデンティティは何なのかを、よりしっかり持つ人間にならなければいけないことをその反面として学びました。その中で教育もまた、グローバル化が求められている。

日本社会、あるいは日本の教育のグローバル化の問題というよりも、世界がグローバル化している中で日本社会、あるいは日本の教育がそのグローバル化に間に合っているのかどうか、あるいはその方向性はこれで良いのか問われていると、本大会であらためて感じました。

PISA 型の調査では日本の生徒の学習意欲が非常に低い。学力あるいは思考力がついていても、学ぶ意欲がついていない、むしろ、劣っている。そういう問題がわれわれに突きつけられています。しかしその問題の壁になっているのが、大学入試です。その改革がなければその壁は乗り越えられないということが、本大会の中で、改めて、突きつけられたテーマではなかったかと思います。英語力も同様に大学入試が壁となっているという意味では、大きな焦点になってきたと感じています。

講演Ⅱ・Ⅲでは實吉幹雄先生、近藤彰郎先生のお二人から私学の自主性、独自性をどう守り、発展させていくか、その使命はわれわれに委ねられている。これまでどう戦ってきたか、これからはいかに戦っていかなければならないか、その覚悟をあらためて示していただきました。

日本の学校教育は、特に高校は、20年間、多様な政策、複線化の政策が行われてきた。その中で、公立の私学化が随分と進展してしまった。私学は本来の自主性、あるいは独自性という自由をもっと発揮し、多様でボーダレスのグローバル化社会に対応する教育にますます取り組んでいかなければならない。そして、21世紀のグローバル化時代だからこそ、生まれてくる新たな、大きなチャンスは今、われわれは得ていると前向きに考えていこうということで総括とさせていただきます。ありがとうございました。



教育課程部会

1 研究目標 21世紀における新たな教育の構築

近年の学校教育では、主体的に考える力の育成が重視され、授業では能動的な学習や協働学習などの取組みがなされるようになった。また、グローバル化に対応する教育、数学・理科教育、ICTを活用した教育、キャリア教育などの推進が求められている。教育課程部会では、それらにおける諸問題や課題を含めて、私たちが追求すべき「21世紀における新たな教育」について考える場を提供したいと思う。

基調講演では、「学びの質を深めるために」を演題として東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美先生に、授業のあり方について事例を交えながらお話しいただく。その後、東京の三つの私立学校に「特色ある教育の実践例」を発表していただく。また、東京私学教育研究所教務運営研究会で毎年調査している「教務運営に関するアンケート」の集計結果を利用した東京私学の現状報告をする。

2 会場 グランドプリンスホテル新高輪国際館パミール 3階 翠雲

3 日程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	20		20					45	
10月17日	受付	開会式	基調講演	調査報告	昼食	実践発表 I・II・III			閉会式

4 内容

部会開会式 運営委員長挨拶 学校法人青山学院 常務理事 山本 与志春

基調講演 演題 「学びの質を深めるために」
講師 東京大学大学院教育学研究科 教授 秋田 喜代美

調査報告 テーマ 「『教務運営に関するアンケート』集計結果報告」
報告者 佼成学園中学高等学校 教諭 築瀬 誠

実践発表Ⅰ テーマ 「iPadが学校に来ると生徒・教職員はどうなるのか？」
発表者 桜丘中学高等学校 副校長・企画広報部長 品田 健

実践発表Ⅱ テーマ 「グローバル社会を下支えする教育
～かえつ有明の総合学習『サイエンス科』の取り組み～」
発表者 かえつ有明中学高等学校 英語科主任・サイエンスプロジェクト責任者 山田 英雄

実践発表Ⅲ テーマ 「キャリア教育～学校改革を目指して～」
発表者 中村中学高等学校 副校長 永井 哲明

部会閉会式 運営委員長総括 学校法人青山学院 常務理事 山本 与志春
専門委員長挨拶 学校法人鷗友学園 常務理事 清水 哲雄

5 運営委員・指導員（順不同）

委員長	山本与志春	（学校法人青山学院 常務理事）
委員	小坂部好史	（学校法人日本大学第二学園 常務理事）
	伊藤俊行	（堀越高等学校 校長）
	築瀬誠	（佼成学園中学高等学校 教諭）
	前嶋正秀	（かえつ有明中学高等学校 教諭）
	山口秀之	（成城学園中学高等学校 教諭）
	前岡克美	（中村中学高等学校 教諭）
	小林和久	（日本大学第二高等学校 教諭）

6 専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

委員長	清水哲雄	（学校法人鷗友学園 常務理事）
委員	山本与志春	（学校法人青山学院 常務理事）
	北村聡	（京都外大西高等学校 校長）
	大多和聡宏	（開星中学高等学校 理事長・校長）
客員研究員	助川幸彦	（芝中学高等学校 前校長）



基調講演

「学びの質を深めるために」

東京大学大学院教育学研究科 教授 秋田 喜代美



講師紹介（小坂部好史・運営委員）

秋田先生は東京大学文学部を卒業後、銀行員、専業主婦を経まして、東京大学教育学部教育心理学科へ学士入学をし、同大学大学院教育研究科博士課程を修了されました。日本学術振興会特別研究員、東京大学教育学部助手、立教大学文学部助教授を経まして、1999年より東京大学大学院教育学研究科へ勤務されています。現在は東京大学大学院教育学研究科教授、同副研究科長です。また、日本学術会議20、21、22期の会員でもあります。さらに、放送大学客員教授、国立教育政策研究所評議員、文部省文部科学省中央教育審議会教育課程教行政部会委員、日本保育学会会長、ワールドアソシエーション・オブ・レッスנסタディー・バイスプレジデント、世界授業研究学会の副会長を兼任されています。最近の著書に『学びの心理学』や、『教える空間から学び合う場へ』など多くの著書がございます。本日は『学びの質を深めるために』、授業のあり方について、事例を交えながらお話していただけるものと、楽しみにしております。

この度は全国私学教育研究集会東京大会教育課程部会にお招きをいただき、誠にありがとうございます。山本与志春運営委員長をはじめ、皆さまに支えていただき、こうしてお話をさせていただけることを、ありがたく思っております。

私自身は私立の中学校、高等学校に伺うことが多いわけではありませんので、十分なお話ができるかどうか分かりませんが、公立の学校には数多く伺っているということが

ございます。それらを踏まえながら、お手元に資料があると思います。そちらを踏まえながら、2時間少し、皆さまにお互いに話し合っていたりする時間も取りながら、進めさせていただきたいと思いますので、ご協力のよろしくお願いいたします。

「学びの質を深めるために」と題してお話をさせていただきます。確かな学びのための教育の質をどう考えるのかです。

私は、グローバル化の中で、学び合う学びを保証したい。そのために5つの保障を申しあげています。

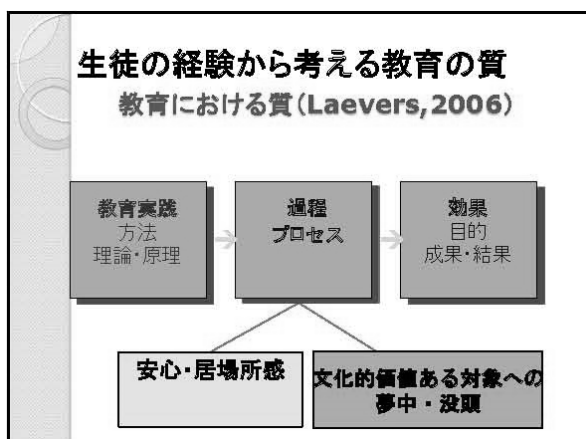
学び合う学びの5つの保障 豊かな市民の育成

- ・ 参加の保障 学びへの参加・存在の承認
- ・ 対話の保障 聴き合いの関係
- ・ 共有の保障 一体感、自分たちの言葉の形成によるかけがえのなさの共有
- ・ 多様性の保障 差異の吟味と探究
- ・ 探究の保障 様々な観点からの持続的
追求 見通し、振り返り
- ・ この5つを保障できる具体的手立てをもつ学校

豊かな市民の育成が、やはりこれから求められると思います。そのためには、全ての生徒が学びに参加していく、そしてお互いが認められて居場所が教室にあること、そのためには、授業中の話を今日はしますので、授業の中で聴き合いの関係ができること、そしてお互いに学び合っている集団が一体感をもち、自分たちの言葉でかけがえのない共有感を持つこと、そして、それぞれの生徒の違いからお互いに学び合い、探究的な学習ができること、さらに自分で追求し見直し振り返りをできる。この5点を保障できる具体的な手立てを持つ学校が、大事であると考えております。

私事です、私は昨日、日帰りで福井に行ってきました。多分、教育新聞の次の号に出ると思うのですが、福井の学力はなぜ高いのかというフォーラムがありました。私は福井県の全体の教育とか施策とか、12年ほど学校にずっと関わらせていただいているものですから、それでそのフォーラムに伺ってきました。そこでも語られていたのは、それぞれの学校の違いを尊重しながらも、それぞれのよさや知恵をつなぎ合っていくことで、これからの社会は知識

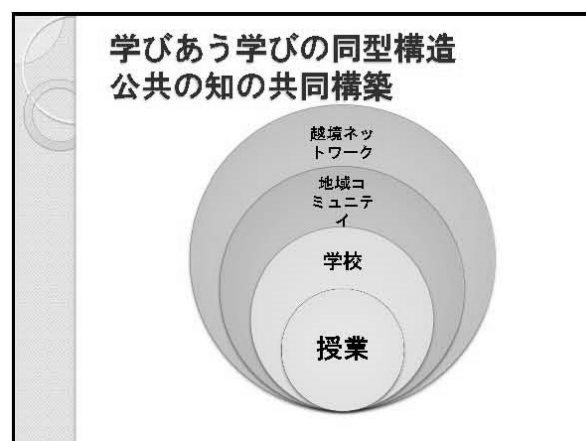
基盤社会なので学校の中でも学校間のこういう場でも、お金は分けると少なくなるのですが、知識は分かち合うと豊かになります。ですので、そうしたことがやはり、学び合う学びのために大事ではないかと考えております。しかし、学校の現実、子どもに主体的にと思っても、このように授業の集中から離れている状況もないわけではないのも事実だと思います。しかし一方では、子どもの目の輝きというのでしょうか、授業を見ると、どの子ども目を輝かせている瞬間があります。こうした瞬間が授業の中で少しでもより長くあることが、学習においては大事と考えるわけです。



私は、0歳から18歳まで全ての子どもたちの教育の質は、二つの点で考えることができるというベルギーのリュベーン大学の教授フェール・ラーバースさんの理論にすごく感銘を受けてご紹介をさせていただいています。教科によっての特徴、それから学校でも私学は独自の精神があります。ですので、それらの違いによってさまざまな教育方法があると思います。また、私は教育心理学者ですが、教育心理学の中にもさまざまな理論がございます。そして、効果や成果も何を成果とするのかは、学校がどういう力を大事にしたいのかによるわけです。今、だんだん、いわゆる学力検査で測れる学力だけではなく、見えない学力を含め、全人格的な生徒の成長を支援することが大きな効果や成果として捉えられるようになってきていると思います。その中で、授業中の問題はまさにプロセスです。まず大事なことは、安心感、居場所感がある。教室に座っているけれども取り残されていたり人間関係や教科内容との関係が切れている生徒が現実にはいるわけです。そうではなく、安心感、居場所感があること。そして教材や学問文化の、文化的に価値ある対象に夢中になり、没頭できる。そうした力こそが大事な力ではないかと思います。いろいろな中学校、高校にも伺わせていただきましたけれども、必ず、付き合いや安心感、居場所感が保障されて初めて夢中、没頭できる。それも教師と生徒の信頼関係があるとか、友達同士が支えあうという基盤が作られて初めて、深い学びが可能になることは実感として感じているところです。

私の元同僚の志水宏吉さんが、10月10日発売で、今、福井県ではベストセラーの「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」という本を出されました。そこで、昨日話が出ていたのですが、780円で中公新書から出版されているのですが、その中の一つの特徴が、「一時一心」です。全て、部活動でもそうだし、それから福井県は清掃活動を大事にして、無言清掃をやっている学校があります。そうい

うところでもやはり、どんな時でも「一時一心」になった時に学びがあります。この2時間の講演でも「一時一心」でこの話を聞いていただけると、少し学びになるかと思うのです。そういうことは当たり前のことですが、参加しようとする。そして状況を生かす。そして能力や知識が蓄えられて、確かな学びになる。これを授業の中でどのように構成していくのが大事です。しかも、昨日、同僚の三宅なほみ先生から話があったと思うのですが、21世紀型スキルといわれるように、学びの協力として参加し、問題を発見し解決していく力が必要です。わがこととして責任を担える。そういう学びへの構えとしての態度を育てていくことが求められていると思います。

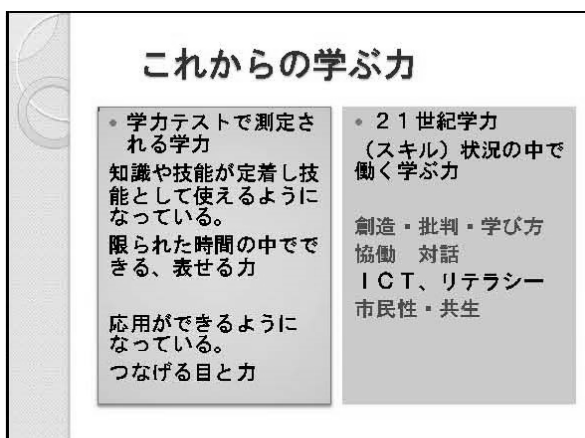
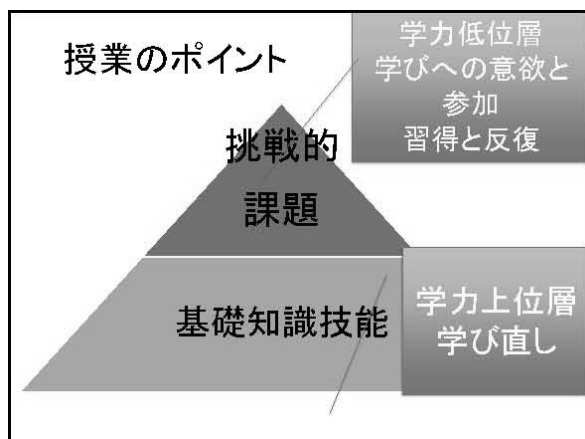


私は、授業が良ければ、学校の信頼は高まり、地域や保護者から信頼を得、あの学校の教育はどのようにしているのだろうと、お互いが興味、関心を持つというような、そういうネットワークができていくことが大事なことだと考えているわけです。

聴いていただくと分かると思うのですが、次のことは佐藤学さんがよくいわれていることです。

基礎と知識、技能、授業のポイントとして、低学力であると基礎知識の知識が大事だといって、ドリル型の単純な活動を求めがちになりやすい。そして、これはアメリカの研究でも出ていますが、挑戦的とか批判的な思考能力などを大事にするような課題は、学力上位層が回答を受けたり、学力上位校でそうした活動の時間が増える特徴があります。しかしながら、実際には学力上位層が本当に深く分かっているかといえば、必ずしもそうではない。また学力の低い子どもも、学びへの意欲や参加ができるような挑戦的な課題を授業中に、その生徒にとって挑戦的な課題を

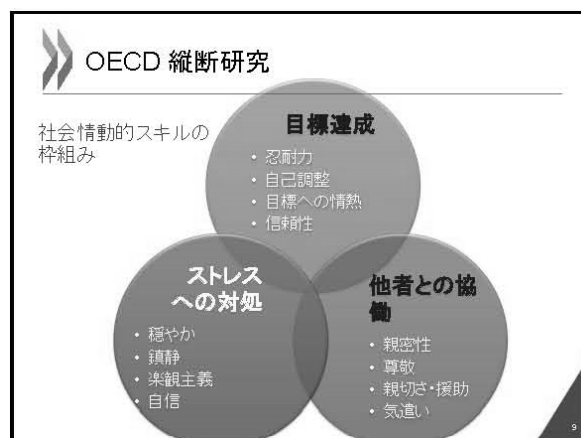
準備することによって、学校の中でも学級の中でも、お互いに高め合っていくような関係をつくっていくことが大事なのです。授業中に挑戦的な課題をどのように準備するかが問われている。これは教科によらずだと思います。



これは昨日、三宅先生が話をされた中心部分だと思いますので、詳しくはここでは扱いませんが、いわゆる学力テストで測定される学力だけではなく、21世紀学力として、創造し、批判し、生涯においての学び方を学ぶ。そして協働することです。今日の午後は私は残念ながら伺えませんが、ICTの話もあると聞いております。そうした力が、これからの学校では育成されることが大事なのではないかと思っています。私は6月に OECD の会議に行きました時に出ていたことです。学力と同時に、生涯これから学び続けるために大事な能力として、社会情緒的スキルがいわゆるようになっていきます。既に OECD では、PISA の学力テストだけではなく、この社会情緒的スキルのテストとか、協働的な問題解決のためのテストも準備しています。例えば iPad で出すのですが、Aはこういう問題に対してこういう意見を持っている。Bはこのような意見をいつている。ではあなたはどのようにそれを考えるか、というような、折り合いをつけるというのですか、日本の子どもたちは一般に、いわれたことに従順に従う良さはあるのですが、そういう調整型の協働的な課題の解決をどういうふうにするのかが問われているのです。これはもう数年以内にはテストになって出てくると思います。またそれだけではなく協働する力、課題に向かって自分でやっていくような力も求められているわけです。

もう少し分かりやすく整理すれば、目標を達成する力。また、他者とうまくやっていく力。そしてストレスに対処

するような力。これらが求められるわけです。



こういう力だけを抽象的に申しあげても、そうだよなと思われると思うのですが、私はこれを実証の一例として、OECD で見た映画が面白かったのでご紹介したいと思います。これはマシュマロです。マシュマロを召しあがったことはありますでしょうか。分かりますか。白くて甘い、ピンクのものもあります。バナナ味で黄色いものもあります。発達心理学等でよく紹介されるものですが、4歳の子どものアメリカの研究です。4歳の子どもを連れてきます。そして、面接室で子どもの好きなマシュマロを見せるのです。それで、「ごめんね、先生急にご用がでちゃった。ちょっと帰ってくるまで食べないで待っててね」といって、目の前においしそうなマシュマロを置いて出て行くわけです。研究者は嫌ですね、いやらしいですね。研究者は出ていくと反対側に回って、その子どもがその間何をしているかを観察するわけです。子どもの人権から考えると大変問題かもしれませんが、待っている間の行動を観察する。そこで、7割の子どもは食べたそうです。それに対して、3割の子どもは終わりまで我慢ができたという結果です。これは経済学の一流紙に載っている研究です。ここまでの研究はたくさんあるのです。それに対して、長期縦断研究といわれるような研究のスタイルが今増えてきています。17歳、アメリカの大学進学適性検査の SAT の得点が、我慢できた子どもの方が210ポイント高かった。もちろんこれは一例です。このマシュマロ以外にもたくさんの調査をしているのですが、つまり、ここで伝えたい点は、先生のいわれた通りにできるのがいいということではなく、自分で見通しを持って、先生が戻ってきたら必ず食べられると、相手を信頼できたり見通しを持てたり、取りあえず違うことを考えて気晴らしができたり、そういう自己を律する自己調整力が大きく利くのではないかとということです。私はこのプレゼンが出た時、さすが北欧と思ったのは、スウェーデンの委員がこういったのです。ジェンダーバイアスというものは分かりますか。この写真を見ると、マシュマロを食べたのはみんな男のように思われる。女は我慢したり耐えているように見える、こういう写真が刷り込みで世界に配られるのはどうかと指摘されていました。そうですねと OECD の人もいつておられました。実際には大事なことは、学力ではありません。BMI が何だか分かりますか。クスッと笑われた方は切実感があります。分かりますか。私にはすごく切実なのです。肥満度です。これも我慢できた子どもは低かった。つまり、いわゆる学力だけでは

なく健康を含め、大人になってからも、この調査だけではないえませんが、OECD の調査でよくいわれているのは、リテラシーが高い大人ほど、新聞とかでも健康とか医療の記事などもよく読む、それが自分の健康管理につながるというわけです。単純な学力だけではなくて、生涯幸せに生きていくためには、こうした社会情緒的なスキルも重要であるということです。目標達成、他者との協働、そして自分の感情を切れずにうまくコントロールできる力。自尊心を持つ。こうしたことが学力という面だけではなくて、例えば労働市場でより年収が高くなるとか、離職率が低くなるとか、うまく社会でやっていける、社会生活として健康度、幸福度等にも影響を与えるというようなことがいわれてきています。つまり、ここで申し上げたいのは、では協働とか社会情緒的にうまく人と折り合う力は、部活動や委員会活動であり、授業は知識というのではないということです。やはり授業が学校の主たる時間を占めているのは間違いありませんから、その中でお互いに学び合いながら知識を深く学んでいるような授業を考えていくことが大事なのではないかということです。これはある人の言葉です。

「人々に学び、人々と一緒に計画し、人々が持っているもので始め、人々が知っていることの上に築きなさい。リーダーは真に優れていれば。—このリーダーは教師といい換えられると思います—リーダー（教師）が真に優れていれば、終わってみると人々は口々にこういう（ ）。

穴埋め問題です。このかっこの中に何が入ると思いますか。ご存じの方はすぐ手があがるかもしれませんが、知らない人もいろいろ考えられると思います。これはこういう言葉が入ります。「自分たちの力でやり遂げた」と。老子の言葉だそうです、恐らく生徒に学び生徒と一緒に生徒が持っている知識で始めて、その上に築いていく。そうすると教師が真に優れていれば、生徒は自分の力でやったんだという満足感を達成することができると思うわけです。そしてそれでこそ、身につくのではないかと思います。これはリーダーシップの心得としてよく引かれるものですが、学校全体の運営や計画においても、大事な面かもしれません。

今日は「学び合う授業作り」ということで、この抽象的な話だけではなく、具体的に、ではどのような授業を作るかということと一緒に考えさせていただきたいと思っています。

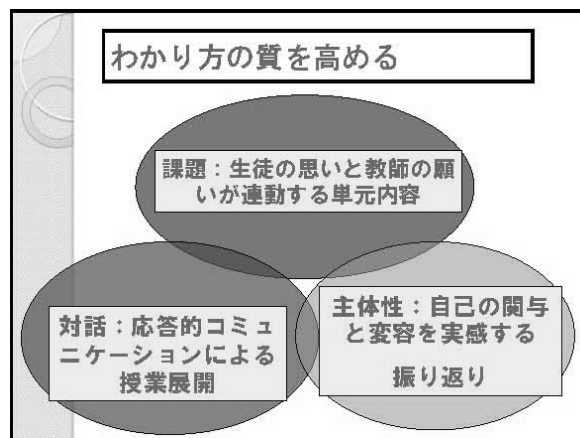
学びあう授業づくり

- 1) すべての生徒が参加できる
- 2) 深く学べる課題の質
探究 自らが課題をもてる
定着 学校生活・家庭学習とつながる
- 3) 見通し(予想)、関与、振り返りの
学びのサイクルが、生徒にも教師の中
にも生まれる

まず全ての生徒が参加する。深く学べるためには課題の質が大事です。特に中学校、高等学校の授業というのは教えるべき内容が極めて多いので、家庭学習と学校の学習を

いかにつなげてうまく回すサイクルができるかが極めて大事です。それから、昨日、福井に行ってきたと思いますが、生徒自身に学習の仕方として、特定の内容だけではなくて学習計画を立てさせる力、1週間なり自分で学習をどのように、自分の帰ってからの時間を使うかの計画力、それから中間や期末テストの勉強の仕方を学ぶ、そういう方略も一緒に身につけておくことが、家庭学習と学校生活、学校の授業をつなげるために学校全体で取り組むべきことではないかと私は考えております。今日はそこについては詳しく話しませんが、宿題の質も問題です。

それから、生徒自身が見通しを持ち、これが計画に関わりますが、見通しを持ち、積極的に関与し振り返るというようなサイクルを授業の中でつくっていくことが必要になります。



分かり方の質を高めるためには、お手元にありますように課題が、生徒が知識とか意欲を持てるものと、教師がこれを伝えたい、教えたいという内容とがうまく連動できるようにカリキュラムを組む、特に中学高等学校の場面では、私は単元をどう組むかが非常に大事だと思っています。まとめて教えないといけないことはきちんと教えますけれども、全部を教えるのではなく、やはり探求できるところをいかに準備するかです。また対話ですが、やり取りをしながら生徒を参加させていくという、これ一番下手なのが大学の教授なのです。学校種があがるほど大体講義がだんだん多くなります。でも調査すると、例えば、私立の中学校で研究させていただいたことがあるのですが、同じ学年の同じ先生が教えても、子どもの突っ込みが多くて、細かくやり取りができる教室ほど生徒の知識の定着が同じ内容でもよいのです。やはり応答的なコミュニケーションが鍵です。それによって自分が関与することができます。やりとりを通して解きほぐしかみくだくことができるわけです。それから、今度は振り返りです。1時間とか1単元の後、生徒の振り返る機会をどう設定するかです。それが分かり方の質を高め定着を促すために大事です。今日お話をさせていただき協働学習も、協働学習を入れるだけでと必ずしも定着するとは限りません。その活動を通して、どうやって振り返ったり、生徒自身の個に返していくかという問題も大事なところになります。

教育の質を深めるためには、いろいろな生徒が参加しあえて、見える・響き合うという教室が大事です。40人いればそこで生徒のいろいろな声が聞こえてくる。生徒の考えが可視化できる。そして、当然そのために学習の重要課題

に焦点を絞り、教材の根拠や理由を吟味する。そして振り返る。このプロセスは、皆さん学校でやってらっしゃることだと思います。ですので釈迦に説法で恐縮ですが、お話をさせていただいているわけですが、そのサイクルをどう回すかが重要になってくると思います。



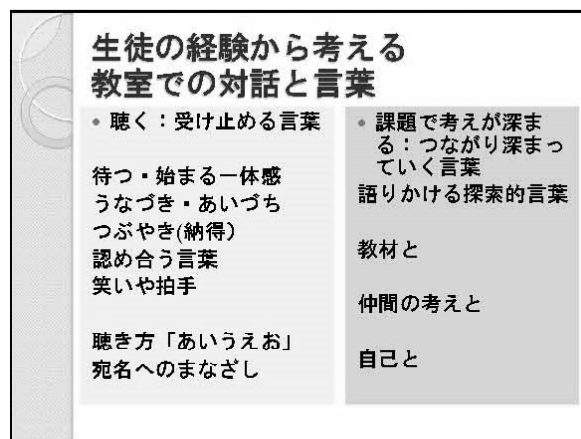
多声的対話として聴き合い響き合うことが大事です。TIMSS の調査によれば、中学校の数学の2年生ですが、授業の発言の7割は教師が話している。国際的な授業のどこでもそうなのです。日本もそうです。7割から8割教師がしゃべっていて、2割生徒が話す。これでは、もしかすると一人一人の生徒の声が生かされるような居場所感は生まれにくいかもしれません。これを私はいろいろなところで紹介しているのです。一度聞いた人は絶対知っているのです。「良い教師と掛けて何と解くか、その心は」。30秒だけ差しあげます。ノートに書いてください。

お隣同士知らないかもしれないですが、何と書いたか少し共有してください。どうぞ。

どうですか。これは、横浜国立大学の高木先生に伺いました。何と解く？いろいろありえますが答えの一つだと思います。盆栽。盆栽は分かりますか。その心は、松と菊(待つと聞く)が多い。分かりますか。松の盆栽と菊の花。でも、教室で恐らく授業が早く進んで置いていかれる子どもが多いと思うのです。そこを少し待ってくれるかどうか。それから、生徒がSOSを出している時に聴いてくれるかどうかです。それとも、取りあえずわからない生徒はおいておいて進行をずっとしていくか。これは日本女子大学の吉崎先生の研究で、生徒が分かってないと思った時に教師がどうするか。取りあえず進むのか、そこでもう一度生徒に付き合って戻り考え直すのか。もちろん内容によると思います。しかし、その辺りが深く学ぶためのポイントとしては大事かもしれません。

「聴く」という字ですが、これは私はインターナショナルスクールに伺った時になるほどと思ったのですが、この「聴く」という、「きく」はいろいろあります。新聞の「聞」から、尋ねるとかですね、訊問のほうの「訊く」とかいろいろあります。この「きく」ですけれども、原意は、耳で10の目で一つの心を、いろんな見方をするという意味だそう。で「聴く」というのは、教室であれば、いろいろな生徒がみんなにいろいろな発想を出すことによって、いろいろな観点から、しかも一つの心で作りあげていく。先程「一時一心」と申しあげましたが、そういう心もちがあって初めて「聴」けているのです。いわゆる情報が流れて入って

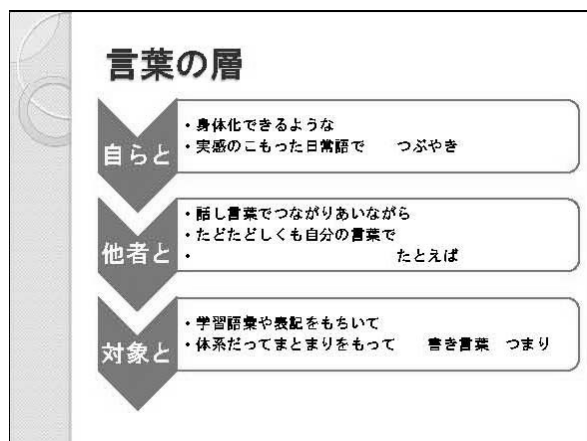
くるといふのは違うと思うのです。こういう聞き方を教室でできる学校とは、本当に静かです。考え合う。受け入れ合う。そうした授業ができていないのではないかと思います。これまた昨日聞いた話の中で、いい言葉だなと。ある校長先生に聞いたのです。「考えの少ない人はよくしゃべる」。私の講演もそうになっているかもしれず、怖いのですけれども、ご付き合いください。



生徒の経験から考えると、居場所感がある授業、それから深まる授業の両面が大事なのです。まず、先程お話しした「待つ」。それから生徒を、さり気なくうなずいたり相づちを打つてくれたり、それからつぶやきが教室の中に出てくることです。自然に拍手や笑いが出てくる雰囲気というのですか、大体そういう教室では、落ち着きが出てくる。これはもう、私はどの学校種でも共通だと思います。「聴き方あいうえお」といっているのですけれども、自然にこういうやり方を教えるのです。「ああ」とかいて生徒がつぶやく。「いいねえ」とか、「うんうん」とか、「えー」とか、「おー」とかいう言葉が生徒の中から本音でポロッと出てくる。これ抑圧的でないわけであります。そして誰に向かって語るのかということ、まず中学、高校の授業では、90%教師に話している教室が多い。それだけだと自分の声を聞き取ってもらっている感覚が少なくなる。それに対して例えば今日お話しする協働学習のような形態を取り入れることによって、仲間同士が、相手といういろいろな宛名の人に聞いてもらえる。つぶやきやすくなる。それによって自分の声を、同じ1時間でも、どの子も出せる。自分の声が聴き取られて、自分の考えが受け入れられているという実感を得られるから、この小グループの活動であったり、ペアの学習だったりでは、少しつぶやいていえる。「いいかね」といって「できたか」といって教師が誰かを指す時間と「ちょっと隣と確認して」といって、お互いにささやかう時間はそう変わらない。しかし、そうした方法が子どもを何度も1時間の授業の中で心理的に深く参加に巻き込んで入れていく一つになる。

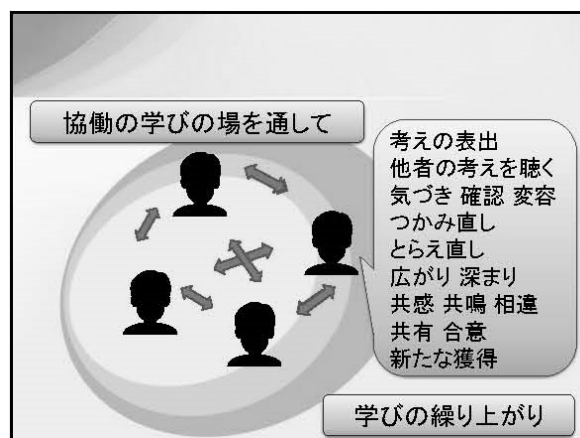
もう一方で、スラスラいえるのは分かるという意味です。でも、詰まりながら語り掛ける言葉、これは探索的言葉と呼びます。探索の言葉とは教材や仲間の考えと自分の考えをつなぎ合って生まれていく言葉です。一方プレゼンの言葉はあらかじめ準備してきていますからスラスラしゃべる。私は今日はしゃべっている間は考えられないです。それに対して、会議などでも考えながら話されることがあると思うのです。深く考える時はたどたどしくなります。で

もそれを聴き取っていくことが、考えを深めていく上で大事なことなのではないかと思います。もちろん、覚えなければならないこともたくさんあります。しかし、もう一方で生徒が分かりかけて発しようとする言葉を聴きながら、つないでいく会話も大事ではないかと思います。そういう時は、生徒は実感がこもっているので手が動いたり、説明しようと思いますから表情や動きが出ます。そして仲間と、ただどしどしけれども自分の言葉でいいながら、生活経験とつないで、「例えばこうなんだよ」という言葉がでます。教科によりますけれども出てきます。そして、そこで終わっていいのだといえ、それだけだと、やはり中高等学校の学習が成り立ちません。平たい日常の言葉でのつぶやきからもう少し学習の語彙や表記を用いて、まとめていく力は大事です。しかし最初から終わりまで抽象的な言葉や実感が伴わないことばだと、「何のために学んでいるの」という言葉が返ってくるのではないのでしょうか。そうすると先生方は、「将来の君のために役に立つんだよ。入試で出るんだよ」という説明になってしまいます。しかし、そうではなく、生徒が分かったという感覚を持つことばをかわしあうことが大事なのです。

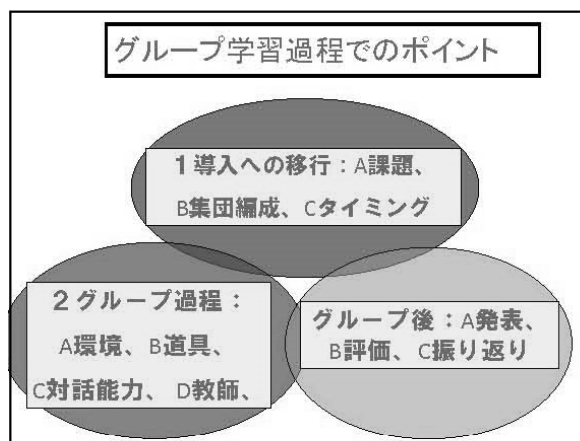


ある生徒が説明し始めると手が挙がっているというような風景です(写真略)。これは算数で、高松の中学校3年生の授業ですが、「説明をしよう」というようなことをやって、先生が聞いているのです。少し詰まっている子どもの考えを聞いている先生の姿です。先生が上から目線ではないです。見守っているというよりは聴いておられます。先生が、「ここなのか」というと、この子は、「ああ、分かった」といってうれしそうに自分のノートに書きます。そうすると必ずおせっかいではないけれども、隣の子も分らないと思うから教えてあげようと思うわけです。こうした関係が大事なのではないかと思います。しかし、こういう指示に対して、今年発表になりました TALIS によれば、日本では、多種多様な指導実践の程度が低いと回答する結果がでています。特に、生徒が小人数のグループで問題や課題に対する協働の解決策を話すような活動が、OECD の平均よりもはるかに日本の回答率が低い結果になっています。逆に日本がそれなりにやっているのは、ワークブックや宿題のチェックと、授業の内容のまとめ部分です。ICT もかなり低いです。それから、やっぱり1週間を必要とするような探究的な課題も少ない。それから、それぞれの学習が困難な生徒や進度が低い生徒に合った課題を与えたり、協働でやるということも低いのです。この項目のよう

な経験をしていくことが、特に高校段階では大事と私は思います。一人一人の課題意識を考え、高め、自分のため聞いてほしい。他の人はどう考えているのか。こんなことをこういう形で何層でも語り合うような、学びとコミュニティというのですか、教室の小グループの中で、学級の中で、学校の中で、そういう学びのコミュニティを作っていくことが、受け入れられているという存在感につながり、参加意識を高めるのです。同時に、知識は分け合うほど豊かになりますから、そうした教育経験をしていくことが必要ではないかと思います。

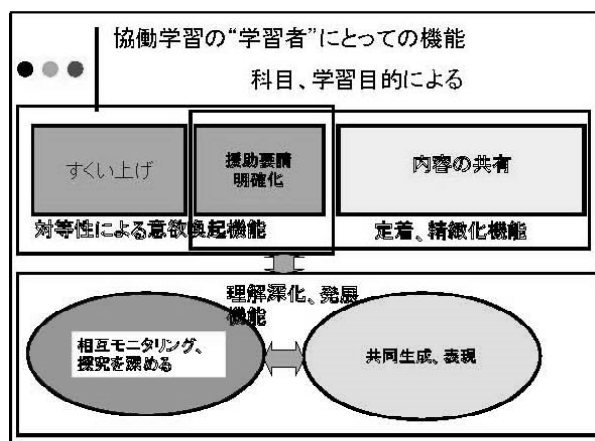


こういう形で考えの表出、他者の考えを本気で聴く、そして気づき、つかみ直し、とらえ直し、こうした経験が私は大事なのではないかと思います。これは福井大附属中のスライドです。その学校では学びの繰り上がりと呼んでおられますが、先生が説明して、「ああ、分かった」ということよりも、実は生徒が考えて誰かが説明して、「なるほど」ということの方が多いいようにも思います。こうした経験を増やしていくこともいいのではないのでしょうか。協働学習を見ますと、認知科学では、理解が深まる、表現が生成される、それから、定着する効果が指摘されています。



お互いに確認をし合うので、「ちょっと隣と、今学んだことを確認して」といって声を出して説明し合う。これはあまり時間がかからないです。高校や中学校でもペアをうまく使う。教師が誰か指名して発言させて分かる子が発言を聞いて、そうだねというより、「ちょっと今の隣同士話して」といって、ペアにする、というようなことをうまく入れると、一斉の伝達型でも、もっと生徒の関わりを深めることができます。さらに探究的なところでは、もっと小グループを活用する。1単元の中で1回、2回でもいいから

そういうものを入れ始めてみるということが、これからのグローバル化の中で重要なのではないかと私自身は考えています。



私に関わらせてもらっている困難な学校は、実は協働学習で一番効果があると思うのは、すくい上げ、少しもう学びから離れている生徒が、実は小グループにすると友達が友達を支えるのです。それで、すねて、少し机などを離しているように見える生徒も、少しずつ声を掛けると関わってきたりする。それから、「今何やってるの」「これよく分かんない」ということを教師には聞けなくても、仲間同士だったら「ねえ、ちょっと教えてよ」という関係が作れます。そこが実は、安心感、居場所感、次へのステップにもものすごく効果がある。これはどこの学校でやっても、大きく変わっていくと思っています。

そこで、今日は、実際にこの私学の高校のビデオを見て、感じ、考えたことを話し合うということで、大東学園で夏に研修で伺わせていただきました。そこで、ご了解を得まして、授業を、一部、早送りしながら見ていただき、そして皆さんでグループになって、小グループで話し合っていたく、というようなことをしたいと思っています。大東学園の高校1年生の数学の授業です。黒板には「縦と横の最大値、最小値の単元で、縦と横の長さの和が10センチであるような長方形の面積を求めよ」ということについて、式とその図を使いながら面積を出すところを、前半では説明をして、知識を共有しています。その後、今度はワークシートで小グループで活動をして、協働学習をされています。そこではまず基本的な問題で、隣り合う2辺の長さの和が4センチメートルであるという時の、長方形の面積の最大値を求めよ、というような問題を解き、その後もう少し複雑な問題を、A君がB君に向かってボールを投げたらこういう式だけど、高さはどうなるかと、私たちは佐藤学さんがいうジャンルの課題とか、少し挑戦的な、その子たちにとって挑戦的な課題というのを考えて、各自で解かせるという、誰かできる子が発表して写すというのではない授業の形態を取られていましたが、この学校ではいろいろな試みをされていますが、その一つを見ていただこうと思います。

(ビデオ上映 略)

授業のごく一部分だけを見ていただきました。ぜひお願いをしたいのは、こういう授業のビデオを見て協議する時のルールとマナーというのがあります。今から前後で4人グループないし最大で5人になってください。いいでしょ

うか。それ以上だと自己紹介で時間がかかるので。そういう4人になっていただきまして、このビデオからご自身が学べると思ったことは何かということをお話していただきたいです。10分ほど差しあげますので、4人でお話し合いをいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

(話し合い)

学校の場合には、ホワイトボードを真ん中に用意して、また語ったりしていただくことと共有ができるのですが、今日は残念ながら時間の関係もございまして、お願いをしております。今日、良い教師と掛けて盆栽と申しあげました。いくつかのグループにお話を伺うのですが、このようにお願いしたいと思っています。うちのグループでこういうことを話しましたというようなことを話していただくのは不要です。お願いした先生が、グループで話し合ったことで自分が考えたり、ビデオをご覧になってご自身が考えたことをいってくだされば結構です。例としてこれとこれが出ましたなどという必要はございません。いいでしょうか。全く存じあげない先生方に、なんと厚かましいことですが、よろしくお願いします。

●M先生

突然で少しまとまらないです。私が考えております協働学習というのは、こんなに大事なもののかなということに驚きを感じているところです。とにかく急いで授業をこなしていかなければいけないという、そういう頭ばかりずっとありましたけれども、そうではないということに気づきました。

●秋田先生

突然の指名に対し、本当に率直なところをお話をいただいております。協働学習といったとたんに「イエーイ」という女の子の声があそこの中に入っているのですけれども、協働というのは小グループだけを協働という考え方ではなく、いろんな形が、形態ではなくて仲間同士支え合い学びあうということかと思っています。

●O先生

本校は中学校も併設であって、中学校の時は高校受験がないので、中学生で、理科なのでよくやっていたのですが、高校になるとそれどころではなくて、先程の先生のところのように、受験というところで、校長から出口が大切だといわれているので、高校だときつかなと考えてます。でもやってみたいという気持ちもあります。以上です。

●秋田先生

ありがとうございます。高校でもやり始めている公立校はたくさんあります。明らかに学力が上がっているのが、それはもう間違いがないのですが、一番のネックは、先生方がやってみようと思えるかどうかです。取りあえず今まで通りにやっていればなんとかなるのではないかなと思われるかどうかかもしれません。

●T先生

非常にユニークなビデオですが、二つ。前半の講義の時にとっても眠そうだった男の子が、後半になるとさすがに4人で寝てられなくて一生懸命顔をあげていたというのが、一つ印象的なことと、それから、これまでの授業というのは教員の方がどうしても、ここまで教えなければいけないということをするすごく持っているのですが、あのようなタイ

ブの授業ですと、教員の仕事の大半が、子どもたちが活発に機能するための課題をどこに設定するか。学習者がどこまでわかっているかということを教員がどこまで見抜いているかということが、すごく問われるので、教材作りは大変そうだという感想を持ちました。

●秋田先生

ありがとうございます。良い形で焦点がきちっと生徒の実態把握ができて捉えられていないと、取りあえず出していると、分かっているというような形にいきがちであります。

●北原先生（大東学園高等学校 副校長）

実は、映像は私が映しました。どちらかというと勉強が得意でなかったり、すごく自信のない子たちが入ってきます。いろいろ、特に学校全体である形をやっているわけではないので、授業によっては、穏やかなのですが、みんな静かにしてるのだけれども、なかなか授業で学んでいるという姿にならないというような授業もあります。本日見ていただいたのは、先生方の目から見るといろいろな面が見える部分もあると思うのですが、でも何とか自分はあるの中に、空間にいる1人として勉強に参加したり、何か分りたい。みんなで楽しみたいとか、そういうところで生徒が、自分もあの場において学んでいるという、そういうところでは頑張っている姿かなと思います。本校はこういった既習のことをずっとやってきているのですが、どうしても教員のほうが、教え方がどうか、指示の仕方がどうということや、なかなか脱却できなくて、授業を見せてくれる先生たちの緊張というのもあるのですが、ビデオの教員は実は1年目の先生なのですが、広く自分の授業を公開していて、いろいろなことに挑戦しながら私たちも刺激をお互いに受けている感じです。ありがとうございます。

●秋田先生

ありがとうございます。どこかの学校の実際の授業を出させてもらおうと思い突然お願いをして、送っていただいたビデオです。

全国ではいろいろな学校で行われています。グループ学習では、例えば、最初から座席を、すでにグループにしてある学校もあります。それは、聞く時にもグループにしておくとか少しづつやいて、お互いが支え合えるというような形でやっている所もあります。本当にさまざまですが、導入で、いつ、どういう課題でやるのか。集団編成は。われわれがいろいろやってきてわかったのは、今日もお願いしましたが、4人が限界です。5人という場合もありますが、それより大きいと、結局は参加しない生徒が出るわけです。2者が支え合いなのですけれども、3者、4者になるといいのは、3人、4人になるといろいろな考えの子が出てきて、支え合えるというようなところがあります。そこには、教室の大きさであったり、お互いの会話能力などもありますので、聞いているだけならできる。でもお互い話そうと思えば、いろんな関係でも大事になってくるわけです。それから、グループの後、それをどう生かすかというような、教室では例えばお互いよく分からないグループは他のグループに聞いていいというような形でつないでいきましたが、自分のグループだけで収斂していくような、全体に収斂していくような課題もあれば、発展的な課題もあります。内容によっては、基本技能や知識を習得する時は伝達したほ

うが早いですがけれども、やはり、定着をしたりもっと理解を深めるとか、多様な考えを生み出すというような課題の時には、こうした活動が大事です。ちなみに私の大学でも、アクティブラーニングで3人から4人グループで講義を聴いた後の応用的なところは全部、きちっと自分の言葉で考えて話せるようにするのは、単に従順にノートを取って覚えるだけの学習から脱却しなければならないので協働学習をしてもらっています。大学も変わってきています。大学の学習につながるように高校の授業でもお願いしたいと思っています。

協働への中高校教師の不安の本音 (石橋他、印刷中)

1 生徒に関する不安

- ①グループ作りに関する生徒の人間関係の不安(人間関係、学力差、個人特性)
- ②グループにおける協働学習の限界への不安(個性の埋没、自ら学ぶ姿勢のなさ)

2 教師自身の不安

- ③学習の効果・評価の不安(定着や覚える努力、外部の目、効果検証の方法)
- ④実施上の不安(教師の役割、実施のいらいら、教材準備の不安、なんとなくの不安)

とはいっても、正直なところ、必ず先生方というのは抵抗感があると思うのです。それで、東京大学には付属学校があります。ご存じのように東京大学附属はいわゆるエリート進学の付属とは少し違うスタイルも、もう一つの学力を目指す付属としてやっているのですけれども、そこで10年ほど協働をやっているのです。協働学習を佐藤学さんがおられた頃に、小グループ活動を入れて、10年経って先生の本音を聞いてみようというので、全校の先生に、中等教育学校なので、中学校6年全部を同じ人が担当していますが、不安の本音というのを今回調査をしてみてまとめた研究というのを出してみました。実際にそこで出てくるのは、まず生徒の方のグループ作りに関して、人間関係が日頃から悪いとグループでもうまくいかないのではないかと不安があったり、それから、生徒同士の学力差がクラスの中であるので、それがうまくいかないのではないかと。クラスでの関係がグループ作りに影響するのではないかと。そのような不安とか、それからもう一方で、生徒の個性が埋没するのではないかと。集団に意見がかき消されて埋没するのではないかと。では、それほど先生たちは一人一人が輝く授業をしていますかと聞かなければいけないのですが、そういう個が埋没するとか、自ら学ぶ姿勢が友達に頼ってしまうのではないかとというような意見も出てきます。それは教壇に立っていらっしゃる先生方の本音です。

もう一方で先生自身の不安というのがあります。定着とか覚える努力というのが薄れるのではないかと。でも明らかになったのは、楽しそうにやる、もう、生き生き生徒が学ぶというのは間違いがないのです。それから、外部から協働学習の実践がどう見られているのか、まだそういう学校が少ないので不安という、そういう不安もあれば、効果が本当にあるのかという不安もある。ただ実施上の不安としては、教師が何をやらしたいのかというところが、まだまだそこで不安であるとか、それから、先生自

身がなんとなく立ちを覚えるところもある。まどろっこしいと思う部分がある。教材準備の不安というか、どういう課題ならいいのか。でも実はその不安が裏返しで教材研究をしたり、生徒の実態をよく把握したり、そういうところにも、1度教師になったら20年、30年同じように教えていけばいいのかというところで、意識の転換も持っていくというようなこともあります。

よさ

- 1.生徒が獲得する視点や姿勢
- 2.生徒が獲得する関係性や心の安定
- 3.生徒が獲得する理解方法・考え方
- 4.実際に授業をしてみたときの良さ
- 5.教師の設定する課題の可能性
- 6.有効な場面や課題、認識

しかし、一方では、良さも感じておられます。10年やってきて、生徒が多様な考えをちゃんと受け入れようとする姿勢とか視点が生まれたり、それから、学習活動を通してコミュニケーションが育つとか、それから、心が明らかに安定するとかですね、離れている生徒がいなくなって、みんなが居場所ができて、支え合っているとかです。理解の仕方として、学習における考え方とか、そういうものが身に着くということです。あとは、効果としては、実際授業をしたら、明らかに生徒が変わるというところに手応えを感じておられる先生が、課題がすごく重要なので、難しいけど挑戦的があるとかです。ただ、まだまだどういう場面でどういう課題でやれば有効かということが10年たっても難しい。でもそれは一斉学習も一斉の指導が、ではこれで全部OKかといえ、そうではないわけで、そういう意味での探求のきっかけという、学び続ける教師が、これから21世紀の子どもたちに何を学校が求めるかというところとつながってくるのかもしれませんが。高大連携という時の大学に入るのが目的ではなく、大学で深く学んでもらう力をどうやって高校でも育ててくださるのかということも、大事な観点かと思っています。

関わりあいの深まり

- ・ やることがわかって関わっている
- ・ 各児へ質疑や意見コメントがでている
- ・ 1つのものを一緒に考えている
- ・ 友達の考えと比べたりつなげたりできる
- ・ 根拠や理由を語りあえている
- ・ 一人一人の考えがより理解が深まっている

21

協働学習はやることが分かって関わっているかどうか、

それから、互いに分からない子が分かる子に聞いて、グループでも女の子が、「ちょっとここまでは分かるんだけど」とかいいながら聞いていたり。大事なことは、一つのものを一緒にというのはうれしいです。このパワーポイントに皆さんのまなざしがここに向かっていきますと、心がこちらを向いてくださっているのだと思うのです。協働もそうです。協働といいながら一人一人がワークシートを見詰めている間は、恐らく聞き合ったりの関係はできません。学習科学の研究でも出ています。レジュメを配ったりワークシートは有効ですが、視線を下に落とします。それに対して対応する時は相手との関係があがったり、協働の一つのものを見て話している時に深まるというようなことがあります。そして友達の考えと比べたりつなげたりできているか。根拠や理由が語り合えているか。一人一人の考えがより理解が深まっているか。そのようなところが協働学習では大事なこともかもしれません。高校の先生でもかなり長くやっている先生もおられます。私は10年くらいずっと福井の中学校の先生たちと付き合っているの、福井というのは割と伝達型もあるのですが、みんな切り替えて、協働に変わってきているのです。教室に入れば本当に分かります。どういうものが21世紀型かというのは分かると思うのですけれども、そこで長くやってこられた先生がこうおっしゃいました。一斉授業だったら、救ってやりたいとかちよっと手を助けてやりたいと思う生徒の傍らに行けない。協働学習をしていいなと思うことの一つは、自分が本当に教えなければならない課題が、生徒にとってどういう頭が働くのかとシミュレーションしながらきっちり選ぶことと、援助が本当に必要な生徒の傍らにいて、ちょっと励ましてやったり、一斉ではできないことができる。それはできる子に委ねて、その子たちの力を伸ばすことにもなる、というようなことをいわれています。

私の話をそれぞれの学校や教科の先生によってどう受け止められるかは、さまざまだと思うのですけれども、閉じられるよりは心を開いて、次の一步を進んでいくということも、学校の改革としては大事ではないかと思います。

教師の関わり

- ・ グループの分散 同じことを議論させるのか、いくつかに分けるのか
- ・ 巡視から支援の必要なグループを見定めている
- ・ ゆさぶりを必要とするグループ、対話を引き出すグループ、グループ内をつなぐ必要があるグループなどに適切なかわりをする
- ・ 個の援助が必要な生徒へのかかわり
- ・ 小グループの後の活動への深まりや支援を判断する

グループをどう分けるのか、それから、限られた時間でいろいろなことをやらなければならないというのも事実なので、例えば同じことをクラス全員にさせるのか、いくつか類題を出して各グループごとに責任を持たせてやってもらって、それを交流していくことで、グループ学習は時間がかかって非効率というところを、うまく考えるのか。恐らく昨日三宅先生が話してくださったジグソーの方法は一

番時間が掛かるのです。だけど、深く学ぶことができる。ここを学んでほしいといった時はすごく有効だと思いますし、その辺りは協働学習にもいろんな方法があるので、ちょっとした理解の確認ならペアをうまく使う。それによって伝達型でも定着をもっと自分の言葉で説明させたりして有効にする。もっと考えを深める時に、いろいろな形態を取ることもあるかもしれません。ただ、よく申しあげるのは、机間巡視といって、全部がちゃんと話しているかということだけで回るだけの協働学習の教師のやり方はやめられたほうがよい。このグループが支援が必要だというのを見極めて、うまくそこに入る。話し合いできちっと進められるグループはある程度委ねるというような判断です。これは恐らく、机間巡視の時もそうだと思います。それから、もう結構分かっている子が教えてしまっているところで、揺さぶりを必要とするグループ。それから、お互い深刻にして、行き詰まっているところでは会話を引き出す役割を教師が担う。それから、このグループだけでは解決は出ないと思った時に、こっちに聞きなよといってつなぐなど、先生がそれなりに協働学習の技に長けていかないと、一度形をやってみて駄目だったとか、そういうことはあり得ると思います。この援助が必要な子どもに関わる。それから大事なことは、小グループでやっても、その後深まったかどうか、そこでどう支援をしたらいいかを、終わった後判断し、つないで、もう1回まとめをすとか、生徒の方に説明をさせるとかの判断も大事になってくるかと思っています。



です。教師の役割として全体に関わる援助。それから、それぞれの生徒への援助。そして、どういうふうに助言をするのか。それから、少し客観的に引いてみる、反論する。それから、生徒がいつているのはどこにあるのか。それと、教材とつなぐとかです。共感するとか。これは実際の授業でも実は同じです。けれども、こうしたことをもう一度教師が学び続け、考えるということが大事なことでないかと思っています。特に私学の場合には、異動がほとんどありませんので、その中で教材も理解を深めると同時に、やはり新たな挑戦というか、21世紀に必要な力を育てていく一つとして、あり得るのではないかと思います。

特にこれとセットです。小グループになると先程お願いしたように、一つの課題を考えることの中で、見える化をしていくことが大事です。聞くことで自分の考えを生み出す。できる生徒だけの発言の授業だと他の子は聞いて終わってしまうだけなので、もう一度、発言を耳で聞くだけで

はわからないことも多いので、言葉をほぐすというのでしょうか。教師がいったことをもう一度お互い確認させるとか、いい換える。自分の言葉で今の分かったことを書いてみるとか。福井でやっているのは、振り返りのノートであったり、中間、期末試験の試験と同時に、単元の振り返りノートというのを作っています。要するに、テストができたかどうかではなくて、自分はこの単元で何を学んだかを、ノート全体を振り返って書かせる、というような指導をしていくことも、一つの手立てです。やられてる学校もあると思うのですが、そうしたことも、これはなかなか塾ではやってくれない。しかし、学校だからこそ、どの生徒も全員が同じ水準で分かるわけではありませんが、それぞれの生徒の確実な学びの歩みを捉えるという意味で、大事ではないかと思っています。

聴き合うことから学力へ

- 聴くことで自分の考えを生み出す、形成することにつながっているか？

できる子だけの発言の授業だと他の子には考えが生まれる間が保障されていない。

友達の発言を耳で聞くだけではわからないこともある。ことばをほぐす（言い換え、見える化）

実際の授業の中で小グループを支えるためには、一人一人が何を考えているかが分かるようなツール、それから、仲間をつないで考えがつながるようなツール、これでもいいのかと吟味するツールというようなものが、必要になります。

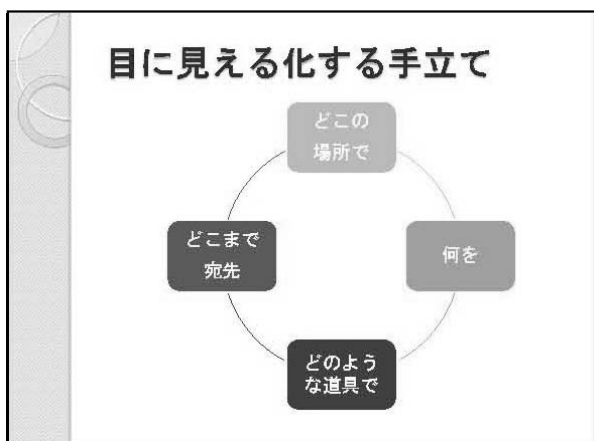
学びあいを支える道具立て

- 個々の学びや立場を可視化するツール
- つなぐためのツール
- 吟味のためのツール

小グループで今いろいろなところがよく使っているのがホワイトボードです。こうしたものが一つあることで、非常に便利になるかと思っています。全クラスに買っていないくても、伝えたい時にいろいろお互いが使えると、便利だろうと思います。中学校ですけれども、いろいろな意見が出て書きます。それ全部を出すのではなくて、もう1回吟味させて、例えば、なぜヨーロッパには先進国などがあるのに、それが連合を組んでいるのだらうというのを考える社会科の授業を、先生が教科書を全部説明してしまう授業ではなくて、資料などを根拠にしながら、生徒が、それを伝えな

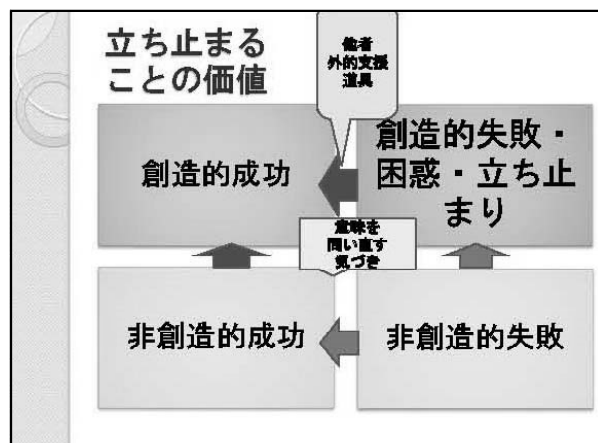
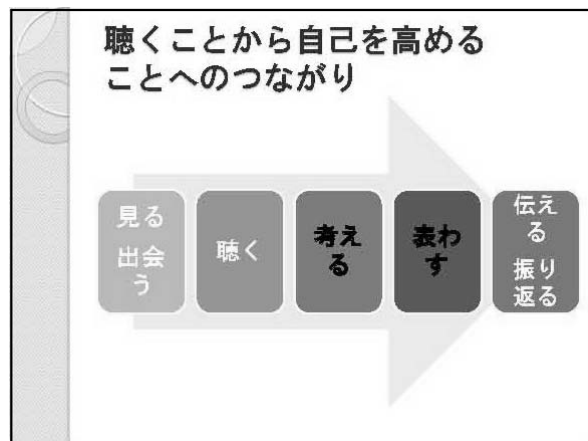
がなぜかということを考えていく。ホワイトボードに書いたものを全部出すというのではなく、その中で鍵になる大事だと思うものだけを紙に書かせて、これが知識の集約の効率化というのですか、一人ではそんなにあれもこれも考えられません。でも40なり45人がいるから、いろいろな考えが出てくる。それを全部拾っていたら授業はうまく行きませんから、ポイントになるようなものだけを生徒が判断して出させる。それを整理していくというような形を行っているものです。これは、逆にそれぞれの生徒がポストイットで、大事だと思うような考えを出してみんなで合わせて、まとめるという形で、これは教科に、内容によりますが、やっている姿になります。

それから、逆に小グループで出した考え方のシートのようなものを全部一斉に貼るわけです。教師が説明するのではなくて、見て、何が分かるか考えなさいというような形で、例えば、社会科の授業ですが、考えさせるようなものもあります。例えばいろいろな考え方を考えさせて吟味していくというような方法もあるかと思います。理科でボードを出すと、どこが何を考えているかが一目なので、その中で教師が見て、どこを押さえればいいのかを判断し、そして考えていくというようなスタイルもあります。それから、ホワイトボードが横になっていると、反対向きの人が見にくいので、工夫している学校では、縦型のホワイトボードを使って、各班でやると、教室の大きさが狭くてとてもそれどころではないという場合もあると思うのですが、前の黒板以外、教室の空間が大きく変わるわけです。そういうことがまた授業の動きを変えるというような部分もあります。こうしてお互いに説明し合うというようなこともできます。福井の学校で、壁がホワイトボードになっているような建築の学校の造りもあります。こういう形で、どこの場所でも頭の中のものを見える化する。学校の運営でもそうですね。何を見える化するのか。保護者へ伝える場合もそうだと思います。どこまで、誰に当ててどんな道具で見える化をしていくのかということが問われているのではないかと思います。



当然のことながら、課題の焦点化と吟味なしの協働から学びは生まれません。逆にいうと、家庭学習や自分で読まねばならないものは読んで来るとか。反転授業を聞かれたことがあると思います。アメリカなどでも iPad を使ったり、要するに家庭できちっと基本は学んできて、こういう大勢の生徒がいるからこそ、そこを生かした授業をやるという発想が、かなり出てきているわけです。その発想と同

じで、課題を焦点化し吟味することが大事になるかもしれません。あらかじめ生徒が宿題を、自分たちで考えてきてどうか。前時の復習はポイントで生徒がしているのです。練りあげるといっていろいろ深く考えるところをきちんと授業でやっていく形の授業です。もう一方できちっと教える。協働でやる。さらに振り返るといのが、今日のポイントの一つだと思うのですが、聴き合い語り合うようなことをすることで生徒が、つぶやくことで参加できる部分と、それから、もう1回知識を定着させていくことが大事なことになると思います。新たな教材やいろいろな考えに、見て、出会っていく。仲間がどう考えているか、お互い聴くことで考える余裕が出ます。といいながら今日は聞かない話をしている申し訳ありませんが、少し、話してしまつて申し訳ないのですが、それを聴くと考えますね。考えて分かったつもりではなくて、それを表現するということがあって初めて深く分かっていくわけで、表す、伝える、振り返るといような、このプロセスが授業の中で保証されることが大事です。そこを毎回、恐らく各学校でいろいろやられていると思うのですが、見直されるということが大事だと思います。



一見、効率的に見えながら、結局、情報を伝えるだけになってしまうと、立ち止まるのがなかなかできません。これは、今学力が高いといわれるシンガポールでよく大事にされている言葉で、創造的失敗という言葉があります。productive failure. 何事も人生はそうかもしれませんが、2種類あります。失敗と成功ですけれども、創造的な失敗というのは、少し困ったとか、立ち止まることによってあらためて意義を問い直すとか、気づき生まれる。学習でもつまづくことで、これ分からない助けてとか、どこまで

分かるけれどもと、他者と支えあって学び合う。そこでいろいろな、例えば辞書や図解やネットやいろいろなものを使うことで創造的に成功していく。そういう授業もあれば、非創造的失敗というのは何かというと、授業中、結局分からないまま。これは何かといえば、先生が十分に準備をせずに授業をしたりすると、授業は曖昧だとか、先生はやったつもりだけ何の学びもないし、結局は何かよく分からないまま、というのは避けたいわけです。非創造的成功というのは、別に学校に来て授業中に聞かなくても分かっている。そういうものです。1時間無駄だったけど教師が求めている課題は最初からできるから終わりになってもできる。そういう授業です。創造的成功に行くのには、時にはうまく立ち止まりや困惑を使う。日本の先生はこれはいいといわれています。比較文化研究などですと生徒のつまずきとか失敗、困ったことをうまく取りあげながら、それを起点に理解を深めていく。アメリカや他の国から日本はそういうことが上手だといわれていますが、どうでしょうか。もっとそこを活用するといいいのではないかと思います。私は心理学者なので、心理学の研究では、このような研究が実際に最近行われています。例えば全部先生が教える授業と、生徒がまず複雑な問題を協働で解く。そして、難しい問題だと途中で諦める生徒が出ますので、支え合う。それで探求した後、知識を強化したりきちんと構造化して問題を解くという形と、教師が教えて分からせる授業と、どちらがいいのかというような研究です。productive failureというのは生産的失敗群、下側を教えるのは直接教授群と呼んでいます。それで、まず協働を50分、4時間で統計の授業ですが、中学校3年生の事例です。2時間まず試行錯誤しながらも自力で、少し難しい課題を探索しながら考えさせる。その後、それを元にしながら整理して、そこで定着を図る、という群と、先生がまず2時間、原理を教える。1時間練習をしてまた教える。これでどちらが効果があるのかというようなことです。数学ですが、いくつかの学校、シンガポールでやった研究です。これを見ていただくと何が分かるかといいますと、Fluency と正確さ。簡単な問題の差はありません。どちらで教えても大きくは変わりません。違うのは、実は概念を後で理解している深さというのは、自分でともかく取り組んだというような経験がある、いわゆる生産的失敗を経験した群のほうが高い。それから、その後、やったということを覚えて、応用問題が1カ月後でもきちんと解けるかどうかというところになると、差が出てくる。先生方もそうではないでしょうか。やはり自分たちで何かやったことと、情報を得ただけとは大きく違うはずで。そこをうまく、その内容の中で踏み分けるということが必要かもしれません。

マイケル・ジョーダンをご存じでしょうか。コマーシャルでこういうことをいっていたそうです。プロでミスしたシュートは約9000本。負けたゲームは約300試合。ウィニングショットを外したことは26回。今まで何度も何度もミスしてきた。だから俺は成功する。時にはこういう経験というものも大事かもしれません。それよりも失敗したものをどう立て直すのか。みんなの力を考えながら、どうやったらつまずいてもそこから学べるのかという感覚を、授業を通して生徒が身につけさせていくかということが、私は大事なのではないかと思っています。そのためには、生徒

自身が見通しを持ち、深く授業に関与すると同時に、自分なりにこの単元できちんと学べたではないかと。それは教師の狙いと同じかどうかまでは分かりませんが、ここは学んだ、これはできたという実感を、生徒なりに書かせたり、繰り返させるということが大事だろうと思います。

見通しー関与ー振り返りのサイクル

- 1枚紙ポートフォリオ
- デジタルポートフォリオ
- 学びの軌跡を画像で振り返る
- レポート

そのためには、1枚紙ポートフォリオ、各担任時間に、1単元何が学べたかを書くポートフォリオを作ったり、それから、デジタルポートフォリオの形で、今そういうのを、ICT をうまく使って、生徒の学びの履歴を入れたり、それから、「前時これやったよねえ」といって、終わった番所の写真をデジカメで取り込んでおいて、生徒に見せながら授業の履歴を、こうやってきたらいいながら、振り返る。そういうこともあるのではないかと思います。やはり、授業のマークシートとか単元のレポートなどを振り返ることも必要です。1枚ポートフォリオというのは、1時間で何を学ぶ、イメージマップとか、マークシートで自分が何を学んだかを書くというような、さまざまな工夫があるかもしれません。また、先生方も随分コンピューターやICT をお使いだと思いますが、授業の効率化を考えれば、板書は消えてしまいますけれども、パソコンから情報を出せば、いろいろなものが残りますので、そういうものもうまく今後作っていくということが必要ではないかと思っています。そういう中で、今日は授業のお話をしてきました。



では、学校づくりをどうするか、ということろです。高校ではいろいろな工夫もされているだろうと思います。今日も実際にビデオを見ていただきました。問題解決型で、生徒でも教師でもどこに問題があるのか。どう原因を分析して指導をこうすればいいのではないかと。そういう研修や学習も大事ですが、一方でその生徒の強み、価値、その先

生の良さを生かしながら、学校の中でお互いに学び合う。高校はなかなか忙しくて、教科で教員の数も多いので、難しいといわれますが、それでも実際に取り組んでいる学校はあります。ですから、先生が生涯学び続けてお互いに良い同僚を持ち合っていくためには、刺激を、私学の場合、例えば教科部会で外に出て行くことが結構あると思うのですが、それだけではなくて、学校の中で学び合うような研修の機会を作っていくことが大事なのではないかと思います。

これは東京大学附属中等教育学校の研究授業の事例です。これは中学校の授業の研修です。中1の英語授業です。

(映像 略)

このような授業の形で、中高の先生はあまり他の先生の授業を見るという機会はいまだにお持ちでないの、お願いをしているのは、例えばグループの場面だったら、どの辺りのグループを見るかをあらかじめ分けています。それによって、複数名が同じグループを見ています。それによって生徒の学習というのを、授業者の時は全く見えないのです。指導法だけを議論しがちですけれども、研究授業のようなことをすることによって初めて、生徒はどこでつまづいたり困難を持っているのかというのが見えてくるわけです。それがその学校でのありように関わってくると思います。

これが研究授業の風景です。

(映像 略)

いろいろな教科の教員が一緒に見ることで逆にいうと同じ生徒を、自分はその特定の教科でしか見ていませんけれども、違う教科で見ると違うのだということから逆に着想を得たり、どういえばより授業に参加したり定着するかということ、学ぶことができるというような部分もあると思います。

授業者の発言を聞いてください。

(映像 略)

やはり緊張するものですね。専門としている、いつも働いている人たちと一緒に、同じことに向かってやっているので、結局自分が見られているという。生徒の学びを見るという名目があったとしても、私自身の授業の手法とかが見られているというところはすごく緊張しますし、ただその緊張を生徒に伝えさせないようにしないと、普段通りにできませんから、できるだけそういうところは隠しながら、うまく予定どおりに運べたかなあとは思ってます。見られてるというのはすごく怖い半面、見てもらわないと自分の中での分からない部分というのは、あくまで一個一個分からないものですから、進歩がないというところがありますので、まずは自分の進歩のためにも、人に見ていただくという機会があるというのは、すごくいいことだなあと正直に思ってます。ただ、見ていただく時の視線というものを、こちらから投げ掛けないと散漫になってしまうから、どうしても観察をしていただくという状態だけをつくったとしても、お互いにとっていい発見にはならないかなと感じます。だから、テーマとして、こういった部分を私は見ていただきたい、こういったところの自分のアプローチはどうなのだろうか、生徒が本気になるようにいうと、どういうふうにみなさんはやりますか、というものを授業を通して見られたらいいのかな、そこも実際に今回もいって

ださって、勉強になったところはたくさんあるかなというふうに思います。

良さというのは大きく二つあると思っていて、それは一つは教科内で先生たちからいろいろいっていただくのとは少し違った観点で、特に生徒はこのような姿であったという事実から教えてくださるということで、そうすると自分が今まで気が付かなかった授業に対する見方とか、教え方の工夫とかというのがもう少しこうした方がいいのではないかなという新しいものがもらえるということがあると思います。あともう一つは、生徒とは別に、全員の先生に出会った時があるので、これをやるまで、あの先生は面白そうな授業をやるよという感じがするけれど、実際どうなのだろうということに全然知らなかったのですね。それが実際に授業をたくさん見ることができるようになって、こんなに面白い授業をたくさんやっているということが分かりましたし、それからアドバイスをいただくのとは逆に、こちら側から新しい見方、こういうような観点で授業というのは組み立てることができるのだなということ、それも自分のほうに返ってくるというか、そういうことができる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

というようなものです。もともと中等教育学校になる前に中学校と高校が別でありましたけれども、今は一緒になって、高校の先生もちろん入ってやっています。ペアを経験していただきたいと思うので、1分間だけ、今のビデオをご覧ください。どうぞ。もちろん批判も賛成もいろいろあって結構です。

(話し合い)

それでは大変短くて申し訳ございません。少し話をさせていただくと、恐らく私が話し続けるより、ご自身の考えや何かが生まれてくると思います。これは授業の中で生徒たちにも、先生が話し続けるのではなく、こうしたペアの機会をもう少し入れていただければ、大きく授業を変えることが、まず一歩からでも協働が始められるということかもしれません。何でもそうです。先生方が実感してこれはいけると思ったものでないと進みません、先生方は何も変わりません。研修でも講義型だけです。それでいても自分たちの授業で、生徒にこれからの21世紀の力を求めたいといっても、それはうまくいきません。やはりお互いに学校の中が、生徒の学びも教師の学びも同じ形で進まなければ変わってはいかないのです。その辺りは、それぞれの学校の校風や土壌があると思います。それを生かしながら、21世紀型の学力にどう対応していくのかを、私立の良さを生かしながら、進めていただけたらと思います。多様な学びを受け止めるには、多様な学びに着想を得ることが大事だと思っています。実際に一人一人の生徒にとっては、長い人生の大事な中学校高校という思春期の時期です。そこで学びの事実やそこから生まれた思いというものを、先生方が見取って語るような機会というものも、年に数回でもあるといいのではないかと思います。国立教育政策研究所の報告によれば、高校は小中に比べて最もそういう機会が少なく、私立学校はその中でも極端に少ないというデータが出ております。それに対して先生方が学びに硬直化せず、本当にマンネリズムに陥らないためには、時にそういう違うカルチャーショックではないけれども、必要かも

しません。

先生の仕事は、生徒の学習の、事実を通して学んだことを語ることで、あの先生が良いとか悪いとか、そういう先生の指導法にちょっかいを出したりおせっかいをすることではありません。しかし一緒になって自分の学校の生徒の誇りを見つけ、語り合うことが大事だと思うのです。だから学校づくりとして協議会の会話の中で学び感じたことを、自分が学んだことを語り合う。相手を批判したり、よその学校や違う学年を比べるのではなく、まさに前に見たその事実から何を見るのか。特に、中学高校の先生は開放性の大学で免許を取られている場合が多く、そうするといわゆる授業のありようについて、専門に学んできた機会が多くはないかもしれません。私の大学もそういう責任を持っていますけれども、だからこそ、高校の先進的なスタイル、姿を私立学校の研修会等から出していただくことが大事だと思います。授業の見方として生徒の学びを見てくださーいというようなことを申しあげたり、学習者の視点で見てくださーい。あまり授業者のことはあれこれいう必要はありません。それはそれぞれの先生のやり方があるので、その意図を汲みながら、その中で最大限どうしたらいいのか。よく最初にやって、うまくいかなくて、「俺ならこうする」とか言って、大きなお世話で、そこにいた生徒がどうなるのか。もっとどういう援助があり得るのかというところを一緒に考えるということが大事です。だから分科会でも生徒の学びの道筋で授業を語り合うという経験が、授業者には少ないのです。自分はどう授業を進めるかという視点しかないのです。その発想を変えていく、広げていくというのが、研修の一つになるのではないかと思います。

授業研究の活性化		「学校全体の教育力向上に関する指針」より
1あなたは、毎年6冊以上の教科や教職等に関する専門書を読んでいますか。	自己研鑽	
2あなたは、研究・研修することが楽しいですか。		
3あなたは、教員以外の人たちと語り合う機会を持っていますか。		
4あなたは、あなたの学校の教育目標をいつも意識していますか。		
5あなたは、理想的な授業像を思い浮かべることができますか。	①重点テーマ設定	
6あなたは、昨年の授業より一歩工夫して授業をしていますか。		
7あなたは、最近3年間で、研究授業（公開授業）をしたことがありますか。	②授業研究のサイクル	
8あなたは、毎時間テーマを持って授業をしていますか。		
9あなたの学校には、手本となるような授業をする先生がいますか。	③組織改革	
10あなたの学校では、授業のことについて毎日語り合っていますか。		
11あなたの学校では、校外で研修してきたことを伝えたり、学び合ったりするシステムができていますか。	⑤「振り返り」の場の設定	
12あなたは、どんな実践をしているか具体的に同僚に語るすることができますか。		
13あなたの学校では、毎年全員授業実践記録を書いていますか。		

これは福井県の中学、高校で使っている学校全体の教育力向上のためのチェックリストです。福井県はこれを使っておられるのです。ここにおられる先生たちには聞かないですが「毎年6冊以上、教科や教職の本を読んでいますか？」とか、「研究、研修が楽しいですか？」とかです。「語り合う機会、授業像を思い浮かべられるか」とか、「昨年の授業より一歩工夫していますか」という質問項目もあります。私学では7番、8番辺りが少ないのではないかと思います。刺激になって、こういう授業をしたいというような教師がお互いが出会う。私学には校内に良い先生がたくさんいるはず。もともとの採用で良い先生が採用されているわけです。ですからそこをお互いに刺激し合う機会をもっと持たれてはどうかと思っています。

実際授業を見る時には、先生がどうなのかを子どもの学習環境という視点で見ることができそうですが、授業研究がとても大事だと思っています。教授方法を一本化して、うちの学校のスタンダードはこれだというものを出すスタイルもありますが、むしろ、多様性を生かした、学びの意味を解釈したり、先生の内的経験を語り合うことが大事です。頻度や、誰がどのように参加するのか、誰が支援するのか、それは授業研究の分岐点になります。教材研究も大事ですし、研究授業をお互いに協議、記録するというようなことを是非学校で、お忙しいと思いますが、変わりつつやっていく、それが子どもへの、教師や学校やそのコミュニティへの成果になるのではないかと、私は考えております。

ある私学の学校の方にいわれました。私学は、皆がこういうものが良いと思って選んでいるので、制度を急激に変えることはできない。しかし、100のうち3とか5くらいずつ、少しずつ変えていくことが着実に20年たったら、21世紀の学力になっていることが大事なのではないかと私は思います。

いろいろな研修があります。その特定の場面を公開授業や、校内研究や、高校は大学と比べて機会が少ないですけども、いろいろな人が一緒になって一緒に語れば語るほど見方のイノベーションが生まれます。大学進学という出口だけを知っているのはまずいのです。でも出口を一新するだけではなくて、3年間なり6年間なり、どういう生徒を育てたいのかというところを、より長期的に考えるくらいのことを、教育の理念や原理にする。うちはどういうことを大事にしているのかというのが見えてくるはずですよ。

日本の輸出品の一つが授業経験です。日本から学べということで、先進諸国で日本に学んでいる国がたくさんあります。よその国には小学校や中学校だけではありません。高校も高等教育機関も一緒になって授業研究をしています。それが教員の質を上げ、授業を変え、それと生徒の学び方を変えていくからです。先週シンガポールの担当者が来た時に聞いた言葉です。今一番レベルが高く、力のある国の一つですが、“Thinking ahead. Thinking again. Thinking across.” これは前に向かって、学校が変わるためには、Thinking ahead. 前向きに考えよう。そしてThinking again. もう1回理念は何だったのか立ち戻ろう。そしてThinking across. 閉じているだけではなく、外から、今、知識基盤社会なので新しいものをお互いに共感を覚えて学び合おうというようなことです。それがこれからの鍵になる力だということです。

Thinking ahead. Thinking again. Thinking across.

日本語に訳そうと思いましたが、これはやはり英語のほうが語呂がいいのでそのままにしました、こうしたことが学校でも授業でも大事なのではないでしょうか。

私の好きな言葉をご紹介します。終わりにしたいと思っています。「学ぶとは頭に詰め込むことではなく、心に火をともしること。平凡な教師はいつて聞かす。良い教師は説明する。優秀な教師はやって見せる。しかし、最高の教師は火をつける」ということです。バーナード・ショーの言葉です。「われわれは過去への思い出によってではなく、未来に対する責任によって賢くなる」。私学も歴史があり、培ってきた伝統があると思います。でもそれだけではなく、だからこ

そ未来にどう責任を負うのか、ということが問われているのではないのでしょうか。「人生とは自分を見つけることではなく、人生とは自分をつくること」であり、高校という所は、まさにその自分づくりの鍵になっている場所だと思います。そして、好きな言葉です。ある校長先生に聞いた言葉です。「過去と他人は変えられないが、未来と自分は変えられる」。是非、今日の2時間、何か自分と未来にお役に立てば幸いです。ご清聴ありがとうございます。質疑応答の時間がほとんどなくなってすみません。良い聴き手に恵まれて感謝申し上げます。ありがとうございました。

●司会

秋田先生、ありがとうございました。いろいろな事例を交えて、またペア・ワークやグループ・ワークを取り入れていただきまして、われわれも協働学習について少し体験することができました。ありがとうございました。それでは、質疑応答の時間に移りたいと思います。いろいろご質問、ご意見等があると思います。挙手をお願いします。

●参加者

今日は貴重な話をありがとうございました。2点ほどお伺いしたいことがあります。先生も探求をしながら、子どもも探求を続けるというようなお話がありましたけれども、積極的支援参加という考えから心の鼓動がまさにこれだというふうに思うのですが、ただ一つ考えられるのは、教師が仮にこれを知っていたとしても、指導ということを見なければいけないし、探求ということも考えなければいけないと思うのです。その兼ね合いというものがどのようになるのかというのが、私が少し疑問に思っているような点でございますけれども、探求の姿を見せるということが重要だったのですけれども、指導をどう考えておられるのかなということ。そして、こういうふうな本当にアイデンティティを教師だけでも変えなければいけないのですが、こういうふうなものを変えるような大学での教員養成というものはどういうふうに行われているのか。そこら辺のところをお聞きしたいと思います。それからもう1点は、中高に関係があるかどうか分からないのですが、これをやるとなると、今後、幼、小、中、高、大という一連のところで、学びの仕方を全部変えていかなければいけないと思うのです。ところが幼稚園などでは、遊び保育を中心にしていけるのですが、英語を教えるとか、算数を教えるとか、そういうことも今入ってきているわけです。そのような中で、幼、小で探究型というのをどのようにするのが、非常に問題になっていると思います。この幼から大までのそういう串刺しにした流れの中で、こういう学びをやるにはどのようにしたらいいのか、という2点をお伺いしたいと思います。

●秋田先生

ありがとうございます。なかなか今回のように話をしてしまうと質問が出にくいのですが、早速に質問をいただきありがとうございます。2点ですけれども、1点目の、教師の探求と指導の関係ということですが、私は探求というのは、教材について、生徒に教えるべき教材を、よくいわれる、教科書を教えるのではなく、その奥行きのある世界に見合わせるというために探求は重要だと思いますが、一方で指導をする時には、あれもこれも教えても腑に落ちないわけなので、精選ということは大事になってくると思って

います。だから、これは私も多くの先生から学ぶことが多いのです。「教師が教えているのだ」、「教師が教室の中心にいる」と思った途端に、出羽守（でわのかみ）になると私はよく知っているのですが、先生は何が面白いと思って伝えているんだろうという授業も参観させていただくこともあるのです。出羽守ではなくて、自分はやはり生徒にこういうことを学んでほしいのだということが伝わることは、教師自身が interface、説明し担っている学問の世界とか、それがどういう奥行きを持っているかを垣間見た時に、生徒には引かれます。特に高校の学習というのは、そういう奥行きを持っているものだと思うのです。だからこそ、大学でもっと問いを学ぶ学問をしたいと生徒が思ってくれるのであればうれしいわけです。なので、そういう探求は必要であると思います。ただ探求したものを教えようとする失失敗するのです。この辺りは本当に教育の難しさだと思いますが、そこをご指摘していただきありがとうございます。

また、幼、小、中、高で、18年型教育と今いっているのですが、やはり21世紀型の学習、実は幼児というのは、ただ遊んでいるようでいながら、結構いろいろなことを探求しているわけです。ところが、小学校、中学校になっていった時に、探求をしないわけではないのですけれども、今見えるところが、どうも習得のところが中心に見えていると思います。ここもちろん変わっていくと思います。学習指導要領の舵取りが、少し早く、もうこれから検討されます。昨日、私、前川文部科学審議官と一緒にいたのですが、そこでもおっしゃっていました。これからも知識に対応していくように、学習指導要領も変わっていく。で、幼、小、中、高、大、一貫して、そういう無駄なく探究的な学習を主体的にやっているところが大事だと思っています。実は、小学校では探求の時間が保証されているのです。ところがだんだん中学、高校となるにつれて、教えるべき内容が多いと、先生方が感じておられるために、これは感じておられるというのは、もっとスリムにすることができるはずなのですけれども、時間の保障部分が難しくなっているのかなと思います。もう一度考えて、ぜひ大事に、協働を育てていただけたらと私自身思っております。適切なお答えになっていないと思うのですが、一貫カリキュラムを作っていたり、お互いに出会っていくというようなことで、育てたい姿を単にスローガンでいうだけではなく、こういう姿だよという具体の生徒の姿で見えた時に、つながると思っております。答えになっていませんけれども、すみません。よろしいでしょうか。



調査報告

『教務運営に関するアンケート』集計結果報告

校成学園中学高等学校 教諭 築瀬 誠



今回、全国私学教育研究集会在東京で開催されることから、東京私学の状況を、全国の私学の先生方に紹介する目的も含めて、東京私学教育研究所教務運営研究会より調査報告をさせていただきたい。

東京私学教育研究所では、「教務運営に関するアンケート」を毎年実施しており、都内私立中高校の先生方に5月から6月にアンケートに回答を

教務運営に関するアンケート
東京私学教育研究所・教務運営研究会
毎年1回 5～6月 調査
8月 夏期教務運営研究会で報告

■ 調査対象 東京都私立高等学校全日制
■ 回収率 100% 234校中 234校

■ 設問1-60 pp.1-31 (pp.8-38)
■ 集計表 pp.32-35 (pp.39-42)
男子校・女子校・共学校・男女校
■ 経年変化 pp.36-45 (pp.43-52)
H15(2003)・H20(2008)・H26(2014)

していただいている。回答率は例年96～97%位だが、今年度は100%の回答率であった。東京都内の私立の全日制高等学校234校中234校全ての学校にご回答いただいた。

今年度のアンケートでは60の設問を用意した。教育環境や社会状況の変化によって、毎年設問を見直している。例えば、ICTが盛んになると、ICTについての設問を増やしたり、もう調査の必要がないと思われる設問は削除したりしている。

調査報告書には、60の設問と集計、その後に詳細を示した集計表、さらにこの10年程の経年変化として平成15年（2003年）、平成20年、平成26年（今年度）のグラフが掲載されてある。平成15年とは高等学校で5日制を実施した1年目の年で、すなわち、高等学校の教育課程に総合的な学習や教科「情報」が加わった年である。したがって、平成15年の数字は、その前の課程のものと改革をしたものが混ざっている状況である。平成20年の数字は、平成15年からの教育課程を実施して落ちついてきた

頃のものになる。

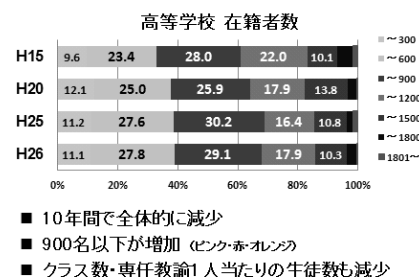
東京私学で8月に夏期教務運営研究会という研修会を3日間かけて実施しているが、そこでアンケート集計の冊子を配付している。

個々に見ていくが、特に注目したいものを選んだ。今年の集計だけではわからないデータも含むが、ご覧いただきたい。

1. 在籍者数（設問4）

高等学校の在籍者数は10年間で減少傾向にある。やはり少子化で、われわれ私立学校としては苦しいところである。特に900名以上の学校数が減少している。

設問4 在籍者数(p.2)

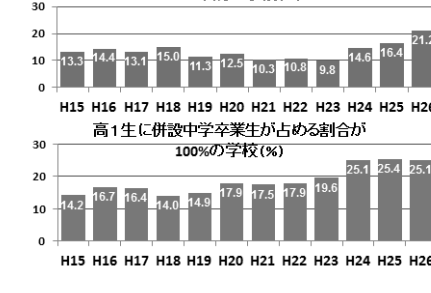


また、クラス数、専任教諭1人当たりの生徒数も減少している。生徒にとっては、より良い環境になっているのかもしれないが、経営的には厳しい状況になっていると思われる。

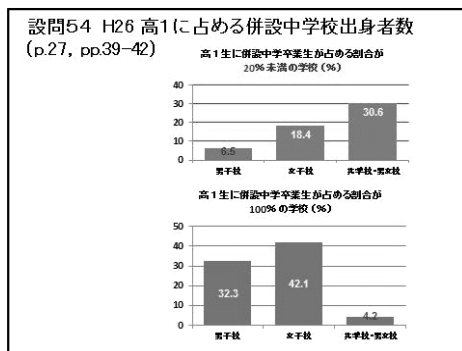
2. 高1生に占める併設中学出身者の割合（設問54）

併設中学出身者が高1生全体の20%未満の学校の割合は、平成15年以降13%から15%程度で推移していたが、今年度は急に20%まで上昇したのが非常に気になる。中学での生徒数確保が難しくなっているのが如実にあらわれたのかもしれない。来年度以降も気になるところである。

逆に100%、高校からは非募集で、高1生はすべて併設中学の卒業生であるという学校の割合が若干増えている。6ヵ年一貫が増えているという感じである。集計表

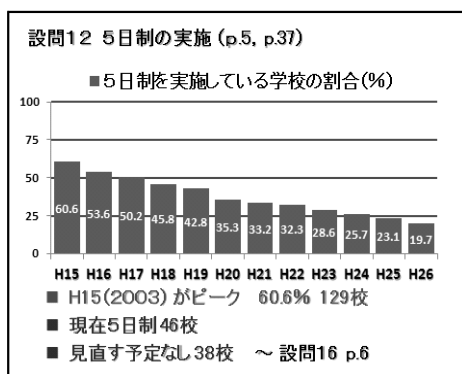
設問54 高1に占める併設中学校出身者数
(p.27, 45)高1生に併設中学卒業生が占める割合が
20%未満の学校(%)

を見ると、本年度は併設中学出身者20%未満が共学校・男女校でかなり増えていることと、100%は女子校に多いことがわかる。



3. 5日制の実施 (設問12・16)

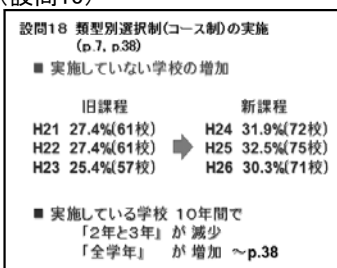
高等学校での5日制を開始した平成15年度がピークで、その後、5日制を実施している学校数は減少を続け、現在46校である。



これにはミッション系の学校を中心に、平成15年以前から既に5日制を実施していた学校が含まれる。見直す予定がないと回答した学校が38校で、その位の学校数が残ると思われる。5日制の導入からこの10年間で多くの学校が6日制に戻ってきたという実態が見てとれると思う。

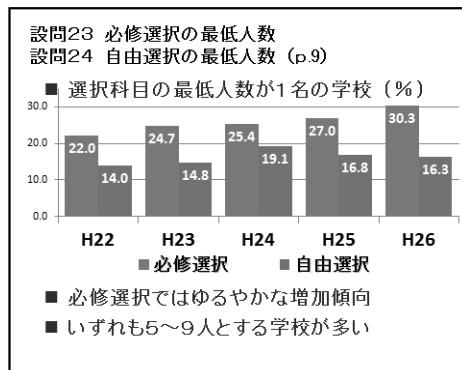
4. 類型別選択制の実施 (設問18)

類型別選択制を実施していない学校数が新課程になってから増えている。平成21~23年に25%~27%だったものが、平成24~26年には30%以上にまで増加している。この10年間で2年次や3年次だけではなく、全学年で類型を実施する学校は増えている。例えば、特別進学コースのような3年間を通した類型が増えているのではないと思われる。



5. 必修選択科目、自由選択科目の最低人数 (設問23・24)

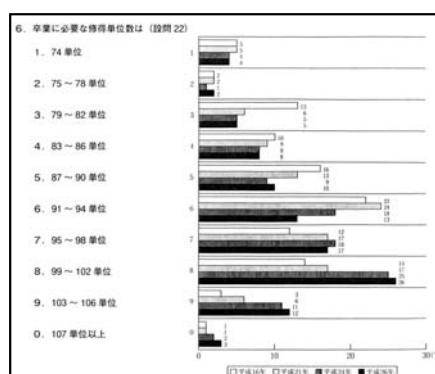
長年にわたり調査している項目であるが、最近では選択希望者1名でも開講する学校が、少しずつだが増えてきている。特に必修選択の場合である。生徒が進路を考えて、この科目・教科が必要だというのであれば、1名であっても頑



張って開講しようということであろう。全体的には5~9名を最低人数としている学校が多いようである。

6. 卒業に必要な修得単位数 (設問22)

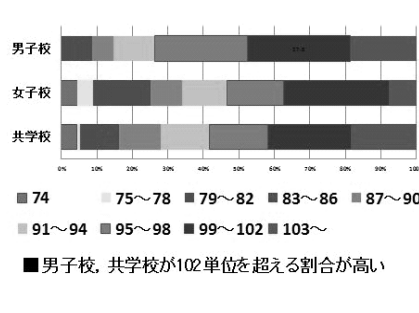
卒業に必要な単位数の推移を表したグラフである。卒業に必要な単位数ごとに4本横にグラフの棒が伸びている。上の2つが平成16年と21年で旧課程である。94単位までが多いのだが、新課程では、ゆとりからの脱却によりしっかり授業時間を確保しようという姿勢からか、卒業に必要な単位数は増えている。下の2つが平成24年と26年で新課程である。99単位以上とする学校が増加している。週6日フルに授業をすると34単位だが、それを3年間続けることになる。103単位以上とする学校も増加している。



設問22 卒業に必要な修得単位数(p.8, p.39)-1

- p.39 (p.46) 経年変化のグラフ
- 上の2つ H16,H21
旧課程 94単位までが多い
- 下の2つ H24,H26
新課程 99~102単位が増加 (34単位×3年)
103単位以上も増加
- 新課程導入以降、卒業単位数は増加傾向

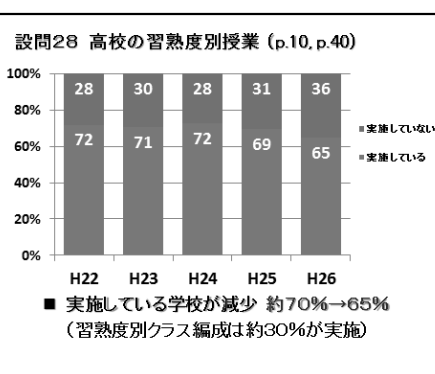
設問22 卒業に必要な修得単位数(p.8, p.39)-2

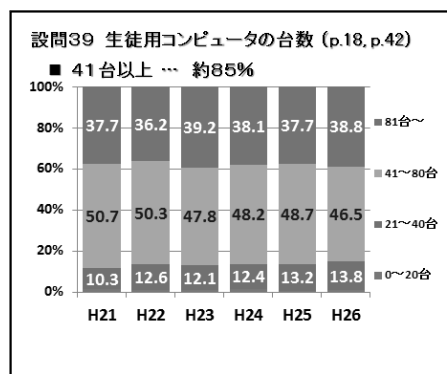
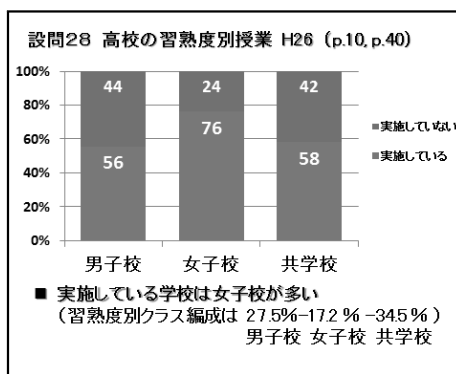


学校種別では、男子校と共学校は102単位に上る割合が多いといえる。授業時間を増やして、大学進学に生かしたいということなのかもしれない。

7. 高校の習熟度別授業 (設問28)

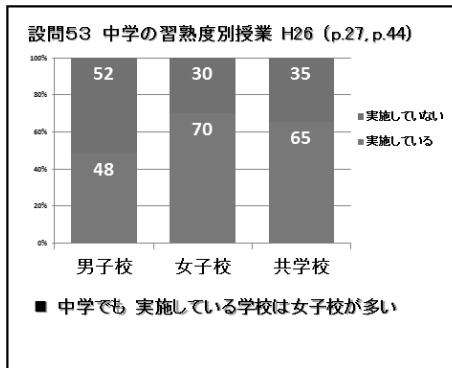
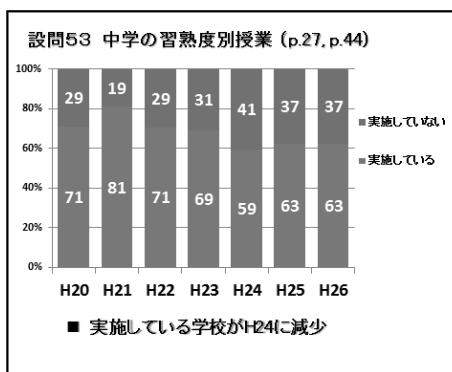
実施している学校が減っている。協働的な学習や学び合いといったことも大事にしていく傾向があるのかもしれない。最初から習熟度別のクラス編成をとっているケースもあると思う。今年度の集計では、習熟度別授業を実施している高校は女子校の方が多いようである。





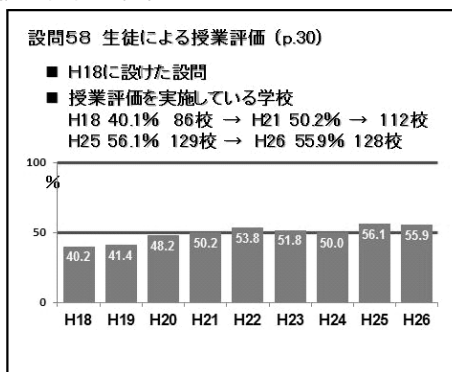
8. 中学の習熟度別授業 (設問53)

平成20年以降の経年変化を見ると、平成24年から減少している。何でも習熟度別にすることでなく、生徒同士での学び合いの授業等を大切にしているのかもしれない。



9. 生徒による授業評価 (設問58)

平成18年度に初めて設けた設問である。授業評価アンケートを実施する学校は増えたが、半数を超えたあたりで定着しているようである。多くの先生方の話を聞くと、実施したことのある学校数はこれほど少なくはなく、停止している学校もあるようだ。



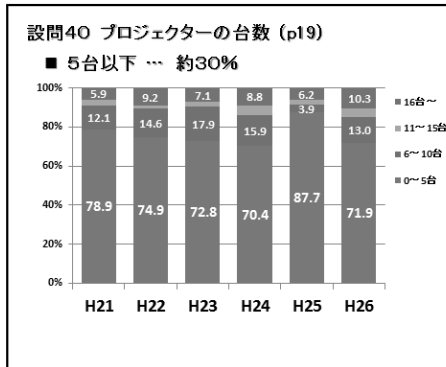
ここからは ICT 関連の様子を見ていきたいと思う。

10. 生徒用コンピュータの台数 (設問39)

コンピュータが41台以上あるという学校が85%位で、41~80台がかなりの割合を占めている。大まかにいって、2クラス分位の数のコンピュータを持っている学校が多いと思われる。

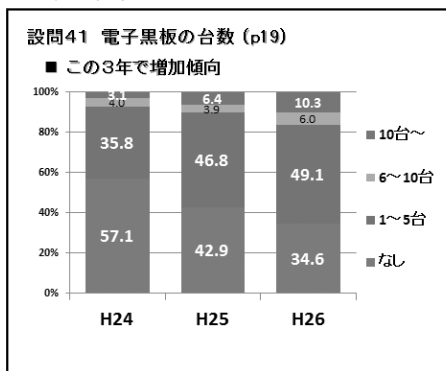
11. プロジェクターの台数 (設問40)

プロジェクターが5台以下の学校が少しずつ減少しており、71.9%である。しかし、単なるプロジェクターなのか電子黒板機能搭載のものかにより、回答の仕方が微妙なところではある。いつまでこの質問を続けられるのかなと思うのだが、最近では電子黒板機能が搭載されているプロジェクターも販売されているので、プロジェクターと電子黒板の区別が難しくなるかもしれない。



12. 電子黒板の台数 (設問41)

「ない」という学校は確実に減っている。1台から5台、さらに台数が増えて、幾つかの教室、あるいは全教室に設置する学校が増えるかもしれない。しかし、それは先程述べたような電子黒板機能付きのプロジェクターなのかもしれない。今後、データ集計の仕方が難しいところかなと考えている。



13. タブレットPCの生徒利用 (設問42)

昨年度から始めた設問で、2年分のデータしかないが、「実施している」学校が増えている。本部会の iPad 導入

設問42 タブレットPCの生徒利用 (p.19, pp.32~35)

	実施している	実施していない
H25	10.8% 25校	89.2%
H26	14.5% 34校	85.5%

H26	実施している	実施していない
男子校	16.7% 6校	83.3% 30校
女子校	16.0% 14校	84.0% 74校
共学校	12.8% 14校	87.2% 96校

の実践報告が参考になることと思う。

こうして見ると、ICT化は確実に進んでいるということがわかると思う。

14. キャリア教育（設問59）

キャリア教育はこのようなイベント型の活動だけではないが、集計のし易さや聞きやすさもあり、このような選択肢で質

設問59 キャリア教育(p.30)	
内 容	学校数 H25→H26
職業調べ・インタビュー	113→115
職業体験・インターンシップ	59→66
大学・学問等 調べ学習	134→142
大学等 見学や訪問	154→157
大学等 授業への参加	44→51
大学等 出張授業	101→106
卒業生・保護者・社会人等 講演	167→171
■ すべての内容で実施する学校数が増加	

問させていただいている。やはり平成25年から26年の1年間でとにかく実施が増えている。卒業生を招く、OBを招く、保護者に講演等をお願いする、あるいは大学の出張授業をお願いするなどのことを実施する学校が増えている。

本部会のキャリア教育に関する実践報告ではイベント型の活動のみならず、教育内容のことにも踏み込んだ内容のようであるので、参考にしていただきたい。

15. 学校として特に力を入れているもの（設問60）

4つまで複数回答可とした。女子校は先進的にさまざまなことに取り組んでいる。「外国語教育」、「キャリア教育」、「ICTの利活用」、「協働学

習」に力を入れている学校は、男子校や共学校よりも女子校の方が多いという結果である。しかし「大学受験」となると男子校、共学校が極めて多いことは予想通りといえるかもしれない。

東京の先生方にはアンケートのご協力をいただき、大変感謝している。ぜひとも来年度以降もご協力をお願いしたい。

東京以外の地域からご参加いただいた先生方には、この東京私学の状況を今後の教務運営の参考にさせていただければ幸いである。

設問60 学校として特に力を入れているもの (p.31)

	男子校	女子校	共学校
グローバル人材	41.7 %	39.5 %	42.3 %
言語活動	25.0 %	24.4 %	22.1 %
理数教育	22.2 %	20.9 %	16.3 %
外国語教育	33.3 %	61.6 %	46.2 %
キャリア教育	30.6 %	58.1 %	34.6 %
道徳教育, 生徒指導	25.0 %	38.4 %	39.4 %
ICT利活用	16.7 %	23.3 %	12.5 %
協働・能動的学習	16.7 %	20.9 %	16.3 %
大学受験	75.0 %	51.2 %	72.1 %

実践発表Ⅰ

「iPadが学校に来ると生徒・教職員はどうなるのか？」

桜丘中学高等学校 副校長 **品田 健**



はじめに

今回は「ICT とか iPad とかなくてもいいではないか」という方もいるという前提で報告を行う。

トーマス・エジソンは1913年に「書籍はまもなく学校では時代おくれになるだろう。人類知のあらゆる分野が映画を使って教えられることもありうる。われわれの学校制度は10年以内にまったく変わっていることだろう。」と述べた。しかし、実際には映画による教育が書籍によるものを覆すには10年どころか100年経っても至っていない。何か革命的な新しいものが出現したとしても、今までのものにあってという間に取って代わってしまうということは難しい。

iPad についても、学校に導入したからといって、教科書もノートも何もかも iPad に取ってかわられるということではない。ホワイトボードや、紙の教科書やプリント、ノートなど今まで使ってきた教具に新しいものが加わり、最も効果的な使い方を探っていくというスタンスで取り組んでいる。

結論

iPad を導入してみて、現段階での一つの結論は、「ビジョンが必要ではあるが、私立学校という特性を活かしてまずは導入して使ってみることが重要」ということである。

公立学校であれば、導入にあたって予算を獲得するためにも、その使用目的や使用教科や使用時間数の目安を定めるなど事前に検討・決定しなければならないことが多いであろう。しかし、使い始めてみると予想もなかった活用方法が創造されるのが iPad などタブレットの特徴ともいえる。この特徴を考慮して、まずは導入して使い始めてみることを推奨する。

導入の経緯

2010年の発表当時より教育機関での活用に期待していたが、ようやく2012年の秋に校内役員会で導入の検討を始めた。検討の結果、専任教職員全員、そして新入生全員への導入が決定された。2013年春には校内無線 LAN 化の工事が完了し、校内のどこでも、校庭でも体育館でも使用が可能な環境となった。2013年5月に専任教職員全員へ iPad60台、募集担当の教職員に iPad mini10台が導入された。2013年の冬には学習ポータルシステムとして、「CYBER CAMPUS」の導入を決定した。2014年5月に中学の新入生59名・高校の新入生375名に iPad を導入。二ヶ月後の7月に初の学校公開を行い、iPad を使った授業・ホームルーム活動・クラブ活動・募集活動等について、授業参観や実践報告を行った。

教職員への導入

教職員への導入にあたり、特にこだわったのは次の三点である。

○専任教職員全員へ配布すること

将来的に在校生全員が iPad を持って学校生活を送るという環境において、少なくとも専任の教職員全員が iPad を持っていることが最低限だと考える。希望者や学校側から指定した教職員のみというのは、iPad の活用を妨げることになると判断し、職員も含めて全員への配布にこだわった。

○教職員が自分で箱から出してセッティングも行うこと

生徒が実際に iPad を手にする状況を想定して、教職員についても事前にキittingを業者には依頼せず、全員を集めて箱に入ったまま配布し、その場で各種セッティングを自分で行わせた。生徒がどういう気持ちになるのか、どんなことが難しいのか、実際に体験することが大事だと考えた。1年後に生徒へ配布する際には、各クラス担任にクラスでの配布を行わせた。自身の体験を踏まえたうえで生徒へ説明し、配布することが出来たのは効果的であったと思われる。

○教職員には特に制限を設けず自由に使いわせること

ある意味「実験」ではあるが、自由に使ってもらうことで、どのような成果または問題が生じるのかを評価したいと考え、特に制限を設けず、端末管理システムも導入しないで教職員には使ってもらうこととした。結果として、特に大きな問題は起こらず、自由に使うことでさまざまなアプローチが見られたことは大きな成果であった。

また、導入にあたり、教職員には「絶対に使ってください」ということはいわず、授業で使う・使わないは各自の判断に任せることも伝えた。ただし、2年後に生徒全員が iPad を持った環境において、まったく iPad を使わないで授業や指導を行うということは本校ではありえないであろうということも伝えた。

教職員の活用

「まずは板書代わりに使いましょう」を掲げ、職員室に電子黒板機能ありのプロジェクタを12台、電子黒板機能なしのプロジェクタを8台、合計20台を自由に使えるように用意した。プロジェクタの稼働状況としては平均で70%程度であり、中高で34クラスで14台程度が稼働しているということになり、全校の40%位のクラスで iPad を何らかの形で使った授業が行われているとみられる。生徒が iPad を持っているのは中高1年の12クラスであり、2年・3年の生徒が持っていないクラスでも使われていることがわかる。

iPad の使用推進のために、職員会議で数名の教職員に自分がどういう形で使っているかの報告を数分間でプレゼンしてもらう企画を行っている。「すごいこと」でなく、「こんなことでもいいのだ」と思ってもらえる取り組みを中心に披露することで、使いはじめることへのハードルを下げることを意識した。

ポータルシステムの CYBER CAMPUS については、以下のような取り組みを行っている。

○お知らせ機能

担任からクラス生徒への連絡、教科担当から生徒への連絡、各種行事での担当教員から係生徒への連絡等、さまざまな形で使われている。教科からの連絡では、授業の中で紹介しきれなかった資料や参考になる動画などを示すことに使われている。

○文書ライブラリ

完全なペーパーレスにはなっていない。実際に紙のプリントに記入することが効果的な場合も多く、紙でも配布しているが PDF でも配布したり、見れば済むもの（模範解答など）を PDF で配布したりしている。授業において、紙のプリントを使うか、PDF に直接記入を認めるかは担当者に一任している。生徒は紙を使うか PDF を使うかはさまざまであり、中には紙のプリントに記入し、記入したものを撮影して画像として保存している者もいる。選ばれることで、自分なりに最もふさわしい使い方を模索しているようである。

○動画ライブラリ

動画も容量の制限はあるが、配信が可能となっている。生徒への動画資料の提供として、実験の動画などを配信している。また、新たな日直制度として MC 制度を本校では行っているが、新入生には言葉の説明だけではわかりづらいため、上級生のクラスの朝礼・終礼の様子を撮影し、解説のキャプションをつけた動画を用意している。教職員間でも参考になる授業の動画や、視察の報告などを動画で共有している。

予想以上に展開している活用法としては募集活動があげられる。FileMaker というデータベースアプリケーションを利用して、募集活動をサポートするシステムを校

内開発している。

このシステムでは、生徒の面談履歴や入試結果等を iPad 上で確認したり、入試の際に教室への監督の入室管理や進行の管理が画面上で確認したり出来るようになっている。このシステムを開発したことで、あまり iPad の使用に積極的でなかった教員も「使わざるを得ない」状況となり、結果として導入が促進されたという副次的効果もあった。学校へのタブレット導入というと、どうしても授業での活用が中心となるが、募集活動のサポートでも大きな成果をあげている。

生徒への導入

2014年の導入に向け、2013年度内のすべての入試説明会で、入学決定後に「知らなかった」ということにならないように、来年度新入生には iPad を購入していただくことを伝えた。幸いに入學説明会の段階で購入することへのクレームはなかった。

中学生は2月、高校生は3月に入学説明会を実施。代理店に販売窓口を依頼（その他キitting作業も依頼）し、購入申込みの文書を作成して配布。FAX で代理店に申し込みを行っていただく形式とした。高額になるので分割払いについても案内を依頼した。

既に iPad を持っているご家庭から、学校への持ち込みの相談を受けたが、その場合は現在の設定やデータはすべて一旦消去して学校用の設定に書き換えることを伝えたと、最終的には全員が購入することとなった。

4月下旬より校内にて代理店によるキitting作業を開始。並行して3月から4月にかけて生徒・保護者それぞれを対象にインターネットやソーシャルネットワークサービスの利活用に関する講演会を実施した。

生徒には5月1日にキittingを終えた iPad を配布。当日は1時間目に全体への説明を行った。ここでは改めて導入の意味、使用ルール等の原則を確認した。ネットワークの負担を考慮して、大きく2つのグループに分けて前半を2・3時間目、後半を5・6時間目と設定して配布を実施。配布のための手順等は ICT 推進課のメンバーが作成したが、クラスでは原則として担任が配布説明を担当した。どのクラスも予定よりもスムーズに進行してほぼ1時間で終了。もう1時間はクラスによってホームルームや担任から使い方に関するアドバイス等を行ったようである。既にこの1時間のホームルームで学園祭に向けた話し合いにおいて生徒が自分の iPad をプロジェクタに接続して使用するということがあり、生徒の対応の素早さに感心するばかりであった。

生徒の活用

教職員同様、CYBER CAMPUS を使う機会が最も多いと思われる。教職員からのお知らせの確認、文書ライブラリから必要な文書の閲覧やダウンロード、動画ライブラリから授業関連の動画を閲覧といった使い方である。

授業では板書を撮影する生徒もいるが、それでノートを書かないということではなく、必要に応じて撮影し、それを使ってノートをまとめるといったような工夫をしている。教科書を忘れた生徒が授業で使いそうなページ

をクラスメートの教科書から事前に撮影して授業に出るといった予想しなかった事例も見られる。

クラブ活動でも、フォームやフォーメーションのチェックをはじめとして動画を使った活用がよく見られる。文化系のクラブでも華道部が毎回の作品を画像で残してライブラリ化したり、CYBER CAMPUS を使って部内の連絡を行ったりしている。

ホームルーム活動としては、学園祭での活用が目立った。学園祭前に企画コンペティションを行っているが、各団体2分の持ち時間の中でいかにプレゼンテーションの質を高めるかを工夫している。劇や映画を企画する団体が多く、今年度のコンペティションでは予告編動画をiPad で作って上映する団体が出て来た。2分すべてが動画ではなく、1分程度の動画を予告編として上映し、KEYNOTE を使って残り1分でプレゼンテーションを行うといったように、創意工夫が見られたことが成果であった。

クラスでの活用はクラス間に違いが見られるが、上手く活用出来ているクラス担任からは、「私はこんなことやってみたいと思っているんだけど、みんなもこんなことやりたいってあったら教えて」と呼びかけていると報告があった。教員側が「指導」して使わせるのではなく、新しい使い方やよりよい使い方を教員と生徒で協力しながら創造していくというスタイルがふさわしいことを実感している。

どうなったか？

教員間の「温度差」は存在する。しかし、何を導入してもこの温度差は生じるものであり、その差を縮めるには時間がかかる。募集活動システムの運用により使う機会を増やしたり、実践報告を今後も続けたりすることで導入のハードルを下げることで働きかける。

授業中や休み時間中の生徒の使い方については、もちろん指導の必要性はある。導入当初は休み時間に動画を大音量で再生してクラスメイトに注意を受ける生徒もいたが、徐々にこのようなことは収束した。

生徒・保護者の期待の大きさは個人差もあるので判断

は難しい。一部で過剰な期待を持っており、教科書は全部電子教科書、ノートもすべてiPad になると考えていらっしやった方もいた。全体としては「もっと使いたい」という期待を感じてはいる。

故障や破損、盗難は驚くほどに少ない。学校から貸与されたものではなく、自分のものとして購入したという意識が大事に使うことにつながっていると考ええる。さまざまな導入の方法があっていいと思うが、本校は生徒が購入して自分のものとして学校で使用する形を継続したい。

生徒の問題行動についてであるが、iPad を持ったから問題が生じるケースはレアであると思われる。不適切な画像や動画の閲覧も、既に80%以上の生徒がスマートフォンを持っている現状であれば、既にそうしたことをやりたい生徒は行っていることであろうし、わざわざ学校がMDM で監視している端末を使ってそのような不適切な使い方をする生徒がいるとも思えない。

これからどうする

まずはハードルを下げて導入を促進するというのが第一段階であった。この段階はまもなく終えようとしている。生徒にとって、学びのための一つの「道具」として定着させることも進んでいる。

今後はこの「道具」を使って、新しい使い方や価値を「創造」していく段階に入る。これまでのわずかな期間でも教職員からは募集活動システムの提案をはじめとして「創造」の端緒が見られる。生徒も教職員が予想もしない使い方に挑戦しつつある。

人工知能の進化も進み、一説では2045年には人工知能が人間の知性を超えるといわれる。そのような時代において人間の存在意義の一つは「創造」にあるのではないか。本校では、iPad を「創造」へと人間を導く一つのツールとして今後も使い続けたい。

現在導入している学校、そして導入を検討している学校についてはぜひ導入を進めていただき、私学の仲間として教職員・生徒の新たな「創造」を進め、その成果を共有することで未来の学びを展開したい。

実践発表Ⅱ

「グローバル社会を下支えする教育 ～かえつ有明の総合学習『サイエンス科』の取り組み～」

かえつ有明中学高等学校 英語科主任・サイエンスプロジェクト責任者 **山田 英雄**



1. サイエンス科の立ち上げ

(1) グローバル社会とサイエンス科

「21世紀型教育」や「グローバル社会」という言葉は最近よく耳にする。先日参加した、シアトルで行われた研修会で出会った世界の国々からやってきた教師たちも、同じ言葉を教育の課題として挙げていた。来るべき未来を担う子供たちを、どのように育てたらよいのかという議論が世界中で加速していると感じる。われわれ教師が担うべき役割は何か。具体的にどのような授業をしたらよいのだろうか。教育の在り方が今まで以上に大きく問われている。

今学んでいる生徒たちが大人になるころ、間違いなく世界と彼らの距離は今より近いであろう。つまり、共通のプラットフォームを利用して、世界の人々とともに生きていくことが当然の社会がそこにあるであろう。そのために必要なことを教育の現場で提示していかなければ、「時すでに遅し」となることが懸念される。

そこで、何が必要となるかのヒントとして、「21世紀型教育」や「グローバル教育」といった議論から見える共通項を挙げてみると、コラボレーション、クリティカルシンキング、ICT、などであった。この中でも特にクリティカルシンキングについて、われわれ日本人は慣れていないと考えられる。そこで、本校のサイエンス科において、クリティカルに考えるために必要なスキルを身につけることを軸にした授業を展開すべきだと結論した。

(2) 「サイエンス」の意味するところ

本校では、総合的な学習の時間を「サイエンス」と呼

んでいる。サイエンスといえば、通常は理科や科学といったイメージを持つであろう。本校では、「サイエンス」を「一般的な知識の体系」という意味で用い、広く学問一般を取りあげ、「学ぶことについて学ぶ」ことを中心課題に据え、サイエンス科として独立した「科」として運営している。授業は主に学級担任が受け持つ。社会におけるさまざまな課題に自発的に、クリティカルな眼をもって取り組み、自分の意見を世界に向けて論理的に発信できる姿勢を育てるために組まれたカリキュラムである。

(3) カリキュラム開発に至るまで

カリキュラム開発は、まず生徒たちの自発的な発言・行動がうまくできず、発言も論理的ではないという現実を打破するために、どのような具体的な教育方法を取るべきかという議論に端を発する。つまりは、どのようにしたら学びに対する内発的な動機づけができるだろうか、という点に集約される。その結果、生徒たちが自ら「考え」、「学ぶ」ことの大切さを意識できるような「仕掛け」があれば、自然と自発的に活動するはずだ、という仮説を立てた。

次に、その「仕掛け」を授業に埋め込む方策を模索した。議論を重ねる中で、そもそも今までの授業形態では、生徒たちは「効果的に考え、学ぶ方法」をうまく身につけることができていないために、自発性が育ちにくいのではないか、という新たな仮説を導いた。そうであるならば、敢えて「考える方法」を抽出し、具体的に利用する中で論理性やクリティカルな眼を持つきっかけを作るべきである。こうした発想に教科内容（コンテンツ）を機能的に載せた教授法の開発が必要なのではないか、と考えた。

そこで、サイエンス科では、中学3か年をかけて、考えるためのある定式に当てはめたトレーニングを通して、誰でもできることの反復繰り返しの中から生徒の学びに対する「気づき」を引き出し、自発的な態度を涵養し、論理的な発言を促していく、という基本コンセプトを確認した。

(4) カリキュラム開発の骨子

定式化されたトレーニングとして、アメリカの心理学者B. S. ブルームが中心になって提唱（1956）した教育目標分類学（タキソノミー）のうち、認知的領域を参

考にした。(※1)タキノミーに照らし合わせると、「考える」という行為は、6段階の認知活動に分類されるという。そして段階に応じた「考える」ためのスキルがリストアップされている。このスキルを、ある課題を解決するツールとしてトレーニングする。教える教員も取り扱いが容易である。本校のサイエンス科は、このタキノミーを軸にしたスキルトレーニングを中心に構築されたものである。

さて、ブルームらにより提唱された6段階のタキノミーは、次のとおりである。(①がより低次、⑥に向かうほどより高次の認知活動だとされる。)

- ①「知識」を手に入れる
- ②その知識を「理解」する
- ③理解した知識を「応用」する
- ④応用した結果を「分析」する
- ⑤様々な知識・応用といった行為を「統合」する
- ⑥そして結果を批判的に「評価」し、新たな

レベルへと向かっていく

この仮説が提唱されたのは1950年代と古いが、その後「改訂版タキノミー」などが発表され(Anderson, 2001など)、広く欧米の教育現場で支持されているようだ。(※2)本校では、上記6段階を大きく3段階に以下の通りに再編し、プログラムの土台としている。

- ①+② 情報の収集
(中学1年時に重視する部分)
- ③+④ 情報の整理、分析
(中学2年生に重視する部分)
- ⑤+⑥ 情報の統合、発表、フィードバック
(中学3年生以降に重視する部分)

上述した基本コンセプトをもとに、体系的にさまざまなスキルトレーニングをしていく。具体的な項目例は、以下の通りである。(各スキルトレーニング項目は、便宜的に列挙したものであり、レベルを越えて相補的である。)

表1. タキノミーに沿った、サイエンス科プログラム項目と具体的なスキルトレーニング項目

タキノミー	サイエンス科	具体的なスキルトレーニング項目 (例)
知識	情報収集 (中1)	・書く・リストアップする・名前を言う・名付ける・インタビューする ・述べる・時系列で思い出す・示す・図表や絵で表現する ・適切な選択をする・ブレインストーミング・質問紙
理解		・説明する・要約する・言い換える(パラフレーズする) ・記述する・予測する・実行する・意見と事実を区別する
応用	情報整理 ・分析 (中2)	・実験してみる(使ってみる)・計算する・当てはめる ・解決する(問題を解く)・結果を示す ・(トピックや得た知識に基づいて)再構成する ・種類別に整理する
分析		・序列をつけてみる(手順、因果関係) ・分類する(グループ分け、階層に分ける、図表にまとめる) ・比較する・対照する・一般化する・区別する ・演繹する・帰納する・アナロジー
統合	情報統合 ・発表 (中3)	・組み合わせる・計画する・創造する・デザインする ・仮説を立てる・発明する・開発する・実施してみる・類推する
評価		・判断する・推奨する・批評する・証明する・結論する・評価する ・検証する・改変する・優劣をつける・プレゼンする・再構築する

この表にある分類に従って、図書館司書が中心となりワークブックやプリントなどの教材を作成する。これを利用して中学の3年間をかけて継続的に、また体系的に組まれたさまざまなスキルトレーニングを行うことで、生徒たちが「考えるためのツール」を身につけ、自発的に「考え、判断し、表現」できることを目指す。(※3)

2. サイエンス科授業について

先述したとおり、サイエンス科の授業は生徒が自発的に考えることを支援し、同時に教員もサイエンス科の要素を取り入れて、各自の授業研究をより実りの多いものにすることを目指している。従って、必然的に全教科が関わることになり、またスキルトレーニングそのものは、学校教育のいかなる場面でも汎用性の高い活動だといえる。(この意味で、教科横断型のプログラムだといえる。)そしてこのスキルは、(将来的に)全教員が、いかなる場面でも容易に応用できるものであり、またどんな生徒

でもスキルトレーニングを通して一定の成果をみることができ、全学的な取り組みとなる。このような考えの下、サイエンス科の授業を実施するにあたり、以下の要領で授業を展開している。

(1) 担当教員

以下の教員構成で授業を展開している。

コアメンバー：国語科1名、英語科1名、図書館司書1名の3名がカリキュラム作成の中心を担う。

授業担当：基本的には担任が担当する。そのため、毎年新しく受け持つ教員がいる。情報科の教員は、必ず担当し、コンピューターリテラシー教育を推進している。

サイエンス科がスタートしてから全教科の教員が関わってきている。

また、図書館司書が中心となり、ワークブックの作成を担い、各教科のハブ的な役割として機能している。

(2) 授業時間数

中学1・2年生は、スキルトレーニング中心に、週に1時間×2回で授業を展開し、意見文や新聞、プレゼンテーションなどの形でまとめている。中学3年生は、週に1時間、1学期はスキルトレーニング、2学期以降は調査・発表のトレーニングを中心とした授業展開になっている。

(3) 授業展開

スキルトレーニングが授業の基本である。初年度は情報収集のスキルを中心にトレーニングする。ブレインストーミングやインタビュー、グラフの読み方など基本的なスキルを抽出し、教員が意識的に指導する。2年目は情報の整理を中心に授業を進める。そして、中3においてはそれまでに学んだスキルを使い、効果的に発表できることをめざして授業を展開する。

また、取りあげるコンテンツについては、あらゆるものを利用する。ただし、あまりに専門性の高いコンテンツにすると、全教員が対応することが困難になる。従って、どの教員でも取り扱いが可能なコンテンツを採用するようにしており、必要に応じて専門的なアドバイスを該当教科の教員から受けるようにしている。

こうしたコンテンツを利用して、いわゆる「探求型」の学習を行う。従って、取りあげるコンテンツはオープンエンドの内容を多くするよう配慮し、また PBL などのアクティブラーニングを意識した授業展開となっている。

各単元は、単元ごとに図書館司書によって作成されたワークブックを中心に展開する。このワークブックは生徒全員に配布する。教員はこのワークブックに沿って授業を行うため、指導案の代わりにもなる。教員の負担の軽減にもなる。

(4) 教員研修

サイエンス科授業担当者は、毎週1時間、研修および授業計画についての会議をもっている。この時間を利用して、サイエンス科授業コンセプトについての共通理解を図るため、クリティカルシンキングやその他必要な情報の共有やワークショップを実施し、各教員が理解を深めるようにしている。またコンテンツについては各教科との連携を図り、スキルトレーニングに見合ったコンテンツを探し、学年ごとに協議をする時間も確保している。したがって、基本コンセプトを踏襲しながら、柔軟なコンテンツ選択を通して、さまざまな授業を実施できるよう工夫している。

3. 今後の方向性

サイエンス科は本校中学3か年の、学習のためのスキルトレーニングコースである。実際に周囲で起こっている答えのない課題に対し、クリティカルに考え、自ら答

えを見出そうとする生徒を育てるための準備コースでもある。従って、高校生になってから、彼らの精神レベルが向上したその時に、身につけているであろうスキルを利用し、課題解決がより効果的に行えることを目指している。

しかし、スキルトレーニングであるということは、その宿命として「型」重視であり、実践にどのように応用していくのが常に課題となる。同時に、型を守らせることが却って生徒の自由な発想を妨げるのではないか、という懸念がぬぐえない。さらには、タキソノミーのような分類自体、その区分には曖昧さが残り、また認知のレベルも決して直線的ではないはずだ、という点も指摘されてきた(※4)。また「知識」についてもさまざまな議論があり(※5)、それこそ「鶏と卵の因果性のジレンマ」のように「知識が先か、興味が先か」が問題としてあげられる。

結論としては、サイエンス科ではどちらも大切にすべきだと考える。特に学ぶためのツールを具体的に持つこと(ここでは、知識や情報を効果的に入手するスキルなど)は、何かを学ぶ上でプラスにこそなれ、マイナスにはならないであろう。不必要なら使わなければよいだけだ。マルザーノの「学習の次元」(※6)にあるように、学ぶ次元に優劣はない。その時々に必要な要素を、必要に応じて支援することが重要だと考える。

(※1) Bloom, B., Englehart, M., Furst, E., Hill, W., & Krathwohl, D. (1956). *Taxonomy of educational objectives: The classification of educational goals. Handbook I: Cognitive Domain*. New York: Longmans Green.

(※2) L. W. Anderson and D. R. Krathwohl (eds.) (2001). *A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objectives*, Addison Wesley Longman.

(※3) 「新学習指導要領の基本的なねらい」などを参照。

(※4) 石井英真 (2003) 「メタ認知を教育目標としてどう設定するか—改訂版タキソノミーの検討を中心に」 京都大学大学院教育学研究科紀要第49号等を参照。

(※5) R. Glaser (1984) は、知識の重要性を説き、スキル教育の限界について言及。"Education and Thinking : The Role of Knowledge" *American Psychologist*, 39を参照。

(※6) 石井英真 (2005) 「アメリカの思考教授研究における教育目標論の展開 : R. J. マルザーノの「学習の次元」の検討を中心に」 京都大学大学院教育学研究科紀要第51号において詳説。

また、Marzano & Kendall、黒上晴夫・泰山裕 (訳) (2013) 「教育目標をデザインする—授業設計のための新しい分類体系」 北大路書房 も参照。

実践発表Ⅲ

「キャリア教育～学校改革を目指して～」

中村中学校・高等学校 副校長 永井 哲 明

大会テーマ「21世紀の教育を考える」、大会副題「グローバル教育を目指して」、教育課程部会の研究目標「21世紀における新たな教育の構築」を考察する際に、キャリア教育の視点を持つことが模索の拠り所になると感じている。そこで、本実践発表では実践と理論を混在させて、キャリア教育が21世紀型教育やグローバル教育に対応し、キャリア教育を利活用することで学校改革に結びつくということを提案したい。



本校では道徳・特別活動の時間を柔軟に活用し、「キャリアデザイン授業」を年間で20～30コマ実施している。2002年度から開始しているので、今年度が13年目に当たる。まず、中学1年生対象のキャリアデザイン授業では、進路は「進む路」であり一生、つまりキャリアであるということを教える。その中で高校卒業（大学入学）はゴールではなく、スタートでもなく「通過点」であると意識させる。イメージするのは「30歳の自分」である。30歳はライフイベントが起り始める時期、少なからぬ女性が退職する時期、探索から実現へと転換する節目の時期、企業内格差が生じる時期である。このようなトランジションを踏まえた上で、30歳の時に自分が関わっていたいことや分野をイメージさせる。それを実現させるために、高校卒業後の進路を考えるという手順を浸透させる。また、人は与えられた役割（受動役割）と獲得した役割（能動役割）を持っており、その役割に対する取り組み方には他律的遂行と自律的遂行があり、この役割と役割への取り組み方が「キャリア」であるということを理解させる。また、中学3年生対象のキャリアデザイン授業では、キャリア発達を意識させる。心に「夢」を抱く中学生から、「希望」を抱く高校生へと成長するという発達である。中学生段階では「できること」に自信を持たせる。そして、「すべきこと」に進進させる。さらに「したいこと」を大切にさせる。このプロセスを踏んで、できることを増やしていくことが、その後の土台の構築につながる。そして、高校生では夢に、強い気持ち・行動・継続を加えた「希望」を抱かせるように導く。

キャリアとは「人が、生涯の中でさまざまな役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見い

だしていく連なりや積み重ね」である。そして、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。職業教育はキャリア教育の一部であり、進路指導はキャリア教育の一時期である。そして、キャリア教育は全教育活動（授業・総合的な学習の時間・特別活動・道徳・生徒自治活動）を通じて行うものであり、また、保護者や教職員に対しても実践するものである。キャリア教育を通じて生徒に「生きる力」を身につけさせ、自己のキャリアをデザインし、社会に貢献し社会を創造するための能力を身につけさせることを実現させることが重要である。2002年の「職業的（進路）発達にかかわる諸能力」から2011年の「基礎的・汎用的能力」へと、キャリア教育の求める能力は変化している。この能力は2006年に経済産業省から打ち出された「社会人基礎力」にも通ずるものである。また、DeSeCo、EU、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ等の教育改革における資質・能力目標にも、この基礎的・汎用的能力はほぼ対応している。

この基礎的・汎用的能力を各校の教育に組み入れることで、学校の独自性が創出される。本校では、「Competency（総合的変化対応能力）」をキャリアデザイン授業の求める能力とし、「人間関係形成能力」「社会形成能力」「自己理解能力」「自己管理能力」「自主自律型学習能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」「キャリア探索能力」の養成を具体的に求めている。これらの能力を各学年に適切に配分し、キャリアデザイン授業を構成している。さらに、全教育活動においてもこれらの能力養成を念頭に置くことによって、さまざまな視点からの取り組みを模索している。「人間関係形成能力・社会形成能力」に関しては、フォロワーシップを有したリーダーシップ教育を、「自己理解能力・自己管理能力・自主自律型学習能力」に関しては、セルフコントロール・セルフガバメント教育を、「課題対応能力」に関しては、行動優先主義教育を、「キャリアプランニング能力・キャリア探索能力」に関しては、方向性模索教育を施している。表<「Competency」とキャリアデザイン授業>には、中学校3年間の授業実践と能力配分が示されている。

国立教育政策研究所が2013年3月に発表した「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5」には、基礎力、思考力、実践力の三層構造を持った「21世紀型能力」が示されている。基礎力は教科・領域横断的に求められる基本的な能力、思考力は基礎力に基づいてさまざまな課題を解決す

るための中核となる能力、実践力は実生活で活用していくための能力と定義づけられている。この21世紀型能力は、与えられた課題（問題）を迅速かつ効率的に遂行する近代型能力に対して「ポスト近代型能力」といえる。私たちはこの能力を意識してこれからの教育課程を模索する必要がある。しかし、社会、或いは企業は、ポスト近代型能力だけではなく近代型能力も要求している。つまり私たちはこの両能力の土台を中等教育段階で生徒に身につけさせることを求められているのである。

21世紀型能力のうち、「基礎力」と「思考力」は授業で養われる教科横断的能力とみなすことができる。そして、「実践力」と「思考力」は前述の基礎的・汎用的能力とみなすことができる。キャリア教育は万能ではないが、その守備範囲は幅広い。生徒が、超業績社会、グローバル社会、ICT 社会、コミュニティー基盤社会、知識基盤社会を生きていく力の養成を、キャリア教育が担うことは可能であると考ええる。本校では、基礎力を養うために「100+1000プロジェクト」を実践している。努力の習慣を身につける「100分学習（平日自宅で100分勉強する）」、知識力を身につける「100冊ノート（暗記する時はノートに書いて覚える）」、表現力を身につける「100本表現（各教科から課される小論文・作文等を5年間で100本書く）」、欲張る力を身につける「1000語引き（国語・英語の紙の辞書を使って6年間で6000語調べ）」を生徒に奨励している。また、思考力を養うために学びの4段階を意識している。人から学ぶ「一斉学習」、人と学ぶ「協同学習」、自分で学ぶ「自主自律型学習」、自分を学ぶ「生涯学習」という学習法を時宜に応じて活用し、生徒の思考力育成を目指している。さらに、実践力を身につけるために、自分環境、周辺環境、社会環境を自覚させている。「自分環境」はキャリア発達、ワークキャリア、ライフキャリアという視点であり、「周辺環境」は結婚、転勤、親の看介護という視点であり、「社会環境」は雇用・労働、出産・育児、超高齢社会という視点である。これらの環境ごとに、持続可能な未来づくりへの責任を果たしつつ、実践力を駆使して生きることが重要である。自分環境は主観的な願望が反映される場面であるが、周辺環境と社会環境は客観的現実という要素を多分に含むものであるため、対応するには、キャリア・アンカーだけでなくキャリアアダプタビリティも必要である。夢・強い気持ち・行動・継続の総体である「希望」と、努力の習慣・知識力・表現力・欲張る力の総体である「学力」と、30歳の自分を考える「キャリアデザイン」という歯車が噛み合った時に、生徒の中に「21世紀型能力」が芽生えるだろう。

キャリア教育の求める基礎的・汎用的能力とグローバル教育の求める能力の関係を考察する前に、「グローバル教育」が目指すものを定義してみたい。ここでは、朝日新聞の2014年5月、1ヶ月間の朝刊に掲載された「国際」というキーワードにヒットした記事からヒントを得てみる。これらの記事から抽出したグローバル教育が目指すものは、以下の3つである。(1) 脚下照顧（いたづらに外に向かって真理を追い求めることをせず、まず自己の本性を明らかにすることが必要）(2) コミュニケーション（傾聴、受容、共感に加えて相手が理解してくれるように自己主張することが必要）(3) "Think globally, act locally"（地球規模で物

を考え、地に足をつけて行動することが必要）(1)は基礎的・汎用的能力の自己理解能力・自己管理能力・自主自律型学習能力に対応し、(2)は人間関係形成能力・社会形成能力に対応し、(3)は課題対応能力・キャリアプランニング能力・キャリア探索能力に対応する。

キャリア教育は生徒を対象とするだけでなく、保護者、教職員をも対象とすることができる。本校では1年に1回、「保護者キャリアガイダンス」を実施している。これは、保護者会とは別の機会に行い、主に、「キャリアデザイン授業」の方針や内容を説明することを目的としている。キャリアの意味、基礎的・汎用的能力養成の順序、キャリアをデザインする上での留意事項、キャリアデザイン授業の学年別目標、保護者への要望等を含んだ内容となっている。このガイダンスの目的は、キャリアデザイン授業を家庭でも実践してもらうことである。学校でも家庭でも一貫したキャリア教育を受けられる環境を生徒に提供することは、生徒のキャリア発達の上で非常に重要なことである。また、保護者自身が自己のキャリアについて考察することが、生徒の貴重なキャリアモデルとなるという効果もある。自分の親が自己の役割にどのように取り組んでいるかを目当たりによりすることによって、生徒は自己の取り組み方を見つめ直すきっかけを得ることができる。また、本校では若年教職員を対象として、「教職員研修」を行っている。1年に9回の研修を行い、今までの教職員生活を振り返りつつ、現状の課題を発見、再考し、将来への展望を抱くという目的を持っている。教務、進学、生活指導、国際、募集の各責任者からの講義の他、副校長から5回に亘って、生徒支援、教職員協働、社会人標準力、危機管理、保護者との協働についての講義、ワークショップがある。これらの研修には本校のキャリア教育が求めている"Competency"養成という視点が含まれている。

キャリア教育は全教育活動で実践できる教育である。21世紀型能力養成にもグローバル人材養成にも活用できる教育である。さらに、生徒だけでなく、保護者、教職員にも施せる教育である。キャリア教育は「子どもたちの社会的自立や職業的自立の支援ということ念頭において、子どもたちに生きる力を身につけさせることを目的とした教育課程の再編成の試み」である。再編成する際にはぶれない軸、或いは拠り所が必要である。それをキャリア教育としてもよいのではないだろうか。学校改革に即効薬はない。計画したことを堅実にこなし、やった方がいいと思うことに誠実に取り組み、ここぞという時に大胆に挑戦することが、学校改革に繋がっていく。改革には、やり遂げようという強い気持ちが必要である。その灯はすぐに消えてしまうような「打ち上げ花火」ではいけない。凡事を地道に徹底してやり続けるような「聖火」が必要なのである。「木の成長は見えない。しかし数年経てば分かる。地道な努力は裏切らない。結果が出ない時もあるが、たとえそうであっても、確実に成長している。」このような気持ちで、生徒一人ひとりの成長を支援したい。そして、キャリア教育を軸にした、生徒一人ひとりへのまなざしを大切にする教育活動の連続が、学校改革及び学校の独自性創出へと結びつくのである。

運営委員長総括

学校法人青山学院 常務理事 山本 与志春



この2日間、ご参加いただいた先生方には充実した2日間であったと思います。

秋田先生の講演では本当に多くの新しい知識を得ることができました。知識を分け合うと豊かになると、秋

田先生がおっしゃいましたが、まさに豊かにさせられた心持ちです。グローバルな社会の中で、相違のあるものが共生し新しい知恵を作るためには、丁寧に話し合い、互いを理解し合うことが大切だと知らされました。

東京私学教育研究所の「教務運営に関するアンケート」集計結果報告では、東京の私立中学校高等学校のさまざまな状況をお知らせすることができました。

3校による実践発表について申しあげれば、桜丘中学高等学校の iPad 活用等の先進的な取り組みからは、困難な状況の中で一歩踏み出し、結果的に大きな成果をあげていることに励まされました。教科書のデジタル化、公立学校の iPad 導入、その流れの中で、私学はどう取り組むのか問われていますが、ICT は生徒が共に学び合っていくためのツールとして重要な役割を担うと思います。かえつ有明中学高等学校のサイエンス科からは、グローバルな時代に生きていく時に、同じプラットフォームを持った中で話し合いをする必要性と、考え方のスキルを修得させるための指導法が示されました。中村中学高等学校のキャリア教育からは、6年間の教育を通して、自分の人生をどのように生きていくのかしっかりと考え、将来を見据えた学びが

重要だと知らされました。

實吉幹雄先生から「私たちは未来からの留学生をお預かりしている」というお話を伺いました。お預かりしている留学生が将来の日本、世界を担っていきますから、その人たちが作り出す社会は今よりもより良い、より幸せな、より平和な世界でなければなりません。グローバルとは、国と国を超え、民族・宗教を超え、地球に生きるもの全てが共に生きようという思いの中で語られる言葉だと思います。そこで必要となる私たちのスキルとは、言語あるいは ICT を使ったコミュニケーション力、そして、どう生きるべきかとの問いに対する知見だと思います。私たちは子どもたちに大事な責務を持ち、また、大変有り難い仕事をさせていただいています。子どもは間違いなく成長していきますから、その変化する時に私たちがどのような教育をしていくかが将来の日本、世界を変えていきます。子どもたちには幸せな、そして平和な世界を作ってほしいと願っています。希望を実現するために良いスキルを見つけてもらいたいと願っています。教師が希望を語らずして、誰が希望を語るのか、教師が理想を語らずして、誰が理想を語るのか。子どもたちに理想と希望を語り、それを実現してもらうために子どもを手助けすることが重要です。本大会では大変良い学びをすることができ、感謝しています。お話を伺いながら、私は心を熱くすることができました。実際に学校に帰るとなかなか思い通りにいかないことがたくさんあります。しかし、一歩踏み出してくださっている先生方がいらっしやいます。困難な状況の中でも何とか解決する力、それもグローバルな力です。是非、困難を乗り越えて新たな道を切り拓いていただきたいと、皆さんにエールを送り、感謝を申しあげて総括といたします。

法人管理事務運営部会

1 研究目標 新たな時代を見据えた法人管理事務組織の活性化

グローバル化の進展に伴い、教育界においても多様化する動きへの対応が求められている。また、教育行政においても加速度的に諸改革がスタートするなど、新たな局面を迎えている。法人管理事務においても時代の変化を見据え、組織力を高め、事務や学校全体のICT化の推進など、効率的な取り組みがなされている。しかし、検討を必要とする課題も少なくない。本部会では、法人管理事務運営において、活力ある組織として、総合的な力を発揮すべく、新たな時代を見据えた意識改革や組織活性化の具体的な取り組みについて、午前中は、学校側の視点からの基調講演と企業側の視点からの組織力の活かし方についての講演を行う。午後からは、講演をもとにグループ討議として、意見交換や自校の課題を出し合いながら、研究テーマを掘り下げ、目標を探究していく。また、各グループごとの討議内容のまとめについては、発表形式での報告を行い、参加者の共有を図ることで、現場における組織の活性化に繋げていただきたいと考える。

2 会 場 グランドプリンスホテル新高輪国際館パミール 3階 香雲

3 日 程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	15			30	30		15	45	
10月17日	受付	開 会 式	基 調 講 演	講 演	昼 食	分 散 会	全 体 会	閉 会 式	

4 内 容

部会開会式 運営委員長挨拶 桜丘中学高等学校 校長 平 美佐子

基 調 講 演 演 題 「個から群の創造 ―時代を繋ぐ学校運営―」
講 師 聖 光 学 院 中 学 高 等 学 校 理 事 長・校 長 工 藤 誠 一

講 演 演 題 「東京ディズニーリゾートに見る『おもてなしの極意』」
講 師 株 式 会 社 オ リ エ ン タ ル ラ ン ド 元 理 事 竹 内 昭

分 散 会 テーマ ①「講演をうけての意見交換」
②「新たな時代の事務組織についての意見交換」
③「参加者からの希望テーマによる意見交換」

全 体 会 分散会各グループからの報告

部会閉会式 運営委員長総括 桜丘中学高等学校 校長 平 美佐子
専門委員長挨拶 聖光学院中学高等学校 理事長・校長 工 藤 誠 一

5 運営委員・指導員（順不同）

委員長	平	美佐子	（桜丘中学高等学校 校長）
委員	相川	忠洋	（麴町学園女子中学高等学校 理事長・校長）
	根本	欣哉	（専修大学附属高等学校 校長）
	野尻	富太郎	（学校法人芝学園 事務局長）
	原田	茂	（明星学園中学高等学校 事務長）
	三輪田	進	（三輪田学園中学高等学校 事務長）
	高野	靖敏	（城北中学高等学校 事務長）
	西田	久	（桜丘中学高等学校 事務長）

6 専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

委員長	工藤	誠一	（聖光学院中学高等学校 理事長・校長）
委員	森本	純生	（高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長）
	正村	幸雄	（学校法人鹿児島学園 理事長）
	富本	道宣	（富本教育研究所 所長）



基調講演

「個から群の創造 ―時代を繋ぐ学校運営―」

聖光学院中学高等学校 理事長・校長 工藤 誠 一



講師紹介（相川忠洋・運営委員）

工藤先生は1955年神奈川県にお生まれになり、明治大学をご卒業後母校である聖光学院中学校高等学校にご就職されました。その後各方面でも活躍をされ、学校法人聖マリア学園理事長を経て、現在、同学園理事長、聖光学院中学高等学校校長というポストを勤めています。また、神奈川県私立中学高等学校協会理事長、日本私学教育研究所理事、日本私立中学高等学校連合会常任理事など、いろいろな役職をお受けいただき、大活躍をされております。

私自身このような高い所から皆さまにお話ができるようなそんな経験というものはいくつかありますが、皆さまのお役に立てばと思って、今日はお話をさせていただくことにいたしました。

「個から群の創造―時代を繋ぐ学校運営」ということで、私学というのはもともと、それぞれの学校が独立して教育が行われていました。そして情報交換を行うことを非常に嫌う時代がありました。先生同士が交流したりすると大体何を聞いてくるかという他の学校の給料のことで、それで、組合などが他校の良いことばかりをいうことがありました。また、私学各校それぞれ独立して競争もしていたので情報交換を嫌った時代ということもありました。それでも十分学校経営が成り立ったのです。かつては網を投げるといった獲物がとれると比喻されたように非常に子どもが多い時代があったわけです。そうした時代と比較して、現在は逆にそれぞれが独立した形でやっていったのではなかなか大きな力にならない。私学はお互いに手を携えて未来に向かっていかないと、私学単体では生き残

っていけなくなったのです。同時に、私学を運営する立場にある者は孤独です。校長、理事長あるいは事務長などの職にある者は、情報交換を行いお互いがそれぞれ助け合うということが必要なのかなということを私自身感じる機会が増えてきました。そして学校という組織というものがあるという時代を乗り越えて、継続していく、存続していくためにはどうしていったらいいのことを真剣に考えていくことが求められています。今日はそのような観点から私は三つに分けて少しお話をしたいと思います。

第一は、私学の存在する意味というのはこの国の中でどういう点に立脚しているのかということをお話したい。そして二番目は、そうした中で私どもの学校の方の方向性を皆様方にご披露しながら実際の本校の学校運営についてお話しします。三番目は時代をつなぐということにもなるのですが、今私どもの学校は全部の校舎の建て替えをやっています。それが将来のどういうことに結びついているのかというようなことをお話したいと思っております。

私学の先生というのは大体基本的にはどういう人が多いかというと、研究者崩れ、大学に残れなくて私立中高校の先生をやっている。あるいは司法試験崩れとか、音楽家崩れとか、そういう方が多いのです。いってみれば崩れの集団です。学校の事務をされている方というのも最初は教員の方もいますが、金融機関にいらしたとか、あるいは民間会社にいらしたとか、そういう方が非常に多くいらっしゃる。まさに私学というのは崩れの集まりなのです。大体地方へ行って私学の教員というと、何となくバカにされる。本校の教員が、地方にいらっしゃる人と結婚することになって、相手方の家にご挨拶に行くと、その家庭はお父さんもお母さんも公立学校の先生なのです。そうすると自分の娘の亭主である者が私学の教員だと、なぜ公立の教員にならないのかというふうにいわれた。公立の採用試験に受からないから私学の教員をしているのだらうというような評価なのです。確かによく考えてみると、かつて官能小説といわれる小説を書いていた作家の前職は私立学校の先生であったという人が結構いたりするわけです。不思議とそういう崩れが多いというのが私学教員の集まりです。しかしながら私は、崩れているが故に個性があると思っています。基本的に公立の教員になった場合は、用意ドンで出世競争です。出世をして校長になることはゴールの一つです。やはり学校数が多いのでポストがたくさんありますから、基本的には校長になれるのではないかという期待感も働いて競争になる。これは公立と私学の大きな違いになります。私学の場合というのはまさか校長になろうと思って、教員

になるという人はいないのです。まずいない。大学の先生を目指しているけど空きがない、仕方ないから教員をやろうという。しかし、それ故に、私学のほうが教員の個性が強くなる。ところが最近、最初から私学の教員になりたい人が多いのです。採用面接してどうですか、「公立学校の採用試験受けたのですか」、「いや、私は私学の教員に最初からなりたいから受けてません」と、こういう形で私学というのは変わってきたという部分があります。

公立学校というのはこれまで現場と教育委員会対との戦いだったのです。戦後の民主化によって日教組がイニシアチブをとった現場を転換させること、いかに中央集権的に教育委員会主導の体制を築くかの現場との戦いがあったのです。今の現状としては教育委員会が勝利を収めて同じ学校に勤務できる期間が短縮されようになったのです。昔は、新しい校長先生が公立学校に赴任していくと、そこには古くからいる先生がいて、まず職員会議の決定というのが一番であるとか従来までの慣行を認めるように迫るのです。校長先生は認めますか。承認しますかというものを突きつけて、それを認めないと学校運営はうまくいかない。こういう時代です。これは遠い遙か昔になりつつあります。でもその中で良かった部分というのものもあるかもしれないのです。学校というのは非常に難しいところです。例えば朝礼などで校長先生はこういうふうにしなさいといった時に、年取った先生は校長はそういうけど、なかなかうまくいかないよ。そんなことをいうと、生徒はある部分ほっとする。学校というのは大体、いいか悪いかというのはこうだと決まっている傾向があります。

それは学園もののテレビドラマの悪い人というのは理事長と事務長です。あと教頭先生というのもあまり良くない。校長ポストを狙う権力志向の人という位置づけです。かたやいい人とはいうと、校長と若手の青年教師という位置づけです。私は事務長を6年間、教頭を6年間、今校長が12年目になります。事務長をやっている時に、うちの娘が学園ドラマを見て、泣きながら「お母さん、うちのお父さん学校でこんなに悪いことをしているんだ」というのです。もうわが家では学園ドラマを見るのは禁止です。そんな傾向がありますから理事長先生が、事務長先生が悪い人に見えてしまう。

私の場合はたまたま全部やりました。事務長、事務局長をやって、教頭をやって、校長をやって、理事長をやっている形になっているわけです。またさらに現在、私は神奈川県私立中高協会の理事長です。大体そういうものになった時にインターネットの掲示板に何と書き込まれるかというと、「なんでそんなことやるんだ」、「やる必要ないじゃないか」というように書き込まれるのです。そういうことをやるという聖光学院はだんだん凋落するのではないかと、そういうことも書き込まれたと思います。

なぜ、私が中高協会の理事長になったかという出発点は未履修問題、履修漏れです。この未履修問題というのは、2006年10月24日、平成18年のことです。富山県立高岡南高等学校で、世界史の未履修の問題が朝日新聞に掲載されました。以降、全国の未履修問題のことが毎日のように報道されました。あの時校長先生、公立の校長先生ですが、茨城県と九州でお二人が自殺しています。そこまで追い込んでいくわけです。あの年の12月何があったかを思い出して

いただきますと、教育基本法の改正があった。どうしたら教育基本法の改正を遅らせることができるかということも関連して、あの問題が大々的に報道されてゆくという伏線もあるのです。私を含めて毎日毎日、いつ県から電話かかってくるか、やはり校長同士で情報を交換しあう。ああ、次は自分かな。それこそ犯罪者が逃げている気持ちになってしまうのです。そしてついに私のところにも電話が掛かってきたのです。家庭科だったので、高校3年生に関しては、入学試験、大学入試が終わったあとで、5日間くらい学校で家庭科らしきことをやって、そしてそのあと金沢八景の野島高原にバーベキューに連れて行って終わりという形にしたわけでありました。そうした時にそれぞれ校長同士で情報を交換しあっていたのです。このことはあとになって、やはり絆を持つことは大事なのだと深く実感しました。

それからもう一つは、神奈川の私学の中で未履修問題との関わりは中高一貫校が多かったようです。そうした観点からすると中高一貫校をやっている私学の声を強くいわなければいけないようになってくるわけです。高校入試においては公私間における定員比率の問題があって、このことが大きなテーマになるわけです。ですから神奈川県はその何年か前には行政を相手どって、この定員比率について、行政訴訟までやったわけです。もちろんこの定員比率のことは今でも重要な問題でありますしこれを抜きにしたら私学の存在そのものも揺らぎかねない事柄です。行政訴訟までやった神奈川の私学協会が、中高一貫校あるいは高校だけであっても未履修というカリキュラムのことで苦しんでやっている間に何もなかったのです。情報交換を含めて総会が開かれることもなかったのです。それではいけないという気持ち、私自身をこの中高協会の役職を受けるきっかけになったと思っています。やはりそれは時代の流れもあるでしょう。もう一つの未履修問題中でのわれわれがいつ指摘を受けるんだという不安の毎日を送った。その時に情報交換を交わした校長同士の絆はものすごく強められたと思います。それをきっかけとして現場にいるわれわれの思いをいろいろな形で日本の教育に対して反映させていかなければいけないと強く感じたのです。

今私自身は神奈川県私立中高協会の理事長として三つテーマを持っています。一つは、やはり私学教員の弾力的な採用ということを考えております。今後は教員を確保しづらい教科が出てくると思うのです。たとえば物理の先生をはじめ理系でもって良い先生を確保するというのは大変です。あるいは地学などはそもそもが手がないのです。英語なども確保しづらくなっています。それから国語にしても古典の先生などいなくなるのではないかと、数学の先生でも優秀な先生を集めるというのは非常に大変です。そうした時に、やはりどうしたら社会で経験を積んで知識がある人、これを学校の教育現場に専任の教員として雇えるようにすべきだというのが私の主張です。

特別非常勤講師として採用することはできるのですが、それではなかなか学校の教育活動担任をやったりとか校務ができないのです。だから身分も安定しない。そういう形で先生方が採用できるかどうか、私はそれに一つチャレンジをしました。今年度から経産省のキャリアを私の学校に英語の教員として2年半出向で受け入れました。免許状に

については神奈川県内だけで通用する特別教員免許をとらせました。彼はアメリカの大学に入学して学位をとっていますし経産省で留学生に対して英語で教えたりもしています。そういうキャリアが認められて英語の特別教員免許状がとれました。中高の英語と、それから東大の法学部ですから公民も出してもらいました。これは一番目に掲げている教員免許状の弾力的な授与の一つの実践例です。

そして二番目は、学習指導要領の弾力的な運用。私は日本の教育の中で高校の学習指導要領が一律であることは危機感であると思っています。大学において教養課程が非常に圧縮されました。高校においてはかつての大学の教養課程に匹敵する内容を履修するような教育が求められています。現状において高校進学率は9割を超えているわけです。正直いって3分の1足す2分の1は、5分の2という答えをしている生徒でも高校を卒業しているという現実があります。かたや数学オリンピックに出るとか、そういう子どもたちも同じような一律のカリキュラムでもって学ばせている。この部分を変えないと本当の意味で日本の教育の質の向上はあり得ないのです。グローバル教育は大いに結構です。留学生を出すということも大いに結構です。しかし東京大学を出て留学した学生の多くが日本へ戻ってこないのです。かつて日本で留学生が多い時代というのは大体企業が費用を負担して自分の会社の優秀な社員を留学させていました。帰ってくるとどうかというと辞めてしまうのです。給料の高いところへ行ってしまう。こういう現実があるのです。

ですから、日本においてグローバル化が進むのはいいことです。留学させるのはいいことです。しかしそれがわが国のためになるのかどうかという議論はどこにあるのですか。そこが忘れられているところですよ。ですから私自身はその部分を十分考えて税金を投入しないといけないと思っています。その個人が生きていくためにはいいでしょう。ところがこの国のためになるのかどうかということについては、大きな問題があると思っています。そういった意味で学習指導要領をいかに弾力的に運用して、きちっとスキルのある生徒に対しては学力をつけるということが大事だろうと思っています。

私の学校でボランティアに行かせる機会があり、その結果報告会をします。去年、その発表会でこんなことを発表した生徒がいました。障害者の作業所で働いている人は一生懸命に働いていた。でも一生懸命に働いているけれど、彼らは抽象的な思考能力が無いから残念ながら日本の今の社会の中では経済的に豊かになることはできないと。これは私にとって衝撃でした。抽象的思考能力があるかないかということで、豊かになれるかなれないかが決まってしまう現実を突き付けられたのです。かつて日本が高度経済成長時代と呼ばれた時代には大量生産が行われていましたから朝から晩まで機械に向かって単純作業をしていてかなりの給料を稼ぐことができました。残念ながらそういう仕事は今の日本にないのです。そういう仕事はもう東南アジアや南アジアにいつてしまった。そういう形で移り変わっていくというのがグローバル化の時代ではないのかなというふうに思っているのです。

そういうふうに見た時どうなるかというと、海外で稼いだものを日本の国に戻して、国内に還元されなければ

この国の国民はなかなか豊かになれないという現実があります。格差社会になりつつあることも事実で一日におにぎり一個しか食べられないという家庭の子どもたちもいるという悲しい現実もあります。

所得の格差がすごく広がっている。普通のサラリーマンで二千万円稼ぐという集団もあるわけです。今年の日本私学教育研究所のグローバル教育研究部会で私どもの姉妹校であるセント・メリーズ・インターナショナル・スクールの視察がありました。九百数十名生徒がいますがそのうちの4割がすでに日本人です。年間の授業料は約250万です。2人の子どもを通わせている家庭もあります。かつては5%くらいでした。そしてその多くというのは自営業でした。今はほとんどサラリーマンです。しかもその家庭層を見てみると日本のグローバル教育に携わっていたり、あるいは官僚のお子さん、たぶん授業料は祖父母が負担しているのかもしれませんが、とにかく増えてきています。

かたや先ほど述べましたようにおにぎり一個しか食べられないという家庭の子どもたちもいるのです。この家庭のモデルの多くは離婚してシングルマザーになってしまっている家庭で、お母さんが単純作業に従事していて家が持ち家でないというケースが多いです。このような場合には年収は300万くらいになってしまう。家賃を払ってしまうと食べていくのがやっというのが現実です。かつての時代というのはなんとか夜勤とかをすれば500万くらいは稼げるというこういう時代だった。今そういったような労働環境、労働市場というのは日本にはなかなか無いのです。

こうした状況を考えますと、生徒たちに対して国のためにあるいは国民のためにも稼いでくれるような人間を育成しなければならない、何よりもノブレスオブリージュと気概を持った人材を育成することも必要なのです。高校時代にその生徒の能力によってみんな違うわけですよ。その資質にあった学力といいますか生活能力というかそれをつけさせる必要がある。

例えば実学に近いと思われる情報という教科を一生懸命やる。それを必修2時間ではなく専門学校に匹敵するくらい履修する。そういう学校もあっていいでしょう。あるいは情報を履修しなくても物理の基礎理論をやるという学校もあっていいでしょう。今の学習指導要領の形で一律に高校課程の3年間を画一的に強制するやり方には疑問があります。私は、大学における教養課程が非常に薄くなった現在では高校においてカリキュラムを多様化して大学の教養課程の内容もやるしかないと思っています。

そして3番目として、私学教員の裁量労働制ということが非常に大事であると実は思っているわけです。これは大学の先生というのはホワイトカラーエグゼンプションで認められているわけです。ところが中高の教員というのは、これは認められていません。公立は4%の調整手当で済んでいるという状態になっていますが私学の場合には調整手当では解決できないのです。しかしながら教員というプライドからすればただ時間から時間ということではなくて子どもたちとのかかわりを尊重されている職場を維持していくということの方が大切であると思うのです。そういう中では私は中高の私学の教員に対してもそういう裁量労働制、ホワイトカラーエグゼンプションが認められるようになるべきだと。大体サラリーマン教師というのが保護者、

そして何より生徒たちから嫌われるし馬鹿にされます。サラリーマン教師というのは時間に来て時間に帰る。そうではなくて自分の子どものためにそういう時は惜しんでやってください。こういう形が一般的な願いでもあるわけです。そういうことを考えるとわれわれは工場労働者ではなく高度な専門知識をもった専門職であるという気持ちがありますから、裁量労働制というのが適用されて初めて私立の今中高教員は社会的なステータスが上がると思っています。今の状態というのは工場労働者と同じくらいのレベルにおかれていると思います。ですからこれは変えるべきだろうなと思っていますところ。そういったこの三つのところを今目標にしているわけです。

次が二番目のことになります。私学の独自性ということをよくいわれます。私学の独自性。その私学の独自性というのは、何をもって独自性というかということ、公立学校との相対的な関係でこの独立性が決まっています。ですから例えば日本の公立の学校では宗教教育ができません。ところがドイツなどは公立で宗教教育をすでに認めたりもしているのです。それは現代社会においてはドイツにおいても若者たちの間で教会離れをしている人が多いです。ですからやはり宗教、道徳、これを必須でやろうということで宗教教育を認めています。そうするとドイツにおいては宗教教育というのは私学の独自性にならないのです。日本において道徳に代えて宗教を教えるというのは独自性として今も認められており社会に認知されているわけです。

ところがそうした中で中高一貫教育あるいは男女別学、そういったことに関してもこれは私学の独自性でした。ところが公立も中高一貫校を開設した。しかも無償で作っている。われわれ私学が作り上げたものを真似している。そういう部分があるではないですか。

あるいは民間人校長。いい例が杉並区の和田中学校です。夜スベと称してサピックスと連携して塾を校内でやっている。現場の先生は馬鹿にされているようなものです。さらにそのあとまた次に来た校長先生も前任者と同じリクルートからです。杉並区の教育委員会はリクルートの植民地ではないかと思ってしまう。このように考えてみますと私学の独自性、これは公立と相対で決まるわけです。私学の独自性であった中高一貫校が公立で開設される、あるいは昨日の全体会で報告にあった鹿児島県の男子中学校、公立で男子校というのが出てきているわけです。男女別学ということは一つの私学の独自性ですということが薄れてしまう。そのようになってきます。

そういった中で私たちがどうやってこの私学の独立性を担保していくか、確保していくかということが非常に重要なことになります。しかしながらわれわれにとって一番の救いは何かということ、公立学校の場合には教育内容が必ずその時々政権によって左右する。これは公立の一番の弱みに当たります。私学の場合というのは建学の精神があり、それがイコール独自性につながってくる。時々ポピュリズムにぶれないということなのです。しかしながら変わらないことがいいのだということだけではだめなのです。その時代の状況を高度な見識から検証し変えるべきことは変える。変えないことは変えないということではないのかというふうに思います。私学の独自性に関していえば、これは公立に対する相対的な概念だということをわれわれは心

の片隅に絶えず留めておかねばならないことです。

私学の独自性というのは私立学校法においては私学の特性にこういう規定が入っています。国及び市の公共団体は私学の自主性を尊重する義務もある。このように規定されているのです。私学の独自性は法的にも保証されている。しかし、われわれ私学というのは補助金ももらい存在する。補助金をもらうのであればその存在は日本の国民にとってどういう意味でプラスであるということであるかということも重要になってくるわけです。世界人権宣言の第26条の第3項にこのように書かれています。

「親は子に与える教育の種類を選択する優先的権利を譲る。」

これは公立の教育を選ぶのか、私立の教育を選ぶのか、このどちらかを選ぶ。これが保証されているということが民主主義国家として大事だということがこの世界人権宣言にうたわれているわけです。これは民主主義国家の場合には公立学校と私立というのは存在して当たり前だという意味をいっているわけです。時々政権の力で国が一つの方向性に偏ってしまうことも想定されますし、その国が政権とともに崩壊してしまうこともあるわけです。そうした場合にも備えて違う形で教育をする機関が存在することは実は国を救うことでもあるということにつながるわけです。そういった意味での私学の存在価値というのは非常に大きなものになるのではないかと思うわけです。

そしてヨーロッパなどでは、公立補完型の私学というものは残念ながら原則的には存在していません。今、日本においてもなかなか公立補完型ということだけでは私学は生き残っていくことができない時代になってきています。これはやはり少子化の影響ということも非常に大になります。しかし、その中でも私学の枠をきちんと残して私学がそれぞれの各都道府県、地域に存在するというこの意味というのは何かいうと、先にも述べましたがその時々政権の方向性、これに影響されない教育機関があるということが国民にとって大きなプラスでもあるし、私たちが補助金を受けるのはそういったことだということです。

公立学校の宿命。これは教育の機会検討という原則があります。そして同時にナショナルミニマムの保証ということがあります。ナショナルミニマムの保証というのは何かということ、公立の小学校や中学校、義務教育まで行けば日本全国、日本人として言葉が通じるし、お店でお金が見える、こういうことができる。公立学校が寄って建っている基本原理というのは何かということ、平等と社会的統合の原理なのです。国民が平等に教育を受ける。その受ける教育によって、この日本という国は社会的に統合されるわけです。それを第一に考えるのは公立学校の第一の役割です。ですから公立学校の基本原理は平等と社会的統合。これが公立学校の主たるところであります。

それに対して私学というのは、自由と社会的多様性の原理なのです。これが私学と公立の違いです。公立学校というのは平等と社会的統合の原理。私学というのは自由と社会的多様性の原理ということになっています。これがやはり私学にとって必要なことであると私は思っています。公立との違い、われわれは自由と社会的多様性です。社会的多様性を求められるというのは私学の一つになってしまっている。やはりその中でいろいろな形で、私学というも

のが存在するということが大事なのです。ですからスポーツだけの私学が残る。あるいは進学だけでの私学が残る。それではいけないのです。それぞれのいろいろな私学があって、それが発展している。そのことによって本来国家として教育に求めるものの意味というのは達成されるのだということです。そういった形で私学の独自性、これが担保されて今申しあげた、自由、そして多様性というものが実現されるということを申しあげておきたいと思います。

やはり今までの教育行政を振り返っても週5日制、ゆとり教育がだんだんということを振り返って見れば明らかに分かるわけです。週5日制、あれだけ週5日制をやらなければおかしいとさえマスコミが報道し、さらに地方都市では強制的に私学を週5日制に移行させたりもしました。現在どうですか。公立学校でも建前が週5日制ですが、実質週6日、塾みたいなことをやっている。

ゆとり教育、これは何だったんだ。今は、どんどん教科書が分厚くなっていく。実にそのときどきの政権の意向で方向性で決まってしまうということがあるのです。

例えば高校では情報が必修です。情報が必修であることは私は悪いとはいいませんが、あの必修になった時、中教審の委員会に NEC の関本会長さんが入っていた。そうしたら情報が必修になる。その時に合わせて各学校にはコンピューター室が補助金によって整備されていくわけです。あるいは家庭科必修。あれは ILO の条約批准の問題もありました。また、同時に生徒も減ってきて女性の教員が多い家庭科の先生があまる。高校などでは日教組構成員の中で家庭科の女性の先生の比率が非常に高いのです。そういうこともあって、家庭科が必修になっている。絶えずそういった政治的な中に日本の教育というものが作られている。そしてそれに対して私学も合わせて動かされる。

しかしわれわれはそれとは別な形でもって自由と多様性を守り続けていくということが日本の国家の中で大事なことでありと思っています。これが日本におけるわれわれ私学の立つ位置ではないかというように思います。

次に2つ目に入ります。私どもの学校は、良い悪いなどを別にして進学校というカテゴリーに入る学校です。ですからわかりやすくいうと、私は校長ではありますが一方で理事長という経営者としての立場として職員を抱えています。だから校長として生徒の教育にも責任を持つと同時に、教職員に対してそれなりに満足するだけの給料を持たせて返さないとならない。わが校で働いてくださる先生たちの後ろには奥さんがいて、お子さんもいるわけです。自慢話もさせてください。かつて私は50周年の時に、うちの教職員をハワイに連れていきました。家族も連れて行きました。その時の写真は今でも校長室に飾ってあります。ああ、わが校の教職員の後ろにはこれだけの家族がいるんだな。こういうふうに思うと身が引き締まる思いがあります。まあ50周年だからそれはある程度大盤振る舞いをしたのですが、やはりそれも細工して奥さんを連れていかないで一人で行く教職員に対しては海側で食事も付けて出します。奥さんを連れていった場合には海側じゃなくて、ハワイの山の部屋で一回の全員のパーティーの食事代であとは自分でやってください。家族も連れて参加する場合にはそれ相應のやり方をしているわけです。

そして何よりも目の前にいる生徒たちの事です。生徒た

ちは、それぞれの希望がありそれをかなえてあげなければいけないということです。私どもの学校に入学する子どもたちは小学校4年、5年、6年と塾に通って受験をして入ってきた。やはりその生徒たちを卒業まできちんと面倒を見るというのは、これは学校としての責務だと思っています。ですから私は365日、来年東大に何人入るか、除夜の鐘が鳴って、元旦の朝にお風呂に入っている、今年は何人だなというも考えています。それは分かりやすくいうと、今年の手形を落とせるかな。3月10日というのは手形が回ってくる日です。これを落とせなかったらだめなのです。その数字がずっと一年続いてしまう。まさに3月10日は私にとって手形が回ってくる日です。これを落とせなかったら1年間その数字がついてくる。これは非常に重要です。あとで話しますが、校舎の全面的な建て替えをやっています。来年は授業料を上げなければなりません。返済の原資について手当できているだけではだめです。減価償却や基本組入が膨れあがりますから収支差が赤字になるわけで、健全な経営状態とはいえなくなるわけです。返済能力はあるかもしれないけれども、赤字である、これはやはり良くないわけでどうしても授業料を上げなければならなくなります。よくできているものだなと思いました。単純に返済能力があるだけではなく、財務体質が健全になるようにどうしても授業料を上げなければいけない。ですから、この一学期は各学年の保護者会の度に私が授業料値上げのお願いをするわけです。授業料値上げですから保護者の皆さんを前に私は直立不動で頭を下げてお願いをする。横に担任が座っている。理事長校長が直立不動でもってお願いしますと頭下げているわけです。民間の会社であれば、社長が直立不動だったらすぐに、はっと立って挨拶する。まあ学校はしないです。しないことはだめだと思うのか、するのがいいと思うのかこれは微妙なのです。先生が理事長や校長に合わせてお辞儀をしないのを見てある程度安心する親も結構いる。われわれの学校の保護者の知的レベルが割に高い。そういう人たちというのは割とそういうことを好む。私と一緒にこう頭を下げる姿を見ると、逆に不安に思う。これ微妙なところですが、学校も社会も。値上げに際してはいろいろ工夫をして、月払いだった授業料を来年から年3回払いにした。年に3回払いにするといくら上がったか分かりづらいのです。月々いくらくとするとすごく見えてしまうのです。「月いくらか、高いな」。ですからこれを3回払いにすると衝撃度は薄まるものです。

私の学校についても話をさせていただきたいと思います。

私の学校はキリスト教、カトリックの学校でその経営母体は修道会がありますが、高齢化が進みさらには修道士が減少しその数は8名にまで減少してしまいました。そんな事情もあり卒業生で信徒でもある私が理事長と校長を兼務しています。

本校は昭和33年に創立しました。初代のブルーノ・カロン校長先生は32歳で校長になり非常に頑張って創立当初から進学校を目指したのです。

しかしながら皮肉なことに初代のカロン先生と残念なことに40代前半で交通事故を起こしてしまい、その責任を取られ辞められるわけです。そのあと私どもの学校では失われた十年になってしまったのです。はっきりいえば、東大

合格者の数もずっと延びませんでした。校内で労使の対立などもあり、中学校と高等学校を分けるのです。なぜそのようにするかといえばポストが倍になるわけです。副校長2人、各分掌それぞれ部長が2人というような形になるわけです。さらには学校の移転問題まで持ちあがりました。昭和50年代前半から、後半までというのは非常に土地の値段が上がっている。私どもの学校は横浜の山手ですから、かなりの高価な土地です。そういった時に安価な調整区域に移転して差額で新しい校舎まで建築しようという構想なのです。私どもの姉妹校は成功しています。セント・メリーズ・インターナショナル・スクールというのは品川区の高輪にあったのですが、これを瀬田（世田谷区）に移転させたのです。柳の下にもう一匹ドジョウはいないからということでその方向へ動くわけです。だから私なんかも日曜日の度に、横浜市内の調整区域をいろいろと案内されて連れまわされました。そうした状況下で理事会の中でも現状維持派と移転派とに別れるのです。私自身は卒業生ですから、移転しないで残るべきということが基本的な考えでした。

ですから中高分離の時代はどうであったかということ、何を売り物にしたかということと生活指導をきちっとしますよということを打ち出すのです。ですから未だに本校のことを称してブログなどでは聖光学園は同じ院でも受験少年院というように書かれることもあるわけです。受験少年院では少なくともなかった。私が入学したころはきちんと規律を守らせるということはもちろんであったが自由な開放的な面も随分とあったと感じていました。本校で最も有名な人は小田和正さんです。小田和正さんは私よりも8歳上です。彼は高校2年生の時、学園祭でオフコースを結成して、そしてデビューしているわけです。東北大学に進学しました。小田和正さんは横浜市の金沢区の薬局の息子だったのですが、金沢区で中高時代を送ったのでは、あの歌詞も書けなかった。やはり横浜山手の地で青春時代を過ごしたことが詩的境涯の形成につながったと思っています。

初代校長が突然辞任せざるを得なくなって失われた十年という時代に入り込んでしまったのです。やがて、移転問題も結果的には中止となって私の前の校長が就任する。

そうした中で私は事務長になるように修道会から頼まれました。なぜ頼まれたかということと移転を辞めたということとで校舎の一部新築と改修を行いました。結果的には借金を13億円くらいしました。修道士たちだから、なかなかお金のことがわからないし外部から事務長を見つけることも難しい。それまで外部から事務長を呼ぶと本校の場合には教員とどうしてもぶつかってしまうということがありました。

そこで修道会の管区長様から私に、「おまえもさんざん移転に反対したんだ。借金の返済をおまえは責任ととってやりなさい」ということで修道会から校長に口説かれたのです。私は大体便利に仕事はすぐ引き受けることを基本にしていますが、ずっと教員でいましたから、この件だけは即答は避けました。家に帰って相談しました。女房は「どうでもいいわ」と、うちの母は、「えっ明日からおまえはさんと呼ばれるの」。分かりますか、先生ではなくて事務長になるとさんなのです。これは学校という一種特殊な環境の中の階級的序列を示すものなのでしょう。最終的には私は事務長になることを引き受けてさらには法人事務局長もや

るわけです。6年間、事務管理をしてそのあと6年間教頭をして48歳の時に校長になりました。

私が事務長、教頭、校長と学校の中で心がけていることや工夫したことを皆さまに話しておきたいと思います。例えば授業を時間通りきちっとやってほしいというのは皆さんあると思います。私どもの学校は実は休憩時間の終わる3分前に予鈴を鳴らす。1時間目と2時間目の間に、2時間目と3時間目の間に予鈴を鳴らします。3分前に鳴らす。もう授業に行けと、そうすると始業のチャイムと同時に授業を始められる。これは自然と身につくので効果があると思います。私たちの学校は印刷は事務の職員で専門の担当者をおいています。中間試験とか期末試験、それは必ず教務が問題を試験実施の1週間から前に集めて印刷室で印刷させます。案外、教員がやるとだらしなくて、試験当時の朝に印刷するのです。任せっぱなしにしているとどういう形式で問題を出してどこまでそれを教えなければいけないのか、計画性に欠けるのです。

わが校の印刷室の設備はちょっとした町の印刷所よりも、充実しています。そしてテキストは全ての先生一人ひとりで作成しています。教科では絶対に作らせない。学校の先生というのは自分のものをテキストに、本にしたい。本にするとその先生は少なくとも一学期分とか、前期分とか、自分が体系的に計画を立て教える内容を鳥瞰することになるわけです。それがやはり大事ということになります。よりよい授業ができる。教科で誰かが作ると一生懸命にやる人がいて、さらに一生懸命にやる人はそれ以上のまたプリント作ります。反対に適当に手を抜く先生はただそれを使うだけと、そういうふうになってしまう。これが無駄だなと私は思います。印刷室には数千万の単位の資金を投入しましたが、よかったと思っています。

それから昔、日本私学教育研究所の、以前私は学校事務研修会の専門委員をやっていたということがあります。その時に OCR をいかに活用できるかということで、アンケートの種類とかいろんなものは全て OCR で読み取って処理しています。OCR でやる場合に一番壁になったのは何なのかということと模擬試験の用紙みたいにマークシートの紙を高い金を出して買うという学校は駄目なのです。それを普通の印刷用紙でもってできるようにする。ということで、調べていくとあったのです。そういう機械が。いわゆるマークシートリーダー自体は100万円近くしました。それでアンケート、生徒の申込事項登録の処理をすることができるようになりました。

そのほか経理の事務でもってコンピューターで会計業務を行う。そういう時になるべく定型仕分けを入れさせる。ただの電気代、ガス代。月々でもって金額は違うけれども登録させておく。金額だけを訂正する。借方、貸方をコンピューターで打ち直して金額を打つと手間数が大変です。

事務職員にいうのは、学校の中の事務職員というのはどうしてもいろいろなことをしなければならぬ。それだけが一つの仕事ではない。多くの事務職員というのは自分が経理だと思っている。会計だと思っている。これは多いです。特にこの中でも金融機関から来られた方というのは事務長という名が付くかもしれないけれども、経理部書からきたりする。公立の学校から来た事務職員の方というのは割と自分が営繕職員の柱だと思っている人が多い。学校と

いうのはそうではないのです。

私学の場合は町の大きな会社から来たりとか、銀行から来られた方が多いから、意外と盲点となっているのは経理関係とかはなんとかできるけれども、学校の施設とか設備については割とご存じない。でも何事もやはり興味を持てるかどうかであると思います。

昔、私学新聞に載っていて私どもの学校が紹介されて、光葉スチールというロッカー会社の宣伝で使っていましたけれども、私はその会社のロッカーというのはすごくいいなという部分があるのです。それはなぜかというとコクヨとかプラスとかそういうところのロッカーというのは、点付けの溶接がしていない。ですから蹴られるとすぐにへこんでしまう。そういった部分がきちっと採用されている。それから簡単にドアが外れる。すると蹴られた時にすぐ予備のドアがあればできる。こういうような部分がある。施設の装備や備品についての関心がどれくらいお持ちになるかということもあるのです。大分改善されましたけれども、例えばコピー機やFAX、ある会社のFAXは意外と両角がいっぱいまで写らなかったりする。天地がある程度ないとだめで、そういう欠点などがあったりする。そういったような部分に対してどれだけの関心を持てるかが結構大きいと思います。あとはやはりどのような形でもって紙をいくらかで買うとか、消費税が上がる時にある程度買い置きをするとか、本校はここぞとばかりに紙を買って今でも使い切れなくらいペーパータオルとトイレットペーパーと印刷用紙が積んである。学校という在庫管理にそれほどシビアにならなくてもいいのです。それが企業とは違うところになります。

アウトソーシングもいいのですが、学校の場合というのはアウトソーシングの方が高くつく場合もあります。民間だとアウトソーシングの方が安いと思われるかもしれませんが、学校の場合というのはよくよく研究してみるとシルバーセンターとかあるいは近所の人だとかを雇った場合は安い場合もある。その都度に比較してやはり学校の中できちんと考えていくということが非常に大事と私は思います。

よく、おもてなし、このあたもディズニーランドのおもてなしの講演がありますが、このおもてなしとか心遣いとか、そういったようなものは、目に見えてあるものと、それから目に見えなくて分かるものと両方あると思います。

9月に日本一のおもてなしといわれる旅館に宿泊する機会がありました。すごいおもてなしで、一番は何かという、部屋の係の人が朝から帰るまでずっと同じ人なのです。これで話し相手もしてくれるし、すごく夫婦で行って楽しかったなと思いました。帰りも見送ってくれる。遊覧のバスも予約してあったのですが、ちゃんと座席も予約しておいてくれました。相手は心遣いがあるなと思ったのです。なかなか分かりづらいところのおもてなしというのは何かというと、会席でお料理が出るのですが、夏ですから、お椀に霧が吹き付けてあった。これはなかなか気が付きません。たまたま私の家内がお茶をやるので分かりました。普通だとなぜ水滴がついているのですかと終わってしまうのですが、これは作法なのです。あとは朝玄関に行ったら前の日と花が違っていた。お客さんが帰ったあとに花を変

えるとか移動するのではなく、居る間に変えているから、同じお客さんでも昨日と翌日では違う。そういった部分で申しあげると私どもの学校は先生に対して親が面談に来た時に事務職員はすべて面談室まで案内するように指示しています。もちろん事務室のすぐ横にあるのです。よくあるのは何年何組の面談は、面談は何々の教室と張ってある。その方が楽でいいのかもしれないけれども、面談にくる多くの親というのは1時間前後、あるいは1時間半、2時間かけて学校まで来る。そうした時にやはり面談をする場所まで職員が案内する。そういう中で会話もあるわけです。そして徐々にそこに事務職員であつても保護者との間に有機的な結びつきができるということではないかなと思います。それから電話の受け答え。これが一番学校の事務の中では大事なことだと思います。レクサス電話をすると登録してありますから、誰々さんですということが出ます。あるいは食べログとかあるいは宿、点数が出て大体点数の高い順に予約しようかなと思って、その時に必ず電話をする。その電話の受け答えでもってどうするかを決めるではないですか。

ですからこの部分での接遇というのは意外に大事なのです。そういった意味での印象というのは私学にとっても非常に大事だと思っています。

最後になりますが、私どもの学校の校舎の建て替えについてお話しします。創立58年を迎えて、今全ての校舎を壊して新しくしている。いろいろな経緯がありました。それができたということは、これはご縁、タイミングなんでしょう。従来まで野球場のセンターの中に飛び出て3軒の家が建っていたのです。それを徐々に1900年代の終わりから2008年までほぼ10年がかりで買っていったのです。そして買収の見通しが立ったので新築をしようということでやりました。ですから2010年の秋に入札ができたわけです。2010年の入札なので、リーマンショックのあとで非常に入札価格が安かったのです。ですから、今だと、東日本大震災、東京オリンピックなどで建築単価が高騰してしまいましたので全校舎建て替えというのはできなかったと思います。これはある部分で運だったかなと思っています。そうした中で数字的なことは別として何をこのプロジェクトの中で大事にしたかということですが、その部分ではカトリック校としての象徴的な事項として、校舎に鐘楼を設けて正午と夕方5時に鳴らしています。

私学だからできることとは文化を創造するということで。この観点から1500名収容の音楽ホールを作りました。このホールは横浜市内でも、県立音楽堂よりも残響があります。音楽ホールとしては一流のピアニストが来て演奏できるようにスタインウェイフルコンのピアノも備えました。そしてもう一つ、海が見えるということにこだわったのです。私どもの学校の校歌は海が見えている情景を歌っていますので、海が見えなければいけない。ということでこれを大事にしました。そしてトータルで作りましたので、採光と風通しということにもこだわったわけです。そして、スポーツに関しましては全て人工芝にして、公式戦ができる野球、サッカー。体育館は天井が高くないと公式戦できません。天井が高いということは金がかかるということですが今後のことも考えて実現させました。近隣とも共生できるようにということで人工芝にもしました。

実際にできるとやはり私学というのは施設がいいということも大事だなということも感じました。私どもの学校は神奈川県というのは東京に流出する生徒数が非常に多いのです。みんな東京にとられてしまう。だから東京私学はこんなに豊かになって、高輪プリンスホテルで大会ができるのです。横浜、神奈川ではできない。

でも私どもの学校は東京からお客さんが呼べる学校でもあるわけです。やはりそうした時に生徒たちに聞くとどうなのか、スタインウェイのピアノがあるから受けました、来ました。あるいは人工芝だから来ました。

割と子どもたちはそれなりに施設を見ているんだなと思いました。では本校はどこをマーケットに置いているか。このマーケットということは非常に大事で、私はかつて、10年前は港北ニュータウン、横浜市の中では港北ニュータウンを制するものは変わる。神奈川私学を制する、こういつていました。今はそれが少し変わってきていると思っています。港北ニュータウンは高学歴で地方から上京して成功した人が多い街です。専業主婦の割合が多くのお母さんたちがスキルがあり、かつて有名会社に勤めていたキャリアがあっても都心に気軽に通勤するには遠くて働きづらいのです。ですから専業主婦としてパートや扶養控除の範囲でしか働かない。ですから最近では横浜市の公立中高一貫校へという流れが強まっているような傾向があります。それに反して武蔵小杉と品川この近辺の居住者たちのニーズに応えられるということが大事なことだと思っています。共通は何かというと、夫婦でもってキャリアなのです。この人たちも小学校の時には公立小学校に入れる。私学に入れない。私学の小学校のあり方を変えなければだめだと思うのです。というのは私学の小学校というのは母親が家にいるというのを前提にした。専業主婦であるということを前提にした仕組みです。しかし、私立の小学校に通わせようとしても、お母さんは働いているのです。結果として学童保育があるから公立にいれる。そしてもう懲りたというのが本音です。同じように平等にPTAの役員が回ってくるとか、保護者会は公務員である先生に合わせて平日にある。働いているお母さんたちに決して公立の小学校はやさしくない。そうすると4年生、5年生になると、塾に通わせて中学入試をさせたい。こういうところにターゲットを絞ることの方がよいだろうというのが一つの考え方です。この層の保護者の方たちは、いろいろな経験をさせてきてくれることを喜ぶわけです。ですから私どもの学校は翌年度の行事予定表は必ず3月の頭に配ります。これは公立は絶対にできないことですから、私学は絶対そこで勝たないとだめです。公立は4月になって異動があって校長も含めて変わってしまうわけです。翌年度の予定を3月に示した。それだけでも親は喜ぶですね。やはりそうした工夫が必要であると私は思っています。

私自身は、もう時間がなくなりましたので、少しまとめたいと思いますが、校長になる前は事務長やっていました。大変良かったと思います。教頭もやりました。大変良かったです。事務長をやったことによって事務職員に対して指示がいろいろできるわけです。よくいろいろな学校では事務職員は事務長のいうことは聞けど校長のいうこと聞かないとかあるわけです。学校の先生を動かすというのは結構大変なのです。「これ今やってくれよ」といった場合、先生

というのは授業があるわけです。授業が終わったら。事務職員だと「これをやってほしい」といったらやってくれる。そういう部分の力、パワー、それをバックヤードとして私が持っているということは非常にプラスになってくると思っています。そして私は校長になって3つのことを主に学校の教育方針としている。

第一は、枕詞で聖光の教育を語るのはやめよう。聖光は進学校だからクラブ活動を二の次にしている。聖光は進学校だから宗教教育を頑張りたい。そういうことでもって傷をなめあうようなことで教育を語り合うのは辞めようではないか、ということで、例えばクラブなども本校は週2回ということから離れて、4回なり5回なりやらせている。水曜日はクラブ活動はなし。ただクラブ性善説だけがまかり通るような学校では将来はないと思っています。

第二は開かれた学校づくりをしようということです。今、学校の中のわれわれだけではできないということで、外から今、聖光塾とか選択芸術講座とかで、いろいろな人を呼んできて教育を行うということをしています。

第三は何かというと、学校に縛り付けない教育ということです。ですから本校の中学生でゴルフをやっている生徒いる。ゴルフも選手権があって、地方に遠征があります。本校はゴルフ部がありませんから、「その大会に出るのですけど行っていいですか」と問われれば、「行きなさい」と答えます。学校これは公欠で良いのです。

あるいは、本校は、何年留学に行っても戻ってくる時は原則元の学年に戻します。1年落とすとか、あるいは行って2年で戻ってこなければ籍を抜いてしまうとか、そういうことはしていません。そういう制度をお持ちの学校がまだあるかもしれない。実は有名男子進学校というのは結構そうした扱いをしているのです。

学校に縛り付けないというのは、学校という狭い範囲だけでなく無理なのです。Googleの検索ができてから変わったのです。

確かに昨日ご講演いただいた三宅先生の話ではないですが、知識というか、そういうものは検索すれば出てきます。それに対して現在はどうやって物事を考えて価値観を自分なりに見ていくことができるかという時代が変わっている。そういうふうに私は思っています。ですから今は学校に縛り付けない教育ということを考えています。

さらに最近思うことなのですが、やはり英語が話せるようになるのは大事だと思います。それは私自身もつくづく理解しています。それはなぜかというと本校は外人がずっと経営をしていました。分かりやすくいうとついこの間までは、私は教頭もしていましたから、立場上は植民地の奴隷頭だったのです。外人が、日本語で使って仕事をしなければならぬ場所です。私たちの学校では重用されるのは国語の先生でした。外国人校長のスピーチや文章を作るといことでは国語の先生にどうしても頼るわけです。これからはグローバルな社会となり上司に外国人が来ることになりますがそこでは日本語ではなく英語が使われるわけです。また、日本の経済力が縮小すると外国から相手にされなくなる。今までは経済的な規模が大きかったのでわざわざ相手方から聞いてくれることが多かったのです。これからは逆に自分からアピールするしかない状況になってしまうわけです。

私どもの学校では急速にこの英語教育への取り組みというものをしています。現状では男子の進学校では取り組みが遅れていると感じています。私は、急速にやれという方針を打ち出して加速度的にさせているところです。これは必ずや将来において本校で学んだ子どもたちにとってプラスになるからだというふうに思っています。

教育というのはそのときどきの流れがありますが根本において究極において大事なことというのは何なのかなという **face to face** で子どもたちにぬくもりを伝えることだと思っています。

それが教育の原点なのです。マザーテレサは自分のシスターたちがインドのカルカットで町にスープ配りをする時に必ず手を添えて言葉をかけるように指示しました。「元気ですか」、「大丈夫ですよ。」そのようにして言葉をかけるようにすること大切にしました。ただスープボールを渡すだけではだめですよっていうわけであります。やはりそのことは、私は一つの人と人とのふれあいの真実であるし、そして教育の原点だと思います。

最後にこんなお話を紹介して終えたいと思います。

ある先生の話です。その先生が5年生の担任になった時、一人服装が不潔でだらしがなく、どうしても好きになれない少年がいました。中間記録に先生は少年の悪いところばかりを記入するようになっていました。ある時少年の1年生の時からの記録が目にとまりました。ほがらかで友達が好きで人にも親切、勉強もよくでき将来楽しみとある。間違いない。他の子どもの記憶に違いないと先生はそう思った。2年生になると母親が病気で世話をしなければならず、ときどき遅刻すると書かれていた。3年生では母親の病気が悪くなり、疲れていて教室で居眠りをする。3年生の後半の記録では母親が死亡。希望を失い悲しんでいる。4年生になると父は生きる意欲を失いアルコール依存症となり、子どもにも暴力を振るう。先生の胸に激しい涙がしたたる。だめだと決めつけていた子が突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に立ち現れてきた。先生にとって目を開かれた瞬間である。放課後、先生は少年に声をかけた。先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない。分からないところは教えてあげるから。少年は初めて笑顔を見せた。それから毎日少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手を上げた時、先生に大きな喜びが沸き起こった。少年は自信を持ち始めていた。クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで開けてみると香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生はその一滴を付け夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で一人本を読んでいた少年

は気が付くと飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。ああお母さんのにおい。今日は素敵なクリスマスだ。6年生では先生は少年の担任ではなくなった。卒業の時先生に少年から1枚のカードが届いた。先生は僕のお母さんのようです。そして今まで出会った中で、一番素晴らしい先生でした。それから6年。またカードが届いた。明日は高校の卒業式です。僕は5年生で先生に担当してもらってとても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができます。10年を得てまたカードが来た。そこには先生と出会えたことへの感謝と、父親に叩かれた経験があるから患者の痛みは分かる医者になれると示されこう締めくくられていた。僕はよく5年生の時の先生をよく思い出します。あのままだめになってしまう僕を救ってくださった先生を神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は5年生の時、担任してくださった先生です。そして1年届いたカードには結婚式の招待状でした。母の席に座ってくださいと一行書き添えられていた。こういう話であります。

教員、事務職員という立場の違いはあるものの私たちは日々子どもたちの前に立ち、そして向き合っています。私は学校の中で教員に事務方といういい方はさせない。だから事務職員にも自分から事務方というなど。政治家だったら裏方というような位置づけで事務方でいいかもしれないけれども、学校という場でもって事務方はいないだろう。教員にも選挙をやって落ちてしまうのであれば、事務職員を事務方と呼んでもいいけど、そうではないだろう。やはり学校というのは事務の皆さんと教員、この両者が手を携えて作りあげていく。そして、そういった中でも皆さま方それぞれの心配り、対応、そうした配慮によって子どもたちとも、あるいは保護者とも絆が作られていくのです。よく私どもの学校も校舎を新しくしたので、昔卒業した保護者たちが来ます。そうすると大体、保護者の皆さんっていうのは受付の職員などをよく知っていますから話をしてくれるのです。懐かしがって。大都会の中の私学、それはふるさとを失った都会人のふるさto になっていかなければならない。そんなふうに思っております。そうした時に私学が1校だけで何か出来るかという、できません。しかし、今もいったように多様性の中で私学は個として存在することが大事です。しかし大きな力となって、この国の将来を担う子どもたちを育てるためにはネットワークを組んで私学として新たなる創造をしていく必要があると思います。そして時代を終えてわれわれの思いがつながっていくということが大切ではないでしょうか。

大変まとまりませんでしたが、これで終えたいと思います。ご静聴誠にありがとうございました。

講演

「東京ディズニーリゾートに見る 『おもてなしの極意』」

株式会社オリエンタルランド 元理事 竹内 昭



講師紹介（平美佐子・運営委員長）

竹内先生は、山梨県の公立大学法人都留文科大学を卒業後、京成百貨店入社、1980年にオリエンタルランドに入社され、ショッピングセンター支配人、ディズニー研修、商品部、人事部、運営部などを担当され、その後、関係会社に出向し、舞浜リゾートライン代表取締役社長に就任されました。出向解除後は、理事兼営業部長に就任し、その後再び出向し、オーエルシー・キッチンテクノ代表取締役社長に就任されました。

その間、千葉県教育委員会高校改革委員会の副会長として、千葉県の高校にキャリア教育の導入を提案されました。

2011年にオリエンタルランドを退職された後、4社の教育・営業顧問をしながら、講演グループ「キャリア教育センター」を主宰され、月2回平均で全国で講演活動を行っています。

また、現在は2013年から株式会社シンコー警備保障の代表取締役社長をしており、講演、教育委員会とまさに三足のわらじと申しますか、三面六臂のご活躍をされています。

私は、大学を卒業し、京成電鉄の経営する百貨店に勤めました。最初の2年間は、日本橋高島屋で研修し、それから上野の京成百貨店がオープンしましたのでそこで約8年、延べ10年間勤めました。

オリエンタルランドという会社は、京成電鉄と三井不動産が主要な株主となって作った会社ですので、その関

係で10年経ってから、オリエンタルランドに移りました。私が移った頃は、社員が60人くらいしかいませんでした。それが現在では3万人になりました。私はサラリーマン生活を40年以上やっていますが、ディズニーと関わりをもったことで他の職業、他のサービス業ではなかなか手にすることができない大きなやりがい、深い充実感を得ることができたのです。その点で私は実に幸福な人間であったと今も深く感謝しています。

そういう中で、今日、私が皆さま方にディズニーのサービスに対してのお話をするわけですが、その前段として、ディズニーという会社、あるいはオリエンタルランドという会社をご説明差しあげたいと思います。この辺が分からないと、なぜディズニーはあのように教育に力を入れているのだろうか、なぜあのようにうまくいっているのだろうかということになりますので、そういう前段の話を生かしながら話を進めたいと思っています。

ディズニーという会社は、現在では世界で顧客満足、あるいは従業員満足やサービスに関して世界でもっとも成功している企業の一つだといわれています。ここ20年、30年の間を見ましても、ディズニーという会社は世界でサービスに対して非常に卓越した稀な会社であると評価されています。もともとディズニーという会社は、1928年にウォルト・ディズニーがミッキーマウスを作り、誕生させました。ちなみにウォルトは、1901年から1966年まで生きた人です。

1928年にミッキーマウスを誕生させ、それでアメリカの中ではウォルト・ディズニーという名前は信用のできる、あるいは、信頼性のある、安全な人物ということで、いろいろな良い評価を受けました。徐々にディズニーがやることに対しては、間違いはないとアメリカ国民が思うようになったわけです。

そういう中で、1955年にアメリカのカリフォルニアにディズニーランドを作りました。なぜウォルトは自分の名前を冠したディズニーランドを作ったかといいますと、ウォルトには2人の娘さんがいて、よく休みの日には娘さんを連れて近くの公園といいますが、遊園地遊びに行っていたそうです。

そうしましたら、遊園地が非常に汚く、従業員が着ているコスチューム(衣装)もだらしないくて、乗り物も面白くなく、自分はベンチに座ってただ子どもたちが遊ぶのを見ながらピーナツ食べているだけだった。自分はそう

いう遊園地ではないものを作りたいということで、自宅に帰り、奥さんに「俺はディズニーランドを作るぞ」という話をしたら、奥さんが「お父さんそんなのやめておきなさい」と。「遊園地なんていつも汚くて、面白なくて、魅力ないわよ」という話をされたそうです。

それに対してウォルトがいったのは、「だから僕は既存の遊園地ではなく全て真逆のものを作りたいのだ。いつもニコニコしている従業員と、清潔感のあふれた遊園地というようなものを作りたいのだ」といってその夢を実現して1955年にロスアンゼルス郊外にディズニーランドを作りました。

ディズニーランドを作ったときに、問題が発生しました。ディズニーランドを作りましたら、その周辺にディズニーの景観を汚すようなモーターがたくさんできたのです。アメリカは車社会です。同様に、さまざまな業者がディズニーを利用して儲けているというような話がウォルトの入ってきて非常に腹立たしく思い、外部に影響されないディズニーの世界を作りたいという夢を持って、1971年フロリダにウォルト・ディズニーワールドを作ったのです。

これは、簡単にいいますと、アメリカの東海岸にフロリダ半島ありますが、ここの敷地を秘密裏に買収しました。というのは、ディズニーが買い占めをやるという話が広まると、地価が上がるわけです。ですから、上がらないように、いろいろな人の名前を使って買占めをやりました。

この敷地というのはどのくらいかといいますと3,900万坪。ちなみに東京ディズニーリゾートは100万坪ですから39倍の大きさです。この敷地の6割くらいが今開発されています。残りの4割は国立公園になっています。つまり、開発ができない領域となっています。

この国立公園には、ワニが1万匹生息しています。元々ここは全体が湿地帯ですから、湿地帯を埋め立ててパークを作りました。私が現役のころ、フロリダに行った時によくいわれたのは、ここにバリュー航空というアメリカの低価格な航空会社がありました。その飛行機が落ちたのですが、助けに行けなかった。つまり、助ける手段がなかったのです。湿地帯ですからヘリコプターの止まる場所もない。ですから何人かは助かったと思われましたが、助けに行けなかったという話で、ワニの餌食になったのではないかという話でした。

リゾートでは外周を車で約1時間かかります。どのくらいの規模かといいますと、山手線の1.6倍から1.7倍といわれています。想像ですが、錦糸町から三鷹くらいの広さです。

その中には、東京ディズニーランドのような施設が4つあります。それ以外に同様な規模のウォーターパークが2つあります。6つのゴルフコース。TDLの20倍から40倍くらいの広さの湖が大、中、小合わせますと、20程あります。それ以外に、ホテルが、新宿が今約9500室ですが、それに対して約14倍、13万室の部屋数があります。

それもなかなかすぐには予約できません。3ヶ月から4ヶ月くらい前に予約を取らないと泊まれないという状況です。キャストは、7万人います。これは、数年前の記録ですから、今はもう少し施設もキャストも増えている

かもしれません。1日35万人のゲストが来るわけです。フロリダ半島はヨーロッパに近いですから、ヨーロッパが冬の寒い時にフロリダは暖かくたくさんの富裕者層が来るという状況です。

世界で今ディズニーランドは5カ所あります。1955年にカリフォルニア、1971年にウォルト・ディズニーワールド、1983年に東京ディズニーランド、1992年からユーロディズニーランド・パリ、2005年に香港がオープンしました。2015年に上海がオープン予定で、今作っています。日本に誘致する時非常に多大な問題がありました。一つは、ロイヤルティーの問題です。著作権です。いわゆる著作権の問題が引っかかりました。

ディズニーというのは、キャラクター商品を売ったり、音楽を作ったり、映画を作ったりしていますけれども、本来は著作権の会社です。ですから著作権で食べている会社です。著作権を含めてディズニーは売り上げが約7兆円です。為替の関係で日本円に換算しますと少し変わりますが、7兆円というと今は少し違うと思いますが、大体ソニー、パナソニックと同じくらいです。利益が7,000億、約10%になります。そのようなことで非常に高収益な会社です。

著作権の話に関しますと、1988年東京ディズニーランドがオープンして5年後くらいだと思いますが、島根県の松江の小学校で小学6年生が卒業記念ということで、プールの底にミッキーの絵を描いたのです。それが新聞に載って、その新聞をディズニーの関係者が見て、「これは消しなさい」という発言をしたわけです。

そうしましたら、松江の教育委員会は、「子どもがやったんだからいいじゃないか」というような答弁をしたのですけれども、ディズニーは頑として許さなかった。つまり、子どもだから正しくないことやっているというわけにいかないと。特に教育の世界では、小さい時から正しいことと間違ったことを見極めるというか、判断することを教えるのが教育ではないのかとあって、全部消させました。そのプールのミッキーの絵、プールの底の部分ですが、全部消させました。市民の方からは「無慈悲な、かわいそう」という発言もありましたが、実際に、著作権で食べている会社ですから、その著作権を侵害されていることに対してはイエスとはいわないのです。

実は、私の後輩もたくさんの人たちがディズニーに関する本を書き講演をやっています。掃除の神様とかアルバイトの使い方等いろいろ書いています。実は、著作権の問題があり、私どもは退職する時に誓約書を出すのです。退職した後に、ディズニーに関する話をして、いわゆる営業活動をやってお金を稼ぐといいますが、ミッキーを使って、キャッスルを使ってというような活動はしない。そういう誓約をして退職するわけです。

実は2年前に、私がオリエンタルランドを辞めてからですが、オリエンタルランドの法務関係の後輩が今の私の会社に来て、「竹内さん、講演をやっていますね」と。「どのようにやっているのですか」という調査・詰問の話になって、1時間くらい話しました。最終的に「竹内さんに関してオリエンタルランドは認めましょう」と。「ただし条件として大っぴらにやられては困ります。地味にやってください。くれぐれも派手にやらないでくだ

さい」といわれました。

そこで私がいったのは、「講演を認めるバッジを作ってくださいませんか」と。「そして、オリエンタルランド公認の専任講師にしてくれないか」と。「それは勘弁してください。そこまで会社は譲歩できない」と。今、一般的に講演をやっている方々は本を書いています。なぜ書いているかというと、オリエンタルランドとしがらみがないからです。しがらみがないということは、課長とかあるいは、係長の職位で途中で辞めた方々です。

ですから、会社とはそういう形で縁が切れている。私は定年までいましたし、理事という立場であったこともあり、経営の一端を担っていましたので、そういう人間が昔の会社を困らせるわけにはいかないということで、仕方なく私は自分でこれ(バッジ)を買って付けています。それくらい著作権に対してはうるさいのです。

オリエンタルランドという会社は、1960年に3人でスタートしました。専務と、それから総務部長と、事務員です。この3名でスタートしました。もともとは埋め立ての会社です。なぜ埋め立てかということ、当時ディズニーランドの上流に製紙会社があったのです。紙を作る製紙会社です。この工場から、工場の排液が流れて海が汚染されました。そのために、漁業とか、貝とか、のりとか、そういうものが全部できなくなりました。それで、この海を埋め立てて、たくさんの方々が楽しめるようなものを作ろうということになったわけです。

その埋め立ての仕事をするために、京成電鉄と三井不動産がオリエンタルランドという会社、OLC という会社を作って、埋め立てをしたのです。今いいましたように3名でスタートしました。漁業というのはご存じだと思いますけれど、漁業権があるのです。ですから、漁民の方は、そういう漁業権を持って仕事をしているわけです。

浦安の海も2つの漁業組合がありました。大体200から250くらいの漁民の方がいたといわれています。第1組合、第2組合を合わせてです。こういう方々の漁業権の放棄をしてもらわないと埋め立てができないということで、高橋さんという人が指名されました。

高橋さんという人は、東京大学を卒業してから、ガソリンスタンドを経営したりしましたが、40代後半までなかなか事業がうまくいかなかったようでした。なぜ高橋さんが指名されたかというと、一説によるとたまたま暇でブラブラしていたということと、大酒飲みだったということ。なぜ大酒飲みがいいのかというと、漁民の方々というのは結構お酒を飲むのです。そういう人たちと肌を突き合わせて交渉しないと話がうまくいかないということでお酒が大いに関係したのです。漁業権の放棄交渉は難題で2年ほどはかかると予想されましたが、高橋さんが指名されて、高橋さんは半年で漁業権交渉をまとめあげました。

漁業権を放棄してもらったということは、埋め立てができるということです。その漁業権を放棄してもらうまでに、相当飲んだそうです。面白いエピソードがあります。当時新入社員の給料が1万円の時に、月に80万円も飲んだのです。ということは、今の初任給が大体20万円としますと、毎月1,600万円ほど飲んだことになります。

それも東京の高級料亭に毎晩連れていってです。

ある時に、高橋さんが山のような領収書を抱えて総務部長に「これにハンコもらってきてくれ」と総務部長にいうと、「こんなたくさんの領収書に、ハンコなんてもらえませんか」と。「自分で行ってきてください」といわれたのです。その時に、高橋さんは、「よし分かった。じゃあ俺が社長のところに行って話をするから」といって、社長のところに行ったのです。社長室に入る時に、そのドアの前で、もし「高橋君何でこんなに飲んだのだ」というような叱責をされたらその場ですぐ辞めよう、辞めてやるという覚悟で入ったそうです。そうしたらその時の川崎社長は、「高橋君。どんどんやってくれたまえ」といって、淡々とサイン(ハンコ)をしてくれたそうです。

それで高橋さんは、「男意気に感ず」と、以前にもまして一生懸命埋め立てをやったそうです。埋め立てが終わったら、もう自分は関係ないと思っていたのですが、終了後にディズニーを作るという話になり、そちらの仕事もやってくれないかといわれ、結局埋め立て、交渉、ディズニーと仕事を続けることになりました。時代は、そしてディズニーは高橋さんを必要としたわけです。その高橋さんが実質的な創業者となりました。

お金に関しては、会社のお金と同様に自分でも相当お金を使っているのです。表の金と裏の金があって、つまり、領収証の出ないお金もあったと思います。そういう時のお金は全部自分で払ったわけです。渋谷に松濤という地区があるのですが、そこは高級住宅街です。そこに高橋さんは1,600坪の土地を持っていたのです。普通のお宅は大体40坪ですね。その約40倍ですから、40倍の敷地を持っていたのです。それを全部売ってしまった。そこはもともと奥さんの実家でしたが、それを売ってしまった。今その場所はニュージーランド大使館になっています。それぐらい自分の財産を使ったという逸話が残っています。

細かいことは、従業員にいいませんが、われわれはディズニーの教育を受ける時に、「創業者の高橋さんがディズニーを作るためにこれだけの苦勞をしたのだ」という話をすることもありました。

なぜその話をするかというと、簡単にディズニーが出来あがったのではないのだと。

非常に難しい問題があって、そういう問題を全部クリアしながら、ディズニーを作ったのだと。そういう背景(気持ち)を従業員の皆さんがみんな持って仕事してもらいたいということで話すのです。

最初にディズニーが視察で日本に来た時候補地は2つありました。1つは浦安地区ともう1つは富士の裾野の2カ所でした。富士の裾野の方は、三菱地所さんが応援していました。浦安の方は三井不動産が応援していました。いわゆる三井、三菱という日本を代表する2大商社で誘致活動、誘致合戦をしていたわけです。

最終的に浦安に決まったのですが、なぜ富士の裾野が駄目だったか、結論からいいますと、地の利です。地の利が悪いということです。地の利とは建設場所や交通事情等をさしますが、事業をやる時に、大事な要素は「天・地・人」なのです。テレビの「天と地と」の直江兼続

ではないですが、「天・地・人」なのです。天の時、地の利、人の和です。

こういう要素が噛み合わないの良い事業にならない。これはどんなに小さい事業でも大きい事業でも同じです。つまり、タイミングが悪いとどんなに素晴らしい事業をやっても長続きしない。あるいは、地の利が悪いと、どんなにおいしい料理であっても地の利が悪いとそのお店になかなか人が足を運ばない。あるいは、良い従業員、良い経営者がいなければ良い事業につながらないわけです。ですから、民間の企業は、まず何を考えるかというタイミングと地の利と人の和です。最後の決め手となるのは人です。良い従業員を養成することです。良い従業員がいれば、会社は必ず発展します。良い従業員のいないところはどんなにお金があってもすぐに衰退します。それは私も40年間以上会社の運営・経営・管理に参画しながら感じました。

ですから、私は現在勤務しているシンコー警備保障で人の和を作る基本となる教育に力を入れています。つまり、教育というのは一瞬たりとも間をおいたら **down brow** でダメになってくるのです。それが3年、5年も経つともっとダメになってしまう。だから企業で大切なのは、一つは採用です。採用をコンスタントにやっていく、1人でも2人でもいいから採用する。不景気の時には人を採用したくないのですが、我慢して採用すべきです。

二つ目は、そういう人たちを必ず上に上げていくといえますか、成長するような手段・方法を考えなければならない。ですから企業でも皆さんの仕事でも、人の和、人を作るということは大事なことだと思います。人さえ、良い人材さえいれば企業や組織はいくらでも発展できるし、いくらでも成長することはできると思います。

そんなわけで、東京ディズニーリゾートはオープンして32年目を迎えた平成14年4月に6億人を突破しました。6億人ということは、4歳から90歳くらいまでの方々が1人当たり平均5回来ていることになります。ここで1つ質問します。東京ディズニーランドに来たことがない方いらっしゃるでしょうか？1人いましたね。あとで私が招待しましょう。ぜひ見に来てください。

オリエンタルランドがディズニーを作る時に、当初、600億円の予算だったのですが、それが完成した段階では1,800億円になりました。三井不動産の方は、600億円が1,000億円近くになった時に、もうやめてくれと。もう三井はつぶれてしまうからやめてくれといったのですが、高橋さんは「いいからどんどんやれ」と社員に発破をかけました。

非常に面白いのは、工事の途中で三井が高橋さんに「アメリカに行って、このプロジェクトはもう終わりにするようディズニー側にいつてきてくれ」ということで、事業中断の文書をもたせたのです。親会社の社長の文書です。それを「分かりました」といって、懐に入れて、飛行機の機上の人になった途端トイレで全部破いて捨てたのです。

つまり、例えば、皆さん方は教育委員会が指示したことに対して反論はできないですね。同じように、親会社の社長が命令したことに対しては普通は反論できないのに、高橋さんは、無鉄砲な人だったのかどうか分かりま

せんが、太っ腹だったのでしょう。そういう社長のことなんて聞かなくていい、俺がやるのだということで、三井本体の役員がいう事業中止命令を無視して米国と交渉を続けて最終的に完成させました。

600億円の予算が1,800億円になってしまったのですが、でもオープンしてから3年で返すことができました。それくらい事業はうまくいきました。週刊誌などには、オリエンタルランドは2、3年経ったらディズニーランドをやめて、住宅地に変えるのではないかという噂話がずいぶん載りました。

私は、オープンする1年前の1982年にアメリカ研修に行きました。当時長い研修生だと2年、短い人でも1年間の研修をしました。私はもっと短かったのですが。そこで初めてディズニーという世界を見て、これだったら絶対に成功すると思いました。私はそれまでディズニーという名前すら知らないし、もちろんディズニーランドも全く知りませんでした。今から34年くらい前の話です。

最初からこれはすごいと思いました。ショービジネスに無関心な私でも絶対成功すると思いました。案の定オープンしてから現在で32年間やっているわけですが、もう毎年右肩上がりです。そういう面では、私のサラリーマン生活は非常に恵まれました。お給料もどんどん上がっていきましてし、株ももらいました。あらゆる面で大変恵まれた人生だったと思っています。

現在は、年間で売り上げ約4,700億円。それで経常利益が1,100億円くらい出ています。ですから、ものすごくもうかる、高収益な会社なのです。例えばペンがあります。ペンが例えば500円とします。そこにミッキーのマークを入れるだけで倍の1,000円になるのです。つまり、それは500円の付加価値を持っている商品であります。こういう商売をディズニーはやっているのです。良いか悪いかは別です。キャラクター商売というのは売れるキャラクターが1体いれば売り上げもすごいし利益もすごいのです。具体的な例でいいますと商品です。商品ですと、現在商品売り上げが約1,100億円。1,100億円のうちの半分が単純に付加価値（もうけ）ですから550億円。ですから、普通の商売では考えられません。普通の商売は大体良くて3割とか2割とかというところですが、それが5割です。

それは、商品だけではなくて、飲食も同じです。飲食は7割です。7割ですが、実際は雨の日とかいろいろな不確実なことがありますから、作っても全部消化できるわけではない。そうすると押し並べて商品と同じ大体5割になります。

チケットは紙代しかありませんから、せいぜい20円とか30円の原価です。6,400円から6,300円くらいが儲けです。ですから、1年間で例えば夏休み期間が約50日あるとします。現金が入ってくるのは1日大体20億円です。そうすると約50日間で1,000億円近い現金が売り上げとして入ってくるのです。

ですから、非常に商売としては強いです。現役のところ私はよく冗談でいっていたのですが、「この1,000億円を銀行に預けるとペイオフということで、1,000万円しか保証されません。それでしたらディズニーのパークに地下倉庫を作って、そこにお金を収納したらいかがです

か」と、そういう冗談をいいました。

私がオープン当初勤務していた商品部のワールドバザールでは、1日1店舗で1億円以上売れました。そういう店がパークには何軒もありました。今ではもちろんもっと売れているかもしれません。それで純利益は700億円です。ですからものすごい収益の高い会社になりました。

つい先日新聞で発表されましたが、東京ディズニーリゾート(ランドとシーを合わせてリゾートといっています)は今までは、1年間に250億円の投資、つまり新しいアトラクションを作るとか、新しい施設を作るとかということで毎年コンスタントに250億円の投資をやっていたのです。それを、11月に恐らく発表されると思いますが、今後、10年間に5,000億円投資するということです。5,000億円ということは、年間に500億円になるわけです。

なぜそんなに投資するのかということになるのですが、要は投資をしないとパークが陳腐化するわけです。パークの魅力が半減化するわけです。ディズニーのうまいところは、例えばディズニーランドを作る際最初はアトラクションとか施設を作ったのは7割程度です。次の年になると残りのエリアに新しく作ります。翌年はまた新しい施設を作ります。この繰り返しなのです。

そして、敷地がなくなると、施設の中で一番人気のないものを壊して、新しいものを作るわけです。いわゆるスクラップ and ビルドです。そうすると、お客さんがディズニーに来るといつも新しいものが生まれているということになるわけです。一般的に、日本の遊園地は最初に全部作ってしまう。そうするとお客さんが来ない施設ではもう次の年は新たに適切な投資をすることができないわけです。それで入場者が減り負のスパイラルに突入するわけです。

ですから、ディズニーは、今2014年ですが、2030年くらいまでの予算や目標を持っています。つまり、アトラクションでも、ショーなどの変更でも最低5年がかかります。最低です。長いもので8年から10年ほどかかります。それくらい時間をかけているのです。大体今のターゲットは2020年から25年の間です。

そして、例えば2020年には何をやるのだということが決められています。それに対して、毎年ローリングをやるのです。ローリングといいまして、最初に立てた計画を次の年どこまでできたか、どこまで作る計画が実はここまでしかできなかった、ここの部分が抜けている。それを次の年にはどこまで持っていくのだということで、ローリングとわれわれはいうのですが、そのようにグルグル回転しながら、2020年にはこの計画が最終的には達成できるような、そういう計画になっています。

それで、今までは250億円の投資だったのが、今度は500億円になるということで、それに対してロイヤルティーも払うわけです。先程いいましたように、ディズニーからミッキーマウスの著作権を借りる、あるいは、キャッスルという著作権を借りる。そのために払うお金があるのです。従来は約250億円といわれています。毎年250億円払っているのです。いろいろな売り上げを合算して4,700億円くらいの売り上げがあって、もろもろ引いていくのですが、それでも1,100億円くらいは経常利益が出て、700億円程の純利益が出るのです。では、も

しディズニーに著作権を払わないような仕事をやっていたらもっと儲かるのではということですが、実はそうはならないのです。

ディズニーだからゲストが来るのです。オリエンタルランドが遊園地を作っても来ません。せいぜい年間200万人とか、250万人の世界です。ディズニーという名前を使うと、年間で3,000万人来るのです。そうすると、年間に250億円、今はどうか分かりませんが、250億円のロイヤルティー(著作権料、技術提携料)を払っても最終的に700億円の純利益が出るのですから、当然業務提携しますよね。

ディズニー側は、オープンした時に、日本ではそんな成功すると思わなかったのです。ですから著作権などのロイヤルティーだけでいいと、7%、8%のロイヤルティーだけでいいといったのですが、実は、日本では商品が滅茶苦茶売れたわけです。アメリカで100億円くらいしか売れなかったところが、日本は300億円とか400億円、今は1,100億円になっている。そうすると、なぜあの時に、資本参加をしなかったのだらうということをアメリカの中では相当いわれたそうです。資本参加すれば配当という収入がもらえ更に著作権の収入も入るわけですから逃がした魚は大きかったと思っていることでしょう。

その後に、フランスにディズニーランドを作った時に、49%の株式を持ったのです。つまり日本の教訓を踏まえて資本参加したのです。そうした所思惑がことごとく外れて10年間大きな赤字だったのです。今後、日本と同じようなパークが世界に生まれるかどうか分かりませんが、それくらい日本のディズニーランドは大成功しました。

なぜ成功したかという要因はいろいろありますが、一つは日本人の勤勉さ、あるいはきめ細かさ、そういう点で大きく各国のテーマパークと違いがあります。ですから、中国で今作っている上海のパーク、それから香港のパークを見ても、向こうのゲストの人たちは国の文化の違いもありますが、パーク内で唾を吐いている人がある。それが当たり前なのです。そういう唾を吐かないようなグッドマナーにするにはどうするか、非常に大きな問題です。

そういうことが日本ではできても、中国でできるかどうか。そんなことがよくいわれます。ディズニーにはサービステーマがあり、よくいわれるのが「私たちは全ての年齢層、全てのジェネレーション(世代)の人々のために、どの場所でも最高の娯楽を提供することによって、happinessを作り出す」。

ですから、皆様方がディズニーに来園した際、キャストの誰でもいいです。ネームタグ付けているキャストに対して、「皆さん方のサービステーマは何ですか」と問いただければ、大よそのキャストが少なくとも、「ゲストにハピネスを提供するのがわれわれの役目(サービステーマ)です」と答えると思います。

もし、答えなかったら、それは「違っているよ」と皆さんの方からいっても構わないと思います。それくらい統一(教育)されているのです。いわゆる、あれもこれでもなくて、ゲストにハピネスを提供する、このためにわれわれは働いているのだということです。

それは、表の世界というか、ゲストに接する世界(オン・ステージ)だけではなくて、裏方の例えば清掃とかあるいは調理(バック・ステージ)の人とかいろいろな人がいるわけですが、そういう裏方にいる人たちも全て視線がゲストの方向をいているという考え方なのです。

ですから、キャストの中で私は裏方の仕事は嫌だという人はまずいません。バックステージ(裏)であれ、オン・ステージ(表)であれディズニーの仕事は楽しいというような世界です。

会社が伸びる、成長するというのはすべからずサービスの質の高低なのです。顧客サービスのいい会社は伸びます。顧客サービスの悪い会社というのは衰退します。皆さん、例えばコンビニに行ってよく注意深く店員を見てください。コンビニに行って店に入ると店員が「いらっしゃいませ」といいます。店員はどこを向いていますか。ほとんどお客さんの方を見ていないと思います。でも、ディズニーというのはそうではなく必ずお客さんの目を見なさい、必ずお客さんの顔を見なさいといっています。そういう基本的なところが若干違うのです。やっていること自体はどこだって同じです。そんなに変わらない。ただそれを徹底してやるかやらないかだけの違いなのです。

だから教育も繰り返し、繰り返しやるのです。例えば、ディズニーで働いている人は、もちろんいろいろな場面でしゃべります。しゃべるためには、発声の練習が必要です。朝例えば、しゃべる(スピール)担当のキャストは発声練習で「あいうえお」という言葉があると、「あ・い・う・え・お、あ・お」というのです。「か・き・く・け・こ、か・こ」という練習をします。

たったこれだけのことなのですが、あごを活用するといいですか、使うことによって言葉が出やすくなる。老人になればなるほどしゃべらなくなるから、寡黙になります。私も歳をとってききましたので難しいのですが、絶えずわれわれの会社の中でも、朝の朝礼の時に発声練習をします。発声練習をしても言葉が突っかかるのです。それくらいやらなければもっとダメになるということです。

ディズニーで働いている人たちの基本となる一番大事なことは、ゲストがパークに来た時に従業員から100回声をかけられるような態勢を作れといっているのです。

では100回とはどういうことかということ、「今日は。どこからいらっしゃいましたか。今日何を食べましたか。どんなアトラクション乗りましたか」、そういう言葉を繰り返して100回、ゲストに声をかけなさいといっています。それくらい何といいますか、無関心ではダメだよということです。

ですから、「歩み寄り語りかけなさい」。「自分から歩み寄って行って、お客さんに語りかけなさい」これがディズニーの基本です。ですから、ゲストの方に顔を向けないことはあり得ません。

まず、相手の目を見て、笑顔を忘れない。ディズニーで私が一番先に躊躇したのは、困ったのは、写真を撮る時に笑いなさいといわれたことです。笑った顔でなければ駄目だよといわれました。なかなか今までの生活の中で、笑うということができなかったのです。それで鏡を

見たりしているいろんなツールを利用して練習しました。

「チーズ」といえば笑えるとか、「ミッキー」といえば笑えると教わったわけです。笑い顔というのはいかに作るのが難しいかです。日本人の中には、相手の顔を見て笑うと「なぜ俺の顔を見て笑っている。俺の顔に何か付いているのか」というようなことになりかねない。ですから、笑うタイミングも難しいし、どういう笑い方がいいのか、グラグラ笑うのがいいわけではないです。そういうことも教わりました。

いろいろなところからゲストが来るわけですが、来たゲストが体験されるその1日というのは、特別な1日にしなければダメだということで、基本的な考え方は一期一会なのです。一期一会ということはどういうことかというと、ゲストと接するその瞬間が勝負だということです。ですから、もしその時にいい印象を与えられないと、もう来ないぞということになるのです。

ですから、その瞬間、その瞬間がお客さんとのある面での戦いなのだということです。面白いのは、私どもがゲストに親切にする、あるいはおもてなしをすると、必ずゲストは答えてくれるのです。「ありがとう」とか、「楽しかったよ」とか。「また来るよ」とか。そういう言葉を投げかけられると、かけられたキャストの方がそれに対して今度は感動するのです。ですから、感動の連鎖、感動のキャッチボールではないけれども、感動を提供して、相手から感動をもらう。また、一生懸命やろうということなのです。

そういうキャストを作るためにはもちろん教育が必要です。教育も必要ですが、素晴らしい話をできるだけキャストに投げるのです。感動のシャワーといっているのですが、シャワーをバンバン浴びせるのです。するとキャストはみんな素晴らしいキャストに変わってくるのです。

A 子さんは、あんな素晴らしいことをやって表彰された、あるいは、褒められた。表彰されたキャストにはバッジが付くのです。そうすると、まずゲストが「あの人はなぜバッジを付けているの」というと、「あの人は表彰されたんですよ」となるわけです。あるいは、新人キャストから「A 子さんは何でバッジ付けているのですか」という質問に対し「上半期で表彰されたんだよ」とそういう話は当然うれしい言葉となって表彰された A 子さんの耳にも入ってくるわけです。そうすると、新人キャストは私も A 子さんのようになりたいというふうになるのです。

それらのことが、実はディズニーというのはものすごくまいのです。普通は、キャストの給料が安いから、なかなかうまく行かないという様な否定的な話になりますが、ディズニーは、キャストの給料はそれほど高くはないですが、一生懸命仕事をします。みんな800円とか1,000円の時給です。

もちろん、キャストの中にも階級がありますから、上になればもっと高くなります。でも一般的にはそんなに高くない。高くないのになぜあのように一生懸命やるかということです。その決め手は、表彰と評価です。いかに評価というのは大事かということです。私どもサラリーマンもそうですが、大体不満は、「俺の評価は悪い」

というのがあります。これは皆さん方も同じかもしれません。

つまり、良い評価というのは正しい評価です。正しい評価は良い評価をつけるという意味ではありません。

えこひいきをしないで

私情を交えず正しい評価をやる。

素晴らしい行動を評価・表彰する。

ということです。

これがいかに人を使う上で大事かということです。

われわれは残念ながら、自分がやったことに対して正しく評価されないと不満になって、この仕事なんて面白くないということになるわけです。もちろん正しい評価は難しいです。難しいですが、働く人を多面的に見ることが重要です。

例えば、一般的に評価というのは、上司が部下を評価するというようにやりますね。ディズニーももちろんその方法でやります。やりますけれども、それ以外に同僚から同僚の評価もします。そして、あの人は一生懸命仕事やっているということを相互に認め合う。そういう形でも評価します。

それから、もちろんゲストからの賛辞も評価方法の一つとします。ですから、ただ単に、上司が部下を評価するだけでは良い評価にならない。もう少しそれを多面的にやるということが必要です。

ディズニーは一方で非常にこだわりがある会社です。私もディズニーリゾートラインというディズニーの冠が付いたモノレールの社長をやっていましたが、例えば、東京ディズニーランドステーションというモノレールの駅があります。その東京ディズニーランドステーションの2階のプラットホームに屋根があって、この屋根の天井に、スピーカーを付けましょうということでディズニーと交渉しました。とにかく業務提携というのはすべからずディズニー側と交渉事項で承認をもらえないと作業はできません。

アメリカ側は、100メートルの天井の間に64個のスピーカーを付けるといったのです。日本側は2個と提案しました。なぜ64個だと聞いた時に、アメリカ側は、音が割れるからというのです。音が割れるような音楽はディズニーの提供するものではないと。64個付けないと音が割れてしまうという。私は再度交渉して64個は費用の面でダメだと回答し結局48個になりました。でも48個です。それもアメリカの製品を使えと。とにかく回答はひどかったものでした。交渉ではなく命令です。一事が万事です。例えば、この会場でいうならば、壁面の色を考えましょうといった時に日本のベテランのペインターが来て塗ると、アメリカ側はダメなのです。日本人には特別な色が出せないというのです。

ディズニーシーを作る際に特に問題となったのは、ミラコスタ・ホテルの壁面ペイントでした。ディズニーシーの中にある人気のパークー体型ホテルです。その壁面のペイントで非常にめみました。本来ならば、ペンキ塗るだけだったら1ヶ月くらいで済むのですが、1年近くかかりました。毎週週末になると、ディズニー側が来てチェックをするわけです。塗った部分が駄目だと、またやり直しということで、それをずっと何カ月も繰り返した

わけです。

オープン日も迫ってきて最終的にどうにもならなくなって、イタリアからペインターを呼びました。20人くらいです。そして、イタリア人が考える色を出したわけです。一事が万事そんなものです。とにかく、苦勞したと聞いています。それくらい色にもこだわるのです。更というなら、アメリカのディズニーランドやディズニーワールドにリンカーンシアターという劇場型のアトラクションがあります。大きな舞台に歴代の大統領に似た、いろいろなロボットがたくさん並んでいるわけです。360度ではないですが、240度くらいのステージでそこに歴代の大統領の初代ジョージ・ワシントンから44代のバラク・オバマまで全員並んでいるのです。そして一人一人を紹介すると会釈をしたり、手を振ったり、得意のポーズをとるわけです。そういうアトラクションなのです。

最後にリンカーンが代表して演説をするのです。演説する時に舞台前方に耳の悪いゲストが並んで座っていてその後ろの方に健常者が並んでいる。そうすると、耳の悪いゲストはリンカーンの声(演説)が聞こえませんが、リンカーンの口を読むのです。口を読んで、話している内容や意味を理解する。理解できるほど精巧な作りなのです。

つまり、口をパクパクするだけのロボットではなく非常に精巧なロボットなのです。手抜きをしないのです。さらにルーズベルトという大統領がいます。日本に原爆を落とした大統領です。ルーズベルト大統領は、現役時代足が悪くて、寄添え木といったらおかしいけれど、ひざの部分に板とかいうか、そういうものを使って添えていたらしいのです。ある時に、キャストがショーが終わってから、舞台上がって、ルーズベルトのズボンを上げたら、ロボットの足のひざの部分がちゃんとそのまま昔のようになっていたそうです。

ここで問題なのは、そんなことはお客さんには見えないうわけです。でも見えないところまでディズニーは忠実にやるのです。その当時のルーズベルトでも、リンカーンでも、あるいはジョージ・ワシントンでもいいのですが、そういう方々の時代に使っていた生地と製法ですが、縫い方があります。ミシンで縫えば簡単なのに、あるいは現在でいうレーヨンとかを使えばもっと手軽に簡単に作れるのですが、そうではなくて、昔の生地、昔の製法で作っているのです。なぜそんなことをやるのだということ。もっと簡単な方法でやればいいではないかと。ディズニーは、限りなく本物を目指すのです。もちろん、1億円使うわけにはいきませんが、とにかく限りなく本物の素材を使い本物の製法を使いたいということをわれわれも教わりました。

そのことの目的が、ゲストに訴えるということではありません。そういう仕掛けとか背景をゲストは知らなくていいのです。誰に知ってほしいかとかというと、キャストです。キャストにこういう形で作っているのだよ、こういう形でわれわれは運営しているのだよ、だから、キャストの皆さんはそれに見合うような質の高い接客をしてほしいということになるのです。

ですから、ほとんどそうすることはキャスト用に、キャストのために行っていることなのです。例えば、いろ

いろな施設で14金とか24金という金も使っています。そんなこともゲストに別に知らせなくていいわけです。それはキャストが知っていればいいことでそれに見合うような質の高い接客をなささいということです。そういう面ではきめ細かいというか、しつこいというか、こだわるといふ点に非常に感心させられます。

例えば、夜の清掃の場合。パークの運営は大体10時に終わります。10時から11時の間にゲストに退場してもらうわけです。それから夜の部の仕事が始まるわけです。そうすると、例えば私が清掃のキャストだとしますと、自分のテリトリーでバースとホースでもって路面に水をまくのです。強い水圧でまくのです。消防のホースのようなものです。腰を下げて力を入れないと水圧で吹っ飛ばされそうになります。その後に、モップで全部そこを洗うわけです。なおかつ、モップでしっかり洗った後に、全部朝までに乾かします。そういうことを毎晩やっているわけです。雨の日は別ですが。

ディズニーでは子どもが日中路面にお菓子を落とした場合、それを拾って食べられる程度の清潔さを保ちなさいというのです。それくらい清潔さを保つことに厳しいのです。ですから、昔東京ディズニーランドがオープンしたころは、30分に1回ずつトイレの清掃をしていました。

今は、約50分に1回になっています。それはゲストが汚さなくなったからです。ここで非常に面白いことは、ディズニーでは、冒頭にいいましたが、汚いことを非常に嫌ったのです。清潔なパークを作りたい。ゲストに安心して楽しむことができるパークを標榜していました、ゲストにアンケートを採りました。ずっと前の話ですけど、毎年採っているケースもありますが、取りあえず採りました。その中でなぜディズニーランドが好きなのかという質問に対して、1番多かった回答が、清潔だからというものでした。ですから、ディズニーでは清潔感というのはものすごく大事なキーワードなのです。私も千葉県の教育委員会の仕事をしていますけれども、ダメな高校に行くと共通して全部トイレが汚い。あるいは、壁も汚い。生活環境が悪い。それはお金がないということもあるかもしれませんが、しかし、そういうことが学校の荒廃するような要因なのです。1995年アメリカのニューヨークにジュリアーニという人が市長になりました。その人が市長になって何をやっていたかというところの汚れているところの修復作業に力を入れたことです。その当時のニューヨークは非常に犯罪が多くて、ひどいものでした。地下鉄も暴力事件とか落書きがすごかった。学校の窓が滅茶苦茶に割られているという状況で、人心の荒廃を促進させるような要素である事柄の環境改善に力を入れたのです。それはどういうことかというと学校の割れている窓ガラスを全部修復させました。修復させてもまた壊されます。壊されるけど再度修復させた。同様に地下鉄の落書きは消させました。何度かこのことを繰り返すうちに市内から落書きや暴力事件、犯罪が以前より6割ほど減少したという成果があがりました。環境を改善すると犯罪が減少する、いわゆるブローケン・ウィンドー理論(割れ窓理論)です。

ここで、非常に大事なことは、例えばここに皆さんが

座っている席の床があります。もし誰かがここにゴミを捨てたら、それに連られて恐らく次から次にみんなが捨てます。それが人間の習性です。きれいにしていれば誰もゴミを捨てません。それがディズニーの考えでありジュリアーニの考えです。

だからディズニーもパークをきれいにしよう。きれいにすれば、パークを汚さない。汚さなければ、仕事する側にとっても楽ですしゲストも快適に楽しむことができる。トイレの清掃を30分毎にやったのは、使うゲストにとっても汚いトイレよりも、きれいなトイレを使ったほうがいいわけです。

それから、清掃する側にとっても、汚れ方が少なければ簡単に清掃できます。今は、非常にゲストも汚さなくなりましたし、あるいは、パークの中でもゴミを落とすようなことは少なくなりました。ディズニーはいいています。「ディズニーランドというのは、ただ単に遊び、楽しむ場所ではなくて、教育の場所なのだ」と、少しおこがましいですけど。

何を学ぶのかといったら、「きれいにすることはそこで遊び、楽しむゲストにとってどういうことなのか」ということを学ぶ、ディズニーランドはそういう場所だといっています。先程、キャストの人たちの給料の話をしましたけれども、例えば夜の清掃の時に、1988年だと思いましたが、キャストの仕事ぶりの記事が朝日新聞の天声人語の欄に「ハロー・ジャック」という表題で載りました。

その内容はこうです。従業員が夜、仕事のテリトリー(範囲)があつて、自分のテリトリーのトイレを清掃する時に、電気がついていても、夜で周りに誰もいませんからやはり怖いわけです。それで、怖さを紛らわす意味も含めて全部便器に名前を付けたのです。ジャックとか、ビルとか、スミスとか。そしてその便器に向かって、「やー、ジャック今日は汚されたね。じゃあ僕がきれいにしあげよう」というような会話をしながら清掃したのです。そして、清掃が終わった後に、清掃した便器に自分の頬を押し付けて、頬ずりして「良かったね、きれいになったね」といって仕事を終えたという話があったのです。それは事実の話らしいです。それを天声人語で記事にしたのです。

ですから、一般的な話として社員がそうするのなら分かります。アルバイトのキャストが時給何百円かでやっている人たちが、職場でなぜそんな風に(仕事を)やっているか。それは、自分の仕事に対する誇りを持っているということです。そういう気持ちがあるからこそ、人がなんといおうが自分はきちんとやるという誇りを持って仕事をしているのです。そういう自分の仕事に誇りや自負心を持ったキャストがディズニーランドにはたくさんいます。

だから、私たち社員はお世辞にもあまり働かなかったのですが、アルバイトのキャストは良く働いていました。ですからアルバイトのキャストがディズニーを支えているといっても過言ではありません。

ところで雨の日に、ベンチを拭くのですが、なぜ拭くと思いますか？なぜ雨の日にベンチを拭くのでしょうか？雨の日にベンチを拭くのです。ザー・ザーと雨が降って

いるのに。そんなことをしなくても、雨がベンチをきれいにしてくれるじゃないですか。でもやるのです。それは、ディズニーにはパークの運営(仕事)の仕方には基本的な考え方がありまして、仕事をやる時の順序があるのです。これはディズニーの運営の中でも一番の基本なのです。「SCSE」といっています。Sは、安全の Safety です。Cは、Courtesy という礼儀正しさ。Sは Show です。Eは Efficiency、効率、儲けです。この言葉の頭文字をとってS/C/S/Eといっています。

どういうことかといいますと、当社もそうですが、企業というのは、一般的にまず儲けを考えます。ディズニーの面白いところは、最初に儲けにいかないのです。私は、32年間ディズニーで働きましたけれども、その間1回たりとも売り上げがどうのこうのといわれたことはありませんでした。一般の企業は必ず売り上げをいいます。当然のことですが、売り上げが行かない限り、従業員の給料を払うことができません。

でもディズニーでは、一般の会社と順序が違い、必ず上から順に仕事をしなさいというのです。まず Safety のS、安全性の確保。これは、3.11の震災の時にはっきりと出ました。アルバイトのキャストがゲストに対して壁面に陳列してあるぬいぐるみを全部頭に掛けて使ってくださいといっただけです。

ふつう、一般の会社ならそんなことは当然しません。売り物の商品ですから。なぜそんなことをしなければならぬということですが、ディズニーの場合はそれをアルバイトのキャストがいった(やった)のです。社員もいたでしょうけれども、アルバイトのキャストが率先して使ってくださいと。あるいは、お菓子のお店だったら、お菓子のクッキー食べなさいと。

それはそれで、非常に大事なことなのです。なぜそんなことをしたのかとわれわれはいいません。まずディズニーの場合は、安全性が確保されない限り、次はないということなのです。安全が確保された段階で、礼儀正しく、われわれは素晴らしいショーを提供するのです。それで、最終的に儲けにつながると。

だから、ディズニーで儲けようと思えばどんなことでもできます。でも、そうしなくとも700億円の純利益が出るのですから面白いのです。

素晴らしいショー、素晴らしい仕事をすれば、おのずからゲストがそれに対して対価を払ってくれるということなのです。ディズニーには、約550冊のマニュアルがあります。それら全部に最初書いてあることは、このSCSEです。これだけは、どのマニュアルに対しても全部最初書いてあるのです。それから、それぞれの職場、それぞれの仕事に関する役割が記載されています。

ですから、われわれは何か事があった時に、まず、どういう順序で仕事をするかということで、SCSEを基準に考え行動します。これは恐らく学校でも当てはまると思うのです。学校ではあまり効率は考えなくてもいいのしょうが、安全性とかあるいは礼儀正しさ、生徒さんの礼儀正しさというのは関係するのではないかと思います。

ディズニーでも実は弱い部分があるのです。何が弱いのかといいますと、ゲストが3,200万人も来ていますけれ

ども、ここに約3%のクレマーがいます。ハードクレマーです。ハードクレマーは学校にもいますね。ただハードクレマーの大部分は、話せば分かるクレマーで将来的にはディズニーのファンになってくれるようなゲストです。問題は、97%のゲストの方々、この人たちはどういうゲストかということ、サイレント・マジョリティーのゲストといっています。どういうことかといいますと、静かなる大多数。大多数のゲストは、黙っている、沈黙しているのです。黙っていて次にはもう使わないぞ、食べないぞということになる。このサイレント・マジョリティーの声を聞かなければ、ディズニーの将来が危うくなったり商売が成り立たない状況に追い込まれることになります。つまり先ほどいったディズニーの弱みというのはゲストの声をどのように拾うかということです。

今、業績がいいぞいいぞといっても、実はこの97%がもっともっと底辺で蠢いているかもしれない。そういうものを拾わないと、今だけを喜んでいるわけにはいかない。そのサイレント・マジョリティーというのは、これは別にディズニーだけの問題ではないのです。時計屋さんでも、これは衣料品店でもどこでも同じです。

そういう声を聞く耳を持たないと、「最近なんかお客さん少なくなったね」ということで終わってしまうのです。何年かたつと、全然お客さんが来なくなったと。経営者はそこを注意しなければ駄目です。経営者は今を見ては駄目なのです。今ではなくて、3年先、5年先を見なければ駄目なのです。学校も恐らくそうだと思います。学校の経営というのは、どんどん少子化がかかわってくるわけですから。そして今できること(対策やビジョン)は何があるのだろうということを考えなければいけないと思います。

私は今、警備会社の社長をしています。警備というのは本質的に儲かりません。本当に儲からない。例えば11,000円で仕事が出て、隊員に10,000円近く払うわけですから1,000円しか儲からない。でも、1,000円しか儲からなくてもそれ以外に制服代がかかる。それに交通費がかかる。社会保険のお金もかかる。1人に仕事させると5,000円くらいの経費がかかるのです。5,000円赤字が出るのになぜ仕事をするのだということになるわけです。年間に20億円近く売り上げて、5,000万から7,000万円くらい赤字になってしまう年もあります。こんな仕事やめたほうがいいと私はいつている。赤字になるような仕事は意味がないと。朝6時から夜11時まで一生懸命働いて利益が出ないのです。それはなぜかといったらいろいろな問題があります。例えば、単純な話として説明すると大手ゼネコン、あるいは、大手のいろいろな建設会社が元請から15,000円もらったものを、15,000円から4,000円ピンハネ(事業の協力金のような意味合い)しているのです。そういう業界です。15,000円から4,000円ピンハネされて、それで11,000円しかもらえない。11,000円もらったことに対して10,000円近く払う。すると絶対儲からないのです。儲からない仕組みなのです。それで私は、これはもう体質を変えなければいけないということで、今、私の会社は何をやっているかということ、鉄道見張り員の仕事やっています。鉄道の見張り員というのは、一

人当たり15,000円から17,000円程もらえる仕事です。ただし、試験もありますし、なかなか難しいです。だけどそのように舵を切つていかない限り、企業は生き残れないのです。その他に今、これからやろうとしているのは清掃事業です。今年から私共の会社は清掃の仕事も始めました。それで、病院、学校とか、そういうところの仕事もこれからやろうと思っています。

たえず、3年先、5年先を見ないと、経営は成り立たないです。今年良ければいいのではなくて、来年、再来年どうするか。私の会社には、1,300人の従業員がいますから。1,300人ということは、3年たてば約700人の数が増える見込みです。そういう人たちが路頭に迷うことないような仕事を提供しなければならないです。そういう面で厳しいのです。

私の本当の仕事というのは、3年、5年先に当社がどうなるかということを考えることです。ビジョンを掲げそれに邁進することです。さて、最後にキーワードです。ディズニーキーワードがあります。まず毎日が初演であるということ。学校の先生もそうだろうし、飲食店もそうだろうけれども、毎日毎日同じことの繰り返しですね。そうすると仕事に飽きてくるわけです。

私などたえず、現役の頃から、会社は嫌だと思っていたのですが、でも辞められなかった。辞められないのは生活もあるし、期待も少しされてもいたので辞められなかったわけです。ですから、まず飽きないこと。そのためには、ディズニーはどうしているかということ、毎日が初演であるということです。初演というのは緊張感がありますね。そして、今日はどんなお客さんが来るのだろうか、いろいろなことを考える。同じように、毎日が舞台で幕が開く初演の気持ちで仕事しなさいよということです。

それから、素晴らしいショーを提供しましょう。素晴らしいショーというのは、身だしなみも含めてです。例えば、トゥモローランドでもいいのですが、トゥモローランドにファンタジーランドのコスチュームを着たキャストがいたらおかしいわけです。テーマ性を売り物にして非日常の世界を演出してやっているわけですから、そのテーマに合った服装とか、ショーを提供しなければならないところに、違和感があるようなものはダメだと。それから、未知の体験を提供しましょう。先程いった特別な一日にしましょう。happiness の提供をやりましょう、感動の提供なのだと。魔法をかけ続けて、パークは永遠に完成しない。いいですか。例えば、ディズニーは何を売っていると思いますか。なんでもいいですよ、意見をいってください。何を売っていると思いますか。売り物なのです。ディズニーが売っている物は何でしょうか。ぬいぐるみやT-シャツいろいろありますね。正解は「感動」なのです。夢や感動なのです。感動はなぜいいかというと、例えばネクタイや背広でもいいです。買った1年、2年もちます。感動はもたないのです。瞬間で終わってしまうのです。だからお客さんは、再三再四来るのです。だから、いかにわれわれは感動を与えるような接客しなければならないかということです。

感動は、パークから出たら、すぐに雲散霧消してしまうのです。そうすると、また1週間たったら行きたい。

表現は悪いですが、ある意味麻薬のような一面があります。だから、ゲストが年間3,200万人も来るのです。感動や夢を提供することがないと、1回行けばもういいやということになる。ですから、今、1年間で一番来るゲストは何回だと思いませんか？今から7、8年前に聞いた話では365回です。365日です、毎日ですよ。毎日来るようなゲストはどんな人かというとうやうや浦安近辺に住んでいて、子どもの幼稚園とか、小学校が終わったあとで、子供と来ている家族であるようでした。年間パスポートを持っている人なのです。来園して、別に毎日アトラクションに乗るわけではなくて、パークのゲストを見ながら、景色を見ながら帰る。そういうゲストがいるのです。

同様に東京ディズニーシーは、360回といわれていますが、それもほぼ毎日です。そういうゲストが実は、ディズニーを支えているのです。リピーターという言葉は繰り返し来園するゲストという意味ですが、ディズニーが作りました。その割合がいわゆるリピーター率です。リピーター率というのは、97.5%なのです。97.5%から年によっては98%くらい。そうすると毎年、新しいゲストは2%しか来ないのです。それでよく営業やれるなどいうのですが、それこそが営業ができる要素なのです。皆さん、そば屋さんでもすし屋さんでも行きますね。すし屋に1年に一度しか行かなければ、そういうお客ばかりであつたら店はつぶれてしまいます。でも、毎日毎日固定客がいれば、営業できるのです。売り上げができるのです。それと同じです。

ディズニーのほとんどは、98%のゲストは、繰り返し来ている。年間パスポートを持ったり、買ったりする人もいます。ですから、そういうゲストが繰り返し来るのは感動を味わいたくて来るのです。それゆえ東京ディズニーランドは感動というものを売っているといえるのです。もちろん商品も売っていますが本質的には感動を売っている。商品を買っているわけではないのです。商品は付属品です。感動を売ることによってまたゲストは来てくれるのです。これがディズニーの最大のマジックなのです。

みなさんネクタイを売っていると、Tシャツを売っているとかいいますが、そうではありません。もちろんそれらも売っています。具体的に売っているのですが、一番売っているのは感動なのです。感動という原価は他の商品などより安いものです。それゆえ儲けも大きいのです。キャストが一生懸命おもてなしのこもった接客をやってくれたら、それは全部売り上げにつながる。だからわれわれはキャスト教育に力を入れ、教育をきちんとやるのです。しっかりした接客をやってくれたら、ゲストがまた繰り返し来園するわけです。それは必ずまた売り上げにつながってくるから、好循環の繰り返しが実現します。いい接客で感動を提供→繰り返し来園→売り上げに貢献。この手法が私はディズニーの肝だと思っています。まさにディズニーの肝なのです。つまりソフトの重要性です。これをずっとずっとディズニーはやってきているのです。

大事なことは、ゲストに感動という魔法をかけ続けることです。ゲストの方々に魔法をかけ続けて、次はもっと

面白くなってきましたよ、もっと素晴らしいのができますよということをたえずいい続ける、発信する。だからディズニーはマーケティングが非常にうまい企業です。情報の発信がうまいのです。

だから、先程、事業をやる時、あるいは店を開く時に、どんなにうまくても地の利がなくてはダメだということと同じです。ですから皆様方のお仕事も、いかに宣伝をするか。お金をかけても宣伝することにつながらないです。お金をかけなくともできるいろいろな方法があると思います。

私は今、会社で何をやっているかという、今年の4月から、高齢者雇用の促進ということで、75歳まで働ける会社にしたのです。今までは65歳です。しかしこの社会情勢から見て75歳まで働く人が必要だと思い、厚生労働省の政策に手をあげました。全国280万社の中小企業の中で14社に選ばれました。首都圏ではもちろん私の会社しかありません。そういうことを会社の一つの魅力にしたのです。

今、どこでも人が採れない。人が採れないがゆえに、人を囲い込む必要があります。75歳まで働ける職場にすれば、60歳で仕事が終わった方が当社では15年間働ける。そういう職場を提供するということをやっています。

ですから、やり方次第です。私は絶対あきらめないつもりです。なおかつ、冬場に働く人がいないことに対して、郷里新潟の JA、農協とタイアップして冬場だけ、私の田舎は雪国で仕事がないのです。当社の仕事を手伝ってくれませんかと話をしています。

農業や漁業の分野でもし冬場に仕事がなければ、当社で働いてもらいたいと思っています。動くことで、行動することで何かしらチャンスが生まれるのではないかと考えています。それ以外に、保安用機材の販売をしたり、商社と見間違えるような感じです。「警備会社ではないのじゃないの」といわれるくらいやっています。

どうぞ私の会社のホームページ見てください。自宅でも、勤務先でもいいですから、シンコーというカタカナです。あとは警備保障です。ホームページを見てください。どのくらい私の会社が積極的にやっているか。本当に警備会社でやっているのと思うくらいやっています。

最後に3分くらいのビデオを見てもらいます。これは、何がためになるかという、働いている人の笑顔です。まず、どんな仕事でも働いている人が楽しくなければダメです。楽しいから笑顔になったりするわけです。そういうのを映してありますのでぜひ見てください。

(ビデオ放映 略)

キャストみんな笑ってましたね。写真を撮る時に、「はい、ポーズ」ということをいわないです。隠れて撮ったりとか、急に出て撮ったりします。本当の、自然の素顔が出ていると思います。

私が今日いいかったのは、おもてなしの極意ということなのですが、例えば、何か一つやれたらそれで良かった、そうではないのです。例えば、ディズニーの場合は、もちろん教育をしっかりやっています。一生懸命やっていますし、評価もやっています。表彰もやっています。あるいは、人事制度も他の会社と違うところもあります。

もろもろの要素が混じり合って、それがあある面では相乗効果になって良い成果を生んでいるのではないかと考えています。まず基本は、働いている人の99%のキャストがディズニーを好きだということなのです。そういう共通の底辺があります。

例えば、茶髪の子が来たとします。当然われわれは茶髪の子に「茶髪では働けませんよ」と、「それだけはダメだよ」といって、全部染め直してきてもらう。それを素直に聞いてくれる。そういうところは仕事しやすかったです。なかなか一般の会社は難しいと思います。ディズニーはそういう強みがありました。

ということで、私の話は終わるのですがけれども、もし質問がありましたら伺っておきたいと思います。

●質問

いろいろと面白いお話をありがとうございました。一つ、先程、評価の中で、上から評価するだけではダメで、やはり同僚やゲストからというお話もあったのですが、例えば横からとか下からとか、いろいろと考えられるような気がするのですが、その辺は実際にはどのようにしているのですか。横からというとかかなり多岐に亘ると思いますが。

●竹内さん

大体、横というのは同僚です。同僚や仲間の評価なのです。その仲間は基本的に同じような職場です。例えば、商品部のファンタジーランドの仲間あるいは、トゥモローランドの仲間というようなエリアごとに評価をしているのです。それで、横というのは、今おっしゃったように非常に幅が広いのですが、取りあえずそういうエリアでもって分けているということです。多面(上司から、部下から、同僚から)評価は主に社員が対象でやっています。キャストは多面評価として上司から、同僚からが基本です。

それから、変な話ですけど、同僚というのが結託して「あなたは私の良い評価をしてね。私もあなたをよく評価する」などということもあるかもしれない。それは、当初そういうことがあるのではないかという話がありましたが、大きな問題ではなかった。まずは、本当にあの人が評価されるような人なのかということを中心に疑ってかかりますから。

誰が見てもあの人は素晴らしいねということになれば、それは評価を受けるほうもいいわけです。社員の評価は上司からだけでなくさらに同僚や部下からもやるのです。例えば、平社員が課長や部長を評価するのです。だから、厳しい評価も中にはありました。私なども恐らく厳しい評価があったのではないかと思います。それは一つの、あくまでも一つの見方です。どのやり方が良いか分かりませんが、少なくとも、一面的でなく、多面的な見方をすることが大事だということです。

●質問

ありがとうございます。少し私の方で気になっているのは、そういうことをすると、結構時間がかかったり、それから頻度の問題も出てくるのかなと思うのですが。

●竹内さん

時間はかかります。例えば、今アルバイトの方を抱え

ている職場があるとして。大体、一つの職場で100人とか200人単位ですから、その200人に対して半期に一度ずつミーティングをやるのです。いわゆるミーティングという面接をするのです。コミュニケーションを取るために。これはものすごい作業です。疲れます。

私が部長だった時だと、部下が100人近くいたわけですが、その部下100人の評価が出てくるのです。だから、その前にももちろん課長さんがいたりして、課長さんが全部やるのですが、最後のコメントの言葉を書くのは部長となるわけです。それもやはり大変なことでした。ですが、それはもう必ずやりなさいということをやっていました。

いろいろな悩みやちょっとした話を聞いてやる、あるいは仕事の評価をするということが部下に対しての一つの仕事の励みになるのではないかと思います。あるいは、評価が終わった後に必ずまた面談やります。面談やって、あなたは自分でつけた自己評価ではB評価だけど、僕の方では頑張ったのでA評価を付けたよとか、あるいは失敗が多かったのでC評価を付けたよという話をします。良い話ばかりではありません。悪い評価については次回期待しているという話を終えます。

アメリカに行って、私が感心したのは、アメリカでもたくさんのキャスト働いているのですが、評価する際誕生日の人を呼ぶのです。呼んで、まず「誕生日おめでとう」といって、「君はこの1年間、あるいは半年間よく働いてくれた。だけど僕から見ると、この一つがもう一つ改善されるともっといい評価につながる」というようにやっていました。これも一つの面白いやり方だと思います。

つまり、まずは、誕生日おめでとうといって、それから今の仕事をもっとこういうふうに改善すれば、あなたの仕事はもっと高く評価されますというような感じでやっていました。

評価というのは難しいですが、非常に重要なのです。評価によって、辞めていく人もいるだろうし、面白くないと思う人も出てきます。ですから、いかに評価をきち

んとやるかです。

特に、会社などでよくいわれるのは、ハロー効果。例えば、今年の4月から9月までの半年間でミスをした。失敗をしたという、次の10月から3月に評価する時にその残像(失敗したという記憶)が残っていて悪い評価をしてしまう。でも、評価というのは違います。必ずその期でもって終わるのです。その期で終わって、その期がどんなに評価が悪くても、次の期は次の期で見てやらなければいけない。でも、往々にして、みんなの会社はしばしばそういう評価をやるのです。いわゆる「ハロー効果」をやりがちです。ハロー効果を結構やっています。

昔オリエントでもやっていたし今の私の会社でもやっていました。そこでやめなさいと。それは正しいことではないとやめさせました。それくらい評価は難しいのです。幹部がやはり正しい考え方を持たないと、どんどん悪い評価で人が腐っていきます。ということで回答かどうか分かりませんが。

●司会（野尻富太郎運営委員）

それでは、そろそろ時間でございますので、本当に竹内先生ありがとうございました。われわれ学校にもいろいろなヒントをお教えたいただいたのではないかと思います。このような人材教育の話は非常に重要なお話だったと思います。本当に竹内先生ありがとうございました。皆さま拍手でお送りください。

●竹内さん

実は、来月千葉県の高校の教頭先生を対象に、教育のテーマで話をするのです。なぜそういう話になったかというと、教頭先生は学校の要ですね。校長先生を支える重要な要です。最近なかなか部下の教諭を管理することができないということが悩みの種らしいのです。ですから、教頭先生はどういうことを主として（リーダーシップ等）やらなければならないかというような話をしてくれないかということで、11月4日にやることになりました。そういうことで、少しでも役に立てばと思います。もし皆さん方のほうで要望があれば、時間が許せばお話を伺おうと思います。以上です。



分散会（報告）

- ① 「講演をうけての意見交換」
- ② 「新たな時代の事務組織についての意見交換」
- ③ 「参加者からの希望テーマによる意見交換」

進行役

- Aグループ：根本 欣哉
（専修大学附属高等学校 校長）
Bグループ：野尻 富太郎
（学校法人芝学園 事務局長）
Cグループ：原田 茂
（明星学園中学高等学校 事務長）
Dグループ：三輪田 進
（三輪田学園中学高等学校 事務長）
Eグループ：高野 靖敏
（城北中学高等学校 事務長）
Fグループ：西田 久
（桜丘中学高等学校 事務長）
Gグループ：森本 純生
（高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長）
Hグループ：正村 幸雄
（学校法人鹿児島学園 理事長）
Iグループ：富本 道宣
（富本教育研究所 所長）

● Aグループ



Aグループでは多くのことが話題となったが、主となったのは3点であった。1つは雇用契約法の改正、2つ目は超過勤務の件、3つ目は入試対応の件であったそれらにつき、各学校の現状と課題・問題点、今後の対応について協議した。雇用契約法の改正に関しては、現状、例えば学校によっては5年もしくは3年を超えて雇用することはない学校、長期にわたって非常勤講師を雇っている学校、1年更新の学校もあり、それぞれ該当する方に通告の必

要があるということが話し合われた。それに関する問題で、私学共済の加入についてであるが、非常勤の先生方については加入がないところがほとんどだが、条件付きで加入を認めている学校もあるということであった。2つ目の超過勤務については、具体的には労基署の立ち入り調査を受けた学校の先生に様々な問題点をあげていただいたが、1つは残業手当の支給、その際の残業の申請書、教頭先生の承認、出勤簿関係などである。時間手当で4千円支給している学校もあった。4%支給についても話があった。また、入試手当についても話し合われ、廃止している学校、まだ支給している学校さまざまであった。3つ目の入試対応については、基本的に入試広報室、入試広報部が外部説明会の対応をしている学校もあるが、教員全体で対応している学校もある。これについても、年度末、入試手当を廃止した学校と、あるいは別途賞与という形で支給している学校もあり、個々、学校によって状況が違っていた。

なお、今回の大会をきっかけに、ネットワークを構築し、困った時や事例提供の依頼、あるいは日々の情報交換につなげていきたいと話した。

最後に、学校に帰ってから、事務所は学校の顔なので、常に笑顔を保ち、竹内先生の言葉にもあったように、接客につなげていきたいということで終わった。

● Bグループ



Bグループでは、まず部活動について話し合った。実例として、週2回の活動、水曜日は休みというように学校ではどのようにしているかについて話し合われた。部活指導については熱意のある先生が多く、制限が非常に

難しい状況で、逆に、もっと指導をやらせて欲しいという先生方もいて難しいという話もあった。

優秀な教員は、入試広報、進学指導ができる先生という話があったが、本グループの中では、進学指導の方はそこそこできるが、入試広報はどうしても限られた先生になってしまうということで、その部分での人材育成が難しいという話もあった。入試広報では塾への広報がメインとなるが、一部の先生は塾へのアプローチを非常に嫌がる方も多く、それも一つの課題と思われる。最後に超過勤務について話し合ったが、どの学校も同じ悩みがあり、4%の教職調整手当の支払いをして、実態として時間外勤務手当は支払っていない形になっているところも多く、ここにメスを入れ改善することは現状ではなかなか厳しいという話である。

● Cグループ



主に3つのテーマについて話し合いがもたれた。1点目が評価制度の是非についてである。教職員とも行っている学校は1校、職員のみは3校あり、評価により、賞与のみ、あるいは基本給に反映している学校もあった。内容としては、先生の評価は難しい、好き嫌いになってしまう部分がある、また、企業並みにすることにより士気が高まるなど、いろいろな話が出たが、是か非かという結論は出なかった。2点目は教員の超過勤務についてであるが、調整手当で対応する場合や、あとは変形労働時間制を使い、効率よく、1年間で労働時間を割り当てて、対応している学校も数校あった。研修日、研究日の取り扱いを休日か平日に設けるという話題もあった。関連して、休日や平日の部活動の手当についてであるが、PTA後援会から出している場合、学校会計から出している場合など各学校の実情を紹介していただいた。3点目として経費関係であるが、ここ数年はタブレット端末の申請、部活動の用具等の申請があった場合の承認をどうするかということが話題となり、こちらも各学校の実情を話していただいた。全体としてはかなり内容の濃い協議となった。

● Dグループ

まず、超過勤務手当について議論を行った。基本給、調整額等を基本として対応する。ただし、学校によっては、7時間を超えた場合は代休をあてるとか、あるいは定額の金額をあてるといった情報交換をおこなった。結

論的には、手当に関することもあることながら、変形労働によることもしっかり考えていくことも重要ではないかということであった。続いて、長期休暇中の事務室の勤務態勢についての議論があった。各学校により違うわけであるが、交代で勤務とか、通常の勤務とかいろいろな形があり、学校によりいろいろな情報をあげていただいた。3つ目に通勤交通手当である。主に電車の定期代について、どのような交通費を支給するかということで、例えば1ヶ月の定期代を月ごとに支給するかあるいは6ヶ月の定期代を基準として支給するかということである。4つ目に教職員の人間ドックの補助に関する事項であり、各学校は当然、教職員に定期検診を受けていただいているが、それ以外に教職員で人間ドックを受けた場合に学校でどのような補助をするのかという議論である。当然各学校によって異なるが、私学共済から支給されているので、それ以外は学校としては対応しないとか、あるいは定額を定めて、その範囲で補助をするというような情報があげられた。また、ビル管理法に関わる事項で、保健所の査察である。通知された学校の例があげられ、基本的には各学校は、環境測定などは業者に任せていることがほとんどであり、保健所の査察は稀なケースで少し話題になった。最後に、改正労働法契約の対応である。特に講師の契約についてであるが、20年とか長期にわたってしまっている方に、今後どのように対応していくかについて話し合われた。



● Eグループ



まず、授業料未納者への督促について話題となった。担任が行うのか、事務が行うのか、また、各校の対応策、

規定等の意見交換を行った。他に、労働基準監督署に関する件、残業手当、4%の調整手当に関する件などについて話し合われた。労働基準監督署は私立学校は企業であるという見方があり、そのあたりがもう少し変わって欲しいという意見もあった。非常勤の有給休暇、雇い止めの件、そのあたりが残業手当に絡み話題となった。リスク管理の面で、防犯カメラについて話題があがった。侵入者用と学校の内部という学校があり、他校の意見の問い合わせがあった。あとは体育の時間の時の貴重品袋の管理の件である。事務室で預かる学校もあり、金庫で保管する場合もあった。

● Fグループ



まず、基調講演の内容を受けて、印刷に関する実情を各学校に話していただいた。また、アドミニストレーターの状況についての内容に関して、P C等危機管理も含めて専門的な方が必要であるといった話し合いが行われた。竹内先生の講演から評価制度に関する内容を取りあげ、具体的な方法などを情報交換が行われた。教員に関しては授業評価という形がほとんどであったが、事務職員に関してはなかなか手が回っていない学校が多いが、大学付属校のような規模の大きい学校についてはかなりの学校が行っているという現状である。労働問題については、有期労働契約の問題がまず出され、数年先の話であり、切羽詰まっていない感じではあるが、講師に関する就業規則をそろそろ作っていかなくてはいけないというような話もあった。時間外手当に関しては、教員と事務職員とでは多少異なっている学校があるわけであるが、調整手当で対応しているところがほとんどであった。変形労働時間を取り入れている学校も2校あった。日曜出勤、部活等に関しては、手当を支給している学校、ボランティア的な学校、さまざまであった。その中で自習監督手当の支給を求められた事例の報告もあった。ICT関係で、電子黒板の導入報告の中で、最近電子黒板機能付きプロジェクターを導入した学校の報告もあった。最後に、メンタルヘルスの話題があがった。衛生委員会はあるがあまり機能していない学校が多いということであった。

● Gグループ

まず、基調講演を受けて、各学校でコミュニケーションの重要性について話し合われた。竹内氏の講演からは、

アルバイトまで何をすべきか考えているという点で感心したという話であり、また、おもてなしがリピーターを作るということから、接遇面の大切さがよく分かり、来校者の気配りについて考えていきたいという意見が多かった。

細かい内容では、教職員の評価制度、有期労働契約、グローバル教育、ICT活用というところで話し合いを進めていった。評価制度は、ある学校、ない学校両方あり、評価者と被評価者との理解、評価側の能力が大切ということがあげられた。すでに行っている学校は、被評価側に目標を出してもらって、それに基づいて評価をし、フィードバックをしているという事例もあった。また、評価を賞与に反映させるという学校もあった。有期労働契約については、5年後どうなるかということで、模索中というところが多かった。講師を1年契約で行っている学校があり、1年更新では、次年度コマ数が減少した場合、不利益変更にあたるのではないかと労働基署の見解もあり、承諾書をもらうといったことも検討中ということである。超過勤務手当については、みなし労働制を採っている学校もあり、本給プラス10%ということで超過勤務あるなしにかかわらず支給している学校もあり、当然給与規定にも記載しているということであった。変形労働制を採用している学校もあった。グローバル教育については、留学を目的としたクラスを作り、2名のネイティブを採用している学校があり、英語力が高いクラスになっているということである。また、インターナショナルクラスを予定していて、ネイティブを5、6名採用したいと考えている学校もあった。ネイティブ採用については、業者に依頼すると、当たりはずれがあり、優秀なネイティブの採用に関する情報の要望があった。最後に ICT 活用に関して、タブレット端末を全教員に配布し、新入学生に全員購入させて授業を行っている学校があり、トラブルや不得手な先生のために専門の先生が対応しているという事例の紹介があった。



● Hグループ

基調講演を受けて、「事務方とはいわせない」といった点で、実際、事務と教員の距離が離れているなど、一部、入試広報等では合同で会議を行うが、なかなか打合せ等が少ないという学校が多い中、ある学校では事務、教員を含めて、委員会を作っているという事例の紹介があった。コンピュータ委員会、あるいは管財委員会、広

報委員会、その様な委員会を作り、管理職を入れずに委員会を開いており、その中で意思疎通ができていているということである。会議時間の問題もあるが、1時間限定ということで行っているということであり、大変参考となった。



次に共学の話であるが、事務長等は共学の話について聞く機会が多いが、事務にそのような話を伝える、還元するといったことも重要であるという話もあった。次に個別の学校経営から私学のネットワークの重要性について話し合いが持たれた。本大会のような研修会あるいは各都道府県の私学協会の集まりといったところで、ネットワークを作り、さまざまな情報交換を行う。例えば、文書保存規定、労働契約法の規定整備といった規定をつきあわせて情報交換ができればということであった。竹内氏の講演を受けて、接客の極意ということで、話をヒントに学校にどのように生かしていくかということが非常に大切であるということであった。ただ学校でどこまでできるかが問題であり、それぞれの学校で悩むところである。超過勤務手当に関する話題で、実際に労基署が入った学校があり、かなり厳しくいわれたという報告もあった。実際に「36協定」を作っていない学校もあったが、「36協定」は必ず作らなければならないということであった。次に変形労働時間制であるが、採用している学校が多く、その中でさらに時間を超える場合に管理していくという話があった。教員の時間外手当について、支給している、タイムカードを導入しているという学校

もあった。メンタルヘルスに関しては、学校に來れなくなる先生も出てきており、この対応策について話し合いが持たれた。精神科医が月に一度来校している学校の事例もあったが、本件に関しては、どの学校も苦勞しているようであった。最後に、21世紀スキルについて、講義型から対話型への授業であるが、この件については、ICT導入が大きく関わってくるが、タブレット、電子黒板、Wi-Fi 環境の整備については投資金額に係ってくることであるが、今後の21世紀型スキルを見据えると必要なことではないかということであった。

● Iグループ

これから求められる職員像ということで、自由な意見を、と求められた。出された意見としては、仕事に人に依存しているということ、規模は大中小いろいろで違うが、仕事に組織的に対応できていない。これを解決するためにということで、スタッフと管理運営部門でできることが違うということ、スタッフの方ではそれぞれスキルを持って学ぶこと、管理運営部門の方でやるべきことは組織・規定、問題を1つにせず大きく分けて2つでやるべきではないかということであった。今後求められる職員ということで、若い教職員が将来を見据えられる職場にしなければいけない、またはそうあるべきであろう。そのためには何よりも教員と職員の垣根を越えて、情報を共有することだと、コミュニケーションをとることだということまでまとめられた。



運営委員長総括

桜丘中学高等学校 校長 平 美佐子



この東京で8年振りに全国私学教育研究集会が開催でき、またこうして全国各地から大勢の皆様にご参加いただき無事2日間の研究集会東京大会が終了できましたことを心より感謝申し上げます。8年前の東京大会では、まだこの法人管理事務運営部会はございませんでした。しかし、時代の流れや変化とともに、学校運営や学校経営につきましても、経営実務から法人管理にいたるまで、多岐に渡る組織的な取り組みや効果的な運営が求められるようになってまいりました。特に私学の場合は、とりわけ教育現場と法人管理に関わる部門は、車輪の両輪のような役割を担うことから、大変重要であると受け止めております。また、そのような意味からこの『法人管理事務運営部会』が設定されたものと思っております。

今年度の当部会におきましては、日本私学研究所の専門研修会専門委員の先生方のご指導やご助言をいただきながら、『新たな時代を見据えた法人管理事務組織の活性化』のテーマを設定いたしました。

まず、本日の部会では2つの講演がございました。最初の工藤誠一先生のご講演では、私学教育の原点ともいえる建学の精神に基づく独自性、これは「個」というべき私学の存

在意義につながる理念であり、また私学の存在意義は、独自性と多様性であり公立の補完型では生きていけないなど、特色ある教育で各校が発展できるようにと、私学の存在意義と発展の方向性に繋がるお話を頂戴できたように思います。次の竹内昭先生のご講演では、おもてなしの極意という、これはまさにぶれないホスピタリティとロイヤリティにより、相手の心の先を読むことが感動を享受することにつながるなど発想の転換のヒントになるお話がありました。分散会では、各グループそれぞれタイムリーな課題や具体的な悩みなどが挙げられ、特に労務管理・時間外労働・評価などが多かったようです。皆様からのアンケートからも「各校の悩みを共有できたことで、心強く励みになった」との感想も頂戴しております。意見・情報の交換により、テーマを深めていただけたことは、たとえ結論が出なくともそれはそれで大切なことだったのではないかと受け止めております。

まとめといたしましては、やはり一般企業とは異なり、人材育成を目指す教育の場であるということの共有がなされることが前提になるものと思います。その上で各学校の建学の精神を踏まえ、独自性・多様性・先進性が活かされ、同時に組織としての学校運営や現場の活性化が発揮されるべく、具体的な取り組みを通して意識を高め合っていただき、職場の中でもお互いに尊重されることで信頼関係が高まり、意欲・働き甲斐も大きくなる職場づくりを目指していくことが大切ではないかと思われまふ。そのような視点も参考にさせていただきましたら幸いに存じます。

最後に、東京大会での全体会および法人管理事務運営部会における研究会が、各学校の取り組みの一助になることを願い、総括とさせていただきます。ありがとうございました。

ICT活用部会

1 研究目標 ICT活用の最新事例に接し、課題と可能性を探る

いま日本の教育はグローバル化と ICT の急速な進化の渦中にあり、その時代要求によって教育の仕組みまでが大きく変貌しつつある。今後、特に ICT の急速な普及によって日本の教育環境が根底から変わっていくことは間違いないと思われる。政府も2020年までに全国の小中高生に一人一台のタブレット（多機能携帯端末）を持たせる方針を固めた。

私立学校は揺るぎない建学の精神の上に立ち、その時々々の時代要求を先駆的にキャッチした教育を実現するところに存在意義がある。

本部会では最先端 ICT 関連企業各社の協力を得ながら、東京私学の実践事例に接していただき、ICT を活用した学びの可能性と課題を肌で感じ取っていただきたい。そして参加された先生方にとって、ICT を活用した教育をそれぞれの学校に応じてデザインし実現していただく一助となれば幸いである。

2 会 場 広尾学園中学高等学校

3 日 程

時間 月日	91011121314151617											
		45	30	25	10	40	30		40	10	40	
10月17日	受 付	開 会 式	研究授業		昼 食	スカッ ション ・デ ィ ①	セ ミ ナ ー ①	セ ミ ナ ー ②	セ ミ ナ ー ③	セ ミ ナ ー ④	スカッ ション ・デ ィ ②	閉 会 式
			公開授業 1時間目	公開授業 2時間目								

4 内 容

部会開会式 運営委員長挨拶 立教池袋中学高等学校 校長 鈴木 弘

研究授業・公開授業

●研究授業【1・2時間目(100分)】

「医進・サイエンスコース高校1学年7組」

授業者 広尾学園中学高等学校 教諭 堀内陽介

●公開授業

○1時間目(45分)

①「理科 中学1学年6組」

授業者 広尾学園中学高等学校 教諭 榎本裕介

②「英語 中学2学年5組」

授業者 広尾学園中学高等学校 教諭 安藤裕二

③「数学 中学2学年6組」

授業者 広尾学園中学高等学校 教諭 外丸隆央

④「英語 中学3学年5組」

授業者 広尾学園中学高等学校 教諭 藤田磨里子

⑤「地理 医進・サイエンスコース高校2学年8組」

授業者 広尾学園中学高等学校 教諭 木野雄介

○2時間目(45分)

①「歴史 中学2学年5組」

授業者 広尾学園中学高等学校 教諭 高良盛仁

②「理科 中学2学年6組」

授業者	広尾学園中学高等学校教	諭	小島雄紀
③「公民 中学3学年4組」			
授業者	広尾学園中学高等学校教	諭	町田貴弘
④「美術 中学3学年6組」			
授業者	広尾学園中学高等学校教	諭	安部公房
⑤「英語R インターナショナルコース中学3学年7組」			
授業者	広尾学園中学高等学校教	諭	ラッセル・ポーリー
⑥「英語W インターナショナルコース高校2学年9組」			
授業者	広尾学園中学高等学校教	諭	グレイエム・ピール

パネル・ディスカッション

テーマ 「ICTについて」

— 広尾学園の先生と生徒によるパネル・ディスカッション —

パネリスト	広尾学園中学高等学校教	諭	榎本裕介
	広尾学園中学高等学校生	徒	(2名)
コーディネーター	広尾学園中学高等学校教	諭	木村健太

セミナー①

「広尾学園のICT教育について」

講師	広尾学園中学高等学校教	諭	金子 暁
講師	広尾学園中学高等学校教	諭	木村健太

セミナー②

「Googleが考える21世紀の学習環境」

講師	グーグル株式会社エンタープライズ教育部門 日本統括責任者	菊池裕史
----	------------------------------	------

セミナー③

「教育におけるWindowsタブレットの活用方法」

講師	日本マイクロソフト株式会社文教本部産官学連携部	滝田裕三
----	-------------------------	------

セミナー④

「Appleと教育」

講師	Apple Japan合同会社 経営企画本部長・エデュケーション本部長	荒濤大介
----	-------------------------------------	------

※セミナー②・④につきましては諸事情により、研修会報告を掲載しておりませんのでご了承ください。

パネル・ディスカッション

テーマ 「ICTの可能性を探る」

— セミナー講師によるパネル・ディスカッション —

コーディネーター	広尾学園中学高等学校教	諭	木村健太
※パネル・ディスカッション「ICTの可能性を探る」につきましては諸事情により、一部、研修会報告を掲載しておりませんのでご了承ください。			

部会閉会式

運営委員長総括	立教池袋中学高等学校 校長	鈴木 弘
---------	---------------	------

5 運営委員・指導員（順不同）

委員長	鈴木 弘（立教池袋中学高等学校 校長）
委員	鈴木 秋 司（学校法人北豊島学園 理事長）
	佐藤 博 臣（鷗友学園女子中学高等学校 教諭）
	生田 研一郎（中央大学杉並高等学校 教諭）
	勝間田 清 一（明星学園中学高等学校 講師）
	神藤 健 朗（東京都市大学付属中学高等学校 教諭）
	木村 健 太（広尾学園中学高等学校 教諭）

研究授業・公開授業

●研究授業【1・2時間目(100分)】

「医進・サイエンスコース高校1学年7組」

授業者：堀内陽介

●公開授業

○1時間目(45分)

①「理科 中学1学年6組」

授業者：榎本裕介

②「英語 中学2学年5組」

授業者：安藤裕二

③「数学 中学2学年6組」

授業者：外丸隆央

④「英語 中学3学年5組」

授業者：藤田磨里子

⑤「地理 医進・サイエンスコース高校2学年8組」

授業者：木野雄介

○2時間目(45分)

①「歴史 中学2学年5組」

授業者：高良盛仁

②「理科 中学2学年6組」

授業者：小島雄紀

③「公民 中学3学年4組」

授業者：町田貴弘

④「美術 中学3学年6組」

授業者：安部公房

⑤「英語R

インターナショナルコース中学3学年7組」

授業者：ラッセル・ポーリー

⑥「英語W

インターナショナルコース高校2学年9組」

授業者：グレイエム・ピール

※授業者はすべて広尾学園中学高等学校教諭。

【中学1年6組理科】

前時までの学習内容を元に、グループワークで気象予報を行う授業であった。与えられた情報だけでなく、予報の根拠となる知識や情報を自ら Web 等で収集する活動が印象的であった。ICT の活用だけでなく、ホワイトボードには手書きの図を示して説明するなど、それぞれのツールの利用が非常にうまく組み合わされて効果的だと感じた。



【中学2年5組英語】

はじめに iPad のアプリを使って単語の確認を行う。その後、「Who am I?」のアクティビティに入る。機器を活用してテンポよく授業が進む印象であった。また、板書の時間がなく、その分生徒の発言する機会が多かった。



【中学2年6組数学】

反転授業で、事前に講義の動画を見てから学校での授業。はじめに各グループで内容の確認。その内容を「ロイロノート」を活用して、クラス全体で共有する。見学者の多くがこの形式の授業やってみたくていたようである。見学者からは「実際の授業を見て参考になっ

午前中の1時間目および2時間目は、研究授業・公開授業として、ICTを活用した授業の実際を見学することができた。

■1・2時間目研究授業

【高校1年7組医進・サイエンスコース】

それぞれの生徒が精読した英語の原著論文の内容を、分野の異なる生徒間で共有する様子を見学することができた。発表者が発表スライドを提示するだけでなく、聞き手の生徒もスライドを共有している。見学者からは、ICTの活用能力だけでなく「発表や質問のレベルの高さに驚いた」という感想が寄せられた。

■1時間目公開授業

た」「考える時間がしっかりと確保されている」といった感想が寄せられた。

【中学3年5組英語】

長文読解「Amelia Earhart」。最終パートを読むところであった。生徒は iPad を辞書、例文検索、要約のツールとして活用していた。この授業でも「ロイロノート」を使い、自分の考えを、クラス全体で共有していた。

【高校2年8組地理】

5カ国のチームに分かれ、貿易ゲームを行うという授業であった。各チームに与えられる条件は同一でなく、各国の特徴に沿った条件が出される。また条件は時間と共に変化するものもある。それぞれのチームは長所を活かし、またチーム間の交渉で問題を解決するなど、生徒の活動が活発な授業であった。

■2時間目公開授業

【中学2年5組歴史】

産業革命期に設立された企業について調べ、ロイロノートを使用して発表する内容であった。「日本の産業革命について、それが身近に感じられるように iPad をうまく活用していると感じた」という感想が寄せられた。



【中学2年6組理科】

従来の実験器具を使った実験と、iPad や Google Apps などの ICT を活用して結果の共有・ディスカッションがスムーズに進んでいく印象であった。Google Apps を用いる部分では、一つのワークシートを同時編集したり、アンケートフォームで意見を集約したりしていた。結果の共有・議論の集約などに ICT を効果的に活用していると感じた。

【中学3年4組公民】



日本人の法意識と基本的人権について学ぶ授業。

「PingPong」というアプリを使い、生徒の意見を集約する。参加する生徒全てが積極的に意見を表現できる授業であった。見学者からも、PingPong の活用 to 多くの関心が寄せられた。

【中学3年6組美術】

フォルムと色の関係・テクスチャーでの印象の変化などを、iPad のアプリで実際に操作しながら実感する授業であった。「123D Creature」というアプリで3Dモデルを作り、ロイロノートでクラス全体の作品を発表した。3Dモデルのアプリでは、指での操作で直感的に立体を感じることができ、興味ぶかいところであった。

【インターナショナルコース中学3年7組】



「老人と海」の英文を読む。いわゆる本を読む生徒もいれば、電子書籍端末で読んでいる生徒もいて、印象的であった。また各自 PC 等でメモをとりながら読み進めている。当然ながらクラスの生徒は英語のスキルが非常に高く、日本の学校にいることを忘れてしまいそうだった。

【インターナショナルコース高校2年9組】

ライティングの授業。あらかじめ下書きしてきた英文を完成させて行く段階のようであった。全て英語で進められるが、当然のことながら生徒はよく理解しており、その能力の高さに驚かされた。



パネル・ディスカッション

(生徒編) 「ICTについて」

—広尾学園の先生と生徒によるパネル・ディスカッション—

パネリスト

広尾学園中学校・高等学校 教諭

榎本裕介

広尾学園中学校・高等学校

生徒2名

コーディネーター

広尾学園中学校・高等学校 教諭

木村健太

司会

「ICTについて」をテーマに、広尾学園の先生と生徒によるパネル・ディスカッションを始めさせていただきます。広尾学園中学校高等学校の木村健太先生にコーディネーター役として進行いただきます。

●木村健太・運営委員（以下、コーディネーター）

木村です。よろしくお願いします。

医進・サイエンスコースという理系のコースを担当しています。普段は生物を教えています。今日はパネル・ディスカッションということで、中学生2名に来てもらいました。紹介は時間の関係で私が行います。中学校2年生のNさんと中学校3年生のWさんです。

教員は、理科の生物担当で、医進・サイエンスコース中学1年生担任の榎本裕介です。

中学校2年生と3年生、それから中学校の教員の3名でお話をさせていただこうと思っています。12時25分までが中学生です。30分から中学生は授業なので、中学生は帰り、高校生の昼休みになったら高校生が来ます。ここで入れ替えて話をする予定です。今回はノーブランですので、生徒に質問した時に不適切な発言などあるかもしれませんが、ご了承ください。

それでは始めます。まずは私のほうから、少しアイスブレイクも兼ねて、生徒に質問させていただきます。お時間ありましたら、会場の方からの質問もお受けできると思います。そのような流れで進めたいと思います。よろしくお願いします。

それではまず2人に質問です

本科の中学校では、全員1人1台 iPad を持っていますが、実際 iPad を1人1台持っている学校というのはそんなに多くはないのです。中学生として、iPad を1人1台日常的に使っている中で、良かった点と少し困ったという点、いろいろあるかと思いますが、一つずつ教えてもらっていいですか。Nさんどうぞ。

●Nさん

中学では iPad を一人1台持っています。おそらく将来はパソコンをもっと普及していくと思うので、早いうちからこのような ICT ツールを使っているいろいろな

が良い点だと思います。

●コーディネーター

困った点は。

●Nさん

iPad でインターネットも見ることができ、やはり大変楽しいので、休み時間とかも生徒はみんな iPad を見てしまいます。おそらく家でもみんなスマートフォントなどを持っているだろうから、そのためにパソコンとかインターネットを少し見過ぎてしまうということはあるかもしれないです。でも、みんな勉強はちゃんとしていると思うし、大丈夫だと思います。

●コーディネーター

ありがとうございます。勉強はきちんとしているから大丈夫そうですね。

ではWさんお願いします。良かったなと思うことと困ったことは。

●Wさん

まず良かったなと思うところは、先生に質問したいところがある時です。先生も大変タイトなスケジュールなので、聞きたくても聞けないことがあります。なのであらかじめネットで調べたり、また iPad でリマインダーの機能を使って聞き忘れないようにして昼休みに聞きに行ったりしています。そういうところが良いところだと思います。あとは、インターネットの方ですが、これは良い点もあり悪い点もあると思っています。ネットリテラシーですね。そのあたりはいろいろありました。インターネットの掲示板などに不用意な書き込みをしてみたりとか、そういうことも一度ありました。いろいろ校内で議論になり、生徒たちの間でも、これはどうだとかそういう話も出たりしました。やはり自分たちで問題を解決していく力、そういうのもついていく反面、ただ、きちんと統制を取らなければどこに転ぶかわからない、そういう危険が両方にあると思います。しかし、今のところすごく悪いことはなかったかと思うので、今のところは良いと思います。

●コーディネーター

少し面白いと思ったのが、生徒同士でこういうことに気をつけなくてはいけないということをいろいろ話をすることがあるということですが、具体的にはどんなこと

でしょう。

●Wさん

言葉遣いとかもそうです。

●コーディネーター

ウェブ上のものですか。

●Wさん

そうですね。

●コーディネーター

メールとかでもあるのですか。

●Wさん

委員会やクラスのサイトで書き込みする時の言葉遣いとかそういうものはあります。メールは友達同士が主なので、あまり出ないです。先生にメールを送る時は、やはりきちんとした形式で書いたほうがいいねということは話しました。

●コーディネーター

ありがとうございます。榎本先生、教員の立場から見て、良かったところ、悪かったところを簡単に教えてください。

●榎本先生

今、2人の生徒がいてくれたように、我々教員が持っている知識よりももっと自分からやろうという意識の持ち方ができました。ウェブとつながっていることで、先生から教わるのではなくて、自分から情報を取りに行くというスタンスが身につきました。もちろん今までも図書館で調べるということはあったのですが、図書館に行くというよりも手元にある端末ですぐにそこに行けて、自分から学ぼうという姿勢を身につけるという意味で良かったかなと思っています。悪かった点としては同様に、ネット上にある情報の誤りを取ってしまって、それを信じてしまうというリスクがあるということと、今、彼らがいったとおり、つい楽しくて夢中になってしまうということがあります。多分これはどのようなことに対してもあると思うのですが、今の時代、ネットについてのめり込んでしまうというデメリットは少なからずあります。しかし、それよりもメリットのほうが大きいと感じています。

●コーディネーター

ありがとうございます。実は、本日、会場にお越しいただいた皆さまは、日本全国のいろいろな学校の先生たちです。たとえば、iPad でも PC でも、これから、生徒1人1台なり学校に何台なり、導入を考えている先生がここに居られます。実際に使っている生徒から見て、もしあなたの学校でこういうツールを導入するのなら、こんなことに気を付けたいと思いますよというアドバイスがあればお願いします。

●Nさん

先程申しましたように、家だけではなく学校でもインターネットにつながるのので、この学校では iPad に対して機能制限をいろいろ付けています。Apple Store からいろいろ新しいアプリ、たとえばゲームアプリを入れられないようにして、勉強のためのアプリを学校側から選んで入れるということをしています。インターネットのほうでも、プロファイルでアクセス制限がいろいろ付けられていて、怪しいサイトとか、ゲームとかができるサイトも見られないようになっています。そうすることで、学校で学習について調べる場合だけ見られるという感じ

で、少し制限を付けて遊べないようにするというのは良いと思います。

●コーディネーター

補足しますと、Apple Configurator というアップル製のソフトがあり、それを使用してさまざまな監視モードの設定ができるようになっています。アプリのインストールをさせるか、させないとか、そういった部分を選んで、それを生徒の端末に一気に制御されるように設定できるというものがあり、それでいろいろ制限をかけています。それから、ウェブのフィルタリングの話も出ましたが、フィルタリングに関しても、生徒がいまですのあまり細かいことをいいたくないのですが、かけています。昔はサーバーでセキュリティーをかけていたが、今は端末ごとにセキュリティーをかけているものもあります。実は混在させています。いろいろコースごとに使い方が違いますので、生徒の発達段階とコースの使い道によって、教員のセキュリティーとか制限もいろいろ実は違います。

●Wさん

やはり、生徒の立場からすると、最初は受け身になってしまう部分が多いです。iPad を配られて、「iPad を使った授業するよ」といわれて、「へえ iPad 使うんだ」くらいの認識でしかいないことが結構多いのです。なので、学校のほうから、生徒のほうでいろいろ考える時間を作ってもらい、そこでいろいろディスカッションをする。そういうことが、やはり積極的な ICT の利用に繋がるのではないかと思います。

あと、個人的に学校でやっていて感じていることは、もう少しオープンにしてもらいたいなという部分があります。これから先どのような使い方をしていくのかということが少し不透明な部分もあって、多分その辺を親も結構心配しているのです。どのように使っているのによく聞かれます。どのように使うかというビジョンを出していただけるとありがたいと思います。

●コーディネーター

この後我々が話をしますが、ここで良いことをいわれてしまうと話しにくくなりましたね。

では、会場から質問があればお願いします。生徒たち向けに、お手柔らかな質問をお願いします。

●参加者 A

生徒のお二人に聞きたいのですが、授業中にいろいろなアプリケーションを使っていると思うのですが、そのアプリケーションの操作法とかいうものを習熟するのは結構大変でしたか。それともわりとすぐに慣れてしまいましたか。

●Wさん

中学1年生の秋頃からずっと使い続けているのですが、やはり最初の1、2カ月くらいは、操作に苦手な、あまりこういうツールを使わない生徒もいますので、他の生徒に聞きながらというような感じでだんだん慣れていく感じでした。今はもう使って2年くらいですが、現状、新しいアプリを入れてもらっても、自然にみんなで使い方を教え合ったりという状況ができていて、特に支障が出ることはないです。

●コーディネーター

実際我々も、生徒向けにアプリの使い方とかセミナーみたいなことをしたことはないです。生徒たちは我々よ

り全然早いですから、少し使ってみて、いろいろ分かってきて、できる生徒が出てきます。そうすると教え合っ
て広まっていくということがメインです。他にもご質問
がございましたらどうぞ。

●参加者B

授業中におそらく iPad やパソコンとかを使った授業
があると思うのですが、この授業のこういう使い方がす
ごく楽しかったとか、すごくためになったということと、
できれば、この使い方、実は嫌いなんだとか、そういう
ことがありましたら教えてください。

●Nさん

授業で iPad を使ってできるということの一つの利点
として、一つではないですが、データを簡単に伝えられ
ることがあります。紙で配るとコストもかかるし、紛失
してしまう生徒もいるけれども、データにしてメールで
それぞれの iPad に送れば、iPad をなくすということは
そうそうないし、データとして送っているので印刷代も
かからないという感じです。あと、授業中では、iPad
だけではなく、プロジェクターなどもいろいろ完備され
ているので、iPad でそれぞれが Keynote、パワーポ
イントのようなものでプレゼンを作ったり、簡単に動画
を作ったり、いろいろ書き込んだものを先生に送って、
プロジェクターで前に映して全員で見るという方法は、大
変効率的で良いと思います。

先生によって、iPad などをどんどん使っていこう
という先生もいるし、ホワイトボードに手書きで書いて、
それを生徒がノートに写すというやり方の授業もありま
す。悪いという感じの使い方は特にないです。

●コーディネーター

では中学生、授業もそろそろ3分前になってしまった
ので、これで中学生は退席します。皆さん拍手をお願い
します。

ここからは高校です。中学生は本科といわれる普通の
コースの生徒たちでしたが、高校は医進・サイエンスコ
ースの1年生です。高校1年生のKさんです。

医進・サイエンスコースでは chromebook を1人1台活
用しています。隣にいるのが、I さんです。

彼はインターナショナルコースにいます。インターナ
ショナルコースは帰国生が多いクラスです。オールイン
グリッシュで全ての授業を受けているクラスです。

MacBook Pro を使っています。

今回も私から最初に少しアイスブレイクを兼ねて質問
させていただきます。先程中学生にも聞いたのですが、
今 chromebook、それと MacBook Pro を1人1台持つ
ている体制ですが、良かったことと困ったことを聞かせて
ください。

●Kさん

私が chromebook を使っていて良かったなと思った点
は、インターネットがあることで、たとえば、授業で「こ
れって何だろう」と疑問が出た時にそれをすぐに解決で
きるところです。先生や友達が分からないことでも、イ
ンターネットには、世界の最先端の情報が載っているの
で、それを自分で疑問に思った時にすぐに調べて、良い
ページが見つかったらすぐに解決できるという、疑問か
ら解決までのサイクルがすごく早いところが、自分の身
につくなと思います。

困った点は、実は私の家に Wi-Fi がなく、chromebook

は学校では使えるのですが、家でなかなか思うように使
えないところがあります。ですから、そこを改善するた
めにもっと公衆の Wi-Fi が増えてくれればと思います。
たとえば、Wi-Fi が使えない状況でも、インターネット
に接続できれば、先程話した疑問から解決のサイクルが
家でもできるし、メールとかも、先生と連絡を取りたい
時、家で chromebook を使って連絡ができるので、便利
だと思います。

●コーディネーター

家には PC はあるのですか。

●Kさん

家にはパソコンはあります。Windows です。

●コーディネーター

メールあるいはインターネット自体はできるけれど
も、chromebook が家では使えないということですね。

ちなみに本校では、セルラーモデルというのですか、
普通のウェブに勝手につながってしまうようなものは全
部禁止にしています。原則、生徒たちに買ってもらって
いるのは全て Wi-Fi モデルです。というのは、一つは
セキュリティ面です。学校で使う時に学校のサーバー
を通してほしいということで、フィルタリングしたりと
かログを取ったりとかという意味で、全部 Wi-Fi モデ
ルで進めてきています。ですから、家に Wi-Fi 環境が
あるないということはあるのですが、コンテンツはほと
んどウェブで作っています。ウェブベースのコンテンツ
を作っているの、たとえば、Windows や Mac からア
クセスしても、利用しやすいようなかたちをしています。
なるべくデバイスに依存しないようなかたちを目指して
います。

●Iさん

私たちは授業で結構自由に MacBook Pro が使えるの
で、MacBook Pro で、先生が話していることをノート
に取ったりしています。タイピングも書くよりも速いし、
あとは家でもどこでもクラウドなどにつなげれば見られ
ると思うので、紙の節約にもなりすごく良いと思います。
困った点としては、いろいろエッセーとかプレゼンなど
で調べ物の宿題を出されるのですが、どういう情報を信
じたらいいのか、これは信じていいのか、これは駄目な
のかというように疑心暗鬼になったりするのが少し困っ
たところです。

●コーディネーター

結構 eco な意見が多いですね。紙の節約になるという
ことがあります。実は我々教員もあまり紙の資料を使
っていません。教員は教員のグループウェア、サイボウ
ズを使っていますが、生徒たちとやりとりする際は
Google Apps や Moodle を使っています。という感じで
グループウェアもいろいろ混在している状況ではあるの
ですが、その中でデータのやりとりをしているというの
が現実です。先程中学生と話していた時に、インターネ
ットにはまって、それが悪影響というか、1人1台で持
った時に困るという意見が出たのですが、高校生としては
どうですか。

●Iさん

インターネット自体はおそらく、依存性のあるものだ
と思います。すごく良い面もあるのですが、悪い面とし
ての依存性もあると思います。しかし、しっかり、イン
ターネットを使えて、依存しすぎないようにいろいろ自

分で考えてやっていくことが必要だと思います。

● Kさん

私も、インターネットは確かにいろいろなページやアプリなどが出ているので、はまってしまう気持ちも分かるのですが、やはり、勉強や、たとえば学校に関する調べ物をする時と遊ぶ時をしっかりと分けてデバイスを使っていくのがすごく大事だと思っています。中学生はiPadでアプリを入れてしまったりということがあると思うのですが、高校生は中学生よりも自立精神があると思うので、自分で律して使い分けるといったことがとても大事だと思います。

● コーディネーター

安心しました。では先生、先程ウェブで集める情報の信ぴょう性という話がありましたけれども、先生には医進・サイエンスコースの情報の授業にもチームティーチングで入ってもらっていますね。情報の授業で、情報の信ぴょう性という話を生徒に何かされていますか。

● 榎本先生

授業の中で、多くの学校で取り上げられる例も聞くのですが、ニセ科学をテーマにしています。マイナスイオンとか、つい最近だとウイルスブロッカーとか、首から下げる、ウイルスを防御しますというものです。あのような、消費者庁が止めてしまったような、ニセ科学と呼ばれるものを題材にしています。思考が停止して簡単に考えさせようとする情報が出回っている。それを授業内でネタにしながら、では何を信じたらいんだということですね。専門家がいつていることが正しいかといわれれば、どこかの大学教授という名前が付いていても、実際にいつていることが滅茶苦茶だったりということもある。その中で情報が信用に足るものは何か。論文、学術雑誌にきちんと査読が入った論文が、信じるに値するものの一つだということで、情報の資料の中でそこをひとつ提示しています。もちろん、全ての考えの基を論文にしようとして、おそらく考えるサイクルが止まってしまう。少しは妥協点として、これぐらいなら信じていいのではないかということを出しながら、本当に信じていいのは学術論文、査読の入ったものだということを繰り返し話しています。高校1年生、2年生の情報の授業の中では、医進・サイエンスコースの高校1年生で最初に、学術論文を1本読むのですが、そのようなものを取り入れながら、信ぴょう性について話をしています。

● コーディネーター

これは理系の医進・サイエンスコースの話です。本校の生徒全員が学術論文を読んでいるわけではなく、理系分野に特に強い興味、関心を持っている子たちが集まるコースがあるのです。その子たちの話です。どちらにしろ、情報の信ぴょう性を、時と場合によって使い分ける必要があるかなとは思っています。友達同士でする時の話と、今出てきたような、たとえば、サイエンスの研究テーマを決める時の情報とはおそらく信ぴょう性もそのレベルも変わってくると思いますが、結構生徒たちはその辺をうまく使い分けています。それを日常、生徒たちの中で感じられて、いろいろ失敗することもあるかもしれないけれども、トライアンドエラーを繰り返して正しく育っているというのが、実際、生徒と話していて感じるとです。

では、せっかくなので、医進・サイエンスコース、イ

ンターナショナルコースの高校生2人に質問がある方はよろしく願いいたします。

● 参加者 C

二つほど質問させていただきたいのですが、まず一つは **chromebook** のことです。授業を拝見していて、授業を受けている生徒はほとんど教科書とかノートを出してなくて、全部 **chromebook** に書き込んだり、随時調べたりとかされていたのですが、確か **chromebook** は今年から採用されたのですね。まだ半年ほどしか経っていないのですけれども、そういう状態はすぐ慣れられたかどうかということと、教科書やノートはどのように使っているかということをお聞きしたいと思います。

● Kさん

そうですね。**chromebook** に慣れるのはあまり時間が掛からなかったです。家でもわりと小さな頃からパソコンがあったので、インターネットに慣れるというのはすぐでした。教科書は基本的な事項といいますが、科学や数学とかの基本的なところは載っていますが、発展的なところとか、あとは研究で明かされた最先端のところというのは載っていないので、そのプラスアルファの部分を、インターネットを使って知ることができるというのは、すごくいい経験をさせていただいていると思います。

● 参加者 C

二点目をお願いします。先程、論文をインターネットで検索して読まれるとお伺いしたのですが、たとえば、医進・サイエンスコースでしたら、専門書を読んでレポートを書くとか、それとインターネットの情報を組み合わせていくとか、そのようなことをされていると思うのですが、大体書物とインターネットとどれぐらいの割合で活用されているのでしょうか。その辺り、お聞かせいただけたらありがたいと思います。

● Kさん

私は少し忙しくて、あまり図書館に行く機会がありません。図書館には専門書とか図説のすごく詳しく載っている本とかがあると思うので、見てみたいと思うのですが、やはりなかなか使えない部分もありまして、なので結構 **chromebook** の割合が今は多くなっています。

● コーディネーター

関連して、インターナショナルコースは洋書を使っています。洋書もなかなか在庫がないのです。洋書の情報と **MacBook** でのウェブを一緒に使っていると思うのですが、その辺りはどうですか。

● Iさん

基本的にレポートなどを書く時は、教科書もあります。ネットの情報を使います。大学のサイトなど信ぴょう性のあるサイトに行って、たくさんの情報を仕入れて、分析して、レポートとかプレゼンを作成します。

● コーディネーター

やはりウェブの情報は、特に教育で使うようになると、信ぴょう性をどう担保するのかということのを少し考えなくては行けないという気がします。生徒側のリテラシーを高めるのもそうですが、今ウェブ上でどう教育的にフィルタリングするかとか、キュレーションするかとか、そういった部分も考えなくては行けない問題かなと、生徒たちの話を聞いていると思います。

そろそろ時間となってしまいました。高校生の2人に拍手をお願いします。

セミナー ①

「広尾学園の I C T 教育について」

広尾学園中学校・高等学校 教諭 金子 曉太
 広尾学園中学校・高等学校 教諭 木村 健太



●金子 曉先生

今朝、本校の校長から話があった時に、月に1回は見学の方がいらっしやると申しあげましたが、それは校長経由で来た見学の方が月1回くらいだと思います。正直申しあげて私の方で週に2、3件対応させていただいています。それは企業の方も、学校関係の方もいるという状況です。

それでは時間も限られておりますので、進めさせていただきたいと思います。

公開授業をご覧いただきました。その中で ICT を全く使っていない授業もあれば、一部だけ使っている授業、あるいはずっと使っている授業、いろいろあると思うのですが、その辺のところはそれぞれの教員たちが一番良い授業のパフォーマンスができる姿、それがどうなのかということがやはり第一にあると思います。ICT を使うことによって授業のパフォーマンス自体が落ちるとするのは絶対避けてくれということを学校としては考えております。

9月に、NHK クローズアップ現代という番組の中で韓国と佐賀県の事例をテーマとして扱われていたらしいのですが、どういうわけか私どもの学校に一つの可能性を生み出したらしく、取材に随時入っていただきました。今からご覧いただきますのはその NHK の番組の中の本校に関するところだけ送ったとしてご覧いただきたいと思います。

—映像 省略—

放送されていたのは短い時間だったのですが、それに対する取材の回数は大変な回数になりました。その時

に苦勞して対応させていただいたのですが、最後の尾木直樹さんがまとめて話した言葉、これは本校にとっても大きなヒントになりました。そういった意味では対応してよかったなと思っています。私たちが今まで取り組んできて、今一応統括している、あるいは私なりに到達している考え方というものを少し説明したいと思うのですが、まず ICT があって、どうしても我々教員というのは、この部分だけに目がいきがちになってしまいます。たとえば今日授業を見ていただくという場合もこの分野ということになるとは思うのですが、実はああいう授業をやったりしている、あるいは震災の発表をしているその背景にあるのは、生徒同士、あるいは先生と生徒との情報共有であったり、そういった要素というのが背景としてその上で授業があるというようなことが考えられると思います。ですから活用体ごとに関してもこちらの側面です。こちらを外して考えることができないだろうというふうに思います。特にこちらの面に関しましては Google Apps などを中心に活用しているというのが学校の姿ということになると思います。ですから、従来であれば、ここだけのことに限られていた枠が、情報共有を含めて枠が広がるということになってくると思います。これは授業等に関してということになってくると思いますけれども、ICT の場合こちらは活用する。ユーザーとして活用するだけで終わるのだろうか。そうすると学校というのは、質の高い消費者であったり、質の高いユーザーを育てるのが学校なのかということになってしまいます。これで終わり、負けではないかと思うのです。もう一つのところは何かと云ったら、ICT の場合は創造的な側面にどう踏み込んでいくかということになっていくと思います。ですので、こちらの方は授業の枠とは完全に離れてしまいますけれども、本校の中で既に行っているもの、プログラミングとか、デジタルアプリケーションとか、そういったような希望性の講座、こういったもので彼らにその入り口に入ってもらいたいというような考え方をしています。ですのでここまでやってくると、それまでの教員活動の枠というのはここまで広がります。今日は時間がないので、ご覧いただけないのですが、医進・サイエンスコースの生徒たちがサポートして、講座とか、あるいはオールイングリッシュの実験と、非常にハイレベルな恐らく一般的な学校では考えつかないようなそういった実験講座というところま

で踏み込んでいきます。非常にハイレベルですけれども、それはやはりベースに ICT の活用があって成り立っている講座ということになります。そこまで含めると、ここまで教育活動の枠というのが広がるということなのです。我々の10代の考え方の枠の中でやっていますとここまでしか行けません。でも ICT がベースにあって、活動を広げていこうとするならば、これからの学校の教育活動の可能性というのは少なくともここまでは広がるということが証明できているかと思いますが、今後を考えていきますと、この ICT をベースにするということによって、このあとどれだけこれが拡大していくか分からない。そういう意味では今の学校教育というのは行き詰まっているといわれますけれども、こういう考え方をした時に、おそらくこれほどのチャンスというのが学校の目の前にあると、そういう時代はそうそうないと思います。そういうチャンスが我々の目の前にあるんだというような認識の仕方を私はしています。逆をいいますと、これだけの可能性を広げる ICT に背を向けたりするならば、おそらくそういった教育機関に将来とか未来への可能性というのは考えられないというのは私たちの今の考え方ということになります。この創造的なところへ踏み込んでいくという一つのきっかけとなりましたのは、ここががその会場だったのですが、Google のエリック・シュミット会長が高校1年生と高校2年生の生徒たちとトークセッションをしました。その時に彼らは来たのはプログラミングを日本に広めたいと、創造的な側面に踏み込みたいということでした。その様子を少し見てください。

—映像 省略—

ICT 長く活用プラス想像ということで私のほうのお話以上とさせていただきます。ありがとうございました。

●木村先生

こんにちは、医進・サイエンスコースの責任者をしております木村と申します。よろしくお願いします。私からはより実践的な教育の現場でということ、話を進めさせていただきます。特に理系コースということもあり研究活動などの取り組みについてもお話します。

先程から学術論文の話が出たり、マニアックなプラナリアの話が出たりしていましたが、このレベルの研究活動は、ICT というツールがなければ出来なかったと感じています。ICT を導入する際には、その目的が大事だと思っていますので、そこからお話します。

我々の場合は理系のコースがまさに立ち上がる時でした。今後理系のコースで研究的なことをするためには、Web の情報が必要で、生徒一人一人がすぐに Web で繋がる環境が必要であるということからスタートしました。

本校においては、医進・サイエンスコースと本科コースとでは目的としているものが違いますし、おそらく学校ごとにおいてもそれは違っていると思います。そこで今日は、ただとりあえず iPad は導入したけど何をすべきかわからないということにはならないように、それらを導入する際は、まず何が必要なのかということをとくさんの視点で見つけられるようにしたいと考えています。さまざまな観点でさまざまな目的を見つけた上で、

それに適したツールが導入されるということが正しい流れなのかと思います。

そういった意味で、我々が最初に iPad 導入へと移行していった背景について少しだけお話をさせてください。

理系のコースですので、多くの生徒たちは入学時点からメディカル・サイエンス系の学問に興味関心を持っているのは間違いないです。そして我々教員と生徒たちの共通認識として、中学校3年間、高校3年間というスパンだけでものを考えるのをやめ、大学入試はゴールではなくて通過点に過ぎないという考えをもって進めてきました。この先企業に行く、大学や大学院に行って社会に出る、企業で働く、そういった流れの中で考えることで、将来どのような力が必要なのか。そういうスタンスで学んでほしいと思っています。このようなコンセプトを持って進めてきました。

では具体的にどのような形で教育活動に落とし込むのかということなのです。私たちは、授業、研究活動、中高大・産学連携という3つの柱を大切にしています。この3つの柱を支えるツールとしての位置づけが、ICT といったものではないのかと思っております。少なくとも我々はこのような考えで研究、授業を進めています。

3本の柱の内、授業は、生徒が学校で一番長い時間を過ごす場としてとても大切です。そこでは本校独自のオリジナリティを加味しております。そして研究活動については独創的な活動ですので、後ほど改めて紹介したいと思います。まずは簡単に、高大・産学連携について、大学そして企業の皆様よりたくさんのお力添えをいただいていた事例を紹介します。

私たちは「本物」ということを大事にしています。生徒たちにできるだけ本物に触れてほしいということ、本物に触れると、まず生徒たちの発想のスケールが変わってきます。この発想のスケールが変わるということが大事なのです。そして正しいキャリア観を持ってほしいと思っています。たとえば私は、医学部に行きたいという生徒をたくさん受け持っています。その生徒たちに対して、お医者さんというのはこういう仕事だよと一生懸命語りますが、やはりどこか嘘っぽくなってしまう。私は医師免許を持っていないですし、お医者さんとしての生活をしたことがないですから。やはり、私が語るより実際の臨床のお医者さんなり研究のお医者さんなりが話すほうが生徒には響きます。

次に、研究活動について説明させていただきますが、本校の生徒たちがなぜ学術論文を読むかといいますと、研究テーマを自分たちで考える際に必要だからです。

研究テーマを決める時には、いくつかハードルを設けています。もちろん自分がやりたいことをやればいいのですが、ただやりたいだけではテーマとして認められないと伝えていきます。理科の先生がもし今日いらっしゃっていただいたらわかりたいだけと思うのですが、研究テーマを決める際は、社会のニーズを捉えることも必要になってきます。自分がやりたいという理由だけでは研究テーマとしては成り立たず、社会において求められているかどうかと意識する姿勢も大事なのです。また現実として設定したテーマの達成が現段階の技術では難しいということもあります。よって自分がやりたいことであり技

術的に可能なことであり社会から求められていることであるというこの3つを実現させるテーマを設定することが理想的です。自分のやりたことが社会貢献につながるとしても技術的に達成不可能であればそれはただの夢です。また自分がやりたい研究テーマであり技術的に何とかできそうであったとしても社会から求められていなければ、単なる趣味といえるでしょう。そういうのは家でやりましょうということです。また、社会で求められていて、技術的にもできる、でも自分がやりたいことではないという場合もあるでしょう。これは大人になったらやらなくてはならないこととしてたくさん出会いますが、今は高校生なので、自分がやりたいテーマにすれば良いんじゃないと生徒に伝えています。

とにかくこの3つの合わさった真ん中、これが研究テーマになるはずですが、ただ結果として生徒が設定したこの中央部分というのはおそらく20年、30年ぐらい前に誰かがやっていたことが多いです。なので、新規性をきちんと担保しなければいけない。ここが重要です。学術論文を読み解いて、人類の知識の端まで行かないと、この新規性が担保されているかどうかを確認できないんです。こういった形でようやく生徒たちがテーマを設定する。非常にハードルが高いことです。なので全員が全員テーマをできなくても良いと思っています。しかしまずこのステップをこなしてもらいたい。そんな想いで研究活動を進めています。

さて、研究活動自体は任意の活動になっています。昼休みや放課後、またお休みの日など好きな時に来てやりなさいといっています。ただ、一人1本は論文を読もうと伝えています。ここだけはマストです。最先端の研究に取り組むためには論文を読むことが必要なことだけは全員に知ってもらいたいんです。

また、学会に報告できるレベルのテーマを研究していくには、やはりそれ相応の機材が必要になってきます。我々には、生徒たちの研究に必要な機材の環境を整える必要が出てきました。しかし本校はもともと女子校であり理系を目指す生徒はほとんどいませんでした。機材も何もないところからのスタートでした。しかし逆に何もなかったからこそ一からスタートし、研究レベルの機材を揃えることができたともいえます。

それから、研究というのは実験結果が出て終わりではありません。社会に還元するところまでが研究だと教えていますので、生徒たちが自分たちの研究成果を発表する、報告する機会もたくさん設けています。文化祭でも、読んだ論文についてプレゼンをしています。また夏には海外に行って、英語でどうプレゼンするか、ディスカッションするかということをやります。スタンフォード大学にも伺い、現地の研究者を相手にディスカッションするというようなこともやっています。半月ぐらいアメリカに行ったからといって彼らの英語が上手になるとは思っていません。ただ日本のプレゼン形式、ディスカッション形式とアメリカのそれとは少し違います。そういったことを含めて生徒たちにはさまざまなものを見てもらいたいのです。何が良くて何が間違っているのではなく、まずいろいろなものを見てもらいたい。そしてその中から自分たちはどれを選ぶか、そういった考え方を持って

ほしいのです。答えが一つではないというところから始まり、さまざまな違いを発見できる。いろいろなことを見て体験して考える、彼らにそういう機会を提供したいのです。

それから、自慢話になってしまいましたが、研究に関して本校の生徒たちの活躍ぶりを少しご紹介させていただきます。非常に優秀な生徒たちだと思っております。たとえば科学の甲子園という大会の生物領域の筆記試験において東京都で1位になりました。また先日、明治大学の先生方が見てくださる現象数理の研究会において、最優秀賞をいただきました。つくばサイエンスエッジで江崎玲於奈先生から賞をいただいて、「君はノーベル賞をとれるよ」といわれた生徒がおります。そして面白いところでいえば学会の話があります。今、学会には高校生枠というものがあるのですが、本校の医進・サイエンスコースの生徒たちは高校生枠では申し込みたがらず、一般枠応募したがるのです。「データがないくせに偉そうなこというんじゃない」なんていうのですが、ある生徒が日本数学会という数学界の中で一番大きな学会でオーラル発表をしちゃいました。このような頼もしい生徒たちがいろいろ出てきました。

こういう活動が続けていることを私たちから発信することもあります。最近ではいろいろな方々が注目して、力を貸して下さるようになってきました。それが原動力となって、学校だけではなかなかできないことも、いろいろな方々のお力添えをいただくことで可能となりました。生徒たちに本物と出会う機会を提供できるようになり、知識だけでなく、考え方といったところを伝えられるようになったことは大変ありがたく感じております。

医進・サイエンスコースでは昨年、第一期生が卒業しました。研究ばかりやって受験は大丈夫なのかという声もよくあるのですが、本学園90余年の歴史の中で初めて東京大学の合格者が出ました。そういった意味でも、今まで続けてきた研究的な考え方というのは、受験にも通用し、生徒のために、また日本の未来のためになっているのではないかと。最近ぼんやりとですが、ようやく自信がついてきた感じです。

以上がバックグラウンドです。少しでしたが、地盤というか、こういう ICT がなかったら実現しなかった背景についてご紹介させていただきました。

次に、今回の本題であります ICT 活用についてご紹介させていただきます。研究的な学び方をする中で、ICT をどのように導入してどのように活用しているかについてです。

これは、「情報」の授業で使用しているスライドです。

— 図 略 —

動物が描かれた壁画から始まり、現代の情報社会にいたる。「今はこんなにすごいよね。Web 上に情報がこんなに溢れているよね。」という図です。Web に溢れている情報量に比べたら我々の頭の中に入っている情報量は非常にちっぽけです。生徒が知っていることと我々が知っていることに大差はありません生徒と教員の知識格差というのは「誤差でしかない」という話を情報の授業でもらっています。教員というのはややもすると「私

は知識がある。あなたは知識がない。だから私は教える人。あなたは教わる人。」というような図式を考えがちです。まずはそこを壊すというところから始めました。医サイの生徒たちは手元に Web に繋がるツールを持っています。よって教員が何か間違ったことをいったらすぐに指摘されます。「先生、Wikipedia に違うこと書いてありますけど」となるのです。このことについて、先生方のいっていることが正しいといってしまうたら成立しないわけで、何が正しくて何が間違っているか先生も知らないことがあっていいのです。ただし、何か調べものをする時に、どうやればその正しい答えに効率よく辿り着けるかとか、信ぴょう性をどうやって担保すればいいのかなど、その使い方を教えてあげる。すなわち考え方を教えてあげるといのが重要なのです。そこを大切にしましょうということを医進・サイエンスコースの先生たちにお願ひしています。

今お話している内容は、まずこういうことです。

生徒は Web 上にあるものを答えだと思いがちです。ですからそれをコピーしたものをレポートとして出します。すなわち生徒たちは Web 上に書かれてあることは正しい、もしくはきっと正しいだろうと思っているのです。そこで生徒たちにはまず、Web にある情報というのは、答えではなく、考えるための材料でしかないと教える必要があります。先ほどのアメリカと日本のプレゼンの違いでもお話しましたが、答えがないものもたくさんあります。もちろん理系分野には答えが一つというものもあるかもしれませんが、今教科書に載っている事実ですらひっくり返ることがあるわけです。私は生物を担当しているのですが、生物学の通説などは結構ひっくり返ってしまうので、そういったことを踏まえて生徒たちには情報に触れてほしいと思っています。生徒たちは学術論文を読みますが、学術論文はそのほとんどが英語で書かれています。すると世界で一番新しく一番正しいであろう情報がほとんど英語で書かれてあることに気づきます。その結果、生徒たちの英語の授業を受ける姿勢が変わります。自分たちが将来理系の道に行こうとするのであれば、英語ができない場合かなりの情報不足になってしまう。だから英語の授業をしっかり受けようと、授業がリンクしてくるのです。

それから先ほど生徒からも話がありましたが、信ぴょう性を大事にしましょうということです。これはひとつ目のものとも繋がりますが、この情報の発信元はどこかとか、あなたが今この情報を元に考えようとしていることはどんなレベルとか、そういった意味で信ぴょう性を意識させることもあります。

また、モラルも含めて、Web 上で、高校生、中学生が被害者にも加害者にもならないためには、どうすべきかを意識することはとても重要です。これは我々教師側だけでなく、生徒たちと一緒に考えていくことが大事なのではないかと思っています。

情報機器を導入される時に、皆様おそらく安全面をご心配になられるのではないかと思います。それから、先程の生徒の話にもありましたように、インターネットにはまってしまうということがあります。ゲームをたくさんやってしまうとか遊んでしまうとかいったようなこと

もご心配されると思うのです。

私は、学校が情報機器を導入するにあたっては、まず正しい「線引き」をすることが大事だと思っています。たとえば生徒が授業中に iPad で Web 上の漫画を読んでいたとします。しかしこれは iPad がなくても起こりえます。iPad がなくても授業中に漫画を読む子はいるわけで、これは iPad が導入されたから起こったことではなく、授業中に漫画を読む行為自体が間違ったことなので、そこを注意します。これって普通の生活指導の一環だと思うのです。なので生徒たちにも iPad のことではなく、漫画を読んでいるという行為そのものについて叱ります。

たとばある生徒が Web の掲示板に不適切な内容を書き込んでしまったとします。これは Web 上の問題なのでしょうか。普通の生活指導の範疇なのでしょうか。ここを考えたいのです。その線引きを意識しながら、ルールを決めたり生活指導に繋げていただければと思います。そうすることで生徒が自ら考えることができるようになってほしいと思うのです。

そしてもう一つ大事にしていることがあります。先ほどの生徒もいってましたが、彼らは家に帰れば自分のスマートフォンを持っています。家にパソコンもあるでしょう。学校を離れればいくらでも、たとえばいかがわしいサイトなどにいくらでもアクセスできる環境にあり、危険に晒されているといえるでしょう。生徒たちはネット上で被害者にも加害者にもなるような状況に、今、既に晒されているのです。スマホの存在を知らない子、PC でインターネットに触れたことがない子というのはおそろくないと思うのです。なので、学校で iPad などを禁止することでは、確かに我々がそういった部分に責任を取らなくてよくなるのかもしれませんが、生徒たちを本当に守ることにはならないような気がしています。

実は本校でも導入の際は揉めました。しかし、生徒たちの安全をどう考えるのかということと一緒に考えながら進めることのほうが大切なのではないかというスタンスが、導入への一歩を後押ししてくれました。皆様が導入を検討される際は是非この辺りを踏まえていただければと思います。

次に生徒たちが実際にどのように ICT ツールを使っているのか、事例を紹介させていただきます。（このスライドでは）生徒たちは iPad を使用しています。また作業によっては PC を使います。論文を読む時、iPad はすごく便利です。Web をすぐに見られるし持ち運びも便利で動画も撮れます。生徒たちも iPad の便利さを実感しています。ですが彼らは紙もちゃんと使います。授業中にノートをとったほうが効率が良いと思えばノートをとるのです。なのでどの場面でもどのツールを使用するか、ここでも我々が決めるというよりも、彼らが日常生活の中で考えていくというスタンスが大事なのではないかと思っています。今後、今あるデバイスが変わっていくでしょう。インターフェースも変わると思います。キーボードではなく、映画「マイノリティ・レポート」的な入力デバイスを使うような世界が訪れるかもしれません。たとえどういった形になろうとも、

その場その場で生徒たち自身が考えて選択していけるような、そういった本質的なものを育てることが大切なのではないかと思うのです。

生徒と我々が実施にやりとりしている画面(略)です。我々と生徒が使っているグループウェアは「Google Apps」です。このグループウェアはおそらく学校によって使い方がいろいろ変わってくることでしょう。実際のところ当校の教員は「サイボウズ」という別のグループウェアを使っています。それとは別に「Google Apps」も動いているのです。つまり医進・サイエンスコースの中では、「サイボウズ」と教員用の「Google Apps」が動いています。いろいろなグループウェアでそれぞれいいとこ取りで使用しているのです。もちろん統一したほうがいいとは思いますが、医進・サイエンスコースはお試しチーム的なところがありまして、まずは医進・サイエンスコースで試してみたら他でも導入を検討するということがあります。

端末もそうです。私は Windows を使用しています。ただし生徒は chromebook を使用しますから私は chromebook も使います。また2年生以上は iPad を使っていますから私は iPad も使用します。いろいろなデバイスを使いながらそれぞれの使いやすいいところで使い分けるのです。

また医進・サイエンスコースでは生徒たちが所属するカテゴリによってグループ分けをしています。彼らが所属している自分の研究チームとか、自分のクラスなど、メーリングリストのようなものがあるのです。教員用の画面からはそれらがすべて見られるようになっています。たとえば「植物」、「動物」というグループがあります。「動物」という名前が付いている研究チームの生徒たちは、この「動物」というタグが付いているものしかメールが来ないのです。このようなやり取りをしています。実はこれをやることで連絡手段が拡がりました。学校において今までは朝礼と終礼ぐらいしか生徒全員と顔を合わせる機会がなくて連絡手段がなかなかなかったのですが、また保護者ともそうですが、このような形で繋がりが増えたといえます。

たとえばある生徒は、その日の実験でやったことを研究ノートといて残しています。そのノートを、部活動などでその日実験に参加できなかった生徒たちはいつでも見ることができます。その日の実験でどのようなことをやったのかがわかりますし、教員も共有できます。「ここってこういうふうに行ったほうがいいんじゃない」などアドバイスもできます。実験結果を添付できたり、Google フォームというものを使用するとアンケートも取れるのです。生徒たちにアンケートをとってボタンひとつで結果を一気に集計できる便利なツールがあるので。それらを小テストに使ったりもします。問題ごとの正答率もすぐに把握できるのです。

失敗例としては、ポータルサイトをつくったのですが、これは生徒に見てもらえませんでした。一生懸命サイトを作っても生徒が見てくれないと意味がない。メールも最初の頃はチェックしない子がいました。そこで、メールをチェックしてもらうために、突然小テストが届くということにしようと、Google フォームをメールの

中に埋め込んで作りました。すると、生徒たちは「おい小テスト来てるぞ」、「うわーっ」となるのです。なぜそのように急いでやるかというと、実はパソコンなり iPad を見えていますから、答えがすぐに調べられるのです。Google、Yahoo など検索するとたくさんの情報が出てきます。調べてもいいのです。調べてもいいのですが、点数は先着順にしています。小さい字で「先着10名2点、次の10名1点」と書いてあるのがわかりますか。だから答えをもともと知っている生徒はすぐに答えられるのですが、調べている生徒は時間がかかって間に合わないというシステムとなっているのです。だからメールはちゃんとこまめに見ようということになります。あとは Google ドライブです。これはプレゼン資料などを同時に書き込めます。同時に何人もがログインして書き込めるのです。よって我々が生徒のプレゼン資料と一緒に見てあげて「ちょっと表現違うんじゃない？」といってあげたりもできますし、リアルタイムでなく私たちが家に帰ってからも、その日学校で会えなかった生徒が資料を作っていることに気づくことができます。

Google カレンダーは、to do もそうですが、普段、スケジュールとか to do といった部分で頭がいっぱいになりがちな生徒たちに、君たちの頭はもっとクリエイティブなこと、シンキングするために使おう、スケジュールリングや to do はこういうツールに任せようということをやっています。

Web だけではなく、いくつかアプリをご紹介します。たとえば英単語。今はアプリになっていますが、これは効率よく集めてまとめてくれていると思います。効率よくまとめられている情報というのは、Web に散らばる情報を頻繁に使っていると非常にありがたいものだと思えます。たとえば英単語が受験によく出る順で並んでいるということに生徒はありがたみを感じます。

おもしろかったのは、生徒が教科書はすごいということです。Web の情報ばかり調べていた子が、教科書というのは正しいことばかりが、しかも今必要なものだけが凝縮されている本なので、教科書は実はすごいんだね、といったりしているのです。そういう気づきもデジタルツールが導入されたメリットなのだと思います。

このスライドは、iPad を導入した頃の私の授業です。この時のことは覚えています。授業が時間内に終わらなくて、最後にうわっと板書してハイ終わり。すると「先生、板書を写しきれません」となった瞬間、みんなパシャパシャパシャって iPad で板書を撮影し始めたのです。これどう思いますか。板書を生徒たちが手書きで写すことがいいのかパシャパシャ写真で撮ることがいいのか、それは結局生徒が考えて決めることなのです。生徒たちは手で書かないとわかならなかつたら写真に撮ったものをあとでもう一回考えながら書きなおすでしょう。これは高校生の話ですが、そういったところを自分たち自身で判断して考えられるようになる。そういうバックグラウンドを作っていくということが大事なのかなと思います。

医進・サイエンスコースの生徒には、連絡事項をメールで配信しています。いわゆる明日の連絡です。明日は

模試があるから過去問をやりたい人は職員室に取りに来てくださいというような連絡です。これは、学校でよくある連絡ボード、委員会を何時どこで行いますといったものですが、私は連絡事項を手書きでも書きますし、メールで連絡したりもするのですが、この板書は写真をパシャでいいですね。別に手書きにこだわる必要はない。だから彼らはこれをパシャパシャと撮ります。そういった部分の使い分けというのも大事なかなと思います。

さて、私はあまり個別のツールやアプリなどを紹介するのは好きではないのですが、スタートアップ時、要はiPadなりchromebookなりWindowsマシンなりを導入する時に、まず使ってみるといいのではないかなというものを紹介します。ひとつめはベネッセさんがやっているClassiという会社が作っているコンテンツです。まだ始まったばかりですが、注目すべきです。いわゆる校務管理ツールですが、生徒情報のデータベースとか、授業管理みたいなところを全部まとめて一括でできます。これに関して、我々が特に可能性を感じているところは、学習の記録についての部分です。生徒たちが自分で勉強したものを自身で管理するためのツールです。生徒たちが一日平均何時間勉強しているかというようなことを記録したり、どのような教科に偏っているかということを生徒自身が掴むことができるのです。生徒の家庭学習を、教員が管理するためというよりも、生徒が自分自身を管理できるようになるということが大切です。

将来的にはおそらく学校を超えていろいろなビッグデータを集められるでしょう。たとえば「〇〇学園はこんなに補習しているのに全然成績が伸びていない」、「隣の学校ではこれだけしか勉強していないのに案外生徒の成績が伸びている。指導の違いはなんだろう」というようなところを共有できるようになると思います。するとビッグデータをもとにこういう指導はどうですかといった提案を我々教員にしていだけるようなサービスに繋がっていくのではないかなと思うのです。もちろん我々がその提案通りにやる必要はないと思いますが、そういったサービスに繋がっていく可能性がありおもしろいかなと思っています。

それからこれはスタートアップという話になりますが、iPadアプリやWindowsのソフトやWebにあるツールを授業に導入する時は、今までの授業形態を変えな

いとできないものも多いです。内容がとても良くてグループ学習に向いていても、一斉授業では使えない。まだまだ、一斉授業のほうが多い中で、そういった場面で使えるツールというのは実はあまりないのです。そんな中、「ロイロノートスクール」というものがあります。もともとプレゼン用のソフトで、現状は、双方向授業で便利にやりとりできるというようなソフトですが、私が気に入っているのはミラーリングのようなことができることです。授業で動画を流す際、この動画をリアルタイムで一気に全員に配信できるのです。つまり生徒が私の見ている画面と同じ画面を見ていることになるのです。しかもとても簡単です。一斉授業で適した、自分の手元と同じ物を生徒に見せるというツールが意外に少ないのです。生徒たちが勝手に違うサイトを見ていたりすると困るので、教師側で制限をかけられるようになっていて、これを見てといったらその場で配信することができるようになっています。私書き込んだものは生徒の画面にそのまま映るようになっています。だから、今までプロジェクターでやれていることが、実はiPadで、iPadをモニターと見なしてやるという形なのですが、これが意外にできなかったのです。「ロイロノート」を使えばすぐにできます。簡単にできるのでいいかなと思っています。動画だけではなくもちろん他にもいろいろなことができます。試してみてください。

医進・サイエンスコースに入学してくれた生徒たちに一番最初に見せるプレゼンがあって、その最後に必ず伝えることがあります。医進・サイエンスコースの教員は、生徒たちが、日本の未来、世界の未来を作る世代だと本気で思っています。科学は日進月歩で進化していて、いろんなことができるようになってきたけど、倫理的問題も多くあります。生徒たちの世代は、何が正しくて何が間違っているかを決める世代でもあると思います。何かを決めるためには考えなくてはならない、考えるためには知識が必要です。だから君たちにはいろいろなことを知ってもらいたいし、考えてほしい、その上で判断して欲しい。だから今、勉強しようという話をしています。私たちが知っていることは何でも教える。私たちが知っている考え方は全部伝える。だから人類が進むべき方向を一緒に考えようと伝えています。

ありがとうございました。



セミナー③

「教育におけるWindowsタブレットの活用方法」

日本マイクロソフト株式会社文教本部産官学連携部

滝田 裕三



私のテーマを「教育におけるタブレットの活用方法」としましたが、今日は私立の先生方ということで、大変悩んだ結果、もう少し広い話をさせていただきたいと思っています。

まず最初に、実は今日来る前に悩みました。何を話そうか

と思っていました。すごく心配もしました。先に Google さんが話されて、この後 Apple さんですよ。3社、ある意味競合みたいな感じなので、何に注目されているのかなというふうに、すごく悩みました。先程の菊地さんの話を聞いて少し安心したのですが、私も同じで話したいことがいっぱいあります。まず最初に質問したいのは皆さまの学校において、三つの位置づけはどうですかというようなことです。やはり今日も端末を使ってみましたね。端末という話もあるのですが、どのような生徒さんを育てたいですかというのもそうですし、先生自身どうですかということもありますよね。

やはり我々としても、機器が一番最初ではないと思っていますので、そこはぜひ理解いただきたいと思っています。

私も一保護者として思いますけれども、やはり学校に行って、最初に見るのは生徒さんです。どういうふうに学校が教育してくれるのか、育ててくれるのかとすごく思いますし、それを指導されている先生方がどうかというふうに思います。そのバックヤードに機器というのはあるのではないかと思います。

先ほど21世紀型スキルの話もありました。どうして21世紀型スキルかなのですけれども、Cathy Davidson 教授が出されましたが、2011年度に小学校に入学した子どもたちの65%は大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろうといわれています。ですから、私たちが子どもだった頃とは違い、先が見えにくい世の中になっています。社会に出て、なかなか答えが見つけないような課題が多いですし、その中でどうやっていくのかというのはありますから、そういう世の中になってきます。そういう世の中に子どもらが出ていきますので、さかのぼって考えると、学校が何をしなければいけないのかということを先生方に伺いたいと思っています。

先ほど21世紀型教育の話もありましたので、ここは簡単にしたいと思います。4つのジャンルがあり、この中

で協働力とか、コミュニケーション、コラボレーションが重要だとされています。その中に ICT です、情報を使いこなす力ですとか、情報リテラシーです。

今はどうしても学校の注目がタブレットといいますか、機器のほうになっています。一般的にどういう傾向にあるのかというと、分類すると、グループに1台教師とタブレットというのがありますし、普通教室も数台とあったところもあると思います。私どもは別にどれが良いとかというつもりはなく、もちろん教育に応じて、学校の事情に応じて配備ということがあるのではないかと思います。

普通教室です。先生がタブレット活用をする場面では、たとえば子どものノートをカメラで写す。今タブレットの裏側にカメラが付いていますので、それで先生が写真を撮っている。それから出欠の記録とかいったことがあるのではないかと思います。

それから PC 教室のタブレット化です。今タブレットも上と下が離れるものがありますので、それによって従来のプログラミングとか、グラフの作成とかしつつも、手書きでタッチ教材を使ったりとか、生徒が説明・発表に使ったりですとか、生徒の作品をデジタルに記録していくといったことがあると思います。

それからグループに1台タブレット。先程も先生の手元をビデオでタッチやペンで動く教材、実験を記録、今日もありましたね。音声、文字、見るということです。

それから小学生でも、ここは中学校、高校ですけれども、小学生でも1人タブレット1台のところが出てきています。立命館小学校ですけれども、小学校4年生、5年生に1人1台タブレットを使っているというようなところがあります。後ほど選んだ理由を申しあげますけれども、やはり最終的には個別学習をしていくところまでいきますよというようなところで1人1台を配布されています。

先のことにとらわれ過ぎずに、目指すべき姿、全体像をとらえていただきたいと思っています。

まずシステムの方ですけれども、普通教室を考えると、電子黒板とか、大型のプロジェクター、固定掲示装置、それから無線 LAN、タブレット、指導者用教材とかがありますが、先生方のスキルの向上の仕組みとか、学習端末なども必要だと思います。

私学では、フルに活用した教育システムというのが実現しやすいだろうと考えています。というのは、今学校にある ICT の仕組みを考えると、データがばらばらだったり、もしくはデータが取れていなかったということがあるので。簡単にいうと授業支援システムと教材のデータベースと、校務システムといったところと学習履歴がばらばらになることがあるのです。最終的には生徒

に還元するということがあると思うので、生徒のところというふうなものが必要ではないかと思います。そう考えた時に、どうやってデータをうまく活用するのかというところも ICT の強みではないかと思っています。

それから次、スキルの面ですが、一つの例ですけれども、つくば市は市全体として21世紀型スキルに取り組まれている地域です。つくば市の場合には「つくばスタイル科」というのがあり、実際の授業の中でスキルを身に付けるといったものがあります。思考に関するスキル、行動に関するスキル、道具を活用するスキル、世界市民としての力という項目があります。それが1・2年、3・4年、5・6・7年、8・9年ということで、年次に応じて区分けされています。つくば市の場合には小学校、中学校が連携して時期をおくっていますので、1年生から9年生まで、体系的に取り組まれているということになります。ですから、ここであれば中学校から高校までの中で6年間ほとんどをどの順番にやっていくのかというところを、本当はここまで全体像をとらえてやっていってあげるといいと思います。

それから、東京大学もアクティブラーニングということをやっています。背景としては、東大生も卒業後の就職率は100%ではないということです。東大としてはやはりそれは駄目で、社会に出た時に活躍できる人材をということで、アクティブラーニングに目をつけ始めております。彼らの特徴としては、ICT を使うことをやはり取り組まれています。インプット、トランスフォーマー、アウトプットという三つの観点でかなり突き詰めております。インプットという段階ではキーボードを使っています。これはやはり情報の入力という意味では一番生産性が高いといっています。それからトランスフォームです。データを比較したりコメントしたりします。それからアウトプットです。実際に発表したりというところがあります。特徴としては机です。机が自由に動くような形状になっていますので、アクティブラーニングという中で実際の授業を受けるスタイル、その辺も意識されています。

それから海外事例です。我々社員が実際に見てきた学校ですが、クイーンズランドの学校をご紹介したいと思います。ここも ICT を使ってる学校ですが、先生方が21世紀型スキルが必要ととらえて取り組んでいます。

「21century learning design」というテキストがあります。実際にマイクロソフトが英語提供してるもので、日本では、日本語になったものをダウンロード提供しております。

電子ノートを使っていて、先生方は電子ノートを生徒と共有して使っているということになります。

今、先生が最初に自分が作った電子ノートと同じものを生徒が使います。今度は生徒はそのノートにペンで書き込みをしています。先生が作った電子ノートのところに自分で答えを記入するということです。

グループに分かれて課題を解いて、これを書き込める机があります。今度は自分たちでグループで記録しながら問題解いていくということをしています。最後は分からない生徒は先生の所に行き聞くということをしします。

ここでいいかかったのは、先生方が21世紀型スキルについて、先生方同士で勉強され、さらにディスカッションをしながら、それで学校全体の中でそれを決めて、それに乗っ取って授業を実施して、21世紀型スキルが身に

付くような授業を行います。

今日のまとめとしては、やはりどのような生徒を育てたいかということをは是非お考えいただきたいと思いますし、先生方も常に勉強しなければいけないといったところがあると思います。新しい事例もありますし、学べる場所はその学校から学んでいく、自分たちの中でも学んでいく。それをもってどんな生徒を育てたいかということを考えていくと良いかと思います。

端末の購入は、システムの全体像を考えながら是非お考えいただきたいと思います。

それから次に、私たちの取り組みをご紹介させていただきたいと思います。

マイクロソフトの教育における主な取り組みということで、我々もいろいろやっています。研究や、学生・生徒への支援をもさせていただいております。

Office 365 Education です。我々もクラウド上で教育のプラットフォームとして、教育機関向けには無償でご提供させていただいております。一つここは覚えていただければと思います。

それから次が、これから子ども達の健康という視点から ICT を導入される学校もあると伺っていますので、いくつか公になってる情報をご紹介したいと思います。文科省では児童生徒の健康に留意して ICT を活用するためのガイドブックが出されています。電子黒板の画面の映り込みの防止とか、タブレット PC の画面の角度というような、過去の実証研究から得られたような知見といえましょうか、それを収めているものもあります。これから導入する場合には少しご参考にされるといいかなと思っています。これは文科省からです。

次にこれはマイクロソフトの取り組みですけれども、先生方向けに教員研修のテキストを提供させていただいております。あと、21世紀型スキルに関して、先生方が使える部分、その英語のものを日本語に訳して提供しております。

それから今日ノートパソコンとタブレット、いわゆるピュアタブレットといわれるものがいくつかあったかと思っています。知っていただきたいのは、それによって特性があるということです。たとえばタブレットはやはりできることがある程度制限されていると思います。長い文章を入力するとかになりますと、やはりキーボードを使ったほうが早いと思います。それからマイクロソフトの場合ですとペンを使えるデバイスもあります。そうしますと先程のビジョンにありましたが、デジタルペンによるノートの書き取りとかスケッチとか、注釈とかといったような細かい作業もできるようになっています。

それから最後に、大きな学校で1人1台端末を入れるという中で、デジタル教材のようなものも配信するという場面もあるのですが、高速インターネットが整備されていて、そのまま使えるといえいいのですが、今日も生徒の話にもありましたけれども、家でインターネットがないとかいうような場面もあるので、その場合にどうやって展開するか。そういったものも我々の場合は提案しています。たとえば microSD カードに入れたまま使えますとか、校内にサーバーから配信しますというようなものがあります。こういったものをもってマイクロソフトとしては提案しているというような状況になります。

以上になります。私のほうからはこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

パネル・ディスカッション

(教員・企業編) 「ICTの可能性を探る」
— セミナー講師によるパネル・ディスカッション —

コーディネーター

広尾学園中学校・高等学校 教諭

木村 健太

※本パネル・ディスカッションにつきましては、諸事情により、一部の研修会報告を掲載しておりませんので、ご了承ください。

●木村健太・運営委員 (以下コーディネーター)

広尾学園、学校に関することは私がお答えいたします。なかなか企業の方とお話しする機会もないと思いますので、是非忌憚のないご質問、ご意見をいただければと思います。

早速会場からのご質問を受け付けたいと思いますが、まず最初は私から質問させていただきます。

今回3社からいろいろお話をしていただき、私も日頃から気になっている今後の話についてです。今後の教育に ICT に関わるものが入ってきた時に、いわゆる新しい学び、今日の「21世紀型スキル」というテーマのような新しい学びに関して、どのような学び方がいいのか。企業の方もたくさん提案してくださっていますが、学校現場から生まれてくる、現場の教員である我々が考えている未来というものもあると思っています。この辺のイニシアチブの取り方がずれないように進めたいと思っています。そういう意味で、企業が我々教育に携わるものとうまくやる今後の具体的な方策のような、こんなふうにやったらいいのではないかなというふうな、最初から難しい質問ですが、もしご意見あれば教えていただきたいです。

●滝田さん

では私から。今日、「21世紀型スキル」の話もありましたが、「21世紀型スキル」を立ち上げた時に、大学の先生が中心になったのですけれども、実は企業も参画をしてました。マイクロソフトもその一社です。なぜかという、企業からすると、会社に社員が入ってきた時にその人材に活躍してほしいのです。ですから、学校を出てからすぐに活躍できる人が欲しいという意味で、企業からするとこんな人が欲しいです、というような意味で「21世紀型スキル」というのはこのようにすればいいのではないかなということを我々としては発信しました。あくまでもヒントですけども、そういった意味では、企業の人事部の方の「こういう人材を欲してる」というようなものをサンプルにして、今の社会ではこんな人材が必要とされてる。だからそこからさかのぼっていくと、こんな教育が学校で必要なのではないかなというふうに考えるのも一つかなと思います。

●コーディネーター

このような機会もおそらくこれから増えていって、我々が企業の方かと、特にこういう ICT という架け橋を通してお話する機会が増えてくるとは思うのですが、できるだけコミュニケーションを密に取って、お互いの認識にずれがないように進めることが大事なのかなと思います。いかがでしょうか、会場の方から、こんなテーマで話をしてほしいという要望でも結構です。もちろん学校に関することでも大丈夫です。

●参加者D

今日は貴重なお話をありがとうございます。何度も出ているのですが、21世紀型の学び、学びを変えるということがおそらく一番大事なことでと学んだのですが、既存の20世紀型の学びといいますか、それとのバランスはどれくらいが良いのだろうかということを伺いたい。それから、その21世紀型の学びを広尾学園はかなり早くから取り組んでおられると思うのですが、その転機になったというか、当然この学びに至るまでに従来型の学びも当然しておられる時期があって、そこからこの学びを学んでいこう、みんなでそれに取り組もうと思った時の教員の意識の変革がどのようにうまくいったのかということ。うまくいかせるのが一番大変で、コミュニケーションのツールを使う前にそこをまず一番、みんなで共通認識を持っていくことが難しいと思うのです。そのあたりの転機というかきっかけと、今後の割合というか、21世紀型だけで、20世紀型の基礎知識を学ぶ部分が本当に必要なのかといわれると、やはり必要な部分もあると思います。その辺の発達段階に応じた割合というか、その辺のビジョンが伺えたらと思っています。

●コーディネーター

まず私から。一つ目のご質問についてです。既存の学びと、いわゆる新しい学びと定義していいかどうか分かりませんが、新しい21世紀型スキルの学びに関して私の個人的な意見と、学校で共有している意見の話をできればと思うのですが、私は二つあると思っています。

医進・サイエンスコースという理系のコースが始まった時はもともと何もなかったのです。医進・サイエンスコースという理系のベースが、ほとんど本校になかったのです。元女子校だったこともあります。ですから、理系を志望する生徒自体がそんなに多くなくて、取り組み

としてたとえば実験もほとんどやっていない状況というところからスタートをしたので、ある意味最初の頃の割合はゼロです。ゼロベースでつくれたというのは逆に良かったと思っています。おそらく今までの伝統があると、それに縛られて動けない部分があったと思います。その時に若い教員が集まって、これからの日本と未来にとっての社会はどうあるべきかを考えました。そしてその社会を想像して、これからの彼らにとって、理系のキャリアを進む彼らにとって必要なものはなんだろうと議論した中で出てきたものが最初の形でした。ただ、それが今後も正しいとは思っていませんでした。ここは日々変わっていくのだろうなど。教育の不易と流行の、不易となる部分、人間形成に関わる部分であるとか、道徳的な観念であるとか、そういった部分とはまた別の教育の流行について考えたのです。理系の分野はいろいろ新しいものが発見されてくる分野ですから、そこに関しては柔軟に変化できる体制をつくるのが大事だということからスタートしました。やはり学問の本質を学ぶという揺るがない部分ですので、それを伝えるためにはどういった手段が取れるのかというふうに段階を追ってやっていったのです。このように必要な部分だけ少しずつ割合が増えていくのが自然だというのが一つです。

もう一つの考え方は、既存の学びも大事だということです。既存の学びと今の学び、たとえば学校に iPad を取り入れた時に教員が使えるかとなった時に、使える教員、なかなか使えない教員がいると思うのです。今たとえば全国の学校の先生方がいらっしゃって話をする時に、やはりインフラ整備のような感覚が必要だと思うのです。だから ICT を導入すること自体が良いか悪いかという議論ではないですが、今回も ICT 活用部会ですのでやるべきだとなった時に、ではどうやって始めたらいいのだろうか。全部準備が整ってから始めるのはおそらく無理だと思います。先生方がまず使ってみることが大事だし、やってみることも大事だと思うのです。そういった意味で今の既存の学びの形を崩さないもので入っていくというツールは実はあったほうがいいと思います。そこから展開していけるように。先生も生徒も使い方が慣れてきていろいろなことをやりたいなって、おそらくやるとだんだん欲が出てくると思うのです。こんなこともできるはずだということがいろいろ出てきて、先生方も生徒も創造性がどんどん膨らんでいくような気がしますので、その入り口としていわゆる既存の学びというものも私は否定するものではないです。そもそも今までの教育は私は全然否定していません。

日本の教育というのは素晴らしいと思うのです。今回も海外の事例がたくさんありました。また3.11の状況を見た時にやはり日本の文化というのは素晴らしい部分がたくさんあるし、今までこの日本の文化といわれるものは、今までの教育が、先生方がつくってくださったものだという、認識はあります。日本の教育というのは素晴らしいと思うのです。今回も海外の事例がたくさんありました。また3.11の状況を見た時にやはり日本の文化というのは素晴らしいと思う部分がたくさんありました。ですから本当に良いものか、本当に変えなくてはいけないものかというのはきちんと精査する必要があります。

それは古びた学びではなく、既存の学びではなくて、本質的な学びだと思うのです。その辺をきちんと、それを分類できる要件を、何が必要で何が要らないかという要件を提起できるのは我々教員だと思っています。ただ、何が違って、何が良くないのかというツールからという観点もあると思いますから、今日来てくださっている先生方は ICT に興味がある、もしくは詳しい先生が多いと思いますので、我々はいろいろなところから意見を出していった、議論のきっかけにするのが大事なのかなと思っています。お答えになっているかどうかわかりませんが、一つ目の質問の答えです。

二つ目の質問ですが、導入した時に教員たちがどう使おうとか、いろいろ学校の中の事情というところでいいますと、これも二つあると思います。

一つはよく聞かれる質問で、タブレットだ、PC だ、ウェブだ、クラウドだが入ってきた時に、特にベテランの先生方からの反発がある。ベテランの先生たちからついていけない、私には分からないからできないという声があってどうしようという話をよく伺います。私は日本の教育は今ガラパゴス化しているところがあると思うのです。受験も含めて少しおかしいなというところもあると思います。そういったちょっとした不安定な状態からより本質的な教育に戻るために必要なのが、ICT の導入だと思っています。たとえば ICT が導入されて、我々教員の時間が浮く。いろいろな作業が楽になって、どんどん時間が増えるとなると、学校でしかできない生徒とフェース・ツー・フェースで話す時間が増えるわけです。保護者と連絡を取る時間が増えるわけです。生徒のことを考える時間が増えるわけです。ということは、結果 ICT の導入がもたらす結果というのは最終的には今までの教育の本質的な部分につながるのではないかと考えています。だから逆に ICT 化が進めば進むほど、ベテランの先生たちの知見が必要になると考えています。生徒と面と向かって何を話せばいいか、この場合どう考えたらいいかという時には、我々のような若い教員よりも知見を持っていらっしゃるベテランの先生方の力が必要なわけです。

難しさとか使いづらさとかっていうのはきっと技術的な進歩が解決してくれると思っています。直観的に操作できるとか、いろいろなそういう部分に関してはきっと解決していくのだと思います。ですからそんなにベテランの先生たちが拒否反応を示すこともないと思います。今は確かにそうかもしれないですけど、そんなに本質的な問題ではないから、すぐ解決できるような感覚でいます。

もう一つは、本校の金子からも話がありましたけれども、使える人が使えるだけ使いたい時に使えばいいと思うのです。全員に強制して「今日から iPad 入れますから、先生たち全ての授業 iPad でやってください」ということは難しいと思います。なのでまずはできるところから始めてみるというのが先程のインフラ整備ではないですが、我々のソフト的なインフラを広げるということでは大事だと思っていて、実際に本校でもそうです。私もそうです。この単位では使わない、同じ人でも使う時期、使う学年によってもいろいろ差があります。先生に

よって全然使わない先生もいます。それでも生徒たちから求められることはあるので、たとえばプリントを紙で配ってる先生に、「これメールで欲しいんですけど」というふうに、生徒から要望が上がってきたりします。そういうところで少しずつ、「木村先生こんなふうにいわれたんだけど、どういうこと」といわれて、「こういうふうにやるといいんですよ」というと、「あー、これ便利だね」というような広まり方もしていくと思います。実は本校では iPad を導入した時に「iPad の使い方研修会」を開いたりしていません。お話ししたような広まり方でうまく浸透してくのが自然な形かなという気はしています。答えになっていますでしょうか。

●コーディネーター

企業でもそういうことはあると思うのです。新しい端末が入ってきて、今までやってきた概念とは少し違う概念のものを会社として導入するとなった時に、社員の方々から、これ前のほうがいいよとか出てくるようなことはありますか。

●滝田さん

やはり今までの学びとこれからの学びという意味では、今までのやり方も、基礎、基本というところもすごく重要で、その上に21世紀型スキルのようなものがあるだろうと考えています。ただ、その配分といわれると、それはやはり学校のどういう子どもたちを育てたいかということにいきますし、それは学校によってまちまちだろうと思います。

あともう一つあります。技術の進化といった意味では技術の進化と、世の中で求められているところも少しずつ変化があるので、その辺は5年が良いのか10年が良いのかというのは分かりませんが、やはり定期的にウォッチしながら、その中で個々修正していく必要があるだろうと思います。

●コーディネーター

ありがとうございます。今話を聞いていて、私ももう一つ思いついたので、お話しします。

iPad とか chromebook とか Windows のタブレットが特にそうかと思うのですが、よく質問を受けるのが、これはどのように授業で使っていますかっていうことです。本来は生徒1人1台タブレットを持つということは、授業以外での利用を想定しなくてはいけないということだと思うのです。実際授業の中で、生徒は今日1日、授業で iPad 使わなかったという日もあると思うのです。ですが、彼らはメールもしますし、医進・サイエンスコースの生徒たちであればドライブで共有して文書をつくりまします。家に持ってかえて、「今日の連絡なんだっけ」と見ます。そのようなところで、実は授業以外の活用というのが生徒にとってはとてもインパクトがあるのです。反転授業的に自分で学ぶということも、やはり授業から離れたところだと思います。どうしてもつい我々教員は「授業が、授業が」と自分の視点で考えてしまっているのですが、生徒目線で考えた時には授業で使うこと以外の部分というのが大きいかなという気はしています。

生徒に iPad を渡してみて、一番最初に気付いたことは、彼らにとって iPad というのはすごくパーソナルな

ツールだということです。携帯電話にちょっと近い感覚を持っています。先ほど話がありました学習の記録というものは、生徒が学習時間を自分で入力するというものですが、それには生徒のコメントが入って私もコメントを返すみたいな一言コメント機能のようなものが付いています。今まで学習の記録というのは皆さんも紙でやられていたと思います。テスト1週間前に紙のプリントを配って、コメント欄に「今日は何時間勉強した」など書いてもらう。しかしそのコメント欄には「がんばった」といコメントしかないことも多かったのではないのでしょうか。iPad を渡してから変わりました。日記のように書いてくれるようになりました。自分が今日こんな勉強したという勉強の中身もそうですし、「最近夜遅くなっちゃって、朝起きられなくなっちゃうんです。先生、どうしたらいいですか」というような、そういうようなやり取りが生まれてきたのです。

だから勉強時間に関しても今までは先生に管理されている、先生に書けといわれたから書いてたのかもしれない。コメントも同じです。それが iPad に入力すると自分の勉強したことを正直に書いてくれるようになったのです。自分のために書いているし、コメントも自分のために書くような感じになるのです。それは実際やってみるまで分からなかったです。以前は、紙に書かれたものを我々が見て入力し、印刷したものを教室のうしろに貼っていました。iPad などを導入することで集計などが楽になることはあるかなと思っていましたが、副次的な効果というか、そういった反応が出たのも面白いなと思いました。

他にいかがでしょうか。せっかくなので、会場からのご意見をいただきたいです。

●参加者E

広尾学園さんのほうに1点。インフラの整備という話がありましたけれども、学校内を拝見しまして、固定プロジェクターとホワイトボードを使っていました。IC機を使う場合にデジタル黒板という選択肢もあったかと思うのです、固定プロジェクターとホワイトボードを利用した背景ということをお話していただきたいというところが1点です。

あともう一つ、マイクロソフトの方にお伺いしたいのですが、さまざまなプラットホームを使っていく中で、たとえば Google Apps の場合だと制限をかけたりとかさまざまな方向ができると思うのですが、マイクロソフトさんの場合ではプラットホームを使っていく場合に、発達段階に応じた制限をかけたりですとか、アプリの制限をかけたり、こういったものが母艦となる PC の親和性が高いだけに、どのくらい制限ができるものかなというところが興味があるのですけれども、お願いできますでしょうか。

●コーディネーター

おっしゃるとおり、実は本校全ての教室にプロジェクターが設置してあります。この会場は普段教室になっていないところですが、ここにもありますし、分割授業でここでやるしかないとかっていうようなことにも対応できます。食堂にも4つのプロジェクターが設置されていて、4つスクリーンが降りてくるようになっています。4

00人規模になったら向こうへ行こうとか、1000人規模になったらこっちにしようとか、全ての場所にプロジェクターが設置されていることが特徴です。従って教室も全てホワイトボードになっています。本日授業をご覧いただきましたとおり、英語の教員などは、本文をそのまま投影してそこに解釈を加えるというような使い方をしております。実は iPad 云々という前から、以前からそういう状態でした。ですので、PC を教室に持ち込んで、たとえばパワーポイントを使うということは結構前からやっていたのです。ですから、先生方のパワーポイントのコンテンツなどを共有しようというそういう雰囲気はあったのです。学校の先生というのはなかなか自分の授業ノートを共有することはないと思うのですが、パワーポイントを使う先生が多かったというのは、自分の授業コンテンツを教科内で共有することにつながりやすいのです。そういったことは以前からあり、その流れがありました。

ちょうど校舎の建て替えがあったのが、7年前くらいですか。7、8年前に着手してというところからあり、その時からすでにそういう状態が始まっていました。実は電子黒板の導入も考えたことはあるのですが、要らないという判断になりました。PC を使えば画面が出せますので、電子黒板の機能も必要ないだろうという判断をしました。実際いろいろな新しいツールが出た時に、やはり PC のほうが対応しやすい。投影さえできれば、中身のコンテンツに関しては PC を使ったほうが速いという考えがありました。

実際、学校自体が、金子の話にあったように一旦ゼロから作り直そうというようなどころがありましたので、そういった意味であり既存のものにとらわれることがなかったのです。電子黒板については、実は私も検討した時に、今一番売れてる電子黒板どれですか、なぜですかと聞いてみたら、チョークと同じ書き心地の電子黒板が一番売れていると。この話、分かりますか。つまり先生方が使いやすいのです。今までチョークを使っていた先生、チョークでないと書き心地悪いといっている先生たちが「うん」という商品が一番売れているのです。当時本当に社会のニーズ、生徒のニーズ、これから必要なものは何だろうというところから学校をつくってきたというところがありましたので、そういう観点で電子黒板を選ばなかったということもあるかもしれないです。ただ、今の電子黒板はすごく良くて、私もいろいろ使わせていただいたこともあります。うらやましいなと思うことはあります。ただ、本校では入れてないのが現状です。

●滝田さん

管理の質問をいただきました。マイクロソフトの Windows はいろいろな企業で使われているのですが、Active Directory というディレクトリを使います。それは誰が何ができる、どこまでできるということを一括で管理できるのですが、それと AppLocker という製品を使うとアプリがホワイトリストとブラックリストで制限ができます。つまりホワイトリストですとこれができますよという、このアプリだったら立ち上げられますよと。ブラックリストだったらこれは駄目ですというようにロックができます。

あともう一つ、Active Directory ではない場合ですけども、製品の中に、なかなか知られていないのですが、Windows エンベデッドインダストリーという製品があります。

●参加者 F

木村先生と、企業の方にそれぞれご質問したいのですが、900人以上の生徒が1人1台持っている、故障する機械も出てくるかとは思いますが、故障するにつちもさっちもいかなくなるような気もするのですが、その時はどうされているのかということと、それから中学1年で入って、6年間、中高一貫、一つの機械をお使いになるのかということ。昨今次々に新しいものも出てまいりますので、途中で機械を変えることはあるのかどうかということをお伺いしたい。

企業の方には仮に6年間使い続けると、サポートを6年以上考えなければいけないと思いますが、その辺はどうなっているのかということをお伺いしたいと思います。

●コーディネーター

ありがとうございます。本当に良い質問で、我々も懸案となっていてところです。まず一つ目ですが、壊れた時にどうするか、紛失した時にどうするかです。

医進・サイエンスコースで一番初めに iPad をトライアル的に導入した際は、学校が買って生徒たちに貸し出しました。その時壊れたらどうしようかなり心配したのですが、当時の iPad は5万円を切っていて、これは消耗品扱いかなというような、備品ではないかなというような考えも少しありました。何かあった時には、生徒に弁償させるとかという話はできないと思ったので、なんとか学校側で解決できないかなという方向性でいきました。実際は、彼らは1年目ということもあって、私が担任だったのですが、「これを君たちがどう使うかによって広尾学園に iPad が入るかどうかが決まるからね、君たちがトライアルだからね」といったら、大変大事にしてくれました。なんとか1年間1クラスは乗り切れたのです。大きな故障もなく乗り切れました。ただ、生徒に購入してもらった時には非常に大きな問題でして、この後どうなるのだろうと考えました。今は、少ない方が難しいですが、学校が挟まらないように買ってもらっています。つまり契約は生徒、保護者と企業という形になっているので、壊れたら企業にいつてという話です。窓口を設けてもらってやってもらう方策を取ることにしました。一応我々のところに生徒は持ってくるのですが、それが、たとえば落として割れたとかであればいいのですが、動かなくなってしまった時に、ソフト的なものなのかハード的なものなのかという判断は全部我々がするのは無理だなと思いました。少し触ってみて設定を直すだけで直るのであれば直してあげますけれども、それをたとえば再インストールし直してとかとなるとなかなか難しいなと思ったのです。実際やってみたらハード的な故障だったとかいうこともあり得ると思ったので、これは無理だなと判断し、企業さんにお問い合わせするような窓口をつくっていただき、始めることとなりました。たとえばアップル本体が難しければ、その間にメーカーさんに入ってもらって、そういう窓口つくっていただくこと可能ですかと。最初の頃は設定もお願い

していいですかというように依頼しました。

学校側としては念のために今の **chromebook** もそうですけれども、貸し出し用の端末は学校で買ったりしています。本当はそこも企業から代替機が出てくればいいのですが、難しいことも多いので、必要であれば学校で貸し出し用のものをいくつか持っていて対応する。とにかく教育活動が止まってしまうことが一番よろしくないとしますので、そういった対応をしています。

それからもう一つがデバイス、学年進行の中で6年間使うのかという話ですが、おそらく難しいです。たとえば一番最初はぎりぎり iPad2を買わせることができたのですが、我々教員はiPad1を持っていました。よって今、iPad1で動かなくなってしまったアプリがたくさん出てきているのが現状です。なので、そのあたりも我々が動かせない部分であり、企業がイニシアチブを持っている部分です。今まで私たちが大事にメインコンテンツとして使用していたアプリが急に使用できなくなることが起こると教育活動が止まってしまうのです。それは本当に困っている問題です。デバイスが古い、新しいものもそうですが、新しくても規格が変わってしまったりすると困ってしまいます。たとえばライトニングに規格が変わったりすると困ってしまうのですね。我々が持っているケーブルは1本もないよとなると、その予算は取っていないとなるので、学校側も困ります。スペックが低すぎて使いづらいとかというレベルではなくて、教育活動止まるということも起こり得るので大きな問題だと思っています。

今ちょうど、中学3年生が高校1年生になる段階ですので懸案になっています。理想としては、基本的にはデバイスが違って問題なく使える、そういう教育コンテンツをつくっていきこうと動いています。つまり買い直したい人は買い直せばいいし、そのまま使いたい人は使えばいい。中学から高校に上がる時とか2年間で買い換えましょうで強制するのは筋違いかなと個人的には思っています。我々の運用のほうでコントロールできるのであれば、しかも教育活動が止まらない形でできるのであれば、そちらで解決したいと思っています。できるかどうか今現在進行形なので分からないのですが、そうなるご家庭の問題も考えて、規格もウェブ規格が一番安定してるかなとなります。それは生徒が家からアクセスする時と学校のパソコンでアクセスする時の互換性問題を解決するということにもつながります。家のパソコンもこのパソコンにしてくださいということはいえないですから、家で勉強する。学校で勉強する。そういうところでも全部が共通に使えるものができたらいいなと思ってがんばっている次第です。企業さんに助けていただければと思っていますが、その辺もよろしくをお願いします。

●参加者 G

6年間もし使うのであれば、そういうサポートとかというのはどうなっているのですか。

●滝田さん

法人系とコンシューマー系製品があります。学校法人という法人の話をするすると、OS 自体は10年間サポートをしています。パソコンそのものはマイクロソフトのサーフェスとそうではないものとあるので、国産メーカー

でいきますと、おそらく学校でいろいろ使っていってやると思われる、NEC とか富士通ですと、5年とか6年とかというサポートをされていると思います。最近タブレットになると大体寿命はどうしても短くなるという傾向にはあるようです。大体3年というのが、弊社も3年ですが、サポートしてるというような状態です。ただ、特に日本のお客さまからは4年5年サポートして欲しいという声は多く頂戴していて、今そこを検討しているような状態ではございます。

●コーディネーター

実際私個人的にマイクロソフトさんにお伺いしたいのですが、教育用の端末に関して、リースみたいな形にするのか、購入かというところの議論はありましたか。

●滝田さん

統計を取られていますね。学校全体でいくとリースのほうが今は多いみたいです。

6割くらいですか。なんともいえないですが、我々としてもどちらがいいというのはなかなかいい難いところがあります。お金の払い方とかによって違ってくると思いますので、我々としては特にリースがいいとかいうのは。

●参加者 H

破損とかに関していいですか。今破損とかそういったことについて質問がありましたので。広尾学園と本校のケースは少し違うのですが、本校のケースの場合は生徒が3年間の保険を掛けています。8,000円プラス消費税ということで。1年目については5万円まで保証があって、同じものがない場合は同等品と交換という形になります。それから3年間、少し金額は下がっていくのですが、タブレットについての補償の金額がありまして、修理した時にそれ以上超えると保護者の方にその分を負担していただくという保険に入っています。一応学校が窓口にはなっていますが、ヤマト便でピックアップに来てくれますので、学校のほうはピックアップの方に渡すだけで、また修理があがったら持ってきてもらって生徒に返すという。そこが学校の手間が入るのですが、どうしても壊れると学校に持ってくるので、そういうサービスになるかなと思っています。学校としてはあまりそういうところ関わりたくはないのですが、現状、初めて導入したのでそういうケースでやるのも一つの方法かなと思います。

●コーディネーター

本校が結構手間を省いているところを、学校から明確に送って、学校で受け取って生徒に渡すという形で行われているということですね。

●参加者 H

そうです。ヤマトさんがピックアップに来られますので、端末だけを渡すだけでいいのです。ヤマトさんがピックアップのためのケースも持ってきてくださって、うちはタブレットの本体だけを渡すだけです。割れていても全部向こうで切り分けて修理に、あるいは新品交換のような感じで、半年ほど経っていますが、そういったケースで5~6件対応しています。

●参加者 I

二つほどお聞きしたいことあるのですが、一つ目はタブレットを入れた後のパソコン教室の使い方が変わっているのかどうかということ。あと、それを導入する前まで生徒自身おそらく携帯とかスマホとかいろいろ持っていたと思うのですが、それを授業で使わせていたのかどうかとか、入れた後に携帯の扱いはどのような形にしているのかということをお聞きしたいのでお願いします。

●コーディネーター

私たちの学校ですが、私はあまり古い話は分らないのですが、私がこの学校来た時はなかったです。ちょうど校舎の建て替えの時にパソコン教室自体がなくなりました。設計図を私が拝見した時からなかったです。ですから、もともとあったのは私は見ていません。ただ実は今になって1つ作っています。ノートパソコンだったので、ラックの中にパソコンが入っていて、このラックをガラガラと連れてきて、情報の授業はそれを展開して授業をするという形態でした。なので、パソコン教室でパソコンよりも、ノート PC を持ってきて普通の教室がパソコン教室になるというようなイメージです。もともとノートパソコンだったのでそういう流れがあったのかもしれないです。ただ、それが逆に面倒くさいです。たとえば医進・サイエンスの生徒たちが論文を読むのは iPad で読んでいたのですけれども、パワーポイントを作りたいとなった時に、Windows ですけども、Windows パソコンを持ってきて、延長コードでつないでとやって、スイッチオンでまだ立ち上がらないとかいって待っているのを見ていたのです。これは少しおか

しいと思って、今は逆にそのノートパソコンを常駐している部屋を1個つくりました。それからそれに3-D プリンターが接続できるコミュニケーション部屋が今できたりとか、逆にそういうスペースをつくるようになってきたのが最近という少し変な流れです。

携帯電話、スマホの扱いですが、これは実は iPad を導入してから変えていません。昔からあるルールのままです。中学生は学校に携帯を持ってくるでもいいのですが、学校に来たら朝集めます。先生に預けて、帰りに返してもらいます。登下校時に何かある時にやはり携帯電話はあったほうが安全だという保護者の声もありますし、我々もそのほうがいいと思ってます。放課後以降は使ってもいいのです。朝と放課後は使ってよし。ただ、使う場所は決まっています。廊下で歩きながらやったりしては駄目です。教室であったり、放課後のカフェテリア、いわゆる食堂です。食堂では使っていいですよというふうにルールが決まっております。高校は自己管理です。ただ、朝の朝礼が始まってから終了までは使ってはいけませんというルールは同じです。預けないです。自分でしっかり管理をなささいという意味で高校生は進めています。場所も同じです。場所も放課後であっても廊下を歩きながら使ったら駄目です。教室の中だけというルールは昔からあって、そのルールが iPad なり chromebook なり導入されて変わったかといったら、変わっていないです。そのまま流用しております。

ではそろそろお時間となりました。ありがとうございました。

運 営 委 員 長 総 括

立教池袋中学高等学校 校長 鈴 木 弘



本大会は、「21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～」を全体テーマとして掲げ、いわゆる「21世紀型のスキル」がキーワードとなっていたと思います。

本部会では、21世紀型スキルには欠かせない ICT 活用について、「ICT

活用の最新事例に接し、課題と可能性を探る」を研究目標に、広尾学園中学高等学校において実施いたしました。

また、本部会の募集定員は100名としておりましたが、定員をはるかに超える募集があり、多くの方々に参加をお断りさせていただきました。ご参加いただけなかった先生方には、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。

さて、本部会のプログラムは、まず午前中に広尾学園中学高等学校の医進・サイエンスコースの研究授業の見学、中学1年生から3年生までの理科、英語、数学などの教科、あるいはインターナショナルコースの中学3年生の英語などの ICT を活用した公開授業の見学、そして、午後からは、同校の中学生・高校生と教員によるパネル・ディスカッション、また、同校の金子暁先生と木村健太先生による、広尾学園の ICT 教育についてのセミナーをおこない、グーグル株式会社、日本マイクロソフト株式会社、Apple Japan 合同会社の三大企業から講師を招いてのセミナー、その企業の方々によるパネル・ディスカッションというような多彩なプログラムを展開いたしました。まさに研究目標の通り、ICT 活用の最新事例に接し、課題と可能性を探っていったと思います。

今、学校が持っている教員の多忙化の問題、また、日本の教育は、一人の教師がいて、クラス全員に話す受動的な授業を行っています。しかし、そのような国は、世界から見ると、もう日本しか

ありません。「ガラパゴス」という言葉がありますが、諸外国の授業は、ほとんどが少人数化で双方向・能動的になっています。そこで、重要なツールとしての役割を担うのが ICT だと考えられます。企業の方々もおっしゃっていましたが、教育をどうするのかということがまずなければ、ツールである ICT は上手く使えないということでした。

ICT を「どう使うか」ではなく、「ICT を使って何を学ばせるか」ということが今回の大きなテーマであったのではないかと思います。

各学校の教育をしっかりと行い、日本の教育が「考える教育」、「自分の考えをしっかりと配信する教育」に変わっていかねば、世界の中では日本の競争力はますます落ちていくでしょう。そのような構図ははっきりしているのではないかと思います。グローバル化と ICT 化は同時にやってきたと言っても過言ではないと思います。このことは、学校への大きな課題を投げかけているのではないのでしょうか。

今回の本部会には、自校での ICT を活用した授業を展開するため、あるいは ICT を導入するため、また、今後導入を検討するための情報を得るために多くの先生方に参加していただいたと思っています。恐らく、先生方はそれらの多くのヒントを得て、お帰りいただいたことと確信しております。

どうか、それらは各学校へお持ち帰りになり、その可能性、または課題を同じ学校の先生方と共に議論していただき、学校が変わっていく一助となることを願い、総括とさせていただきます。

今回の本部会の実施にあたり、広尾学園中学高等学校の生徒、先生方には、多大なるご協力をいただきました。また、グーグル株式会社、日本マイクロソフト株式会社、Apple Japan 合同会社の3つの企業の方々にも、ご多忙の中、無理な願いをして、貴重なお話を聴かせていただきました。最後となりましたが、厚くお礼を申し上げます。

グローバル教育部会

1 研究目標 グローバリゼーションに対応する私学の教育

21世紀に入り、新興国の急速な台頭や情報通信技術等の飛躍的な発達などを背景に、グローバリゼーションの波が我が国にも押し寄せてきている。その様な状況下で様々な分野や領域に於いて人的交流や異文化間コミュニケーションが急激に増大しつつある。こうした世界の潮流への認識のもとで国際間に於いて高い競争力と心豊かな協調性を持つことが必要となり、その為には多くのグローバル人材を育成することが急務となってきた。

しかしながら、グローバル社会は極めて多様化に富む「多文化共生社会」であり、そこで活躍するには高度な専門知識と多種多様な経験を有することに加えて、高い異文化理解力、異文化コミュニケーション能力及びIT活用力などが不可欠となってくる。これらを身に付けるには、初等・中等教育の現場で得る基礎知識は固より専門的な教育プログラムに従い、しっかりと学ぶことが重要となってくるだろう。

以上の点に鑑み、本部会では、首都大学東京の渡邊英徳准教授にご講演をお願いした。また、渡邊准教授のご講演を拝聴した後、海外留学を実際に体験された現役の学生・生徒によるパネル・ディスカッションを行って、部会参加者全員でグローバル教育を考察することができればと考えている。

2 会 場 グランドプリンスホテル新高輪国際館パミール 1階 旭光

3 日 程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	15			30	30		30		
10月17日	受付	開 会 式	基調講演	パネル・ ディス カッション	昼 食	分 散 会		閉 会 式	

4 内 容

部会開会式 運営委員長挨拶 東京学園高等学校 副校長 須 藤 勉

基 調 講 演
 演 題 「データを紡いで社会につなぐ ― データ時代の教育のありかた」
 講 師 首都大学東京システムデザイン学部 准 教 授 渡 邊 英 徳

パネル・ディスカッション
 テーマ 「グローバリゼーションの中で求められるものは何か？」
 パネリスト 国際基督教大学教養学部 学 生 大 西 リ コ
 早稲田大学政治経済学部 学 生 細 井 梨 沙
 電気通信大学先進理工学部 学 生 Ahmed Hossain
 立教大学異文化コミュニケーション学部 学 生 柳 本 修 吾
 中央大学法学部 学 生 高 原 由 伊
 コーディネーター 目黒学院中学高等学校 教 諭 柴 雅 彦
 朋優学院高等学校 教 諭 廣 木 梢

分散会

テーマ 「グローバル化に対応する私学の教育とは」

- ①「講演、パネル・ディスカッションを受けての意見交換」
- ②「国際理解教育、外国語（英語）教育の実践内容と今後の取り組みについて」
- ③「海外への修学旅行、語学研修、留学制度について」
- ④その他

進行役	Aグループ	目黒学院中学高等学校	教諭	柴 雅彦
	Bグループ	朋優学院高等学校	教諭	廣 木 梢
	Cグループ	獨協中学高等学校	教諭	岡 見 英 一
	Dグループ	青山学院中等部	教諭	上 野 亮
	Eグループ	品川エトワール女子高等学校	教諭	世 古 秀一郎
	Fグループ	東京音楽大学付属高等学校	副校長	川 上 裕美子
	Gグループ	東京学園高等学校	副校長	須 藤 勉

部会閉会式

運営委員長総括

東京学園高等学校 副校長 須 藤 勉

5 運営委員・指導員（順不同）

委員長	須 藤 勉	（東京学園高等学校 副校長）
委員	平 方 邦 行	（工学院大学附属中学高等学校 校長）
	川 上 裕美子	（東京音楽大学付属高等学校 副校長）
	上 野 亮	（青山学院中等部 教諭）
	岡 見 英 一	（獨協中学高等学校 教諭）
	世 古 秀一郎	（品川エトワール女子高等学校 教諭）
	柴 雅彦	（目黒学院中学高等学校 教諭）
	廣 木 梢	（朋優学院高等学校 教諭）

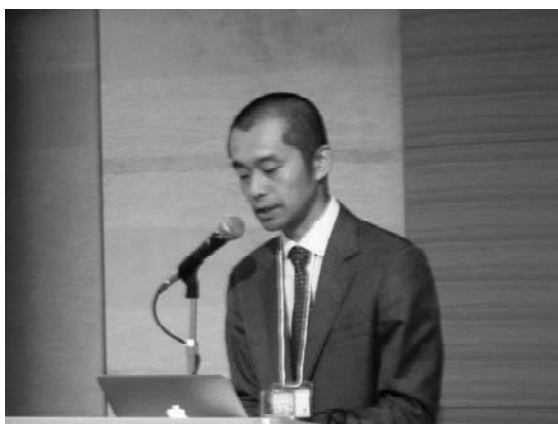


グローバル教育部会

基調講演

「データを紡いで社会につなぐ — データ時代の教育のありかた」

首都大学東京システムデザイン学部 准教授 **渡 邊 英 徳**



本講演につきましては、Google Earth のデモを行いながらの内容のため、画像がなく、文字だけの掲載では、講演の主旨および内容が伝わらず、また講師の渡邊英徳先生の、中途半端な講義録の掲載は避けたいとの意向があり、本研究集録への報告は、講師紹介のみとさせていただきますので、ご了承ください。

なお、講演の内容は渡邊先生がご執筆されている著書に掲載されている内容とほぼ重複しますので、詳細については、下記の著書を是非ご参考にしてください。

記

講談社現代新書

『データを紡いで社会につなぐ
— デジタルアーカイブのつくり方』

著：渡邊 英徳

講談社 2013年11月刊行 定価840円(税込)

講師紹介

渡邊先生は、1996年に東京理科大学理工学部建築学科を卒業されました。その際、卒業設計賞を受賞されています。1998年に東京理科大学修士課程を修了され、2013年に筑波大学大学院博士後期課程を修了され工学博士となりました。同時に2001年より、株式会社フォトン代表取締役社長を務められ、2008年からは、首都大学東京首都大学、システムデザイン学部の准教授に、また2013年より京都大学地域研究総合情報センターの客員准教授も兼任されています。研究の内容は、情報デザイン、ネットワークデザインです。すでにネットでご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、長崎アーカイブ、広島アーカイブ、大日本大震災アーカイブなどを製作され、沖縄県の授業の、沖縄平和学習アーカイブでは総合監修を担当されました。そして、朝日新聞社と共同で東京五輪アーカイブを現在作成中でございます。また先生は2013年度グッドデザイン賞「復興デザイン賞」、アルスエレクトロニカ2013栄誉賞、第40回「日本賞」優秀作品など、数々の賞を受賞されています。そして、大変お忙しい中、講談社現代新書、「データを紡いで社会につなぐ」などの執筆活動もされています。本日はグローバル社会に必要なネットの活用事例を、ICTの技術面だけでなく、地域の方々や、学生、生徒たちとのかかわりも交えながら、グローバル教育という大きな視点からのお話をいただけるものと楽しみにしています。

パネル・ディスカッション

「グローバル化の中で 求められるものは何か？」

パネリスト 国際基督教大学教養学部 学生 **大西 りこ**
早稲田大学政治経済学部 学生 **細井 梨沙**
電気通信大学先進理工学部 学生 **Ahmed Hossain**
立教大学異文化コミュニケーション学部 学生 **柳本 修吾**
中央大学法学部 学生 **高原 由伊**

コーディネーター 目黒学院中学高等学校 教諭 **柴 雅彦**
朋優学院高等学校 教諭 **廣木 梢**



司会（岡見英一・運営委員）

海外の大学に留学されたことのある、あるいは海外から日本に來られて勉強されている5名の大学生の方をパネリストとしてお招きいたしました。今回、このディスカッションを通じて、参加された先生方が、それぞれお持ち帰りになれる得るものが多ければと願っています。コーディネーターは運営委員の中から目黒学院中学高等学校の柴雅彦先生、それから朋優学院高等学校の廣木梢先生のお二人にコーディネート、進行をお願いしたいと思っております。

●柴雅彦・運営委員（以下、コーディネーターA）

本日コーディネーターを務めさせていただきます、柴でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

●廣木梢・運営委員（以下、コーディネーターB）

同じく廣木でございます。よろしくお願いいたします。

●コーディネーターA

それでは時間も限られておりますので、早速パネル・ディスカッションを始めさせていただきます。

まず本日、お越しいただきましたパネリストの方々のお名前だけご紹介をさせていただきます。左側から国際基督教大学の**大西りこ**さん、早稲田大学の**細井梨沙**さん、電気通信大学の**アハメッド・ホサイン**さん、立教大学の**柳本修吾**さん、そして中央大学の**高原由伊**さんの5名となります。よろしくお願いいたします。

それでは、お一人ずつ自己紹介を兼ねて、これまでの経歴、あるいは留学先およびその期間等を織り交ぜながら自己紹介をしていただきたいと思います。

●大西さん

国際基督教大学4年で、経営学部 に所属しております。今までの簡単な経歴ですけれども、公立の地元の小学校に通って、その後、中高一貫の私立の中高に通い、その後ICUに入りました。大学の3年時に交換留学を利用して、アメリカのフィラデルフィアという都市がある、ペンシルバニア州のペンシルバニア大学に留学しました。それは語学留学という形ではなくて、経営学の勉強をするという形で、現地の授業を他の学生と一緒に取るという形で留学しました。期間としては10カ月ほどで、去年の8月に行って、今年の5月の末に日本に帰ってまいりました。向こうで経営学の勉強をして、今年4年を終えたら卒業という感じです。よろしくお願いいたします。

●細井さん

私は今、早稲田大学の政治経済学部 に所属しております。国際政治経済を学んでいます。私の簡単な経歴としましては、公立の小学校を卒業した後に青山学院中等部に入學して、中高は青山学院で過ごしました。その間にオーストラリアとか英国に2週間ほどの短いホームステイのプログラムといった短期の交換留学などを経験した後に、高校3年生の2012年の8月末くらいから2013年度の8月初めまで1年間、国際ロータリーの交換留学生としてアメリカ合衆国のニュージャージー州に派遣いただきました。

留学先ではホームステイで、入った現地の高校では、日

本人が私一人しかいないような状態だったので、語学留学というだけではなく、向こうの文化なども一緒に学んでくるといような経験をさせていただきました。

今、大学ではまだ1年生ですけれども、これから大西さんのようにまた大学でも留学したいと考えているところです。今日はよろしくお願いいたします。

●ホサインさん

バングラデシュから来ました。私はバングラデシュで小学校、中学校、高校を卒業し、工業大学に入学して、1年間そこで勉強をしました。その後、日本に留学する機会を得て、高等専門学校で学生として日本に留学をしました。

日本に来て1年間、日本語を東京の日本語学校で勉強し、その後、高等専門学校で3年間勉強しました。その後、去年電気通信大学の学部3年生として編入学しました。今は学部4年生です。

2009年に日本に来て、今5年経っています。日本人と外国人との関わりが結構ありました。今日はよろしくお願いいたします。

●柳本さん

僕は中高一貫校に通い、一般入試で立教大学に2012年に入学しました。僕の在籍する異文化コミュニケーション学部という学部が、2年時の後期に必修の留学プログラムをカリキュラムに組んでおり、自分も実際、2013年9月から今年3月まで半年間と非常に短い期間ですけれども、アメリカのカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校という、先日ノーベル物理学賞を受賞した中村教授がいらっしゃる大学に留学をしておりました。

この留学経験をもとに、僕は来年から就職活動をする予定です。留学先でも本当に国際色豊かな学生があふれる環境の中で過ごしてきたので、それを是非将来、社会に出て、そのような機会に恵まれるような職業に就ければよいかなと考えております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

●高原さん

私は2006年から2010年の間、アメリカで高校生活を送りました。留学とは少し違うのですけれども、父の海外赴任に同行する形で、アメリカのニュージャージーの現地の高校に約4年間通いました。

あちらで高校を卒業した後に、日本の大学に入学することにし、帰国枠の受験枠を通して中央大学に入学をしました。現在は法律の勉強をするとともに、アメリカに行っていたことで国際的なことにも興味があり、サークルのボランティアで海外に行ったりという機会も多くありました。以上になります。よろしくお願いいたします。

●コーディネーターB

どうもありがとうございました。では、ここからですけれども、まずどのような形で留学をしたのか、もう少し深く伺わせていただきたいと思います。併せて、留学を決意したきっかけ、理由というものを留学する目的ということも絡めてお話しいただければと思います。時間の都合上もありますので、できる限り全員の方にお伺いしたいのですが、まず高校の3年次に留学された細井さん、経緯を含めてもう少し詳しくお話をいただけたらと思いますが、目的なども含めていかがでしょうか。

●細井さん

私は幼い頃からかなり好奇心が旺盛なほうで、海外の生

活はどのようなものだろうと、単純にすごく興味がありました。それで中高の間にオーストラリアやイギリスに2週間ほどですけれども、交換留学をして、現地の高校に行かせていただいた時に、日本の学校とは全然違うとすごく驚いて、向こうの生活とはどのような感じだろう、家族の感じはどう違うのだろうか、と、すごく興味を持って、留学をしたいと思いました。

また両親が留学経験があったこともあり、留学には理解があったのですけれども、それでもやはり両親は大学で留学をしたほうがいいのではないかといい、少し反対がありました。私は高校の間にホームステイという形で留学をするということは、大学で留学することとはまた違ったところで学ぶところがたくさんあるのではないかと思い、説得をしました。

それで留学を決意したきっかけとしては、好奇心がすごく旺盛だったというところが一番大きいのですけれども、もともと国際連合などで働きたいと思っていたところがあり、その留学機関のロータリーの方にも、国連にすごく興味があるというような話をして、ニューヨークに国連のヘッドクォーターがありますので、そちらの近くのニュージャージー州に派遣をしていただくというような形で留学に至りました。以上です。

●コーディネーターB

ありがとうございます。好奇心旺盛であったという点ですけれども、幼い頃の経験とか、何かそういうものが関係していると思われませんか。

●細井さん

そうですね、すごく関係はあるかなと思います。私の祖母がオーストラリアの家族のホストファミリーとして短い間でしたが、受け入れをしたことがあり、その縁があって、オーストラリアの家族が私の祖母の家に遊びに来るといような機会が、本当に5年に1回くらいあり、そのような時に英語をしゃべれないながらに一生懸命コミュニケーションをして、大変仲よくなったというか、大変興味を持ったというのは、幼い頃からの経験のお陰かと思っています。

●コーディネーターB

ありがとうございます。やはり家庭での環境というか、幼い頃から異文化に触れるという機会があったというのは、結構大きいと実感されているということですね。

ちなみに、もう少し留学先のお話も聞かせていただきたいのですけれども、ホームステイ先で日本人一人という環境だったとおっしゃっていましたが、他の国からの留学生というのはその高校にはいましたか。

●細井さん

私が通っていた高校自体はアメリカにしてはとても小規模で、全体で800人程度しかいない高校だったので、留学生が私一人の状態でした。ただ留学プログラムとして、世界各国から留学生が集まってくるので、各国の留学生と最後には一か月間、アメリカを一周するトリップというようなものもあり、100名の36カ国くらいの違う国から集まった留学生と触れ合う機会というものもいただきました。

●コーディネーターB

続きまして、ホサインさん、留学の目的、それから留学を決意したきっかけなどについて、よろしければパワーポイントなどをお使いいただいて、お話しいただけたらと思います。もしご用意していたらお願いいたします。

●ホサインさん

私が留学したきっかけは工業大学で勉強していたのですが、そこにいた時、日本に留学できる情報があり、実は私が入っていた工業大学は電気電子工学が専門だったので、私の興味があったのは太陽光発電の研究でした。その分野で日本は結構優れた技術を持っていて、自国でも結構実用化されているので、私は日本に行って、この技術を学びたい、それが一つです。

それから、ちょうど奨学金もあったので、それももう一つの理由です。

あともう一つはバングラデシュでは日本の製品の評判がとても良いのです。ですから私はこのような物を作る人たちを見たかったのです。何をしたら、こんなものができるのか、そういうことを見たかったのです。

●コーディネーターB

日本に留学ができるという情報があったということなのですが、他の国への留学は考えたりしましたか。

●ホサインさん

私は、もしこの奨学金と日本へ来る機会がなかったら、恐らく学部を卒業した後で、アメリカとかそのような国へ行く予定でした。その場合は、そちらのほうを優先していたかもしれないです。

●コーディネーターB

ちなみに奨学金に選ばれるために、何か試験とか資格とか、そのようなものは必要でしたか。

●ホサインさん

まずいろいろ試験があって、それで何人か選ばれました。

●コーディネーターB

日本での日本の技術力を学ぶ、見るということが目的だというお話でしたが、日本に来て日本語教育センターに入られているのですが、留学する前にも日本語について知識があったり、日本に親しみを感じていたとか、そういうところはありましたか。

●ホサインさん

日本に来る前は平仮名、片仮名、そのようなものを、1カ月くらい教えてもらいました。そして、少しアニメが好きでした。

●コーディネーターB

どのようなアニメが好きでしたか。

●ホサインさん

「るろうに剣心」。バングラデシュのテレビで、それが流れていました。

●コーディネーターB

ちなみに、それは日本語で流れて字幕が出るのですか。

●ホサインさん

最初の歌と最後の歌だけ日本語で、あとは英語です。

●コーディネーターB

日本に来る前にも、日本の文化に触れる機会が母国でもあったのかなという印象を受けましたが、では少し時間の関係もありますので、柳本さん、留学のきっかけとか、目的、経緯についてお話しください。

●柳本さん

僕がそもそも留学をしようと思ったきっかけとありますが、中学生の頃から主にアメリカのサブカルチャーに大変興味があり、そういった映画とか音楽とかを鑑賞する中で、やはり現地での文化とか、慣習といったようなものは

いかなるものなのかということに関して大変関心を持ちました。

高校1年生の時にアメリカのシアトルで2週間ほどホームステイに行き、そこでホストファミリーの方といろいろと交流があって、それで大学に入って、本当に長期で留学をしたいと考えました。

立教大学に入学してからは、先程申しあげたように必修のプログラムとして留学が組み込まれているとお話ししましたが、その時に SAF という留学の機関と立教大学が提携をして、幾つか国で選択肢がある中で、アメリカのカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校を選択しました。

●コーディネーターB

中学生の頃からアメリカの文化に興味があったということなのですが、その興味をお持ちになるきっかけになったことは何ですか。ここでこの時にこういう映画を見てとか、あるいは周りの人でそういうことに詳しい人がいてとか、何かそういった理由について、思い出せるものがあればお願いします。

●柳本さん

もともと英語という言語そのものに小学生の頃から大変関心があり、特に当時中学生の頃は単純にアメリカ英語の響きがかっこいいなと思い、自分もそういうふうにならないうちに英語をしゃべれたらというような憧れがありました。中学生の時に、70年代の西海岸におけるスケートボードを考案した方々の実話に基づいた話の映画を見て、やはりアメリカの文化、特に西側の文化というものに大変関心を抱くようになりました。

●コーディネーターB

3名の方に話を伺いましたが、何となく共通点としてあるのは、やはり既に留学するはるか前といたしますか、幼い頃から好奇心、異文化への関心があったというところが、共通している部分なのではないかと私は感じました。では今度は挙手制でお願いしたいのですが、留学経験を通じて学んだこと、留学したからこそこういうことが経験できたというようなことを、具体的なエピソードを交えながらお話をいただきたいと思います。主に苦労したこと、直面した問題、また、どのようにそのような困難を乗り越えることができたかというところをお話しいただけたらと思います。

では大西さん、お願いいたします。

●大西さん

一番苦労したことですが、私は向こうの大学に行って、留学した先の大学がアイビーリーグという私立のアメリカの有名な学校の集まりの一つだったのですが、その中でも経営学とかビジネスに関して大変力を入れている学校で、その学校の授業を受けている学生たちは、大変熱心に授業を受け、熱意のある人々でした。その中で授業を生き抜いていく上で一番苦労したのが、グループ・ワークとか、グループ・ディスカッションです。アメリカの大学では日本の大学に比べてはるかに多い。そのミーティングなどを行っている時に発言をしないということは、その場に存在しないというような感じの空気だったということが一番苦労しました。日本の大学のグループ・ワークでは、何となくみんなお互いの意見を聞こうとやさしく促してくれたりすると思いますが、アメリカでは自分が他人の意見に割り込んででも何かいわなければその場にはいないこととして、か

つ議論に貢献は全くしなかったと見なすということが大変クリアで、後でグループ内のメンバー同士でもピアレビューといって、お互いがどれだけ議論への貢献したのかということを生徒同士が採点するというシステムがありました。つまりは発言をしないと友達にも成績がもらえないし、先生にも成績がもらえないというような感じなのです。やはりそこが一番苦労しました。帰国子女などではないので、英語がやはり少し怖かったりとか、変なことをいったり、的外れのことをいっているのではないかと、議論が大変早口なので、論点をまとめられているのかとか、いろいろな不安があるのですけれども、そこで学んだことは何かなんでも取りあえず試してみるということが大事だと思いました。どんなに恥ずかしくても、グループの中で一番英語が下手なのは明らかなので、これ以上恥ずかしくなりようがないという心持ちになってきて、頭に浮かんでいなくても手を挙げるというようなルールを自分でつくって、ミーティングごとに絶対に3回は発言するというようなルールをつくって、どうにか克服していったという感じです。

●コーディネーターB

今、お話にあった言葉の面で、自分が一番不得意であるというお話でしたが、まわりはほとんどネーティブの方でしたか。

●大西さん

そうですね、アメリカなので、やはりレイスという人種の意味で、いわゆるアメリカ人ばかりではないのですが、中国の方とかも別にプレップスクールというか、アメリカのレベルの高い私立学校を卒業した方が多かったの、見た目は全然アメリカ人っぽくなくてもしゃべれないという人はほとんどいなかったです。

●コーディネーターB

分かりました。そうすると今、お話を伺いますと、やはり言語の力、英語をどれぐらい話せるかということで克服した部分もあるかと思いますが、授業を受けていくにつれて相手がいつていることが分かってくる、あるいは自分のいいたいことを表現できる英語力、語学力がつくということもあるとは思いますが、今のお話を聞いていると、まずは自分の中でルールをつくり、気持ちの持ち方を変えるという部分が大変大きかったのかなと思います、いかがでしょうか。

●大西さん

そうですね。やはり内容とか自分の思いつく考え方としては、もちろん授業とともに進行しますが、初めから結構いいたいことはあったかといえませんでした。それをいえるかといえないかの差であったので、やはり気持ちの持ちようかなと思っています。ディスカッションで発言しなければと思って、失敗したり、成功したりを重ねていくうちに、だんだん、意外と友達とのコミュニケーションなどでもオープンになれたと思っています。恥ずかしいこともいえるし、自分の姿を出すというか、間違っても、恥ずかしくても気にしないというような心の持ちようにどうにかこうにか変えていったことが一番の理由だと思います。

●コーディネーターB

もう少し次の項目で、今の話を深めて聞きたいと思いますが、大西さんの経験と似たようなことがありますか。あるいは少し違う経験があったというようなことがあれば、是非お願いします。

細井さん、お願いします。

●細井さん

私も語学では苦労はしたのですが、それとはまた少し違ったところで、留学を通じて大変学んだことを一つお話ししたいと思います。

留学を通じて私は自分がアジア人だということをすごく感じたのです。学校には日本人としては一人だったのですが、中国とか韓国系の人たちがいて、何となくアジアのグループがあったり、アジア人という中で韓国人に見られることもあるし、中国人に見られることも、他の東南アジア系の人と間違われる時もあるので、そういったところで、「あつすごい私ってアジア人なんだ」ということを日本では全く感じたことがなかったことを認識して、さらに経験に拍車をかけたというようなことがあります。留学生同士で何度か集まってオリエンテーションキャンプなどが月に1回くらい開催されるのですが、その中で8名ほど、私の近くには留学生がブラジル、アルゼンチン、スペイン、フランス、韓国、それから私というような形でいろいろな国の方がいたのですが、韓国からの留学生の女の子と仲良くなって、2人で夜更かししてずっと話し合っていました。その時に話の流れで、日韓関係の話で盛り上がるというんです、真剣な話ですけれども、話をしました。その時に歴史認識とか、領土問題で喧嘩はしないで話そうというような約束をしました。でも本当に私たち同士はこんなにうまくやっているのに、どうして国としてなかなかうまくいかないのだろうというようなところを話し合ったことが大変私の中で心に残ったという、何か変えたいなというように、心にぐっと来るものがありました。それで、私はもともと政治には興味は持っていたほうなので、けれども、国連というような何となく国際的な関係で働きたいというようなところから、東アジアの関係に大変興味を持つようになって、早稲田大学がアジアに強いというところもあり、帰国後は、もともとはアメリカの大学を目指して、SATの勉強もしていたのですが、そうではなく、もう一回日本の大学で私も学ぶべきことがたくさんあるのではないかと思います。

今も日中間の学生を集めた会議で、先般、中国の西安に1週間ほど行ってきましたが、そういうところで私の興味を持っている分野が留学を通して思いもよらぬ方向といえますか、まさかアメリカに行って自分がアジアに興味を持つようになるとは思っていなかったもので、そのようなところで大変視野が広がったと思っています。

●コーディネーターB

ちなみに私も実は留学経験があり、アメリカのペンシルベニア州に1年半行っていたのですが、はるか前の話ですが、私も実は韓国人とか台湾人の友人ができたのを覚えています。韓国の方と親しくなったということですが、英語でコミュニケーションをされていましたか。

●細井さん

はい。英語でした。

●コーディネーターB

何かお互いに英語が母国語ではない者同士で、英語でコミュニケーションをするというのは、まさにグローバル化の中であり得る状況だと思いますが、そういう状況の良い点とか、お互いに母国語ではない英語で話すということの難しさとか、何か気付いたことがあれば教えていただけたら

すか。

●細井さん

1年間の留学でしたので、一番最初は韓国のその留学生はもともと英才教育を受けていたのか、大変英語は堪能だったのです。全体として英語があまり得意ではない女の子や男の子もいて、最初はコミュニケーションが本当にままならない状態で、もう身ぶり手ぶりも使って、たまたまGoogleの翻訳も使ってというような状態でコミュニケーションをしていたのに、1年間をかけて留学が終わる頃にはみんながどんどん会話に関しては本当に流暢に会話が弾むようになっていたということが、自分でも感動したというか、成長したと思ったところではあります。

それから、英語が母語ではない者同士の会話だと、知っているボキャブラリーも似通ってくるところがあるので、逆に私は会話はしやすいというか、難しい言葉はあまり出てこないのではないかと思います。

●コーディネーターB

大変共感できます。確かにネイティブの人がよく使うけれども、意外と外国人が知らない語彙などがあるとなかなか難しい時もあると思いますが、確かに同じくらいのレベルで会話ができると意外とスムーズだったり、時に大変な時もあるとは思いますが、そういうことはやはり今後増えてくるのかなという気もいたします。

それから、自分がアジア人であるということを感じられて、その後アジアに対して目を向けて学びたいと思うようになったという話だったのですけれども、留学先で人種差別的な経験はありましたか。

●細井さん

若干偏見のようなものは感じる時はありました。私も割と結構人見知りしないほうというか、割と明るくばんばん喋るほうでしたので、そういうことが少し普通の日本人のイメージとは違うというようなことをいわれたこともあったりしました。その程度で、差別をされて嫌な思いしたことはないです。私は幸運でした。

●コーディネーターB

なるほど。分かりました。私自身は少し人種差別的な対応をされたことがあったので、もしかしたらあったのではないかなと思ったのですが、どういう形で現地のネイティブの方が思っていた偏見を乗り越えることができたと思われますか。あるいはもともと悪い偏見ではなかったのかもしれないですが、日本人に対するイメージのようなものをどういう形で少しずつ払拭していくことができたのか、そのプロセスなどがありましたら教えていただけますか。

●細井さん

これが良い形の改善なのか分かりませんが、やはり数学の授業などを取っていて、向こうは計算機を使って解けるのですけれども、結構暗算が苦手な子もいて、「これとこれは何だった？」というようなことを私が答えたりすると、すごいと感じるようで、「日本人って本当に数学が得意なんだ」というような、そういうステレオタイプとかもあったりしたのですけれども、逆に私がテストで間違えたりとか、英語もまだ苦手だったので「こんな点数取っちゃった」というような時とかがあると、結構みんなが「お母さんとかすごく怒るんじゃない」というような、日本の教育は大変厳しくて、モンスターペアレント的なイメージがあるようだったのですけれども、「うちはそうではないよ」とか、

「そういういろいろな家庭があって、別にそれだけではないんだよ」というようなことを冗談交じりで話したりして、「そうなんだ」という感じでどんどん理解は広げられたのかなと思っています。

●コーディネーターB

やはり接してみないと、どういう人かというのは分からないですし、例えば日本人はこう、アメリカ人はこう、中国人はこうという考えを、少なからずわれわれは持っているのではないかなと思うのです。そういうものも異文化で交流をしていくという中で少しずつコミュニケーションの中からそのような理解をお互いに深めていけるというところを話を聞いていて実感いたしました。

では、高原さん、お願いします。

●高原さん

先程の差別問題ですが、私は高校時代をずっとアメリカで過ごして、現地の高校は留学制度がなかったところで、結構大きな学校で全校2400人くらいいて、その中で日本人1人で、ESL、英語がネイティブではない生徒たちが集まるクラスでは、10人程度の中で生活をしていました。差別というものは大変あからさまに受けていて、それを克服するのが大変だったという経験があります。

それを克服する際に行ったことというのは、大西さんがいっていましたが、もう開き直って、私は失うものは何もないということで、英語が喋れないことはみんなにばれていきますし、アジア人で、結構内気だったので全然喋れなかったし、グループ・ワークとか、プレゼンテーションが授業で大変多いのですが、もちろんみんなは英語を喋らない人とは組みたくないので、私は全然組んでもらえなかったりとかもしていた。ですからその際に頑張ったことというのは、まず英語力を付けなければいけないということで、英語の勉強をしっかりとしたということです。

それから、友達をまずつくらなければということで、友達をつくれれば英語力も自然に上がってくるし、授業でも友達がいればその時に助けてもらえると思ったので、部活動にも入って、その克服ということをしてきました。

その際に得たものは何かといたら、やはり度胸が大変ついたなということです。

●コーディネーターB

2400人規模の学校でたった1人の日本人という状況で、差別をもうはっきりと出してくる生徒と、大変フレンドリーな人もいたと思いますが、どちらが多かったですか。

●高原さん

差別をする生徒もいて、あと無関心な子もいましたが、アニメが好きな生徒は結構日本人と分かって、「このアニメ知っている」というようなことをいわれたりして、仲良くなったりしました。

●コーディネーターB

今、3名の方のお話を伺って、語学力アップという話が最後の高原さんから出たのですが、そこはやはり基本の部分かということも感じますが、それ以上にどのようにして周りの人々と関係を築いていくかという部分で、その環境を築いてコミュニケーションを取っていく中で、いろいろな問題が少しずつ解決していくのかなという印象を受けました。

では、次の項目に話を進めさせていただきますが、今、留学をまさにされているホサインさん、それからもう留学

を終えて帰国されている4名の学生の方々、グローバル社会を生き抜く上で必要な資質であるとか、スキル、あるいは物の見方、考え方はどのようなものだと考えているのかについて、一人ずつお伺いしたいと思います。

では大西さんからお願いしてよろしいですか。

●大西さん

この質問を考える時に、パネリストの皆さんとも話していたのですが、グローバル社会で生き抜くということはどう定義するかという話が少し難しく、私の中での定義としては、アメリカや欧米の良い大学に行って、良い成績が取れてというようなこととか、外資系でバリバリ働けてとか、そこまでの世界ではなく、会社でどこかに行くとなっても「行きます」といえたりとか、道端で誰かを道案内しなければいけない時に道案内しますといえたりとか、他の国の人たちと共同作業ができるというようなレベルのお話をしたいと思うのです。私はその上で必要だと思うことは、まず一つに、先程話した、ミスを恐れないということです。もともと失敗したりとか、恥ずかしい思いをするのがとても嫌だったのですが、それは環境を変えればそうならざるを得ないという部分もあり、そうやって自分で環境をまず変えて、その後でミスすることを恐れないようにするという心構えと、二つ目に必要だと思うのは、そのミスをしただけでは恐らく意味がなくて、ミスをして恥ずかしくないからいいやと開き直っていたら意味がないので、それに対して自分で何かしらの解決策を見付けていくということかなと思っています。これはとても基礎的な普段の勉強などでもすることだと思いますが、取りあえず頑張って試験を受けてみて、何か悪いことがあったらそれに対して修正するという基礎的な PDCA サイクルというようなものですか、そうやって修正していくという力も大切だと思っていて、そのためには常に何のために自分がやっているのかという目的意識を持つことが大切だと思っています。例えば私であれば経営学を勉強しに行ったのだから、経営学の授業で学んで、その生徒たちとディスカッションを深めて何かを学ばなければ意味がないという目的意識があったので、そのために、やはりいろいろな苦勞を乗り越えられると思いますし、何かしらの中長期でも短期でもいいのですが、プランなり目標を持って、それを実行する段階ではミスを恐れないで、何か実行しているものがあつたならば、必ずそれを何かに生かすということが基礎的なことですが、とても難しいことだと思いますし、大事なかなと思いました。

●コーディネーターB

やはり、それは留学経験でより痛切に感じたということでしょうか。

●大西さん

そうですね。具体的な話でいくと、例えば授業のリーディングを大量に読まなければいけないとなった時に、やはり単語がよく分からないのです。分からない単語がたくさんある。そこで単純なこととして、授業の前に必ず予習は終わらせて、単語は全部調べていって、授業を受けて授業中は何か発言する。どんなにばかに見えるような質問でも何か質問をする。その後で、授業の後で復習できることがあれば、復習をする。今まで大学に入って1、2年の間というのは、そのようなことは、正直いって、していなくて、日本の大学で予習や復習をするという概念はあまりないと

思います。

アメリカの大学に行って、みんなが当たり前、この大学に入る時点で恐らく大変頭の良い人たちの集まりであるにもかかわらず、みんな基礎的な宿題は全部やって、復習もやってきているということにびっくりしました。やはりこういう当たり前のことをやらないと、そもそも語学で実質アドバンテージがあつたら並べないということに気付いて、これは恐らく会社に行ってもそうなのですが、基礎的な準備、実行、復習ということが大事だということは痛切に感じました。

●コーディネーターB

続きまして、細井さん、お願いします。

●細井さん

私もグローバル社会を生き抜く上で必要な資質とか、スキルという考え方は大変難しいと思ったのですが、今思いついたことを3つ挙げると、まず1つ目に、素の、ありのままの自分を知って、それに自信を持つことということが大事になってくるというように思いました。

留学を通して、日本にいた時は家族がいて、友達も何となく昔から知っているような友達がいてという、大変恵まれた環境で、いつも誰かが助けてくれるような、自分に甘えたところがあり、間違った自信のようなものを持っていたところがたくさんありました。アメリカで初めて家族とも離れて、友達もいなくて、誰も私のことを知らない状態になった時に、自分が最初は無力に感じたというか、とても自信をなくして、英語も伝わらなくて笑われる時があるし、どうしたらいいのだろうと、大変自信をなくした時期がありましたが、1年間の留学を通していくうちに、自分の英語もだんだん向上していくのも分かるし、例え全部がうまくはいかなくても、成長できるとか、何とかかなというような、そういう自然な状態の自信のようなものがだんだんついてきて、自分を過大に評価するのではなく、今の自分はまだ足りていないけれども、でもそこまでたどり着くことはできるというような、そういう自分への希望であつたり、ポジティブな自信を持てるようになったということが大変大きいと思います。

グローバルな社会で生き抜くということは大変難しいことだと思うので、それができるんだというように、できないのに無理やり自信を持つのではなく、今はできなくてもきっとできるようになるという、そういった形での自信を持つことが、積極的に挑戦するという勇氣につながってくると思うので、大事なかなと思いました。

2つ目に思ったことは、国際的な視野を広げるといいですか、多角的な視点を持つということは本当に大事なかなと思います。日本人、アジア人というような視点だけではなく、グローバルな社会では全然違う考え方も存在するということです。例えばクラスの歴史の授業でエッセーを書く時に、では反対の目線からこれを見たらどうなるのというような質問を先生にされると、全然違って見えるという形でどんどん学ぶことがあつて、多角的な視点を持つというのは相互の理解を図るために大事だと思います。

3つ目、これはグローバルというところに限らず、本当に周りに感謝するということがどんなところでも大変大事だと思って、自分ができないところとかも、周りの人が助けてくれるというようなことは多々あるし、本当にその時に一回一回ありがとうという気持ちを伝えて笑顔でいる、

それだけで言葉は伝わらなくても自分の感謝している気持ちであったり、笑顔で、関係というのは全然よくなるというようなことを大変感じたので、そのような基本のところは忘れてはいけないと思いました。

●コーディネーターB

続きまして、ホサインさん、お願いします。

●ホサインさん

私は特にいうことはないのですが、例えば3番目とか4番目で今まで話した内容、私の場合も結構そういうものが適応します。

●コーディネーターB

何か日本に来て初めて気づいたことで、例えば、考え方とか、留学をして何か自分の国ではこういうことは分からなかったというようなことで、今後に生かしたいと思うようなことが具体的にできればお願いします。

●ホサインさん

やはり視野が広がりました。例えば国にいる時、友達とか、みんながいる、そういうことを日本に来て初めて実感しました。

●コーディネーターB

母国でいわれていた日本のイメージなどを、実際に来てみてよく理解したということですか。

●ホサインさん

やはり文化が違うので、結構いろいろ難しいところが出てくる。そこは仕方ない場合もあるのですが、それが一つ。それから、やはり自信を持って前へ進んでいく、そういうことが大事だと思いました。

●コーディネーターB

やはり視野を広げるというキーワードは出てきたと思うのですが、あとは先程と同じように自信を持つということですね。

では柳本さん、お願いします。

●柳本さん

まず私が留学を経て思ったことは、グローバル社会の中では必要とされていることのひとつとして、当たり前のことですが、異質なものに寛容になるということがまず一つあると思います。

日本はまだ単一民族国家といわれていると思いますので、なかなか日本にいながらにして、異なる文化的背景を持った人たちと触れるというような機会も少ないのではないかと思います。僕が実際、カリフォルニアに留学している最中は、先程申しあげたようにいろいろな国から来た留学生が同じアパートに滞在をしていて、何カ国という人たちが一堂に会して交流があったりということもありましたので、一概にそういう人たちがどこの国の人といったようなカテゴリーに入れてしまうのではなく、日本人とは変わらない同じ人間的な面も当然持ち合わせているので、そこを、日本人と同じようにとっていいのかわかりませんが、特別、外国人ということをあまり意識はせずに、コミュニケーションを取っていくことが良いと思います。

それから、自分が思ったのは、もともとあまり積極的なほうではなく、どちらかというと引っ込み思案な性格だったのですが、留学に行く前に、前の年に同じ大学に留学されていた先輩からも積極的に行けというアドバイスをいただきましたが、なかなかそれをすぐに自分で実践することができず、苦労した面もありました。ただあまり積

極的になれないなりに、自分には何ができるかといったことを考えた時に、例えば一度絡んだ相手には声を掛け続けるとか、そのような何か自分なりのやり方で人とコミュニケーションを取れるのではないかと考えました。ある意味では自分らしさというものを残したまま、なおかつ人と円滑にコミュニケーションを取って、関係を築いていくということも大事なことでないかなと感じました。

●コーディネーターB

先程ホサインさんの話の中にもあった、文化が違うから仕方ない面もあるというところで、異文化に対して寛容になる姿勢とか、そのようなものというのもまだまだこれから先に身につけていかなければいけない、あるいは留学を通じてやはりあらためて感じられる点なのではないかと思いました。そういうものの考え方というのは、大変重要だということを話を伺ってあらためて思いました。

では、最後に高原さん、お願いします。

●高原さん

私が思うに、グローバル社会で生きていくということ自体、異文化の中で、今後、例えば学校から卒業した後に、どうやって世界の中で、ビジネスになると思いますが、うまくやっていけるかという面を考えると、二つ思うことがあって、ほとんど一緒なのですが、度胸といいますか、自分に自信を持つということと。それから柔軟にいろいろな意見を取り入れて、吸収していくということが大事だと思っています。度胸を持つ必要がある理由というのは、私は結構自分の意見を聞いてもらえないことが多かったもので、そもそも日本人だから、「もうあなたの意見は聞かないです」とか、英語が喋れないから、「何いつているの」というような、削除のような形になることが結構あると思います。ですから、そういう際には、それでもきちっと自分の意見を発信していく力といいますか、根性といいますか、そういうものが絶対必要になってくると思っています。

柔軟性というのは、自分の意見を聞いてもらいたいのであれば、相手の意見もきちんと吸収しないと、自分の意見をそもそも聞いてもらえないことがあるので、相手がいつてくることはきちんと吸収する。例えば自分の中では、どうしても受け入れられない考えとかもあると思いますが、そういうことに関しても、一応表面上は「分かったよ」というような形で受け入れるという姿勢を、きちっと身に付けていくということが生き抜くという観点からいくと、大切ではないかと思っています。

●コーディネーターB

今、5名の方にお話を伺い、語学力は恐らく基本的な話で、大西さんの話の中には、自分が周りとは比べた時に英語力という点で足りない部分があったという自覚の下に単語力を上げるとか、予習復習をする、そのような基本的な学習姿勢としては語学力という話が出たと思います。5名の方に伺うと、やはりもっと内面的な深い部分での資質であるとか、力、そういったものが必要な部分だとあらためて実感いたしました。

特に自分が発する側としての度胸とか、ミスを恐れない、そういった精神力、あるいは自分が今度コミュニケーションの中で聞く側になった時に、寛容に受け入れる柔軟性とか、そのようなものが大変重要ではないかと感じました。

●コーディネーターA

一人一人が非常に貴重な体験をされているという感じが

したのですが、もう一つだけ皆さんに質問をしたいのですが、それぞれの体験を通じて、これからどのようにに人生をつくっていくか、今後のビジョンというようなものがあるならば伺いたいのですが、いかがでしょうか。

大西さんどうですか。

●大西さん

ビジョン、進路としては今大学4年生なので、来年の春からコンサルティングファームで働くことになっていて、その後、あまり長くいる業界でもないの、数年でどこかに行って起業したいというのが私の今の目標です。

それに今の留学経験をどう生かすかという話ですけれども、再三繰り返して申す申し訳ないですが、やはりミスを恐れないということは大事だと思っていて、具体的に言えば、例えば目上の人に報告をする時であったり、ミーティングの時であったり、そういう時でもそのような経験は生かせると思っていて、発言するだけで無責任な発言をし過ぎるという意味ではないのですけれども、ある程度ミスとか怒られることを怖がらずにやってみることとか、あとはコンサルティングファームが結構グローバルなものなので、海外の方とも同じチームで働く機会が多いと思うのですけれども、そこでやはり、今、柳本さんから出てきていたような異質なものの寛容性とか、違う国の人と協働する上で、どこまで譲って、どこからは譲らないかということや自分で整理しておくとか、ある程度話は聞けるけれども、ここは絶対に譲らない、そういう強い姿勢を持って、他の人と協力しながら、かつ自分の意見も通せるような姿勢でいるということや、ミーティングとか、グループ・ワークを通して学べたことはありがたいことと思っています。

また、国に関係なく、先程いったように友達との関わり方とか、同僚もそうだと思いますが、人と関わる時に何が大事かということやあまり国は関係なく、あいさつとか、しつこく、人懐っこく寄っていくこととか、そういう基礎的なことも学んだと思うので、そういうところを実際に海外の人と働く時とか、もちろん国内の人と働く時も生かしていけたらと思います。最大に学んだことは異なる人とか、異なるバックグラウンドを持った人と、どのようにコミュニケーションを取るか、その中で自分をどれくらい表現できるかということだと思います。

●コーディネーターA

細井さん、同じ質問で申し訳ないですが、いかがでしょうか。

●細井さん

そうですね、私もビジョンといいますか、自分の将来に関しては結構迷っていて、いろいろなことに興味があるので、これからの大学生活で絞っていくとか、自分が本当に興味があることを見つけていけたらいいと思っています。今、留学を経験した中で、東アジアは大変興味を持っていて、中国とか韓国のプログラムにどんどん参加したいと思っていますし、それから教育なども大変興味があるので、皆さんの話も伺いながら、将来、役立つことがあればいいと考えています。

将来のことが今、自分の中でも少し迷っているとか、不透明なところはあるのですが、大学生活の中ではもう一度留学をして、国際政治とか、アメリカに留学したいと思っているので、女性が社会に参加していくのはどのくらい

なのかとか、そういうところも学んでいきたいと考えております。

あとは留学生のサポートということも、自分が今できることではないかと思っているので、日本から留学に行く人もそうですし、日本に留学に来てくれる人にも、相談役や観光案内でもいいので、何か力になっていけたらと思っています。

●コーディネーターA

ホサインさんはどうですか。日本での留学経験をどのようにこれから生かしていこうとお考えですか。

●ホサインさん

私は、いろいろ恐れていたことがたくさんあったのですが、これからは積極的に、失敗を恐れずにやっていくつもりです。それから、私は研究者になりたかったので、研究者になりたいです。

●コーディネーターA

柳本さんは、いかがでしょうか。

●柳本さん

まだ具体的にどのような方面に進むかということは自分の中でも決定していないので、漠然とした答えになっていますが、留学先で実際に知り合った人たちの国の数を数えたら、大体15カ国ほどあり、実際に人数でいうと、あまり仲良くない人も含めると、大体50人くらいだったので、社会人として先程も申しあげたように、働く上でもそのようなさまざまなバックグラウンドを持つ人たちと、英語なり他の言語でコミュニケーションを取りながら行う仕事に就ければいいと思います。

例えば商社、今、再生可能エネルギーなどが注目されていますが、発展途上国とか、そのようなところに視察に行った上で、現地の方々とコミュニケーションを取りながらプランを立てていくというようなこととか、あとはメーカーです。原材料の輸入等をする時に、相手の国の代表の方々と話し合いで決定することやそのようなことがあれば、そのような仕事に積極的にチャレンジしていく場があれば、そのような方面に進みたいと考えています。

●コーディネーターA

高原さんは高校時代、アメリカでずっとお過ごしだったようですが、そういった体験をこれからどのように生かしていきたいとお考えでしょうか。

●高原さん

私も大西さん同様4年生で、就活を終えた状態ですけれども、銀行員になる予定ですが、やりたかったことというのが、私は大学時代にボランティアで発展途上国に行って、まだ発展していない地域に支援をするという活動を行っていたのですが、その経験から日本の会社が海外の途上国に例えばインフラとか、そういう設備をするプロジェクトに融資するような形の仕事に就きたいと思っていて、実際、配属は人事が決めるので、私自身何もできることはないのですけれども、その上でその夢に向かってやっていくこととしては、さまざまなところで、例えば営業とか、そういう面で経験することがあると思うのですけれども、その際、アメリカの生活で身につけた発信力とか、相手が本当に何を求めているのかということを相手の立場になって、視野を広げて考えるという、身につけたことを生かして、夢に向かっていきたいと思っています。

●コーディネーターA

最後に今日は全国から中学高等学校の先生方がお集まりです。それぞれ皆さんの体験を通じて、中学校高等学校を振り返っていただき、この時にこういう教育があったからよかったとか、こういうことがあればもっと活用できたのではないかと、そのようなことがあれば話していただきたいと思います。それから中学生高校生で留学を希望している生徒は結構いると思うのです。そういう中学生、高校生に何かアドバイスをいただけたらと思うのですが、ぜひ私にいわせてという方がいましたら、お願いしたいのですが、いかがですか。

大西さん、よろしくお願いいたします。

●大西さん

自分の学校でやられていたことかどうかはちょっと不明ですけれども、英語をコミュニケーション・ツールだという認識をさせてほしいということがあります。あくまで一つの科目というのが大体の生徒にとっての認識だと思うのですけれども、なぜ英語を学んでいるかという、恐らくコミュニケーション・ツールで、人とつながるためだと思うのです。ですから、今の段階だと学校の英語教育は大体インプット中心になっていて、単語を覚える、読解をするということが中心だと思うのですが、コミュニケーションということ考えると自分の頭の中で何を考えていても、何かいなければ通じないということがあるので、アウトプットをもう少し中心に考えていってもいいのではないかなというのが私の個人的な思いです。例えば読解と同じくらいに英作文をするとか、人と話す機会を与える。例えば先程もいっていたように、アメリカとか白人の方々と話すだけのコミュニケーション・ツールではなく、世界中の人と英語ができればつながれるという実感を持たせることは大事だと思っていて、スカイプでも何でもいいので、韓国の人とか、東南アジアの英語話者と喋らせるとか、英語を喋ることができれば、それがどのくらいコミュニケーション・ツールになれるのかということの実感と、コミュニケーションするための準備、発音記号をきちんと学ばせる、英作文をする、話させる、そのようなアウトプット中心の形にしていくのが大切と思っているのが一つです。

もう一つは英語の力を借りた論理的な思考能力というもの、もう少し育ててもいいのではないかと考えています。私は今、英語ディベートという部活をやっているのですけれども、それをやっていて感じることは、やはり英語は極めて論理的に話すのに向いている言葉だと思うのです。必ず結論を先にいって、バックグラウンドを与えた上で論理的な証拠を伝えていく。その言葉の持つ性質上から来る論理的思考能力を育てる力というのが英語には結構あると思っています。ですから英語を学んだことによって母国語がおろそかになるというような議論もあると思うのですけれども、むしろ逆で、日本語を話す、書くのも恐らくうまくなると思うのです。ですから、もう少しエッセーを書くとか、英語の本来の良いところを、論理的に書くとか話すというところを伸ばしてあげる、ディベートとかエッセーを書く、そういった教育も取り組みとしてよいのではないかと思います。

●コーディネーターA

大西さんは実際、中学高校は日本、東京ですね。そのような中で、そういった教育は受けていましたか。

●大西さん

桜蔭中学校高等学校の出身ですけれども、先生が授業をほとんど英語でやってくれたし、英語の歌とか、そのようなものをいろいろ与えてくれたりとか、他の海外のネイティブスピーカーの先生が授業に来てくださったりとかもしていたのですが、そういう機会が多かった時に、やはり人と喋るツールだということは、ある程度認識させてもらえたと思います。

音楽、歌とかも、みんなは最初は恥ずかしがって歌わないのですが、強制的に歌わされているうちにだんだん歌詞が分かってきて、「ああ、これは他の国の人はこういう音楽を聞いているんだ」と。普段聞いている J-POP と何ら変わりなくて、こういうものを話題にして友達になれるかもしれないという部分はあります。ただ、どちらかというと、私は学校の教育ももちろんだったのですが、留学を通してそれに気づかされたほうか多いかなと思っていて、今、挙げたようなことはもう少し学校の時代にやっておいてほしかったというか、やっておきたかったと思います。

●コーディネーターA

ホサインさん、お願いします。

●ホサインさん

私が知っておいてよかったことは、やはり英語です。母国にいた時に英語を学びました。日本ではやはり試験に合格するために英語を習ってしまうので、あまり実用的ではないと思いました。

やはり英語を発音しようとして恐れる。恐れずにどんどん話したほうがいいと思います。例えば私の場合もこちらへ来て、外国の友達ともずっと日本語で喋っているの喋ることができるようになったのですが、こちらでは英語は全然使わずに日本語を使うので、だから使う必要がある。言語を習うことは難しいです。何か考えたほうがいいのかと思いました。

●コーディネーターA

細井さん、お願いします。

●細井さん

私も2人の意見に賛成で、英語はやはりコミュニケーションのツールだから身につけていて、グローバルな社会で生きたいと思うのであれば、当たり前というようになります。得意科目が英語でも海外に行ったら、その英語というの、できて当たり前ということになってしまう場面が多々あります。私はそれは別に勉強だけに限らずに、こんな楽器が演奏できるとか、こんなスポーツが好きとか、もしかしたら歴史が好きなら歴史でもいいという形で、多方面に何か自分の得意なこととか好きなことというものを見つけておくことが大事と思いました。

具体的な活動として、私が中学高校で経験してよかったなと思ったのが、模擬国連という活動です。各国の大使になりきり、その国のことをリサーチして、その国の意見を述べて条約のようなものをつくっていくのですけれども、その時に自分の国から例えば環境問題でも何の問題でもいいのですが、自分の国から見るとこうだけれども、この国から見たら全然違うように見えるということが大変感じましたし、交渉していく上で、他の国はどのように考えているのだろうということを事前にリサーチする中で、「だからこの国とこの国がうまくいっていないのか」というような対立構造なども原因が見えたりして、大変国際関係の勉強になったと思います。

それから、向こうで歴史学を取っていたのですけれども、その時に日本では割と暗記中心で、先生が教えてくださったことを覚えていく形の歴史の授業であったのですが、向こうではクエスチョンが与えられて、それについて自分でリサーチして、自分の論述を書きなさい、意見ではなくて自分の証拠に基づいて書きなさい、という形の授業でした。これに私は大変苦勞をして、こういった力、将来やっていく中で、自分でリサーチして信頼できる情報を仕入れて、誰が正しいのかということを見分けていくということは、大切な能力と思ったので、そういったところでもリサーチをする練習ということで、模擬国連は良い活動ではないかと思いました。

そして中高生へのメッセージとしては、結構日本だと受験がネックで、心配で、留学を高校時代、中高では行かないで大学で行こうかと思う人もたくさんいると思うのですが、私の友達も実際にそれで大学に行ってからというように形であきらめた人もいっぱいいましたが、個人的には、最近では、例えば AO 入試、私も早稲田大学には AO 入試で入学しましたが、そのような制度もたくさんできているので、しっかりと準備をしていけば、何も恐れることはないと思っています。

ですから、受験だからできないといって尻込みしてしまうのではなく、AO のような入試であったり、いろいろな形で進学の方法があるというようなことを伝えるといいですか、もう少し視野を広げて、ただ受験、入試を受けなくてはという形ではない勉強の仕方もあるということを伝えていただきたいと思います。

●コーディネーターA

長時間にわたり、パネリストの皆さま本当にありがとうございました。

グローバル化の中で求められるものは何かということで、パネル・ディスカッションを進めてまいりましたが、先生方いかがだったでしょうか。何かヒントになるようなものが、もしあれば非常に幸いです。

●司会（岡見英一・運営委員）

皆さん、どうもお疲れさまでした。

この若さでこれだけの経験をされている。具体的な話を伺えば伺うほど、本当に参考になる刺激的な話が多いと思いますが、パネリストの皆さんは午後の分散会のほうには恐らく出席されませんが、もうあまり時間がなくて恐縮ですけれども、5分、10分ほどの中で質問があれば、質疑応答という形を取りたいと思います。

●参加者

ホサインさんに質問ですが、日本に来られて恐らくいろいろと大変な経験もあったと思うのです。その中で日本人に対して、もっとこのように外国の方に接してほしいとか、もっとこういう形で外国のことを知ってほしいということがあれば、是非教えていただきたいと思いますのですが、いかがでしょうか。

●ホサインさん

とても難しい質問です。まず一つには、私が来た頃、今持っている認識、それほどなかったのです。日本人はとても優しいです。それもあつたし、学生たちとのコミュニケーション。私の場合は大体高原さんと似たような状況でした。それから、どのように接するか。私の場合は結構特別だと思っています。

もう一つは文化です。私はイスラム教だったので、友達と外食に行ったりすることが結構難しかったりしたので、なかなか大変でした。

●参加者

ラマダンの時はどのようにしたのですか。

●ホサインさん

ラマダンの時は先生方は気にしてくれるのですが、普通に授業をやっていました。あと研究も普通にやっていたし、ラマダン明けの祭りとか、その時も授業はあるのですが、普通に出ていました。

●参加者

この会場には全国の学校の先生たちがいるわけですが、皆さまは国外へ留学経験をされて、いわゆるグローバル体験をされたのですけれども、日本の学校そのものがグローバルになる。皆さんのような体験がない、そういうことに関心がない生徒たちもグローバルな教育を受けるために、もし全てのことが可能だとしたら、どのような学校に変わっていったらいいと思いますか。

例えば日本の教員免許がないと教師になれないという条件はなくすとか。外国の人でも担任の先生になれるとか、そのようなアイデアが、もしあれば教えていただきたい。

●大西さん

すごく難しい質問で、あまり分からないのですが、できるとしたらもう少しロールモデルといいますか、こうなったらいいのではないかと人をお身近においてあげてもいいかなと思います。今、現状として英語の先生方が全員、英語が普通に喋れて、外国でコミュニケーションを取って何かをしてきたのかというと、もしかしたらそうではないかもしれない。もしかしたら喋られなくて、喋ることができなくても構わない時代に教員になったとか、いろいろな事情があると思うのですけれども、ある程度喋られたとしても、生徒が憧れるほどには喋られないという意味です。

そういう時に、身近に、目指したいとか、ああこうなったら楽しそうだなという人があまり描けていないというのが正直なところだと思っていて、例えば民間の方で海外で働いていた人を教員に迎えるとか、海外のネイティブ・スピーカーの先生をアシスタントではなく、本当の教員として授業やっていただくとか、あとは同じように英語が母国語じゃない ESL の人々ともっと交流させたりとか、そのような学校との交流を図るとか、そういったことで自分が喋ることができるかどうかということを見せてあげてもいいかなと思います。

民間の人などは特に面白いと思います。あまり喋ることができなかったけれども、社会人になって勉強して、このように海外で働いてきましたというような人がいると、「ああなるほどね」となって、「これがもっと早かったら僕はこうよかったと思いますよ」というような話を聞いてみるとか、そういう人が教員だったらもっと身近になるかと思っています。

あとはホサインさんみたいな留学生を受け入れるということは、もちろんあると思います。

●司会

非常に刺激的な、持ち帰って参考となるようなお話が伺えたと、私自身思っております、パネリストの皆さま、本当にありがとうございました。

分散会（報告）

「グローバル化に対応する私学の教育とは」

- ①「講演、パネル・ディスカッションを受けての意見交換」
- ②「国際理解教育、外国語（英語）教育の実践内容と今後の取組みについて」
- ③「海外への修学旅行、語学研修、留学制度について」
- ④「その他」

進行役

- A：柴 雅 彦（目黒学院中学高等学校 教諭）
 B：廣 木 梢（朋優学院高等学校 教諭）
 C：岡 見 英 一（獨協中学高等学校 教諭）
 D：上 野 亮（青山学院中等部 教諭）
 E：世 古 秀一郎（品川エトワール女子高等学校 教諭）
 F：川 上 裕美子（東京音楽大学付属高等学校 副校長）
 G：須 藤 勉（東京学園高等学校 副校長）



A グループ

グローバル化に対応する私学の教育についてのさまざまな意見や課題があった。

まず、グローバル化に対応する各学校の取り組みとして、いろいろ意見をいただいた。3ヵ月間のニュージーランド研修、ネイティブの先生方の単独の授業、英語圏以外での研修（タイやフィリピン等での研修）、海外留学コースを設けて留学の準備、また、海外の生徒に手紙を送ったり、日本を紹介するビデオをつくって海外の生徒と交流を図るといった学校があった。

その中で、良かった点としては、例えば、研修後に積極的に生徒会に参加する生徒がいて、その生徒が何か学校を変えたいとかいったことを考える。また、文化祭で積極的に発表する。まとめていうと、積極性が出てくる生徒が非常に多いということが挙げられた。

逆に、例えば、ネイティブの先生方の授業は、日本の

教育事情を鑑み、実際に進学校等では入試対応のため、試験の点数等が重視され、ジレンマが生じるといった点である。また、留学に関しては先程英語圏以外での研修とあったが、アメリカ、イコール留学といった固定観念がどのご家庭にもあるようで、なかなか家庭から人気が出ず人が集まらない。そのような課題があった。

最後に、グローバル時代に求められる人材としてさまざまな意見が出たが、まとめると、まずさまざまな人とコミュニケーションがとれる人材、また、自ら学ぶ力、そしてそれを発信する力、つまり積極性をもった人材であるということが1つの意見となった。

そのためにわれわれ教員がやらなくてはいけないことは、まず、国際交流に興味がない生徒も含め何らかのきっかけを与えること。それから、英語イコールグローバルという考えがあるが、英語だけではなく、例えば自国の文化を学んだり、英語科だけでなく他の教科との協力や取り組みが大切という意見もあった。また、もちろん生徒のスキル、これは英語力だけではなく、同時に内面を育てることが必要だという意見もあった。

1つの意見、1つの結果というわけにはいかないが、そのためにわれわれ教員としても教科の研鑽に努め、またいろいろなことを学ばなくてはならないが、生徒のことをしっかりとよく考え、何らかの手助けになれるようにこれからも努力していかなければいけないということであった。

B グループ

前半は、主に講演とパネル・ディスカッションを受けて、先生方が感じたことを率直にお話いただいた。

講演に関して、インターネットというのは、1つのグローバル化の礎、あるいはきっかけになるのではないかとこの共通点が先生方のご意見にあったが、ただ、教育とどのようにつなげていくか、それから必要性という点で、具体的にもっと考えていかなければいけないというところで意見がまとまった。iPadを導入している学校、いろいろなデジタルコンテンツ、デジタルツールを使っている学校もあるが、まだまだ具体的に全体でどうやっていくかという点では課題が多いという話であった。

次に、実際に海外研修をされている学校は多いが、海外でのさまざまなトラブルであったり、どのように生徒

を参加させていくか、現地でコミュニケーションをとらせていくかということで、例えば宗教的な問題、パネル・ディスカッションでのホサインさんからさまざまな文化、あるいは宗教の違いにより生じる問題などもあるという事例があったが、具体的にいうと、「宗教を改宗しませんか」とホストファミリーに迫られるとか（純粋に良いものだからという立場で勧めているのだが）、そこでうまく断れないというようなコミュニケーションの問題が出てくるという事例があった。やはり研修に向けての具体的な文化に関する事前学習や、あるいは教員からの助言（全部に対応してあげるということではないが）が必要ではないかということで、研修を行う上でのそのようなサポートも必要であるという話であった。



後半は主に、実際にどうということが学校で具体的にできるかどうかということが話された。大きく分けて2点があがり、まずは研修のあり方。英語科の教員だけが引率に行くとか、特定の教科でグローバル化ということではなく、実際に教員の人数にも限りがあるので、そういう点では学校全体、あるいは学年行事として学年で行う。教科という枠を超えて、ホームルームであるとか既存のプログラムをもう一回見直してみる、あるいは国内にも目を向けてみるということで、さまざまなプログラムのやり方、とにかく英語科だけでやるということではないという話や教員の意識の共有という話があった。

それから、「内面を育てる」ではないが、実際に研修に行った時、生徒たちがどういことを伝えるのか。伝える内容についても話があった。日本の文化をどのくらい教えられているだろうか、あるいは教養がどのくらい身に付いているのかということで、そういうことを学内でしっかりプログラムとしてやっていくという提案もあった。あくまでも実際に成功してということだけではなく、これからやろうとされていることであるとか、あるいはこういうことが必要だという形で話し合われた。

最後に、グローバル教育というところで、もしかすると教育行政の方でもしっかり定義ができていないのではないかという話も問題提起としてあり、その辺でいろいろな学校ごとにブレが出てきてしまうという問題もあるのではないかということも話し合われた。

Cグループ

まずパネル・ディスカッションの話となり、そこで大きな問題であったのは、「数学科は大敵だ」ということである。「留学を志す」となった時に、いつも理系は「ち

よっと待て」という話になってしまう。そこをどう乗り越えていくのか、彼らに英語を学ばせながら、さらに理系を目指せるというプログラムをどうやって打ち立てるのかということが今の日本に課せられているのではないかという話があった。

大学で留学してもいいのではないか。それは理系の先生の意見として多くあがっていたが、では、何故大学からの留学では遅いのか。それに対して、大学の留学というのは目的があって行くもの、何かを勉強する、心理学とか、大学は特化したものを勉強するところだが、高校はそうではなく、何も決まらずに行くからこそ価値があるのではないか、そのような意見があった。つまり、目的がないからこそ、向こうに行っているいろいろな文化を吸収し、さらに高校生という生活は社会的にも守られていますから、いろいろところで優遇されながらいろいろな体験ができるという意見があった。

留学プログラムだが、ほとんどの学校は留学プログラムを持っている。特にこれは自身の感想だが、海外と姉妹提携を結んでいる学校が意外に多いが（本校はそれを学ばなければいけないと思うが）、業者を通しての留学プログラムも多いと思われる。

そして、他に国内でも、やはり海外に行くのはお金がかかることであり、なかなか全行きたがらないということで、中学校2年生でイングリッシュキャンプ、英語部など部活を通して、英語を使って明治神宮で観光客に説明するというを行っている学校もあった。そのように日本にいながら英語を身につける、英語を使うという取り組みをしている学校もあった。

最後に課題であるが、われわれがグローバル化を目指すところでどういう課題があるのかという話である。日本にいながらどうやってグローバル化を目指すのか。家庭に金銭的な余裕があれば、みんな海外に行けばいいところだが、そういうわけにもいかない。そういう中で、日本にいながらどうやってグローバル化の波に乗せるのかということが各学校の課題でもある。そして、何よりも日本人に大切なのは発進力である。インプットは得意だがアウトプットする力が非常に弱い。これは自身の経験談で、分散会でも話したが、先般、中国に行った時に、意外と英語は通じない。北京で飲み物を買いたくて「Drink、Drink」といっても全然通じないということを経験した。それに比べると日本人というのは、大体誰でも何とかして英語を使って物を売るとか伝えるスキルがある。つまり日本人は、長年培った中で、英語科の先生が頑張ってきた中で、英語の基礎能力は既にあるのではないか、ただ、それを発信させるところが弱いのではないか。次のような発言があった。「発言力＝グローバル化」。つまり、グローバル化というと、何か言葉だけが一人歩きしているようであるが、実は発信する力を身につけることこそがグローバル化なのではないかということである。

そして、今の日本の1つの課題としてあるのが、世界と共同して何かをやっていく。例えば、今まではアメリカ等から学ぶ一方だったものを、そうではなく、アジアと共同して、お互い第二言語、第三言語として英語を使いながら共同して何かをしていく、そのようなプログラ

ムがあることによって、生徒たちの成長につながっていくのではないかという意見である。



終わりに1つ、定義として、グローバルゼーションという、英語となり、それによって、TOEFLやIELTSもそうであるし、TOEICとかGTECなどをさまざまな企業がテストを売り込みに来ている。そこは完全にビジネスが入り込んできて、何か大切なものがどんどん置いていかれて、教育というところが1つのビジネスの偏重になってきているのではないか。つまり、グローバルという名を使ったところで、われわれ教員が見失っている部分があるのではないかということを提起して終わった。

Dグループ

まず、講演に関してはグーグルアースを使っただけの研究は素晴らしいという感想があった。「世界がつながっていることに加え、コミュニケーションも広がっていくこと、今までの知識がコミュニケーションの広がりによって物事の向こう側も見えてきて、また違う角度から新しい知識の獲得ができたり、それが可視化できていることが学生、生徒たちが主体的に活動していく姿につながり、探究心、興味関心、意識化も図れている」「発想力、おもしろさを感じながら活動している」「生徒がどのように活動できているのかというヒントを得た」という感想があった。また、「高校生や大学生たちの活動に対して、渡邊先生が大変褒められて、それが成長につながっているように感じ取った」という感想もあった。

ITを活用しての授業を私たちも扱っていくという点においては、大変というところも感じられていたが、あのように可視化されてくると「実感する」、「リアルに感じさせる」というところでは大変効果があり、ますます生徒の探究心とかを深めていくことにつながっていくのではないかということであった。最終的には、これを通して学校同士のつながりも含め、国際理解にもつながっていくものとして活用していったらいい、していきたいということであった。

パネル・ディスカッションでは、グローバル人材というか、グローバル社会の定義づけに曖昧な面があるという意見があった。しかしながら、パネリストの学生から感じ取ったところは、留学によって自信がつき、これからの人生に対しても明確なビジョンを持っている、すなわち異文化を理解し、ミスを恐れず、修正していく、理解していく、視野を広げていく、発信していく、そし

て論理的に考えていく、すなわち人間的に大きな能力を身につけていくところがみえたということであった。

それに対して私たちが今、現場で生徒たちにどのようなことを伝えていかなければいけないかという点では、留学するための目的意識の向上、何のために行くのか、何のためにするのかというところを伝えていきたい。それから、日本の文化をより一層掘り下げて学ばせたい。そのようなことを伝えていきたい。また、アジアにも目を向けさせたいという意見があった。

パネリストに、留学した際に、日本で何をもっと学んでから留学した方が良かったかということを知ることができたという発言があった。

各学校での取り組みは、国際理解教育や英語教育に関しては、各学校はそれぞれ考えていて、全学校が実践している。ホームステイ、留学生の受け入れ、また英語教育も工夫してやっているということで、これからもさまざまな活動を通して学ばせていきたいということであった。



Eグループ

まず、それまでの講演とパネル・ディスカッションの感想も含めて、自己紹介を行った。さまざまな地域から参加されていたので、その学校では「こういうことをしています」ということを話していただいた。パネル・ディスカッションの感想では、日本では、インプットの形はこれまでもかなりやってきているが、アウトプットが大事ではないかという話もあった。

留学の経験のある先生もおられたが、大学生だった時に感じたことをほとんどそのまま、パネリストの方も話していたということで、少し悪くいうと、20年前と課題が余り変わっていないというの、ある意味問題でないかという意見もあった。

続いて、グローバル教育や外国語教育の各校の実践内容、また今後の取り組みの予定という話もあった。例えば、ある学校では、国際クラスに関して数年前から担任を2人制にし、1人は日本人の教員、もう1人は外国人の教員という形で組ませるという形にすると最初は全然わからないという生徒がいたとしても、学期が終わる頃には、いっていることは大体事務連絡で、余り広い単語を使わないということで、わかってくるようになる。それが卒業の頃には、かなりリスニングができるようになってきているという実践例などもあった。ただ、やはりここで

アウトプットが課題になってきて、どうやったら話せるようになるのかという話が議論の中心になった。

各学校の例で、留学も行っている話もあり、留学の形式、頻度、費用について各学校に伺ったところ、大体オセアニア地域とかアジア圏、フィリピン辺りにも英語圏としては足を伸ばしている学校もかなり多かった。当然ながらアメリカとかイギリスというところがあった。ただ、やはりアメリカ辺りで1年間滞在するとなると、大体300万円前後はかかるということで、余裕がある家庭であれば問題ないが、必ずしもそうとは限らず、助成金などもうまく使いながら、あるいはお金の制約で留学先を近隣にするなど、いろいろな可能性を広げているという実践例もあった。

その話の流れで、ホームステイの仕組み自体、学校では用意されているかという質問があり、意外にも全校が何らかの形で用意しているということである。

さまざまなことをして、アウトプットができて、今の日本の大学の入試システムでの利点がない、入試システムが変わっていかないと、支持が得られないのではと感じた。また、日本人がなかなかアウトプットが得意ではないというのは、もともと性格、文化に裏打ちされる部分もあるのではということが話し合われた。

その辺りを少し解決する幾つかの例としては、通常の授業でもプレゼンを重視する。英語科は当然だが、例えば社会科とか英語以外のところでもそういうことはできるという例を各学校で幾つかあげていただいた。授業だけではなく学園祭等での発表の場で保護者にも見せる。例えば英語劇を学園祭で発表の場にするという取り組み例もあった。

その他ということで、ICTの課題として、タブレット等がなかなかスムーズに導入できない、使い方が難しい、あるいは教員よりも生徒の方がわかっているという状況があり、その上手な活用はないかという話もあった。

基本的にはまとめるというより、いろいろな学校の実践例を紹介するといったものになった。

Fグループ

英語科、社会科、グローバルクラスや国際交流担当の先生方の参加が多かった。SGHに手を挙げて、選ばなかったが、チャンスがあればやりたいという学校もあった。また、校長が非常に熱心で、新しい21世紀型の教育についての情報を得る場をいろいろな研修会や、21世紀の教育を考える会などから得ているという学校もあった。

渡邊先生の講演のアーカイブについては、資料としてこれを使い、学校で授業を展開していくことができれば非常に素晴らしいという意見もあった。特に先生がいわれた「楽しくなければ」というところで、生徒たちのポジティブな学び、また内容的に非常に辛くネガティブであっても、あのようなツールを使って、生徒たちが主体的に学んでいくこと、非常に楽しんでやっている映像を見て印象に残ったという感想もあった。

グローバルに関して、まだそれぞれ考え方が一定していないし、これからも変わってくるのかもしれないが、やはりどのような中でも人と人とのつながりを大切に、違うバックグラウンドを持つ人同士が一緒に何かを

する社会、そして何か困ったことがあったり、難しい課題に対しても、何らかの解決点を見出していく力、そういうものを養っていく必要があるのではないかという意見もあった。

パネル・ディスカッションに関しては、「パネリストは皆、非常に前向きに経験を生かしており、それを自校の生徒で考えてみた時に、やはり留学と短期の語学研修や海外修学旅行、そういう経験をした後の生徒たちは生き生きとしている。このことを大切に、これからも続けたい」「ただ、英語の力だけをつければいいのではなく、英語をツールとして何を伝えるのかということが大事で、伝える内容を小学校6年生から高校3年生まで、学校の中で1冊の本をつくって、それを持っていれば、どこに行っても伝えたいことが伝えられるという教育を行っている」「海外に行くのは本当に限られた人かもしれないし、留学したくてもできない人もいるかもしれない。では、日本の中でどんなことができるのかということで、例えば、いろいろな国の大使館の方に来ていただき、その大使館の方の話を聞いて、それを参考にし、自分たちで次に何を学ぼうか、世界地図の中に今まで知らなかったような国の名前を見つけて、その国について調べてみる、そういったところからスタートするのも良いのではないかと。そういうのが先ほどの渡邊先生のグローバルアースにさらに反映できて、また1つの新しいものができていったら、高校生、中学生が学びの中でグローバルな視野に立てるのではないかと」という感想が述べられた。

Gグループ

アウトプット、インプットの話が他グループと同様に話し合われた。ある意味でインプットは多いが、アウトプットは少なすぎるのではないかと。もっと極端にいうと、基本的に学校の授業はつまらない。それに対して教員が話し過ぎるという話がかかりあった。実際にわれわれは授業形態を考えていかないと駄目なのではないかということが結論となった。

海外修学旅行、海外研修に関しても、費用面の部分でネックがある。それと、海外に行くと、基本的には文化が違うので、どうしてもトラブルを起こしがちだという部分。この辺をわれわれ学校サイド、教員サイドが考えて、基本的な計画を練っていかないと、現地に行ってからどうこうしようとしてもなかなか難しい。また、海外で病気になった時にどうするかという細かい部分も含めて、いろいろな問題点等が話された。



運営委員長総括

東京学園高等学校 副校長 須藤 勉



初日全体集会記念講演での三宅先生の話は、東京私立中学高等学校協会の中でもかなり話題になっております。1点刻みの入試ではなくてという考え方、それから答えのない問題に対してどう教員が解答を出すか、これは非常に重要な問題で

す。最初に答えを与えてしまうのは簡単ですが、生徒の考え方をいかに引き出せるかというのが、やはり今後グローバル教育の中では必要になってくるだろうという考え方です。

本日、首都大学東京の渡邊先生にお願いしたグーグルアースの話ですが、これはただ単にグーグルアースが素晴らしいということだけではありません。参加された先生方に見ていただきたかったことは、あの中で何が必要なのか、中学生、高校生がどれだけのことをやってきたのかということです。あくまでもグーグルアース自体はツールで、そのツールを先生方一人一人がどのように利用して生徒たちに伝え、生徒たちをどのようにして動かしていくのかということです。今後そういう部分で教育が変わってくると思います。

もう一つ、本大会は私学の研修会です。私学はそれぞれ建学の精神で動いています。この建学の精神というのは、不易流行のうちの不易です。教育は流行です。その都度動いているものです。その時に先生方が不易と流行をどのように合わせもって生徒たちに伝えていくのか。建学の精神はそれぞれ学校によって違います。建学の精神すなわちミッションですが、このミッションを先生方はどれだけ生徒たちに伝えていけるか。これは私学にとって非常に重要な部分です。

教育は動いていくものですから、その中で例えば今回のグーグルアースもそうですが、それを見

て、実際にどのように生徒たちに伝えていくのか、参加させていくのかということです。ただ対面教育だけではなくて、今後は横断型の教育をしていかないと、日本の教育は、なかなか先に進めないだろうと思います。

私自身、英語の教員ですが、英語の教員が英語だけ教えていけばいいのか、そういう問題ではありません。分散会報告で数学の先生がネックになるという話が出ていましたが、他の分散会の数学の先生からはこれからは、いろいろな教科の先生方が協力し、率先してグローバル教育を進めていかなければいけないという、全く逆の意見も出ました。またSGH認定校の先生がいらっしゃいましたが、SGH認定校についても問題点がさまざまあり、今後いろいろな問題点が出てくると私自身は考えております。それらの問題は各学校で考えていかなければいけないし、東京私立中学高等学校協会の中でもその意見は文科省に具申していかなければいけないと私は考えております。

この2日間で、先生方が講演を聞き、いろいろ話し合いをされた中で、自校に戻り、どれだけ実践できるかということを考えていただければ、日本の教育もかなり変わってくるのではないかと考えております。

分散会の話し合いの中で「グローバル教育は私は反対だ。何をもってグローバル教育なのか？」という話しを冒頭に出された先生がおられました。しかし、話し合いをしている内に「グローバル教育に関しての自分の意識が変わってきた」というその先生の発言を聞いて、やはり話し合いをしていかないと、なかなか先に進めないのだなと私自身感じております。

私学の先生方には、今後も是非、いろいろな研修会に、積極的にご参加いただければ幸甚に存じます。

今後も先生方のご健勝とますますの学校の発展を願って総括とさせていただきます。

環境教育部会

1 研究目標 「水」生きものの源

現在、世界中で地球の環境をどのように良くしていくのかが、色々と議論されている。このような状況の中で、これからの時代を生き抜いていく生徒達に環境教育は重要であると考えて、本部会を設置した。

生物が生きていくためには、「水」が必要となる。本部会では、生きものの源となる「水」をテーマに取り上げた。

講演講師の坂田明先生は、音楽とミジンコが命で繋がるという持論から命に畏敬の念を持ち、生きることを「ことば」と「音楽」で表現している。今回は、ミジンコの生態系の研究から水と命についてお話していただき、現代の水環境・自然破壊についても言及されると思われる。パネル・ディスカッションでは、「水と生命」について、水との関わり合い・水との共存をお伝えする。事例講演として、「水の安心・安全・おいしさのための水研究」より、おいしい水の披露・水の浄化に関する最新の技術を紹介していただく。特別実践授業では、ペットボトルでミニ地球を創り、地球の生態系を模擬体験し水の重要性を考える。東京都(大島)と北海道の映像を交えた授業を行う。

地球環境・生態系における「水」の役割をご理解いただき、今後どのように人間社会は水と共存していくべきなのか、考えるきっかけになればと思う。

2 会 場 グランドプリンスホテル新高輪国際館パミール 1階 曙光

3 日 程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	30				30		30		
10月17日	受付	開 会 式	講 演	パ ネ ル・ デ ィ ス カ ッ シ ョ ン	昼 食	事 例 講 演 Ⅰ	事 例 講 演 Ⅱ	特 別 実 践 授 業	閉 会 式

4 内 容

部会開会式 運営委員長挨拶 日本学園中学高等学校 校長 小 岩 利 夫

講 演 演 題 「いのちが透けて見えるミジンコから思うこと」
ミ ュ ー ジ シ ャ ン
講 師 東京薬科大学生命科学部 客員教授 坂 田 明
広島大学大学院生物圏科学研究科 客員教授

パネル・ディスカッション
テーマ 「水と命」
ミ ュ ー ジ シ ャ ン
パネリスト 東京薬科大学生命科学部 客員教授 坂 田 明
広島大学大学院生物圏科学研究科 客員教授
パネリスト 東京都水道局サービス推進部広報サービス課 課 長 尾 関 元
パネリスト 工学院大学附属中学高等学校 教 頭 島 田 浩 行 夫
コーディネーター 日本学園中学高等学校 校 長 小 岩 利 夫

事例講演Ⅰ 演 題 「安全・安心・おいしい水」
講 師 サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社水科学研究所 専任上席研究員 芦 刈 俊 彦

事例講演Ⅱ 演 題 「水の再生リサイクル」
講 師 メタウォーター株式会社 技 監 栗 原 秀 人

特別実践授業	テーマ	「学校における環境教育授業の取組みについて～実験を織り交ぜて～」		
	授業担当	聖徳学園中学高等学校 教諭	江草清和	
	授業担当	文京学院大学女子中学高等学校 教諭	入江祥史	
	授業担当	獨協中学高等学校 教諭	塩瀬 治	

部会閉会式	運営委員長総括	日本学園中学高等学校 校長	小岩利夫
--------------	---------	---------------	------

5 運営委員・指導員（順不同）

委員長	小岩利夫	（日本学園中学高等学校 校長）
委員	畑澤正一	（大森学園高等学校 校長）
	村上精一	（東洋女子高等学校 校長）
	島田浩行	（工学院大学附属中学高等学校 教頭）
	塩瀬 治	（獨協中学高等学校 教諭）
	青木智宏	（日本大学豊山中学高等学校 教諭）
	江草清和	（聖徳学園中学高等学校 教諭）
	入江祥史	（文京学院大学女子中学高等学校 教諭）



講演

「いのちが透けて見えるミジンコから思うこと」

ミュージシャン

東京薬科大学生命科学部 客員教授

広島大学大学院生物圏科学研究科 客員教授

坂田 明

講師紹介（塩瀬 治運営委員）

坂田先生は私の尊敬する方で、実に多彩な才能を持たれていて、世界で活躍されています。1945年、広島県呉市出身、広島大学水産学科卒業。その後、現在の東京薬科大学の生命科学部客員教授、広島大学大学院生物圏科学研究科客員教授等々、学問の分野でも非常にご活躍です。また、お亡くなった漫画家の赤塚不二夫先生、最近は『笑っていいとも!』のタモリさんともご親交が深いと聞いています。音楽活動では、ヨーロッパツアー、それから、ドイツ、フランスのさまざまな音楽の大会、これだけを申しあげても1時間前後かかってしまいます。そういう音楽活動の傍ら、ミジンコの研究も非常に造詣が深いということです。CD 曲でいいますと『赤とんぼ』、『ひまわり』、それから『ジャズ西遊記』。ご著書でいうと、『ミジンコの都合』、『クラゲの正体』、その他、水生生物のことについて、たくさんあります。最近では、DVD 作品、『ミジンコ、静かなる宇宙』、『MIJINKO a Silent Microcosm』英語の DVD も製作になっています。今日は音楽活動をされ、なおかつミジンコ、こういった透けて見える命について、貴重なお話をしていただこうと思います。



私の話は、どこに行くか分からない話ですが、最終的には、今この地球上で人間が、水がないと生きていけないというような状況の中で、どう生きていくかというような話になってきます。

最初はミジンコについて話します。ミジンコは命が透

けて見えるのです。北海道の然別湖の湖畔の砂を持ってきた、家で水を張ったらエゾハリナガミジンコが出ました。ミジンコの生態というのはいろいろあるのですが、基本的には雌が雌を産んでずっと大量に発生しているのです。ミジンコ算式で増えるというくらいに増えるのです。産まれて2日後には、もう卵を持っています。だいたい寿命が2、3週間くらいしかありません。その間にだいたい150個くらい卵を産みます。それが2日後にまた150個くらいをまた産んでいくわけですから、とんでもない量で増えるのです。

その増えることは何の役に立つかという、別に役に立つためにやってるわけではなく、子孫が途絶えてしまうので増やしているだけなのですが、春になるといろいろな生き物がどんどん子どもを産みます。この子どもがミジンコだけでなく、もっと小さいワムシとか、いろいろな動物プランクトンを食べるわけです。

ミジンコは何を食べるかという、水があって、土があって、太陽の光があると、そこに植物プランクトンとバクテリアが湧いて出てきます。それを食べているのです。ですから、最初の命を動物のエネルギーに変えているのが、ミジンコなどのプランクトンというものです。

これを顕微鏡で見ると、命が透けて見えるのです。全部が透けて見えます。「お前、今日カレーライス食っただろう」というようなことが分かります。「あ、レバニラ食ったな」ということが全部分かります。人間がそのように透けて見るととても暮らしぶりです。「お前の唇にはばい菌がついてるから、キスするの嫌だ」ということになってしまう。だから人間は見えないようになっている。ミジンコたちは全然そういうことがないので、困りませんから、どんどん命を透けて見えるようにしています。なぜ、透明になっているかというと、魚に食べられたくないから。ミジンコたちは食われていますが、食われたくないので、できる限り体を透明にして、「俺はいないぞ」といつている。「いないぞ」といつているにも関わらず、残念ながら食われてしまうものがたくさんいるので、どんどん増やして、子孫を絶えないようにして、何億年も生きています。10億年くらいは生きています。すごいです、10億年くらいこのような状態で生きています。私たち人類はだいたい、現存人類はアフリカのイブの子孫ですから、20万年くらいしかありません。類人猿から別れたのは700万年くらいです。チンパンジーとかボノボとか、あの連中と分かれたのは700万年前

くらいですから、考えてみたら何億年という前にこのミジンコたちが先行していますので、人間などいなくなっても地球は全然困らないのです。むしろ、いないほうが地球は困らないのではないかと思います。地球の中に人間が出てきてしまったので、これは誰もどうしようもない。困ったものだから、神様を作ったり仏様を作ったりして、人間はなんとかうまくやろうとしているのです。

1、コップの中に宇宙が見えた

嘘だろう？！

まあ 錯覚です。

しかし、そう見えた。

コップの中にミジンコを入れて虫眼鏡で観察すると、背景が無限大になるから、それは宇宙になるのです。

2、わ！ミジンコだ

顕微鏡でのぞいてみたら、ミジンコはミジンコをしていた！

美しい！ 凄い！ 感動！

ここでミジンコを人間に置き換えたら、さてさて??

「わっ、ミジンコだっ」。顕微鏡で初めて生きたミジンコを見た時、私はミジンコだと思った。そのことをそのまま書いてだけです。ミジンコはその時、ミジンコをしていたと思ったのです。ミジンコはミジンコをしているぞと思ったのですが、私はミュージシャンですから、どうして音楽をやっているのかというようなこと考えました。音楽というものは何なのかと考えたら、人間がやっているの、人間以外の動物は音楽をやっていません。例えばナイチンゲールが非常に気持ちよく鳴いていると、あれは歌を歌っているなと思っていますが、別に歌を歌おうと思ってやっているわけではなくて、あれは雌を騙そうと思ってやっているだけです。動機が誠に分かりやすい。われわれは、では女性を騙そうとしてサクスを吹いていないかということ、騙そうとして吹いています。はっきりいっておきます。格好はつけません。

その上でどこまで生きるかということは、別な話です。最初の動機は必ず女性騙そうと思ったのです。それから、女の人の乳房は、男性を惑わそうと思っています。

ミジンコがミジンコをしているんだ。これは、人間に置き換えると、人間は人間をしてた。ある日教室に入ると、教室の生徒たちは全員人間をしてた。困ったことありますか。ある人は手を挙げてください。どこかおかしいんじゃないか、そのように考えるとこれはなかなか非常に大きな命題になっていきます。人間はどうやって人間をするのか。美しいすごい感動があったということなのです。ここにあるのは、いろいろな種類のミジンコがいるということで、どうでもいいような話です。どうでもよくはありませんが。コップの中に宇宙が見えた。これもいい加減なことをいっています。コップの中に宇宙が見えるなんて嘘だろう。嘘です、錯覚です。その通り書いてます。

しかし、そう見える。なぜかということ、コップの中にミジンコを入れて、虫眼鏡で見ると、虫眼鏡で焦点が合っているのはミジンコだけで、あとは全部無限大です。

無限大というのは宇宙です。そういうふうに錯覚するわけです。その錯覚することによって、私たちは宇宙を見ているわけです。今、宇宙を、空を見たら宇宙が見える、全部見えていると思いますか。見えてません。人間の目で見えるわけがない。ハッブル宇宙望遠鏡とかいろいろあって、いろいろなことを見て、ああいう発見をした。何だかんだいってますが、その映像を見ると、だいたい私がミジンコを見る時に、顕微鏡で見ている映像に近い。ミクロとマクロは非常に相似形で近いです。このように宇宙が見える。錯覚がなければ世界は認識できない。

客観というものがあると、皆さんは思いますね。

「お前、物事を客観的に見ろよ、少しはなあ」、というようなことをいっていますけど、「じゃあ、あなたは客観というものをどう考えていますか」ということです。客観というものは実は存在しない。主観はいくらでもあるのです。主観というのは何かというと、色眼鏡です。

「色眼鏡でものを見るな」といいます。いわれました、「お前、色眼鏡で見るんじゃない、ちゃんと、きちんとみろ」とか。そういうものかなと思ったけれども、自分のかけている眼鏡は全部、色眼鏡。皆さんのかけている眼鏡で色眼鏡でないもの、何一つありません。というのは、「私はこう思う」と思っているでしょう。「こう感じる」と。あなたが感じるのと、私が感じることは違うのです。ですから、その違うということをきちっとみんな認め合うということが、とても大事なことです。基本的に主観というのは錯覚です。その錯覚でもって世界を構築するのです。世界はこうであるはずだと。

そこら中を旅したのです。旅して、砂漠のど真ん中とか、モンゴル砂漠の草原のど真ん中とか行きますと、われわれが思っている価値感とは全然崩壊します。

そこでどうするかというと、積み木細工のように、そこに合ったようなものをもう1回作ればよい。自分たちが持っている価値感と、そこにある価値感とを総合したような価値感を、新たに作ればいいわけです。そうするとまた別の所に行くと、それはまたガラガラと崩れるのです。人生というのは毎日それをやらなければいけないのです。慣れれば別に、またそうかとなるのですが、たいていの人間は旅行に行くと、「日本だったらこうなのに、まだこんなことをしてる」とみんな怒るのです。

3、ミジンコの採集

金魚用のネット、プランクトンネット、パンストとクリーニング屋のハンガーで即席ネットを作れば採れる。

4、今日も楽しく生きるミジンコたち（動画）

5、付録：海のプランクトンたち（動画）

※動画は省略

次に採集を見ます。

非常に本格的な物で、プランクトンネットというものを、理科系を出た人は経験したことがあるかもしれませんが。ループはヘッドループといって、上げたり下げたりできる。これを使えば両手が使え、非常に便利です。時計屋などいろいろな作業をする人は、こういうものを使っています。田んぼでミジンコはいくらでも取れる。6月までは農薬がそんなに強くないので、生きています。

6月になったら、生きているのは肉食のカイミジンコという種類くらいで、あとは全滅しています。全員、あとから出てきますが、休眠卵という卵を産むのです。ミジンコにはいろいろなセンサーがあって、環境を自分のセンサーで認識して、自分がここで生活できなくなるなどと思ったら、雌が雄と雌を産むのです。それまで雌は雌しか産んでいない。考えてみれば、女の人もお母さんから生まれてきます。男も女もみんなお母さんから生まれているのです。そのことが分かれば別に不思議はない。だから、女の人が全てを牛耳っている。

一応雌が一番で、今、DNA鑑定をするといいますが、DNAは何のDNAを鑑定しているかというと、われわれの細胞の中にあるミトコンドリアDNAを鑑定しているのです。細胞の中の核にあるDNAの数は非常に少ない。ところが、1個の細胞の中には数百から数千のミトコンドリアがある。このミトコンドリアには、また数百から数千のDNAがある。だから1個の細胞の中に、たくさんのミトコンドリアDNAがある。このミトコンドリアDNAは、精子と卵子の中に両方ある。受精した時に、雌のミトコンドリアDNAが、雄のミトコンドリアDNAを全部殺してしまう。ですから、われわれの中にあるのは、お母さんから伝わってきたDNAしかない。だから鑑定ができるのです。

ミジンコの大きさは大体2、3mmです。1ツ目構造。腹が二つの殻に分かれて、触覚を動かして泳ぎます。甲殻類、エビやカニの仲間です。crustasia といいます。足が腹に五対ついていて、ここを動かして水流を作ります。口ですが、顎脚といいます、ここに餌が入ってきます。腸はズーッといくとウンコがあります。背中に育囊というところがあり、人間でいうと子宮ですが、この中で胚が発生をします。細胞分裂をしているということです。どんどん大きくなってミジンコになっていく。横顔がダースベーダーによく似ています。構造が全部見えるのです。流れる血球も見える。心臓も見える。心臓は結構迫力があります。生きているという感じがします。動脈から出てきた血液が、体中を全部まわって勝手に戻ってくる。ですから血管がありません。血管がないことが欠陥でない生き物です。こうやって自然に血液が循環します。生まれたばかりの卵ですが、黄身があって、白身がある。卵はみんな同じです。腹の足の3番目と4番目にクシがついていて、このクシで餌となるバクテリアや植物プランクトンを濾し取る。ですから、目が非常に細かい。feces、ふんという英語です。うんこと書くと下品なので、feces。殻があり、できる限り魚の口の中に入りにくいようにしている。これ(図略)は雌と雄。お母さんが大きくて、お父さんが小さい、ノミの夫婦。ですからこれは、水のノミといわれている。成長した雄はもうやる気満々ですから、雌と見れば全部飛びかかります。とりあえず。飛びかかって、相手がすでに交尾してたり、卵を持っていたりすると、なぜかすぐに離れます。交尾したミジンコは、卵巣から卵が育囊に排せつされます。女性の方もいらっしやいますが、自分自身ではこういうものを見れません。しかし、こういうことが実際、体の中では起こっています。排卵です。

腸の両脇に卵巣が一对あります。ですから卵は2個出

ます。受精した卵のことを休眠卵といいます。受精した卵は中で発生をしません。発生をしないで、環境が悪化した時に、成体は生きていけず死にますが、植物の種と同じような戦略をとり、生き伸びていくということなのです。

こうして二つの卵になると、殻の部分が卵を入れて、サヤエンドウのようにさやになります。Fertilized eggというのは受精した卵です。まず白くなり、UVカットのために黒くなります。甲殻類だから脱皮をします。手にたくさん毛が生えています。手は黒くなってしまいます。こういうシステムで生きている。脱皮をしても卵のところだけはくっついて、あとでずり落ちます。こういうことが水の中で、毎日たくさん行われています。こうやってミジンコの脱皮が終了します。殻はバクテリアに分解されて、元に戻ります。卵だけが生き残る。

この連中は目が見えていません。目はあるのですが。見えてないということは、像を結ばない。光に対して反応するくらいのことしかできません。

脱皮して大きくなります。生まれたらすぐに脱皮です。どんどん何回も脱皮して大きくなって、また子どもを産むということです。

卵はたくさんありますが、残念ながら死にますと、原生動物が中に入ってきて死体を食べます。こうやって生と死というものが同居します。一方で死んで、食われている。生きたまま食われこともあります。このようにしてミジンコたちは楽しく暮しております。

海でプランクトンネットで引くとミジンコやプランクトンがたくさんとれます。カニのゾエア幼生、ケンミジンコのノープリウス幼生、フジツボのキプリス、ネオプリウス。ネットで取ってますから、非常に濃縮されているいろいろなものがいっぱいとれます。

海のミジンコのほとんどは、ケンミジンコです。世界中の海で1万種類以上のケンミジンコがいます。ですからほとんどの魚は、ケンミジンコを食べています。われわれが、サンマを食べたりしますが、全部、こういうものを彼らは喰っているわけです。ソコミジンコというミジンコは底を這うタイプで、泳ぐ必要がないので頭の触覚が短い。この卵はどう考えても卵にしか見えない。

多毛類、ゴカイなどの幼生もいます。全部、小さい時はプランクトン生活です。

巻貝の幼生は両側に繊毛をつけてグルグル回して、水を漉して餌を食べます。

フジツボのノープリウス幼生はわりとミジンコに似ています。フジツボというのは、ツルアシ類と書きますから、やはり岩についていますが、子どもの時は浮遊生活をしています。これが急に変態してキプリス幼生となるのですが、変態すると、着床してフジツボになるのです。

二枚貝の幼生は貝殻の所から繊毛を出して水を吸い込み、中のバクテリアや植物プランクトンを食べます。

アカテガニというカニは卵を持つと海に戻ってきます。海で卵を放出します。山から下りてくるのですが、海岸沿いに道路があることが多く、車にひかれてしまいます。お母さんの卵は5万個あります。お母さんは必死です。ようやく海に着いて、海岸で波をかぶり、卵を出します。すると5万個全部海に浮きます。出たらすぐに

ゾエア幼生になる。これをボラなどの稚魚が食べる。

カブトガニの卵。カブトガニは10億年くらい前から生きている生き物です。生きた化石といわれています。子どもはみんなかわいいです。ミジンコは見て気持ち悪いという人はいっぱいいます。それはやむを得ないのです。みんながみんな、同じような気持ちになるということ自体がおかしいわけです。このようにしてたくさんプランクトンが海にいます。このプランクトンがいるおかげで私たちが生きているのです。

6、ミジンコとは何か

節足動物門 甲殻綱、エビやカニの仲間

「ミジンコは漢字で書くて微塵子」

木端微塵のミジンコです。これで成体です。

英語：water flea 独語：Wasser Floh 中国語：水蚤

一応、このようなところでは。ミジンコとは何かという部分になると、記載していません。それを話すと皆様が寝てしまいます。ノミの夫婦、雌が大きく雄が小さい。中国語だとあからさまに水のノミと書いてあります。英語でも water flea。ドイツ語は Wasser floh です。ロシア語では Водная блоха といいます。Водная というのは water です。блоха というのは、flea とか floh ということで、ミジンコは水のノミといいます。フランス人は“ホコリ” といっているらしいです。フランス人だけはちょっと、いかななものかと思えます。

でも、止めようがないです。私は楽器を吹いています。私の楽器はフランス製です。リードなどもフランス製です。もうフランスの回し者になってしまっている。フランス語は全然分からない。何だか分からない。そのような中で、日本人だけがミジンコという、木っ端微塵の子というような、情緒のない方をしている。非常に情緒的です。これは、ヨシ子とかハナ子とかと同じです。

7、浮遊生物は PLANKTON (プランクトン)

E. H. ヘッケルの提唱 (1891)

定義：遊泳力がまったくないか、またはあっても流れに対して定位を保てない生物の総称

これに対して 遊泳生物(Nekton) 底生生物(Bentos) 体の大きさに関係なく、直径1m のクラゲもプランクトンである。

8、ミジンコの大きさは？

およそ 0.5mm～5mm 多くは1mm～2mmの間である。

ナガマルミジンコ 0.5mm, 5mm ミジンコ 2.5mm～3mm オオミジンコ 5mm

これは見れば分かります。要するに、遊泳力が全くないのか、遊泳力があっても、自分の力で定位を保てない。定位というのは、流れに逆らってホバリングしているということです。御嶽山に救助の際に、ヘリが止まっていた。あれは非常に厳しいテクニックを要求されるのですが、魚の場合も、こうやって止まっている。メダカが流れに逆らって止まっている。最近では小川がないから見ないですね、残念ですが、そういうものです。

ですから、例えば鰻とか鮭は、稚魚の時にはプランク

トン生活をしていますが、大きくなると自分で泳いでどんどん行ってしまいます。それを nekton といいます。

底を這っているような、貝やゴカイやサンゴやヒトデ、こういうのは底生生物といいます。それでプランクトン、こいつらばかだなどと思っていますが、よく考えると、人間がプランクトンです。人間ほどプランクトン生活をしている生き物はいないです。犬のほうがまだましです。犬はイデオロギーで動きません。地球上で主義主張やイデオロギーで動くのは人類しかいないのです。考えたことがないでしょう。それくらい人間の頭がいい加減なのです。だから錯覚だと私はいつている。みんな錯覚で動いている。

9、命が透けてみえる

体が透明であるため、生きている姿がそのまま見える
映像：エゾハリナガミジンコ上体部分 (※省略)

これは簡単だから見れば分かります。命は透けて見える。身近な所において、ほとんどの人が日頃は思いを寄せない。水たまり、池、川、小川とかをミジンコがいるかなと見ている人は、そうはいません。田んぼにはいつくばってミジンコを見ている人は、私のような変なおじさんです。ところが、見ると見えるのです。はいつくばると肉眼で見えます。田んぼにいっぱいいます。ということは、田んぼに植物プランクトンやバクテリアがいっぱいあるということです。植物プランクトンが出てくるための、窒素やリンがあるということです。そういう構造に思いを寄せるかどうかというのは、本人の問題です。

10、ミジンコに愛は通じない！！

愛という概念は人間が作ったもので、それは人間中心主義(ヒューマニズム)のもとであり、所有、支配、というものと結びつきやすい。

愛は人間の都合で出来たものである

ミジンコはこのような概念や文化と関係なく

「ミジンコの都合で生きている！」

これは生きるシステムの在り方です。

ミジンコに愛は通じない。宗教的なことはいいません。愛という概念は人間が作ったものです。それは人間中心主義、ヒューマニズムといいます。世界では、ヒューマニズムにのっとりとかよくいいます。ヒューマニズムにのっとりしていれば、だいたい大丈夫だというように思っていますが、人間が何をしても、人間以外の動植物はみんな黙っています、何もいいません。「はあつ」と騙されるのは、全部人間です。自然のほうは、魚だろうがミジンコだろうが、森だろうが木だろうが田んぼだろうが、ただ黙っているだけです。愛は人間の都合でできたものなのです。ですから、犬でもネコでも、みんな可愛がってペットにしますが、犬を可愛がった場合どうなるかというと、みんな可愛いといいますが、あれを犬はどう思うかということです。

犬は社会的な動物ですから、社会を形成して、ボスがいて、ボスの下に階級、ヒエラルキーがある。その階級を、いつも取り合いして、自分が上に行こうとしてるも

のですから、飼い主がしっかりしている場合は飼い主の前で犬は必ず喧嘩をします。喧嘩をして、自分が上位に行こうとするのです。そのことで飼い主に認められようとしします。ですから、犬をヨシヨシと可愛がっている人は、だいたい犬のほうが偉いと思っているから、犬に引っ張られて歩いています。犬を飼っているわけではなくて、犬に飼われているということが日本には多いのです。例えばドイツなどに行くと、犬の学校があって、まず犬はペットショップで買ってはいけません。ペットショップというものは存在しない。アメリカもペットショップは存在しません。日本だけです。夜の夜中にショーケースの中へ入れて、魚ではあるまいし、犬や猫、「かわいいね」と買って、訳の分からないでたらめなブリーダーが、本当に帝王切開ばかりして、産ませるだけ産ませて、もうボロボロにして捨ててしまうのです。そういう仔犬をそこで買って置いて、「僕の犬はあそこで買ったんだけど、どうもまずいな」と思っている。社会全体が間違っているから、そういうふうになる。ドイツでは、犬を飼うとなると犬の学校に行かなければ飼えないのです。みんなで行って、犬どうしが仲よくできるように、人間がなれるようにしてやっていく。ですから、放し飼いにして公園で犬は勝手に遊んでいる。なぜできるか。それは、社会全体がそのような基盤があるからできる。日本ではできません。私の家にはジャーマンシェパードがいますが、たいていみんな噛まれると思って逃げます。

ミジンコはミジンコの都合で生きているのです。あなたたちがあなたの都合で生きているように、ミジンコもミジンコの都合で生きているのです。今日、少し都合が悪いのですよという時に、「お前それはないだろう。俺がいうのにお前来るのか」というような、そういう時代がもうなくなりました。私たちはそういう時代に育っているのです、この野郎という感じです。

11、ミジンコは食べられても滅びない！

ミジンコの餌は植物プランクトンとバクテリア
環境がよいときにはメスだけで処女生殖をして無精卵（急発卵）が生まれる。この卵はすぐに発生を初めてミジンコになり親から生まれ出る。
この時期にはこうしてメスがメスを生み大増殖する。これらはクローンである。
特に春の大増殖の時期はあらゆる生物が大増殖するので、ミジンコなどのプランクトンは食べられても食べられても滅びない戦略で子孫を絶やさず何億年も生きてきた。

ミジンコは食べられても滅びないです。つまり、子孫を絶やさず何億年も生き延びてきたということは、適応性なのです。フィットネスという言葉があるのですが、ダーウィンは、よりよく適応したものは、よりよく子孫を残すといったのです。この、ダーウィンがよりよく適応したといったことを、みんなが弱肉強食というように誤解をしました。強いものが弱いものを食べている。つまり、強いものを認めざるを得ないような雰囲気や世の中が作ったのですが、それは間違いです。そうではなく、ライオンやヒョウはほとんど狩りに失敗しています。ヌ

ーとかインパラとかという動物は、たくさん群れを作って、食われていますが、滅びません。ところがヒョウとかライオンは、絶滅の危機に瀕しています。社会というか、自然界の実体は弱肉強食ではないです。そのようなことがあるということを、少しだけ頭に入れておいてください。

12、環境が悪くなると、メスはオスとメスを生み両性生殖があおこる。
クローンで増殖を繰り返すと遺伝子が欠損していく。
両性生殖によって遺伝子が復元される。
受精卵（休眠卵戦略）

環境が悪くなると雌は雄と雌を産み、両性生殖が起こる。これはなぜかという、そうなっているのです。それを研究者がいろいろ調べたらどういうことかという、遺伝子のコピーをするわけです。クローンですから。お母さんが産んだ卵はそのままミジンコになります。クローンがまたクローンをやると、遺伝子は、コピーされるたびに欠損が起こる可能性が高い。それはたまたま梅雨頃になると、環境もミジンコに不都合になるので、その時に都合のよくなるやつもいるのです。その頃にちょうど魚も全部大きくなって、ミジンコも食べられなくなったかなという時に、この休眠卵というものを産む。それは、お母さんが雄を産むからなのです。全てはお母さんの指図によって動いているのです。お母さんが男を産んで、その男をけしかけて、興奮させるようにしています。

13、それぞれの種は種の都合で環境を認識している。
環境世界（Umwelt） ヤーコブ・フォン・ユクスキュルが提唱した生物の環境認識の在り方。
ダニの世界、ハエの世界、犬の世界、人の世界、はそれぞれ違っている。
あらゆる種や個体は色眼鏡なくしては世界を認識できない。つまり人間も然り。

最初にいったように、客観性というのは幻想なのです。そういうことをいった人がいて、Jakob Johann Baron von Uexküll というドイツ人ですが、エストニア出身のドイツ人です。この人が1934年に出した『生物から見た世界』という本を見ると、世界は同じように、誰もが認識で生きてるわけではないという。先程いったように、イデオロギーがなくては世界を認識できないというようなことをいっているのです。今、文庫本がありますから、皆さんこれを読んでください。読むと分かります。ダニの世界というのがまずあって、ダニは目が見えません。眼点で光を感じて、木に登ったり、草に木に取りついて、待ち伏せ作戦です。何が得意かというと、においに敏感なのです。哺乳動物の酪酸に反応する。酪酸に反応して、酪酸の臭いがしたら手を離して落ちる。落ちた時に、温度については分かるので、暖かい所に落ちたら、毛の少ない所を調べて、ブスッと刺して、雌は血を吸って、あとは動物から落ちる。落ちたら何をするか。卵を産む。それで人生が終わり。ダニの世界です。ダニはどこが幸

せなのだと考えているゆとりなど全然ありません。ニワトリのお母さんの話があって、ニワトリのお母さんはひよこがピーピーいっていると、腹の中に抱きます。ところがピーピーいっているひよこの上に透明なふたをして、ニワトリに聞こえないようにすると、ニワトリのお母さんはいくらひよこがピーピーいっても知らんふりをして通り過ぎます。なおかつ、ニワトリを襲うイタチに、ひよこの声を出させるマイクをつけて、ひよこの声をピーピーいわせながらイタチを離すと、イタチを抱こうとするのです。そういうように、ニワトリはそのような世界の認識をするのです。

刷り込みというものがあります。鳥は生まれた時に、最初に見た大きなものを親だと思ってしまうようです。うちの息子が縁日で、色のついたひよこ取ってきて、お父さん、おもしろいよといって廊下を走り回ったら、ずっとひよこはついて歩きます。おもしろいからずっと走っていると、とうとうひよこは倒れて死んでしまいました。当たり前です。飯も食わず、水も飲まずですから。そういう習性があるのです。この **imprinting**、いわゆる刷り込みというものは、ウグイスはホーホケキョと歌うことをどのように学ぶかという、親がホーホケキョと鳴かないと歌えない。山に行くとへたくそなやつがいます。「キ、キ、ホケ、ホケ」というように。あれはまだ練習ができていない。ウグイスをカラスのところに連れて、カアカアといっても見向きもしない。ホーホケキョといった鳥を向くようにウグイスはプログラムされているのです。ですから、お父さんの鳴き声を聞かなかったウグイスはホーホケキョと鳴きません。

有名な絵があるのですが、一つの部屋の中をハエ、犬、人間が見た時にどのように見えるかを、色別けして見えるようにしているのですが、それを見るとなるほどと思います。自分の興味があるものしか見ていない。ですから、何人かで友達の家に行った時に、あなたはあれ見たよ。あなたはあれ見たよ。あなたはあれ見たよ。自分の興味のあるものしか見ていません。したがって、観光旅行に行っても興味のあるものしか見ていない。「いやあ、あそこよかったな」、「えっ、そんなものあった」というようなことになってしまう。だから人間の客観なんてどこにもないのです。興味のあるところしか見ていない。

14、命は互いに闘っているが、結果的には互いに支え合って生きている。

多様性とはせめぎ合いのバランスである。

ある命はほかの命を食べている。

「食物連鎖」

生物は生きるために他の動植物を食べている。

人間は金もうけのために動植物を殺している。

これが文明発生以降の大問題。

「ウレシバモシリ」アイヌ語：互いに育てあう静かな大地

命は結果的に互いに支え合って生きているというように見る人たちが世の中にいます。弱肉強食といっている人たちもいれば、肉食は草食を食べて、草食は草を食べてということ。ミジンコは草食の部類に入ります。

が、肉食のミジンコもいます。そうやって食物連鎖というものがあるのですが、実は、家に柿の木とドングリの木と杏の木、隣の家に柿の木があって、それが、庭を境に葉っぱが出てくる。私の家も出している。葉っぱどうしは垣根は関係ないのです。国境と同じように、全然関係ない。俺は太陽の光がよく当たる所に葉っぱを出すぞと出したら、この野郎とこっちが出てくる。だんだんぐちゃぐちゃになってしまうので、向こうもいい加減な所で止まってしまう。止まってしまうのはいいが、景色が見えなくなるので、われわれは切ります。ですから、互いに支え合って生きてるのといえる側面もあるのですが、多様性のせめぎ合いのバランスというものもあるわけ。森が森であるためには、いろいろな木があることによっておもしろいわけです。例えば一面のひまわりの花というのも美しいですが、秋の紅葉を見に行った時に、いろいろな色があったほうがいいですね。全部真っ赤だったら違いがなくて面白くない。

だいたい私たちが生きているというか、先程ミジンコで見たように、昔は自分で殺して食べたけど、今は誰かが殺してくれたものを食べています。「ある精肉店のはなし」（2013年、日本、監督：瀬戸内たけし）という映画を知っている人はいますか。その映画は、自分で育てた牛を、公営の家畜処理場というところがあって、そこへ連れてってそこで屠殺して、それを自分の所で売っている家族の映画です。飼ってる牛を道路に連れてくるのです。大きな牛を、黒い和牛を連れてくるのですが、他の人に迷惑にならないように上手に連れてきて、金槌でガーンとやると、牛が気絶して倒れる。倒れた瞬間にみんながわっと解体する。それを私たちは神戸牛だ、やれ和牛だ、オーギーだと喰っています。現場にいと、結構しびれます。あのでかいのがバーンと倒れるのだから。僕は中学校まで牛を飼っていました。雄の牛です。1年半飼いました。朝5時に起きて、豆腐屋の豆腐の絞り汁とおからをもらいに行って、火をたいて湯を沸かして、わらを切って、ぬかと一緒に混ぜて、豆腐の絞り汁とかおからとかを全部入れて、大きな牛の餌の飼料桶に入れて、それを食べさせてから学校に行ったのです。学校から帰ってきたら、竹のカゴを背負って草刈りに行って、草を刈る時は鎌で草の中の蛇を逃がす。まむしがいますから。全部逃がして草を刈って、それで帰ってきて牛にやる。そのように牛を育てました。1年半経ちました。「よう、アキラ。牛、売るけんの。売るんじゃ」。売ります。雄の牛だから乳も出ない。それをオート三輪に乗せて売ろうとして、オート三輪でこうやって引っ張って乗せようとしたら、大きい目から涙がポツと出るので。しびれます。中学校2年生の時です。それが生きることでした。「これ、お母ちゃん、売らんといて。これ、飼うちゃってよ」。「あの子なんのために飼うんない。どうするんない」。私はただ餌をやって世話するだけだから。それを売って1万5000円程度でした。昭和32年か33年の話。それが私たちの生活費になったのですが、そうやって生き物を殺して食べるということは、非常に辛いわけです。今、その辛さというのがないから、私たちは非常にスムーズな生活ができるわけです。

「今日の晩飯はニワトリだけど、ニワトリの首を絞め

るからな」と首をちょんとかやります。昔はよく、ニワトリは廃鶏になると、卵産まなくなると、潰して食べましたが、うちの父親は度胸がなくて、潰せなかったから、私は高校になるまでニワトリを食べたことがありませんでした。他の連中は食べていました。こんなうまいものを高校に行って初めて喰ってびっくりして、うちの父親は残念な人だなと思いました。

魚も市場がありましたから、たくさん水揚げされます。私たちも魚釣りをしましたが、結局、生きたものは死ぬわけです。死んだものを食べた。殺して食べる。その、殺して食べるということの心の辛さを何とかするために、われわれはいろいろなことを考えざるを得なかった。神を作るとか、仏を作るとか。では、それはどこにいますのでしょうか。誰も見た者はいない。どうも見たような気がする。それは錯覚だと思います。でも、それをいうと宗教は成り立たないので、それはあるということにしよう。だけど、こちらの神様とこちらの神様、こちらの神様とは違うから、一応違うということにしておけばいいのではないかと。一緒くたにしなくてもいいだろう。世界中に今70億の人間がおりますが、70億の人間がいたら、70億の正義があつていいだろう。その70億の正義をみんなで認め合った上で、一緒に何かするために、何とかしようではないかと考えるのが、今、私たちに求められている知恵だと思うのです。ですから、ある一つの方向に全てを持っていこうとすると、どうしても無理がある。それをずっとやってきたのが、要するにファシズムの世の中です。それが鬼畜米英だったわけです。今もそうなってます。たくさんの共通言語をしゃべっている人たちと、全然わけの分からない言語をしゃべっている人たちの間に、この断崖絶壁があつて、越すに越せない川があるという状態になっています。私はミュージシャンですから、そんなことについて何かできるわけではないのですが、できる限り戦争はしないほうがいいと思います。仲よくしたほうがいいという話です。

それから、私たちは自分が大人だと思っています。「最近の若い者は」とかいいいます。「最近の若い者は」といってなかった世の中というのは存在しないのです。大昔からいっています。最近、言語が乱れてきています。ずっと乱れてきた。だから、今、古文は勉強をしなければ読めない。乱れてきたといってもそれは残っている。生きているわけです。乱れてきたら、これはなし。全部英語にしましょう。それは違うのです。それは意味が全然違う。そのようなことをして、多様性ということを考えながら、そのせめぎ合いのバランスも考える。相手のことを考えて、相手の歴史のことも考えて、私たちのことも考えて、ぶつかるところはぶつけるしかないわけです。私は音楽をやっていますが、他のところの音楽とやると必ずぶつかるのです。へこんだ所がおもしろい。どちらがへこんだか。どちらもへこむのです。例えば邦楽器とやる。邦楽器というのは、音が少し西洋音楽と違って、ドレミファソラシドときれいに出不いのです。きれいに出不いことを利用して、邦楽器ともやっています。能管という横笛があります。能管なんていうものは普通はドレミファソラシドが出ないのです。それをちゃんと吹いている人がいます。一噌幸弘という人ですが、天才

といってもいいです。普通は出ません。そういう楽器とやる時に、こちらの西洋楽器のほうが寄り添うしかない。こっちのほうがどちらかというと器用だから。器用だけれど、あの邦楽の楽器が持っている独特の雰囲気は、われわれにはない。私の中にはありますが音にはならない、その楽器を持っていなければ、自分の楽器ではその音は出せないということがあります。

そのように、あらゆる生物というものも、環境というものも、見ていくという必要があるかなと私は独り言で思っています。独り言ですから、皆さんに強制するつもりはありません。私は別に皆さんの幸せを願っているわけではありません。責任が取れないですから。「おい坂田、ああいっただろう。責任取れ」。「いいえ、ダメ」。だから今、ここで責任を取らないでいます。ただここで能書きを入れるためでありますが、結局、ほかの動植物は生きるためにものを食べている。生きるためにやむを得ず。そういう仕組みになつて。それはシステムです。弱肉強食ではなく、システムです。ところが人間は金儲けのために、動植物を殺している。ここが文明発生以降の大問題で、どうにもならないでみんな困っている。

「ウレシパモシリ」というアイヌ語があります。この意味は、互いに育てあう静かなる大地といひます。アイヌは縄文人の末裔で狩猟採集民族です。この国のです。この国には北方系縄文人と、南方系縄文人がいます。そこに朝鮮半島から人間が入ってきました。大陸から人間が入ってきました。ですから、DNAを調べると、だいたい4分の1ずつ混ざっているそうです。ですから、大和民族というものは存在しません。

アイヌ語の中に互いに育て合う静かなる大地というのがあつて、「ウレシパ」というものと「モシリ」というものに別れます。まず「モシリ」ですが、北海道のことをアイヌでは「アイヌモシリ」と呼びました。アイヌというのは人間という意味です。「ホビ」とか、「アパッチ」とかというものと同じです。文字を持たない人たちのいっている民族の名前はだいたい人間という意味です。「モ」というのは静かなるという意味です。「シリ」は山とか大地とか島のことをいひます。人間の静かなる大地、これが北海道というものに変わったのですが、これは松浦武一郎という人が北海道と命名しました。

「ウレシパ」の「ウ」というのは、これは互いに、「レシパ」、育て合うという意味ですが、互いに育て合う静かなる大地。地球の世界はこういうふうなことであろうということを知っている人がいるということだけは、頭に入れておいていただけるといひです。

15、人間はいったい何をしているのか！

莫大な数のバクテリアや植物プランクトンが地球上の莫大な生命を支えています。

「人間はほかの命を支えているでしょうか？」

経済的発展と人間の長生きは？

16、今日の夕焼けが美しいのはどうしてか？ わかりません！

ミジンコなどのプランクトンは「黙って生きている」

人間は夕焼けを見て感動する。でも悲しかったりする。

ミジンコに哲学は必要ないが、人間は共同体の中で哲

学が必要である。

生命体は「動的平衡」を保持しようとしている。

加齢とともにエントロピーが蓄積して、死ぬ。

今日の夕焼けが美しいのはどうしてか、訳のわからないことを書いていますが、こういうことです。あらゆるミジンコやプランクトンは黙って生きている。その状態の中でわれわれは夕焼けを見て感動するということを、人ごとのようにいつているのです。生きるということはどういうことか、死ぬとはどういうことかということですが、ミジンコには哲学は必要ありません。一生懸命、生きればいい。ところが、人間は一生懸命生きるだけでは困ってしまうのです。登校拒否になったり、教師だって胃が痛くなったり、いろいろなことがあります。そこに哲学というものがないと、糸の切れた風になってどこかに行ってしまう。

ですから、最初に私がいった、「ミジンコはミジンコをしている」というところに、「人間は人間をしているのか」というところに、人間はどういう人間を目指すのかということがあります。それは先輩にいい先輩がいるかどうかということです。あの人のように生きたいなと思うかです。僕は、子どもの時は瀬戸内海の町ですから、宮島に管絃祭という行事があり、その管絃祭に行く船がありました。すごく速い船でした。秋祭りの時に海でその競争があったのです。必ず1艘くらいはひっくり返る。各部落で1艘ずつ船が出ています。そのひっくり返る時に、子どもを舳先に縛り付けておいて、やつほ、やつほとやる。この子どもには小刀を持たせておく。小刀は、ひっくり返った時、「お前これ切って逃げろ」といっておくのです。ものすごいことしています。そういう時代私たちは生きていて、あのよう船を漕げる人になりたいと思いました。あれがかっこいいと思いました。うちの父親はトラックの運転手をしていて、トラックの運転手というのはかっこいいなと思いました。小学校の先生に、「坂田君は大きくなったら何になりたい」と聞かれて、「トラックの運転手さんになります」といったら、「それはちょっと考えたほうがいい」といわれました。いつて意味は分かりますか。だから、先生方もし「学校の先生になりたい」といわれると、「ちょっと考えたほうがいい」といいますか。いつてみれば、そういうことに近いと思うのです。この問題を私たちはどうすべきかということがあると思います。ですから、あらゆる人間はいろいろなジグソーパズルの一コマのようにみんなの役割がある。一人欠けていると空に穴が開いてしまいます。黒い、変な空になってしまう。みんな、次の瞬間、誰かがそれを埋めようとして、ジグソーパズルというのは刻々とどんどん変わるのです。変わりますから、その時に自分の役割というのはいろいろあって、昔、「役立たず」という曲を私は作ったのですが、「役立たず」という曲をやっているうちに、そうか、役立たずという役割があるよなと思ったのです。誰かが、「お前役立たず、ばかだ」といわれる役割があったら、もしその人がばかだとか役立たずといわれなかったら、他の誰かがいわれていた。いじめが起こる。役立たずというのは、それもそういう役割なんだと。みんなで助け合うという力が、

その組織というか、あるパックの、群れの中に働かなかったら、その群れは不健康だと思う。私たちが子どもの時は特別支援学級がなかったから、足の悪い子がいるし、耳の遠い子もいる、いろんな子がいる。みんな助け合って生きている。みんなで生きていかなくては、おもしろくもなんともないし、人間はたくさんの人間がいるということで、みんなが健常者ではない、みんなが頭がいいわけではない、みんなに詰め込めばみんなが偉くなるわけではない。こいつは大工になったほうがいいんじゃないか、左官になったほうがいいんじゃないかということもあると思うのです。私は大学まで行きましたが、結局、楽隊になってしまったのです。親はがっかりしました。国立大学まで行かせたのに、楽隊になる。私の祖父はこういいました。「明、東京行って、演歌氏になるそうだな」。演歌氏というのは分かりますか。そういうふうなことをいわれました。漁業組合の組合長にも、「明、国立大学行ったのに、わしらの漁業組合もようならうと思うちょったら、お前、東京行って楽隊になるんだそうだな、このばかたれ」といわれました。

それをずっと抱えて生きておりますので、いろいろ、タコの、その組合長は、タコの漁師でしたから、全部タコばかりのレコードを作りました。「タコロジー」。どこかで落とし前をつけないと、自分で納得いかないのです。だから一応こんなことでやりました。

とりあえずみんな死にますから。確実に。

どうでもいいことを書いてありますが、昨日と今日はそんなに自分の顔が変わっているように見えない。あれは動的平衡というものなのです。10年たったらダメです。だから、それは加齢とともにエントロピーが蓄積して死に至る。そのように福岡伸一先生はいつています。

17、あらゆる宇宙の存在は常に移り変わる。

地球上の真水が支えられる人口の閾値は90億人。

現在70億人

人間として生まれ、人間として生きて、人間として死ぬ。
では人間とは何か？それはわからない！

社会の中では一人一人がジグソーパズルのワンピース
安心して

死ぬまでバタバタしましょう。

あらゆる宇宙の全ては、常に移り変わる。ジグソーパズルは移り変わるのです。それを諸行無常といったりします。エントロピーの状態がどうであれ、やつと水の話にいけますけれども、地球上の真水が人間の命を支えられる閾値は90億人といわれています。今、70億人いるのです。戦後、1940年代は20億人しかいなかった。1970年代に40億人になりました。今、70億人です。1クラス20人だったのが、今70人いるということです。1クラス20人でやっていたのを、70人の人間を一人の教師がもてといわれて、どうすればいいのかということが今の現状だろうと思うのです。ですが、一人一人の命は終わるので、あなたはあなたとして、人間としてできることをして死のうではないか。どうせ死ぬのだから、人間としてちゃんと死にたいというのは、私が思っている独り言の最後です。どうもありがとうございました。

環境教育部会

パネル・ディスカッション

「水と命」

パネリスト

ミュージシャン/東京薬科大学生命科学部 客員教授/広島大学大学院生物圏科学研究科 客員教授

東京都水道局サービス推進部広報サービス課 課長

工学院大学附属中学高等学校 教頭

コーディネーター

日本学園中学高等学校 校長

坂 田 明
尾 関 元
島 田 浩
小 岩 利 夫



司会（畑澤正一・運営委員）

それでは只今より「水と命」というテーマで3名の先生によるパネル・ディスカッションを行います。コーディネーターは当部会運営委員長の日本学園中学高等学校校長小岩先生です。それでは小岩先生にパネリストの先生のご紹介と進行の方をお願いしたいと思います。

● 小岩運営委員長（以下、コーディネーター）

パネル・ディスカッションということでさらに話を進めていきたいと思います。自己紹介という形で紹介をさせていただきますが、坂田先生は先程講演がありましたので、尾関さんからお願いします。自己紹介の中にそれぞれ今何をやっているか、水とどう関わっているか、その辺のところをお話いただきたいと思います。

● 尾関さん

私は東京都水道局で今、広報サービス課長という職にあり、文字通りお客様に対する広報をやっています。前職といいますが、その前のポジション、都庁の中でいろいろローリング、変わっていくのですが、平成7年に都庁に入り、5年間水道局で予算とか営業とかをやっている、その後、他の業務に移ったのですが、6年前か

ら水道局に戻って、豊島区の営業所長とか、契約担当とか、3・11の震災の時は危機管理の担当をしていました。

危機管理担当として3・11の時に東京水道局は宮城県仙台市の応急給水とかの対応をしたわけですが、あとは福島原発の事故の後、いわき市の応急給水・応急復旧などの後方支援の担当をさせていただきました。今年7月から東京都水道局で広報サービス課長をやっています。



水道局の方は学校教育との関わりというのはどちらかというと初等教育の方で深く関わらせていただいている、私学であれば小中高一貫という学校もあると思うのですが、小学4年生の授業で社会との関わりを学ぶという単位があるかと思うのですが、そこで上水道、森から水が生まれて、例えばみなさんの口に入るまでというあたりのことを、水道キャラバンという授業として、訪問授業をやらせていただいています。主として公立学校に行くことの方が多いのですが、都内で大体1250校くらいの学校の方に行かせて頂いていて、その中で大体95%位の学校が私たちのやっている訪問授業である水道キャラバンを採用していただいています。

そこで水がどうやって出来るのかとか、水と生活との関わりとかといった授業をすすめています。その他にもいろいろなお客様に対する広報というのを全般にやっています。

● コーディネーター

続きまして島田先生お願いいたします。

● 島田先生

私は工学院大学附属中学高等学校で ISO14001の環境管理推進を行っています。ちょうど来週、年に1回のサーベイランス審査を受けなければいけないことになっているのですが、その審査というのは非常に大変で、その中で一番評価をされるのは、やはり学校ですので環境教育です。環境教育を受けた生徒達が社会に出ていろいろなところで活躍しますから、その影響というのは非常に大きいわけです。本校では学校設定科目に環境工学という科目があり、この授業は高校生全員が受けることになっていますが、私がいろいろな環境問題をトータルのに全部教えます。一番最後に教えるのは水の話です。水質とか、水とは何だという話も重要ですが、そうではなく環境問題として考えるから、水不足問題です。

どういう水問題がこれから起きるのか、今起きているのか、そのようなことを最後に教えます。特に一部の研究機関からいわれている2025年問題、あと10数年ですが、本当に地球に水が無くなるというようなことをいわれています。そういうことにならないように、今しっかり教育を通して、世界中の人々、生物、生命に水が無くなって困るということのないように、子ども達にその辺の話をしていきたいと思っていますところなんです。

● コーディネーター

何かわれわれに提言して頂いたようなお言葉ですね。「水と命」が本ディスカッションのテーマです。われわれ私学人はそれぞれの学校の「建学の精神」ということで私立学校を運営して生徒を集めています。そういった中でも生き残りというか、学校そのものを存続させることが非常に難しくなってきました。自然環境の中でわれわれが生きるということも同じことかなと考えております。坂田先生の講演で、「生きるということ、これは自然なんだよ、自然の中で闘っているんだよ」というお話を聞きましたが、今日のお話の最後の部分、非常に気になる部分がありましたので、その辺のところをもう少ししかいつまんで先生、お話いただけますか。

● 坂田先生

先ほど地球上の水が支えられる人口の閾値（いきち）は90億人と申しました。国連のデータを見ていったのですが、既に水に関する戦争というのは始まっているのです。要するに日本は島国ですので、一本の川を他の国と共有しているということはないのですが、他の国では国と国の間を川は流れているわけです。したがって上流で大きなダムを作ったり大きな灌漑（かんがい）をやると、下流の国で水が取れなくなってしまう。取水口のはるか下の方を川が流れていて、今まで作物を作っていた所に水が入ってこないというようなことが既に起こっています。ロシアにアラル海という湖がありますが、アラル海は今水が3分の1くらいに減ってしまっているのです。それは灌漑用水のためにアラル海の水を使ったためです。アメリカではスプリンクラーを使った大規模農業が行われていますが、アメリカの地下には巨大な貯水池があって、その水を使っているのだということが出てきているのです。その水もすごく減ってきています。

地球上の真水のほとんどは8割が氷河の形で保たれている。今氷河がどんどん後退して減っています。ですからこの問題をどう捉えるかというのは地球全体の地殻的なことです。宇宙の大きな歴史の流れの中で、間氷期があったり氷河期があったりする過程の中で動いている部分と、それから人間が行った文明社会において人口が増えてしまったってということ。人口が増えたのは明らかに文明によるものです。この部分をどうするかということです。例えば医学界でいうと人の命を救うということは善だということですから、遺伝子を生かさなければいけないのですが、そういうことをやっていると必ずどこかに軋轢（あつれき）が起きて、あまり話題としてよくないかもしれませんが、レミング（ネズミの一種）の集団自殺のようにみんなで海に飛び込んで死んでしまう。そういうことは人間社会の中では玉砕くらいしかないのです。あとは大虐殺ということになってしまいます。これもやはりその胸の中のストレスが溜まってしまうと、ブラウン運動のように激しく動くわけです。例えばモンゴル草原のようなところで、1平方km当たり1.5人とか2人とかいうような人口密度であればそのようなことは起こらないのですが、今のわれわれは電車に乗っていても、町を歩いていても、隣にいる人ははっきりいって邪魔なわけです。この人がいなければもっとスッと歩けるのに、鞆が当たっていると、人間疎外ということが非常に起きて、われわれの心、気持ちはどんどん荒んでいくのですが、それは明らかに人口の増加ということによって生み出されていることは確かです。

では、どのようにして水を人口増加にあった分だけ供給するのか。水道局の方が一生懸命良い水を作って、東京都の水はおいしいと聞いたことがあります。それも鉄管を通っていくと、なんだか鉄管臭いということがありますが、われわれの体の80%近くはその水でできている。やはり水が無ければいけない。農業するにも牧畜をするにも水がなければいけない。牛を飼うのと鶏を飼うのはどちらが水がたくさんいるのか。圧倒的に牛です。だからそういう問題も含めて、水問題を全部総合的に、または真水が汚染されないような状況、はっきりいうと放射能による汚染によって、この真水は飲めないというようなことになると、ばかな事になってしまうのです。だからこの問題を私たちがどのように考えて、今から社会に出て行く人たちに希望を持って社会に出て行かせてあげられないと困るのです。

「君達とりあえずここをなんとかすれば何とかなるんじゃないか」というようなところを共に教師が考えていかないと、学校が考えていかないと、社会が考えていかないとまずいと思います。社会のシステムは今、非常に早く動きすぎています。メールのやり取りとかは速いです。昔の手紙の時代は、ハガキを書く時、返事はどうしようかと考えたら、1週間くらいかかりました。今はすぐに返事しないと、怒っているのではないかというようなことになってしまう。物事が速く進んでしまうのです。速く進むということはゆっくり考えて逡巡（しゅんじゅん）したりすることはできないので、もう少し遅く暮らすにはどうすればいいかというようなことも含めて、また、日本は少子化で困っているのですが、世界的には人

口は増えていて、日本は余ったものを捨てているのですが、世界では食べるものがない、こういう矛盾をどうすればいいかということをみんなで考えながら、日本の国だけでなく、みんなで何とか持ちこたえて、戦争しないで済むような世の中になって欲しいと思います。



● コーディネーター

水というものは生きる上ですごく必要だという話ですが、ただ放射能汚染というようなこともありました。3・11の時にわれわれが飲む水、この汚染についてどんな処理をしたか、その辺の話を尾関さんどうですか。

● 尾関さん

2011年3月11日に、東日本大震災が起きて、その後、福島第一原子力発電所の事故が起きました。ご存じの通り爆発を起こしたのです。最初にまず放射性物質による水質の汚染が起きたということですが、正確にいきますと、放射性ヨウ素による汚染です。水道水の放射性物質の検査というのは厚生労働省で決められていまして、放射性ヨウ素と放射性セシウムについて検査ということになっています。その二種類の核種を分析したところ、放射性ヨウ素が厚生労働省が食品衛生法に基づいて定めるところの乳児の飲用にに関する暫定の指標値を超えたという、少し難しいいい方ですが、あくまで、乳児、甲状腺が発達する時期の、非常にまだ体の弱い発達途上にある乳児が飲む暫定の、しかも暫定の指標値を超えたということです。だいたい指標値は100Bq/kg（ベクレル／キログラム）という数値ですが、210Bq/kgという数値が出ました。即座に飲用を控えていただくような、乳児の摂取を控えていただくような広報をしたわけですが、その後、ご存じの通り一斉にミネラルウォーターのボトルの買占めという大パニックが起きたわけです。

水道局として見れば、これは乳児に対する飲用摂取基準なので、大人の方が控えていただく必要は全然ないですし、ましてや小学生中学生は飲んでいただいても全然構わない。そんなに早く甲状腺に吸収されるものでもないという感覚なのですが、一般の方の心情としては、それはやはり危険だと。水道局の場合は残念ながら放射性ヨウ素を除去するという術が当時はありませんでした。水が足りない、水を買いたくても買えないというお母様方の声に応じて、ペットボトルの水、水道局とかいろいろな局が被災地に送るために確保していたものなのですが、それを乳児のご家庭に配布するという対応をいたしました。放射性ヨウ素というのは半減期が8日間と非常

に短いので、しばらくすると消えてなくなってしまうわけです。爆発が幸いにも継続的に起きなかったということもあって、翌々日には暫定指標値を下回るということになり、また1週間後にはほぼ全部ゼロに近い値まで下がってきました。ですから、臨時の水を配るということで一応対応はできました。その後は、昨今問題になっております、放射性セシウムについてです。

テレビなどで「怪しいお米セシウムさん」というようなものが流れて問題になったりしたセシウムですが、これは半減期が30年と長いもので、いまだに蓄積しているということが結構多くのお客様の健康不安の基となっているものです。しかし放射性セシウムについては水道水は全く問題ないというようにいい切れる訳なのです。これは理科の先生は解ると思うのですが、放射性セシウムはプラスとマイナス、陰イオンと陽イオンの関係で非常に土壌と電氣的に結合しやすいという性質を持っています。そのため自然界では土壌と結合した形で存在する。要するに砂粒と砂、泥という形で存在しているわけです。これが雨とかによって、大雨もしくは風によるホコリという形で河川に流れてきて、その河川が上流から流れてくことで浄水場の方にたどり着くわけですが、浄水処理というのは川の中のごりを凝集沈殿させてそれをろ過することで取り除くというのが水道水の処理の基本でありますので、泥粒と一緒にくっついているセシウムは、その過程でほぼ完全に除去される。ですから震災の爆発直後であっても、また現在に至るまで、放射性セシウムが検出限界を超えて検出されたことはありません。もちろん精密分析をすれば出てくるのですが、とても人体に影響を与えるものではない。そこもいろいろ議論があるのですが、私達の水道局の公式見解としては、検出限界を超えて検出されてはいないということで、放射性セシウムについて、水道水は全く安全であると考えています。

● コーディネーター

放射性物質について、東京都水道局の水に関しては大丈夫だというお話がわかりました。ただ、われわれ教師は理科で環境等を話す時に、水が少なくなると節水しようという話をします。節水をすると水を少なく使うわけですから、汚れた水の濃度がすごく濃くなる、そういう状況で教えることと、環境と何か、こういう点が出てくるような気がするのです。そのようなところで、島田先生いかがでしょうか。

● 島田先生

実は、学校の方にユニセフからこういう郵便物が届いたのです。先生方の学校にもおそらく届いているのではないかと思います。これを見ると、綺麗な水が無ければ生きることが出来ないという内容が最初に書いてあり、中を見ると、「茶色い水」と書いた写真が載っているのです。こういう水を毎日のように利用している、仕方なく利用している子ども達、世界中にたくさんいるのです。坂田先生の先程の言葉の通り、これから子ども達には希望を持って社会に出てもらいたいです。

私も授業の中で、今までは地球上でこういう問題が起きているということばかり教えてきて、解決するとか、こうしたらいいいのではないかとこのころがまだあまり

指導できていなかった。しかしこれからの時代の環境教育というのは、こういうことが起きているというのを子ども達はもう知ってるわけです。これからどうしたらいいのだろう、どうすべきだろうということを考えさせなければいけないところです。実は、こういった汚い水の問題を解決したという一つの例があります。それは私が授業で教えたのですが、インドのニーミ村というところなんです。雨水農法を用いて、降った雨を溜めて置く。その村は、みんながお金を出し合ってダムを作ったのです。

その水を溜めて農業が栄える、農業が栄えると牛を飼うことができる。牛を飼うことができれば牛乳が飲める。牛乳をみんな子ども達が飲んだり、売ったりして収入を得られるようになる。そうすると村が豊かになる。村が豊かになるとどうなるかという学校ができる。子ども達が学校に通える。子ども達が教育を受けるということはイコール幸せになれるわけです。ですから、こういうことを実際に解決した村の話をする子ども達も希望が持てるというか、このようにやればいいのだというヒントが生まれたりするので、私はこの話を先程の希望ではないですが、そのようなものを持たせながら子ども達に話しています。

● コーディネーター

なかなか教育で希望を持たせるということは難しいのですが、環境教育の中で希望を持たせるということは大切なことではないかと考えています。

生きていくための希望というのは、もう少しわれわれの身近にないでしょうか。坂田先生、その辺はいかがですか。

● 坂田先生

とりあえず希望を持つということは、現実を知ることだと。今の世の中、悲観的な要素が非常に大きいです。社会に出て、正式に社員として雇ってもらえるのだろうか。「正規社員でなければ結婚しないわよ」という女性がいて、「給料は30万位がいい」とかいろいろなことをいうではないですか。現実にはそうなのです。だから結婚しなければ何とかなるけれども、結婚すると生きていけない。逆の幻想というのがあり、家があって、車があるというようなことは、高度経済成長の時代とは全然違うので、今の時代に二人で力を合わせて生きていくにはどうすればいいかというような世論がなければならぬし、学校でもそのような教育をしていた方がいいのではないかと思います。べきとはいいませんが、した方がいいかもしれない。というのはみんなが希望を持たないで、結婚も出来ないという、男性はだんだんとポテンシャルが下がって、女性は放っておくとずっと天井まで登っていくというような事になってしまう。するとバランスが取れなくて、それだと子孫が残らない。まず、この問題を踏まえた上で、なおかつ水の問題は、確かに今島田先生がいわれたような流れがありますが、きれいな水というのは、「水を清くして魚棲まず」ということがあったりするので、例えば湖の水を透明度を高くしてきれいにすると魚が棲めなくなってしまうというようなことがある。そのきれいな水というのは何なのか。毒のある水ときれいな水というのは違います。私は昔ベトナム戦争の時は、きれいな水、透明な水のところは飲

むなと米軍の兵士にいわれました。毒があるから。ですからきれいな水という概念も、いわゆる水道水のきれいという概念と、池とか湖とかいうのは少し違う概念になります。この問題考えていると一筋縄ではいかない。こういうところはこの程度で、もちろんアオコが出るような、窒素やリン酸が増えるようなところは夏になるともう悪臭になり、そこら中に蠅が飛び、非常にまずいですが、湖の浄化もまた窒素やリン酸を含んだ洗剤のようなものが流れて入ってくるという家庭排水の問題があるので、それも人口問題と絡んでいます。希望ということについていうならば、やはりまずは教師であったり私たちもそうですが、大人が「この世に俺は生きてるんだ」ということを見せる。

私は船乗りになろうと思って大学の水産学部に入りましたが、そうすると、今年から船乗りになるコースはなくなります。それはないだろう。それで私は学校の勉強を全然せずに落第し、2年留年してやっと卒業しました。目の前の希望を自分で見つけなければいけなかった訳です。見つける時にたまたま John Coltrane というジャズミュージシャンがいて、広島で1966年に演奏してくれて、その演奏を聴いた時に、ああ、人間というのはこのようにちゃんとまじめに生きなければだめなのだなと思った。それが今、私が生きる大きな希望ということなのです。ですから近いところは先生方が希望の星になってもらいたいということです。

● コーディネーター

先生方、希望の星になっていただきたいということですね。そうですね、幸福感とか幸福感とかというのは昔のイメージを私は持っています。やはり先程お話に出てきましたが、家があり、給料がいくら以上でなければいけないとか、そのような条件が整えばなんとか幸せになれるのかな、希望が持てるのかな、などと思った時代でした。そういう考え方も少し変えていかなければいけないということです。

● 坂田先生

いわゆる昔の幸せの時代なんて、新しい幸せを自分達で造るという、想像する幸せでしょうね。

誰も知らない、私たちは違う時代を生きているからわからない。だから若い人達が自分達で、君達が幸せを作っていきますよと、見ておいてあげるから幸せになってごらんという、見てあげるという姿勢が必要なのではないか。勝手にやれというのではなく、ずっと見ているから、ということをしてあげる姿勢が必要だと思います。違う時代を生きてきたので幸せになる努力をすることを私たちは分からないから、もし必要なことがあったらお金以外は助けられるかもしれないからと、これでいいと思うのです。お金はやはりだめです。

● コーディネーター

確かにそういったことですね。われわれが見過ごしている部分は多々あるという感じはします。そこで先程の話にも出たのですが、水が清ければ旨い、飲めるということではないという話もありました。東京都の水も何か味が違う水があるのでは。私は昔、市川の方に住んでいました。市川の方の水はちょっと甘ったるいような水でした。生まれたのは大塚ですから大塚で飲んだ水はまだ

少し冷たくて美味しかったのかな、美味しかったというのは喉越しが普通だったかなという感じの水でした。その辺で東京の水というのはどういう感じでしょうか。全部同じでしょうか。

● 尾関さん

水が美味しく感じる要件というのは厚生労働省のおいしい水研究会というところが決めているのですが、決めているというか、定義づけています。それによるとミネラル分が、硬度10から100mg/l、水温10度から15度というような定義があるのですが、東京都水道局はほとんどが川の水です。だいたい80%が利根川もしくは荒川の水を使っています。それは23区にお住まいの方も、市部分にお住まいの方も同じです。残りの20%くらいが大体多摩川の水で、地下水が3%くらいしかありません。本当は地下水を飲むということがよいのです。地下水は一年を通して水質が安定していますし、含まれている有機物の量も当然はるかに少ないですし、水温も低いということで、恐らく美味しく感じられるのですが、如何せん東京の膨大な人口を支えるだけの地下水がありませんので、川の水を当然飲みます。今小岩先生がおっしゃった20年前は水道の水はとても飲めたものではないといわれました。

特に区部の荒川、利根川です。利根川の下流である江戸川の水は美味しくないといわれました。対して多摩川の水は美味しいといわれました。東京の先生方は東京の地図が頭の中に入っていると思いますが、利根川、荒川は上流部から流れてくるわけですが、群馬県の方から源を発して流れている。群馬県の人が飲んで出したものを、埼玉県の人が飲んで出したものを、東京の人が飲むということになりますから、当然浄水処理にも限界があって、先程にごりを取り除くと申しましたが、にごりを取り除くのですがどうしても取りきれないものが残る。それに消毒用の塩素を入れますとそれが反応してかびくさい臭いの元であったり、発がん性物質が出たりとかいうことがありました。一方多摩川の水は流域が非常に狭くて、羽村より上に行くくと段々人が少なくなってきた、奥多摩から流れてきたきれいなものが羽村の取水堰で取られ、汚れていない水を取ることができるということで、多摩川の水は美味しいといわれています。最近は状況が変わって参りまして、東京都水道局では高度浄水処理という処理を導入しています。これはオゾンの強力な酸化力でなかなか取りきれない水中に溶けた有機物を分解して、それを更に生物活性炭という、冷蔵庫に入っている臭い取りのような、そういう粒の中に小さな微生物が、それこそミジンコではないですが、住んでいて、オゾンによって分解した後、生物活性炭の層を通すことによって、吸着した有機物をさらに微生物が食べてしまっただけで分解するというような処理をします。川の中で行われている浄化を浄水場の中で行っているようなものですが、そのことによって臭いの原因物質であるとか、塩素と結合するような嫌なものとか、そういったものをほとんど取り除くことができるようになりました。昨年、高度浄水100%達成をいたしましたので、今は23区内の水、それから多摩地区の水もまず臭くなく美味しく飲めるはずです。

● コーディネーター

ペットボトルに入っている水でないと飲むではいけないような感じがするのですが、夏休みにタイの方に行ってきましたが、まず外国で水を飲むというのは非常に怖いんです。ただ現地の人はそれを飲んでるのではないかなと思います。やはりタフに生きていくためには汚いものを飲まなければいけないのかなと考えるのです。そのようなところで、島田先生は学校の中でアルファ水とか、何かそのような利用とかを教えたりしていることはないでしょうか。

● 島田先生

実は本校はほとんど東京都の水を使っていません。

八王子の結構山の方なので、井戸水です。

消毒しています。貯めておいて浄化して利用しています。それからトイレの水も、本校は雨水で流しています。

学校では話題には上げないのですが、最近ニュースなどで見たのですが、普通に学校の蛇口から出る水がかなりもうペットボトルの水と同じくらいの水として出るので、そこの小学校の子ども達は水筒に水を入れて持って来ないといっていました、そういうのがあるのですか。



● 尾関さん

そうですね。元々水道水が美味しくなくなる原因の一つが受水タンク、高架水槽に一旦水を溜めてそれから下ろすというビルの構造がございます。そうするとどうしても屋上に置いたタンクの中に水を置いておきますから、日に照らされて温くもなるし、そこで塩素と有機物が反応して美味しくなくなるということもあります。最近、東京都が進めているのは、学校に東京都が助成をして、受水槽を取り除いて、その代わりに水道管から直接増圧ポンプを付けて給水するという、直結給水方式ということをやっています。それがおそらく公立の小学校などで特に進んでいて、私学でも助成が確かあるはずですが、その結果今はほとんど美味しくなっているはずです。

● コーディネーター

そうすると直結を今は進めているということなのですね。工事費の半分かくらいの援助があるのですか。

● 尾関さん

助成率は定かではないですが、大体建物の所有者と都とで、半々くらいで確か助成をしているはずです。

● コーディネーター

そうですね。やはり受水槽の水は少し私もおかしいと

感じています。

先ほど坂田先生、ミジンコの話聞いていた中で私が質問したかったのは、ミジンコは一匹当たりどの位の水なら生きていられるのかとか、やはり水の要素としてきれいさ、もっというとミジンコが生きるために必要な水というのはわれわれが飲む水なのか、それともミジンコ用の水なのか。その辺を教えてくださいませんか。

● 坂田先生

ミジンコが生きるための水はミジンコ用の水です。

われわれが生きるための水を、要するに水道から出る水を入れたら全部死んでしまいます。塩素、24時間以上曝気（ばっき）をして、120リットルのゴミ用のタンクに一杯水を溜めて、それで曝気をしたものを使っているのが全然問題ありませんが、それは単に水であって、そこの中にはミジンコが生きていくためのバクテリアとかそれから植物プランクトンとかがないので、それをやるためにはうちでやってることは、水がめを使ってるのですが、水がめの中に直接土を入れたり、水がめの中に植木鉢を入れたり、植木鉢の中に田んぼの土を入れてそれをそっと沈めるとかします。そこから池や田んぼと同じ様な状況を作ることによってミジンコは生きていきます。ですからそれぞれに都合のいいような環境の水でないといけない。例えばみなさんが良くご存知のように、サケとかマスというのは、川で産まれて海に一回航海してもう一回上がってくる。上がってくるためには真水と海水との浸透圧の調整を体がしなければ生きていけないのです。ですから降りていく時もずっと河口付近で溜まっていて、それから海に出て行く。それでずっと遠海の方を3、4年くらい周ってきて戻ってくるのですが、川の周りですずっと上に行ったり下に行ったりしながら、そして上がってくる。だからそういうことは生き物の生きるシステムとして彼らが身に付けることによって自分達が生きていて、そして長年子孫を残している。人間の場合は例えばインドネシアに行きました、赤痢になりました。赤痢になって戻ってくるのは日本人だけです。アトピーになりましたとかいっていますが、あれも小さい時から無菌状態だとアトピーになるのです。最初に小さい時から生まれたらすぐ猫とか犬とかに接するとかしたり、それから何かを舐めると、舐めるなどかかっていますが、全部舐めさせておけば、病気になりにくいのです。

インドネシアでは赤痢になる人がいるけど、タイの人はならない、日本人が行くと赤痢になる、これは何なのかというと、水の違いです。水の違いは小さい時からどの水を飲んで育ってきたかという問題があるので、やはり昔からいわれている通り、「水が違う」、「水が合わない」とか言葉がありますが、あのままなのです。「そんなに綺麗な状況で暮らしてどうするんだよ」というような、衛生無害の龍宮基地のような言葉が70年代の終わり頃にありましたが、あのようなことではなく、もう少し汚くていいのではないかと。藤田紘一郎先生ではありませんが、体の中に回虫の2、3匹飼っておけばアトピーも出ないのです。

● コーディネーター

養老孟司さんなどもいっていますね。

やはり日本人は最近きれい好きが、おかしいきれい好

きになっているといってます。

そういったところの問題点というところは今後大きくなりませんか。

● 坂田先生

今後、どんどん大きくなるのではないですか。衛生について、全体に敏感で、ある意味では非常に脆弱な人間が日本で増える。ところが、世界でアフリカとかインドとかあのようなところで生き残っている人間というのは、脆弱でない人間が生き残っている。脆弱な人間はそこで落ちてしまう、落ちるということは死ぬということなのですが、生き残るというのは全部元気な奴が生き残る。日本では元気でないものも大きくなっているの、そのまま最初から病気の奴がずっと病気のまま大人になって、それもなんとか大人にしようとしているものだから、非常に社会全体としていかなるものかというようなことになっているわけです。

だから先生方がご苦労なさっているのは、そういう社会の状況の中で自分達が何かしなければいけないということではないでしょうか。

● コーディネーター

日本人はやはり平均寿命が世界一という状況で、そういった中で脆弱な人間が生き延びてきている。ただそれでいいのかという提言もあるというお話でした。このパネル・ディスカッションもそろそろまとめに入らなければいけないのですが、こういった流れの中で島田先生なり、尾関先生なり、何かここをもう少し話したいということはないでしょうか。

● 尾関さん

ではせっかくですので、今の流れの中でということになりますと、日本の人口は明治初年には大体5千万人くらいだったものが、戦争が終わった時には一億くらいになったのです。その人口の発展は水道の普及率と期を密にしています。特に東京の水道が始まったのは明治30年代ですが、それまでコロリといえますかコレラの大流行がありました。人がバタバタ死ぬということで近代水道を淀橋浄水場を作ることによって始まったのが東京の水道です。それによって劇的に感染症というのが無くなったわけです。それによって人口が増えた。ちなみに水道水の塩素消毒が始まったのは戦後の事で、戦前の水道というのは塩素消毒は無かったのです。それが戦後のGHQによって塩素消毒をして滅菌した水を給水することになったということで更に化学的には安全な水になったということです。社会の発展にはどうしても上水道、清浄な水が必要だったということは、是非生徒さんに伝えていただければと思います。

● コーディネーター

最近少し減ったようですが、コンビニの前辺りにべた座りして、ものを食べたりしゃべったりしています。あれはやっぱりあまりきれいにしない方がいいという逆作用なのか。それを認めてやった方がいいのか、などと思うこともあるのですが。そのへんは島田先生どうですか。教育の立場で、先生方が学校に戻られて、このようなものだったよということがあれば、是非お願いします。

● 島田先生

少し話が反れてしまうかもしれませんが、今回のこの東京大会、21世紀型の教育というテーマですが、今、子ども達はいろいろなところ、海外にも行くと思うのです。海外でいろいろなものを見てくる体験は必要だと思うのです。今回水ということで、本校のオーストラリアに行ってきた子ども達にその辺りのことを聞くと、大体返ってくる答えが、5分以上シャワーを浴びるなどいわれたとか、水をすごく大切にしている国で、しなければいけないというのは実感してきているようです。

● コーディネーター

最後に坂田先生にお願いがあるのですが、やはりわれわれは、教師として希望を持って生徒に、あるいは夢を持って生徒にという気持ちを常に考えなければいけないわけです。先生はミュージシャンとして音楽との出会いがあった、そのきっかけとか、先生がもっとこうなればというようなことがあれば、紹介していただけますか。

● 坂田先生

私はそうやって自分の前で生きてくれる人がたくさんいたので、ミュージシャンだけではなく、研究者の先生とか大勢おられたので、そういう先生方を目指して生きてきました。やはり自分より年上の先輩に憧れる人がいる、影響のある人がいる、あの人のようにやればあのようになれるというようなことがあると、希望は湧くのです。だから今私が思っていることは、90歳までは吹こうと思っているのですが、あと21年あります。90歳というのは長いです。あと21年ギンギラギンになって吹こうと思って、一応毎日なんとか体のコントロールとかに気をつけたりしています。酒は飲みますけど、朝起きたら健康に向かって運動したりするのです。演奏が終わったら不健康に向かって酒飲んでいるのです。この繰り返しの中でエントロピーはどれくらい増大するかというような戦いを私はやっているのですが、それは個々のやり方なのです。大事なことはやはり自分達が生きて見せるということで、生徒や若い人達に何かを伝えようという

ことではなくて、自分が精一杯生きていこうということなのですから、これで大丈夫だというような安心感を見せる。私は実際、先程演奏した音楽は全然違う世界で、本当は戦争のような音楽をやっている、体力勝負の音楽をやっているのです。それを今30代の人間と一緒にやって、負けないようにやっている訳です。そうすると彼らは助けてくれるのです。それは私がやるからです。やらなければ助けてくれない。だから先生がやらないと生徒は付いていかないです。それでいいのではないですか。



● コーディネーター

われわれが生きている中で、とにかく元気に活動したものを生徒に見せて、良い方向に引っ張ろうという考えですが、やはりわれわれの生き様、生徒の中でバカをしたり、生徒と一緒にしゃいだり喜んだりという時間を長く取ることによって、生徒に生きるという様が見えてくる、自信が湧いてくる。そのようなところから水と生命を結ぶという形でこのディスカッションを終局にしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは皆さまこれでディスカッションを終わりにします。最後にパネラーのかたに拍手を送っていただきたいと思います。どうもありがとうございました。



事例講演 I

「安全・安心・おいしい水」

サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社水科学研究所 専任上席研究員

芦 刈 俊 彦



司会（村上精一・運営委員）

最初の事例講演は『安全、安心、おいしい水』と題しまして、芦刈俊彦先生よりお話いただきます。

芦刈先生は、昭和56年にサントリー株式会社に入社され、そこで、基礎研究所の研究員として、バイオテクノロジーを利用する研究開発に従事されました。その後平成14年に先進技術研究所の所長となられ、平成15年にはオーストラリアのベンチャー企業の社長として出向されました。平成21年からはサントリーホールディングス株式会社の水化学研究所所長、そして現在、同研究所の専任上席研究員としてご活躍をされております。

サントリーといえば当然、飲料水、水、いろんなもの開発されておりますが、そのバックにはこのような研究が積み重ねた結果でございます。その辺も含めて、安全、安心、おいしい水についてお話をしていただきます。

本日は『安全、安心、おいしい水』という第でご紹介させていただきます。もっとおもしろい話もできるのですが、いただいたお題で、今日は環境部会というお堅い所なので、まじめに話そうかなといまだに迷っているところです。

本日の内容としては、始めに少し会社の説明をさせていただき、おいしい水、地下水と森林、天然水の森、水育という流れでご紹介させていただきます。

先程ご紹介いただきましたが、簡単にもう一度自己紹介しますと、現代、サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社、水化学研究所の専任上席研究員で

す。1956年に大阪で生まれ、実は大阪が好きだったので、そのままずっといたかったのですが、途中でいろいろあり、今はまた大阪に戻っています。大学院、修士課程を出たのですが、そのままサントリーに入り、研究所でバイオテクノロジーを利用した醸造酵母、最初の頃は、例えばビールを作る酵母を一生懸命やっていたのですが、途中から、青いバラというものをご存じでしょうか、遺伝子組み換えで青い花を作るというプロジェクトに関わっていました。実はその研究は、オーストリアのベンチャー企業と一緒にしてしまっていて、私はそのベンチャー企業の買収に深く関わっていたので、2004年からはそちらの経営ということで、研究員ではなく、経営者として6年間オーストリアのメルボルン、南東の端の良い所ですが、そこで過ごして、2009年に日本に戻って参りました。私は、もともとバイオ関係が専門分野だったのですが、真新しい分野ということでバイオとは全くかけ離れた水というところの研究、というよりはマネジメントですか、ということで水化学研究所に勤務することになりました。

6年間いない間の世の中の動きは大変激しく、サントリー自身もいろいろ変わって、以前は全ての事業をサントリー株式会社というかたちで一社でやっていたのですが、食品の事業とか、酒類の事業とか、そういったものが全部分かれていって、ホールディングスという持ち株会社になりました。今もまだ組織は結構動いています。

2009年に戻ってきたのはそのうちの一つのサントリービジネスエキスパートというところだったのですが、そこは、経理関係とか、いわゆる兵站というのですか、そういった部門の集まりの会社です。

2013年になると、研究開発部門だけ独立させた会社を作るということで、サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社という、大体百数十人規模の研究員で構成している会社を作り、その会社の下に水科学研究所が移り、現在に至っています。

まず、サントリーグループの事業、酒類と飲料、食品、外食事業、スキンケア、花、あるいは緑化事業という幅広い事業に取り組んでいます。一つ一つの商品について宣伝をしたいところですが、時間の都合で割愛させていただきます。

今、サントリーは大企業としてやっているわけですが、創業当時のサントリーというと、今、NHKの朝の連続ドラマ「マッサン」で紹介されている鴨居商店のようなものです。1899年に鳥井信治郎が鳥井商店を起こしてい

ます。その頃は数人の規模で始まって、大正3年に寿屋という名前、今のサントリーの母体になるわけですが、寿屋という会社に育ったわけです。サントリーグループの売上高の推移を見ますと、60年代というのは、まだまだ小さな“商店”だったわけですが、酒類事業、ほとんどがウイスキーですが、ウイスキーの売り上げが増えるにしたがってサントリーの利益も規模も大きくなっていました。また、82、3年になると、実は酒税の改革があって、ウイスキー自身、非常に利益が出るだろうということで、増税があったわけですが、その頃から多角化というか、食品の事業、あるいはその他の外食とか花事業、そういったものに手を広げていきました。おかげさまで今は食品、飲料といったところが屋台骨を背負っているような状況ではあります。最近になると、去年ですと、ビームスというアメリカの会社、洋酒メーカーですが、買収したのですが、サントリーの売上自身が、だいたい2兆円ですけれども、それに匹敵するような買収価格でビームスを買った。今後どうなるかというのはとても気になることです。

サントリーの事業を遡ってみると、1899年の創業当時ではぶどう酒を売っていたわけなのですが、その後にウイスキー、ウイスキーというのは言葉自身は命の水というところから来ているわけですが、に取り組んで、さらにはビールに進出した。これらの事業はいずれも水が大事だと、徹底的な水探しから始めています。さらには新蒸留所建設、天然水の販売といったように、振り返ってみるとサントリーの源は水だろうと思います。また、サントリーの企業風土として、利益三分主義ということがありますが、サントリーグループの企業理念としては、「人と自然と響き合う」ということがあり、さらには、コマーシャルでもよくご覧いただいているかと思いますが、「水と生きる」というコーポレスメッセージを持っています。「水と生きる」ということに関しては、実は三つの意味を持たせているのです。それとは別に「水と生きる」ということの実践ということで、生産研究部門としては水のサステイナビリティの実現、それを目指しています。

サステイナビリティというのは、持続可能性ということになるわけですが、水自身が私どもの原料の一つなわけで、水がなくなってしまうとわれわれのビジネスもできないということから、水のサステイナビリティの実現ということに非常に力を入れているわけです。もちろんそれは、水を大切に使うエコファクトリーということがあるわけですが、さらには、水源を守り、水を育む、水をきれいにして自然に返す、次世代に伝えるということに取り組んでいます。今日は水源を守り水を育む部分と、次世代に伝えるというところを少しお話させていただきます。

おいしい水。ナチュラルミネラルウォーターというものを聞かれたことはありますか。私どもの天然水の水を、ラベルを見ていただくと、その裏側に、品名のところにナチュラルミネラルウォーターと書いてあります。さらに硬度ということが表示してあります。さて、硬度とは何か。ナチュラルミネラルウォーターとは何かということですが、まずミネラルウォーターとは何かというと、

実はミネラルウォーター類は、厚生労働省の法律で規定されていて、水だけを原料として作るものということになります。それは1950年代後半にできた法律です。1980年頃にはペットボトルの水に対する需要が増えてきて、それに合わせて農水省がミネラルウォーター類の品質表示のガイドラインを作った。そのガイドラインによると、ミネラルウォーターというのは4つのカテゴリーに分かれる。下からいきますけれども、一番一般的なというか、普通のミネラルウォーターというのが、ボトルドウォーターというもので、これは中身の水にあまり制限がありません。例えば、水道の水を詰めて売ってもいいわけです。そうしたものをボトルドウォーターといいます。ミネラルウォーターというのは、原水はこれから紹介するようなナチュラルミネラルウォーターのような原水ですが、いろいろな処理をしてミネラルの調整をしている。それをミネラルウォーターという。ナチュラルウォーターというのは、ミネラルの処理はしないけれども、ある種の処理をしてできるもの。ナチュラルミネラルウォーターというのが、ナチュラルウォーターにミネラルがつくわけですから、地中でミネラル分が溶解しているという条件がつくわけです。私どもの天然水は、ナチュラルミネラルウォーターになります。ペットボトルを買われた時に後ろを見ていただくと品名の所にナチュラルミネラルウォーターなのか、ナチュラルウォーターなのか、ボトルドウォーターなのかということが記載してありますので、是非見ていただければと思います。

次に硬度ですが、硬度というと、硬さ、字を見るとそうなのですが、水1ℓ中に含まれているミネラル分の総量を表したものと定義しています。実際にはカルシウムとマグネシウムの両方を表しています。しかも、ややこしい式で書いてますけれども、なぜか、炭酸カルシウムの量に換算して表記してあります。

硬度とは

水1ℓ中に含まれるミネラル分（カルシウムとマグネシウム）の総量を表したもの

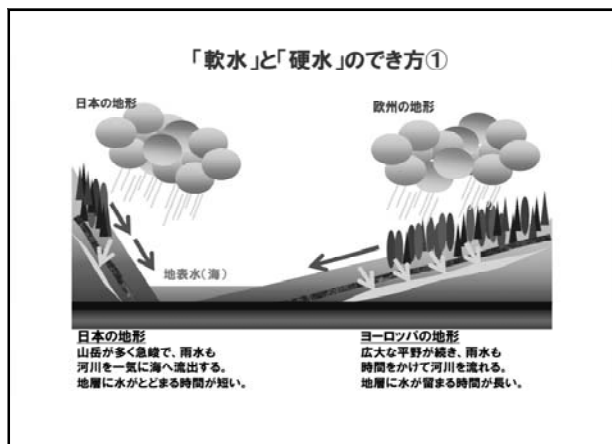
硬度＝（カルシウム量×2.5）＋（マグネシウム量×4.1）

なぜこのように決まったかということを見ていくと、実は硬度自身は、石けんの泡立ち具合を見る尺度になります。もともと水道法の中で硬度というものが定義されていて、水道は、300以下でないといけない。つまり、硬度が300を超えると洗濯での泡立ちが極端に悪くなるということで規定をしているのですが、この水道で決められたことに引っ張られて、ミネラルウォーターにまでこういった硬度という尺度が使われるようになりました。ナチュラルミネラルウォーターで一般的にいわれるのが、軟水と硬水で、その中に中硬水という分け方をしています。これは決まったルールがないのですが、私どもでは100と300で線引きをし、100以下は軟水、300以上を硬水と呼び直しています。

日本の水というのは、ほとんど軟水になります。南アルプスの天然水だと大体30くらいの値になります。石けんの泡立ちは非常に良いです。

軟水と硬水のでき方ですが、硬水というのはミネラル

分が多いということで、二つの、要因が大きく影響しています。下図が地形と地質になります。ミネラル分はどうして溶け込むかというと、地下を水が流れる間に溶け込むわけで、地下を流れている時間が長い程、たくさんのミネラルを含む。そういう意味で、日本は山が急で、川の河川勾配というのですが、その勾配が急なので、接触時間が短い。大陸だと非常に長い。もう一つは地質で、火山性の地質はミネラル分が少ないのですが、河川に積もるような堆積岩、堆積性の水成岩の地質というのは非常にミネラルが多い。そういったことで軟水と硬水のでき方が違い、ヨーロッパでできるものはわりと硬水が多いというのはそういった理由になります。



地下水の中の主要成分としては、9つに着目しています。9つの成分について、それぞれ水質を見る時に、ヘキサダイアグラムというものを書いてます。

いくつか私たちの天然水と、海外の水と、「ほんまや」というものがあります。この「ほんまや」というのは大阪の水道水を詰めた物になります。水道水というのはミネラル分が入っていないような感覚もあるのですが、実際には私たちの天然水と同程度のミネラルは入っています。それに比べて海外の水というのは非常に多くのミネラル成分を含んでいる。特にコントレックスというのは、硬度でいうと1500以上だったと思います。ヨーロッパですと、それを飲むと痩せるということで、非常に売れ行きの良いミネラルウォーターです。日本だと薬事法の関係で、ミネラルウォーターに関しては薬効をうたえないので、効果はあるはずなのですが、ぼやっとした表現でしか表記していません。

おいしい水の話になります。おいしい水については昔からよく研究されていますし、サントリー自身でもおいしい水とは何なのかと考えてはきています。しかし、これがおいしい水だという結論にはなかなか到達しません。おいしさの難しさというのは、個人の感性によるところが非常に大きいので、例えば、ある人がおいしいといえ、これはその人にとっておいしい水なので、絶対的なおいしさというのはなかなか難しい。

それにしても、おいしい水とは何なのかということで、大学の先生が研究されたのが下図ですが、おいしい水指標ということで、先程であればミネラルの成分と、おいしさの相関を取って、図中のような式で表現しています。マグネシウムとか硫酸イオンはマイナスに引くわけで、カルシウムとかカリウム、シリカというのはプラスに引

く。それが2以上になるとおいしい水だということになります。これは統計的にということですが、数字が大きければ大きいほどおいしいかというそれは違うわけで、2以上だとおいしい水にみんなを感じるよという指標です。

もう一つのおいしい水の要件ですが、これは、1970年代から80年代にかけて、水道水が非常においしくない。水道水をおいしくするにはどうすればよいかという意味で、おいしい水と書いていますが、おいしい水道水の要件といった方がいいのかと思います。いろいろなものについて調べていくと、こういう値が出てきて、しかし、これはおいしいというよりも、この範囲を超えると、おいしくない水ということになるのかなと思います。

おいしい水とは		
おいしい水指標		
$Index = \frac{Ca + K + SiO_2}{Mg + SO_4}$ (2以上はおいしい水) 橋本ら(1989年)		
おいしい水の要件 (旧厚生省 おいしい水研究会, 1985)		
水質項目	おいしい水の要件	内容・特徴
水温	20℃以下	真に水が熱くなると、あまりおいしくは感じられない。冷やすことによりおいしく感じる。水道水も10～15℃程度がよい。
臭気物質	30～200mg/l	はらなや鉄、マンガンなどが原因。臭が強いと喉痛や味障が起き、適量に過ぎると、27の臭いがある。
硬度	10～100mg/l	はらなや鉄、マンガンなどが原因。マグネシウムの含有量を測い、硬度の低い水はくどくなく、高いと好き嫌いが出る。カルシウムに比べてマグネシウムの多い水は苦味を帯びる。
硫酸根	3～30mg/l	水にさわやかな味を与えるが、多いと苦味が増える。
過マンガン酸が消費量	3mg/l以下	有機物を示し、多いと汚濁を上げ、多量に含むと健康の消費量に影響して水の味を損なう。
臭気度	3以下	水質の状況により、さまざまな臭いが出つと不快な味がある。
残留塩素	0.4mg/l以下	水にさらす臭いを与え、適度に臭い水の味を悪くする。

心理学の実験で、円が書いてあり、どちらが大きいかということで、実は同じ大きさなのですか、いろいろなものを書き加えることで一方が大きく見えることがあります。おいしい水というのもこういうところがあって、感情が非常に支配すると思います。行動科学という心理学の分野ですが、研究があって、そこで研究された話になります。ビールにバルサミコ酢を入れると非常においしいということを発見して、それを使って実験しています。バルサミコ酢を入れたビールと他のビールを比べ、何もいわずに「どちらがおいしいですか」と聞くと、多くの人がバルサミコ酢入りのビールがおいしいという。しかし、「バルサミコ酢を入れたのだけれども」というと、「酸っぱい、まずい」ということが起こる。心理学ではいろいろなことが感情に支配されて、おいしさというのは決まってくるという、一つの例だと思います。

少し唐突になりますが、企業が商品を開発する時は、実は原価粗利益を足したものが売価になるわけですが、この利益をいかに最大化するかということを考えるわけで、それは付加価値なわけですが、この付加価値というのが機能価値と感性価値に分かれます。機能価値というのは、例えば、何かに効くとか、すっきりするとかそういった機能になりますし、感性価値というのは、ブランドです。このメーカーの物だから、信頼できるとか、そういったことになるわけで、そうすると、おいしさにつなげてくると、安心、安全といったようなことも一つの情緒的、感性的価値になってくるわけで、そういう意味では、われわれメーカーというのはいろいろなところで、安心、安全に向けての Risk Hedge をしているわけになります。

地下水と森林。天然水の製造工場とといいますと、関東だと山梨県の白州町にあります。関西だと鳥取県の大山の麓にあります。普通、工場というと、流通が命なわけですから消費地に近い所に作るのですが、こういったものというのは自然環境に近い、おいしい水があって作ることができる場所ということで、こういう立地にこだわっているわけです。

地下水というのは、どういう所にあるかというと、普通の人と話をしていると、地下に水がたまった地中湖みたいな所があって、そこからくみ上げているのではないかとこのことをいう方もいますが、私も水に携わる前は、そのようなイメージをしていたのですが、実はそうではなく、地下というのは、いろいろな地層が積み重なった構造になっています。その構造の中で砂のような荒いものが詰まった所、それは帯水層と呼ぶのですが、その隙間に水が集まっている。つまり、砂場の砂の中に水が流れてるというような、そういった所からくみ上げることになります。降った雨が染みこんで地下水となるわけですが、降った雨が全て地下水になるということではなく、降った雨は、染みこまずに地表を流れたり、あるいは途中で蒸発してしまったり、あるいは、染みこんでも植物に利用されてしまったりということがあるわけです。

われわれはいかに水を地下に、降った雨を地下水にしていこうかということを研究していて、結局、染みこむ所が一番大事、森林の土壌が大事だということで、団粒構造、ふかふかの土壌になるような森林を目指して活動しています。森林の状況を見てみますと、実際に、土砂崩壊、単一植物相（シカ害）、表土流出、間伐（間引き）不足などが起こっていて、われわれは森林保護ということで、天然水の森のプロジェクトを進めているわけです。

最初にも申しましたが、サントリーのオリジンは水です。水自身が非常に大事ということから、われわれは全工場できみ上げる地下水の量を育むだけの森を守っていこうということで、森を保護しようと進め、2011年度中に7000ヘクタール(ha)の目標を達成しています。7000haというとなかなかピンとこないですが、山手線の内側くらいの面積になります。現在は7600haまで天然水の森を広げて、2020年の目標として、新たに天然水の森12,000haを確保しようということで進めております。その天然水の森は保護するだけでなく、実際には水源関与のためにどのようなことをすればいいかというような研究を、いろいろな先生方と進めています。さらには、その

整備というかたちで、針葉樹と広葉樹の混合林にしたりとか、鹿対策、竹林対策を進めているわけです。

社員が体験するということも大事なことで、社員の森林保全活動ということで、2003年度から実施していて、これまで1,200人が参加していますが、去年からは全社員が参加すべきという社長の号令のもとに、全社員が関わりを持っています。

最後は水育になります。地下水を守っていくというのは、今の世代だけで進めていてもだめで、われわれは、世代の環境教育ということが大事だということで、水育という言葉を作り、進めています。

水育の活動というのは二つです。森と水の学校と出張授業になります。森と水の学校というのはサントリーのフィールドに来ていただいて、自然の体験をしていただく。出張授業というのは、私たちのスタッフが小学校に出向いて、先生と連携して授業を行う。水育、森と水の学校ということで、2004年から始め、400回、約15,000人の方々に参加していただいています。出張授業につきましては、2006年からですが、780校、約6万人の方々に参加していただいています。

最後になりますが、これはわれわれの決意でもあるのですが、「サントリーは『水と生きる』企業として、水のサステナビリティの実現と地球環境との調和に努め、継続可能な社会作りに努力し続けます」ということで、サポートのほう、サポートというのは弊社商品を買っていただければ、ということですが、よろしく願います。

質問

サントリーがこれだけ水を研究されて、とにかくおいしい水というというのは基本だと思うのですが、日本中、おそらく、おいしい水を求めてさまよっていると思うのですが、正直、量やか埋蔵量に関係なく、おいしい水というところですか。

芦刈さん

個人の好みによると思うのですが、私自身は北海道の水がおいしいと思います。

北海道の帯広の少し南側のあたりですが、これはおいしさというよりも、先程もありましたが、私の場合は刷り込みもあって、水源の調査をしていくと、水源としてきれいな所というのが、結局は、今だと北海道くらいしか残ってなくて、その中だと帯広、十勝のあたりです。

事例講演Ⅱ

「水の再生リサイクル」

メタウォーター株式会社 技監 **栗原 秀人**



司会（村上精一・運営委員）

栗原先生は昭和50年4月に建設省、現在の国土交通省に入所されました。下水道事業課長など数々の業職を務められてきたということでございます。退官後は水・環境エンジニアリング会社、メタウォーター株式会社の技監としてお仕事をされております。長年、河川整備などに携わった経験を生かされ、水環境と町の関わりなどに関する講演、あるいは執筆活動などもされています。

「私たちが流した水はどこに行くのか」—おそらく今まで聞いたことがないようなタイトルだと思います。というのも、水循環ということが盛んにいわれるようになり、今日の午前中のプログラムでも水の大切さという議論を大いにしていただきました。しかし、実は、使った水がどこに行くかという話は残念ながらあまり聞いたことがないのです。私たちは水からたくさん恵みをもらっているのですが、その結果として水を使い、水を汚し、それを誰かが始末してもう一度循環させている。その大きな循環の中に下水道がきっちりハマっているということをぜひご理解いただきたい、そのような思いでこのようなタイトルをつけました。

本日は若い方が多く参加されていますが、下水道がない町で暮したことがある方はいらっしゃいますか？要はトイレがくみ取り式で台所や風呂の廃水を庭先の溝に流しているようなところですか。2割くらいでしょうか。いろいろな所でお話をさせていただく機会がありますが、実は今手を挙げられた方の割合はむしろ高いほうで、ほとんどの方が下水道のない所で暮らしたことがない、

もつという下水道を意識して水を使ったことがない、そのような時代です。その中で、先程申しあげましたように、流した水を意識しないでいる人が多くなってきた、そんな反省もあり、話をさせていただきます。

まず、私の会社を紹介させてください。メタウォーターは、電気技術を持つ富士電機の水環境部門と機械技術を持つ日本ガイシの水環境部門が一緒になり、機械、電気をばらばらにではなく、それらを融合させて、製品に責任を持ち、つくるだけではなくて管理、運営まで行う、そして私たちの暮らしや産業になくてはならない水・環境インフラを支えていける会社を目指しているところです。

そのようなことで全国の上水道、下水道施設の設計・建設、運転・維持管理というところをお手伝いさせていただいています。上水道、下水道施設に関連するいろいろな製品、システムを提供していますが、今日はその詳細な話はしません。話の中に出てくる道具、ツールはメタウォーターがやっているというくらいにご理解いただければと思います。

水道の水はどこからくるのか？中学生、高校生にどこからくるかを聞いても、はっきり答えてくれます。「山からくる」。逆にたどってもいいです。小学生に水道の水はどこからくる？「蛇口」。蛇口の先は？「川」。川の先は？「山」。きっちり答えてくれるのです。ですから、非常に環境教育として話が分かる。ここまでは、みなさん非常によく分かってくれているのです。そして各家庭、学校、ビル、工場で水を使っていますので、あらためて、水はどこで使う？と聞いても「家ではこんなところで使う」と答えてくれます。いや、家だけではない、学校でも、会社でも、商店でも、飲食店でも、このビルでも、という話をすると、そこは非常によく分かってくれます。しかし、使った水はどうなるのと聞いたとたんに、子どもは少し躊躇するのです。答えは、大部分は汚れを含んで汚水となって下水まで流されているということなのですが、ある環境教育をやっている大学の先生がそのことを子どもに聞いたら「使った水は消える」と答えたそうです。

流しからどこかへ消えていってしまう、トイレの水も消えていってしまう、汚水は消えるというように答えた聞いて非常にショックを受けました。使う上の水のところはよく理解されているけれども、下の水のところはよく理解されてないのです。では、家の中でどのように水を使うのでしょうか。大体1人1日210リットル(ℓ)。

それを大雑把にいいますとトイレが4分の1、お風呂が4分の1、炊事が4分の1、洗濯が4分の1。あと顔を洗ったりその他が少しあります。大体このようなところです。このように考えた時に、使う水というのはほとんど汚れを混じえて汚水になるということがご理解いただけだと思います。1人1日210ℓのうち、口から直接飲んだり、料理の中に入って飲む水というのは、せいぜい3ℓから5ℓなのです。ですから、備蓄のために1人1日3ℓ備蓄しましょうというのは生きていくために不可欠な分だけなのです。ところが、体を洗ったり、汚れた服を洗ったりということまで含めると、使う水のほとんどは汚水になるのです。

町や暮らしは水を使って成り立っています。あえていいますと、家や町はいろいろな汚水を流すことで成り立っているのです。先程の実態をご理解いただければ、この言葉も決して下水道中心にやってきた私がきばっているのではないということがご理解いただけだと思います。家の中で、さまざまな所で汚水が出ます。汚水が出るのは家だけだと思いがちなのですが、実は違うのです。私が会社へ行きます。会社でトイレに行ったり、お昼ご飯を食べます。必ず付随する汚水が出ます。お酒が好きですから夜に飲み屋に寄ります。いろいろな料理を作ったり、下ごしらえをしたり、残飯を洗い流したりして、必ず汚水が出ます。家に帰ると、家で汚水が出ます。子どもが学校に行きます。学校でトイレに行きます。給食を食べます。給食センターでこの給食を出すためにさまざまな汚水を出します。母親が専業主婦だと、家だけでしか汚水を出していないのでしょうか。スーパーに買い物に行きます。この食材を提供する食品加工場でさまざまな汚水が出ます。スーパーのバックヤードでいろいろな調理をしていて、スーパーそのものが汚水を出しています。こう考えたら、町の中にある建物という建物、私たちが行く先々の建物がすべて汚水を流すことで成り立っているといっても決していいすぎではありません。会場であるプリンスホテルさえそうです。町の中からさまざまな汚水を出すことによって、この社会は成り立っているということだと思います。もし汚水が始末されずに垂れ流しにされたら…。

今は下水道の普及率がかなり高くなっているのですが、少し昔に戻ってみたいと思います。先程手を挙げた方の中で、昭和40年代の東京に住んだ方はいますか？

東京の昭和40年代は、東京オリンピックのあとです。水道は8割普及していましたが、下水道は2割しか普及していなかったのです。結果、井戸水を使う人の分も含めて8割の汚水が垂れ流しにされていました。それが前回の東京オリンピックの時の東京なのです。NHKのアーカイブスとかいろいろなところでご覧になると思います。汚水が垂れ流しにされている町です。今、外国のそのような写真を見ると、「外国では」というようにみなさんは思われがちですが、つい40年、50年前の東京がそうだったのです。このために、いろいろな不衛生問題も起こっていました。これが日本の実態でした。

道路という道路の下に下水管を入れ、建物という建物から出ている汚水を全部下水管で集めています。もう一つ、町に降った雨も下水管で集めています。要は、下水

には汚水と雨水があり、下水管でさまざまな汚水を集め、雨水も排水している。雨水、浸水対策というと、川の仕事だろうといわれるのですが、町に降った雨をあふれさせることなく川まで、海まで出すのが下水道。川に出された雨をこぼすことなく海までもっていくのが川の事業。ですから下水道と川が一緒になって都市の浸水対策が完成できるということになります。こういう下水道は町と暮らしを支える大切な施設ということが理解いただけだと思います。下水道がなかった時代を知らない方にはなかなか理解いただけません。下水処理場の呼び方はいろいろあり、東京では水再生センターとっていますが、工場などいろいろな所から汚水や雨水を下水管で集めてきて、水再生センターで処理をして川や海に持っていく、きれいにしています。多摩川は、わずか40年で、鮎1,200万匹がのぼる川になりました。これは間違いなく下水道の大きな力によるものなのです。

下水道だけとはいいいません。工場も同じように垂れ流しをしていたものが工場排水の規制が強まりました。少なくとも一般家庭の排水については、下水道によりきちんと処理をしてきたという結果だと思います。川がきれいになった結果、鮎とともに川ガキが戻ってきました。今、多摩川や荒川に行くと、楽しい校と書いて、水辺の楽校というののものが、多摩川だけを見ても左右岸で20ヶ所くらいあります。昔は子どもたちだけで遊んでいたのですが、今は指導者がいてライフジャケットをつけて魚の種類とかどのような所にいるのかを教えてください。私たちの子どもの頃は、これはガキ大将が教えてくれたものです。先程の坂田さんの話ではないですが、大きくなったらああいうガキ大将になりたいと思って、そのガキ大将の知恵を一生懸命に盗みました。どうもガキ大将は、先程の先生の姿ではなかったのかなと思います。子どもに普段の行動を見せることによって、今風にかっこ良くいえば、水、川というものが持っているものの恵みの多様さを教えているのです。波がおだやかで一見浅く見える所というのは、実は深いからそういう所は渡っちゃいけない、逆にワサワサッとせせらいでいる所は水深が浅いというようなことをガキ大将から教わり、また、魚というのは眠る時には淵のほうに行くとか、卵は礫のある所で生むということを自然に私たちは教わったのですが、今はしっかりした大人の先生のもとで安全を確かめながら教わります。

昭和40年代の隅田川は川の汚れがひどくて、花火大会、早慶レガッタとも昭和36年に廃止されました。水質規制や下水道の整備で水質がだんだん良くなり、昭和53年に共に復活しました。今はスカイツリー人気も相まって、水上バスなどいろいろな賑わいの場所になっています。下水道の整備に伴って水がどんどん良くなってきたということです。前回の東京オリンピックの時、下水道普及率は約2割でした。要は8割の人が雑排水を垂れ流し、くみ取りトイレの生活をし、BOD (biochemical oxygen demand) は40ppm でした。環境教育をしている先生はBOD40ppm というのがどういう水質かは分かります。今から50年前、BOD40ppm の川でおもてなしをしていたのです。2020年はどういうおもてなしをするのでしょうか。BOD40ppm なんていうのは近寄りたくない、

嫌だという川です。

昭和30年代の神田川。わずか50年前の神田川。人間というのはなぜか川が汚いとゴミをぼんぼん捨てるのです。秋葉原、万世橋のところに私の会社がありますが、マーチエキュートができ、水辺ウォーターフロントということで水上バスやクルーズなどが通って、結構きれいになってきています。

要するに、こういう水辺をどう造るか。ここにどういうきれいな水、水質があるのか。もう一つ、ここにどういう量の川の水があるのか。水量、水質、水辺の3つが相まって私は、ウォーターフロントの良さがあると思っています。水質については、昭和60年でもBODが20ppmあったのです。非常に汚い川でした。私が東京に出てきたのは昭和44年でしたが、神田川はもっと汚いという印象がありました。汚れた下水をきれいにする—これも出前授業などいろいろな所でやらせていただいているのですが、こういう少しいやらしい質問をします。水をきれいにするものは何か？薬品、微生物、電気、土？さすがに多くの子どもたちが「微生物」と答えてくれるようになっていきます。中には「薬品」とか「電気」、実はこれは補足的に使っているのも全部正解なのです。主役は？と聞いているから「微生物」ということになると思っています。

下水を流れてくる大きな汚れをゆっくり流して沈めて、それ以後は溶けた汚れだけですからいくら時間をおいてもきれいになりません。それを微生物に食べさせて太ったり増えた微生物を、最後の池で沈ませて取る。

これが下水処理の基本です。汚れというのは、先程の坂田先生の話にもあった、私たちにとっては不都合かもしれないかもしれませんが、微生物からとってみればエサなのです。このエサを食べるように適正に空気をぶくぶく吹き込んでやると、生下水がきれいになります。このしくみというのは、午前中もありましたが、細菌がいて、それを食べる原生動物がいて、それを食べる後生動物が食物連鎖をつくりながら、入ってくる汚れ、すなわち彼らにとってはエサをきちっと食べて水をきれいにしてくれるということなのです。要は、これは川がきれいになる原理と同じなのです。きれいな川に行ってみて、石をひっくり返してみるとゼラチン状のヌルヌルしたものがあつたり、もごもご動いている虫がいたり、あれが微生物群なのです。あれをプールの中に人工的に飼って、元気に働いてもらうためにぶくぶく空気を入れ込んでいる、それが下水処理のしくみです。

面白い話があり、これも坂田さんの話に関係するのですが、人間に個性がたくさんあるように微生物にも実は個性があります。外遊びがいい子もいれば中遊びがいい子もいるし、晴れた日だけしか遊ばないという子がいれば、雨が降った日が好き、なぜならば夕焼けがきれいだ、というような子もいます。実は、下水処理場でいろいろなものを処理するのに、微生物の個性を生かしてきれいにするのです。

東京湾がきれいになってきたといいますが、まだまだ赤潮、アオコが発生してあちこちで被害が出たということがニュースになります。それは、私たちが出している生活排水の中に入っている窒素やリンが原因なのです。

それを下水道で取る工夫、工夫というよりいろいろなところでそれを実際にやっています。その場合に二人の微生物、空気がある時に頑張れる好気性微生物、これを取りあえず「好気君」と呼びます。もう一つが、酸素がなくても頑張れる嫌気性微生物、「嫌気君」です。この嫌気君、好気君の二人の個性の違いを使い、第一幕では、下水中の窒素の正体はほとんどがアンモニアで、そのアンモニアとして入ってくる汚れを好気君が空気を使って食べていき、硝酸という形までもっていきます。好気君は、このアンモニアを硝酸にすることにより生き延びていくのです。第二幕では、硝酸までになった窒素を引き取り、空気を止めた状態でも頑張れる嫌気君が硝酸を窒素ガスに変え、窒素を空气中に飛ばしてしまいます。ですから、アンモニアの形で下水の中に入ってきた窒素を、好気君が頑張って嫌気君にバトンタッチして大気中に逃すのです。ご承知のように、大気中の窒素は8割くらいですから、大気も含めた窒素循環があって水の中の窒素が取り除けます。リンも同じようにいろいろな個性を使ってやっています。そのようなところを勉強するだけでも、私は中学生、高校生の理科、化学でも耐えうる話になるのではないかと思います。

私たちの身の回り、家の中、町の中にあってはいけない汚れを取り除くために、水という比重1＝溶け込ませる力が大きく、押し流す力が大きい物質を利用します。不都合な汚れをお風呂、洗濯、炊事という形で水に溶け込ませて外に出す、これが下水道の基本的な役割です。それによって垂れ流しを防ぎ、ハエ、蚊の発生、ベストの発生を防ぐのですが、逆に考えると、家々に散らばっている資源エネルギーを効率よく集めている装置といえると思うのです。その装置に再生装置、いろいろなものを取り付ければ下水処理場が資源エネルギーの再生工場になります。家をはじめ、いろいろなものから、水そのものが集まってきます。もっときれいにすれば資源です。私たちが流す排泄物や残飯の中に窒素、リンが入っています。これは見方を変えれば資源です。それから熱、温水を使ったことにより水道水から熱を下水に流しているのです。その熱を回収すれば、これも立派な資源なのです。いくつかやっています。ガスを取り出して電気をおこしている、メタンガスを生成してバスを動かしている、リンを取り出して肥料にしている。リンというのは世界有限の資源だといわれています。ある人は60年しかもたない、それに対してある学者はいやいや60年なんてことはない、100年はもつ。でも、60年も100年もせいぜい孫の世界かその次の世代です。いずれなくなるのです。しかも日本ではリン鉱石が取れないのです。下水に入って混じっているリンを取り出してリン酸肥料にして、今、地域に還元しています。

一番分かりやすい話ですが、目黒川とか渋谷川の水というのは水源がなくなってきていて、今流れている水は、ほとんど下水再生水です。落合水再生センターの水をもう少しきれいにして川の水として流しています。このように考えると静脈系が下水道だったと思うのですが、実はいろんな資源が取り出せて、下水処理場が地域への資源エネルギー、水の再生供給基地になるのではないかと、動脈系になるのではないかと。このことは今いろいろな、

地球との共生、循環型社会への再構築と考えた時に大変なツール、地域経営、国家経営のツールになるのではと考えています。

もし、下水道が使えなくなったら。下水道がある時代、しかもその下水道をほとんど意識していない方が多いのですが、もし使えなくなったら暮らしがどうなる、町がどうなる、川や海がどうなるかということをぜひ考えていただきたいと思います。トイレが使えないだけでなく、住宅やビルから汚水が流せない、町に汚水があふれる、処理できずに、下流に垂れ流しにされる。いったいどういうことになるのでしょうか。都市機能が麻痺し、経済に大きな影響を与えるということなのです。同じ社会インフラとして水道、電気、ガス、いろいろなものが一緒に語られますが、実は水道は断水、電気は停電という「ちょっと待ったコール」ができます。加えて貯水槽、給水車、ペットボトル、用途によって雨水、発電機、発電車、懐中電灯、電池等々の代替品を用意できるのです。下水というのは、せいぜい仮設トイレしか用意できないのです。トイレの水というのは一日に使う水の4分の1だけです。残りの水を使わないでくれ、洗濯をしないでくれ、炊事をしないでくれ、風呂に入らないでくれということが長続きするかどうかです。そう考えた時に、下水道は代替のない施設だと思います。供給系のインフラというのはあらかじめ買って備蓄しておくことができるのです。しかし、下水道、汚水を備蓄しても仕方ないのです。できるだけ早く出したいのが基本です。下水道は代替のないライフラインです。しかし老朽化対策、耐震化はなかなか進んでいません。なぜ進まないか。みなさんが普段意識してくれていないから、首長や議員が下水道をどうしようといわないのです。水の循環について冒頭申しあげましたが、町があれば必ず上水があり、下水があり、下水の放流の下にまた川や海、水道の水源にいる生き物があるということなのです。町や暮らしや水、川、海のために私たちに何ができるのか、流した水ということをどう意識し、パネル・ディスカッションにありましたが、水と命というものをどう自分のこととしていくかを考えていただきたいと思います。

水は廻る。中国の諺に「飲水思源」という言葉があります。水を飲む時水源のことを思い描いて感謝しろ、別の慣用句として物事を本質から考えなさいというように使われることもあります。「排水思源」は私の造語です。水を使った時には必ず水源のことを思い描いてください。廻りまわって自分のところに帰ってくるのですからという意味です。ぜひ、下水道を自分のこととして、水循環やそういうものを考えていただきたいと思います。水の問題というのは外国の問題だとか、汚しているのは誰か他の人だ、ではなく、私たちは間違いなく水を使って、そのほとんどを汚水として出しています。ですから、私たちは水の受益者であると同時に、水に対する加害者でもあるということをごどこかで認識しながら、大きな水循環というものを考えていただきたいと思います。

最後に質問します。このような下水道ですが、東京都の場合で、1人1日に下水道料金をいくら払っていると思

いますか？ ① 1人1日100円以下。② 100円から200円。③ 200円以上。正解は①です。東京都は1人1日20円なのです。1人1日20円しか払っていないのにこれだけきちんと東京、多摩川がきれいになり東京湾が戻ってきました。でも、つくってきたものの老朽化が進んでいる、耐震化ができていない。使えなくなったらどうなるのだろうということを考えたら、もっと税金を使って耐震化しましょう、ということになるのではないのでしょうか。東京湾では、実はまだまだ処理は進んでおらず、赤潮、青潮が発生しているのです。東京湾をもっといい水にするために使用料もう少し上げていいよ、となりませんか。例えば、一人1日20円を5割上げても30円です。公共料金を5割上げるといって、もう新聞やマスコミ、議員含めて大変なのですが、実は値段にするとわずか10円です。

ぜひ大きな水循環の中に必ず自分たちが下水を出しているということを思って、それを受け止めている下水道を自分ごと化して考えていただければと思います。

質問

日本、東京の上下水道はおそらく世界のトップクラスだと思います。管理、技術を含めてナンバーワンだと思うのですが、例えば集中豪雨で急激に雨水が増えた時にどう処理をするか、それが今非常に問題になっていると思います。今後そういった自然災害、局地的な豪雨等に対して下水道はどうあるべきかという点で何か新しい発想はありますか。

栗原さん

新しい発想というわけではなく、下水道だけでいえることでもないのですが、もしかしたら私たちは勘違いをしてきたのかもしれない。ものをつくれば、ハードをつくれば、全部ある程度コントロールできると勝手に思い込んでいました。例えば、ダムを造ると洪水はもう起きないとか、堤防を造ると町が安全とか、実はそれは間違いなのです。計画した洪水までは抑えられますが、そこから先の雨というのは必ずあるわけなのです。そのことをきっちりと行政もいってこなかった責任もありますし、タックスペイヤーの方々、住民の方々もどこまで安全でというところを議論してこない中で高度成長を迎えました。高度成長だからそのようなことになったということなのかもしれません。今、お金もそんなにない。しかし、持続可能な社会をつくっていかう、役所と市民、国民の役割をもう少し見直そうという中で、どこまでハードで整備して、どこまでソフトで対応するのか。どこを役所に任せて、自分のところでは、例えば土嚢を用意しておくとか、高床式の家を建てるとか、あるいは家々で、雨水をすぐに下水管に流してしまわず、1回何らか溜めていただいてから流すとか。道路でも流れ去る舗装ではなく染み込み舗装にするとか。ありとあらゆる事業分野で、役所だけでなく、駅、ホテル経営者、一般の家、学校も含めて、あらゆる人が当事者意識を持ちながらハードとソフトを、いざとなったら自助、共助、公助を総動員しながら持続可能な社会を実現していくということだと思っています。

特別実践授業

「学校における環境教育授業の取組みについて ～実験を織り交ぜて～」

聖徳学園中学高等学校 教諭

江 草 清 和

文京学院大学女子中学高等学校 教諭

入 江 祥 史

獨協中学高等学校 教諭

塩 瀬 治

『理科野外実習(伊豆大島・三宅島・武蔵野)に取り入れ
ている環境教育の実践』

(聖徳学園中学高等学校理科教諭 江草清和)



聖徳学園中学高等学校の環境教育授業の取組みについて、夏期野外実習を紹介した。実習地は、伊豆大島、三宅島、そして本校が立地する武蔵野台地である。

動植物や地質・地形といった、自然観察が中心であるが、環境教育の一環として、人々の暮らしにも触れている。その際、水をテーマに考え、地域の浄水場見学も行い、その様子も発表された。内容は以下の5つである。

1 野外実習の考え

生徒を野外へ連れ出したい、島の植物のおもしろさを理解させたいという思いからこの実習を企画した。目標は①野外実習の企画力を向上すること ②島の植物動態を把握すること。である。

2 実習地の紹介

写真画像を用いて実習地の特徴様子などを紹介した。

3 実践例の紹介

- ① 2013年度 生徒実習〔伊豆大島〕
- ② 2014年度 生徒実習〔三宅島〕
- ③ 2014年度 地元浄水場見学

上記の実践について、生徒たちの活動の様子が分かる画像を用いながら説明し、次に映像でも紹介した。

4 教員研修の紹介

東京私立中学高等学校協会、東京私学教育研究所、環

境教育研究会主催の大島研修の様子を画像で紹介した。その研修もこの野外実習に生かされている。

5 まとめ

①観察、実習を通じ、実物に触れることで、生物への興味を抱かせる。②教科書枠を越えた海洋生物の分野において、教室内および実験室内では説明不十分な範囲を、海岸野外講義することで補う。という基本目標から、研究の基本を経験・習得させる。という向上目標へと学びを発展させている。

「北海道・道東における“人間と自然との共存”」

(文京学院大学女子高等学校 教諭 入江祥史)



入江先生は毎年のように北海道根室地域へ研修に訪れ、その地域の特徴を生かしたさまざまな自然環境教育の取組みを学んでおられます。今回の環境教育部会の研究目標は、～「水」生き物の源～というタイトルで、水をキーワードとしたこの根室地域での取り組みや環境についてパワーポイントを利用し、図や写真で説明した。

- 1. 根室地域の概要 位置、面積、人口について
- 2. 別海町の気候、地形、河川、地質について
- 3. 別海町の概要 面積、人口、産業について
- 4. 別海町の水について 別海町の水は、別海市街から約50km 離れた摩周湖の伏流水であり、その水を利用した水道を利用している。
- 5. 別海町の西別川の環境、汚染問題について

6. 別海町の二つのラムサール登録湿地 「野付半島・野付湾」・「風連湖・春国岱」について
7. 野付半島・野付湾の概要 位置、特徴について
8. 野付半島の森林破壊について トドワラとナラワラについて
9. 風連湖・春国岱の概要 位置と特徴
10. 別海町の河川環境等の取組み シマエビ漁や植樹事業について
11. 別海町のバイオマスについて 家畜糞尿などの再生可能エネルギーの利用



以上の発表から、自然豊かな北海道のこの地域でもさまざまな環境汚染が確認されていること、この地域特有な資源を利用した再生可能エネルギーがたくさんあること、そしてこの地域が生み出すさまざまな資源や産業の源はやはり「水」でることが再認識できた。

「ペットボトルミニ地球」

(獨協中学高等学校 教諭 塩瀬 治)



誰も予想できなかった近年の超台風、ゲリラ豪雨などの異常気象、熱帯地域でみられたデング熱が東京で感染がみられた報道等、地球温暖化の影響は私たちの日常のものになってしまいました。ミニ地球構想は1991年のアリゾナ砂漠で広大な敷地で行われたバイオスフィア2が有名ですが、日本でも東大バイオーム構想の地球環境実験、六ヶ所村のミニ地球実験施設があります。授業の前半はこのとりくみについてパワーポイントで説明があっ

た。

次に「ペットボトルミニ地球」を実際に作ってみることを行った。

「地球では物質が循環し、相互依存的に生物どうしが関係をもっていること」このことをより簡単で子どもたちに、示し「命」の世話役として責任を感じてもらう教材が「ペットボトルミニ地球」で、具体的なねらいとしては次があげられる。

- 1) 食物連鎖と生態系ピラミッドについて
- 2) クロメダカとヒメダカの違い
- 3) メダカと田んぼ
- 4) メダカの命を守るために
- 5) 微妙で繊細なミニ地球を守るための工夫

この「ミニ地球づくり」は、循環型社会や生態系の意味を理解するための、環境学習の一環として行った。そのためメダカ、オオカナダモ、ミジンコなどの微生物たちの命を守ろうという意識が必要で、

実行にあたっては、1日も長くメダカが生き続けられるための観察力と状況判断力、知恵が必要となる。



この実験を通して地域の自然環境の保全や持続的な循環型の社会をどのように築いていけるかについて考えるきっかけとなった。



運営委員長総括

日本学園中学高等学校 校長 小 岩 利 夫



本部会での冒頭に、私は参加された先生方に何か一つだけ、お土産を持って帰ってくださいといいました。しかし、一つだけではありませんでした。是非、自校に持ち帰り実践してもらいたいと思います。

坂田先生が話された中に、われわれ教員が希望を持つ、未来を感じていなければ、生徒が希望も未来も持たない生徒になってしまうという話がありました。それにはわれわれも責任があると思います。それから、日頃の教科指導あるいは日常の学校活動において、もっとうまく、もっとよくという考え方。何も考えていない生徒と一緒に遊び、あるいは自分がこれを行っているというところを見せる、そういうような時間的な余裕、姿が生徒にどう映っているのかを考えるのも一つではないかというようなヒントもいただきました。

私がこの部会の委員長になる時に、自分ではふさわしくないと思いました。なぜかというと、運営委員の先生方ほとんどが、長年、環境について研究しているスペシャリストなのです。その中で私が東京私立中学高等学校協会の総務部副部長という役であったため、部会の運営委員長を依頼されましたが、私自身は理科の教員で専門は物理です。部会の中でできそうであったのは環境教育だけだったのです。運営委員長に

なって、環境教育を勉強するために大島に行ったり、坂田先生の講演も聴きに行きました。しかしそれで、部会ができたわけではありません。今回の環境教育部会はすべてが運営委員の方が2年間の月日をかけてやってきた結果です。また、その運営委員会を支えてきた事務局の方、さらに今回、本部会の会場の設定等お世話していただいた、グランドプリンスホテル新高輪のスタッフの方々のお陰で本部会が無事に終了したと思っております。この先生方あるいはスタッフ一人ひとりが、本部会で行っていただいたことが、参加されたすべての先生方のためになっているのです。これだけのものを一カ所で、そして短時間にできたということは、参加された方々のこれからの糧にもなっていくと思います。

やはり環境は一人ではできないのです。すべての方がそれぞれのことを環境として考えて、そして、一つでも自分がやったことがどうなっているか、最後まで見て、全体を再度考える。そういったことをやっていくのが環境ではないかと思っております。

参加された先生方、企画運営いただいた運営委員の方々、また、ご協力いただいたスタッフの方々に感謝の意を表し、総括とさせていただきます。



生徒支援教育部会

1 研究目標 他者を理解し自己理解を図り、共に成長する学習環境の創造

「発達障害者支援法(2005年)」「障害者総合支援法(2012年)」「いじめ防止対策推進法(2013年)」制定などの社会趨勢の中、私立の中学校・高等学校の学校教育現場にも多様な生徒が入学してくるようになった。また、保護者対応、国際化、情報機器の発達などへの新たな課題も抱えるようになり、学校現場の煩雑さは急激に増加している。学校での教育活動が成果をあげるのは、教育計画を実施し、その教育目標が達成されるときである。しかし、何らかの問題を抱え学習活動に対する個別の支援を必要としている生徒も増え、今までのように個々の教師の力に頼るだけでは対応できない事例も多く報告されるようになった。今まで以上に組織をあげて取り組むことが求められている。

本部会では、教室に通う全ての生徒が共に成長する学習環境を整えるために、個々の生徒の特性を把握する基本知識を学ぶとともに、他校の事例を通し、自校に持って帰れるヒントを得ていただくことを目的として実施する。

2 会場 グランドプリンスホテル新高輪国際館パミール 1階 瑞光

3 日程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	15			30	30	30		45	
10月17日	受付	開 会 式	講 演 I	昼 食	講 演 II	パネル・ ディスカッション		閉 会 式	

4 内容

部会開会式 運営委員長挨拶 村田女子中学高等学校 校長 伊藤 淑子

講演 I
演 題 「発達障害の理解と対応」
講 師 Rabbit Developmental Research 代 表 平 岩 幹 男

講演 II
演 題 「私学の生徒支援体制を考える」
講 師 宝 仙 学 園 中 学 高 等 学 校 ス ク ー ル 高 野 利 雄
栄 光 学 園 中 学 高 等 学 校 カ ウ ン セ ラ ー

パネル・ディスカッション
テーマ 「教室に通う全ての生徒が共に成長する学習環境を整えるために」
パネリスト 保 護 者 今 井 絵 理 子
立 教 池 袋 中 学 高 等 学 校 教 務 部 長 原 真 也
自由学園男子部中高等科 副 部 長 更 科 幸 一
文京学院大学女子中学高等学校 養 護 教 諭 源 田 か お る
田園調布雙葉中学高等学校 校 長 滝 口 佳 津 江
コーディネーター 学校法人東洋大学経営企画本部 参 与 川 合 正

部会閉会式 総 括 村田女子中学高等学校 校長 伊藤 淑子

5 運営委員・指導員（順不同）

委員長	伊藤淑子	（村田女子中学高等学校 校長）
委員	金野眞行	（帝京八王子中学高等学校 校長特別顧問）
	滝口佳津江	（田園調布雙葉中学高等学校 校長）
	川合正	（学校法人東洋大学経営企画本部 参与）
	小熊北美	（立正大学付属立正中学高等学校 教諭）
	坂本太郎	（京北中学高等学校 教頭）
	高野利雄	（宝仙学園中学高等学校 スクールカウンセラー）



講演 I

「発達障害の理解と対応」

Rabbit Developmental Research 代表 平 岩 幹 男

本報告（講演録）についての著作権は平岩幹男氏に帰属します。私的かつ非商業目的で使用する場合、その他著作権法により認められる場合を除き、複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。



講師紹介（伊藤淑子運営委員長）

平岩先生は1976年東京大学医学部をご卒業され、三井記念病院小児科、帝京大学医学部小児科、戸田市立医療センター等にご勤務されました。その間の地域に密着した、母子保健活動を献身的に行った功績が認められ、2001年には母子保健奨励賞の毎日新聞社賞を受賞され、この受賞により皇居へ参内なされ、天皇皇后両陛下よりお言葉を頂いておられます。2007年にRabbit Developmental Researchを開設され、その代表として現在もご活躍されています。また、同時に日本小児保健協会理事、日本小児科学会監事、埼玉小児保健協会会長、東京大学医学部小児科非常勤講師等の要職を務めながら、現在もなかじまクリニック発達外来を中心に、現場で患者さんと向き合っておられます。また、多くの著書は私たちに気付きを促してくださっております。

実際にこのような仕事していると、学校の先生方と特に夏休みや春休みにはお話をする機会もあります。いろいろな地域から受診される子どもと先生が一緒に来られるということもあります。日々、子どもたちを見ていて一番感じていることの一つは、子どもに問題行動があると、学校は診断書を出してくれという要求をよく出します。診断が一旦でしまうと、あとは教育の問題ではなく、医療の問題だと教育を放棄するように見受けられる場合もあり

ます。先生方もご存じのように、実際には教育現場での日々の対応がどのくらいうまくいくかということが重要で、それによって子どもたちの生活の質は実は全然違ったものになります。ですからぜひ子どもたちには、適切に、上手に対応していただくようにしていただきたいと考えています。

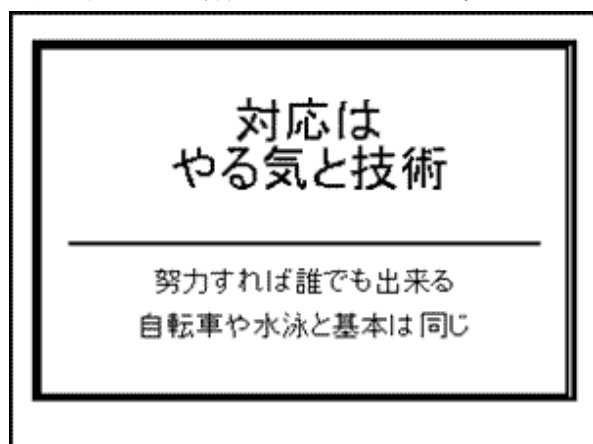
上手に対応するということは、別に才能があるからできるとか、才能がないからできないとか、そういう話ではなく、技術的な練習を重ねるかどうかです。練習をしないで、行き当たりばったりの対応をしていると、それなりの結果しか出てきません。これは先生方もおそらく感じておられる通りだと思います。

私の外来で、例えば5歳の子どもを診たとしても、10歳の子どもを診たとしても、15歳の子どもを診たとしても、大人になったときの生活の質、quality of lifeが一番高くなるためにはどうするかということが最終目標になりますから、その途中の5歳、10歳、15歳というのはあくまで途中経過にすぎないと思っています。ただ学校現場では、その時点の子どもたちみ対応しなければいけないということがありますが、実際に子どもたちにとって一番大切なのは、彼らが一步一步、年齢を重ねて大人の階段を上がっていく、そのサポートをどのように上手にするか、そこで階段から落ちそうな子どもをどのように支えるのか。あるいは、どちらにいくか分からない子どもをどのように真っすぐに登らせるのか、そういうことが、中心になってくるように感じています。

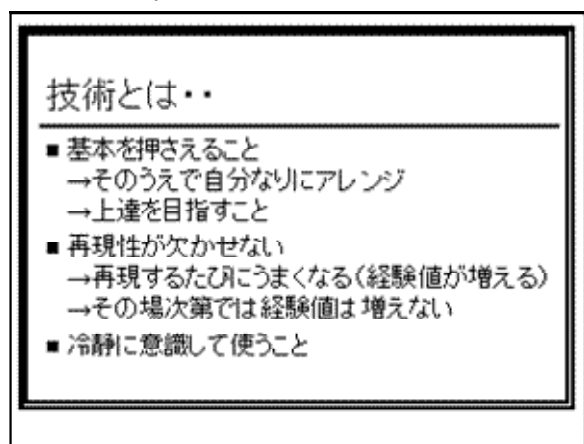
子どもに学習させて
適切な行動に導くには

そのための技術を習得
する必要がある

例えば、よくある話ですが、ADHD を抱えた子どもたちに、男の子が多いわけですが、授業中立ち歩く、「座りなさい」と注意をする。当然3分後にまた立ちます。ですから、「座りなさい」とただ注意をしていくというやり方ではうまくいかないのです。ではどうすればうまくいくのかということを考えていく必要があります。それはやはり練習しないとなかなかうまくできない。だからそのための技術を教える側も習得する必要があります。

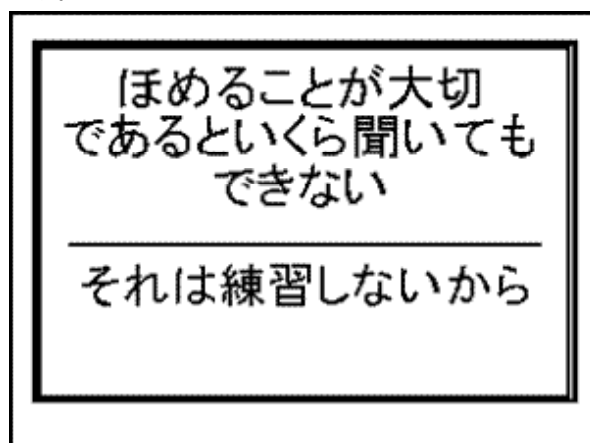


私も、自分が外来でいろいろなことをやりながら、それを練習しています。対応は、ほとんどが「やる気」「技術」なのです。才能とかそういうものはほとんどありません。繰り返してやるだけです。私は自動車の運転と同じだと思っています。自動車の運転も、例えば車に乗り込んで、いきなりアクセルを踏んでも車は動かないですよね。手順通りやらないと動かないですから、手順をきちんとやるのが大切です。さらに自転車とか、水泳とか全部同じなのですが、やらなければ下手になります。私はもう20年くらい泳いでいないですから、今泳げと言われると多分、相当きつだろうし、車の運転も最近あまりしていないものですから、どんどん下手になっていきます。だからこういう対応の技術も、使っていないとどんどん下手になってきます。ですからやはり練習していくということが大切です。努力をすれば誰でもできるのだけれども、練習は必要ということになります。

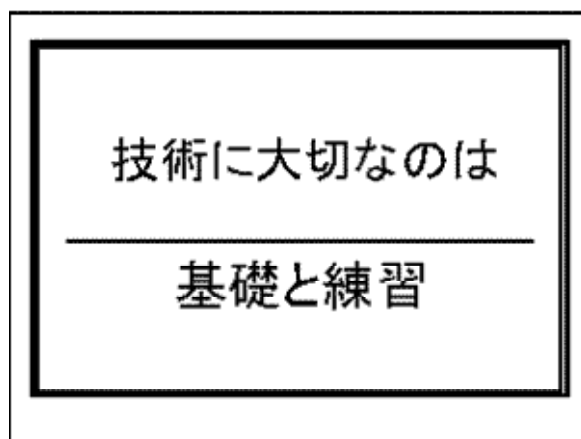


技術とは、基本を押さえて、そこから自分なりにアレンジして上達します。再現性は欠かせません。立ち歩くA君に言った言葉が、立ち歩かないC君に対しても同じ対応ができるのかということです。基本的には金太郎飴と同じよ

うに、まずは同じ対応をして、そのあとでそれぞれのお子さんによって対応が変わってきます。再現性は欠かせません。だから同じ方法を再現できれば、A君で最初うまくいけば、C君に対してもうまくいく率が高くなります。ですから、A君には注意をする、C君には、そうではなくて、こうなさいという別の切り替えの指示を出すというように、その場限りの対応をしている限り、絶対にうまくはなりません。ですから冷静に意識して技術を使うことが基本です。



例えば、こういう講演のときに、よく「褒めてください」、「褒めることが大切です」。「褒めることが大切です」と話しますが、いくら私が話しても、いくら先生方が気をつけても、明日から褒めるのがうまくなるのかと言えば、ならないです。横須賀に文部科学省の国立特別支援教育総合研究所があり、講義を毎年していますが、そこで実習のように少ししゃべってもらうことも入れています。褒めるということは練習しなければできないのです。



実際に後で先生方にも少しやっていただきますが、技術に大切なのは、繰り返しますが、基礎と練習です。練習があるのみです。それから練習の時に、イメージトレーニングを頭の中だけですると決してうまくはならないのです。口に出さないと駄目です。

このクマは、もう30年前から我が家にいて子どもたちのオモチャだったのです。もうボロボロですが、私も練習しています。今はこのクマではなくて、朝のウォーキングをするときに川岸で練習しています。褒め言葉を練習する



のです。私も練習をしています。練習しないとうまくなりません。しかも口に出して練習する。いくら頭の中で考えても口から出ないのです。そこが非常に重要なポイントです。

行動介入の原則

- 好ましい行動、望まれる反応を強化する
→ほめる、報酬
- 好ましくない行動、反応を消去する
→ほめない、無視する、タイムアウト
- 一度に何とかしようとしな
→スモールステップ

行動介入の原則は、好ましい行動とか、望まれる反応を強化します。好ましくない反応とか、行動を除去します。褒めないとか、無視するとかはタイムアウトがよく言われますが、切り替えるという方法もあります。行動を変えるためにどうするか。スモールステップで、一遍に何とかしようとしなさいことです。例えば、40分間の授業の間に5回も、6回も立ち歩く子どもがいます。小学校の1、2年生であればこのような子はザラにいます。その時に5回、6回注意しても、5分後には必ず立ちます。だから彼らは、注意をされても同じことを繰り返す。注意をする、叱るという行動は、注意をされるたびに、1回目より2回目、2回目より3回目が強くなると、効果がなくなります。最後には、叩かないと座わない。そこまで行ってしまうわけです。

そのような時に私はどうするかというと、例えば1分間の砂時計を取り出して、ではまず1分間座る練習をしよう。そこから始めます。外来でもそういうことをやっています。1分間座ってみよう。そうすると、子どもたちは結構できます。これが1分間の砂時計です。私にとってこれは必需品です。子どもたちは砂時計の砂が落ちるのを見ているのが結構好きです。中学生でもです。これが落ちるまで、ちょうど1分ですが、これが落ちるまでやろう、座ろう。「座りなさい」とやってしまうとうまうかない。先生と一緒に座る。男の子であれば「かっこよく座ろう」、女の子であれば「かわいく座ろう」というように言いながらやってみせる。1分間座ったら、「やあすごいね」と、ハイタッチをする。このようにしていると、今までは立ち歩くことで、叱られていたわけですが、でも、座ったら褒められるということを学習します。このようにしたほうが、行動を改善するためには有利なわけです。繰り返しますが、最初1分です。あとはもう立ち歩いていても無視しているのです。叱ってもどうせ立ち歩くのです。この砂時計は1分間ですが、私の外来では3分間とか、5分間の砂時計や電子砂時計など、さまざまな砂時計が7つくらいあります。次、3分、5分、と進めていきます。砂時計は便利で、5分落ちると、今度ひっくり返すと、またすぐ5分できます。このようにしながら伸ばしていく。10分間くらい座れるようになり、こうなるともっと座っています。それまで授業を聞いていな

かった子が、聞くようになる。そういうことで行動が改善するのです。だから褒めるということは実は改善には欠かれません。しかし、例えば、立ち歩く子に、特に小学校低学年などの場合、「じゃあ先生がこのメダルをあげるから、ちゃんと座っててね」。これはだめです。わかりますか。先に褒美をあげて、それで行動を誘発しても、例えばこのメダルをもらって、10分間座っていた。20分間座るために、もっと大きな褒美をあげなくてはいけなくなります。それは逆です。そうではなく、10分間座っていられたら、ご褒美あげるのが正解です。先に物をあげると駄目です。そういうところが学校現場に介入してみると、結構あいまいになっています。以前に東京の中学校、小学校で学校崩壊が起きて、その介入をした時に、そういうルールがきちんとしていないため、子どもたちに先生が完全になめられているのです。強く出れば、先生が引くと思われてしまうともうどうにもならないということがあります。

学習には良い面と悪い面がある

- 道路にごみを捨てたら100円もらえる
→道路にごみを捨てるようになる
→社会のルールには逆行する
- ごみを拾って捨てたら100円もらえる
→ごみを拾うようになる
→社会のルールと認識すれば100円はいらない
- 適切な学習をしなれば
→適切な行動は生まれない

学習には、これはアカデミックスキルという意味ではなくて行動の学習ですが、道路にごみを捨てたら100円貰えるとなると、子どもたちはこのルールであればゴミを捨てるようになります。しかしゴミを拾ったら100円もらえらるとしたら、ゴミを拾うようになります。いずれ社会のルールと認識すれば100円もらわなくてもいいのです。悪い行動に、要するに望ましくない行動にご褒美をあげたら、その行動を強化してしまえば、その行動にはまる。いい行動を一生懸命やっていたらご褒美をあげることでそれを強化できます。

これが、思春期になってきて、不登校とか、性の問題とかが起きてきたときに、このルールが守られないまま対応されていることもあります。例えば学校現場で、「もう少し頑張ればうまうまできるのに」という言葉が聞かれることもあります。これではうまうまいきません。

「もう少し勉強すれば成績が上がるのに…」、これも私たちは使わないです。「算数の教科書やドリルをあと5ページやれば、次のテストではもう少し、10点くらい上がるかもしれない」と言いますが、「もう少し、もう少し」とはどのくらいですか、分からないです。これは具体性がない抽象的な表現です。「頑張る」という言葉は何を意味するのか、何をやるのか、勉強を頑張る、スポーツを頑張る。頑張ればとは何をどのようにするのかということ具体的に言うことが重要で、「もう少し頑張ればうまうまできるよ」と。その言葉は時には非常に心ない言葉になってしまうのです。成績が上がらなかつたら、「こらっ、お前頑

張んなかったやろ」と言われてしまうと、子どもの立つ瀬がないわけです。これはよくない状況だと思います。

もう少しがんばれば
うまくできるのに

これは無効な指示

行動には理由がある・・・ABC

- A:環境からの先行刺激 (antecedent)
- B:誘発された子どもの行動 (behavior)
- C:その結果 (consequence)

- 信号が赤→渡らない→ほめられる
- 周りがうるさい→自分も騒ぐ→叱られる
- 食事の声掛け→食卓を拭く→ほめられる
- 食事の声掛け→ゲームをやめない→叱られる

行動には原理、理由があることが多いです。だから一つはまず、**antecedent** です、環境からの先行刺激。環境条件とか、原因と言っても構いません。**behavior** はその結果として誘発された行動です。**consequence** はその結果として起きたことです。例えば、「信号が赤」という条件で、「渡らない」という行動であれば、褒められる。「周りがうるさい」という状況下で、「自分も騒ぐ」という行動になると叱られることになります。

ですから「周りがうるさい→自分も騒ぐ→叱られる」といった流れの時に一般的に考えるのは、周りが静かであれば自分も静かにするから、それで、叱られるのではなくて、褒められると考えるかもしれませんが、私たちは違います。周りがうるさくても、自分が静かにしていられて、褒められるようにしよう、このように行動を変えていくということが目標になります。そのように考える。だから、「食事の声掛けをする→食卓を拭く→褒められる」。「食事の声掛けをする→ゲームをやめない→叱られる」。これは家庭で結構多いです。こういうときにお母さん達にお話しするのは、まず食事の支度をしている時に、ゲームを渡していること自体が間違いです。かなりの親たちが、ゲーム機を子どものコントロール下に置いています。あり得ないといつも言うのですが、そういうことがしばしばですから、そこから改善を始めないとうまくいかないです。

問題行動を減らす、消すということは、学校現場でも重要です。無視するとタイムアウトはどこにでも書いてあることです。無視する、無視していればやめる。ですが小学校1年生や、2年生で、その辺をゴロンゴロン転がって、む

ちゃくちゃ言っている。無視してもやめません。それから、物を投げるとか、ツバ吐きをする子どもたちもいます。ツバを吐くのを無視していたら、辺り一面ツバだらけになってしまいます。無視しても駄目です。よくあるのは捕まえて、「ちょっとこっちへ来て」と別の部屋に連れていき、タイムアウトをかけて、クールダウンをさせることです。ツバ吐きに熱中しているときに、タイムアウトをかけても止まりません。こんなときには切り替えるということがになります。

問題行動を消す、減らす

- 無視する
- タイムアウト
- 切り替える
- ほめて消す、減らす

切り替えるということは、例えばツバ吐きをしている子どもたちの場合に、ツバ吐きは問題行動で、不適切行動ですが、「あそこの水道の水を止めてきて」という指示を出して、水を止めてきたら、「やったね」と言ってほめます。これはいいわけです。良い行動に、望ましい行動に切り替えて、望ましい行動ができれば褒めるということが基本なのです。学校現場に介入するときには、こういう話をよくします。最後の褒めて、消す、減らす。これは結構時間がかかるので、簡単ではないですが、先程申しあげたように、例えば立ち歩くという行動一つとっても、褒めて少しずつ減らしていことです。1分間の砂時計から始めて、40分くらい座れるようになります。普通3カ月くらいかかります。それを、1週間でやろうと焦ってしまうからうまくいかないのです。3カ月だから、例えば1学期のスタートで考えたら、夏休みまでにできればいいというくらいです。夏休みまでにできると、2学期が始まるとまた大体崩れています。しかし今度は2週間でできます。そんな感じです。

キーワードはまず自己肯定感、**Self-esteem** です。次に自分が納得するから自分で決めるという自己決定権です。自己決定するとモチベーションが上がります。子どもたちにどうやって自己決定権を行使させるかということが大切です。皆さんも、例えば校長先生に言われて、教室の掃除をするよりも、自分できれいにしようと思って掃除をするほうが、絶対モチベーションが高いですね。当たり前です。さらに行動において主導権を取るとうれしいものです。自分で決めて主導権を取るとうれしいのですが、先程のゲーム機のところで出したように、子どもに主導権を渡してしまうと、子どものペースになってしまいます。学級崩壊は、ほとんどが子どもに主導権を取られてしまうから起こるのです。ですから自己決定権は子どもに与えるけれども、主導権は渡さないことがコツです。さらには達成感です。「やったね、すごい」、この達成感が子どもたちを動かす鍵になっています。

キーワード

- Self-esteem(自尊感情、自己肯定感)
- 自己決定権、モチベーション
- 主導権
- 達成感

自己決定権の一つの例を出しますと、「列に並びなさい」、これは命令系です。「列からはみ出しては駄目」、これが禁止系です。では、「ケンちゃん列に並んでくれたらうれしいな」と言うと希望系です。この三つがあります。小学校で、長期介入した経験は実は私はないのですが、保育園では何度もあります。この三つをどのように使い分けるかということで、最初は命令系と禁止系があふれていた保育園で、最後の希望系、「何々してくれるとうれしいな」、という希望系を出していったところ、3カ月くらいすると、結構子どもたちのコントロールが、できるようになりました。

自己決定権

- 命令系
→…しなさい…自己決定権なし
- 禁止系
→…してはだめ…自己決定権なし
- 希望系
→…してくれるとうれしいな
→あたりまえのようにほめること
→自己決定権あり

この当たり前のように褒めるということが重要なのです。だから「座ってたらうれしいな」、といって座っていたのに、「列に並んでたらうれしいな」といって並んでいるのに、「あっそう」で済ましてしまう、ここでスルーすると、子どもは言うことを聞いても褒められないということを学習します。この学習ということは、大人になるまで共通です。小学校低学年だけではないのです。中学生でも、高校生でも同じです。ですから高校生になれば、社会性が少しずつ身に付いてくる子が多いから、「一回目は仕方ないか」と思うけれども、3回同じことを繰り返したら、高校生でも当然学習してしまいますから、そこで指示が通らなくなります。

例えば、1歳半の子どもですけれども、小学生でも、実は私の外来では中学生でもこういうことを平気でやっているのですが、「はい、何々する子は手を上げて」。「はい」。これだけで子どもたちは結構指示に従ってくれます。「先生今から話をするから、話を聞く子は手上げて」と言って、「はい」と手を挙げさせます。手を挙げたというときに、話を聞くということを彼らは自己決定しているのです。話

を聞くから静かにしなさいというよりも、話を聞く子に「手を上げて」、「はい」。「みんな手が上がったね、じゃあ先生お話する」と言うほうがはるかに子どもたちは動いてきます。これも練習なのです。だから皆さんも、ちょっと、「はい」と右手を挙げていただけますか。「はい」。人間は右手を挙げると、何となくやる気が出るのです。ヒットラーもこのようにやっていたのですが、右手を挙げる、ただそれはみんな知っているのですが、恥ずかしいから、大人はあまりやらないだけです。例えば、12月頃になって夜にお酒を飲みに行くと、21時くらいに、「はい、二次会でカラオケ行く人を手挙げて」、「オー」とか言って、みんな手を挙げているのです。酔っぱらうと恥ずかしくないから、手を挙げるのですが、みんなこういうことを知っているのです。「今日は給食全員で食べました。食べた人、手挙げて」と、「はい」、「じゃあ明日も食べようね」と言って明日につなげます。行動に一つ一つ区切りを入れていくということです。それによって行動の切り替えが楽になってきます。

ハイと手を上げる: 自己決定

- ・…できる子 手を挙げて
- ・…する子 手を挙げて
- ・ハイと言いつつ手を挙げる
- ・そこでまずほめる
- ・それから指示を出す
- ・できたらほめる
- ・注目させてから指示を出す
→モチベーションを上げる

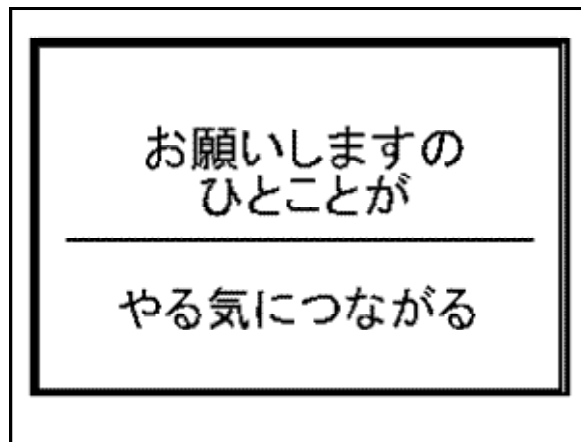
中学生くらいまで平気でこれができます。高校生になると状況にもよりますが、ハイタッチもあります。ハイタッチは高校生でも、私の外来では大流行です。皆さんちょっと隣の方がいらっしゃいましたら、少しハイタッチをしていただけますか。ハイタッチというのは、目より上に手を挙げるのです。ですから、少し目の上に手を、人間の目の動き方というのは真つすぐと、少し下を見るのは楽なようになっているのですが、少し上を見ると、30度くらい少し上を見ていただくと、努力しなければいけないのが分かりますね。その状況でタッチ。今度は、もう1回だけすいませんがやってください。私から見て、右側の方が子ども、左側が大人でもう1回やってみてください。はいどうぞ。合格率半分くらいです。どこが悪いかわかりますか。ハイタッチをすると「やったねっ」という達成感につながります。音が出ることもすごく大切です。半分くらいの方は音もちゃんと出していました。でも、駄目なところもいっぱいあったのです。ハイタッチのときに、左側が大人ですよね、右側が子どもですよね。大人が達成感をやってどうするのですか。だから練習なのです。たかがハイタッチです。たかがハイタッチですが、ここまでちゃんと考えてやるかやらないかで、全然違います。「医者の方の言うことじゃないか」と思われるかもしれませんが、私は外来でもこういうことをします。もちろん、最初から音が出せない子どもがいれば、ボンと音を出して、「気持ちいいよ、はい、やってごらん気持ちいいよ」。そうすると、子どもたちは

次からもうハイタッチができるようになります。そのうちに、やる気になると、もう手を後ろから持ってきて、「やるぞ」というふうなポーズをとることもあります。特に小学校低学年ではそういうことが多いです。その時の彼らの顔というのは、本当にニコニコしています。ハイタッチをさせてもらうということは仕込みでもできます。例えば、診察室の机からボールペンをポンと落とすのです。わざとです。「ケンちゃん拾って、ありがとう」、それでタッチ。もう1回やるのです。「ありがとう」、タッチ。3回目には「先生わざとやる」と絶対言うのです。だけどそう言ってるケンちゃんの顔が、ハイタッチして言うこと聞いたら褒めてもらえるということを、学習してくるから、もう満面の笑みでいうわけです。だから「また今度やってね」。それでいいわけです。それでも、やらされたということが、彼らが恨みに思うとか絶対あり得ないですから。こういうことが重要です。今度はハイタッチ、「はい」と手を挙げたらハイタッチです。これはもう教室の中で自由に使えます。だから例えば、教室の中でテストをして、答案が書き終わった子から前に持ってくる。「できた人、手を挙げて」、「はい」、「先生のところに持ってきて」、持ってきたらタッチをすればいいわけです。訳はないです。こういうことで子どもたちはすぐ指示に従うようになります。

6歳の子どもと、ハイタッチをして、「ハイ」と言って手を挙げさせてハイタッチに持ち込むという連続技です。中学生でも、場合によっては高校生でも平気でこれを使えます。両手でタッチ。例えば、高機能自閉症、アスペルガーなどでは目を見るのが苦手な子どもたちが結構います。そうすると片手でのハイタッチ、横を向いていてもハイタッチというのはできるのです。だから目を見てやらせようとすると、3歳、6歳でも、10歳でも同じなのです。両手でタッチをすれば必ず目が合いやすくなります。ただその時に見ていただくとお分かりのように、私は目を低くしています。座っています。子どもとアイレベルを合わせています。こういうことは必要になります。Hand to hand, hand over hand と英語では両方の言い方があるのですが、手を出してその上に子どもに手を置きます。ちょっと隣の方とやってみただけですか。本当は両手ですけど、片手でやっていただけでも構いません。大人が下で子どもの手を受けます。信頼できる人と話をするときは、体の一部分が接触しているほうがやりやすいのです。信頼できない人とは絶対手をつなぎたくないではないですか。だからそれと同じことなのですが、こういう状況で話をすると、わりと落ち着いて話ができるということです。この（ハイタッチの相手）子も高機能自閉症アスペルガーなのですが、小学校3年生ですが、距離感がつかめないので。だから、60cmから1m くらいが人と話をする適切な距離感なのです。そうでないと、ものすごく近くまで来てしまったり、そうかと思うと遠くで話をしたりします。そうするとなかなかうまく話せないのです。「こういうふうにして話す。この感じで話すといいよね」ということを、彼らに教えるのです。もうこの



子は小学校6年生になりましたが、学校での問題はほとんどないです。これも練習しないとできません。ぜひ先生同士で練習していただきたい。すぐに上手になります。距離感を一定に保つ、こういうこともあるのです。



あと、「お願いします」という言葉を言うのです。「お願いします」という言葉は、実は「何々してちょうだい」と言わざるを得ないときに使います。命令形を使わざるを得ないときです。学校現場ではよくあります。その時に、「列に並びなさい」よりは、「列に並んでね」と「ね」を付けた方がいいのです。柔らかくなりますから。

ではみなさん、「お願いします」と言っていただけですか。「その列に並んでくださいね」と言った後に、「お願いします」という状況を考えて。

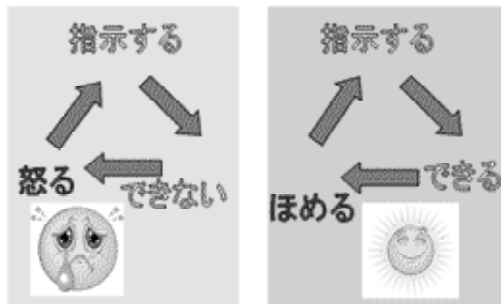
「お願いします」、はい、どうぞ。

参加者：「列に並んでください。お願いします。」

強すぎます。もう、下心ありありの、「お願いします」です。だからこれも練習なのです。こういうところで「お願いします」、「列に並んでくださいお願いします」。これでいいのです。さらっと言うことがすごいことです。本当に何かを頼む、だから「…」。だいたいその「お願いします」という言葉は、例えば、「一生のお願い」とよく言いますが、「お願いします」という状況を考えてください。「今日は早く帰ってね、お願いします」。「お願いします」というのは日常会話で使う時は、期待率50%です。うまくいくとわかっている時に「お願いします」は絶対に言わない。しかし、今私が言っているのは、「列に並んでくださいね、お願いします」というのは、「列に並んでくださいね」という言葉を柔らかくしてしまっているのです。子どものやる気を少しでも出そうという意味で、「お願いします」を言っているのだから、あまり、下心ありありの「お願いします」の強さになってはいけません。これは練習しないとできません。実は私もこれはさんざん練習しました。こんなことが子どもたちの行動を動かすときに、重要になってきます。

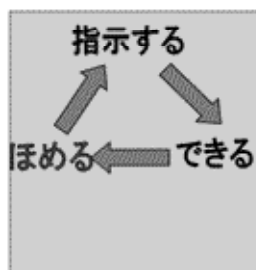
例えば、これはイエローカードのやり方と、それから青信号のやり方なのですが、「座りなさい」、「できない」、「どうして座らないの」と怒る。このパターンはよく見かけます。では、「座りなさい」、座る、褒める。青のサイクルのほうが圧倒的にいいのですが、実際に学校現場では、しばしば黄色のサイクルがグルグルと回っています。黄色のサイクルが回れば回るほど、イエローカードがいっぱいたまってくるわけですから学級崩壊に近くなります。

どっちのサイクル？



指示する、できる、褒める。簡単に見えるかもしれませんが、ここで指示するということは、相手がわかるようにすることが非常に重要です。例えば指示するときに、みんなこっちを向いていない。横を向いているとか、後ろを向いている子に、後ろから指示しても入らないです。ですから指示をする時に、例えば、「1回注目して、はい、今から先生がお話をします」。「みんなこっち向いて」と言ってから指示をすればいいのに、そうすればできるのに、それをやらないで、「では、今から」と言葉だけではうまくいくとは限りません。視覚的に手を挙げるとかいうことで注意を引いたほうが、特に小学校は、高学年でも全く同じですが、はるかにうまくいきます。そうではなく、「先生今から話します」と、聴覚的な、耳からだけで言うとうまくいかないことがあるということです。ですから指示する時に、まず指示が入る状態にする。わかりやすく言うということです。それから、できれば褒める。しかし、できないことを指示しなくてはいけないことというのはたくさんあります。例えば、先程の「1分間座ってて」。ウロウロしたい子に「1分間座ってて」、できるわけがないではないですか。そうするとサポートしなくてはならない。手を抑えて無理やり座らせるのではなくて、「一緒に座ろう」とか、そのようにしていくわけです。

手伝っても「ほめる」



- ・ できるためには
→ わかる指示をする
- ・ できないことをできるようにするためには
→ 手伝う
→ 手伝ってもできたら「ほめる」

手伝っても褒める。ここで一番まずいのは、「手伝う」でできた場合に、褒めるではなくて、当たり前になってしまふのです。当たり前になると今度システムが崩れます。手伝っても、できるということを目標にしたのだから、だから、例えば、これで1分間座っていても、「やった座ったね」と、それでもほめていいのです。座ったという事実を作りたいわけですから、座ったという事実ができれば、そ

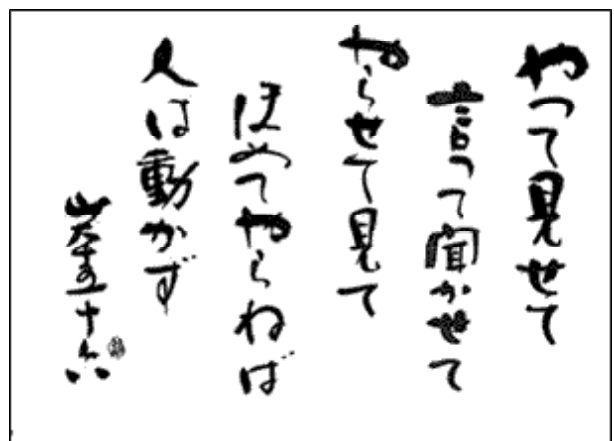
こで褒めてハイタッチでもいいわけです。「すごいね」と、これでいいわけですよ。だからここで、指示する→手伝う→当たり前になると、このサイクルは崩れますから、少し手伝ってあげてもできたら褒めることです。手伝うのはいくらかでも減らせませう。しかし、褒めるということをきちっとやっておかないと、このサイクル、システムは崩れます。

褒めるということは、実は練習しなければいけないことです。まず秒速です。秒速というのはわかりますか。褒めるタイミングになったら、1秒以内に褒めるということです。ここが抜けていることが多いのです。そのうちに褒めようとか、そのようなものでは全然だめです。

ほめるということ

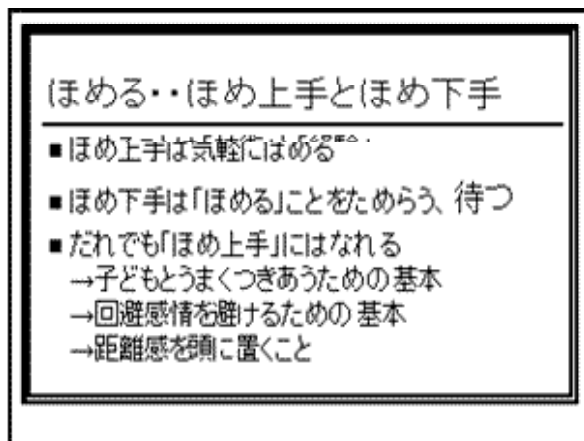
- ・ 秒速
- 出来て当たり前・それでは前には進まない
- それが出来なければ叱る、注意をする
→ それならば出来たときには、ほめるべき
- ほめる手間を惜しむことは子どものself-esteemが上昇する機会をのがす
- 列に並ばなければ注意する
→ ならば、きちんとならんだらほめる

褒める時間とか手間を惜しんではいけないのです。列に並ばなければ注意する、並んだら褒める。ただしもちろん、「ケンちゃんは列に並んだら褒められるのに、どうして私たちは褒められないの」。「いつも並んでいる私たちは、どうして褒められないの」、これは当然学級崩壊の始まりになりますから、「ケンちゃん列に並んだね、みんなが列に並んだね、はい、並んだ人、手挙げて」、「はい」。これで大丈夫です。

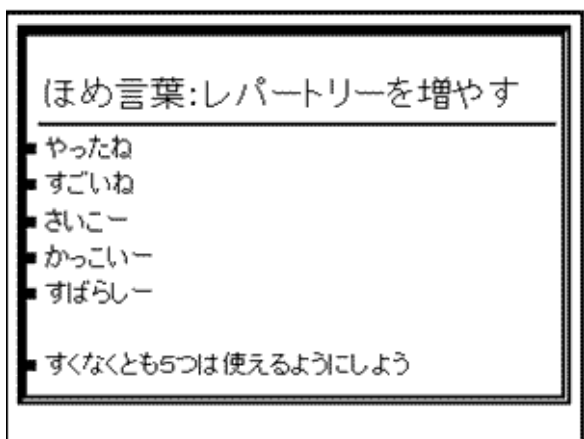


これは山本五十六の言葉ですが、やって見せるとか、言って聞かせてとか、やらせて見てそれを褒めないと駄目です。この前段が重要だということを申し上げたいのです。褒めるということは技術の蓄積ですから、簡単ではないです。しかし、子どもに分かるように手軽に褒める。褒められたことは蓄積するのです。考えていただければお分かりのように、例えば先生方が学校で何かうまくやった。すると校長、副校長、教頭、主任が出てきて、「ああ先生すごいね」と褒めてくれれば、3人目まで、良かった良かったと思って聞いています。でも何かミスって、その同じ3人

が出てきてブツブツ文句を言ったとします。一人目は「もうしょうがない」、二人目は「いい加減にしてほしいな」、三人目はもう多分スルーしています。慣れてしまうのです。だから、叱るという行動は常に次々に強くしていかななくてはいけないので不利なのです。安全に関することなど、使わざるを得ないことは、学校生活でも、家庭生活でもあります。でも普段から使っていると、同じ行動に対して、叱るのは常にどんどん強くしなければいけません。褒めるという行動に持ってくるのであれば、同じトーンでいけます。蓄積されます。褒められることに確かに慣れますが、それは次の行動の動機を減らすものでは決してないですから、ここは決定的に違うのです。



褒めるのが上手な人と、下手な人がいますが、褒めるは完全に技術です。褒めるのが下手な人は、ほめようとして待ってしまうのです。例えば小学校2年生の宿題で、算数の問題が30問出ました。よくあるパターンです。褒めるのが上手な人は3問できたら褒めようと、そのたびに褒めるわけです。そうすると30問できたら、10回褒めています。褒めるのがあまり上手でない人は、30問全部できたら褒めようと思って待ってしまうのです。わかりますね。そうすると30問できても1回しか褒められない。だけど、物事そう簡単にはいきません。15問しかできなかったというケースだとどうしますか。3問ずつ褒められていれば、5回褒めてもらえるわけです。15問でもう既に5回褒められています。30問できたら褒めようと思っていると、15問だと「どうしてできないの」と叱ったり注意したりしなくてはいけないのです。これは子ども側にしてみれば、大変な差です。ですから誰でも褒め上手になれるけれども、練習や基本を押さえることが非常に重要なポイントになってきます。



そして褒め言葉です。ここに5つ挙げましたが、私はだいたい15くらい使っています。これも私はかなり練習をしているのです。では、先生方も少しやってみましょう。私が言いますから、その後に言ってみてください。

はい、「やったね」。／参加者：「やったね」。

はい、「すごいね」。／参加者：「すごいね」。

「さいこー」。／参加者：「さいこー」。

「かっこいいー」。／参加者：「かっこいいー」。

「すばらしいー」。／参加者：「すばらしいー」。

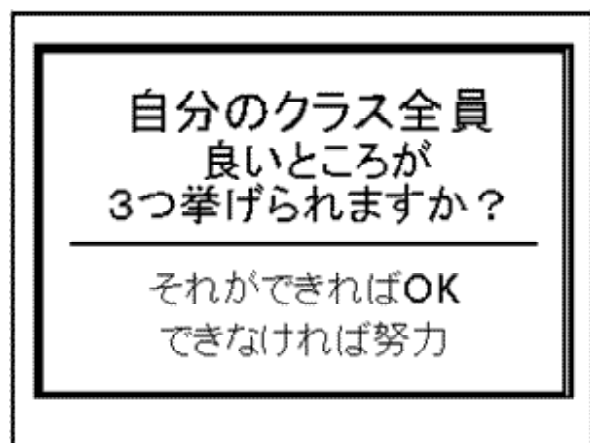
さすが先生方、上手です。これが全部使えることが大切なのです。なぜ大切か。褒める言葉のレパートリーが多い人は、いつも褒めている人です。レパートリーが少ない人はワンパターンになってあまり褒めていない人です。だから練習しなくてはいけないのです。私も練習しています。褒めることが下手な人にやらせると、何が起ころかというのと、「やったね」、もう常に「やったね」です。1週間たつと子どもたちに、「やったね先生」と呼ばれてしまうのです。わかりますね。

私はいろいろな障害を抱えた子どものお母さんたちと話をする機会が多いのですが、「私30個言えます」というお母さんがいて、「すごい」と思いました。言える言葉があれば使いたい。皆さんそうでしょう。新しく覚えた言葉というのは使ってみたくります。同じことです。褒め言葉もたくさんあり、毎朝、呪文のように練習していると褒めることが上手になります。練習なのです。秒速で褒めるためには、口から出す練習をしなければならないと思います。頭の中だけのイメージトレーニングではできません。実際に口から出し、やってみることが重要です。口から出す練習を1日に、例えば朝起きて、あるいは夜寝る前に、朝起きて学校へ行くぞというときに、1回上からと、下から。これを5個、先生方はもちろん10個、20個増やしていただいて構わないのですが、やっているか、やっていないかの差は、1カ月もすれば、かなり出てくると思います。

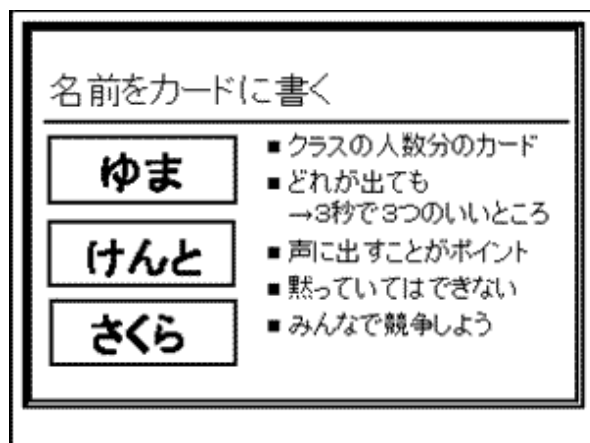
「ありがとう」と言う言葉があります。ここで私がこういう話をしました。これで土日必死に練習をして、月曜日から子どもたちを褒める。褒めなくちゃ。子どもたちがななんと言うのでしょうか。褒めていなかったら、「先生なんか変」。絶対そう思うのです。これは家庭でもそうなのです。幼稚園でもそうなのです。中学生でもそうなのです。なぜでしょうか。皆さん例えば家に帰って、パートナーが突然、「最近きれいになったね」とか、「最近洋服が似合うようになったね」とか言われたとします。

そうすると皆さんどうですか。パートナーが「やっとうわかったか」と思いませんか。「やっとうわかったか」と思える人は相当自信がないと無理ですね。「なんかこいつ怪しい」と思うでしょう。「何か下心じゃないか」と思うでしょう。おだてられているのではないかと思っているわけです。おだてるということは100%下心です。ですから、おだてられているというふうに子どもたちが感じてしまうとうまういきません。褒め言葉をあまり使っていないということを認識されているのであれば、「ありがとう」から始めましょう。「ありがとう」は下心を感じないでしょう。「ありがとう」という言葉は、何かをしてもらった、言うことを聞いてもらった、何か手伝ってもらった時に言う言葉ですね。何か努力をしてもらっているということがあるから、

「ありがとう」という言葉を言うときに、あるいは「ありがとう」と言われる時は何かをしていることが多いわけです。「やったねタッチ」もあります。何かをした時に「ありがとう」。褒めるのが、何となくこの子と最初からうまくいかないという時は、「ありがとう」なのです。「ありがとう攻撃」をしてみてください。ある先生に「どのくらい言わせればいいですか」と言われました。目標は1日30回です。これは一瞬でできるわけです。ポトツ(落とした)、拾った、「ありがとう」。ポトツ、拾った、「ありがとう」。簡単です。「できたねハイタッチ」、ハイタッチをしました。それで少し、「すごいね」と言いにくければ、「ありがとう」。これでいいわけです。いくらでも言います。「ありがとう」一言は0.5秒で言えるわけです。褒めよう褒めようとして、それが、おだてられていると子どもたちに1度刷り込まれてしまうと、それを外すのはすごく大変です。ですから何となく褒めるのがまだうまくいかないと思うときは、「ありがとう攻撃」がお勧めです。



今度はもっと難しくなります。自分のクラス全員の良いところが3つ挙げられますかという課題です。この良いところを知ることが、非常に重要なのです。実際に、学校の先生たちに10人くらい集まっていたいて、クラスの子どもの良いところを三つ挙げてくださいというと、皆さんさすが学校の先生は上手です。10人の子どもたちだと、8人くらいまではスッと出るのです。でも、9人目は相当苦しい、10人目は出なかったりするのです。でもその9人目、10人目が実はクラスの中で問題を抱えていることが多いのです。



例えばゆまちゃんとけんとくんとさくらちゃん。クラスの人数分のカードを作って、それに人数分の名前を書くの

です。そしてシャッフルします。例えば、ケント君カードが出たら、「朝大きな声で挨拶をする」。「何か他の子が困ってたらすぐ何かを貸してあげる」とか、必ず三つは出すわけです。これが出るか出ないか。これが出るのがなぜ重要かというと、これが出るようになると、その子に対する、何となく「うまくいかなさ」が、消えてしまうのです。だからこれは重要なのです。実際にやっていただいて、うまくいくようになったことはたくさんあります。例えば、1人3秒でクラスのすべての子のいいところが浮かぶか。浮かべば結構うまくいっています。気になる子どもはこれが本当に出てこないです。私も外来でお母さんが子どもを連れてきて、例えば ADHD を抱えた子どもを連れて来た時に、「お母さんこの子のいいところは何かありますか」と聞くと、「ありません」と答える親がいるわけです。「ありません」と言うのは距離を持っている親で、その親子関係を再見するところから始めないと駄目です。そこからやらなくてはいけない。薬よりまずそちらが先なので、ここは単純にトレーニングです。さらに、重要なポイントは、これを保護者と共有する。中学生でも、高校生でも全部同じです。保護者と共有化すると、保護者はモンスター化しません。これはモンスターペアレント対策で、学校介入した時にこういうことも非常に重要です。だからモンスター化するのは、自分の子どもがこういうところがあると云われた。でも家ではそうではない。悪いところを共有させようとするから、モンスター化してしまうパターンが圧倒的に多いのです。だけど、いいところを共有してしまえばモンスター化しないのです。モンスターペアレントのインタビューも以前は結構やっていたのですが、その当時少し教育委員会と組んでやっていたのですが、モンスターペアレントは何か攻撃されるのではないかと、セルフエスティームの結構低い方たちが多いので、その人たちのセルフエスティームまでまとめて先生方が上げてしまえば、モンスター化は少なくなります。モンスターは最初は小さいのです。小さいうちはモンスターではないのです。時間をかけて対立しているうちにどんどん育てモンスターになってしまっただけなのです。

ピグマリオン効果という言葉を多くの先生方はご存じかもしれませんが、これはギリシャの王様が大理石で女性の像を作ったらそれに恋愛してしまい、アフロディーテが命を吹き込みました。願い続ければ叶うということです。1964年にローゼンタールというアメリカの学者が行った実験から、ローゼンタール効果という言葉も使われています。その実験自体非常に不完全でしたが、例を言うと30人のクラスで、担任の先生に「1、3、5の子どもは知的な能力が高いから、この子たちに一生懸命教えれば伸びるよ」と無作為に選んで教えたのですが、6カ月後にテストをすると、1、3、5の子がよく伸びていた。要するにこの子は伸びると信じれば、そのつもりで教えるわけです。だけど「こいつなんとなく嫌なやつだ」と思い、「この子と何となくうまく合わないな」と思っていたら、その子たちの力は伸びるはずがないのです。ですから、ピグマリオン効果を出すために、先程の三つのいいところを認識するというのは非常に重要だと理解していただけたと思います。

では、どれくらいでできるかと、よく先生方に聞かれるのですが、例えば、40人の学級だとすると、約3カ月かか

ります。そんなに簡単にはできません。今は10月ですけれども、今からかなり一生懸命頑張ったとすると、お正月に間に合うかなというくらいです。

シャッフルして、最初から一生懸命イメージトレーニングをします。口に出す練習をします。そうして行って、最後は、例えば40枚のカードを1日に5枚ずつランダムに抜き出すのです。それでやってみてください。それでいいところが出るようになってくれば、「出る」という自信が、「褒める」という自信が完全についていますから、子どもたちはついてくるのです。不思議ですね。

朝のチェックシート					
	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
じぶんで起きる	○	○	○	○	
はみがき		○		○	○
きがえ	○		○	○	○
いただきます	○	○			
がっこうのじゅんぴ		○		○	○
いらってきます	○		○	○	○

○が5個以上でシール ×はつけない

朝のチェックシートというものです。これは家庭でやってもらうシートですが、例えば月曜日から金曜日まで、朝の支度、「自分で起きる」と「歯磨き」、このようにできたら○をつけてもらいます。なかなかできない子どもたちが多いのですが、ここで重要なのが、木曜日に6項目のうち5個できた。5個できて、これで大きな星のご褒美がもらえるのです。100%は狙いません。100点は狙わないのです。70点、80点になったらそのうちに100点は出ます。100点がでなければ褒めないと考えていると、褒めるチャンスは減るということを意味します。

中学、高校生には村上龍さんの『13歳のハローワーク』が必見、必須だと考えていますので私の外来にもいつも置いてあります。これでチェックをやってもらいます。月日が過ぎて漠然と高校や大学に行っていると、特に発達障害を抱えているグループは失敗してしまうことが多くなります。自分が何に向いているかということを、ある程度考えながらやっていくことが大切です。『13歳のハローワーク』は、一昨年改訂されて職業が100くらい増えて600以上になりました。13歳の進路は、いろいろな進路が示されています。職業では例えば地図絡み、地図が好きという、地図絡みの仕事だけで10以上載っています。発達障害を抱えた子どもたちに渡して、発達障害抱えていなくても、不登校の子どもたちにもよくこういうことをやりますが、これに、自分ができると思う仕事に青のシール、できないと思う仕事に赤のシールを貼ってもらいます。それで、何週間か後に持ってきてもらいます。きれいに分れています。赤と青が混在していることがあまりありません。子どもたちは知らない仕事は選べませんし、目標になりません。ですから私はこの『13歳のハローワーク』は、中学生以上にはとても良いと思います。文章自体は非常にやさしく、漢字もルビがふってあるので、小学校高学年でも大丈夫です。

さらに、人間関係の調整もやります。人間関係の距離感

を場に合わせて設定することが苦手な子どもたちには、例えば毎日あいさつをする人とか、1年に1回あいさつをする人とか、というように仕分けをしてあげると、子どもたちも混乱なくて、できるようになったりすることもあります。

あいさつですが、日本で普通に行われているあいさつは、「いただきます」もあるし、「ごちそうさま」もあり、大体20個から30個くらいのあいさつがあると言われていますが、特に大切なのはこのうちの七つです。特に「おはようございます」は非常に重要です。私は「おはよう」と、「おはようございます」を使い分けしないで、「おはようございます」で子どもたちに教えている理由は、この使い分けは結構苦手な子どもが多いのです。例えば校長先生に「おはよう」と言ってしまうような失敗が多いので、「おはよう」だけは全部「ございます」を付けて教えています。私の外来では全部「おはようございます」にしています。さらに苦手な子どもには、「おはようございます」といって、お辞儀を少しする、軽くお辞儀をするところまでをワンセットであいさつを教えています。「ございます」は「こんにちば」とか「こんばんは」にはないです。「さよなら」にもないですね。このようにしてあいさつを練習します。

なぜこういうことを言うかということ、大人の発達障害を抱えた人たちを外来で見っていますが、あいさつができない人たちがすごく多いのです。あいさつができないだけで、「なんだ、あいつ、あいさつもできないのか」と言われていい、そのために世間的な評価が非常に低くなります。できれば私は就学前にこれは身に付けるべき問題だと思っています。小学生とか、中学生とか、あるいは高校生でも身に付いていない子どもがいます。「おはようございます」とか、「ありがとう」、「ごめんなさい」という言葉はお互いに言い合うことになります。私も今まで、かなりの学校に行ってきましたが、学校に行った時に、生徒が「おはようございます」と大きな声で、あいさつをする学校と、あまりしない学校とがあります。もちろん、みんなが「おはようございます」とできる学校がいいのです。あいさつが飛び交ってくる学校は、一般的にきれいです。校舎が古くても掃除がよくしてあるのです。子どもたちも黙々と下を向いて歩いているような学校というのは意外にきれいではないのです。このようなことを学校訪問しているうちに気が付きました。

先程の砂時計。1分間の砂時計です。今度は1分(黄)、3分(白)、5分(緑)のキッチンタイマーです。こうやります。「今日は、最初は黄色でやって、次は白でやって、次、緑ができるようになったらすごいね。緑ができるようになったら、今度ひっくり返して、もう1回もうちょっと黄色やろうよ」というところで10分になるわけです。電子砂時計は、1分から99分までできて、砂が落ちるようにディスプレイの中で動いて、その時間が満了するとタイマーで教えてくれる。このようなものも使います。

ここまで少し基礎的なところやりました。いろいろな子どもたちへの基本的な対応というのは、発達障害を抱えていない子どもたちでも全部有効なものです。発達障害を抱えていないとやっては駄目ということは、今まで一つも話していません。これから発達障害の話をしますが、基本は

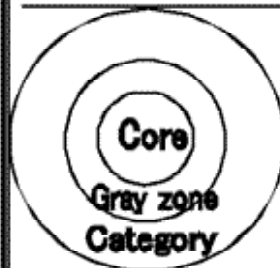
同じなのです。だから発達障害共通なのですが、やはりコミュニケーションとか、行動とか、いろいろなところで少しずつトラブルを起こすことが多いですから、もう少し気をつけなくてはいけないというだけで、基本線はそんなに変わるわけではないです。

発達障害というあいまいな障害

- 診断自体の成熟度が低い
- 「発達」も「障害」ももともとある言葉だが結びつけると意味が異なる
- もともとの発達障害は「知的障害」
- それでも対応が必要な人たちがいて増えている
- 医学的対応だけでは社会的困難は解決できない
- 小中学生で60万人？100万人？ともいわれる

発達障害という言葉自体が、非常にあいまいです。「診断自体の成熟度が低い」というのは、発達障害という言葉が一般的になってからまだ10年少ししか経っていないので、1980年代に発達障害という言葉が入ってきたときには、知的障害の意味で使われていたのです。それが今、発達障害というが有名になっています。小学生で60万とか、100万とか、150万とか特別支援教育はどのくらい必要なのでしょう。厚生労働省には発達障害の専門官という方がいるのですが、専門官に聞くと、「文部科学省に聞いてください」と言うのです。文部科学省の専門官に聞くと、「100万はいると思うのですが、分からないですね」。その数字を言ってしまうと、それだけのサポート体制を作らなくてはいけないから、それは大変という話をしているのです。

どこまでが発達障害？

- 
- 社会的困難を抱える、抱えそうなcoreにいる子どもをどうやって何とかなるgray zone、困難のないcategoryに移動させるかが目的
 - 自閉症の特性は残るので、categoryまで到達すれば大成功
 - でも時々逆戻り

ですから例えば、特別支援教育で先生方もご存じのように、私立は別として、通常の公立の小中学校の場合には、通級教室があります。通級指導教室とか、適応指導教室という名前と呼ばれているのです。そこで実際どういう教育をするのかというガイドラインを文部科学省で出していないので、それぞれによって全然バラバラなことをやっているという問題もあります。どこまでが発達障害かというと、非常にわかりにくいのです。社会的困難を抱える、要するに発達障害の症状を持って、障害というのはその症状があって、社会生活に困難があるから障害なのです。そうすると、コア、中心部になります。でも少し何かあるけどそれでも

ない、あまり困らないけど何とかやっていける、少しサポートしてあげればいいのかというその外側のグレーゾーンがあって、そしてなんとなくオタクのようだったら、あるいはすぐソワソワするけど、授業をちゃんと聞いていられるとすれば、カテゴリー（範疇）というもっとも外側になります。外来には、大体このコアにいる子どもたちが来ることが多いのです。それをどうやってカテゴリー、外側まで持っていくか。そのためにどうやってソーシャルスキルトレーニングをやるかとか、先程言ったようないろいろな「褒める」とか、あれも全部ソーシャルスキルトレーニングなのですが、そういうことをやっていくかということを考えながらになります。障害は今も話したように、特定の症状から困難が出ていることです。例えば動き回る、立ち歩くという症状によって授業を聞けない、そうすれば学力は当然低下します。これは当然問題になります。

障害とは？

- 特定の症状によって社会生活に困難が
→身体障害、知的障害、精神障害
- 発達障害も「障害」である
→しかしあまりにもグレーゾーンが多い
→診断することが必ずしも役立たない
(学校は診断があれば教育ではなく医療に)
→しかし困っている子どもたち、大人たちは少なくない…何かできることは？

だから知的障害、それは身体障害とか、精神障害だけではなく、発達障害も障害なのですが、あまりにもグレーゾーンが多いです。私は、外来でグレーゾーンだと考えた場合には発達障害の診断を出しません。何に困っているのかと言って、困っていることをどうやって対応するかということが優先なのです。

確かに、例えば投薬をするという状況だと診断をつけないと駄目ですから、投薬をするときは付けますけれども、基本的にグレーゾーンに対しては診断はいらないです。グレーゾーンに対して診断をつけてしまうと何が起こるかという、レッテルを貼ってしまう。子どもに対する拒否感、「こいつは ADHD だから」ということになってしまうので、教える側にとっても不利なのです。そこがやはり非常に問題だと思うのです。だから診断することは必ずしも役に立たない。学校は診断してしまうと、もう後は教育ではなくて医療でやってくれと言いますが、実は先程もお話したように一番大切なのは教育です。だから何ができるかをいつも考えるわけです。

発達障害とは何か。これもある小学校の20人の先生方に、発達障害の定義をそれぞれ100文字以内で書いてくださいと言って、紙を渡して書いていただき、集めてみるとバラバラなのです。発達障害という言葉聞いたことがない方は、もちろんここにいらっしゃるわけがないのですが、発達障害に対するイメージが、結構皆さんバラバラなのです。持っているイメージが皆さんバラバラなのですが、発達障害の話の聞きにくいということになってしまうと、受け取る者も当然バラバラになってしまうということもありま

す。一応、これは私が定義して、かなりいろいろなところでも使われてはいるのですが、これを定義にして話を進めましょうということです。「発達の過程で明らかになる、要するに生まれた時に分かるとか。すぐにわかるわけではない。行動やコミュニケーションなどの障害」です。

発達障害とは？

■ 発達障害

発達の過程で明らかになる行動やコミュニケーションなどの障害で、根本的な治療は現在ではないが、適切な対応により社会生活上の困難は軽減される障害

したがって発達そのものの障害ではない

根本的な治療は現在ではないです。ADHD に治療薬があるとはいっても、あれは別に ADHD の症状を少しの間止めているだけであって、それで ADHD が治るわけではないのです。適切な対応によって社会生活上の困難は軽減されます。何も変わらない子はほとんどいないです。まずゼロだと言ってもいいです。軽減が、10%か、80%か、これは差があります。ですが適切な対応というのは、医療機関だけでするものではないです。家庭もそうです。学校もそうです。いろいろなところで協力しないと、適切な対応はできません。学校では良い子どもだけでも、家庭ではグシャグシャ、だとすれば対応がバラバラだからです。でも、学校で上手にコントロールできてうまくいっている。するとなぜうまくいっているかをお母さんたちに話して、どうやってこの子の良いところをどんどん出てくるように話をするかということで、家庭でもうまくいくようになってくる。当然のことながら、行動の問題、例えばうろつき回るということであれば、歩きまわる力がなければわかりませんから、これは3歳を過ぎなければわかりません。コミュニケーションもしゃべったり、対人関係ができてこないとわからないから、3歳、5歳に上がってこないとわからない。もちろん言葉を読まない現象は1歳半でも診断は付きますけれども、このようにうまれてすぐにはわかりません。

発達障害の抱える問題

- 行動やコミュニケーションの問題を抱えるので
 - 注意されたり叱られたりしやすい
 - めったにほめられない
 - そして二次障害につながる
- Self-esteem (自己肯定感、自尊感情) の低下
 - 低下しては行動は改善しない
 - Social skills training (社会生活訓練) が重要
- 薬物療法だけではなかなかうまくいかない

だから、発達障害を抱える子どもたちは、行動やコミュ

ニケーションの問題。そうですね、歩き回る子どもたちに、普通は「じっとしなさい」と言われる、「座ってられないの」と注意される。「ケンちゃんそんなに動き回ってすごいね、先生感心しちゃったよ」とは普通は言ってもらえない。一方的にしゃべるケンちゃんも、「ねえ、ケンちゃんすごいね、話し出したら40分、先生にはとてもできないよ」とは褒めてもらえません。「人の話をちゃんと聞きなさい」と普通は叱られるのです。めったに褒められない。褒められないと二次障害につながります。学校で、二次障害というと、あとで少し話しますが、例えばうつ病とか、パニック障害なども二次障害なのですが、学校現場で一番先に出てくる二次障害というのは何でしょうか。キレるということです。キレる子どもたちは、大人たちが作っているのです。キレる子どもたちが悪いのではないのです。キレる子どもたちの介入をしていくと、キレる子どもたちは、注意されたり、叱られたりばかりして、それでキレてしまうのです。それはもちろん学校だけの責任だと言っているわけではないです。家庭の問題ももちろんあります。その他のいろいろな環境設定の問題もありますからそうなのですが、キレるという子どもたちが出たら、キレさせたら駄目なのです。褒めまくっている子どもたちは、キレないのです。褒められた子どもたちは、その行動をもう1回繰り返そうと思うことが多いです。でも叱られた子どもたちは、「うるせえ」と思えばその同じ行動をやります。そしてまた叱られます。皆さんだってそうです。

例えば家庭に帰って、1週間パートナーにひたすら嫌みを言われたら、最後にキレます。当たり前です。人間とはそういうふうになっていくのです。生物なのです。だから例えば DV なども、DV や虐待にも私たちは関わることが多いのですが、DV が、なぜあれだけ暴力を振るっても続くのかというと、ただ殴る、蹴る、そのあとに「大丈夫だった」と、優しい言葉をかけるのです。「私は、お前が必要なんだ」と言われてしまうのです。そうするとそこで必要なかと思って、耐える。また次の日ボロボロにされる。でも「俺はお前が必要なんだ。お前の事が好きなんだ」と言われてしまうと DV がずっと続く。それで DV とか虐待から永遠に逃げられないのです。そうやって逃げられない。だからキレられるのです。

発達障害への基本的対応

- 支援を押し付けない・まず理解を
- 一度に何とかしようとしない・small step
- ほめる・self-esteemを高める
- 「見ればわかるだろう」ではない
- 失敗させない・errorless
- できないことは・・・工夫してできるようにする
- 診断よりも困っていることに対応

皆さんもそうであるように、子どもたちも、そのように上手にやらないとキレてしまいます。キレるという認証で、Self-esteem が低くなります。当たり前です。自分がいいやつだと思えなくなる、ニコニコ笑わなくなってしまう

すから、警戒してしまったら駄目です。そこで **Social skills training** の出番です。我が国は薬物療法が非常に多いです。例えば、ADHD で、後にも出しますが、ADHD と診断されれば70%以上が薬物療法されています。私の所では大体15%か、20%くらいです。今話したように基本的な対応が大切で、対応でコントロールできることも多いのです。立ち歩きに薬を使う必要はないからです。基本的対応は同じ支援ではありません。発達障害であっても自閉症、ADHD、100人いれば100人全員が違うのです。ADHD だから、これだという支援はないのです。何が必要かという、一度に何とかしようとしないう。褒める。見ればわかるだろうという対応ではなくて、丁寧にしゃべるということが実は非常に重要になって、失敗させないとか、できなければ工夫してできるようにすればいいだけの話なのです。ですから、診断よりも困難に対応するのが、優先になってきます。

発達障害の種類

- 自閉症
 - 知的障害を伴う(言葉の遅れがある)
 - 知的障害がない(言葉の遅れがない)
- ADHD(注意欠陥・多動性障害)
- 学習障害
- これらはしばしば合併する

発達障害の種類は、自閉症は知的障害を伴うとされ、言葉の遅れがある、古典的な考え方だと、知的障害でもなく、言葉の遅れもなく多くは普通に学校に行ってる高機能自閉症アスペルガーのグループがあります。高機能とは知的障害がないという意味ですが、さらに、ADHD(注意欠陥多動性障害)がありますし、学習障害もあります。これらが、しばしば合併しています。

診断はあくまで入り口

- 発達障害では診断はあくまで入り口
 - しかし「診断」で終わっていることがある
- 抱えている「社会生活上の困難」だけではなく「将来目標」のために何ができるかが基本
- 医療だけではなく、家族、学校などとの連携も重要…そうしないと対策が立てられない
- だから非常に時間と手間がかかる

診断はあくまで入り口です。ですが診断で終わってしまうことが多いというのが、我が国の医療の問題点です。例えば小学校2年生、中学校2年生のその時に抱えている問題だけではなくて、最初に話したように我々の将来目標は20歳、25歳になったときの生活の質をどのように高めるかです。将来的にどうやって高くするかということが、実は一番大

切だということを考えていますから、将来目標の設定も非常に重要になります。ただなかなか、現在の医療も教育も、今困っていることだけの対応で、その将来設計までは考えてくれません。

そこまでするとなると非常に時間がかかります。私の外来は発達障害を抱えた方が中心ですが、初診は基本的に1時間とっています。1時間ですが、全部インターネットメールで予約なので、インターネットで先に基本情報を全部もらっています。というのは、基本情報で子どもに聞かせたくない問題も結構入っていることが多いのです。それを全部先に把握します。その上で拝見するわけです。そうすると診断をするだけであれば、おそらく1人10分で診断はできます。基本情報をもらっていればです。だけど実際にそのあとどういうふうにするかという対応までやらなくてはいけないとすると、少なくとも40分、大体1時間はかかってしまうのです。非常に時間と手間がかかります。費用の面からは、1人に5分で外来をやっても、1人に1時間をかけて外来をやっても、診療報酬は全く同じなので、非常に損といえは損なのですが、できることをやらなければ仕方ないと思っています。

疑っても診断の出来るところは少ない

- 通常の巡回相談では対応、受診の指示のみ
 - 診断は出来ない
- 発達障害の診断が可能である医療機関はきわめて少ない
- わからないときに「様子を見ましょう」「この子の特性」などといわれてしまう危険性がある

なかなか疑っても診断のできる場所が少ないという問題があります。そういうことがあるので、今いろいろなところと組んで、あるいは私もいろいろな外来で、いろいろ若い先生たちを育てたりしています。疑ったときにどうすればいいのかというのが、医療資源はやはり地域によって違います。都市部、大都市圏はまだあるのですが、少し田舎に行くと、それがなかったりということが結構あります。ですから、巡回相談も最近小学校でも始まりましたが、私立の学校でも巡回相談やっていたり、あるいは場合によっては、スクールカウンセラーを置いたりしているところも今、増えてきましたが、やはりなかなか診断ができないことがネックになることもあります。診断ができないということと、それからそれに基づく対応ができない。ただし、大切なことは巡回相談では診断できなくてアドバイスをしますが、ここのアドバイスはもっと丁寧にやらなくては駄目だと私はいつも言っているのです。私もあるところでは、少し巡回相談をお手伝いしたことがあるのですが、すぐにやめてしまいました。やめた理由は、1回巡回相談にいきます。回っていると、次に同じ学校へ行くのは半年後なのです。私の所は外来でどのくらいのインターバルで見るかということ、初診で見た子にいろいろなオーダーを出します。2カ月後には必ず診ています。「こういうふうにし

ましよう」とオーダーを出したのにできたかどうか確認しなければ、怖くて私は外来ができないのです。でも巡回相談というのは、そこまで丁寧に診ていません。やはり一つの学校に行って、一つの学校にいられるのは長くても1日、普通半日です。そんなに診てられないです。だから1人当たり、そこに20人いたとしたら、もう1人5分で診なくては行けないです。そんな能力はとてもないですから、非常に難しいです。分からないから、様子を見ましようとか、この子の特性あるいは個性です、とか言われて誤魔化されてしまう。そして、子どもは困難を抱えたままで、どんどんキレやすくなるという流れにのってしまふことがしばしばです。

フォローアップの出来るところは もっと少ない

- きちんとした診断も難しいが、それに基づくきちんとした対応の指示、相談、カウンセリング、トレーニングのできる場所は少ない
- だからといって「目の前にいる問題を抱えた子」を放置できない
- だったら皆さんがスキルアップするしかない
- 診断があってもなくてもself-esteemを確保

もちろんフォローアップできる施設もとても少ないです。どうやって対応するのか。どうやって Social skills training、社会生活訓練を教えるのか。こういうところも弱いと思います。ですからなぜ私が最初のような話をしたかということ、釈迦に説法だとは思いますが、行動のコントロールをきちっと系統立ててやるとか、それから練習をきちっとしましようとか、そういうことをなかなかみんながやらないということが現状です。ですから一番下に書きましたが、だったら皆さんがスキルアップしていただくのが一番早いのです。先生方が上手に対応できるようになれば、それで、先生方は1人の先生が何十人もの子どもたちを見えています。10年、20年のスパンになったら、何百人、何千人という子どもたちを見えています。だからそこで子どもたちがキレないように、その子たちが自信をもって、笑顔を見ることができるよう、問題行動が少しでも減るように対応していただくことが一番重要なのです。

困っている学校には

- 診断がつけば「医療」、つかなければ「教育」ではない。いずれにしても協働は必要
- 適切な教育的対応によって「うまくいく」ことが現場ではあまりにも認識されていない
- 通級指導の見直し、システム化
- 校医、教職員の教育
- 教育センターの機能を強化する
 - 職員の研修
 - 二次医療機関との連携

実際に見ていると、例えば小学校2年生の時はいまうまい

った。小学校3年生になった途端に問題が噴出してきた。他人との間がうまくいなくて問題が噴出、よくあるのです。だったら3年生の担任の先生が、2年生の先生に聞いてみたらいかがですか。その時に「はい」と言える先生というのは、すごく少ないのです。だから、それはやはり違うなど私は思うのです。困っている学校には、診断がつけば医療、つかなければ教育ではないのです。両方は一緒にやらないとうまいかないです。通級指導の見直しとかシステム化も非常に大きな問題です。それから校医がいるのですが、校医は発達障害について大体知らないのです。身体だけ見ればいいと思っていることが多いです。心の問題を見る行為なのです。高校では、県によってはいらっしやいます。例えば三重県等いくつかの県では高校の校医に、積極的に精神科医が入るようになってきて、かなり心の問題にも対応できるようになっています。東京都ではまだそのようなところはごく一部しかないです。そういう問題もあります。

教育センター機能とか職員研修等も、このようなところがまだまだうまくいかないということもあります。

学校での対応の基本は、上記のように非常に重要です。「発達障害とは何なのか」。この概念は是非学校で共有してください。個々の人たちが100字でまとめたなら、みんながバラバラなことを書いていては、子どもたちが混乱するだけです。

発達障害：学校での対応の基本

- まず発達障害を学校で共通理解する
 - 正しい理解を共有することで一歩進む
- その子への対応をみんなでそろえる
 - ばらばらな対応は結局、困難を抱える
- ほめるときはほめる、叱るときは叱る
 - あいまいな態度は混乱を招く
- 予定や計画は実行する
 - やるべきこと、責任を持つことを自覚させる
- 学校だけで対応しようとしない
 - 家庭も医療もみんなで連携することが大切

発達障害とは何なのかということを、学校全体が、教員が20人、30人、40人、皆さんで発達障害とはこういうものだを再確認をしてください。そうしないと同じ土俵に立って、同じペースで仕事が始まりません。それからみんなで対応をそろえることです。例えば小学校3年生で、しょっちゅう廊下を走る子どもがいます。ある先生は叱ります。ある先生は静かに歩いてくれたらいいと言います。ある先生は何も言いません。これだと子どもは楽なほうに従ってしまい、なかなかうまくいかないです。しばしば担任に聞いてくださいというように学校の管理職に言われることがあるのですが、担任に落とされて、担任からみんなに共有させるのは結構大変なステップが必要です。ですから例えば小学校に入る前に、今はちょうど、いわゆる就学時検診をやっているピークの時期ですが、1月くらいに公立の場合は就学通知が来ます。私立の場合には、大体11月から、遅い所で1月の中旬くらいに入学が決まるわけですが、そうすると、そこで一度その子へどういう対応をするかというフォーマットを作って、それを学校に持って、場合によ

っては私が行くこともあるのですが、共有します。1月とか、2月に共有すると、当然まだ担任は決まっていなくて、すから学校全体で共有してくれる可能性が非常に高いのです。4月になってからそのようなフォーマットを作ってくと、担任に相談してくださいと下ろされてしまう。特に公立はほとんどそれでやられてしまうので、そうするともう全体の共有ができない。ですから小学校に入る場合、私立でも公立でも同じなのですが、大体2月前後が交渉の時期です。3月に入ると学校は卒業式モードに変わってしまい、新入生に対してよりも今いる子どもたちを送り出すモードになってしまう。これは中学校でも、高校でも全く同じです。

それから、褒めるときは褒める、叱るときは叱るということで、あいまいな態度はうまくいきません。

予定を実行するということが非常に重要です。予定が実行されない先生は基本的に信頼されないというのは、よくご存知の通りで、やるべきことと、責任を持つことをきちんと自覚する。もちろん自覚させてやったら褒めるということは、高校生であっても、大人であってもそうです。大人であっても、ハイタッチは当然のことですけど、効きます。大人であってもこの人のモチベーションを、この人の Self-esteem をあげようと思っている側に音を出させる、一緒です。大人だからあなたの方が、積極的に音を出しているわけではないです。それだから芸は細かいのです。

学校だけで対応しないことも大切ですが、なかなかこの連携が難しい。ただ私のこれまでの経験上、私立の学校の方が公立の学校よりは、家庭との連携はしやすいです。要するに当たり前です。公立の場合は同じ地域に住んでいるから、同じ年齢の子の箱に入れられてしまったというケースが多いわけです。私立の場合には、この学校に行きたいと思って行ったというケースが多いですから、当然家庭との連携が、やりやすいケースは多いです。だから簡単かというところでもありません。さっきの三つのいいところを出したように、一度この子に対してうまくいかないという距離感を感じてしまうと、必ず家庭との距離感も生じます。そうするとモンスター化するという結果につながります。

現在の教育課題から

- できないところを「何とかする」のではなく
できるところを「伸ばす」
- 伸ばす経験の蓄積の中で
できない部分をのばす方向性を見出す
- 社会生活に必要なもの、必要でないもの
→ 日常生活で因数分解や二次方程式は？
→ 英会話は？

ですから、現在の教育課題の、これは公立より私立のほうがずっと楽なのですが、算数が例えば90点で、国語が70点だったら、算数90点で褒められるというよりも、この70点の国語、50点の理科をなどを算数並みにして欲しいと言われてしまいます。これだとうまくいかないです。実際に

算数ができて国語ができない子どもたちというのは当然のことながらいるわけです。そうすると算数90点取ると、「もう少して100点だね。次は100点目指そうね」と言っていると、算数の試験問題には文章問題も入るわけです。国語が苦手な子どもでも、文章を一生懸命に読まないでと解けないから点数を取れないわけです。そうすると例えば文章を読むのが苦手な子どもたちは、文節ごとにスラッシュを入れれば、それでも混乱しなくなったりもします。だからそれを国語の教科書でやるのではなくて、算数の教科書でやっているだけで、国語までついでにできてしまうことがあります。できるところを伸ばしていく過程で、できないところを引っ張らせたほうが、子どもは崩れにくいんです。だから伸ばす経験の中で、できない部分を伸ばす方向性を見つけましょう。

社会生活に必要なもの、必要でないものがあります。先生方も中学校で因数分解や、2次方程式を習っていますが、数学の先生以外は日常生活で、因数分解や、2次方程式はおそらくお使いにならないと思います。この辺が難しいのです。実際に、私の外来で、先程、小学校に40、50人入ると言いましたが、中学校も毎年30人くらいの数は入るのですが、発達障害を抱えている子どもたちには、中高一貫校を勧めていることが多いのです。実は首都圏でも、関西でも、そういう子どもたちを実際に積極的に受け入れている学校もあるし、そうでない学校もありますが、なぜそうするかというと、中学校の入学試験は2教科でも受けられるところが多いのです。4教科というところも多いです。高校に入るときに5教科になってしまうと、結構カバーできないほど凸凹が起きているために、高校受験で苦勞する子どもたちが多いのです。大学受験になれば、嫌な科目を取らなくて済むわけですから、何の問題もないのですが、高校というのは一番、ある意味で彼らにとって高いハードルになってしまうのです。中高一貫だと多少因数分解ができなくても一生懸命レポートを書けばなんとか単位はくれるけど、これで公立高校の試験を受けるとすると、できない科目に合わせて学校を選ばなくてはいけないので、非常に不利になるということがあります。

学校では集団対応と個別対応

- 発達障害を抱えていれば個別対応も必要
- 担任一人ですべてはできない
- 通級、補助教員などのマンパワーも必要
- なによりも学校での共通理解
- 担任任せは学級崩壊のはじまり

学校ではもちろん集団対応と、個別対応ですから、30人学級で30人全体に対応する必要があります。

ただし、発達障害を抱えていると個別対応も必要となります。担任一人ですべてはできない。だから何よりも学校での共通理解が必要になります。担任に任せてしまうと学級崩壊が始まる場合があります。学級崩壊の、あるいは学

校崩壊、学年崩壊に介入した経験から言うと、「担任に任せていたのですが、力不足でしたかね」と校長が言うことを聞いたときに、「そりゃ起きるよ」と思いました。分かりますね。当たり前のことです。学校全体の意識が共有できていなければ、学級崩壊は簡単に起きてしまうのです。

学校は学業を軸に進んでいく

- 学業の習得が基本的な任務
→生活能力や社会性の獲得も含まれる
- クラスできちんと学業を進めるためには
→落ち着いた環境づくり
→子どもたちの学業へのモチベーション
→達成感を味わわせるための教師の技術
- 学業が進む中で子どもたちが達成感を味わう
→そして次のステップに進んでゆく

学校は当たり前ですが、学業を軸に進んでいくところです。仲よしクラブではないので、学業をきちんとやるということが重要です。もちろんこの中に生活能力とか、社会性もあります。ですからクラスできちんと学業するためには、やはり落ち着いた環境づくりであり、子どもたちの学業のモチベーションであり、達成感を味わわせるための教師の技術です。「みんなこっちをちゃんと向きなさい」と命令をするよりは、手を上げさせたほうがいいです。特に小学生であれば完全にそうです。だから学期が進む中で子どもたちが達成感を味わうということが大切なのです。

クラスを一つにする

- 進んで行動する子どもたちを大切にしよう
→でも「落ちこぼれ」をもっと大切にしよう
- 連帯責任はNG:落ちこぼれが落ち込む
- 落ちこぼれをスターにする
→秘密の特訓、伸びた点数の順位づけ
- がんばらせないクラスづくり
- 楽しくモチベーションを維持するクラス作り

ある中学校でクラス担任が、「今度の体育祭で優勝するぞ」と言いました。それで、「じゃあ、みんな一生懸命やろう」と。それで実は優勝できなかったのです。すると担任の先生は、その子どもたちに聞いたのですが、「そうか俺があれだけ言ったのにできなかったんだな」と言ったそうです。どこがアウトか分かりますか。二つアウトがあります。最初に「優勝」。「このクラスで、何としてでも優勝するぞ」と言った時に、その担任は達成感を自分が味わいたかった。みんなで頑張って一生懸命やって、達成感を子どもに味わわせなくてはいけないのにです。

頑張るという言葉は私は使いません。「一生懸命やって優勝できたらすごいぜ、そしたら先生もうれしいんだけど」、これが正解です。さらに優勝できなかったときに、「できなかった」。「一生懸命やって3位だったらそれはそれで

もいいじゃないか」と、それで良かったのです。「次はもっとできるようにしようね」、これで良かったのです。「できなかったんだ、先生もがっかりしちゃったよ」、これは全然ダメです。こういうところがすごく重要なのです。だから子どもたちにどうやって達成感を味わわせるかということをもっと考える。クラス全体で達成感を味わう。だから確かに運動会でクラスが優勝すれば、あるいはソフトボール大会でクラスが優勝すれば、達成感は味わえます。

しかし、達成感は子どもたちが味わいます。クラスを一つにする時には、進んで行動する子どもたちを大切にすることは、大変大事です。クラスにとにかく、さっさと、先生方ご存じのように、リーダーを作ってしまうことは非常に重要です。リーダー的に行動する子どもたちを作ることが重要です。

それはなぜかということ子どもたちは、モデリング、その子どもを見て行動するようになってきますから、リーダーを作ることによってそれができます。

しかし、落ちこぼれは、宝です。また、連帯責任は絶対に駄目です。みんながちゃんと走れるようになるまでとか、あるいは、クラス全員でリレー。例えば遅い子がいます。君がもっと早く走ればクラスは優勝できるのに、だいたい連帯責任を取らせてどうするのですか。連帯責任は落ちこぼれが一番落ち込む、「俺のせいなんじゃない」。特にもう中学生、高校生になると、これは非常に多いのです。落ち込んだ落ちこぼれはキレます。だから落ちこぼれをスターにするのです。だから、例えば、クラス全員リレーを、最悪の場合、もしどうしてもしなくてはいけないと言うときは、その子が最初に走ればいいのです。その遅い子が。後でみんなでそれを回復するのです。できたら全員の達成感になります。しかし、その子を、例えば30人中25番目くらいにして、「お前が5人に抜かれちゃったからな」となると、これでは絶対その子にとってもよくないし、クラス全員の達成感などできない。だったら同じ5位になるにしても、最初に走った子が10位で終わったとしても、次から5人抜いて、「すごいじゃない」と。どちらが良いかわかりますね。だからこういうことが配慮されていない。私立はまだ良いと思うのです。でも公立ではこういうことが配慮されていなくて、そして子どもたちが阻害されてしまう。「頑張れ、頑張れ」と。頑張らせないことが大切なのに、楽しくモチベーションを維持することができるはずなのにどうしてと思うことが、実際には結構あります。対応がうまくいけばクラスは変わります。

対応がうまくいけばクラスは変わる

- その子だけを特別扱いと他の児童が感じない
→スペシャルケアは必要だが一般化も必要
- 一日5分x3のケアでも子どもは変わる
→家庭との共通認識が必要
- ダメなことはダメ・このルールは必要
→それを理解させるためのSST
- 一度に何とかしようとは思わない
→いつもスモールステップ

今までの経験からもそうですし、スペシャルケアも必要ですが、一般化していくことも大切です。1日5分×3、3分でもいいのです。例えば、立ち歩くケンちゃんが学校にやってきました。ケンちゃんとのスペシャルタイム3分、立ち歩くケンちゃんです。どのように言いますか。ケンちゃんに3分間最初何を言いますか。3分間しかないです。考えてしまいますね。当たり前です。考えるでいいのです。これは、こういうシチュエーションは予想してないから、やはり練習しないとできるようにならないのです。だから練習するのです。では「ケンちゃんに立ち歩かないでね」、「今日午前中立ち歩かない」と、駄目です。なぜ駄目でしょう。そもそも先生のところに呼ばれただけでケンちゃんは緊張しています。そこで「立ち歩かないで」と言って、立ち歩かないのだったら最初から立ち歩きなんかしないです。それでもやってしまうケンちゃんがいるわけです。だとしたら私たちはこういうときに、「ああケンちゃん今日は朝ご飯何食べた」と朝ご飯の話をし、「おいしかった」。それでアイスブレーキングです。少しほぐしていくわけです。ほぐす時間も1分半から2分まであります。

そのくらいほぐします。これも練習していないと、「朝ご飯何食べた」というような質問は硬くなってしまうのです。柔らかく、ご飯、食べ物の問題というのは大変質問しやすいのですが、これも練習しないとうまくいかないのです。そして最後に、最後の30秒を使って、「そっか。でさ、ケンちゃん、昨日はウロウロしてて、先生ちょっと困っちゃったんだけど、今日の2時間目の算数までじっと座ってくれてたら先生うれしんだけどな、お願い」。少しやってみたわけです。それで失敗してもいいのです。そうすると今度、中休みの時に、「ああでも1時間目で座っていただけですごいね」。これでいいわけです。だから決してその本題に、いきなりアプローチをかけない。これも練習しないとイケないのですが、そういうことがすごく大切です。もちろん駄目なことはだめです。これはきちっとしておかないといけない。だから「ケンちゃん昨日はウロウロしてたけど、先生ちょっと嫌な気持ちしちやった」というのは言う。「昨日はウロウロしてしてたけど、それは仕方がない」、駄目です。認めてしまったら駄目なのです。駄目なことは駄目です。やはり一度に何とかしようとしなないということは、繰り返してお話している通り非常に重要です。

特別支援教育

- 平成19年度から全国で実施へ
- スクール・コーディネーター
→各学校に配置し特別支援教育を担う
- 通級指導教室
→通常学級に在籍しつつ定期的に通う
→19年度は60000人と推定されている
→しかし対象児は600000人？
→何をどう指導するのか、必要なのは学力か社会性か、指導か受容かも明らかではない

特別支援教育も、部分的には平成13年度から文部科学省ではやっていたわけですが平成19年から全国実施になりました。スクール・コーディネーターが設置され、スクール

・コーディネーターが専属ではない場合には、ほとんど担任を持ちながらスクール・コーディネーターをやっていますが、なかなか効果が上がりません。

だから先程申しあげたように、通級指導教室も何をやるのか、何をどう指導するのか、学力が必要なのか、社会性が必要なのか、指導をするのか。これすらもまだきちんとしたガイドラインできていないとも言えません。その中で特別支援教育という言葉だけがどんどん進んでいるのです。

IEP、個別教育プログラム、これは発達障害を抱えている子どもたちに非常に重要で、学校にもよくお願いして作っていただいたり、あるいは学校でできない場合には私たちが少し作のお手伝いをしたり、あるいは民間の教育機関をお願いをしたりするのです。ご存じのように特別支援学級とか、特別支援学校では、作るとはルール化されています。実際に東京都内という、特別支援学級でも IEP を作っていないところはとても多いです。支援学校は大体作っています。なぜこれが必要かという、この IEP を作ることによって、その学期ごとの、学級学年の目標設定ができます。そうするとその目標設定に対して、何ができて、何ができなかったかという評価が明確になります。これを明確にしておく、次の年の努力目標ができます。何となく1年を過ごしてしまうと何が必要だったのかわからないのです。国語が例えばどこが悪いのか、もちろん読み書きから、文章理解から、長文理解からいろいろなところがあります。できないところはどこができるようにすればいいのかということを見極めながら、やっていくということが重要になってくるわけです。だからこのためにも IEP は必要です。

IEP(個別教育プログラム)

- 発達障害を抱える子どもたちには必要
→何ができて何ができないかを明確にする
- 特別支援級・学校では一般に作成されている
→学校の中でできることが中心
→その他の社会資源・家庭との連携は？
- 通常学級に行っている子に対しても必要
→場合によっては相談機関で作成する
- 学校が作成すると「できること」だけ

困っている家族、成人には

- 相談窓口を作る
→窓口は解決するためではない
→まずは話を聞くこと
→居場所の確保
→職業訓練などの社会資源の紹介
- 医療機関との連携
→とりえず受け入れてくれる場所を確保
→その先の問題は別に考える

困っている家族や大人たちがたくさんいるのですが、相

談窓口を作ることも求められています。いくつか公的なところもあります。今忙しいのであまりやっていないのですが、居場所を確保するとか、職業訓練をするとか、こういったところまでお手伝いするとか、医療機関と連携を進めるとかです。小学校、中学校、高校を出た後どうするかということを考える必要があります。それから、もう一つ今日のテーマではないのですが、高校をドロップアウトしてしまった子どもたちが相当数いるわけです。東京だと大体2%、学校によって違いますが、3年間でドロップアウトしていなくなってしまう子どもたちが5%から6%いるわけです。小中学校は義務教育ですが、高校は義務教育ではないので、そのあとどのように社会復帰するのか。社会にもう1回胸を張って出すようにするかということは、非常に重要な課題だと考えています。

原則として、私は中学校までに不登校歴のある子どもたちを、通常、例えば高校に、ボンと全日制の高校に入れるということはしません。それはもう半分以上うまくいかないことは見えています。ドロップアウトします。そういうことはしないで、サポート校を使うなど、いろいろな学校教育形態が今は増えてきています。少子化の時代になっては本当にそれが増えてきました。もちろん学校によっては、特定の学校名を出すわけにはいかなないですが、学校によっては来られない時はレポートで細かくサポートしながら、そして少し周りが気になる子は夏休みに何日か登校させ、それで出席日数を稼いでくれるところもあります。

税金で養われる人から払う人に

- 発達の遅れが適切な療育で伸びていけば・・・
 - 税金で養われる人を税金を払う人に
 - そのためには適切な療育と教育
 - 特別支援教育ももう一度考えよう
- 義務教育終了後の居場所作りはどうする？
 - 居場所がなければ「ひきこもり」に
 - 再チャレンジを支えることが
 - 税金を払う人、社会参加をする人を増やす

私の仕事は税金で養われる人から、税金を払うという人をどれだけ増やすかということが仕事の中心になります。ですから発達の遅れが適切な対応で伸びていけば、税金を払う人になりますが、ドロップアウトして引きこもりになってしまうと養われる人になってしまいます。例えば高校でドロップアウトして、そして引きこもりになってしまう。30歳なる、40歳なる。引きこもりの人とは、私はひきこもりにも介入していますが、時には35歳とか40歳になってずっとひきこもっている人たちも結構います。そうなれば最後は税金で養うしかないのです。職業能力も、社会生活能力もないですから。社会のことはよく知っていますが、現実の社会活動はできないのです。高校をドロップアウトしたときにどうするかということです。再チャレンジが日本の社会というのは、先生方のご存じの通り、とてもしにくいです。その選択をどう決めるかということが、非常に重要です。

当たり前ですが、成人の場所は働く場所です、ただ、我

われが自立するということ、税金を払う人になるということとは働くことになりますから、一般就労をとにかくどのようにさせるかということまで考えていきます。短時間就労とか、就労トレーニングも必要になることがあります。ただ実際に私たちが始めようとすると、短時間就労の、例えば掃除の仕事とかは高齢者に取られてしまうのです。なかなか発達障害を抱えた人たちに回ってこない。しかし上掲のように、昨年の4月ですが、今、障害者雇用をどんどん進めてきています。今からもっとレートが上がってきます。まだ2%というのは少ないようですが、こういうところから増えてくると思います。

成人の居場所は働く場所

- 成人の居場所はグループホームや福祉就労ではなく・・・一般就労が目的
- 短時間就労、就労トレーニングも必要
 - 高齢者が独占していることが多い
- 行政は障害者雇用を積極的に(4月に改正)

→民間企業	1. 8%を2. 0%に
→国、地方公共団体	2. 1%を2. 3%に
→教育委員会	2. 0%を2. 2%に

発達障害は育て方か

- 環境により症状の出現には差がある
- 二次障害の出現にも差がある
- 育て方により困難は増強も軽減もする
- しかし根本的には育て方で「障害」は出ない
- よりよい人生のためには環境の調整は必要

「発達障害の育て方か」とよく聞かれるのですが、例えば、今まで先生方がお聞きになってお分りのように、立ち歩く子が叱られまくって育つのか、ちゃんと褒められて行動改善しながら育つのか。それでも立ち歩きたいという欲求はどうせ消えないわけですから、どっちになるかによって違います。どういう育て方をするか、5歳から10歳までどういう対応をするかで10歳の時のその子の状況は全然違います。叱られてばかりでは当然の結果としてキレるになります。だからそういう素因があるわけです。育て方でそうなるわけではないのですが、環境調整とか、それから、対応の調整は必要になります。

個性かと言われます。これが一番困るのです。医療機関によっては「発達障害なんか個性だよ」と言われて、誤魔化されてしまうのが一番困るのですが、個性では決してないです。個性というのは、これは小林秀雄氏の言葉ですが、社会には枠組みがあって、枠組みの中で生きていく。だから車の運転が上手だ。すごく個性的な運転をする。でも個性的な運転をする人が、別に信号を無視して運転する

わけではないです。わかりますね。だから、そういう例えば交通ルールを守るという中で、個性的な運転はあるかもしれない。だけでも個性というものを尊重されるべきものだけでも、障害というのは、この社会の枠組みにボコボコ当たってしまって、うまくいかないから障害なわけです。やはりこの枠組みに当たらないような、いろいろなトレーニングをして、その中で発揮されれば個性です。だから発達障害イコール個性と言ってしまうと、何が問題かという、個性と言った瞬間に、きちんと対応しようというスタンスが消えるからです。対応すれば何とかなるものが、「個性だよ」と言って誤魔化してしまうと、そこはうまくいかないのです。だから「個性だよ」と言って誤魔化している医療機関もあるのです。それは対応の仕方を知らないというだけです。もう私もこの年になって、いくら敵にまわしても怖くはないので、本当にそうです。だから対応がきちんと言えない。「個性だよ」と言っているのは単に誤魔化しているだけだと私は思っています。

発達障害は個性か

- 個性は尊重されるべきもの
- 障害は理解し対応されるべきもの
- 障害を個性だと考えれば対応も将来もない
→対応すれば生活の質は上がるのに
→障害の中にも才能は隠れているのに
→障害を理解した上で対応し、個性を尊重

子どもを受けとめるということ

- 5歳でも、15歳でも30歳でも変わらない
- あいさつをすること、目線をそろえること
RESPECTが大切:君のことを知りたい…
森が見えなければ木も理解できないかもしれない…「和して同ぜず」が基本
- いきなり問題点に入らないこと
- 話すことを強いない、どうすれば話すあるいは意思を子どもが伝えられるか考える

子どもを受け止めるということも最初にお話したように大切です。5歳でも、15歳でも、実際30歳でも変わらないです。あいさつをする、目線をそろえる、これは対人関係の基本です。対人関係の基本は子どもたちであっても同じです。リスペクトが大切なのです。リスペクトというのは尊敬するではなく、尊重するということに思ってください。だから君のことを尊重するよということを態度で示せば5歳児で分かるわけです。10歳児でももちろんわかるのです。

「和して同ぜず」という論語の子路篇の言葉がありますが、子どもに親しみのある先生というと、すぐメダカの学校になってしまいます。メダカの学校より、スズメの学校

にしたいです。違いはわかりますか。メダカの学校はどれが生徒か先生か分らないです。スズメの学校は先生は一応、「ムチを振り振りちいば」、ムチを振るのはいいとは思いますが、先生はちゃんと主導権を持っているわけです。メダカの学校は生徒の中に埋もれてしまっている。だから和して同ぜずではなく、和して同しているのがメダカの学校なのです。ここは非常に重要なのです。やはり先生方は先生です。先生方はお金をもらって子どもに対応しているわけです。親はお金払って子どもを育てています。そこが違うわけです。

いつも聞くこと

- 好きな食べ物
- 嫌いな食べ物
- 好きなスポーツ
- ファンになっている芸能人
- 将来してみたいこと
- 楽しかった思い出

好きな食べ物、嫌いな食べ物、好きなスポーツ、ファンになっている芸能人、将来してみたいこと、楽しかった思い出、こういうことを聞きます。私の外来のカルテは、ほとんど1ページ目の最初にこういうことが書いてあります。全体像が必要なのです。外来で行う面接の仕事というのは、時々行き詰まったり、お互いに煮詰まったりしてしまって、話題が切れてしまうことが常に起こりうるわけです。しかしその時に、ラーメンが好きだということを知っていれば、「あ、先生この間ラーメン食べたけど、君最近ラーメン食べた」と、こういうことだと全然子どもたちは抵抗なくしゃべってくれますから、それでいいのです。つなぐことが大切な場合は結構多いです。好きなスポーツも、どんなスポーツが好きとか、それからやるのが好き、見るのが好き、こういうことも理解する。これは全体像です。好きな音楽とか、ファンになっている芸能人とか、こんなことも聞くのです。例えば女の子に聞くと、ファンになっている芸能人というのは、20年間、嵐がトップです。

嵐がトップですが、嵐の誰が好きというと、これはもうこの20年間に続々変わっているのです。最初の頃は相葉君で、それから大野君に代わり、今また相葉君が盛り返しているのです、男らしくなって盛り返しているのです。例えば「大野君が好きだ」。「大野君なぜ好き」、「優しくて話聞いてくれそうだから」という子どもたちが多かったのです。こんな市場逃しては駄目です。優しくて話を聞いているだけで、私は大野君になれなくても、この子は少なくとも逃げないということがわかるわけです。だからこういう質問というのはすごく大切なので、注意しながら聞いています。将来してみたいことというのは、これは実はものすごく重要な問題で、例えば不登校になっている子どもたち、将来してみたいことを聞くと、ほぼ答えは返ってきません。不登校になっている状況自体が、非常に心にとって良くないコンディションになっていますから、その子どもたちに将

来像、将来展望があれば不登校にはならないです。だから将来してみたいことはと聞いたときに、出てこないというときは、やはり「何かうまくいかなさ」をこの子は抱えていると、これだけで分かる。もちろんこれは親の対応もあります。漠然と高校に行って、大学に行つてとかと思つていとピンとでてこないことがあります。意外と、例えば4歳児とか、5歳児だと、将来なりたいもの。女の子だと、クレープ屋さん、ケーキ屋さん、プリキュア、最近はいカツです。そういうものがすぐ出てくるのです。しかし、中学生くらいになるとこれがガタツと落ちるのです。中学生くらいになると2割くらいは出てこない。高校生になると、高校などはそのあとすぐ社会に出る。あるいは大学に行くという状況になっていて、3割くらいは分からないとからです。あとで不登校のところでも少し言いますが、そのところをどうやってその意識を持たせるかというところも、実は治療的に非常に重要なのです。「将来何かしてみたいことあるか」と聞いて、「分からない」答えると、子どもたちに将来の目標ができるところまで持つていくのが我われの仕事なのです。楽しかった思い出というものもよく聞きます。例えば中学生で、楽しかった思い出、「何が楽しかった」。その子が例えば「幼稚園の時に、みんなで動物園行ったのが楽しかった」と話をしたとすると、きっと小学校時代はうまくいかなかったのだなということが、その瞬間に分かってしまいます。そうするとその時点では小学校時代のことを聞く必要はありませんが、あとで重要になってくるかもしれません。このように子どもとの話からはいろいろなことがわかってきます。

子供扱いしない

- まだ子供だから
→いつから大人になる？
- 子供だからしかたがない
→いつになれば一人前と認める？
- 子供の言うことだから
→いつになれば信用する？
- 子供の視線で見る
→目の高さで見える世界は異なる

もちろん子ども扱いもしません。結局、子ども扱いしていると、その子どもたちは、子ども扱いされていると感じます。しょっちゅう子ども扱いされていると「何だ」と感じるのです。上から目線を感じます。当たり前です。私たちも日常生活で上から目線になった時、「何々しなさい」、「何々しちゃ駄目」などと命令形、禁止形になるのです。命令形、禁止形よりは希望形の方が良いという話を最初にしました。結局は子どもたちが指示に従って動かなくなりがちです。だから上から目線で見るのは、長い目で見ると不利なのです。そういうことを私は子どもたちを見ながら、勉強させられました。

では、ここで発達障害の問題ですが、ADHD のケンちゃんは桃が好きで、ピーマンが嫌い、嵐のファンです。これが上の場合です。桃が好きで、ピーマンが嫌い、嵐のファンのケンちゃん、だけれど ADHD だよ。どちら

がいいですか。明らかに下です。だからこの下の意識でいかなければならぬ。ADHD ということが先に来てしまったら駄目だということです。

どちらでしょうか

- ADHDのケンちゃんは桃が好きでピーマンが嫌い嵐のファン
- 桃が好きでピーマンが嫌い嵐のファンのケンちゃんがADHDを抱えている

NEVER!!

- 問題点にいきなり入ること
→問題点はしばしば「触れられたくない」
- 善悪の判断を述べること
→多くの場合には子どもたちにもわかっている
- 結論を急ぐこと
→話を聞いてもらったと子どもが感じるのととても大切・それなしの結論はうまくいかない
- 心にもない同意を同情をしないこと！

問題点にいきなり入らないということも非常に重要です。面接をしている時に、子どもたちは問題行動について、非行の問題あるいは若年妊娠の問題だけはいきなり問題点に入らないと時間がないケースが多いから別ですが、それ以外では基本的に問題点は触れられたくないのです。言いたくなったら、言えればいいのです。もう一つ、学校で、医療の場でも、家庭でも実はそうなのですが、善悪の判断、それは良いこと悪いことという判断をしてしまうのです。確かに小さい子どもたちは別ですが、小学生、中学生になれば、ほとんどの場合、子どもたちは良いか、悪いかわかっているのです。だから、問題点とか、善悪とかは子どもたちに語らせればいいのです。例えばタバコを吸っている高校生がいて、「お前タバコなんか吸っちゃいかんだろう」。「いかん」のは、知っているわけです。知っているけれども大人の背伸びして吸っているだけなのです。

そういう時に、「たばこ吸っちゃ駄目だろ」と叱るよりは、「やめられなくなったら困るぞ」と言ったほうがよほどいいです。わかりますか。その辺が技術なのです。分かっているのですが、やはり結論を急ぐ。「どうしてたばこ吸っちゃったの」。「たばこ吸っちゃったの」、「吸わない」というふうに彼らが考えるのであれば、自分たちで結論を出さなければ駄目です。特に高校生ですと、例えば、私立の統計は私は持っていないのでわからないのですが、都立高校ですと、子どもたちの大体男子高校生で、15人に1人は、1週間に1回以上タバコを吸っているわけです。5%から8%くらいです。そういう子どもたちがいっぱいいるわ

けですから、その子どもたちに「さっさとタバコやめなさい」。それでやめるのか。そんなにうまくいかないです。だから例えば禁煙パッチを使って、やめなければいけない子どもたちもいます。結論を急ぐということは勧められません。

ADHD

- 一次性の症状
→不注意性、衝動性、多動性
- これらの症状により社会生活に困難がある
- 2つ以上の場面で6か月以上続いている
- 12歳以下に症状が明らかになる
- 二次性の症状
→行動上の困難、交友関係の破綻、自尊心が低い、学業不振

ここから発達障害になります。ADHD は一次性の症状として、不注意と、それから衝動性や多動性の症状があって、社会生活に困難があります。二つ以上の場面であります。それから去年診断基準、それまでは7歳以下だったのですが、12歳以下で症状が出るというように変わりました。不注意型がなかなか見つからないからです。2次性の症状としては、行動上の困難、交友関係の破綻、自尊心が低い。学業不振になる。授業聞いていないから当然そうです。

不注意の症状

- 集中できない、注意がそれる
→スモールステップ化してできたらほめる
- 努力することをいやがる
→スモールステップ化してできたらほめる
- 忘れ物が多い
→連絡帳の活用、メモの習慣
- すぐにものをなくす
→不必要なものを持たない

まず不注意の症状があります。集中できない、注意がそれる。だから ADHD ではないです。だったら1分間ずつ注意ができたなら、「これちゃんと見てて、この間にこれやろうね」と指示して、1分間できたら褒める。スモールステップ化して小刻みにして、できたら褒めれば、こういう症状も結構何とかなるのです。それから努力することを嫌がる。例えば宿題をすることを嫌がる。よくありますね。毎日5ページのドリルをとりあえず1ページで、そしてできるところとかを努力させます。ほめられるから努力する。1ページできたら褒めるということを続けていけばいいわけです。忘れ物が多いというのは、連絡帳を活用するか、メモのつける習慣、大人でもそうです。しかし、ADHD を抱えていると、しばしば連絡帳そのものを忘れてくるのです。連絡帳を忘れてくるのでどうにもならないか。そんなことはないのです。連絡帳とランドセルに両方にカラビナをつけます。カラビナをカチャっとはめます。そして帰

る。子どもたちはあのようなガチャっとはめるものが大好きです。そうするとそのカチャンの音が聞きたいがために連絡帳忘れるということがなくなります。そういうちょっとした工夫だけで連絡帳を忘れるということはほぼ皆無になりますから、このようなこともすればいいのです。それから忘れ物が多い人、すぐに物をなくすというのは、大人でもよくあるのですが、必要な物までいっぱい持っているというケースが大変多いです。必要なものだけ持つてくると意外となくしません。

特にものをなくす人は、私の外来に来る大人もそうですが、単に外来にくるのに、バッグを二つも持つてくるのです。「なぜあなたはいっぱいのバックを二つ持つてくるのですか。電車で忘れたことないですか」というと、「あります」と言うのです。「何が入ってるの」と聞くと、辞書とかいろいろ入っているのです。何か調べたいときがないと不安で、とか言っています。メモをして家で調べればというように言って、その方はそういうふうになりました。

衝動性の症状

- 話や列に割り込む
→だまっていられない、一番がよい
→砂時計：がまんして「ほめられる」
- 突然行動を起こす
→行動の原因を考える
→問題となる原因をへらす
- 衝動的に手を出す
→原因と状況を考えて「ほめて消す」

衝動性の症状も持っています。列に割り込むとか、会話に割り込む、よくあります。黙っていられないとか、一番がいいとか、こういうのはよくあるのです。我慢させて、褒めるということになります。だから話に割り込む、先生が誰かと話していると、すぐ割り込んでくる子がいます。その時に「ちょっと待って、今、アイちゃんと話しているんだから」ではないのです。「じゃ、ケンちゃんちょっと見て待っていてくれる？そしたら、先生ケンちゃんと話すから」。これでいいわけです。そうしたら、ケンちゃんが、見ながら待っていて、そして、褒めてちゃんと話してもらえらる。そうではなかったら、叱られて話してもらえないかもしれないわけですから、全然状況が違うわけです。

それから例えば、小学校でよくあるパターンですが、コロコロと鉛筆を落とした。ケンちゃんは気がつかない。後ろのマリちゃんがトントンと肩をたたいて、「落ちたよ」と言おうとしたら、ケンちゃんはいきなり叩かれたと思ってパンチをしてしまう。こういうことも多いわけです。これはどうすればいいか。トントンと叩かれたら、「なんで」という習慣をつければいいわけです。これも授業という、そういう場でつけてしまうと駄目です。だから、ケンちゃんを呼んできて、「先生が肩トントンとするから、こっち向いて」、「なんで」、という練習をするわけです。今度はケンちゃんに叩いてもらう、先生が、「なんで」という。「なんで」という一言があれば、そこで説明を聞くから大丈夫なのです。そういうふうを考えるのです。

もう一つ、例えば、絶対勝たなきゃいけない、負けてしまうとすぐギレてしまう子どもたちがいます。外来でもそういう子どもたちがよく来るので、そうするとジャンケンポンをやります。ジャンケンポンをやって負けたら、「まあいいかっ」という訓練をします。私も負けたら、「まあいいかっ」と言うわけです。5、6回「まあいいかっ」と訓練をする。そういうことでいきなり全部は消えませんが、いきなり全部は消えませんが、完成しています。突然行動を起こす、行動の原因を考えるということです。

だから問題となる原因を減らせればいいことが圧倒的に多い。例えば前にいる子どもが、騒ぐと、そこで席を変えればいいわけです。ただし、よく言うのですが、衝動的に動く子どもたち、多動になる子どもたちを一番前の席に座らせればいいのかというのは、最初はそれでいいのです。でも一番前の席に座らせたときに、一番前のセンターがいいと言うけれども、それをやっている限り子どもたちは次のステップに進めないのです。最初はそれでコントロールできたら、次は2番目がいいのです。2番目にして、一番前にグループリーダーを置くのです。そうするとその子を見て動くようになります。誰かの行動を見て動くということ、子どもたちにとって絶対に集団生活で覚えなければいけない。我われだってそうです。集団で行く時に、誰かが何かを指示した時に、わからなかったらみんなの動きを見て一応真似をします。同じ事が子どもたちにも必要なのです。だからそのようなことが必要です。

多動の症状

- 注意をしても止まるのは「その時」だけ
- じっとしているのが苦手
 - 坐っていてもすぐにもじもじ
 - 1分座っていたら「ほめる」から始める
 - 小さなお手伝いをさせてほめる
- 動き回る
 - 本の読み聞かせでも歩き回る
 - 1分座っていたらほめて時間を延ばす

たとえばADHDのパワー

- 疲れを知らない、動き回るパワーは、すごい
- 過活動性がしばしば見られる
- 凡人にはまねができない
- そのパワーが授業中に発揮されれば・・・障害
- そのパワーが職業に生かせれば・・・才能
- 障害を才能に変えるのは行動療法

多動の症状。注意して止まるのはその時だけです。じっとしているのが嫌だったら、1分間座ったら褒める。小さなお手伝いをして褒める。お手伝いまでついでに付けちゃうと、動き回るのも同じようなことをしていけば、だんだ

ん減らすことができるということになります。

ADHD では、過活動性があることが多いので、とてもではないけど、パワーがすごいです。あんなに動き回る真似などできないです。我われも立ち歩けといったってあのような真似はできないです。パワーが授業中に発揮されれば障害ですけど、職業に生かされればいいわけですから、やはりそれは将来的にどうやって行動をうまく変えるかということになります。

ADHD: その将来は？

- ADHDを抱えていると、動き回ったり気分を変えてゆくことが得意→まるで二人乗り自転車
- じっくり取り組むことは苦手
- 得意な職業: セールスマン、営業担当、電話勧誘、マスコミ関係、窓口業務、案内係りなど
- 不得意な職業: 技術・設計関係、著述業、教師、警察官、音楽家、プログラマーなど

二人乗りの自転車に例えるのですが、才能の部分は二人の息が合えば、一人の自転車より早い。でもバラバラになると前に進まないから、これが障害になるのです。一般的にじっくり取り組むのは苦手ですが、セールスマンとか、営業担当とか、電話勧誘とか、切り替えが必要で、活動性が必要な仕事は向いていることが多いです。新聞記者も向いている人たちが多くですから、彼らの活動性はすごいです。疲れを知らない活動性と私は言っていますが、すごいです。反面、技術設計関係とか、物書きとか、教師。生徒より先に先生がウロウロしていたら、洒落にもなりません。しかし教師にも ADHD を抱えて先生方が私のクライアントにも何人かいることはいます。時々来て言いたいことを言って帰ってくださいとお話しています。そうすると恐らく3カ月くらいは大丈夫です。賞味期限3カ月くらいは先生をうまくやれます。時々そうやってガス抜きをすることがあります。

学習障害(学習困難)

- 知的には異常がないのに学習課題に困難
- 以下のパターンがあるとされている
 - 読字障害
 - 算数障害
 - 書字表出障害
 - その他の障害(多くは複合型)
- 知的障害、高機能自閉症、ADHDなどとの区別がしばしば困難であるし合併も多い

学習障害。これが非常に大きな問題です。学習障害というのも程度の差はあれ、相当数います。大体、今、人口の20人に1人は少なくとも学習障害だろうと言われているのですが、全然診断もされていないケースが大変多く、知的

には異常はないのです。学習障害を疑う時の最初のポイントは、わざとスライドに書いていないのですが、これだけです。会話に問題がない。会話の能力に問題がないのですが、成績が上がらない時には学習障害を疑え、これが原則なのです。国語であれ、算数であれ、同じです。

学習障害で最も多いのは・・

- 発達性読み書き障害(ディスレクシア)
 - 読みの障害: 音韻障害が見つかりやすい
「かえる」を反対から言わせて見よう
 - 書きの障害: 複雑な図形の書写ができない
「龍」を写させてみよう
- 算数障害
 - しばしば空間認識の障害もある
2+3 5+3 8+3 11-4

学習障害で一番多いのは発達性の読み書き障害というディスレクシア。これは、例えば、国立リハビリテーションセンターの DAISY のプログラムを使って、読んで聞かせる教科書というのがどんどん出てきます。トレーニング道具は、例えば、鳥取大学の小枝研究室のホームページから、トレーニングステップを取ることもできます。読みの障害があるのです。だからうまく読めない。そうすると、普通は音を構図する障害がありますから、こういうのもすぐ分かってしまうのです。

「カエル」という言葉があります。「逆から言ってごらん」。このように音を構成する障害がある子たちは、「ルエカ」ではなくて、「ルカエ」になってしまうのです。うまく音韻をコードできない。ルが一番下にあるのがわかっていても、その次「エ」ではなくて、その次「カエ」と言ってしまうのです。「ネコと言ってごらん」というと、「コネ」なのですが、これも難しいことがあります。こんなことでも結構見つかります。そして実際に読み書き障害がある場合には、弱視用の教科書、コピーをして、大きくして弱視用の教科書を使うことが多いのですが、弱視用の教科書を使っても、読んでいて途中で行飛びが起きてしまうのです。次の行にいたり、2行下にいたりするから何を読んでるか分からなくなるので、その場合には、定規を使うとかいろいろなことをしなくてははいけません。書きの障害は、読みの障害があれば、程度の差はあれ、書きの障害はです。書きの障害があるかどうかというのは、例えば、難しい字の「龍」という字を書かせる。真似をさせると、書き順を誤ると横棒2本が1本になったり、2本が3本になったりということで結構簡単にわかります。算数障害も時々あります。しばしば空間認識の障害もありますが、例えば「2+3=5」。指を使ってもできます。頭の中に指を入れておく。「5+3=8」、「8+3は」と聞くと、少し考えて、やっと「11」。「じゃあ、11-4は」というと、ほとんど算数障害では、「15」と答えるわけです。ここで加減の変換ができない。このようなことで結構わかるのです。算数障害(ディスカリキュリア)は結構大変なのです。ある程度電卓を使うとかは必要かもしれません。

バールーペというものがあります。棒が1本入っていて、

この赤線で行を分ける。そうするとこの



行だけが、拡大されるのです。字が大きくなります。これはインターネットで1本800円くらいで買えます。こういうものを使うと行飛びが起こらないのです。これだけのアシストで、もう断然にうまくいくのです。だからこんなことも少しアシストしてあげればと思います。

学習障害の治療・対応戦略

- 何でも「普通に」には限界がある
- 読字障害: 拡大コピー、定規、読み聞かせ
- 書字障害: ワードプロ、パソコンの使用
- 算数障害: 電卓、パソコンの使用
- 特定教科ができないことが、高校までは支障を来たず・・大学から先は来たさない

学習障害への対応戦略というものは、何でも普通にやりなさいといっても、結構限界があるので、先程言ったように、読む障害があれば拡大コピーをするというのも一般で、弱視用の定規を使うのも一般的ですが、読み聞かせをもっと活用する。結局、読む障害があると何が問題かということ、早く見つけなければ駄目な一番大きな理由は、読むのが嫌いになると語彙が増えないのです。語彙が増えないから、成績が落ちてしまうのです。社会適応能力を無くすのです。ご存じのように小学校に入ったときの子どもたちの語彙というのは1,000から1,500あります。小学校を出るときは5,000から6,000あるわけです。この間の増える語彙のほとんどは目から入っている語彙です。5歳までの語彙はほとんど耳から入っている語彙です。目から語彙を増やすことによって、飛躍的にスピードが伸びます。それを彼らは経験することができないので、そのために苦労してしまうのです。だから早く見つけて、早くアシストして語彙が落ちないようにする。言葉で言うだけでも良いです。読み書きが苦手な子に、国語の教科書を読むのが苦手な子に、国語の教科書がなくてもいいのです。我われはどういうことをするか。例えば、ポケモンの攻略本を写させたでもいいのです。ポケモンの攻略本を一生懸命見るのであればそれでもいいのです。そうすると戦略とか、統率とか、普通出てこない単語をすぐ覚えてしまうのです。それでいいのです。そのように少しずつでも読むということに慣れていくということがすごく重要なのです。だから大切なのです。

書字の障害。書字の障害はすぐに分かります。字がバラバラになります、大きさがバラバラです。書字の障害を見る時は、何の罫線も引いていない紙に、ボンと字を書かされると、大小バラバラだったり、誤字や脱字が入ったりします。でもそこで書字障害だよねということを言っても仕方ないのです。そうであれば、升目のある紙に書かせればいいわけです。例えば、ご存じのように小学校1年生では、2.5センチから3センチ角のマスに一つの文字を書きます。しかも4分割できるように、点線まで入っています。4

年生になると8ミリのマスに字を書かなければいけない。だったら4年生でも、もう一つ手前の1.5センチの枠だったら、うまく書けるということはいくらでもあるのです。だから、書けないからと叱るのであれば、そのように工夫して書けるようにしてあげるだけで、すごく楽になります。そういうことです。

本当に特定教科ができないと、高校までは、特に最初に申しあげた高校受験に非常によくない支障をきたします。大学からは、あまり関係ないです。だからきちんと診断をしてあげないと、こればかりは無理です。

学習障害への対応

- まず「きちんと」診断すること
- 保護者に子どもの病態を理解させること
- 子どもにとって必要なこと必要でないことを見分ける
- 適切な教育的アプローチをする
- 子どもに社会性を身につけるよう整備する

学習障害への対応は、きちんと診断し、保護者に理解させ、子どもが何で困っているか、何が必要かということを見分けることです。そして適切な教育的なアプローチをして、社会性を見つけるとか、語彙をつけるという訓練をします。

自閉症スペクトラム障害

- Kannerの自閉症
 - 1943 Leo Kanner
 - 多くは言葉の遅れ、知的障害と考えられる
 - しかし療育的対応によって変化が
- 高機能自閉症
 - 1944 Hans Asperger
 - 言葉の遅れはないかあっても軽度
 - しばしば二次障害で発見される
 - Social Skills Trainingが重要

自閉症ですが、自閉症はカナンの自閉症という古典的な言葉の遅れ、1943年にレオ・カナナーが報告した言葉の遅れがあります。高機能自閉症、知的に障害のない自閉症は1944年にハンス・アスペルガーが報告したので、アスペルガー症候群と呼ばれています。

自閉症に対して、今まで多くの医療機関、高機能であれなんでもそうなのですが、診察をして病歴を聞きます。しばしば子どもをきちんと見てないのですが、脳波をとって、MRIをやって、血液検査をして、こういうことをやる。それはいいのですが、診断はするけど、治療的対応はないよということで、診断で終わってしまう医療機関が圧倒的に多いです。2次障害があれば投薬はしますが、2次障害がなくても薬を使ってしまう医療機関もあります。だから、診断をする、どうすればいいか知りたい保護者に、ノーア

イディア、何も教えてくれないということがよくあります。

自閉症へのこれまでの多くの対応

- 診察をして病歴を聴取する
 - しばしば子どもの観察は不十分
- 脳波、MRI、血液検査など
 - 器質的疾患を考えて検査する
- 診断する
 - 治療的対応がないと考えれば様子見も・・・
- どうすればいいかが知りたい保護者には
 - しばしばno idea

診断をするより、何が生活に困っているかを考えます。必要があれば検査しないわけではないです。例えば、自閉症があれば、てんかんの合併症で、普通の人口よりは何倍も多いですから、少しでも疑わしければ脳波を取るとかします。やはり生活上の問題と、将来的な目標設定は進みます。それから、実際の問題点にあわせて対応を考えるということです。これは先生方ですから、当然お出来になることを今、お話しているのです。

自閉症にこう対応してみたら・・・

- まずは診断をするより何が困難かを考える
 - 必要があれば検査もする
- 診断名ではなく実際の生活上の問題を把握
 - 将来的な目標も聴取する
 - 無発語＝知的障害とは限らない
- 実際の問題点に合わせて対応方法を伝える
 - 改善状況を見ながら課題設定を変える
 - 場合によっては療育の専門家の手を借りる

高機能自閉症 Asperger症候群として報告された

Hans Asperger 1944 知的には劣っていないが
→会話がうまくつながらない、指示が通らない
→友達ができない、うまく遊べない
→何かに熱中しはじめると止まらない
(非言語的コミュニケーションの問題)
1. 身振りが少ない、相手の理解できない
2. 表情が乏しい、理解できない
3. 表現が場に合わない

高機能自閉症(アスペルガー)では、一方的にしゃべる、熱中し始めると止まらない、身振りが下手、表情が乏しい、表現が場に合わない。しかし将来的には、コミュニケーションが下手だけれども、正直で、まじめで、率直で、正義感が強いという長所は持っているのです。ただ、この正義感はいわゆる正義感なので、これでトラブルを起こすケースが非常に多いのです。

高機能自閉症で、私が診ている子どもで3人同じことをやったのです。例えば、消しゴムを隠された、10円玉を取られた。そうすると相手ののど元にはさみを突き付けたという行動は3人にとっては同じことなのです。当然、消しゴムを隠すという行動と、はさみを相手ののど元に突き付けるといふ行動は、イコールではないです。でも彼らにしてみれば、「先にやったのはあいつだから、俺は」というように考えてしまう。実際に彼らの犯罪というのはいくつかパターンが非常に多いので、ここは要注意なのです。そういうところをきちんと教えていく。だから我われが、例えば、知的には問題ない子どもたちに、そういう時どうやって教えるかというところ、「100円取られたら1万円取ってしまえばいい、おかしいよね」。こうやって具体的に言えば、はさみと消しゴムでは分からないのです。だからこういうことから、100円取られたら、100円取り返すならいいけれども、1万円取ってしまうとまずい、このように教える。それだけでいいです。

高機能自閉症:その将来は？

- 高機能自閉症では、コミュニケーションが下手なかわりに、正直、まじめ、率直、正義感などが長所
- 向いていない職業としては
 - 営業マン(特に訪問販売など)、店員
 - 窓口業務が主な公務員、銀行員など
- 向いている職業としては
 - 技術者、音楽家、芸術家、棋士、コンピューター関連(SE、インストラクターなど多数)、研究者、教師、警察官・自衛官、介護、動物関連

だから向いてない職業は営業マンとか、先程の ADHD と真逆です。合併しているケースもあり、その場合は少しややこしいです。技術者、音楽家、芸術家、それから囲碁や、将棋のプロにも結構います。コンピューター関連では、システムエンジニア、インストラクターとかたくさんいます。教師は非常に専門性の高い、高校以上の教師です。その他に警察官、自衛官はやってはいけないことと、やらなければいけないことが非常にはっきりしているの、割と向いている職業ですし、介護、動物関連はなぜか分からないけれども、結構向いている人がいます。

自閉症グループの場合には、社会不適切相互作用、社会性の障害がありますから、人と関わるのが苦手で、例えば目を見るのが苦手だ。だから自閉症だ、ではないのです。目を見るのが苦手なために、相手の顔を見て話ができないために、社会生活をうまく送れない大人たちがたくさんいます。今、先生と私が目が合っているように感じていると思いますが、私は先生の実は鼻を見ているのです。鼻を見ている、1メートル以内まで寄らないと分からないです。だから我われは、そういう人が来たら鼻を見るトレーニングをするのです。そうすれば、相手の顔を見ていられる、それで十分なのです。そのようなこともやります。手をつなぐとか、体に触るのが苦手。学校でよくあります。「はい、じゃあみんな手をつないで」、小学校などは必須です。でも、つなげないわけです。「サッサと手をつなげ」ではないです。先程、皆さんはハイタッチやりました。ハイタッ

チを今度は止めるのです。5秒止める、10秒止めて、下にそのまま回す。ハイタッチをできない子は、まずほとんどいないですから、そこで止めて、一遍にやらず、スモールステップ化してやっていって、10秒間下に持っていけば、手をつないで、「ああ、できたね」になっているのです。

社会性(社会的相互交渉)の障害

- 人と関わるのが苦手
 - 目を見ること、視線を合わせるのが苦手
目を見ていてと錯覚してもらう
 - 手をつなぐ、体に触る・苦手
短時間から慣らす
 - 同時に何人かに対応する・とても苦手
順番に対応する
- 急な変更に対応できない
 - 予定の急な変更・あらかじめわかるように

同時に何かに対応するのが苦手だったら、同時にではなくて、順番に対応すればいいわけです。それから、急な予定の変更に対応できなければ、なるべくスケジュールを可視化しておけば良いだけの話です

コミュニケーションの障害

- 言語的コミュニケーション
 - 話す、聞く(音声言語)、読む、書く(文字言語)
音声言語からが基本、無理なら文字も使う
- 非言語的コミュニケーション
 - 表情や声を理解する、視線を合わせる
身振りや手振りを理解する
カードやシンボルを使う、言語で説明する

話す、聞くという音声言語と、読む、書くという文字言語があります。一般的には音声言語から始まりますが、文字言語とうまく組み合わせながら、高機能自閉症で、読む、書くはよくできるけれども、話す、聞くが苦手な子は、逆にそちらを伸ばしていくと、今度そこで音読をさせていくことによって、話す、聞くにフィードバックされることがあります。言語的なコミュニケーションが苦手な子はカードにシンボルを付けばいいわけです。想像力の障害がある子どもたちは、ここはどんな場所か理解できないから、すぐにテンションコントロールができません。中休みで校庭に出て、入ってくるとみんなはテンションが下がるのに、下がらない子どもたちがいます。そういう子どもたちにはどうするか。カウントダウンを教えます。「先生が3、2、1、0と言っていって、0になったら静かに手を下にしようね」ということを言っとく。外に出て、入ってきて、「3、2」と、口で言うほうがいいのです。自由に感覚が調整できるから。そのようにすると、「0」。「ああ、0で座れて良かったね」、タッチ。これでいいわけです。

相手がどう感じているか分からないから、一方的にしゃ

べることもあります。小学校2年生で友達のお母さんの家によばれた。いきなり、「おばさん太ってるね」、出入り禁止。こういうときに我われが考えるのは、そうではないのです。「おばさん太ってる」というのは、どうせ言うのです。それはもう、いいのです。だとしたら、「おばさん、こんにちは」。「おばさん、今日はよんでくれて、ありがとう」。「おばさん、太ってるね」。これで、出入り禁止にならない。これは技術です。こういうことが大切です。こういうことを子どもたちに教えるのです。このように教えて、できれば褒めればいいわけです。そうすると一方的に言うとか、相手がどう感じているかわからない。だから、「ああいう人にこういうふうに言っちゃ駄目なんだよ」ということ。それから例えば道を歩いていて、「あの人びっこ引いてるね」と大きな声で言うってしまう子どもたちがいる。そうすると、その子は当然まずいです。そういう時はその子たちにはどうするかというと、「何か言いたくなったら、まずママにこっそり教えて」そう対応するだけでいい。そうでなければ、「言っちゃ駄目」と叱られなければいけない子どもたちが、「あ、教えてくれてありがとう」。これでいいわけです。「これがあるからこういう自閉症ですね」ではないのです。ほとんど対応できます。「見ればわかるだろ」ではなくて、注意すればいいことになります。

想像力の障害

- ここはどんな場所なのかが理解できない
→ 静かにしている場所？ 騒ぐ場所？
→ テンションコントロールにはカウントダウン
- 相手がどう感じているかが理解できない
→ だから自己主張が強いと思われる
→ 話す順序を学習する
- 見ればわかるだろう・・・わからない
→ 見なければわからない・・・適切な指示が必要

不登校とQOL、self-esteem

- 不登校で長期的なQOLは上がらない
- 不登校で長期的なself-esteemも上昇しない
- 下げのを止める場合もある
→ いじめによる不登校
→ 行き過ぎた指導による不登校
- 一時的に上がったように見えるが結局下がる
→ 怠けによる不登校
→ 学業不振による不登校
- だから不登校には介入が必要

不登校とセルフエスティームについては、不登校は先程から言っているように、不登校をしていて、不登校の状態が非常に幸福で、この状態が最良だと思っている子どもはほぼゼロです。例えばいじめによるとか、行き過ぎた指導による不登校であれば学校に行かないということで、一時的にはセルフエスティームは上がります。あるいは、怠けによる不登校とかは、学校に行かなくてよい、勉強しなく

てよいということになれば上がりますけれども、結局下がってくる。ここが一番問題なのです。学校に行かないことは悪いことではないと言ってしまふ医者が結構いたりするのですが、学校に行かないことは悪いことなのです。社会生活をうまくしていかないので駄目なのです。この一言で子どもたちをつぶしてしまっているのです。子どもたちが学校に行かないという状況を、まずいと思っています。

「悪いことではないよ」と、不登校を勧めてどうするのだと私は思うのですが、そのように言う大人たちが非常に多いです。

不登校への対応の原則

- 学校へ行かない＝悪いことではない・・・本当？
→ 多くの子どもたちは現状を良くないと感じる
- 学校へ行かない＝大したことはないではない
→ そのままではself-esteemも低下する
- 行かせるためには、さざ波が必要
→ 繰り返し、小さな刺激。行事もきっかけになる
- 不登校はしかたがなくても
→ おバカになるのはダメ

学校に行かないのは大したことじゃない、ではない。大したことなのです。行くことになっている子どもたちが、学校に行かない。学校に行けない、これは大したことなのです。行かせるためには、小さなさざ波が必要です。不登校になるのは仕方がなくても、おバカになるのは駄目と私ははっきり言っています。

すぐに学力差が出ます。特に小学校4年生以上になると、2週間不登校をしていると学力差が必ず出ます。その学力差をどうやってカバーするか。同時にすぐに考えないと、3カ月、4カ月たってからカバーするともものすごく大変になってしまいます。だから、不登校になった時にすぐ、2週間、ある先生は3日とおっしゃった先生もいらっしゃるんですが、最低でも2週間たったら、すぐアクションを起こしていかないと、おバカになってしまい、そうすると今度学校に行っても分からない。また行きたくない。こんな悪循環にはまります。

発達障害の不登校問題: 現状

- ADHDでは「いじめ」「学業不振」
- 高機能自閉症では「いじめ」「孤立」
- 学習障害では「いじめ」「学業不振」
- いじめの問題は避けて通れない
- 不登校になる率は高く、高機能自閉症ではひきこもりにつながりやすい

発達障害の不登校問題は、ADHD ではいじめと学業不振から、高機能自閉症ではいじめと孤立から、学習障害ではいじめと学業不振から起こります。だから、いじめの間

題は避けて通れないのです。今、不登校は結構多いし、高機能自閉症は結構引きこもりになっています。

発達障害の不登校問題: 対応の原則

- 学校生活での問題点を明らかにする
 - 学校との話し合いが欠かせない
 - 学校が発達障害を理解するとは限らない
- 問題点に対するsocial skills training
 - 問題点を整理して対応を考える
 - 時には診断の告知も必要となる
- みんなと同じようにできないこと
 - みんなにはできなくても自分にはできること

ですから学校生活での問題点を明らかにするということは、非常に重要です。学校に発達障害を共通理解していたかなければならない。「一緒に考えたい」と言ってくれる学校はまだいいですが、「発達障害、ああ分かりました」と言っている学校は、今までの経験からほとんど信用できないと私は思っています。

それから問題点に対するソーシャルスキルトレーニングがあります。例えば、不登校、いじめ共通ですが、いじめられる子どもたちが「おはようございます」と言った時に、下を向いてボソボソと「おはようございます」としか言えない子どもたちは、例えそこでいじめを止めたとしても、2年後にまたいじめに遭う可能性が高いです。そうであれば、その子たちにソーシャルスキルトレーニングをする。相手の顔を見て、はっきりと「おはようございます」と言うトレーニングをすればいいわけです。小さな声で「おはようございます」と言っていたとしたら。例えば、「おはようございます」というのは1の声、「おはようございます」は2の声。「おはようございます」は3の声というように、声のボリュームにランクをつける。そして「じゃあ、こういう時に相手の顔を見るときは2の声で言おうね」というようにしていけば、できるようになります。これは2、3カ月かかります。下を向いている子どもたちよりは、相手の顔を見てはっきり、「おはようございます」と言える子どものほうが、いじめられにくいというのは当たり前です。だからみんなと同じにできなくても、できることを一生懸命見つけるということも大切です。

不登校

- 再登校が解決とは限らない
- 子どもが笑顔でいられること
- 子どもに将来の目標ができること
- 生活の質やself-esteemが高まること
- それが不登校の最終的解決

不登校は、再登校が解決ではないのです。子どもが笑顔

でいられて、将来目標ができることです。先程お話したように、不登校の子どもたちはほとんど将来の目標を語りません。生活の質が上がればいいのです。学校に行くか行かないかは、その次の問題です。こういうところをキープし、そして学校側ともいろいろ話をしていく中で、適切なさざ波があれば「行ってみようかな」ということになると思います。

発達障害といじめ

- ADHDでは衝動的な行動が周囲を敵に回す
 - 調子に乗っていじめに参加する場合もある
- 高機能自閉症では「場」が読めないので孤立し、いじめにつながりやすい
 - 時には、それと感じていないこともある
 - 場や状況が把握できないので加害者になる
 - 程度がわからない
- 学習障害では学業不振でいじめられる

いじめですが、ADHD では衝動的な行動から周囲を敵を回して、調子に乗っていじめに参加してしまうと加害者になります。高機能自閉症では場が読めないから、いじめにつながりやすい。場合によっては、いじめと分からない。仲間はずれにされていても、そんなものかと思っていて、20歳くらいになってあれがいじめだったのだと、突然フラッシュバックしてくる。大人になってそういうことはよくあります。場が理解できないから、例えば首を絞めたふりをして、「首を絞めてみろ」というと、普通ふりで済むはずなのに、彼らは真に受けて本当に首を絞めてしまい、事件になってしまったというケースもあります。学業不振でもいじめられます。

いじめの加害者と被害者

- 加害者＝悪者、被害者＝かわいそう
 - 構図は単純ではない
- 子どもたちは被害者にも加害者にもなりうる
- 加害者と被害者には共通点がある
 - 抑うつ傾向が強い
 - 不定愁訴が多い
 - 孤独になりやすい
- だから子どもたち全体の問題として考える

我が国の大きないじめ事件の時にも、あるところではコメントしたのですが、加害者イコール悪者、被害者イコールかわいそう、という構図のように単純ではないのです。子どもたちは被害者にもなったり、加害者にもなったりします。発達障害でもそうです。ADHD の子は本当に加害者にもなるし、被害者にもなります。だから、ただ加害者にも被害者にも、私は4,000人のいじめの調査を議会にかけたことがあります。どちらもやはり心の健康状態があまりよくなかったり、不定愁訴が多かったり、孤独になりやすかったりという特徴があります。

発達障害の子どもの頃

- しばしば「いじめ」にあうが、認識されにくい
- 時には「犯人」に仕立てられることも
- 中学生以上の発達障害34人に聞いて 見ると
 - いじめの被害経験あり:24人(70.6%)
 - 最初のいじめは:小学校3~4年生
 - 一番ひどかったのは中学生のとき
- 学校に聞くとしばしば「いじめはなかった」

だから、多くの場合、いじめた子どもたちが悪いのは、確かにそうなのですが、悪者にするのではなく、なぜ彼らがそうってしまったかということを考えないと、次のいじめの防止は絶対できないです。だから悪者だと決めてしまうということだけでは駄目なのです。発達障害の子どもの頃というのは、インタビューすると、いじめにあうけれども認識されにくいです。小学生以上の、これは昔のアンケートで、今はもう少し数が増えています、大人になった発達障害を抱えた人たちの7割はいじめがあったというように答えています。一番ひどかったのは、大体中学生のときです。しかし学校に聞くと、いじめはなかったという答えがしばしば返ってきます。

いじめをめぐる問題: 対応

- 「いじめ」は隠れて行われることが多い
- 特にADHDでは「ふざけ」、高機能自閉症では「からかい」と認識されやすい
- Self-esteemの点からも対応が必要
- 問題点に対するsocial skill trainingも必要
- 保護者を交えて対応を考える。場合によっては医療からの助言も必要

いじめは隠れて行われることが多いのです。だからADHDではお互いにふざけあったり、高機能自閉症では周りの子はからかっていただけだと逃げられたりして、いじめではないというように学校側は認識しているケースがいまだにあります。やはりきちんとソーシャルスキルトレーニングをやるとか、保護者を交えて対応を考える必要があります。場合によっては医療からサポートする必要もあります。

学業不振は、発達障害を抱えている子は、知的には問題はなくとも、集団対応だけではうまくいかないです。授業に集中しなかったり、授業を聞いていなかったり、授業が分からなかったりすることがありますから、やはり一つでも得意なものを作る。先程言ったように、できない国語を頑張るより、まずできる算数をキープしていく中で、国語の力を上げていくということを考えていくことが大切です。

ですから、避けられない結果ではないのです。すべてを

普通にということ、学習障害など特にそうですが、将来、社会で必要のないこともたくさんあります。できない部分に注目するのが今の日本ですが、しかし友達よりもできることもあります。それをどうやって見つけてあげるか、それは最初に出したように、三つの良いところ探しの中で見つけていくということがとても大切です。障害と才能は紙一重です。見えている障害が、ADHDの過活動性が授業中は障害かもしれません。しかし彼らがセールスマンになれば、私の知っているADHDの方ですが、年収何千万の自動車のセールスマンです。ですから、学校では叱られていたものが、社会に出たら花開いていくということもあります。

学業不振をめぐる

- 知的には問題がない・しばしばIQ120以上
- 集団対応だけでは学業不振になりやすい
 - ADHDでは授業やテストに集中できない
 - 高機能自閉症では授業を聞いていない
 - 学習障害では適切な補助手段がとられない
- 全部うまくゆくことではなく、一つでも得意なものを作ること・それが手がかりになる
 - small step

学業不振

- 学業不振は避けられない結果ではない
- すべてを普通にということの限界がある
 - 将来、社会で使わないこともたくさんある
 - できない部分に注目する今の日本
 - たぶん、友だちよりもできることもある
- 障害と才能は紙一重
 - 今見えているのは障害
 - 今から探すのが才能

性の問題: ADHD(1)

- 行為障害に移行すると性的非行もある
- (男子が多く)女性に興味はあるが、簡単に近づいては振られる
- デートに誘うが、時間を忘れる
- デートの最中でも、気に入った人を見つけると追いかけてたりする
- チャンスはたくさん作るがうまくゆかない

性の問題も特に中学生以降では非常に重要になります。ADHDと高機能自閉症は行為障害、キレてくると性的非行になってくることがあります。ADHDは大体男の子が5倍から8倍ですから、簡単に近づいては振られるというパ

ターンがとて多く、デートに誘うけれども、時間を忘れて間に合わないとか、デートの最中に気に入った人を見つけるとそっちを追いかけてしまうとかです。チャンスをつくるけどうまくいかないことがよくあります。

ここまでであれば笑えるのですが、次は笑えないのです。性的逸脱行動になると、同時に多くのセックスパートナーができてしまうとか、避妊しないとかです。特定の個人との関係が長続きしない。高校生、大学生ですけれども、2カ月の間に3人の女の子を妊娠させてしまって、大変な騒ぎになってしまい、それを收拾するのにすごく大変だったことがあります。だから2次障害をおこすと、キレやすい。ADHD でキレようになると性暴力がかなりの頻度で起きています。1回暴力を使い出してしまうと、それに抵抗がなくなります。2次的な暴力沙汰が結構あります。こうなるとまずいということです。

だからそのためには、どうすればいいかということも今まで話した通りです。

性の問題: ADHD (2)

- ADHDの性的逸脱行動
 - 同時に多くのセックスパートナー
 - 避妊をしないことがしばしば
 - 特定の個人との関係が長続きしない
- 二次障害を起こすとはしばしば暴力
 - 暴力を用いることに抵抗がなくなる
 - self-esteemが低いとよくある
 - 二次的な暴力沙汰がある

性の問題: 高機能自閉症 (1)

- 一部の性的なこだわりを持つケースを除けば情緒的思春期が長い
- 場が読めないで、メールは大丈夫だが、実際に会って話すと振られる
- デートの計画を立てるのは好きだが、立てれば満足しがち・実現には至りにくい
- 時に思い込みからの性非行が見られる

高機能自閉症は、一部に性的なこだわりを持っているケースもありますが、一般的には情緒的な思春期が長いです。高校生くらいになると、もう女の子を見ると、キスしたいとか、手をつなぎたいとか、場合によっては、セックスしたいとか思うのです。何かほのぼの君で、ほんわかといったんと思っていて、なかなか直接的な性行動に出ないことが結構多いです。

場が読めないで、メールはものすごく立派なメールを書くのですが、いざ会うと、きちんと話せないで速攻で振られるということがよくあります。デートの計画を立てるのは好きです。本当にこれは好きな人が多いです。上野駅で3時に待ち合わせをして、不忍池のボート乗り場で3分待

つ。何が3分かよく分からないですが、そういう計画を立てるわけです。それで、5時にどこかでお茶を飲んで別れるとか、そういう計画を私に偉そうに見せてくれるのです。次に来たときに、「デートの下見どうだった」と聞くと、「先生、あれだけ計画立てるのに力を使ったから、疲れてデートしなかった」。何のために…。そういう人たちがいるわけです。それは非常にほのぼののしていていいです。

性の問題: 高機能自閉症 (2)

- 性へのこだわりが出ると対応が必要
 - 自分の性への疑問、他の性へのあこがれ
 - 性的逸脱行動もありうる
- 女性の場合、多くは男性への恐怖感がある
 - いじめや人生体験などから
 - セックスに興味がない
 - 妊娠・出産に興味がない
 - だまされる危険がいつもある

時に思い込みからの性非行もあります。これならいいのですが、逆に性へのこだわりです。非常に対応が必要です。性同一障害を抱える人たちがいますからそういうこともあります。それから逸脱行動もあります。例えば、思春期になり、中学生、高校生になると、自分の性器に触りたがる、おちんちん触りたがる男の子が結構います。「おちんちんはあまり触らないほうがええぞ」と言うのと、「先生、大丈夫だって。俺ね、ズボンのポケットに手を入れて、そこから触ってるから」と。「外から見れば分かるよ」と言うのですが、そういうことが平気なのです。そういう時に「駄目だろっ」とやってしまうとうまくいかないということも、今までの話の通りです。例えば、首から鍵をぶら下げていても違和感はないです。おちんちん触りたくなったら、鍵を握りしめる、代替行動というのですが、切り替えです。そういうことでもって結構目立たなくする。女の子の場合も、性器を触ってしまう子どもたちというのがいるのですが、それがバレてしまうと性被害のリスク、といっても女子高ならそういうのはないですが、性被害のリスクがとても強いのです。だからそういう子どもたちに、まず必要なのは、なるべくズボンをはかせない。わかりますね、ズボンのほうがリスクがずっと高いわけです。スカートのほうがリスクが低い。だからそういうことから始めている。いろいろなことを考えます。女の子の場合は小さなブローチに触るとかです。代替行動に導くことがある。

女性の場合には結構大人たちでは男性への恐怖感があります。いじめ、人生体験、セックスに興味がなかったり、あるいは騙されてです。高校生の場合には、女の子でも高機能自閉症の高校生が結構性被害に遭うケースが私の外来でもあります。例えば街であった男性、初めて会った男性に、「きれいな人だ、君のようにきれいな人は見たことがない」。普通それを真に受けないのですが、その子は受けてしまったのです。そうするとホテルに連れ込まれて、性感染症を移されて、私とその性感染症の治療をするというようなことになったこともあります。

こういう話を、以前は高校を卒業する時に子どもたち、

女の子たちにしていたのですが、今はもう中学校の時にそういう話をしています。

告知と受容

- 告知とは
 - なぜ他の子と違うのかを診断も交えて理解
 - しないとself-esteemが下がると思われる
 - することでself-esteemが上がると思われる
 - 多くは10～18歳、決まった年齢はない
- 受容とは
 - 告知だけではなく、受け止めるために支援
 - 受容できるまでに数年かかることもある

告知と受容です。子どもたちになぜこうなのかを伝えなければいけない時が、いつかはきます。「こういう特性を持ってるんだよ」ということを告げなければいけない時がきます。早いと11歳くらいです。大人たちの場合、いきなり言うってしまうことも結構あります。「何か自分は他の子と違うよね」ということを感じていることがあります。その時に何も言ってあげないと、「なぜみんなはできるのに俺はできないんだ」ということを感じ始めると、そこはサポートしないとうまくいきません。そこで少しサポートしてあげると、「あ、そうか」「でも俺はみんなと違って、これもできるからええわ」というように思えるようになれば、ここで非常に楽になります。ですから、告知だけではなく、受容できるまでサポートするのですが、これが結構大変なのです。

告知とは

- 病名・障害名を告げるだけではない
 - 得意なところ、不得意なところを認識する
 - 不得意なところをどうやってカバーするのか
 - 家族はどうやって理解し、支援するのか
- ↓↓
- 準備に1か月、パワーポイントを使用
 - フォローも定期的に行なう

だから病名とか、障害名を告げるためにやるのではなく、得意なところと不得意なところをまず整理するという作業をします。これは保護者の方に大体手伝っていただいて、パワーポイント使用して、いいところ探し、今から努力したいところ探し、それを対比させながらいきます。そうしないと、ここだけ頑張ればいいというようにすると子どもたちはそうしてしまうのです。だから、そこでお父さんとお母さんは何を助けてくれるのかいうところまで親たちと話をします。こういう告知をするという作業は相当準備が大変です。

告知をされた子どもたちが Coming Out するということに対しては、私は決して積極的ではありません。「俺さあ、先生に ADHD って言われたんだ、ADHD ですぐえ

だろ (ADHD ってすごいだろう)」。すると学校の先生たちは普通そういうときに何と言うか。「おまえなあ、自分が努力せずに ADHD のせえにしとるのか」というように言う。このように社会的には、ほとんどの学校や社会というものは対応します。問題点を、不都合を、障害のせいにされるというように誤解をされてしまうケースがとて多いのです。これは彼らにとって非常に不利になってしまいます。やはり、説明をするのであれば、診断書を書いて、医者とか、心理職がきちんと説明するということが必要だと考えています。

Coming Out

- 発達障害に対する正しい知識は不十分
- 基本的にはComing Outは勧めていない
 - 不都合を障害のせいにすると誤解される
 - そのために回りが「引いて」しまう
 - 社会的不利益を受けやすい
- 専門家に説明してもらうこと
 - できれば医師の診断書と説明
 - 心理職の説明も有用

社会で暮らしてゆくためには・・

- 我慢が必要なときに我慢する
- 交通ルールなど最低限必要な社会的ルールは守る
- あいさつなど基本的な社会習慣は守る
- パワーを発揮できる場所を作る

社会で暮らしていくためには、我慢が必要な時に我慢をする。社会的ルールを守る。基本的な社会習慣を守る。これは大切ですが、これだけであれば発達障害を抱える人は、駄目づくしで生きていけません。発達障害を抱えていても、当然生きていけるので、パワーを発揮できる場所を作ることが非常に重要だということは、もう先生方もご理解していただいていると思います。

ゴールは、自分に自信の持てるセルフエスティームの高い子に育てるということです。社会で生きていく、育てるということの二つがあります。しばしば社会生活習慣を身につけるということだけで終わってしまうのですが、やはり自分で稼げるようにする、というこの目標設定、先程の「13歳のハローワーク」もそうですが、ここのビジョンを、10歳を過ぎたら持っていないといけないと思います。何となく高校に行って、何となく大学に行って、そして18歳、20歳で路頭に迷ってしまう人たちが結構多いのです。ここが非常に重要になります。もちろんこの二つができればいいのは、発達障害を抱えてないすべての子どもたちにも必要なのは当たり前ですが、行動とか、コミュニケーション

の問題を抱えていると、ここまで介入してあげないと少し難しいというところがあります。

GOAL: 最終目標

- 自分に自信の持てる子 (self-esteem) の高い子どもに育てる
- 社会で生きていけるように育てる
 - 社会生活習慣を身につける
 - 自分で稼げるようにしよう
- すべての対応・治療はこのためにある
- 発達障害だけではなくすべての子のために

GOAL (2)

- self-esteemを育てる
 - 自信を失わないように育てる
 - 周辺が子どもを嫌いにしない
 - 「いできないこと」に怒らない
 - きっといつかできるようになる
 - ほめる技術と実績が子どもを育てる

セルフエスティーム育てるためには、周辺が子ども嫌いにならないということが大切です。嫌われてうまくいかないと言ってキレてしまう。キレてしまう子どもたちは、誰かに嫌われている子どもたちです。誰にも嫌われない子どもたちはキレることは絶対ありません。今できないことにも、できるように工夫すればいいのです。もちろん褒めるということが非常に大変になってきます。

発達障害についてのお願い(1)

- 安易に疑い病名を告げないでください
 - 診断名はしばしば一人歩きします
 - いつの間にか「疑い」が診断に変わっていることもあります
 - 病名を聞くと、多くの保護者はインターネットなどで調べます
 - そこには多くの不適切な情報もあふれています

発達障害についてのお願いですが、学校で保護者に「お宅のお子さん ADHD じゃないかと思うから、1回医療機関に診てもらえばいいんじゃないですか」と言うと、「かもしれないから」というのが、「ADHD だと言われた」と保護者のほとんどが思ってしまうのです。そうすると、今、インターネットで情報を調べると、いろいろな不適切な情報が山のように溢れています。疑いがもう取れてしまうのです。だからこのつなぎ方というのは非常に難しいです。最初の三つのいいところが共有できていると、「ここがいいんだけど、この辺気になるから」ということで病名は出す必要はないのです。病名が出てしまうと問題になる場合があります。できないことの言い訳よりも、できるための工夫が当然必要になります。

大人の発達障害を抱えた人たちを見ていると、これが非常に印象的なのですが、彼らは過去の記憶が非常に良い方たちが多いので、小学校、中学校、高校の自分の担任の先生たちをほとんどみんな覚えています。小学校でも、中学校でも、自分のこと大切にして、自分のことを一生懸命、自分のためにしてくれた先生たちを20歳になっても、30歳になっても、40歳になっても覚えています。もちろんその反面、うまくいかなかった経験が、たくさんあるということも認識しています。ですから、私がいつも学校の先生方をお願いしてるのは、どこの大学に何人入れたという記録に残る教師ではなくて、やはり子どもたちの記憶に残る教師でいてほしいということです。そういう先生たちがとにかく増えてほしいと思います。

発達障害についてのお願い(2)

- できないことの言い訳よりもできるための工夫を！
- 子どもたちは「自分を大切にしてくれた教師」をずっと覚えている
- 「記録に残る教師」ではなく「記憶に残る教師」へ
- 教育に与えられている時間は長くはない
 - しかしその時間はとても貴重なもの

教員に与えられている時間というのは、長いようで長くありません。小中高と全部エスカレーターで上がっても、たった12年です。子どもの人生は仮に80年だとすると、たった15%見ているに過ぎないのです。だからその残った時間、子どもたちが子どもである25%の時間に、残る60%は他の時間をどうやって育てる、どうやって過ごせるようにするかということが、非常に重要になります。その視点がないと、なかなかうまくいかないと思います。ご清聴ありがとうございました。

講演Ⅱ

「私学の生徒支援体制を考える」

宝仙学園中学高等学校／栄光学園中学高等学校 スクールカウンセラー 高野 利雄



講師紹介

高野先生は立教大学卒業後、フェリス女学院や立教池袋中学校高等学校の教諭として40年間教員をされ、その間、上智大学カウンセリング研究所講師もされていました。現在は神奈川の栄光学園、東京の宝仙学園のスクールカウンセラーをされています。東京私学教育研究所主催の教師のためのカウンセリング基礎講座、実践講座の講師を20年以上務められ、指導を続けておられます。教育相談の道では、東京の多くの先生方が学んでいるということで、今回ご登壇いただくことになりました。

皆さん、こんにちは。午前中の平岩先生の講演とこれからのシンポジウムのつなぎとして、少しお話をさせていただきます。

平岩先生のお話を受けてということでは、発達障害あるいはそういった特性をもった子どもが自分の前に現れた場合、どのように理解したらいいのだろうか、或いはどういうふうに対応したらいいのだろうか、或いはクラスどのようにしていけばいいのだろうか、その子がいるクラスをどのようにしていけばいいのだろうかということになりましょう。

ここにはそのようなご関心をお持ちになって来られた方が多くおられるのかなと思いつつも、「生徒支援教育」という今回掲げたテーマにそって、発達障害等々の個別の問題をかかえた子どもたちだけではなく、すべての子どもたちの支援ということではどのような姿勢をとったらいいいのか、そんなところに基盤をおいていきたいと思っています。

つまり、生徒支援教育は特別支援教育を指すのではなく、それも含めた形での生徒支援のありようというようにお考えいただきたいということです。

本部会は「共に成長する学習環境の創造」というテーマを掲げていますが、この「共に」とはすべての子どもたち、或いは教師、保護者も含めての、学校に関わる人々を指すということにお考えください。そして「成長する」ということは、それぞれの方が自己実現に向けて自分の人生をつくり上げていくということです。自分の人生をつくり上げていくという考え方はカウンセリングの基本でありまして、私たちが人と関わる時に非常に重要な、特に親や教師が子どもたちを育てる時に意味をもちます。子どもたちがあたかも自分の「もの」であるかのような、自分のいうことに従うことを良しとするような感覚を持ててしまいがちだからです。

それから、「学習環境の創造」ということですが、これは学びの場と時を設定し、かつ保障するということだと考えています。日本でいえば義務教育がそれにあたることになりますし、近年では生涯学習をいかに支援するかといったことで教育行政が進められています。この学びの場と時を設定し、保障するということを教育現場のこととしていうならば、すべての生徒にとって学校は安全な場であり、安心して学校に来て学習活動ができるということですし、私たち教員は教育活動が出来るということです。

こうした「学習環境の創造」ということのためには二つの柱が必要です。ひとつは教師と生徒、生徒と生徒がお互いに理解し合える関係にあるということです。もうひとつはさまざまな問題の予防と解決のための環境改善が柔軟に行われることです。

以上のようなことが「共に生きる学習環境の創造」ということになろうかと思えます。

今回の大会の大テーマは「グローバル教育」ということですが、「グローバル教育」は新自由主義に立った生き方に向かうことであり、そこで注目されるのは「個」という問題で、自己責任ということが強いられるようになってきています。グローバル社会での個のあり方としては自らの生き方に自ら責任を取る、それだけの力を持った子どもを育てていくというのがグローバル教育です。昨日の講演の中で「何とかする力」というふうに説明されていましたが、正にそういうことです。

グローバル教育のために私たち教員がとる姿勢について、評価よりは承認ということを申しあげたいと思いま

す。評価よりは承認ということの意味は、例えば「君は努力をしている」「していない」というように、こちらが判断していくアプローチではなく、「君はどんな努力をしているのだろう」「どんなことをしたのか聞かせてほしい」といったように、その答えがどうあろうと、「君がしたことはどんなことなのか」をしっかりと受け止めていくということです。評価と承認の違いを、私はそのように考えています。本人はそれによって自ら気づき、反省していくはずで、そこに成長があります。

ある学校で授業見学をさせていただいたことがあります。先生が発問して、生徒が答えた。「いや、それは違うねえ、他に…」という進め方をなさった。自分の発問に対して答えたことがマルかバツかということをおられるのですから、決しておかしいことではないと思います。でも、これが評価なのです。承認となると「そうか、そういうふうに考えたんだね。自分の考えたことをみんなの前で思い切って発表したわけだね」というようにその生徒の心の動きであるとか、行動であるとかにしっかりと目を向けて、その生徒が生きていくことのサポートをしていくことになります。このようなアプローチが承認ということで、これは生徒支援そのものです。本人が成長していく、自分の人生をつくっていくことをサポートしていくということです。

日常の生徒支援教育は承認のアプローチであり、グローバル教育にも通じるものだという点について、よろしいでしょうか。

今、評価ということが出てきましたが、評価とか指導ということは教育の方法として、私たちがずっと続けてきていることですし、実際にそれを外すわけにはいきません。そこで支援について考えるにあたって、指導と支援について、少し入っておきたいと思います。

私たちがマルをつけたり、バツをつけたりの評価をする前に教えるという指導をしていく時に、或いは一人ひとり自己実現に向かって成長していく支援をしている時に、どちらも生徒の健全な成長を願っているのだと思います。ただ、指導のアプローチと支援のアプローチとは切り口が違います。

指導によるアプローチは教師がゴールを設定して、そこに導いていくものです。日本の教育のゴールは平和と民主主義を創造し、維持する人になるということで、教育活動はすべてそこに結びついています。そして、私たち教員が個別に関わっている生徒たちにとってのゴールをまとめていうと、自ら生活づくりをしていけるようになることです。教科指導も生徒指導もすべてここに向かっています。大きくは平和と民主主義、直接的には自分の人生をつくっていくための知識や技能を学習するステップとしてのゴールがある、ということです。子どもたちは皆、それを教えてもらう権利があり、大人には教える義務があるところに指導によるアプローチが成り立ちます。評価が成り立つということです。

支援によるアプローチは、自己実現をしようとしている、成長しようとしている生徒が抱えている内的な問題であるとか、外的な問題であるとかいったことにも目を向けて、ゴールに向かえるように支援していこうとするアプローチです。指導によるアプローチに支援によるア

プローチを加えていくということです。そうしなければ教育が成り立たないという、時代の要請でもあります。

支援によるアプローチでは、その生徒の生活環境、人間関係といったことについてとらえていきます。どんな状況で生活しているのか、心理的に抱えている問題が何かあるか、というようなことを見ていきます。そして適切な支援方法をとっていくことになります。

資料に生徒支援について整理してありますので、ご覧ください。

生徒支援とは一さまざまな援助のあり方

全ての生徒の成長と未来に向かっての支援のことで、学習環境の確立と個別支援の保障によって成り立つ。

支援の実際のために「援助のあり方」について、以下のことを知っている必要がある。

1) 子どもの成長のための4つの援助の連携

- ① 教育的援助（教師・養護教諭・ガイダンス・スクールカウンセラー等）
- ② 心理的援助（教師・養護教諭・心理スクールカウンセラー等）
- ③ 医療的援助（医師・看護師等）
- ④ 福祉的援助（児童相談所職員・スクールソーシャルワーカー等）

2) 4つの援助法からの適切な選択

- ① 代行的援助
- ② 助言的援助
- ③ 調整的援助
- ④ 理解的援助

3) 子ども支援にかかわる4つの場の連携

- ① 家庭
- ② 学校
- ③ 地域（自治体の社会教育活動・近隣住民・塾等）
- ④ 民間団体

1) の4つの援助の連携では、教育的援助、心理的援助については学校が関わるもので、他に医療的援助、福祉的援助があります。

教育的援助には指導によるアプローチと支援によるアプローチがあります。学校での心理的援助は支援によるアプローチが主となりますが、どういうふうに関与されるのかを知っている必要があります。

生徒たちが生きていくためのゴールに近づき、自分自身の人生をつくり上げて力を10代に身につけてもらうために私たち教員は指導をするし、支援もするわけですが、特に心理的援助をするには、その生徒がどんな状況にあるのかをしっかりと把握する必要があります。把握するための知識や技能が求められもします。

平岩先生の発達障害を中心とした講演は、もしこの生徒に発達障害があるとしたら、私たち教員はどのように見極めていくか、この生徒が叫んでいる SOS はどんなことか等を知るためのヒントをくださったと思います。

教育現場での生徒理解のためにいろいろな知識、理論を身につけるとするならば、他に知っておきたいさまざまなことがあります。いじめや不登校はなぜ起こるのか、心理的発達・身体的発達からみて思春期のとらえ方、思春期に発症しやすい精神障害とその症状の早期発見、どんな問題に直面している家族が多いか、生徒たちを守る法制度等々。その知識をもって生徒たちをしっかりと観察することが求められていることです。

東京私学教育研究所のカウンセリング基礎講座では、こうした知識の修得を中心としたプログラムを実施して

います。

心理的援助としては、さらに対応力が求められます。それは「心に寄り添う力」です。

平岩先生の講演では、医師は診断する。診断がどうであろうとも、先生方のすることは子どもに関わっていたきたいことだし、そこに彼らがどう成長していくかの鍵がある、とありました。

心に寄り添うというのは、発達障害とか精神障害、或いはいじめ、友人関係、或いは家族の問題等、その生徒を取り巻いていることがあるとすれば、今、どういう思いでそこにいるかということを受け止め、批判せずに寄り添っていくことです。

私たち教員は、私が教員の時そうでしたが、遅刻をせずに授業に来て、きちんと授業に参加して、テストである程度の成績をとって、校則は守り、部活も休まない、友だちともよく話しているとなったらその生徒はマル。問題ありません、良いお子さんですとなる。しかし、そうしている生徒でも「家では」とか「実は体にこんな悩みをもっていて」とかいうことがあり得るわけです。ですから、少なくともわかったら「寄り添う力」がほしい。しっかりと聞き、受け止めていくことが出来る力、彼らの苦悩であるとか、生きづらさであるとか、困り感であるとか、悲しみであるとか、そういったものをしっかりと受け止めていく力。支援ということでは、これが最も求められる力なのです。

東京私学教育研究所のカウンセリング実践講座では、寄り添う力と丁寧なコミュニケーション力を身につけるプログラムを実施しています。教師、生徒間に関わりの橋を架けられれば教育活動はしやすくなります。

寄り添う力をもって、さらに生徒を理解して援助をしていく時に、資料にある2)の4つの援助法からの適切な選択が重要になりますので、それぞれについての説明をさせていただきます。

まずは代行的援助。代わりにしてあげるということで解決していくことです。

助言的援助は「こういうふうにしたらいいいよ」「こうしてみたらどうだろう」といったように、具体的なアドバイスをしたり、解決策を提案したりすることです。

調整的援助というのは、解決のために生徒が動きやすくするために周りを整えてあげたりすることです。「A先生に相談するなら、私から何か伝えておいた方がいいかな」といったようなことです。

理解的援助は、その生徒がどんな出来事にぶつかり、どんなことを考え、どんな気持ちになっているかを理解し受け止めてあげることです。わかってもらうだけでも援助になることがあります。

どういう援助法を用いていくかは、生徒が何を望んでいるかということから決まってきます。適切さはそこから出てくるのです。となると、まずは理解的援助を意識して実践し、生徒が求めている援助を理解し、次に進めていくことになるわけです。

理解的援助は寄り添う力によるので、身につけるためには練習、練習に尽きることになります。

私たち教師は、生徒理解のための知識、理論、心に寄り添う力を身につけ、援助法を選択していくといった生

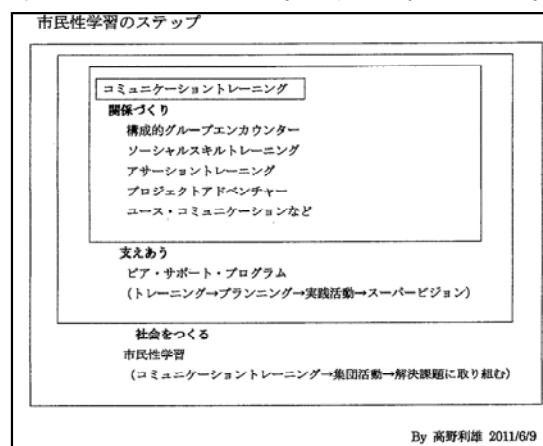
徒支援を続けながら、教育活動をしていくことになります。

これまでの教育活動に支援によるアプローチを取り入れた実践方法が開発されていますので、幾つかご紹介しておきます。

教科指導についていえば、わかる授業をするということです。近年、発達障害等さまざまな特性を持つ生徒たちを踏まえての、授業のユニバーサルデザイン化といわれていることがあります。自分が授業をするクラスを思い浮かべて、彼はこういうところが苦手、彼女はこういうところが不得手だから、ここでひっかかるかもしれない、だとしたら授業の仕方をこういうふうに変えていこう、聴覚情報に弱い彼のためにここは掲示をするようにしよう、といったようなことでクラス全体がわかるようにしていくことが授業のユニバーサルデザイン化というものなのです。

生徒指導ではチーム援助があります。問題解決、支援のためにチームを組むことです。ことに中学校以上では、担任といってもよくわからないことがあり、その生徒に関わっている先生方、時には保護者もふくめてチームをつくって対応します。役割分担、情報交換など十分に話し合ってから始めます。普段からの教員間の意志疎通や連携など、良好な関係が問われるところです。

生徒間の力をリソースとして、お互いに高め合う活動を導入することもあります。資料をご覧ください。



生徒間の「関係づくり」から「支え合う」ことを意識しての行動、さらには「社会をつくる」というように一連のものになっています。

ここ数年広がりを見せているピア・サポートについてご紹介します。ピアというのは仲間、サポートは支えるですから、仲間として支え合うという意味です。友だちが友だちを支えていく、友だちに何か相談する、教えてもらう、そうした時に有効な関係をつくれるようなトレーニングもあります。ピア・サポート活動を取り入れている学校が随分増えてきています。今朝の「おはよう日本」という番組で不登校の問題が取りあげられていました。不登校の対策或いは予防として中学生が小学6年生を中学校に呼んで、一緒に遊んだり、歓迎会を開いたり、授業のこと、部活動のことなどを教えたりしていくのです。「中学ってこういうところなんだ」「あの先輩がいるから」といったことが生まれて、中1ギャップを乗り越えていきやすくなるというわけです。こうした活動を

中学生が自分で始めるとは考えにくいですから、先生方がピア・サポートとして取り入れたのではないかと思います。或いは地域でプランされたのかもしれません。

このピア・サポートの土台になるようなもので、生徒間の関係づくりのために構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング、アサーション・トレーニング等が広がっています。

このように生徒たち自身の手で問題を解決していくためのプログラムが開発されていますので、知っていて活用することも生徒支援につながります。

学校教育現場に支援によるアプローチを導入することはどんなことから始まってきたのでしょうか。

日本では特別支援教育が始まってから教育の世界に「支援」といういい方が多く使われるようになったと思われます。しかし、「支援」に近い学校教育相談、心理的援助、カウンセリングというような用語は戦後の教育史にはずっと登場しています。

1980年代には「生徒指導と教育相談は両輪だ」というとらえ方をされていましたが、今はそういうとらえ方はしません。2010年に文科省から「生徒指導提要」が出されましたが、これを見ていくと生徒指導は教育相談、生徒支援的なあり方に基づいてなされるものとなっています。それによれば、生徒指導の大きなねらいは自己指導能力を育てることで、そのためには教え込んだり叱ったりということではなく、本人に気づかせていく。「君は何をしたい」「どういうことをしたいんだ」といった、その人自身が生きていく力を育てるようになっていきます。つまり、生徒指導は支援だということです。

こうしたことは、人権尊重という大きな歴史の流れにあって、さらに心理学や脳科学が発達してきた中で学校教育のありよう、子育てのありようが変化してきているとみるべきでしょう。

もう一つ、福祉の世界の変化を見る必要があります。障害をもった方々がみんなと一緒に生活できるようにすべきだというノーマライゼーションが日本に入ってくるのは1980年代ですが、そもそもは1960年代のデンマークで始まっています。今日ではみんな一つの社会で対等な存在なのだというインクルージョンの考え方になってきています。ユネスコの主導によって教育も変化していて、1994年のサラマンカ宣言からはインクルーシブ教育に大きく流れているのです。

福祉も教育もそうした流れの中で個を見る、大事にするということがあって、支援によるアプローチが求められてくるわけです。教育について、学ぶ生徒を中心に見た時には、ごく当然なことなのでしょう。

インクルーシブ教育への流れの中で、発達障害への理解と支援が行政で取りあげられて、2007年に特別支援教育が始まり、先述のように教育場面での「支援」ということが注目されるようになるわけです。

シンポジウムで話題になるそうなので、特別支援教育になる前と後の違いにふれておきます。

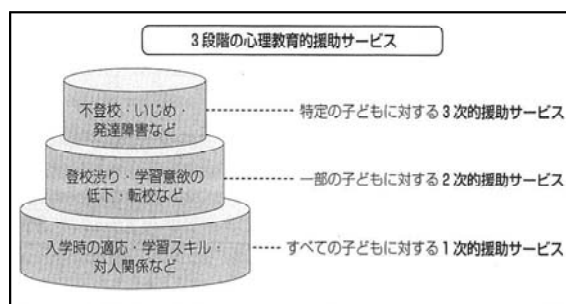
以前は特殊教育といって、認定された障害を持たれた方々が教育や療育を受ける特殊学校がありました。この特殊学校が特別支援学校となり、障害を持たれた方々の教育と療育もし、且つ特別支援教育の指導の中心的役割

も担うようになりました。特別支援教育では発達障害をふくむ障害を持つ児童生徒が通常学級に在籍し、必要に応じて個別の通級指導の療育を受けるようになりました。通常学級では担任や教科担当者が指導することになり、教員が加配されたり、巡回指導員が訪問してきていたりしています。

実際は人材が不足していて、公立学校でもうまくいっていません。ましてや私学は制度的に公立と違いますし、教員の人数も限られていますので、同じようにはいきません。しかし、私たちは支援についての知識や技能を身につけて、まさに通常学級の中で私たちにできる最大限は何だろうかと求めていかねばなりません。

私たちの前にはさまざまな障害あるいはその時の解決課題をもった生徒がいます。発達障害の特性を持った生徒、精神障害や心理的歪みをもった生徒、家族問題を負っている生徒、人間関係に悩む生徒、学業不振で行き詰っている生徒等々。そして「定型成長」といいますが普通に育っている、力を持った生徒たちがいます。私たちはすべての生徒に支援的でなければなりません。それが生徒支援教育です。

それについては学校心理学の知見が大きなヒントをくれますので、それにそって話を進めることにします。



資料の図を使って説明しますが、私たちが生徒に関わっていく時に三つの段階で考えようということです。最下層の段階はすべての生徒を対象にした支援によるアプローチです。これは指導によるアプローチがあつての支援によるアプローチとみてください。授業については「君がこのゴールを達成するために、ここでもって勉強することは意味があるんだよ」というように、行事については「みんなで楽しくすることに意味があると思う」というように、彼らの成長を支援します。私たちが掲げるゴールに向かっていってもらうための第一次的援助サービスといわれるものです。

ところが、家族のことか、自分の悩みとかで、さまざまな躓きを持つ生徒がでてきます。誰の人生にもつきものです。その生徒たちには、寄り添う力を発揮して関わっていくことになります。これは指導ではなく支援であることに徹して、援助の方法の選択が必要ならば、そうしていきます。教師はこの第二次的援助サービスまでの力量を身につける必要があります。ただ、専門家のコンサルテーションを受けることを積極的にされることが望ましいようです。それによって力量がつくからです。

さらに、私たち教員の手を離れて心理療法だとか医療、福祉だとかいった専門家に任せつつ、その生徒をサポートしていくケースも出てきます。これを第三次的援助サービスといいます。

どの段階の援助サービスとするかの判断もすることになりますが、学内に支援によるアプローチの心得のある教師が多いほど適確になるといえるでしょう。

さて、私学の場合にはギフテッドについても考慮しておかねばなりません。ギフテッドというのは能力の高い生徒のことです。もっと先の勉強をしたい、運動能力が非常に高い、ある才能に長けていて時間の使い方を変えねばならない等々、いるわけです。発達障害の特性でそうなる場合もあります。

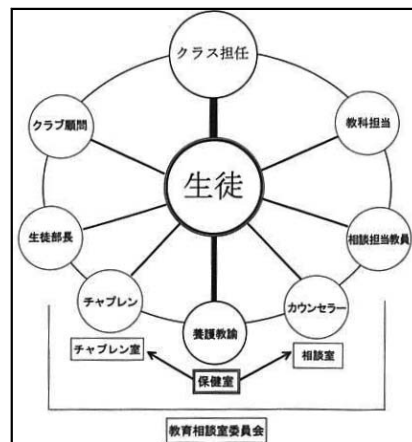
私が勤務していた立教池袋中高では選修教科という別枠の授業がありましたし、現在の栄光学園には数学研究会という特別なグループがあります。

ギフテッドを育てていくことは私学の第二次的援助サービスであり、私学の特徴ではないかと思います。それによって各私学が特徴ある教育展開をすることができるのではないのでしょうか。

学校が支援によるアプローチをしようとしていることを、生徒・保護者がどのように受け止めているかに注意をはらう必要もあります。

まずは自分が通っている学校では、自分がどのような第一次的援助サービス、第二次的援助サービス、第三次的援助サービスを受けられるのかを伝えることとなります。生徒・保護者は支援を活用するには、どこに相談に行けば聞いてもらえるのかを伝えられていなければ動けません。これは生徒支援のための「体制」がどうなっているかということです。

下図は「君は何かあったら、こんな人たちに相談できる」「先生方はいつでもオーケーだよ」という生徒支援体制を、生徒を中心にして図示してみたものです。これを使って説明するわけです。



この図は立教池袋中高校のものですが、それぞれご自分の学校について作られてみてはいかがでしょうか。それぞれの学校のこれまでを踏まえた形のものができるのではないかと思います。

最後に、この支援によるアプローチは生徒を人間として大事にするということだと、私は考えています。そして、人間として大事にされた人、その人が人を大事にすることができるのだと。これが、いうところの全人教育ではないかというように、私はか考えています。

パネル・ディスカッション

「教室に通う全ての生徒が共に成長する 学習環境を整えるために」

パネリスト 保 護 者

立教池袋中学高等学校 教務部長・教育相談委員会委員

自由学園男子部中高等科 副部長

文京学院大学女子中学高等学校 養護教諭

田園調布雙葉中学高等学校 校長

コーディネーター 学校法人東洋大学経営企画本部 参与

今井 絵理子

原 真也

更科 幸一

源田 かおる

滝口 佳津江

川合 正



●川合運営委員（以下、コーディネーター）

午前中は医療の専門家平岩先生から貴重な話を聞くことができました。また、先程は高野先生から、スクールカウンセラーの立場から子どもたちを支援するというのを整理していただきました。これからは、現場の先生方ということになりますが、さまざまな立場からパネリストに登壇していただきました。

今日ご参加いただきました先生方も各学校でそれぞれ障害のある子どもたちと向かい合いながら、格闘されているのではないかと思います。そういう現場から、われわれは今何をしなければいけないのかということを考えていきたいわけですが、悩みも共通のものがあるだろうと思います。

今日は「教室に通うすべての生徒が共に成長する学習環境を整えるために」というテーマで、話し合いをしていきたいと思います。よろしくお願いします。私はコーディネーター役の東洋大学のバリアフリー推進室のスーパーバイザーをやっております、川合と申します。

バリアフリー推進室というのは、視覚障害、聴覚障害、車椅子の子たち、難病の子、また発達障害の子たちの学習を支援し、将来の社会につなげていくという部署であります。そういうところで毎日、学生たちと向き合っていま

す。大学にも障害を持つ子どもたちが多く入学してくるようになりました。また、その子たちを支援しようという学生たちも非常に増えてきて、一つの大きな流れだと考えております。

まずはキーノートスピーチとして、SPEEDの今井絵理子さんからお話をいただくことになります。障害を抱える子を持つ母親の立場、保護者の立場として、お話を伺うことにしたいと思います。学校教育への思いとか、不安、願い、期待などもあるかと思います。いろいろとここでお話いただきたいと思います。

●今井さん

皆さんこんにちは。今井絵理子です（手話を交えて）。

これが「こんにちは」という手話表現で、人差し指と中指を時計の12時に見立てて、「こんにちは」。これはあいさつという手話ですけれども、人と人が礼をしている。あいさつをしている様子を見立てて手話になっています。

今日は昨日と打って変わって、昨日はもう「We can go」を皆さんにやっていただいて、本当にありがとうございます。これからお話することは、歌手、今井絵理子ではなく、一人の聞こえない子を持つ母としてお話をさせていただけたらと思っています。こういうスピーチは初めてなもので、何をしゃべっていいのかわからないのですが、支離滅裂なことも多々あると思いますが、お手柔らかに聞いてください。

息子を出産した日は2004年の10月18日で、私はまだ21歳でした。その病院には、新生児聴覚スクリーニングという、生まれて間もない子の耳の検査というのがあり、生後3日目にその検査を何の疑いもなく受けました。聞こえることは当たり前、見えることは当たり前、歩けることは当たり前と、その当時の私は思っていました。

そして、その検査を受けて1時間後に息子が戻ってきて、その時にお医者さんに告げられました、「聞こえていないのかもしれない」と。私は今はシングルマザーですが、その当時、夫は音楽をやっている方でしたので、どうして私たちのもとに神様は音が聞こえない子を受けただろうと、本当に神様を憎みました。また残念で悲しかったです。

その日一日、受け止められずに、もう息子が「聞こえない、聞こえない、もう聞こえないって」という、その絶望的な気持ちになって、まだこの子の将来の事とか、その時はこの子をどうやって育てていこうなんてことは全く考えもなく、ただひたすら泣いていました。

泣きながら赤ちゃんの息子を抱いていて、ふと顔を見た時、安らかに眠っていました。その姿を見ると、「ああ、この子一生懸命生きてるんだな」と。「一生懸命この世に生まれてきたのに、本当は喜びで満ちあふれてほしいのに、なぜ私はこんな絶望の中にいるのだろう」と思って、まだまだ涙が止まらなかったのですが、その一生懸命生きようとする息子の姿を見て、いろいろなことを思って、少し冷静になった自分もありました。

聞こえないということは目で見える情報が全てなのではと思って、そこで私はある決断をしました。もう今日で泣くのはやめよう。この子が見る世界、まず私から変わっていかねばいけなと。この子を受け止めて、そしてこの子が見る世界を楽しい、素晴らしい世界を作ってあげたいなと思って、そこから耳のことで泣くことはやめようと誓いました。

なぜ一日で立ち直れたのか？ 私の好きな言葉で、こういう言葉があります。「神様が与えてくれた試練だから、乗り越えられないはずがない」。私が10代の時から仕事をしていく中で、勇気づけられた言葉でもあったので、子育てにもこれは通用すると思って、そこで気持ちの変化が現れて、もう耳のことで泣くことはやめようと、生後3日目の息子の顔を見て誓いました。

そこから母として、初めてのことが多すぎました。まず聞こえないというのはどういうことなのかということを知らなければいけな。そして耳の中の構造も知らなければいけな。補聴器のこと、そして病院選びも3箇所くらい、いろいろな先生に出会って、「この先生だ」と思うところに足を運びました。そしてその先生から、「人工内耳」の話を聞きました。皆さんご存じですか？ 耳の中に機械を埋め込んで、信号のようなもので音を拾っていくのです。それから口話法とか。もう初めての言葉だらけでした。まだ21歳の私には、何が何だか本当に分からない状況で、日々が過ぎていきました。ふと立ち止まる時もあったのですが、でも乗り越えられる、自分は乗り越えられると思って一つ一ついろいろなことを悩んで、一つ一つ母として決断をしていく毎日でした。

息子が生後半になった時に、練馬区の富士見台に「聴こえとことばの教室」という教室があり、そこは手話ではなく口話を中心に教えているのですが、その理事長さんとお話をさせていただきました。その時に、改めて、「ああ大事だな」と思うことを教わりました。その理事長さんから、「お母さん、どんな時も笑顔でいなさいよ」と言われたのです。

それはなぜかという、聞こえない子たちは目で見えるものがすべてで、例えば夫婦喧嘩をしていると、何故、喧嘩をしているか分からない。「自分のことで喧嘩しているのではないかな」とか、悲しい顔をしていると、「自分のせいで悲しんでるのかな」と思う障害者の方が多いらしいのです。ですから、「お母さんはどんな時も、毎日楽しく笑顔で生きていってください」と最初にそう言われました。

そして、その教室でいろいろな補聴器の構造や耳の中のことをまた改めて勉強しました。保護者と先生方が集まり、年に2、3回、研究会というものもが宿ともにおこなわれていて、子どもたちは子どもたちで、先生と触れ合って、お母さんたちとも昼間は遊んで、夜は保護者の皆さんと先生方との研究会というものもあって、そこでいろいろなお母さんたちと触れ合う機会もあって、今後どうするとか、将来のことなど、先輩のお母さんたちからいろいろアドバイスを受けてたりしました。

その教室は就学前まで、5歳までしか通えない学校なんです。その学校の良いところは、先生たちがスペシャリストだったということです。何か迷いがあったり、悩んでいたりとするとすぐ対応して頂きました。口話法は本当に難しい訓練で、舌の動きとか、唇の運動とかそういうことを生後6ヵ月の子にさせるのです。最初はやはり抵抗がありました。舌にスプーンなどを入れるのです。話をしていないと、舌が固まっていくらしいのです。見ているのが苦しかったりもしたのですが、そういう訓練を週2、3回、生後6ヵ月から3歳まで、そこに通ってやっていました。

その教室は保育園もありました。その保育園は9割は聞こえるお友達がいて、1割は聞こえないお友達が通う、共に、一緒に生活する場所だったのです。そこに息子が2歳の時に入園しまして、1年間しか経験はないですが、そこで気づいたことがありました。

まだ小さい時、子どもたちが小さい時というのは心も体も本当に柔軟で、本当に考え方も柔らかくて、息子がいても何の隔たりもなく一緒に遊んでくれました。でもそこには先生たちが必ずいて、例えば聞こえるお友達には「礼夢（らいむ）君は」、息子の名前は礼夢と言うのですが、「礼夢君はお耳が聞こえないから、後ろから『おーいおーい』って言われても分からないから、だから肩をトントンと叩いてあげてね」と言ってくれます。そういう理解のある先生たちがいました。補聴器が壊れてしまった、補聴器が少し水に濡れてしまったとかいう時も対処してくれたりする、スペシャリストな先生が揃っていたので、私も安心して息子を1年間通わせることができました。

まだ手話にはその時は出会っていませんが、息子も聞こえるお友達と、少し自分とは違うお友達と一緒にいることで学ぶこと、聞こえるお友達も礼夢と一緒に生活する中で、「あ、聞こえない子にはこういうことをするんだ、こういうコミュニケーションを取ろう」という姿勢が、1年間ですごく見えたのです。なので、今息子は10歳なのですが、その経験は親にとって、私にとってすごくいい経験で、少し視野が広がった経験でした。

そして息子が2歳半の時に、「人工内耳」という手術を受けに行こうと夫婦で話し合っ、いろいろな検査をしたのですが、人工内耳ができない耳だということが、検査の結果で分かりました。それはどういうものかという、耳の中に内耳と蝸牛と、そこからつながっている聴神経というものがあるのですが、息子はその内耳も、蝸牛も、聴神経も、全部ないのです。機械を埋め込む場所は蝸牛なのですが、その蝸牛の部分がなかったため、人工内耳の手術ができませんでした。

でも、その時には私はもう、「じゃあ、次」です。もう次のことを考えなければいけなかったため、人工内耳がだ

めなら、この子には何が一番なのか、この子に合うコミュニケーション方法は何かと考えた時に、一つの選択肢がまた見つかりました。それは今の私と息子のコミュニケーションでもある手話だったのです。話に聞くと、今まで手話というものは聾学校でも禁止されていて、口話法というのが訓練されていました。でも私が入った時には、小さい時から、幼児部から入学したのですが、幼児部から手話を取り入れて生活をしていたのです。

聾学校も都内では3校あって、全部3校とも見学して、息子に合う環境づくり、息子が健やかに育つところはどこかと、いろいろ見学しました。そして今の学校に入学したのですが、私が学校を選ぶポイントとなったのは息子にとって合うか合わないかです。息子の性格、穏やかなほうだったので、穏やかに、そしてゆっくりゆっくり、一步一步成長する子だったので、穏やかな、ゆっくり生徒と向き合える学校はどこなのかなと。先生たちも笑顔が多く、環境がいいと思って、今の学校を見つけて入学しました。

幼児部から今は小学校4年生になっているのですが、そこで幼児部から3歳、4歳、もう手話を覚えるのが本当に早いです。3歳くらいまではコミュニケーション方法をすごく悩んでいたのです。彼が何をしたいのかが分からなかったり、写真とか、絵とかを描いて見せるのですが、もう泣きわめいたりとか、自分の意思が伝わらなくて癇癪を起こしたりとか、私も母として理解できないことの辛さがあったのですが、手話を教えた途端に、彼の表情とか、そして彼の本当にやりたいこととか、もう、すぐさま私に伝えられるようになったことが驚きでした。それでどんどんお友達とのコミュニケーションとか、そういうことを息子は手話も含め、どんどん吸収して、今では小学校4年生です。

今振り返ると、この10年、まだ語り切れないこともあります。母としていろいろなところに息子と、学校見学もそうですが、目で見てきれいだな、美しいなと思える日本の四季とか大事にして育てていました。耳が聞こえないと目で見る情報というのは本当に大事なものです。息子が大きくなるにあたって、字幕とか言語補助のようなものが日本は少ないなと、街を歩いていても思います。学校でもまだまだ足りないこともたくさんあります。

息子が成長していくにあたって、学校のこともどんどん分かるようになってきて、今は聾学校に通っているのですが、何年前かに法律ができて、その時から先生の専門性が問われる学校なのにも関わらず、手話ができない先生が来たり、そういう悲しい現状も目の当たりにしてきました。障害があるないにかかわらず、やはり先生には、学校というものは子どもたちの生活の大半を占めていると私は思っているので、私が希望するのは、そういう特別支援学校、専門性が問われる学校なのにも関わらず、専門家がいなくて、そういう教師がいなくていい社会になってほしい、学校になってほしいなと思っています。そして、私立でも障害者の受け入れるそうなのですが、これは母としてのわがままかもしれませんが、手話も一つの言語だと思っています。ですから、できる限りその障害者、障害児と、できる限り向き合ってほしいなと思っていますし、もちろん先生たちの大変さや苦労も分かった上でお伝えしているのですが、そういう子が来た時に、戸惑わないで温かく受け止めてほしいなと思います。

今日はこれからどんなお話が聞けるのか、そして話せるのか、パネリストの方のお話もすごく興味深いですし、母として今日のこの会で話したことを、また違う形でどこかで伝えていければいいなと思っています。そのように伝えることが私の使命なのかなと思っています。

今日はこんな私の話を聞いていただいて本当にありがとうございます。

●コーディネーター

今井絵理子さん、本当に素敵なメッセージをありがとうございました。われわれ教師にとりまして、少し厳しい注文も出たように感じます。息子にとって合うか合わないかということが視点であるというのは、われわれは学校で、子どもたちを受け入れる時に非常に必要な視点なのではないかというのは少し耳が痛いところです。今後、そういう研修も必要になってくるのだと思いました。

それ以上に今井さんの子を思う気持ち、これが保護者だということを中心に押さえておきたいと考えます。おそらく、障害を持つ子の親は、今井さんのように、皆さんそのような思いで子育てをされているのでしょう。その子たちをわれわれは預かる場合もあります。今日はそういうところへ話が持っていければと思います。

今の保護者の思いというものも当然ですが、学校にも、さまざまな学校があるのですが、今日はさまざまな学校ということで人選をし、それぞれの現場でのことを語ってもらいたいと思います。

おそらく、皆さんの学校にもいろいろな障害を持った子どもたちも入学されているでしょうし、今後はますます増えてくる可能性もあると思います。そういうところが今日、議論で深められればと考えております。

自己紹介を兼ねて、今日のパネリストにお話をいただきたいと思います。

幼稚園から高校までの女子教育を行っている田園調布雙葉中学・高校の滝口校長先生です。

●滝口先生

今井さん、お話ありがとうございました。お伺して、本当に率直な感想として、本校は一人一人を大切に、ということをやっているカトリックのミッションスクールですが、今、保護者としてのお気持ちを伺い、自分自身、例えば、〇〇さんのお母様、△△さんのお父様、□□さんの保護者様などと宛名を書いたりしますが、その方のお名前でお呼びしたことはなかったなと思います。そういう関わり、その保護者の方が一人の男性として女性として、思いを抱えて、障害のあるなしに関わらず、一人一人のお子さんを育てていらして、私どもの学校に預けてくれているという、そういう感覚を忘れてはいけないという原点を、お話を伺いながら、自分の中で思わせていただきました。非常にありがたいお話をいただいたと思います。

本校を少しご紹介いただきましたが、本校は幼稚園で60名、小学校で60名入学し、中、高校では募集をしない120名の集団をそのままお預かりする12年、14年の長い一貫校



です。キリスト教の教えに基づいたカトリックのミッション校で、なぜこんなに長く同じメンバーでというのは、やはり建学の精神を、もう頭とかそういった理論のレベルでなく、生き方の中に刷り込むように大事にする、それにはそのくらいの時間を必要とし、そこを生かして教育活動をおこなっています。

私自身が担任をしていました時に、一人、その頃は中学で数名欠員補充という形で募集をしていました。今はその制度はなくなっていますが、その頃に入学いただいた一人の車椅子の生徒は、担任として関わった時のことをお話しさせていただきます。

個人情報もありますので、あまり深すぎないようにと思いますが、この生徒はもちろん体に障害があり、足が骨形成不全ということで半分くらいの長さしかない子で、身体的な障害もありましたが、小さい頃から院内学級に入っていて、そういった意味で大勢の方とのコミュニケーションが取りにくいという、難しさも持った生徒でした。

今はありますが、当時はエレベーターがありませんでした。4階建ての建物でエレベーターがないため、階段は全部お尻で上がって、腕で支えて、それしかできない。その生徒の入学の際に、「それしかできないけれどもよろしいですか」ということで、各階に車椅子を置き、平面は車椅子で、段差のところ、上の階には全部お尻で上がっていたで、そういう状況でそれをよしとされてご入学いただきました。

ただ、これは、本当にきれいごとではなく、私は中2と中3と2年間担任をさせていただきましたが、一言でいって、難儀だなと思うようなことの連続でした。運動会ひとつ、うちのクラスはどうするとか、この競技はどうやって出してもらえばいいか。そして保護者の方からもいろいろ苦情をいわれました。ただ今から思うと、私自身、感情的には、「ああ、辛いことをいわれた、なぜだろう」、いろいろ思いましたが、そこでぶれなかったのは、私が私学だったからではないかと思います。

私学には建学の精神があり、私たちは、カトリックミッションとして、一人の人間をどう見ていくか、そして一人一人の人間存在にどんな意味があって、そういったところを大事に伝えていく教育をしている学校でしたので、これはぶれてはならない。この方がいってくださることが私たちにとっては本当に嬉しい、ありがたいことだということからぶれることがない力をいただけたのは大きなことだったと思います。

時間がございますので一つだけエピソード申しあげて次のかたにと思います。

私が一番印象に残っておりますのは、本校は4階建てで、中1から中2に上がった時、中2学年は3階で過ごすのですが、特別扱せず、3階で生活するということがクラスを受け持ちました。ただ、この子が3年生になった時、もう一つ上の階の4階に行くのだろうかというのは私自身も心に思っておりました。本校は夏休みに生徒と個人面談をします。本校は本当に面談が多く、子どもたちと毎学期、担任は向き合います。班長会議、教員はお弁当を食べながら子どもたちと向き合っているいろいろな話、クラスの様子、今なにが起きているか、今も続けております。校長も、全員面談を1年間、3学年です、面談で1年が終わるような状況です。

そういう語り合いをしている中で、ある生徒が、「私たち来年4階に行くのですか」。これはやはり厳しい。なんとかできないのかということをお話してまいりましたが、その子とその車椅子の生徒は、特に親しい生徒でなかったもので、どうしたらいいか。私は若かったのであまり良いアドバイスもできず、「仲間づくりをしてみたら、あなたと同じ考えをしている友達と、ちょっと仲間づくりしてみたらどうかしら」。そのくらいしかアドバイスはできなかったのです。でもそれが時を経るにしたがってだんだん大きくなっていって、最終的にはクラス討議です。でもこれもきれいごとでは済みませんでした。一番上の階に先輩として行って、風を切って歩くのが本人たちにとっては望みですし、自分のクラスは良くて隣のクラスがどうか、そういう中で子どもたちがまずクラスから、それから隣のクラスを説得しよう。その中で、本当に本音で、その車椅子の生徒に対しても、いいことばかりいいませんでした。あなたのおかげで担任の先生が私たちよりも取られてしまう、それが自分たちにとっては少し辛い気持ちになることもあるのだというようなこともぶつけながら。

ただ一番その生徒を、端的にいいいますと、嫌っていたある生徒が、このように発言しました。「私は彼女のことは大嫌いです」。本人の前でいいました。「大嫌いだ、目障りだ」。でも音楽の時間に遠い教室に行って彼女がお尻で階段上がってきて、音楽の時間の3分の1ぐらい息が整わなくて、その呼吸の音を聞いているとやっぱり私も胸が痛む。その呼吸の音で、私は下の階に下りることに賛成する。そのあたりから空気ががらっと変わって、結局その学年は3年生になる時に下の階に下り、高校卒業までずっと一番下の階で全員が過ごすことを生徒たちが決めました。

私はその中で、やはり子どもたちの中にある、学校はどうしても教師がああだこうだと指導するというようなことで決めたりしますが、仲間としての子どもたちが生活をする中で、深い共感能力といいますか、**empathy** といったらいいのでしょうか、相手の肺に肺をびたっと合わせるくらい、呼吸を合わせるような、そういう子どもたちの、それこそなんとかする力を引き出して、そして一緒にどういう立場の、障害あるなし、一緒にという、そういうようなことで、どちらが支援するわけでもなく、車椅子の子は周りの生徒たちからそういう、いろいろ何とかしようという知恵、思いやり、葛藤などを引き出す役割をする形での支援を、それから体の元気な子たちは、逆にその子の物理的な部分を支援する。その相互の支援によって共に生きる学校ができるのかなと思います。

そのような経験を心に残し、今日はこれから話が展開してまいりますが、難しい中でみんなで共に支援し合い、みんなが成長していく、そういう教育ができたかと望んでいます。

●コーディネーター

子どもたちの相互支援という視点が芽生えてきている、きたということですね。だいたい前の話のようですが、時代が変わってきておりますけれども、どのようにそれがまた展開していくのか。

続きまして、大正期に女性思想家の羽仁もと子氏によって設立され、開校されました、よく生きる人を育てる、偏差値ではなく人間値ということを掲げて、幼稚園から大学

までの教育を展開している自由学園の男子部中等科副部長の更科幸一先生をお願いします。

●更科先生

私は、自由学園という、東京の、幼稚園から大学部まである学校に勤めております。普通の学校で、特に特殊とかそういうことではございません。私自身は、少し多動、衝動性がある男で、ここにいても実は動きたいのです。話すことも好きです。で、その中で5分間で収められるかどうか分かりませんが、よろしく願いいたします。



本校の特徴の一つとして、自治教育というものを行っています。創立90年以上経ちますが、自治、子どもたちが自分たちの学校、社会を机上の問題解決ではなく、生活の中にある課題を解決していこう、それを子どもたち自身で行おう、ということで行っています。代表的なものは寮です。本校は寮を持っていますが、中学1年生から高校3年生までの生徒が泊まっています。ここに大人はいません。生徒たちだけで運営をしています。本当に大変です。さまざまな問題が起こる。それを見守りながらサポートする教員も大変です。

今週の水曜日も私が夜、学校を出たのは11時40分くらいでした。喫煙をしてしまった高校2年生がいて、その生徒をどのようにサポートしようかということで、高校3年生が夜10時くらいまで寮で会議をしていました。そういった生徒同士の関わりの話を今日は少しさせていただきます。

本校では、最初に中学1年生が入学すると、大体5名から6名の一部屋になります。そこに中学3年生が1人、高校3年生が1人つきます。3月末まで小学生だった生徒は、もう洗濯からなにか全部親がやってくれていた生徒たちです。1年生の時には洗濯も手洗いでしなければいけません。朝も5時半に起きます。そのような生活をするようになるので、もう大変です。その面倒を高校3年生が見るわけです。当然中には発達障害を持った生徒もいます。

寮の最上級生として、4月はみんな意気揚々と頑張ります。目がらんらん輝いています。しかし、5月のゴールデンウィークくらいになると、もうへろへろになっています。それはやはり、高校3年生が親としてその生徒に関わっているからだと思っています。6年生といわれる高校3年生の会議でも、違いについて、自分と違う、通常のものとは違うものを受け入れられない、その生徒の苦悩がたくさん語られます。

「なんべん片づけをしろ、してっていつてもできないんです」ということを、ずっと1ヵ月間苦しみながらいる生徒もいます。個別に呼んで話を聞くと、「先生もう本当に昨日は殴ろうと思いました」ということをいいます。自分が親になった時にもそういうふうな思いは持ったことがあります。高校3年生がそういう思いを持って生活をしています。本当に逃げ出したいのは、実は高校3年生なのではないかと思っています。

しかし、彼らにはその生徒を見守りたいという気持ちがあるというのは信じて疑いません。結論からいいますと、2月、3月、学年末になりますと、一人一人に高校3年生が、あの生徒がやっとここまでできるようになりましたと涙な

がらに語る場面が何度も出てきます。ピアサポートという言葉がありますが、ピアというよりも、もうペアレントミタ的な感じのサポートになっているのではないかと思います。

そのような生徒たちに教員からしていることは二つあります。一つは発達障害とか、そのようなことについてのレクチャーを彼らにします。どういった形で伝えるかはその学年によって違いますが、いろいろな形で伝えていきます。もう一つは、共生、民主的な社会を作っていくためにはどういうことをしたらいいかということのをレクチャーいたします。これはオランダにある一つのピースフルスクールという手法を使って、彼らに対話をもってどのように共生、民主的な社会を作っていくかを身につけてもらいます。

そしてわれわれの学校内では、スクールソーシャルワーカーを10年前から配置しており、また外部機関としては東京学芸大学の特別支援学校が近くにあり、連携をするようにしています。学校だけでできることは非常に限られていますし、大変です。外部の力も借りるようにしています。

最後に一つだけ。そのサポートを受ける生徒も高校3年生になりますと、逆の立場でサポートをする側に回ります。その時に私は二つのことが彼らの中に残っているなと思っています。

一つは彼ら自身が中学1年生の時にとても愛情深く、丁寧に丁寧に愛された、サポートをされたというその経験が高校3年生になった時に、花咲くと思っています。

もう一つは、先程平岩先生の言葉で、子どもを受け止めるというところで、話すことを強めない。どうすれば話す、あるいは意思を子どもに伝えられるかということに関してはわれわれ教師、大人よりも、子どもたち自身のほうが非常に長けているなと思っています。

●コーディネーター

独自の教育理念のもとでじっくりと教育をされているという思いが伝わってきました。

続いて、もっと独自かもしれません。池袋立教中学高等学校教務部長の原真也先生にお願いしたいと思います。中学校から入学者を多く抱えているので、また少し違う立場から話が聞けると思います。

●原先生

東京にある立教池袋中学校・高等学校で教務部長、教育相談室委員会委員をやっています。本校は立教大学に連なる学校で、生徒の約40%程度はさらに下の附属小学校から上がってきます。高校ではほとんど募集していませんので、中学校で約6割、大体90名程度の生徒が入試で入学しております。



入試に関しては今日の午前中のお話もありましたが、2回ほど実施し、いわゆる4教科の入試と、それから2教科プラス面接ということでやっています。本校は男子校で女子生徒はいません。教員もどちらかというと男性教員がほとんどというような状況です。

私立学校ですので、年に何回か学校説明会等を開いておりますが、その折に、障害を持っているけれども、受験することが可能なのか、あるいは学校生活を過ごしていける

のかどうかという相談を受けることがここ数年多くなってきていると感じています。その際、学校として受験するしないは保護者の方に決めていただくということですので、こちらが云々ということは申しあげられないわけですが、学校としてやはり、できることとできないことがあるという話はさせていただいています。無下に受け入れても、その子が学校の中でうまくやっつけられるかどうかということをよく相談して、考えていただきたいということです。

特に私学ですので、公立学校のように補助金が出るとか、それから補助の者をつけるとかいうことはすぐにはできません。ましてや設備を整えるということもそう簡単にはできない面もあります。そういうことをすべて踏まえた上で、どこまで自分でやれますかという、学校生活をどこまで入学後一人でできますかというようなところを前提に話をさせていただいています。その上で入学、受験ですので一定の力がある場合には入学の許可を当然学校としてはしています。

現在も足に障害を持っている生徒がいます。それから数年前には若干聴覚に障害がある子がいたり、基本的に学校生活が自分でできる範囲であれば入学を許可しているという状況です。

あと一つ、ここ数年発達障害の生徒が非常に増えてきていると感じています。特に、入学をして、入学式が終わって1週間くらいしたところで、新入生は保護者会を行います。その際に保護者の方が来られて、実はうちの子どもは小学校の時にこういう、例えば通級に通っていた、医療機関からはこういう診断を受けていて、小学校の時にはこのような対応をしてもらっていた。だからよろしくお願ひしますというような相談を受けることが実際に増えてきています。

なぜ入学前にということはいえませんが、分かりましたということで、では、ご家庭としては、学校に対して何をご希望されますか、こういうことを学校としてやっていただきたいというようなことを伺いながら、対応していくというケースが増えてきています。

私は現在、教務部長という立場です。学級担任は持っていません。その分、相談室委員という役割がありますから、担任をサポートする形で数人の生徒のフォローをしています。定期的にそういう発達障害の子どもと面談をして、授業でうまくやっているとか、あるいは中には学習にいろいろ、多少難を持っているような子も見受けられるので、そういう生徒のフォローなどもしています。しかしその分、やはり自分としても何も知らない中でこういう仕事もできませんので、多少発達障害については勉強をして対応しています。

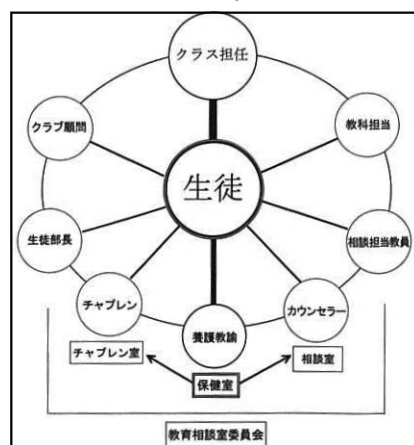
そういう勉強をした中で、今日の午前中の平岩先生の話にもありましたが、少し捉え方を変えてみると、生徒の見え方がかなり変わってくると思っています。それは話にありました通り、障害を持った〇〇君ではなくて、「〇〇君はこんなことが得意で、こんなことが好きで、こんなことも得意なんだけど、でも少しここが不足してるとか、あるいは少しここが彼としては障害なのかな」とかというように見ていくと、見え方も変わってくるなと思っています。

教室では、担任の先生方にも少し話はするのですが、例えば視力が少し弱い生徒だったら、少し座席を前にすると

か、あるいは聴覚でも、多少障害を持っていれば少し前の席にするとかいう配慮はします。これは通常、普通にやっていることですが、ではその時に、いろいろなものが視野に入ってしまうと落ち着かないという生徒であれば、少し前に席を出してあげるということでもうまくやっつけられるなら、そういうことを考えてやればどうかという話も、校内でしたこともあります。

先生方の仕事も非常に忙しくて、いろいろなことに対応しなければならないということもあるわけですが、時間があればこういう障害を持っている生徒も含めて、同じ教室の中で一緒に生活していくにはどのようにしていけばいいのかというようなことも、学内で話題として取りあげられるといいのではないかと考えております。

最後に、先程高野先生から話がありましたが、この図は実は現在、本校で行っている相談体制の図で、保護者の方にも、本校ではこのようにしてやっていますよということを、入学後に話をしています。一番下に教育相談室委員会



というものがあって、この全体を支えていくという形になっています。生徒はとにかく相談しやすい先生、誰でもいいということです。

前校長が、「本校では教師は全員カウンセラーなんだ」ということもしっていましたので、教員はそういう姿勢で臨んでいこうということでやっています。ですからクラス担任、クラブ顧問、教科担当教員、生徒指導教員がいたり、それからキリスト教の学校ですから、牧師、チャプレンという者がいたり、養護教諭、スクールカウンセラー、私のような相談担当委員がいたりして、いろいろな立場の教員が関わっていく。

相談室委員会というものが週1回開かれます。この委員会は基本的に生徒指導の主任、牧師、カウンセラー、養護教諭、相談担当委員、現在全部で7名ですが、その7名の教員で週1回会議を持ち、いろいろな部署からあがってくる生徒についての情報を交換して、場合によっては担任にその時の委員会に来てもらい、担任と共にどうフォローしていくかを相談したりして進めています。

私たちの学校の現状をお伝えいたしました。参考にしていただければと思います。

●コーディネーター

どの学校でも今問題になってきている発達障害の子どもたちを、おそらく抱えているのではないかと思います。そういうところへ、人材、フォローしていくという体制などいろいろな取り組みをされていると思います。それぞれで、教え合い、より良く対応ができればいいと思いました。

同様に中高一貫校で、女子校の例として、文京学院大学女子中高校の養護教諭の源田かおる先生です。養護教諭の立場で、少し違う視点から、また大きな学校ですので、そ

のような点で悩みがありましたらご紹介ください。

●源田先生

今回は、私は養護教諭という立場で障害を持つ生徒やその保護者とのアプローチについて少しお話ができればと思っています。

現在の勤務校ですが、十数年前に新校舎になり、バリアフリーが整っている校舎になりました。その関係もあり、車椅子の生徒が入学してくることが多々あります。現在も特別支援の必要な生徒たちが入学し、共に生活しているような現状になっています。そういう生徒が入ることが入学前に分かりましたら、疾病や障害の程度などを聞くということで、保護者、本人、学校側から管理職、学年代表、そして養護教諭というメンバーで1度、入学前に話を聞くということをおこなっております。

入学前にその生徒の疾病、また現状や小中学校でどのような生活をしていたのか、学校で何か問題はなかったのかということを知ることにより、教科で問題が出てくるかどうかという見立てができます。そして入学前に教科で話し合いをし対応が出来るような体制を取っています。

その話をする時に、保護者の方や本人などは、中学の時には介助の人がいたので、特に問題なく体育ができていた。しかし本校に入ることによって、介助の方はいないので、できない種目が出てきますよということにどうしても納得がいけないという生徒も出てきます。そういう時に何故できないのかということ、ゆっくりと分かるように話をしていくということが大切と思っています。本校は普通の生徒と同じように生活をしてもらうということが原則となっていますので、学校としてこういうことはできる、できないということをその場で話をするように心がけています。

特に保健室として、養護教諭としてどういうことをその場で話ができるかということ、安全面というところで気になる点を話しています。学校生活が安全に3年間、6年間送れるということが一番大事なことだと思っていますので、安全に暮らせるように、共に考えていこうということを話します。また、保健室が来やすい場所になるように、保護者の方や本人に保健室の場所を理解してもらい、いつでも何かあれば来てよいということを伝えていきます。

障害を持ったお子さんは学校生活を過ごす中で、問題点やいろいろな心の悩みを持ちます。友人関係や勉強の面等でいろいろと問題を抱えてきます。その時に一人で悩んでしまうことが多いのです。コンプレックスを持っているので、何とかこの学校で一人で頑張っていかなければと頑張るのですが、そこで体調面を崩してしまうということが出てきます。そういう時に保健室に来てよい、保健室で話ができるということが理解してもらえるように、入学前から話ができるようにしています。

ですから、現在も保護者の方や本人が困っている時はなるべく来て、学校ではこのように考えている、担任はこういうことを考えているということを話しながら、担任や学年の懸け橋ができるようにと思い話している現状です。

本校にも発達障害の生徒がいます。発達障害の生徒は、どちらかというと入学前は分からずに、入学してから何ら



かの問題が生じてくると思います。パニックを起こしてしまったとか、そういうことで分かって、保健室と関わることがよくあります。発達障害の生徒を受け持つと、担任が一番気苦労をすることが多くなりますので、私もなるべく関わるようにしています。

先程の高野先生の話でもありましたように、チーム支援ということが特に大事になってくると思います。発達障害の生徒は、いろいろな面に出している顔が違ったりするのです。教科によってもできるものとできないものの差が、かなり出てきますので、いろいろな方たちと話し合いながら、どういう点がいいのか、どういうところを直していけばよいのかという話し合いができるようにチーム支援を考えていくように心がけています。

例えば薬の影響で、保健室で寝てしまい起きられなくなってしまうといった場合、単位のところで難しくなってきたりします。

なるべく単位を落とさないように過ごしていくためには、学年と相談しながら、どのくらい休むことが可能なのかを考えながら進めていきます。

でも一生懸命行かせようとしてもパニック発作を起こしてしまうこともあるので、主治医の先生と相談しながら進めていくこともあり、医療・保健室・学校という体制も必要です。

また、アスペルガーの生徒は、少し人を傷つけてしまうようなことをいってしまうこともあります。他の生徒が保健室に、どうしてあの子はこんなことをいうのかなと聞いてくることがあります。その時に、なぜあの子がこういうことをいうのかということを知りやすく話をし、なるべく友達関係がうまくできるように考えています。保健室というのは個々で対応することができる場所なので、その個々で対応できるということを大事に思って仕事をしています。

●コーディネーター

4校ともそれぞれの特徴があり、障害を持つ生徒たちと向き合っているということがよく伝わってきました。おそらく会場の皆様の学校でもそれぞれに思いがあったのではないかと思います。4例だけではないわけで、ここにいらっしゃる全員、100校のそれこそ実践があるのですが、私学にはこのように取り組んでいるというところははっきり見えてきます。

ただ、法律が出て、内閣府等もいろいろ指示を出してきています。後半はそれを踏まえた上で、私学は一体何をやらなければいけないのかということまで踏み込んだ議論にしたいと思います。

ピアサポートという話が出ていましたが、ピアサポートをしていく、子どもたち同士で子どもたちの面倒を見ながらというように、自由学園でも実践し、また学校で組織として対応していく、いろいろな視点からアプローチをしていくという学校、それからチーム支援をしていくという話も聞きました。皆さんの学校もこのような中で対応されていると思うのですが、さらにわれわれにいろいろな大きな課題が突きつけられてきています。

前半でいろいろな思いや実践を聞きましたが、資料として、文科省のホームページに掲載されている特別支援教育の対象の概念図ですが、本日扱っている障害というものを

単なる発達障害ではなく、視覚、聴覚、それから肢体不自由、難病、また学習障害等々、いろいろなものを含めています。この図はどの程度あるかという概念を作っています。



通常の学級を見ていく中で、かなり私学にも多く来るようになっていくということになりますが、発達障害者支援法ができて、当然、親たちから大変な要望が学校に出てくるようになりました。「うちの子は障害があるからこうしてください、ああしてください」ということが出てきているわけです。その対応をこの10年くらい先生方もされてきたのではないのでしょうか。

今や、大学にその波が押し寄せて、どの大学も悲鳴をあげています。発達障害の子どもたちがかなり多く入ってきていますから、教授たちの固い頭ではどうしようもないです。だからその教授たちの頭を柔らかくするというのが私の役目でもあるのですが、そのようなことが今起こっています。

先生方もご存じの通り、昨年の6月26日に公布された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」、障害差別解消法と呼ばれるのでしょうか。これは法律になりましたから、当然罰則がついてきます。28年以降は、これに対して罰則もついてきますよということになってきますので、もう一度、基本ですから確認だけしておきます。

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（平成25年法律第六十五号）

第一条 …全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資することを目的とする。（後半の一部）

第八条 2 事業者は、その事業を行うに当たり、障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において、その実施に伴う負担が過重でないときは、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、当該障害者の性別、年齢及び障害の状態に応じて、社会的障壁の除去の実施について必要かつ合理的な配慮をするように努めなければならない。

（施行期日）

第一条 この法律は、平成二十八年四月一日から施行する。（但書きは、省略）

第一条、最後のところ。目的です。第一条の最後の部分がこれです。共生する社会、教室の中にいろいろな子たちがいますよ。そういう社会を作っていくのですよとい

うのがこの法律であるわけです。

では、私学にどこが関係するかというと、第八条の2です。「事業者」というのが、私学の場合は経営者または理事会となるのでしょうか。「負担が過重でない時」、もう一つのポイントは、「合理的な配慮」とは一体何なのかということが、当然われわれの学校に突きつけられてきているということになります。今は準備期間ですが、28年4月1日からは施行するということになっていますので、この但書きがあるわけです。これ以降も但しというものはあるのですが、これとこれとこれは先にやりなさい、準備しなさいということが書いてありますので、詳しいことは実際にホームページの中で調べていただければと思います。

われわれはこの法律を見ながら今後学校運営をしていかなければならないというところで、この議論を始めていきたいと思います。少し難しい問題になってきます。われわれはそれぞれに対応しています。それぞれで自分たちの良いと思うことをやってきているのですが、さらに今後はこの法律に縛られた何かが出てくるのでしょうか。そういうところでこの法律を見ながら、滝口先生から、少し話を始めていただきたいと思います。

●滝口先生

今、川合先生がお読みいただいたところですが、正直申して、ここが大変、私学の苦しいところではないかと実感しています。「その実施に伴う負担が過重でない時」、やはり私学経営というものを考えた時に、財政的な負担であったり、それからマンパワーの問題があると思います。専門家の先生を、例えばサポートのためにすぐお願いするというような体制など、まだ整っていないというのが事実、実際のところだと思います。

どちらかという目に見える身体障害の方だと何をしたらいいかということが分かりやすいのですが、目に見えないような、例えば耳が聞こえないというのも、どちらかという、すぐに分からないことがあります。それから支援を必要とする問題であったり、そちらに対しては本当に過重負担にならないというわけにはいかない。ですからそこをまず何とか、私学として、補助金の問題もあります。そのようなところを整えないと、自分の学校だけの努力ではどうにもならないと感じています。

本来であれば、過重負担どころか、逆にいろいろなタイプの生徒がいることによって、生徒たちがより豊かに、先程の本当に小さな例ではありますが、いろいろな生徒たちが、それこそこれからのグローバル社会でいえば、国同士の文化の違いがある中で共生していくのと同じで、いろいろな人間が共に、一方的な支えだけではないというようなことをしていくことが、建学の精神からも分かっているから、そこを実現化するには、お金の問題といいますが、過重でない負担の部分に手をつけない限りは、非常に苦しいというのが実情と感じています。

ただそれでは、できない理由だけを並べて、これがあるからできないでは進んでいきませんので、今、目の前にいる、ご縁もあって入学していただいた中で、支援が必要と分かった方々に対して知恵を絞って、近くの公共施設と協力したり、勉強会を開いたりしています。私たちの学校は先程申しあげたように、小学校から同じメンバーですから、小学校の段階での早い時期での指導体制を組んで、そして

小、中、高の連携をより深め、校内で努力をし、また、校内研修会を開いたりしています。

そういう努力とそれから保護者への教育といえますか、こういったことを分かっていたかための保護者教育、特にお父さんたちの理解というのが結構大きいと思います。お母さんたちだけではなく、父親の会のようなところでこのようなテーマで、一生教育していくことの大事さというようなことを話しています。理念的なところは努力いたしますが、実際の現実のマンパワー、それからお金の問題のところでは、本当に苦労しているというのが正直なところではあると思います。

これでは解決につながらない、困っているということを述べるだけにとどまってしまうのですが、そこに手をつけるということが大きな課題であると思っています。

●コーディネーター

私学も経営ということを考えると、今のところは大きいです。マンパワーとそれから施設というものが充実しなければいけないとなると、当然財政問題です。その財政を人件費、または施設拡充費、修理費等々、非常に大変な問題があります。ただ、今少しいつていただいた、教員たちの研修会、それから、学年との連携、それと保護者、特に父親を巻き込んでいく。このことはおそらくやっている学校も多いと思うのですが、どうでしょうか。パネリストの方々でこの点について話していただける方はいらっしゃいますか。源田先生は保健室の立場で、「合理的配慮」の例を見てもらいながら、これはとてもじゃない、できないというようなものがあつたりするのでしょうか。

先生方もこの「合理的配慮」、これは文科省の挙げた一つの例ですが、入ってきた場合はこういうことをしなければいけなくなってくるということなのでしょう。特にわれわれにとっては、発達障害の生徒は分からないで入ってきます、学力の高い子が。そのような問題もありますので、全体を見ながらどうでしょうか。

別紙2 「合理的配慮」の例

1. 共通

- ・バリアフリー・ユニバーサルデザインの観点を踏まえた障害の状態に応じた適切な施設整備
- ・障害の状態に応じた身体活動スペースや遊具・運動器具等の確保
- ・障害の状態に応じた専門性を有する教員等の配置
- ・移動や日常生活の介助及び学習面を支援する人材の配置
- ・障害の状態を踏まえた指導の方法等について指導・助言する理学療法士、作業療法士、言語聴覚士及び心理学の専門家等の確保
- ・点字、手話、デジタル教材等のコミュニケーション手段を確保
- ・一人一人の状態に応じた教材等の確保（デジタル教材、ICT機器等の利用）
- ・障害の状態に応じた教科における配慮（例えば、視覚障害の図工・美術、聴覚障害の音楽、肢体不自由の体育等）

2. 視覚障害

- ・教室での拡大読書器や書見台の利用、十分な光源の確保と調整（弱視）
- ・音声信号、点字ブロック等の安全設備の敷設（学校内・通

学路とも）

- ・障害物を取り除いた安全な環境の整備（例えば、廊下に物を置かないなど）

- ・教科書、教材、図書等の拡大版及び点字版の確保

3. 聴覚障害

- ・FM式補聴器などの補聴環境の整備
- ・教材用ビデオ等への字幕挿入

4. 知的障害

- ・生活能力や職業能力を育むための生活訓練室や日常生活用具、作業室等の確保
- ・漢字の読みなどに対する補完的な対応

5. 肢体不自由

- ・医療的ケアが必要な児童生徒がいる場合の部屋や設備の確保
- ・医療的支援体制（医療機関との連携、指導医、看護師の配置等）の整備
- ・車いす・ストレッチャー等を使用できる施設設備の確保
- ・障害の状態に応じた給食の提供

6. 病弱・身体虚弱

- ・個別学習や情緒安定のための小部屋等の確保
- ・車いす・ストレッチャー等を使用できる施設設備の確保
- ・入院、定期受診等により授業に参加できなかった期間の学習内容の補完
- ・学校で医療的ケアを必要とする子どものための看護師の配置
- ・障害の状態に応じた給食の提供

7. 言語障害

- ・スピーチについての配慮（構音障害等により発音が不明瞭な場合）

8. 情緒障害

- ・個別学習や情緒安定のための小部屋等の確保
- ・対人関係の状態に対する配慮（選択性かん黙や自信喪失などにより人前では話せない場合など）

9. LD、ADHD、自閉症等の発達障害

- ・個別指導のためのコンピュータ、デジタル教材、小部屋等の確保
- ・クールダウンするための小部屋等の確保
- ・口頭による指導だけでなく、板書、メモ等による情報揭示

●源田先生

「合理的配慮」の例というのがいろいろと、1から9までたくさん載っていますが、養護教諭の立場からの観点で見えていくと、まずは5番、6番の肢体不自由、病弱、身体虚弱の生徒たちが保健室には一番関わってくると思っています。どの生徒もそうですが、先程いいましたように、まず安全で生活できることが大事になりますので、車椅子の生徒、ここにもありますように、「車椅子、ストレッチャー等が使用できる」と書かれていますが、実際本校はバリアフリーになっていますが、生徒と一緒に回ってみると、まだちょっとした段差があり、そこが難しいということがよくあります。

私から見ると、「これは段差なのかな」と思うものであっても、その生徒の視点で、その生徒の感覚でいくと、少し坂が急で上りにくいか、手すりの位置がその子には合わないとか、右と左のどちらに手すりがついていたらいい

かなど、その生徒によっていろいろと施設面が変わってきいたりします。トイレの位置についても、トイレに少し物が置ける台が必要な生徒もいたりというように、一人一人に対して施設面が変わってきているので、そういうものを一つ一つ考えながら配慮していくというのがこの「合理的配慮」になってくると思っています。

本校でも弱視の生徒が入ってきた時に、拡大教科書というものを利用したのですが、そのように個人で利用できるというものは簡単に購入をして対応できるのですが、学校全部を少し改装したりということになってくると、この「合理的配慮」は難しい点が多くなってくるとしており、個人的にはこのような障害のある生徒が入ってきた時に、専門家の知識ということがとても大事になってくると思っています。スクールソーシャルワーカーの助言なども必要になってくる。この「合理的配慮」のどれを使うとか、どういうものがいいのかも、そういう専門的な知識が今後は特に必要になってくると思いました。

●コーディネーター

施設としてはバリアフリーですね。新しく建てる時はいいですが、すでにある校舎をバリアフリーにしていこうというのは大変なことです。先程の滝口先生の学校で、上に行かないで1階でずっと過ごすとか、子どもたちから声が上がったというお話がありましたが、そういう工夫はあるかもしれません。それでも今のような段差、ちょっとした段差、そしてまた、視覚障害の生徒に対するいろいろな配慮。そのようなことも見ると非常に大変な財政負担があるということでした。

さらにもう一つはソーシャルワーカーのような専門家が学校に必要なようになってくるのではないかと。これもまた人件費になるのです。そういういろいろな問題が出てくるのですが、自由学園ではどうでしょうか。

●更科先生

ソーシャルワーカーの方は、本校は常駐ではないので、大体週に1回来ていただいています。ただ、われわれの中では、これから出てくるインクルーシブ教育ということが、これからの時代を考えていく上において必要です。今それを現状ではスクールソーシャルワーカーと、あとはスクールカウンセラーの方たちとも、今後は考えていかなければいけないということで、委員会は発足はしています。

●コーディネーター

それを考えるために委員会が発足したのですか。平成28年に向かってですか。

●更科先生

そうですね。インクルーシブ教育を考えるというところでできています。

●コーディネーター

もう取り組みをされているわけですね。原先生の学校ではどうですか。バリアフリーとか、ソーシャルワーカーというのは。

●原先生

本校は校舎は2000年に建て直した時にバリアフリーの校舎になっていますので、その点に関しては今あまり問題はないかと思っています。ソーシャルワーカーというのは、まだそこまでは考えていない状況です。

●コーディネーター

源田先生、ソーシャルワーカーというのは学校でどのような仕事をするのですか。

●源田先生

特に福祉的な面で専門的な方だと理解しています。私学の場合は財政的な問題で困難な生徒はそんなにいないと思うのですが、公立等の場合であれば、そのようなことも考えていかれる方だと聞いています。特に私立とかに入っている場合は福祉面、障害のある子どもたちがいる場合に、その福祉面でどういう対応ができるのか。例えば介助の人を入れてあげるのかとか、援助の補助がどれくらい出るのかとか、そういうものを一緒に考えながら専門的に話に入っていただく方と理解しています。

●コーディネーター

福祉等で援助してもらったりするわけですね。外部とつながったり、ボランティアの人に介護に入ってもらったりですね。本校も発達障害の学生には、大学ではそういうボランティアの方に来ていただいて授業と一緒に出てもらうとか、ちょっと調査してもらおうとか、見てもらうとか、観察してもらおうとか、そのようなことをやっています。そういうことがソーシャルワーカーなのですね。

更科先生から出てきたことに入っていくと、インクルーシブ教育という言葉が出てきました。これがおそらく今の内閣府、文科省の流れになってくるとのことなのでしょう。そちらへ進んでいいですか。その前に何か、ソーシャルワーカーなどについて意見はありますか。

●今井さん

ソーシャルワーカーという、福祉専門家、そういう人がいらっしゃるのですね。その人は障害をお持ちの方なのですか。私が今ふと思ったのは、やはり障害者は当事者しか分からないものがあると思うのです。例えばバリアフリーだと思っていても、実際車椅子の人たちが使ってみたらバリアフリーではなかったという声も聞きます。ですのでそういったソーシャルワーカーという方は、できればその当事者、障害者の大人の人だったりとか、例えば聴覚障害だったら、聴覚障害者の大人の方たちの意見を聞き入れるとか、そういう当事者の話を聞くというのは、今の話を聞いて、すごく大事なことはないかと私は思いました。今後そういうことが、どんどん変わっていく時に、障害者の大人の人たちを巻き込んでみるとどうなのかなと思いました。

●コーディネーター

その視点ですね。また大学の話で申し訳ないのですが、本学では2年前にバリアフリー推進室を作ったのです。大きい部屋に、学生たちが集まりだしました。車椅子の子とか、視覚障害の子とか、聴覚障害も。するとクラブができたのです。「歩み」というクラブなのですが、そのクラブの人たちが、全員で駅から、電車を降りてから学校まですべての人が来れるかどうかということを調査して、「ここは無理」とか「ここは大丈夫」とか、自分の教室まで行けるかということです。そういうことをやっていました。障害者自身で行ったから、確実な地図なのです。「あそこは自転車が多いからやめろ」とか。「あっちから降りないでこっちから降りろ」とか、いろいろなことを指示してあるのです。

今井さんの話を聞いて、そういう視点はものすごく重要

だと思いました。是非やる時にはそういう方の意見も聞きながらやる。視覚障害の方などは、自転車置いてあったり、物が置いてあったりで、道路が怖くて本当に歩けないといいます。聴覚障害もそうです。音が聞こえないわけだから、ほんとに大変な思いをされている。

●今井さん

私の息子が通っている聾学校には聾の先生が、2、3名いらっしゃるのですが、やはり同じ気持ちで、同じ立場なのものすごく心が通うのです。その聾の教員しか気づけないことだったりとか、やはりその当事者でしか気づけないことはたくさんあると思うので、是非そういうことも少し視野に入れて実践していただきたいと思います。

●コーディネーター

今後、改革をする時に必要な視点をいただきました。

先程、更科先生のところで話のあった、インクルーシブ教育、内閣府の障害者基本計画、25年の9月に出たものですが、これを25年から29年までにやるということが発表されているということですが、原先生がこれについては詳しいと思います。原先生、少しインクルーシブ教育について、初めて聞かれた方もいるかもしれませんので少し解説していただけますか。

内閣府『障害者基本計画』（平成25年9月）平成25年～平成29年教育、文化芸術活動・スポーツ等

（1）インクルーシブ教育システムの構築

○ 障害の有無によって分け隔てられることなく、国民が相互に人格と個性を尊重し合う共生社会の実現に向け、本人・保護者に対する十分な情報提供の下、本人・保護者の意見を最大限尊重し、本人・保護者と市町村教育委員会、学校等が、教育的ニーズと必要な支援について合意形成を行うことを原則として、市町村教育委員会が就学先を決定する仕組みを構築する。また、以上の仕組みの下、障害のある児童生徒の発達の程度、適応の状況等に応じて、柔軟に「学びの場」を変更できることについて、関係者への周知を促す。

●原先生

インクルーシブ教育というのが、昨今よくお聞きになるようになってきたのではないかと思います。特別支援教育の推進が2007年から始まっていますが、ちょうどその時に日本政府が「障害者の権利に関する条約」というものに署名をして、今年の2月にその条約が発効しています。ですから、それに向けて、実際に国内ではどのように進めていくのかということで日本政府もいろいろ動いているようで、その中の国内整備の一環として、このインクルーシブ教育を導入していくということが、文科省を中心に、中央教育審議会などで決めていっているということです。

高野先生の話の中にも出てきました通り、障害を持っている人、持っていない人が一緒に学ぶということが非常に大きな点になっていると思います。インクルーシブですので、包容するとか、受け入れるという、そういう教育制度ということです。しかもそれが地域で初等教育や中等教育の機会がきちんと与えられること、しかも与えられて、さらに合理的な配慮が提供されることということになっています。法律が作られて、そういう教育を進めていきなさいということでやっていますので、私学だから知りません

というわけにもいかない状況にあるわけです。

先程申しあげたとおり、最近学校説明会でもいろいろな障害を持たれた方が来るというのは、やはり障害を持っている方からすれば、少しでも自分の子どもが良い環境で教育を受けることができないのかということで、いろいろな情報を求めて、場合によっては地方から東京までわざわざ来られて、「立教池袋高校ではこういう生徒を受け入れてもらえるのでしょうか」というような相談にも来られるわけです。

さらに、こういう法律がある、それからこれが施行されて、こういうふうになっていきますよというのが、ごく普通に日本の国内で語られるようになってくれば、ますます、「うちの子どもはこういう状況だけでも、受け入れてもらえるでしょうか」という保護者の期待ということがあるのではないかと思います。

ましてや、私学というのは保護者の方から見ても、公立とは違うことをやってもらえるのではないかと、一人一人の生徒を見てももらえるのではないかと、そういう期待も非常に感じます。ですから、障害のある者となない者が一緒に学ぶというところを実際どのように学校の中で展開をしていけばよいかということは、考えなければならない時がくると思います。しかもそれは10年、20年先のことでなく、ここ数年のところでやってくるような状況ではないかと思っています。私は教務部長という立場ですので、単に設備とかマンパワーだけでいいのか。立場的に思うのは、自分の学校のカリキュラムも今のままでいいのかどうか。私の学校は、例えば保健体育であれば、さまざまな種目がありますが、その種目の中からいくつかの種目ができれば合格にしようとか、そういうカリキュラムを組んでいます。だから、全員の生徒が同じものできないと、できなかったところはやりなさい、やりなさいではなくて、できるところで、やれるもので単位を認めていこうと。どちらかというと実技系にはそういうところが多いものですから、さまざまな障害にも多少は対応していけると思うのです。

しかし、私の立場の仕事の中では、筆記試験のある科目はどうなのかなというところでインクルーシブ教育でカリキュラムはどうすればよいかということを考えているところです。答えが出ているわけではないのですが、いずれそういうことも考える時がやってくると考えています。

●コーディネーター

共に学ぶという時に、そのカリキュラムに関係してくる。共に学ぶという時に、共生ですから、一緒に学ぶということの中で差が出てくることがあります。

●原先生

だから共に学ぶという中で、要するに同じ単一の教材で一斉にというやり方は、本校などの場合はまだその古いやり方を取っているものですから、それではやり切れなくなるだろうということなのです。

●コーディネーター

先生方、インクルーシブ教育のことは大体お分りですか。文科省のホームページには入っているのですが、インクルーシブで検索すれば、かなり長い文章で細かく指示されていると思います。平成29年までにはやっていかなければいけないということなのです。これを見ながら、更科先生のほうで少し分析していただけますか。

●更科先生

インクルーシブ教育を「よく知っている」、「知っていた」、「全く知らなかった」ということを教えていただきたいのですが、「よく知っていた」方は“パー”、「知っていた」方は“チョキ”、「全く知らなかった」方は“グー”で手を挙げていただけますか。ご協力ください。

ありがとうございます。

おそらくこれは、100年後には間違いなく日本にもインクルーシブ教育がしっかり浸透しているだろうと思います。50年後はどうかと思います。10年後はもっとどうかと思います。切って考えられないのが人権ということだと思います。もう一度先生方に質問させてください。インクルーシブ教育と人権ということが比較的つながるなという方はいらっしゃいますか。いらっしゃったら手を挙げてください。

私がいうこともないのですが、日本の人権ということ、人権状況というのでしょうか、国際社会からかなりバッシングを受けていると思います。国際の基準と日本の基準というのは、ずいぶんずれてしまっているところがあります。私たちは障害のある方と、障害が「ある」、「ない」という二分法でずっと育ってきてしまっていますので、そこになかなか分かれ目があるのです。でも、その分かれ目をなくしていく。共同の社会を作っていくということが、世界の主流になってきていると思います。

ですから、例えばオランダに行くと、子どもたちがあいさつがわりに、「こんにちは。僕はディスレクシアです」とか、「LD です」ということを平気で出します。自己紹介の時にも、学校でもそういうことが出せるという環境になっています。ということは、その違いというものに関して彼らは恐れがまったくない状況なのだと思います。

私自身の話をすると、インクルージョンの啓発、インクルーシブ教育ということを考えた時には、自分の反省から入りました。私の中にある差別性、差別化があるなど気づきました。自分がとても違いを恐れているのです。それに気づいて、その後に自分でそこを学んで、動いて、知っていくことしか解決はないのではないかと思います。

ですから、最初に私は少し多動がちで、衝動性がありますという話をしました。先生方の中にもいろいろなものがきっとあると思いますし、誰でもそういったものはあると思うのです。それが少し大きい小さいとか、いろいろなものがあると思います。でもわれわれ自身がそういった教育をなかなか受けずにきてしまっていたので、とても怖いことだろうなと思っています。

学校の中でこの教育を進めていくためには、まず私はこの人権のところから学校内の先生方と共有をしていかない限りは、形ばかりのインクルーシブ教育になっていくのではないかなと思っています。それが行われていくと、子どもたちにとって、もっと私は悲惨な状況が招かれるのではないかなと思っています。きれいな建物だけ揃えればいいのか、周りでサポートしているふりが出てきたりとか、そういったものというのは、必ず伝わりますので、われわれ自身が違いというものを受け入れられる。これはもっと落とし込んでいくと、職員室の先生方のお互いのあり方にもつながると思います。いろいろな違いがある中で、それを本当にわれわれ自身が受け入れられるかということです。

中には非常に語るのには上手だが、事務処理がとても苦手な先生もいる。いろいろな先生方をお互いに思いやって、違いを受け入れられるかということにもよるのではないかな。そこを子どもたちはとてもよく見ているので、いくらインクルーシブ教育だといって形を作っても、職員室を見たら、「先生たち、あの人はああいいう仲で、あのグループはこうで」というのはぱっと見抜きすぐにはばれてしまうだろうなと思っています。まず先生のあり方が問われるのではないかなと思っています。

では、子どもたちにどうすればよいかというところで、私自身は、教員が違いを楽しむ、享受するということでしょうか、それができると子どもたちが、子どもたちにも必ず内在化している違和感があると思うのです。それに対して素直にそれを教室空間で語れる雰囲気とかが出るのではないかなと思います。ですから、まずはインクルーシブ教育をする時には、法律からというよりも先生方の気持ちとしてのあり方から作っていくのが私はいいいのではないかなと思います。

●コーディネーター

多様性、今後の日本の社会は多様性になり、いろいろな民族が入ってきて、いろいろな人がいて、その違いを認めていくというのが、この発想なのですが、それができるまでには100年かかる。そこについてはどうですか。

●更科先生

100年かかるのではなく、100年後には必ずそういう日本になっていると思いますし、いち早くそういう社会になってほしいなと思います。そのために私の中では30年くらいと思っています。というのは、今の親はどうしても違いが怖い世代ですから、私立に入れている親からして、いきなり「インクルーシブ教育です」、「もう全部変えます」といったら、「なぜですか」ということで始まると思います。「うちの子の勉強はどうなるんですか」という人も必ず出てくると思います。

ところが、インクルーシブ教育を受けてきた子どもたちが親になった時に、その世界が変わっていくのではないかなと思います。一緒に自分の教室にいろいろな違いのある人たちがいて育った人たちが親になる世代までは、本当の意味でのインクルーシブ教育は難しいのではないかなと感じています。

●コーディネーター

今の子どもたちを教える教師は少なくとも違いを認め合う先生でなければいけないということですか。

●更科先生

そうですね。

●コーディネーター

そうするとここで今井さんの登場になるのではないですか。今井さんが恐れているのはそこではないですか。息子のためには、30年後では遅いですよね。

●今井さん

そうですね。遅いです。でも、先生が言っていたように、私も先程のスピーチの時に、息子を聞こえるお友達の保育園に入学させた時に、共に生きるということの大切さということを学んだのです。障害者というのは本当に一括りにされてしまいますし、そして障害者が通う学校という名目がある。だからそこに放り投げられるようなイメージがあ

ったのですが、しかしその保育園は本当に先生たちもその子の特徴をとらえて、そしてきちんと子どもたちに分かりやすく説明してくれたおかげで、息子は聞こえるお友達と仲良く、そして聞こえるお友達には逆に息子には偏見がないのです。自分と違って当たり前と。

ですから、今でも聞こえるお友達とも仲良く遊びますし、そこは手話を使わなくても文字で書いたりとか、そういうコミュニケーション方法を子どもたち同士で見つけ合ったりしています。そういうことを見ているうちに、私も何年か前に、もう小さい時から共に生活して、共に学ぶことは難しいかもしれませんが、共に生きるということはできるのではないかと。そういう学校、そういう施設はないのかと思ってきました。そしてこの法律ができて、先程もおっしゃったように、その法律だけに縛られずに、本当にきちんと心から教育できるような学校づくりを目指してほしいなと思っていますし、私は今もう本当に障害者の方をかわいそうとも思わないのです。

それはなぜかと言いますと、私の中にそういう偏見とか、隔たりがもうなくなってしまったのです。私の自宅には息子の生活ができるように、いろいろなところに文字が貼ってあります。テレビ、もう本当に物一つ一つに名前を、その物の名前を書いていて、白いボードには時間割とか、私が仕事の時にはその仕事の内容とかを書いて、きちんと彼が安心できるようなバリアフリーな家づくりというものを目指している中で、障害という言葉自体に疑問を感じたのです。障害というものは街や人の心がそうあるだけで、もしかしたら、街全体、人の心がバリアフリーであれば、障害という言葉というのはなくなるのではないかなと思いました。ですから、皆さんには心のバリアフリーを目指して学校づくりをしていただけたらと思っています。

●コーディネーター

今井さんからのメッセージをいただきました。先生方、心のバリアフリーを目指してほしいということです。本当にそのように突き抜けたのですね。

●今井さん

そうです。以前は「障害者、ああ、かわいそう。なにか助けなきゃ」と思ったのですが、今はどちらかというと、先程も言いましたが、自分と違う、向こうも私のことを違う、自分と違うと思っている、そういう関係でありたい。そして障害は一つの個性だということも認めてあげて、その子のいいところを何か伸ばせたらいいと思いました。

●コーディネーター

深いですね。本当にこの心のバリアフリーというのは重要だという気がします。今、オランダが世界で一番幸せな国であるとユニセフが発表しました。子どもたちが学校に行って一番幸せなんだと。何故かと見ていくと、あそこはほとんど移民で、オランダ人はいない。来た人はみんなオランダ人。だから教育でしっかりと心のバリアフリーをしているのです。全員でこの国を作っていこうという思いになっているのです。

それは大きいなと思ったのですが、それに対して日本はどうかというと、学校などはもう村社会です。子どもたちの間も村社会で、同じものを着ていなければいけないです。同じかばん持っていなければいけないです。だから、なんというか、同じ符丁、同じ言葉を使う、それが重要で

あって、そのためにいじめが起こっているのではないですか。そういうところになると、まだまだ先は長いなという思いがします。

日本のこの村社会発想をどう変えていくか。そしてみんながそれぞれでいいんだよ。みんな違っていいんだよという思いは、なかなか大変なのかなと思います。

最後にパネリストの方々に、一言ずつ話をしてもらいたいと思います。

全然実がないような話になりましたが、かなり重要な言葉をいただきました。親の思いも感じましたけれども、いろいろなことを感じました。今は違いを認める。これらの教育が果たして可能なのかどうか、それを突き抜けるのはどうなのかということもあると思います。またチーム支援とか、学校の組織でいろいろな視点からとか、いろいろな言葉もいただきました。これは持って帰って私も少し考えたいと思いました。

では、滝口先生から、最後の一言、皆さんに対してメッセージあればお願いします。

●滝口先生

今井さんの心のバリアフリー、障害者ということがなくなったという話を伺い、海外ではチャレンジ、チャレンジャーというような見方で、とても矛盾するようですが、少し先程の話に戻りますが、実際本校で車椅子の子を受け入れるにあたっていろいろな特別支援校を、その頃は違う呼び方でしたが、見学に伺った時の各校の先生から、施設の問題じゃない。そういうことではなくて、結局全教員とそれから生徒たちが受け入れる、それこそ心の垣根を取ったその迎え方と。全部の障害を取ってしまったら逆にとても楽といいますか、支援も必要なくなってしまう。あの子普通にやっていて何の支援もなく、できるじゃないかと。

それは関わりを絶つことであって、むしろ施設とかではなく、やはり生き方の問題であるということが最終的に受け入れる決断になったわけですが、そのチャレンジをやはり私学として恐れずに受ける、そういった心の素地ということが学校としてすごく大事なことだなと思います。学校としてそれに向かっていく姿勢を持つ。やはりそういう思いがあるところに、補助金の問題とかそういったことは現実にあります。しかし私は先程から施設の問題ではないというような答えも出ているように、エレベーターがもしあったら、ああいう子どもたちの発想は逆に出なくて、みんな普通にただ押すだけの平面移動で済んでしまった。ですから全部建物が良くなったとかそういう問題ではない、もっと違った、深い人間の生き方としての支援というもの教育界は根本に据えなければいけないのではないかという感想を持たせていただきました。

●更科先生

二つのことをお話いたします。私ができていないことで、偉そうにいうつもりもまったくないので許してください。皆さんと一緒にやれたらいいということです。

一番は、インクルージョンの啓発です。これを教員が率先しておこなっていくこと。大きくいい過ぎると、そうでないと、日本の教育の未来はないのではないかと思います。おそらく今われわれがおこなっている教育、目指したくないけどやらざるを得ない教育は、50年後にはなくなっているのではないかと思います。そういった時に、

今日ここで話されたようなことは、とても大切になってくると思っています。競争から協同に少しだけ軸をずらすとか、また違いを受け入れるとか、できれば受け入れるというよりも、違いを享受するほうが、そこまで行けたらいいなと思っています。とても苦勞しています。

もう一つは、教育基本法には世界の平和と人類の福祉にということが書かれています。やはりわれわれはなかなか読み込むことは少ないのですが、本当によく考えられているなと思っています。教育がそこに向かって子どもたちと共に生きていけたらいいなと思っていますので、先生方と一緒に、実はもう私は私立も公立も関係なく、日本そして世界にというところも、アジアも地域もなく、もっと上の段階で本当に地球を作っていけるようなことが、先生方と一緒に考えていけたらいいと思っています。またこのような議論、お話し合いができたと思います。

●原先生

昨日から今日まで二日間、いろいろな話を聞いていて、何度も申しあげますが、教務という仕事をしている立場上、英語教育が大変になってくるのかなとか、実は本校の校長が他の部会、ICT 活用部会で運営委員長をやっているのですが、ICT も入ってくる、インクルーシブ教育も入ってくるという中で、これからいろいろな問題が出てくるのだろうという時に、同じ私学の、他の学校の先生方はどのようにこれに対応していくのかなという情報を、お互いに交換し合いながら、これからの教育に携わっていければ、非常に現実的な部分ですけれども、これから本当にさまざまな問題が押し寄せてくるので、それを先生方とともに進めていければと思っています。

●源田先生

いろいろお話を聞いて、聴覚に障害のある生徒を思い出しました。入ってきて少ししてから、その周りにいる生徒たちが手話が少しずつできるようになってきたのです。そこで話をしている。聞いてみると、4月から始めましたと。少しずつその生徒と近づいていきたいという子どもの心というのを、伸ばしてあげる教員になりたいとつくづく思っています。保健室というのは一番、生徒の心を、素直な心が聞ける場所ではないかと思っています。厳しいことをいう生徒もいますが、本当に悩んで、悩みを抱えている生徒、そういういろいろな生徒に対してきちんと聞けるようにしていきたいと思います。また、私の発信というものも大きくなっていくのかなと思っています。ですから、インクルーシブ教育に携わる身になっていく者として、きちんと言葉を考えて生徒に伝えていきたいと思いました。

●コーディネーター

それぞれ、4校の先生方、いろいろ前向きな発想をしていただき、ありがとうございます。本当に今まで「仕方ないかな」とか、「こんなことを決めて」と思って国を非難したり、いろいろなことを考えたのですが、そうではないのです。グローバルというのは地球ということですから、地球がもう垣根がない。みんながその違いを認めて、お互いの良さを生かしていこうという社会だとしたら、今回のテーマの「グローバル教育を目指して」はそういうことなのですね。心のバリアフリーなのですね。そのようなことを感じました。

昨日、今井絵理子さんが八雲学園の生徒たち、60人です

か、手話をしながら歌われたのです。素晴らしいライブでした。参加された多くの先生が、一緒に踊ったのです。

最後に、今井さんの夢を語っていただいて、息子に対する夢でも、今井さんの夢でも構いませんので、語っていただいて、それを聞いて気持ち良く終わりたいと思います。

●今井さん

私は4年前、24時間テレビで初めて息子の聴覚障害を告白しました。その後から、息子と一緒に、息子には、この世界にはさまざまな人がいて、さまざまな考え方があって、言語も違うということを伝えたくて、一緒に全国の特別支援学校や児童養護施設、そして一般の学校などにギターを持って訪問し、一緒に歌って踊っていました。

その中で、息子も最初は車椅子の子に会うと、どうしていいかわからなかったりとか、知的障害の子たちに会うと、少しおびえたりとか、そういうことがあったのですが、でもどんどん会っていくたびに、対応できるようになったり、対応法といいますか、車椅子の子が動けなかったら後ろから押してあげたりとか、そういうことを子どもというのは本当に大人の後ろ姿、大人の行動をすごく見えています。ですから、私たち、責任を持って子どもたちに見せる姿というのは正しいもの、優しいもの、温かなものを見せなければいけないと思いました。

そして最近と一緒に世界旅行をしていて、夏休みにはフィリピンの聾学校に行ったり、タイの聾学校に行ったりとか、世界の特別支援学校に今一緒に回っていて、彼は言語が違う、手話も世界共通ではない、そこで彼は初めて知るわけです。

私は本当に共に生きる社会というものを目指していて、それを息子が大きくなった時に、「ママありがとう」と言ってもらえるような社会に少しでも携われたらいいなと思います、こういう場にも参加させていただいた、息子が聴覚障害ということを世間に公表したことの思いであります。まだまだ経験未熟で、子育てもまだ10年しかしていませんが、子どもたちへ見せる姿が、どうか素晴らしいものでありますようにと心がけて、大人として行動していきましょう。よろしくお願いします。

●コーディネーター

どうも、素晴らしいメッセージをありがとうございます。いきましようということは、われわれもやりましようということです。先生方、是非、自分の学校で子どもたちが共生していける学校になるために、われわれも協同で頑張りたいと思います。

本当に結論が出る問題ではなかったのですが、ここまでしっかりと議論をしていただいてありがとうございます。先生方には、あまり持って帰ってもらうものはなかったかもしれませんが、ぜひ皆さんの学校で、これからこの教育をいろいろ考えていただける材料にいただければと思います。本日は本当にありがとうございました。

4人のパネリストの先生ありがとうございました。

今井さん、ありがとうございました。



運営委員長総括

村田女子中学高等学校 校長 伊藤 淑子



生徒支援教育部会は「他者を理解し、自己理解を図り共に成長する学習環境の創造」ということを研究目標として、平岩幹男先生、高野利雄先生の2名の先生の講演と、4名の私立中高校の先生方に、保護者として今井絵理子

さんを加えた5名によるパネル・ディスカッションを行いました。

生徒支援教育で私の中にイメージしていたものは何かといいますと、それぞれの学校で、それぞれのクラスで、それぞれの教室で、さまざまな障がいのある子どもたちを抱えている。その中で、その子どもたちに特化するのではなく、他の健常者も一緒に支援しながら育んでいかなければいけないという思いでした。

平岩先生からは「発達障害の理解と対応」というお話をいただきました。冒頭で「子どもを学習させて適切行動に導く」には、まずわれわれ教員の「技術の習得」が必要である。技術を習得するには、「基礎をおさえること」そして「練習する（意識して使う）こと」を学びました。また障がいは個性ではなく、理解して対応されるべきもの。学校においてはひとりで抱えるのではなく、全ての教員で共通理解をし、家庭も医療も連携して対応することが基礎である。そして、みんなで練習することによって対応が上手くいけば、クラスが変化するという教えをいただいたと思っております。しっかりと基礎を押さえて、技術を習得して、それを何回も使い、その中から子どもたちの気付きを促す。そうすることで生徒がお互いに理解し合って、生徒力によってプラスが作りあげられていくということを感じました。

パネル・ディスカッションでは、インクルー

シブ教育を考えた時、人権を、そして気持ちの在り方を含めて広く大きく深い問題に気付かされました。そして教員が率先して取り組んでいかなければならない大きな問題であることが提示されました。ここでは私たちが今現在抱えている子どもたちに対しての教育と、これから先30年後、100年後に向かって、今から準備しておかなければならないことも含めて、大きな学びがあったのではないかと思います。

健常者が9割、聴覚障がい者が1割の保育園が存在し、そこではお互いがそれを当たり前だと認め合っているという話がありました。私の子どもが通っていた保育園は、隣にある障がい者の診療所と一緒に子どもたちを育てている保育園でした。その子どもたちと一緒に保育を受ける中で、障がいのある人たちを当たり前、特別視するのではなく受け入れられるように育てていただきました。今井さんの話をお聞きし、「教室に通うすべての生徒が共に成長する学習環境を整えるために」をテーマとしたパネル・ディスカッションがここにすべてつながっていたと思いました。ここから発信されたものは本当に大きなものだったと思います。

本部会で、何らかのヒントを見いだしていただき、それぞれの学校の教育理念に寄り添った形で生徒支援教育の一助としていただきますことを祈念して、総括とさせていただきます。



参加者アンケート

まとめ

全体集会・教育懇談会・大会全般

開会式は、登壇された来賓の顔ぶれ等、東京ならではの盛大なセレモニーとなり、進行・内容ともに立派で行き届いた会であったと好評だった。

中高連会長、日私教研所長による報告は、教育界を取り巻く政策課題等を簡潔かつ具体的に捉えており、私学が置かれている現状や問題点、私学の意義とあり方について、管理職だけでなく教職員も私学人として考えていく必要があることを広く啓蒙する機会となった。

記念講演は、21世紀型教育・授業、協調的な学び等、非常に興味深く示唆に富んだ内容で、これを機に、生徒が自ら考え、答えを出していく新しい授業を心がけたい、授業改善に活かしたい、日々の授業で実践していきたいといった前向きな意見が多く見られた。

教育懇談会は、全国の私学の先生方と話す機会に恵まれ刺激を受けたとの感想が出された。

2日間の大会を通し、私学教育という大きな共同体への意識が深まった、全体のつながりの大切さ、連帯感の心強さを痛感した、部会構成が素晴らしく実のある研修となった、運営がスムーズで見事な大会であったとの声が寄せられた。

私学経営部会

講演Ⅰでは、国や文部科学省の教育行政の方向性、取り組むべき課題等がよく理解できた、グローバル教育等をより具体的に掘り下げてほしいという意見が出された。

講演ⅡおよびⅢについては、實吉先生、近藤先生の話から、私学の成り立ち、私学振興の歴史、教育改革の経緯、私学のあり方等についてよく理解ができた、私学の独自性、私学だからこそできる教育を大切にしていきたい、私学人として鼓舞し勇気づけられた、日々の教育活動・実践に役立てたい等、参加者から感謝の意が表された。

パネル・ディスカッションでは、各パネリストの個性が光っており、グローバル化・グローバル人材についての異なる視点・意見が参考となった、新情報に刺激を受けた、コーディネーターがパネリストの本音を引き出していた等、関心の高さがうかがえた。

全体としては、経営に立脚したグローバル教育に関する多角的な視点からのプレゼンテーションは、いずれもグローバル化の中での今後の教育のあり方、私学の進むべき道を考える必要に気づき、私学人としての自覚を再確認する機会となる内容であった。

教育課程部会

基調講演では、21世紀型の学びとして、特に協働学習は多くの先生方が必要性を感じ、今後自校で参考にできることからチャレンジしたい、生徒の学びの質を深めるためには、教員が授業研究など協働活動で質を高めることが不可欠だと感じた、理論・実践にとどまらずビデオ映像・グループワークによる実体験は画期的な取り組みだった、前日の記念講演とも内容的に連動したことは効果的で理解が深まった等の感想が述べられた。

調査報告・実践発表については、参加の各教科・各校務分掌の先生方に参考となる事例が多く好評であった。

特に iPad 導入事例は、近い将来の ICT 導入活用が各学校に影響を与える中で、生徒の変化の様子も含め多くの参加者が興味深く参考になったとの感想を寄せた。

全体としては、基調講演と実践発表がバランス良く構成されており、講演内容や他校の実践と自校の教育と比較し、授業についてのあり方等さまざまな面で考えさせられる内容となった。

法人管理事務運営部会

工藤先生の基調講演については、リーダーシップ、私学の独自性等、普段聞くことができない話で感銘を受けた、具体的先進的な話を情熱的に歯切れ良く語られ、自分の使命を再認識した、私学の存在意義の話を私学人として心に留めて日々の業務に当たりたい等好評で、参加者のやる気を引き出す内容であった。

竹内先生の講演は、学校とは異なる側面から「おもてなし」の内容や考え方等を聞き、学校、職場だけでなくクラス・生徒にも応用できることが多々あるので今後実践していきたい、私学経営方策を得た等、同様に好評であった。

分散会は、各学校の課題や問題点を共有でき、その解決策を考えていく上で大変役立つ議論ができた、分散会がないとなかなか他校の情報が得にくいので次回以降の継続実施の要望も多く出され、研修会や情報交換のための分散会の必要性を痛感させる部会となった。

ICT活用部会

「ICT をどう使うか」ではなく「ICT を活用して何を学ばせるか」を考えさせられたという意見が多く見受けられた。これから ICT を導入するための参考に参加した方もかなり多く、広尾学園という ICT 先進校の環境には圧倒させられ刺激を受けていた。また、ICT ツールを活用した公開・研究授業等で生徒の生き活きた姿を見て自校での導入を検討したい、学びのスタイルの中で自然と ICT を活用しているしっかりした理念に基づく ICT 導入の好事例であった等の感想が出された。同時に、環境を整えるためには財政面以外の課題として生徒のクオリティの高さと ICT を活用する教員のスキル・パワーの重要性、学ぶ姿勢・学びのパターンを変えて行く必要性を痛感する機会となった。

生徒と教員によるパネル・ディスカッションでは、広尾学園の ICT 有効活用の様子を直に見聞きできたと好評だった。ICT 企業によるセミナーとパネル・ディスカッションは、企業の教育に対する個性豊かな考え方等を聞く機会として、今後 ICT 活用教育の実践では「はじめに ICT 導入ありき」ではなく「ICT 機器を使って何を何を学びたいのか」が重要である等、中身の濃い充実した内容であった。また、教員は常に最上のパフォーマンスをすべきで、ICT 活用によってそれが落ちてはならないのは事実だが、ICT に抵抗感の強い教員に広まり難いというジレンマが指摘された。

グローバル教育部会

基調講演は、グローバル教育の定義を再確認できた、ICT とグローバル教育との関係や生徒の主体的な学び、ICT を使い世界とつながる教育効果が授業の参考になった、英語以外の切り口での講演が新鮮だった、教員が身につけるべきスキルを考えさせられた、学びの出发点であるワクワク感を刺激される自ら取り組みたくなる事例が多い、学校教育と社会をつなげる環境作りによって生徒の主体的な学びが生まれることがわかった等の感想が寄せられた。

パネル・ディスカッションでは、留学の長所や短所を語るさまざまな背景・環境にある学生たちの堂々とした態度と留学体験に基づく考え方、理論的な話と伝え方、グローバルに生きていくための姿勢等全てに説得力

があり感心した、コミュニケーションツールとして英語教育の必要性を痛感した、焦点が留学のみであった等の意見・感想が出された。

分散会は、各学校の実践や前向きな取り組み、課題等の事例が参考となり有意義だったという意見が多かったが、各グループの人数をより少人数にしてほしいとの意見もあった。

全体としては、論理的思考力、問題解決能力、発進力等がグローバル人材に必要であること等、各学校でグローバル教育を推進していく上でのヒント・見直し・課題を考える機会となる内容であった。

環境教育部会

講演は、「ミジンコ」の生態を通して、「ヒト」「生命」を考えさせられる哲学的な内容で、今後の自校の授業・教育に生かしていくヒントを得たとの感想が多数寄せられた。

パネル・ディスカッションと事例講演では、身近な「水」というテーマから見えることについて多角的に専門家の話を聞き、地球の尊さ、水の貴重さを学んだ等の感想が出された。

特別実践事業では、メダカの実験を通して、地球や水・生物の循環がわかりやすく伝わり、環境教育を考え直すことができた、面白かった、教科書を用いて「生命」の話をするよりも、自分の目で「透けた命」を観察する方が直感性・感性を磨くことができると好評であった。

全体としては、今後の授業の参考にしたいという意見が多く、理科の要素が強いプログラムではあったが、理科以外の担当教員も「水」というテーマを多角的に見つめ直して、自分の教科や環境教育に取り入れていきたい、専門外の問題点を知り新鮮な発見があった、質疑の時間がなく残念だった等の意見・感想が寄せられた。

生徒支援教育

講演Ⅰは、生徒支援に関わる先生方の指導について技術面の実践事例を踏まえて医学的な立場から発達障がいの子供たちへの接し方など具体的な行動のアドバイスが多くあり大変参考になった、受け入れ、褒めることの大切さを再認識した、訓練・練習・繰り返しが心がけたい、支援の必要な生徒への対応の基礎、生徒たちに関わる教員のあり方・努力の仕方が明確に示された等の感想が寄せられるなど、好評を博した。

講演Ⅱは、その時の学校生活での指導ではなく、将来を見据えた指導が必要という点で、自分自身のこれまでの生徒指導を振り返り、見直し、考え直す必要を感じた、現場の教員が心から生徒に寄り添うことが大切だ、支援の意味と共に私立学校が生徒たちの成長をどこまで支援できるか、そこに学校の力量が問われているといった意見が述べられた。

パネル・ディスカッションでは、保護者によるキーノートスピーチは本音の話で心に響いた、心のバリアフリーからスタートすべきだと痛感した、母親としての心温まる教育理念に感動した、保護者の学校への強い思いと希望に私立学校として知恵と工夫、子供の立場に立った努力の必要性を感じた等の意見が寄せられた。パネリストとして学校で指導する教員や大学等で研究する専門家の話だけでなく、障がいのある子どもを育ててきた親の話は、改めて生徒支援教育の必要性や意義について考える機会を与えるものとなった。

全体としては、非常に実りある部会で気づきや触発が多くあった、私学が担う役割の一つとしてインクルーシブ教育への取り組みを入れていく必要がある、インクルーシブ教育をどのように具現化していくかはどの学校も暗中模索状態だが教員全員の意識改革が強く求められていると感じた、悩みの根は皆同じものであると気づかされ、これをを機に私学が一丸となって団結していかなければならないと強く感じた等の意見が出された。

参加者アンケート(抜粋)

全体集会等 (参加者数：1, 023名 回答数：487名 回答率：47.6%)

◎全般

- 教育政策や新しい学びについて、とても分かりやすくお話し頂き、多くの刺激や意識の改革等のきっかけになりました。今後とも旬な話題のご提供をお願いいたします。
- 先端の教育を講演等で聞き、知るに至り、驚きでいっぱいです。まだまだ本校は遅れていることを知りました。また懇談会でも全国の私学の先生と話す機会を頂き、刺激を受けました。
- 私学を取り巻く状況について、その問題と今後のあるべき姿を探す立脚美が少し見えてきた気がします。新たな授業の在り方や教員の研修等の研究、取り組みの早々の実行性の必要を感じました。
- 東京開催ということもあり、かなり大規模な会だったことにまず驚いています。ともするとマンネリ化していた授業を、明日から来週から少しずつでも変えていこうと思いましたし、日々の行動の忙しさにも負けず、教員同士の話し合いが必要なのだと痛感しました。
- 平日開催では、多くの教員を派遣できないジレンマがあります。できることなら長期休みの時期に開催して貰えると日本の私学の強さを増すことにつながると考えます。
- 教育懇談会は、全国の私学の先生方と話す機会に恵まれ、刺激を受けました。

◎報告

- 「グローバル教育」とは何か、きちんと考える必要があります。経済のグローバル化に対応した、グローバル企業の人材を育てるためだけの教育ではないことは明らかです。行き過ぎた経済のグローバル化は、国家主権（国民の権利）を侵害します。そうならないためのクリティカルな世界市民感覚を身に付けさせることが最重要だと思います。国家（権力）による教育改革への批判的熟議を私学として行っていく必要があるのではと感じました。
- 「私立学校がないがしろにされている」という現状は、現場にいる私たちも痛切に感じているところで、公立と私立が良い意味で共存していくためにも、どちらか一方を蹴落とすような形はふさわしくないと考えます。「対等に」とはいかなくとも、少しずつでも私学の扱いが改善するよう希望しています。
- 教育関係の制度変更があまりに唐突で、あまりにも速度が速い気がしております。その点で吉田会長が指摘された「謙虚さを持って」は誰もが念頭に入れておくべきだと思います。
- 公立高校長を退職して、現私学に勤務しています。私学を取り巻く状況や、今後の展望についての吉田会長の報告から、公立との違いの大きさや特性について、よく分かりました。
- 日本の教育行政は本当に危機的だと思います。文科省をはじめ、どのような国づくりをして、どのような人づくりをするのか、そのイメージは150年前と何も変わっていない中で、吉田中高連会長、近藤東京私立中高協会の会長はじめ役員の皆様のご尽力に感謝しています。
- 今回の会に参加することで、改めて自分が「私学」の教員であることを認識できました。中川所長の話の中にあった建学の精神の日常化はすぐにでも始めたいと思います。
- 中川所長の話で、自校の歴史を生徒に語ることで、建学の精神をもっとさまざまな場面で生徒・保護者に毎日の生活で語らなければいけないことに気づきました。意識することが必要です。

◎記念講演

- 21世紀型のスキルについて学ぶことができました。共通する型を持つことで多面的に捉えることも可能になり、「各自に任されるまま」ではなく「共有し豊かにしていく」ことが生徒にも教師にもプラスに働くということを認識することができました。
- モザイク学習は新鮮でこれからの授業改善に生かせると思いました。覚える授業から考える授業になると思います。評価の方法について、どういう形（デジタル化、記号化、文章化）で表し、子供に知らせるのが知りたいです。
- 教科の特殊性や、教科内でも項目の特殊性があるので、協働という試みを積極的に取り入れて、グループでの教え合いや学ぶ喜びの発想を具体化するのはなかなか困難かと思いますが、どの学校でも効果をあげているという報告もあるので、これまでの1人対37人（生徒）の授業の中に、その精神を取り込んだ方法を展開していこうと考えています。
- これからの教育の現場を考える上で大変参考になりました。ICT化ばかりではなく教育の形そのものを見直していくべきであると痛感しました。実際に学習している生徒の映像があればもっとおもしろかったかもしれません。
- グループで話し合うジグソー型に深い感銘を受けました。グループで行う授業は行っていますが、途中でシャッフルすることはやっていなくて、今後の参考にしたいです。大切なのはどの教えるかよりも、「生徒がどう感じ、学ぼうとするか」、これについて、今後しっかりと向き合いたいと思います。
- 大変興味深く、考えさせられる面白い内容でした。これまでいわれてきた「応用力」とは、私たちが一方的に段階を決めていた学び方、成長の仕方の一つなのかも知れないと考えを改めさせられるお話でした。ジグソー法を用いて、狙いを持ちつつも、子どもたちのことを信じて、行き先を任せてみるチャレンジも、一つの教育なのかなと感じました。今後実際に自分の授業やHR活動にも取り入れ、学び方を見つめ直していきたいと思います。
- 協調学習の概念とそれを進める事の利点や、現状多く行われている一斉学習との比較には大いに目を開かされました。個別的に進められる受動的学習過程と協働作業や話し合いといった能動的な学習過程の理解の深さ・定着度の相違が理論的に語られて納得できました。

- 協調的な学びの大切さを知ると共に、ジグソーとしていろいろな知識につなげてみんなで対話しながら、学んだことから次の段階である問いへ、自分たちで構築させるような学びの大切さを痛感しました。少しずつですが、今回の学びを活かして行きたいと考えています。
- なかなか興味深かったと思います。正解も必要ですが、正解でない解答であっても、そこに至る考え方がはっきり表示できるかどうかが大切なことと思われまふ。これは何にでもあてはまることと思料されまふ。
- 質問の仕方、誘導の仕方、考えさせ方等、再度見直していく必要があると考えさせられました。グループなども視野に入れ、新たな施策を考えてみたいと思ひます。
- 報告、講演とも示唆に富み勉強になりました。ポイントはやはり理想と現実ではないかと思ひます。ジグソー法による授業も生徒が主体的に参加でき、記憶に残りやすいという点で素晴らしいと思ひますが、準備にかかる時間と負担、大学入試にどれだけ効果があるかなど、ジレンマも見え隠れしていました。

私学経営部会 (参加者数：285名 回答数：64名 回答率：22.5%)

◎全般

- グローバル人材を育てるという意味でとても参考になりました。企業の立場、国際ナショナルスクールの観点、私学経営者の視点、それぞれ納得する部分が多かったです。IBにしても私学だからこそ積極的に取り入れられるかもしれません。やはり大学入試の在り方がどのように変わりうるかという問題と併行した議論にならないと、なかなか決断できないというのが本音です。ただ私学である以上、その学校の建学の精神に基づいて、これからの教育についてもしっかり方向性を決めていかなければならないと痛感いたしました。
- 2日間にわたり、経営の立場からのお話を伺い、一私学人として身が引き締まる思いがしました。また明日から身を粉にしてつとめている先生方を見習って働こうと思ひます。

◎講演Ⅰ

- 文部科学行政の考え方と方向性がわかりました。一方で、私学教育の現状と理想に一定の差を感じます。ゆとり教育に振り回された後、思いつきではない分析をして欲しいです。
- 広く日本の現状から今後取り組むべき課題について分かりやすく説明していただき内容がよく分かりました。ただ、「教育制度改革の動向とグローバル教育」のグローバルの面をもう少し掘り下げて貰えればよかったかもしれません。
- OECDの学力調査でも国際的に上位であるが、日本の高校生は、「自信が無い、夢がない、希望がない」のは何故なのか考えさせられました。生徒が自信を持って生きていけるような教育を考えていかなければならないと思ひます。

◎講演Ⅱ

- 私学振興の歴史的経緯、私学人の歴史的努力、現在の私学団体幹部の努力がよく分かり、また法令の読み込みの重要性と対応について学ぶことが多かったです。
- 時代の流れの中で現在の私学のあり方が形成されていることが詳しく語られ、大変参考になりました。
- とても共感しました。現政権の姿勢・視座とこれまで私学教育が永長培ってきた姿勢にギャップを感じます。

◎講演Ⅲ

- 教育の実情と問題点がよく分かり、理念と情熱を持って私学経営にあたるべきことを教えられました。
- 私学の存在意義について、改めて考えさせられました。今後の私学経営に活かして参ります。
- 近藤先生のご苦勞と、それによって私学が自主的に運営できている現況に感謝の気持ちを持ちました。特に私学は建学の精神により独自の教育、多様性が教育の創造性と発展性を作り出すのではないかと感じました。

◎パネル・ディスカッション

- グローバル化の中で、多様性、積極性、柔軟性、好奇心などといういくつかのキーワードが出てきました。私自身も守りに入る年齢ではないと再度自覚しつつ、多国籍企業で働くOGなどとの接点からヒントを得ながら頑張っていきます。
- グローバル人材とは何か、社会をより良く平和にするためには、互いの違いを乗り越え共生していかなければならない、これこそがグローバル人材なのだなと感じました。
- 安瀨氏の企業が求めるグローバルな人材は、現場(職場)の現状を知る上で参考になりました。これからの教育で、どのような人材を育てていくのかの方針になりました。
- 坪谷氏の「死ぬまで内省は続いていく」という言葉に胸を深く打たれました。
- 改めてグローバル社会で生きる子どもたちの教育、またその視点について勉強させていただきました。パネラーの先生方のお話にさまざまな刺激を受けました。
- 高橋先生が個性の光る3名のパネリストにどんどん突っ込んでいったので、パネリストの本音を聞くことができた。人選が良かった。
- 有意義でした。GEで活躍している人材については納得できます。自分に対する自覚、難しいですが…。相川先生の「評価は他人」は同感です。下手な英語をいかに堂々と日本人が話せるか？今の日本の学校の英語教育の目指す方向とは全く違ひますが、その通りと思ひます。
- 英語教育について、日本人の英語習得には非常に困難を伴ひます。日本の教育自体が間違っていたこともありまふ。英語が話せないことが問題となって長年になりますが、今、このことを真剣に考える必要

があります。

教育課程部会 (参加者数：199名 回答数：114名 回答率：57.3%)

◎全般

- グローバル教育、課題解決型授業などさまざまな取り組みを聞き、ヒントが多く、今後の学校教育に生かしていきたいです。6年の教育プログラムを再検討し、子どもたちの視点に立ち、学ぶ意欲を高め、自分自身で学びへ行動する力を身に付けることも重要だと感じました。カリキュラム（シラバス）、行事等の見直しのスピードアップに努めたいと思います。
- 「グローバル教育＝異文化理解能力」であるという認識を強く持ちました。「異なる文化・価値観を持った人に対しても、きちんと自分の主張を伝えること」ができ、「文化的な背景の違う人の意見もその背景を理解し、時間をかけて納得、説得し、妥協的な点を見いだすこと」ができる、そして、「相手を理解した自己表現ができる」そういった生徒を育てたい、そんな想いを胸に明日からの糧にしたいと思います。

◎基調講演

- これからのグローバルな社会で生きていくために、生徒が身に付けなければいけない力をどのような協働学習を通して付けていけるのか、協働学習の良さを少しずつ理解できたように思います。しかし、今までのペーパーテストで測る学力をしっかりとつけられるのか、まだまだ疑問があり、不安もあります。
- 協働学習による生徒の学びの可能性をご紹介頂き大変参考になりました。これまでの教員の在り方とは違って、「生徒が自分でできた」と満足感を得られるような場を設定して調整を行うコーディネーターとしての役割が強く求められているように感じました。同時にカリキュラムそのものを見直し、「身に付けさせていきたい狙い」を改めて意識して教育にあたる必要性を強く感じているところです。
- 全体集会での三宅先生の講演を補完するような、また、少し別の切り口からの理論付けと、ワークショップを含んだもので、初日での思いが強化されました。「協調学習」のみですべてがうまくいくわけではないですが、確かにそれを取り入れることで「学力が上がっている」実例もあります。また難しく考えすぎることなく、隣り合う2、3人での話し合いの過程の導入からでも「協調学習」は始められるということに気づかされました。

◎調査報告

- 今後の学校のあるべき姿への参考とします。
- 東京都のアンケート調査結果はとても素晴らしい。自分の県でもやってみたいと思います。

◎実践発表Ⅰ

- iPadを用いた学習研究には大変興味を持っています。本校でも近い将来導入されると思いますし、その利用法をしっかりと考えようと思います。アメリカの学校で道具の一つとして利用している姿を見学した時にも感じた事です。
- iPad導入については、やはり教員間に温度差を感じます。とはいっても、自分自身が積極的な導入派かというところでもありません。一念発起して一歩踏み出してみることで、世界が変わるかも知れないので以後試してみようと思います。国語の教員として黒板に原文を書くことについて、それをまだ一概に否定する気になれないというのも事実です。しかし知らない世界をそのままにしておくのもよくないので、重たい腰を上げてみようと思います。

◎実践発表Ⅱ

- critical thinkingは世界のみならず、今後の日本においても不可欠です。ただ、批判的であれというのは誤りで、その下地となる、比較・対照のための研究や調査探求はとても重要なことは共感できます。それがさまざまな教科で導入されるといいのではないのでしょうか。
- グローバル社会におけるcritical thinking力をいかに高めていくかという問題の前提となっている背景や、ご経験に基づいた説得力のあるお話であったと思います。

◎実践発表Ⅲ

- 全体包括的な視点に立った外観的コンテンツを提示していただき、キャリアデザインにおける教育課程の位置づけを認識することができました。
- 自立的遂行を継続させることが、キャリア教育ではとても大切です。そのための方法論をつぶさに見た気がしました。参考にしたいです。

法人管理事務運営部会 (参加者数：82名 回答数：46名 回答率：56.1%)

◎全般

- とても充実した内容でした。時間は長いものでしたが、参考になることがたくさんあり、実践していきたいと思います。

◎基調講演

- 基調講演は工藤先生の私学の存在意義、私学の独自性等、大変勉強になりました。
- 工藤先生の講演は非常に啓発されることが多かったと思いました。
- 工藤先生の講演を聞き、校舎建設等の話を含め、現在の仕事に大変参考になりました。個々のお話の内容の視点が実際に経験した者でないといけないものばかりで、早速明日からの業務に反映させていきたいです。自分ひとりの力は限られていますが、どのように周りを巻き込んでいくのか、努力し

ていきたいと思います。

- 工藤先生の情熱的かつ具体的・先進的なお話をお伺いし、自らの使命を再確認しました。

◎講演

- オリエンタルランドの「おもてなしの極意」を聞き、職場だけでなく、生徒、クラスでも応用、適応できるものと感じ、これから実践していきたいと思います。
- おもてなしの極意として「商品」を売っているのではなく「感動」を売っている、感動は一瞬のものであり、毎日初演のつもりで特別な1日であると思い、喜びを提供し、情報をいかにうまく発信するか魔法をかけ、また、次に来た時も新たな喜びを提供し、その結果リピート率が97.5%。ディズニーのこだわり、手抜きはせず、見えない所にこだわり、ゲストは知らなくてよい所をスタッフが分かっている、おもてなしの心を持って対応できる。ディズニーは娯楽を楽しむのではなく教育の場所である。相手が何を求めているか、先を読んで対応する。おもてなしについて学校に置き換えると、来校者の方には笑顔で対応し、案内までしっかりやり、緊急対応の心がけでは、目の前にいると思って対応する（イヤイヤやっていると顔にでてしまう）。説明会でも受付で、最初で学校のイメージができるので、笑顔で対応する指示を出していますが、しっかりと対応しなければと共感しました。

◎分散会

- コミュニケーションの大切さ、おもてなしがリピーターを作る、評価制度の現状、労働環境等、新たな取り組みをされた学校の話等いろいろな意見を聞くことができて良かったです。情報交換の大切さを痛感しました。
- 各学校の悩みは環境が異なっても似ていることを知りました。分散会でしか多くの学校のお話を伺う機会はないので、大変貴重なものでした。私学共通の悩みを力を終結して中央に届けられないものかと思いました。
- 貴重な話を聞き、大変よい財産となりました。今後ともこういったグループ・ディスカッションの方式を続けてほしいと思います。学校間のネットワーク作りに有益です。
- 大変有意義な話し合いであった。各先生方との交流も今後続けていけたら良いと考えます。
- 評価制度の構築が急務でしたが、他の学園も同じ悩みを抱えていることを知り、今後情報交換等ができればと思います。

ICT活用部会 (参加者数：101名 回答数：62名 回答率：61.4%)

◎全般

- ICTに対する考え方を根本から変えていく必要性を感じました。生徒にどう還元させるか、未来像を考えた取り組みが必要であることを考えさせられるきっかけとなりました。
- ICT機器を使う授業にこだわりすぎて、ICT機器を使うことを目的としている自分がいました。それが間違いであることに気づかされ、今回の研修が有意義なものになりました。この発想、考え方の違いは、私の今後の授業、特にICT機器を使う時に大いに役立つと考えています。
- iPadの導入を本校でも実施していますが、まだまだ手探りの状態です。数学を担当していますが、「教科書→黒板→ノート」の形式は変わっていません。自分の教科にどのように導入していくかの一つの見本として参考になりました。
- このような会に「参加しない人」に向けてどう情報を発信していくかが問題と感じました。
- 自校でも、生徒一人ひとりへiPad貸与、WiFi環境整備、電子黒板等のハード面は充実しています。ただ、その授業や学校生活での教員・生徒の使い方は、まだまだ練られていない部分が多いので、今回、実際の授業や実践例を目にすることができ、大変参考になりました。

◎「研究授業」「公開授業」「パネル・ディスカッション」「セミナー①」

- 生徒や先生方の様子を知ることができ、大変有意義な研修でした。ICT活用のための授業ではなく、学びのスタイルの中で自然とICTを活用されている取り組みに感銘を受けました。
- ネットリテラシー、モラルの問題が気になっておりましたが、その問題を教員と生徒が共有して、一緒になって考えていこうという姿勢であることが参考になりました。
- 医進サイエンスコースの生徒が、「もっと知りたいという気持ち、欲求をかなえるツールとしてICTがあり、必ずしもICTを使わなければいけないわけではない」。「ICTを使った授業」はどんなものかを見に来たつもりでしたが、ICTに関する考え方が変わりました。
- 導入するまでのプロセス（料金、業者選定等）も聞きたいと思いました。
- タブレットとgoogleのクラウドサービスをうまく使った授業展開が、とても興味深かった。生徒と教員の双方向のやりとりをスムーズにできるICT器械の可能性を知ることができました。また、ICTを活用するためには、どのような教育を目指したいのか、目的を明確にする必要があることを改めて認識できました。
- 「教員は常に最上のパフォーマンスをすべきであって、ICTを利用することで、そのパフォーマンスが落ちてはならない」（金子先生）は本当にその通りだと思います。ただその一方で少しでも何かしら利用する方向のアプローチをしなければ、抵抗感の強い教員の中にICTは広まっていけないという焦れたさもあります。

◎「セミナー②」「セミナー③」「セミナー④」「パネル・ディスカッション②」

- セミナーでは、「ICTツールをどう使うか」ではなく、「ICTを活用して何を学ばせるか」ということの重要性が繰り返し述べられていたので、先日の全体会の内容ともリンクし、非常に有意義な時間だった

と思います。

- セミナーについては最先端企業である Google、Microsoft、Apple の方々の教育に対する考え方などが聞くことができて良かったです。
- 企業の方々が「何を学びたいのか」という事を強調していたのが印象的でした。

グローバル教育部会 (参加者数：118名 回答数：74名 回答率：62.7%)

◎全般

- 「グローバル教育とは何か」、学校によってさまざまなとらえ方があると思いました。しかし、講演やパネル・ディスカッションの内容から英語はコミュニケーションツールであること、論理的思考力、問題解決能力、発信力などの力がグローバル人材には必要と感じました。
- 講演、パネル・ディスカッション、分散会を通じて、あらためて中高の教育が問われていると実感しました。グローバルという定義そのものが曖昧であり、大学入試へのジレンマ、また教育現場においても各先生が悩みを持っているということを共有できた会だったと思います。しかし、今いる生徒たちにとって最高の教育を受けさせてあげることがわれわれ教員の使命であると再認識し、日々努力していく所存です。

◎基調講演

- インターネットを使用した教育のアプローチ、日本の外に出た時に必要となるスキル・資質、グローバル教育の在り方についてさまざまな意見を聞くことができ、少しグローバル人材について理解が深まったように思います。
- 最初、グローバル教育とどう関連があるのか疑問に思いましたが、実は身近な所から地道な作業を契機にして、地域から地域、国から国への横のつながり、そして時間を隔てた各世代につながる縦のつながりの融合が大きな意義のあるものということに気づかされました。
- グローバル教育を考えるにおいて、「英語」以外からの切り口での話が新鮮でした。テクノロジーというツールをどう生徒の生活、体験に結びつけるか、話を聞くだけでもワクワクしてきました。自校で何ができるか、他の教員とも話し合おうと思います。

◎パネル・ディスカッション

- 留学の長所は、「広い視野を持てるようになった」「自分を見つめられる機会となった」「ポジティブな考え方ができる（自信がついた）」「人としての基本的な作法の大切さ」等と聞き、現場でも、生徒たちに伝えていきたいと思いました。
- 「留学したきっかけ、目的」などを聞いて、とても参考になりました。中高の学びを通して、海外に興味を持ち、そして実現していく学生たちが、とても頼もしく感じました。本校でもそういった「きっかけ」をたくさん用意してあげられたらと思いました。校長のもと、短期海外留学の制度が整ってきましたが、それと平行して、海外の文化に触れるような機会を多くとれると、もっと素晴らしいものになると思いました。しかし、本校の生徒はまだまだ「発言しない」、「お互いの意見をいい合わない」という特徴があり、そこをもう少し鍛えてあげたいと思います。

◎分散会

- 各学校の実践例、そこに伴う苦労などを聞いて勉強になりました。海外へ生徒を送るプログラムを複数実施されている学校が多かったのですが、事前（または事後）学習の量については差があるようでした。外へ出ることで気づくこと、学ぶことはあるが、それだけが学習ではないことは当然と分かっていたながら、グローバル教育の中身にまだ模索をつづけていくことになるのだろうと感じました。
- 今後の教育の在り方について、他の学校がどのような取り組みをされているのか伺うことができ参考になりました。同じような悩みを抱えているところもあり、今後、それぞれの学校が取り入れていく活動に注目していきたいです。会場は多くのグループが一斉開始だったので声が聞き取りにくかったです。
- 分散会では、他校の取り組みなど、自分の学校では取り組んでいないものが多くあり、今後参考にしていこうというものもありました。他校の先生方と話し合う時間がもう少し欲しかったです。しかしいろいろと刺激になる意見が多くためになりました。

環境教育部会 (参加者数71名 回答数：58名 回答率：81.7%)

◎全般

- 「水」をテーマとした他方面からの発表が、今後の教育に活用できると思いました。生徒に話せば、興味・関心を多大に引き出せると思います。
- 各先生方の話や実際に行われている授業展開などを拝聴し、とても勉強になりました。今後の授業で今回の研修を活かして頑張りたいと思います。
- 環境教育部会ということで、「水」について多くのことを学ばせていただきました。教科が体育ということで保健の授業で扱う「水と健康」の単元に活かせる内容がありました。特に下水道についての実態を生徒に伝えていきたいと感じました。
- 水という一つのテーマから見えることについて、多角的に勉強させていただきました。水はなくてはならないものだと感じていても、普段その重要性について考える機会が少なかったように思えるので、今後は私たちを取り巻く環境について深く思考していきたいと思います。
- 理科の教員ではないですが、教科の中で生活排水や循環型社会のことを取りあげます。今回の環境部会において別の角度から情報を吸収することができ、授業で活用するきっかけを頂戴しました。

◎講演

- 「命が透けて見える」この一言にまずは感動しました。教科書を開いて「生命」の話をするよりも、自分の目で透けた命を観察することの方が、直感力や感性を磨くことができると思いました。
- ミジンコの生態の話だけでなく、「ヒトとは」、「生きるとは」など、キレのよい説得力のある話が聞けて考えさせていただきました。「多様性とはせめぎ合いのバランスである」という言葉がとても印象的でした。
- 坂田先生の講演は素晴らしいの一言に尽きます。ミジンコの話から世界の水問題、そして生き方まで多岐にわたる話題には時を忘れて聴き入りました。

◎「パネル・ディスカッション」「事例講演Ⅰ」「事例講演Ⅱ」

- それぞれ立場の異なる方の意見がたいへん面白かったと思います。誰でも考えることができることかもしれないと思いますが、実践する難しさを感じました。各発表については、もっと時間があるとよいと思いました。

◎特別実践授業

- ミジンコの話、ミネラルウォーターの話など、部会での話がまとまった実践授業であったのでよかったです。
- 塩瀬先生の授業が大変興味深かったです。メダカの実験もそうですが、なかなか実感がわからない地球や、水、生物の循環などを分かりやすく伝えてくださり、とても参考になりました。
- 実験を交えた授業実践が本当に参考になりました。環境教育というものを考え直すことのできる貴重なものでした。
- 実践授業で、他の先生方がどんなことを考え、どんなことを行っているのか、見ることでとてもためになりました。質疑応答の時間がなかったのが残念です。

生徒支援教育 （参加者数：104名 回答数：68名 回答率：65.4%）

◎全般

- 現場で私たち教師がどうしたらよいのか、具体的な話を聞き、とても参考になりました。受け入れること、しっかりとトレーニングすることなど当たり前のことではあっても、見落としがちなことの再認識ができたと思います。実際に生徒たちの対応をしている先生方の現状（他校）を聞くことができ、参考になりました。
- さまざまな障がいを持つ生徒であっても、共に生きるために生徒理解を深めなければならないと思いました。一人ひとりの生徒としっかりと向き合い、ありのままを受け入れる姿勢を教師として持たなければならないと思います。

◎講演Ⅰ

- 学校内での対応は、今の生活をどのように理解させるかが、精一杯であり、その子供の将来まで考えていたかと問われたら、できていません。「卒業したら終了」という思いも無かった訳ではなく、その子供が無事卒業した時は、本当に安心したことを覚えています。それは子供のことを考えるべき教育ではなく、教師側の思いであったことを反省しなければなりません。
- 医療の専門的な立場による経験から、発達障がいの生徒に対する接し方のノウハウの一部を教えてくださいました。私自身、わかっているようで、正しく理解できていない点や基本的な知識が足りていないことを改めて感じました。教員の研修がもっと必要であると思いました。

◎講演Ⅱ

- これからの学校教育の方向性を見た気持ちです。パラリンピックを中心にノーマライゼーションという意識が生まれ、今後はインクルージョンという一つの世界の中で全ての人々が対等であるという考え方をもち進めていかなければならないという新しい発見ができました。
- 「支援」の意味と共に、私立学校が生徒たちの成長をどこまで真に支援できるのか、そこにその学校の力量が問われていると思いました。ともすれば「指導」で済ませてしまいがちな学校側の在り方を深く反省し、二次的援助の充実を努力していきたいと思いました。

◎パネル・ディスカッション

- 障がい者と健常者との共働、共学は理想的ですが、そこに一番大切なものは、教員の情熱と根気であると思います。保護者の声、各校の動きを聞いて良かったです。
- 先生方の想いがよく伝わり、勉強になりました。本当の意味でのインクルージョンは難しいかも知れません。区別があるからこそ、気遣いや配慮が生まれるからです。皆が共に学び、成長できるような場を作っていければと考えています。
- 今井さんの話では、障がいを持つ子どもの保護者として、学校への強い思いや希望を伺い、私立学校としてできることに限界がある中で、知恵と工夫、子どもの立場に立った努力の必要性を感じました。
- 今井さんの「力」のある話の刺激を受け、パネリストの先生方も本当によく考え、発言してくださいました。子どもたちにとって障がいを持つ子どもたちから教えてもらい、考え、「人」として全ての人たちを尊重できる人間に育つことは実は語学教育以上に大切です。私学の担う役割の一つに、インクルーシブ教育への取り組みも入れたいと強く思いました。

参加者数

総 参 加 者 数	1,023名
-----------	--------

部 会 別 参 加 者 数	私 学 経 営 部 会	285名
	教 育 課 程 部 会	199名
	法 人 管 理 事 務 運 営 部 会	82名
	I C T 活 用 部 会	101名
	グ ロ ー バ ル 教 育 部 会	118名
	環 境 教 育 部 会	71名
	生 徒 支 援 教 育 部 会	104名
	全 体 集 会 の み 他	63名

都道府県別参加者数

都道府県名	参加申込数	都道府県名	参加申込数	都道府県名	参加申込数
北海道	21名	石 川	2名	岡 山	5名
青 森	5名	福 井	—	広 島	20名
岩 手	3名	山 梨	4名	山 口	2名
宮 城	5名	長 野	17名	徳 島	—
秋 田	1名	岐 阜	5名	香 川	1名
山 形	7名	静 岡	17名	愛 媛	1名
福 島	5名	愛 知	25名	高 知	1名
新 潟	10名	三 重	2名	福 岡	13名
茨 城	12名	滋 賀	3名	佐 賀	2名
栃 木	8名	京 都	11名	長 崎	5名
群 馬	2名	大 阪	25名	熊 本	2名
埼 玉	5名	兵 庫	8名	大 分	2名
千 葉	17名	奈 良	13名	宮 崎	12名
神奈川	53名	和歌山	2名	鹿児島	9名
東 京	622名	鳥 取	12名	沖 縄	4名
富 山	5名	島 根	17名		
地 区 内 (東 京 都)					622名
地 区 外 (上 記 以 外 の 地 区)					401名

開催地・研究目標一覧

回数	開催地	主会場	会期	参加人員
1	東京都	宝女学	昭和27年4月27日	185
2	東京都	仙聖学院	昭和28年11月20日	235
3	東京都	早稲田	昭和29年11月20日	283
4	東京都	立命館	昭和30年11月11日	402
5	東京都	明治	昭和31年11月9日	995
6	東京都	山女学	昭和32年11月22日	679
7	東京都	相模	昭和33年10月3日	857
8	東京都	北海	昭和34年11月20日	846
9	東京都	日神	昭和35年8月20日	958
10	東京都	神奈川	昭和36年11月22日	954
11	東京都	徳子高等学	昭和37年11月22日	841
12	東京都	進学	昭和38年11月12日	993
13	東京都	村学	昭和39年11月20日	612
14	東京都	明星	昭和40年11月21日	1100
15	東京都	北女	昭和41年11月3日	750
16	東京都	文相	昭和42年11月5日	1172
17	東京都	作愛	昭和43年11月22日	1074
18	東京都	武庫川	昭和44年11月15日	2294
19	東京都	昭静	昭和45年11月11日	382
20	東京都	和岡	昭和46年11月11日	2513
21	東京都	女雙市	昭和47年11月23日	764
22	東京都	札幌	昭和49年11月7日	926
23	東京都	代田	昭和50年10月2日	978
24	東京都	千代田	昭和51年10月26日	1216
25	東京都	福岡	昭和52年11月16日	1054
26	東京都	玉市	昭和53年11月7日	1714
27	東京都	仙台	昭和54年11月20日	1043
28	東京都	白百合学	昭和55年10月22日	1533
29	東京都	KBS	昭和56年11月12日	1923
30	東京都	学習院	昭和57年11月17日	1370
31	東京都	金井	昭和58年10月26日	992
32	東京都	札幌	昭和59年9月26日	1040
33	東京都	山口	昭和60年10月31日	1210
34	東京都	福岡	昭和61年11月12日	1696
35	東京都	千葉	昭和62年11月11日	1867
36	東京都	新潟	昭和63年10月19日	1651
37	東京都	大阪	平成元年10月25日	2530
38	東京都	大学	平成2年10月24日	1773
39	東京都	愛知	平成3年10月23日	1473
40	東京都	札幌	平成4年9月30日	1123
41	東京都	岡山	平成5年10月27日	1306
42	東京都	熊本	平成6年10月26日	1170
43	東京都	神奈川	平成7年10月25日	2134
44	東京都	山形	平成8年10月16日	829
45	東京都	京都	平成9年11月12日	1222
46	東京都	東京	平成10年11月4日	1422
47	東京都	静岡	平成11年11月10日	1042
48	東京都	札幌	平成12年10月4日	862
49	東京都	徳島	平成13年11月15日	827
50	東京都	宮崎	平成14年11月6日	928
51	東京都	水戸市・土浦市	平成15年10月29日	1590
52	東京都	福島	平成16年10月28日	774
53	東京都	神戸市	平成17年11月10日	1383
54	東京都	東京	平成18年11月9日	1354
55	東京都	石川	平成19年10月25日	791
56	東京都	札幌	平成20年10月9日	722
57	東京都	松江市・米子市	平成21年10月22日	505
58	東京都	佐世保	平成22年10月14日	621
59	東京都	高崎	平成23年10月27日	437
60	東京都	盛岡	平成24年10月11日	501
61	東京都	大阪	平成25年10月24日	621
62	東京都	東	平成26年10月16日	1023

回数	研 究 目 標
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	私学教育本質の究明・明日の教育体制の整備・全人教育の再検討
9	私学教育の将来と教育課程改訂
10	中学校及び高等学校の教育課程及び改訂に伴う問題点の研究・現在の世情に即応する青少年の指導のあり方・私学教育の充実振興を目指す諸方策の討議
11	日本の教育を前進せしめる私学の使命を果たそう―新指導要領の適切な展開と私学プランについて―
12	私学の教育を向上させ、日本の教育を前進させよう
13	中等教育革新のために
14	私学における教育はいかにしたらその実効を挙げることが出来るか
15	私学教育の自由とその限界
16	私学教育の特性を発揮し、その内容の質的転換を図る
17	魅力ある私学中高教育の推進のために
18	教育の現代化に適応する私学のあり方
19	新教育課程の私学教育における展開
20	1970年代の私学教育の展開を如何にすべきか
21	1970年代の私学教育の展開―特色ある私学教育とその実践―
22	激動期における私学教育の原点を求めて
23	昭和50年代の私学教育の展開―私学の自主性を高め教育の充実発展をはかる―
24	創造的私学教育の展開とその充実―ひとりひとりのよい資質をのばすために―
25	教育の転換期に立って私学教育を考える―新教育課程をめぐる今日的課題―
26	新教育課程への移行と実践―私学教育の独自性と充実をはかる―
27	新教育課程実践の道―建学の精神と教師の役割―
28	私学の使命と特色教育―新教育課程の展開―
29	今日の中等教育における私学の役割
30	より豊かな私学教育の創造を
31	次代を担う私学教育の独自性と公共性
32	次代を担う私学教育の充実と発展
33	明日をひらく私学教育―私学の原点に立って―
34	豊かな私学教育の展開
35	国際化と近代化を志向する私学教育の発展
36	時代に対応する魅力ある私学教育を求めて
37	21世紀に向けての豊かな私学教育の創造を求めて
38	社会の期待に応える私学教育の推進
39	豊かな人間性の育成を目指す私学教育の推進
40	新しい時代に対応する創造的な私学教育をめざして
41	たしかな私学教育をめざして
42	活力ある私学のあり方を探る
43	21世紀に向かって躍進する私学教育
44	教育改造への試み
45	新しい時代を拓く私学教育の創造と発展
46	民間活力としての私学教育を
47	21世紀の私学教育の充実を目指して
48	生徒と教師のロマンを実現する私学教育
49	新時代の私学教育―中国・四国からの発信―
50	感性豊かな人間を育てる私学教育
51	明日の私学教育を求めて―伝統と創造―
52	特色ある私学教育を求めて―建学の精神と国際化―
53	魅力ある私学教育の創造を目指して
54	未来を担う人材育成を私学教育
55	特色ある私学教育の創造
56	時代を見すえ、未来を拓く私学教育
57	これからの人材育成をめざして―悠久の地から私学教育の未来を考える
58	時代を創造する人材の育成をめざして ―私学教育の挑戦―
59	日本の未来を拓く私学教育
60	未来を拓く私学教育～人間力を養い人格の完成を目指す～
61	私学教育の魅力を探る～夢探し夢実現を目指して～
62	21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～

編 集 後 記

第62回全国私学教育研究集会東京大会は、「21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～」を研究目標に掲げ、10月16・17日の二日間、グランドプリンスホテル新高輪国際館パミールを主会場として開催され、無事そして成功裏に終了いたしました。これも偏に関係各位のお力添えの賜物と感謝しております。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

この大会には全国各地から1,023名という多くの先生方にご参加をいただきましたが、初日の全体集会では、東京大学 大学総合教育研究センター教授の三宅なほみ先生による記念講演「新しい学び～21世紀型スキルを一人ひとりに～」があり、未来社会で活躍する生徒たちが身に付けるべき能力・スキルとは何かをお話しいただきました。最先端のお話しに引き込まれると同時に、教員の恒常的な研修の必要性を改めて感じた講演でした。二日目は私学経営部会を始めとする7つの部会が開催され、充実した研修が行われました。例えば、私学経営部会では、文部科学事務次官の山中伸一氏による講演「教育制度改革の動向とグローバル教育」がありましたが、現職の次官が、私学教育の第一線で活躍する先生方に直にお話しされる機会を持てたことは、特筆されるべきでしょう。また、広尾学園をお借りして ICT 活用部会が開催されましたが、最先端の ICT 環境についての情報を得ることができたことは何よりでした。

これらの様子を研究集録に取りまとめましたので、ご活用いただければ幸いです。取りまとめに際しては、各部会担当の先生方にご協力・ご尽力をいただきました。心より御礼申し上げます。本大会開催にあたり、さまざまな業務を担当してくださいました、グランドプリンスホテル新高輪、近畿日本ツーリスト、東京企画装飾はもとより、ご協力をいただきました多くの方々に御礼申し上げます。

次年度の長野大会で皆様にお目にかかれることを楽しみにしております。

第62回全国私学教育研究集会東京大会
運営総括委員長 清水 哲 雄
(東京私学教育研究所所長)

**平成26年度
第62回 全国私学教育研究集会 東京大会
研究集録**

印 刷 平成27年3月

発 行 平成27年3月

発行人 一般財団法人日本私学教育研究所

所 長 中 川 武 夫

発行所 一般財団法人日本私学教育研究所

〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目3番地8 市ヶ谷UNビル6階

電話 (03)3222-1621

編 集 一般財団法人日本私学教育研究所

〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目3番地8 市ヶ谷UNビル6階

電話 (03)3222-1621

この報告の経費の一部は、日本私立学校振興・共済事業団
からの助成金でまかなわれています。

本研究集録についての著作権はそれぞれの講師・発表者・報告者等および一般財団法人日本私学教育研究所に帰属します。私的かつ非商業目的で使用する場合、その他著作権法により認められる場合を除き、複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。

